



デベロッパーガイド

Amazon Kendra



Amazon Kendra: デベロッパーガイド

Copyright © 2025 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは Amazon 以外の製品およびサービスに使用することはできません。また、お客様に誤解を与える可能性がある形式で、または Amazon の信用を損なう形式で使用することもできません。Amazon が所有していないその他のすべての商標は Amazon との提携、関連、支援関係の有無にかかわらず、それら該当する所有者の資産です。

Table of Contents

.....	xiii
とは Amazon Kendra	1
クエリ Amazon Kendra	1
の利点 Amazon Kendra	2
Amazon Kendra エディション	2
の料金 Amazon Kendra	3
を初めて Amazon Kendra お使いになる方向けの情報	3
の Amazon Kendra 仕組み	5
Amazon Kendra のインデックス	6
Amazon Kendra のインデックスタイプ	6
Amazon Kendra でのインデックスへのドキュメントの追加	10
Amazon Kendra 予約済みまたは一般的なドキュメントフィールドの使用	11
Amazon Kendra のインデックスからレスポンスを取得する	13
ドキュメント	13
ドキュメントタイプまたは書式	13
ドキュメントの属性またはフィールド	16
データソース	19
クエリ	21
[タグ]	22
リソースのタグ付け	22
タグの制限	23
Amazon Kendra のセットアップ	24
にサインアップする AWS	24
リージョンとエンドポイント	25
のセットアップ AWS CLI	25
AWS SDKsのセットアップ	26
IAM のアクセスロール Amazon Kendra	27
IAM インデックスの ロール	27
IAM BatchPutDocument API の ロール	31
IAM データソースの ロール	34
Virtual Private Cloud (VPC) IAM ロール	130
IAM よくある質問 (FAQs)の ロール	132
IAM クエリ提案の ロール	134
IAM ユーザーとグループのプリンシパルマッピング用の ロール	136

IAM の ロール AWS IAM Identity Center	138
IAMAmazon Kendra エクスペリエンスの ロール	140
IAM カスタムドキュメントエンリッチメントの ロール	143
デプロイ Amazon Kendra	147
概要	148
前提条件	148
例をセットアップする	149
メイン検索ページ	150
検索コンポーネント	150
結果コンポーネント	150
ファセットコンポーネント	151
ページ割りコンポーネント	151
コードのない検索アプリケーションのデプロイ	151
検索 Experience Builder の仕組み	151
検索エクスペリエンスを設計してチューニングする	152
検索ページへのアクセスを提供する	153
検索エクスペリエンスの設定	154
容量の調整	159
容量の表示	160
キャパシティの追加および削除	161
Amazon Kendra インテリジェントランキングの容量	161
クエリ提案キャパシティ	162
Amazon Kendra エクスペリエンスキャパシティ	162
検索エクスペリエンスのキャパシティ	162
適応型クエリバースト	162
入門	164
前提条件	164
にサインアップする AWS アカウント	164
管理アクセスを持つユーザーを作成する	165
Amazon Kendra リソース : AWS CLI、SDK、コンソール	167
Amazon Kendra コンソールの開始方法	173
開始方法 (AWS CLI)	174
開始方法 (SDK for Python (Boto3))	176
開始方法 (SDK for Java)	179
S3 の開始方法 (コンソール)	183
MySQL の開始方法 (コンソール)	184

IAM Identity Center アイデンティティソースでの開始方法 (コンソール)	187
IAM Identity Center アイデンティティソースの変更	190
インデックスの作成	192
バッチアップロードを使用したドキュメントのインデックスへの直接追加	197
BatchPutDocument API を使用したドキュメントの追加	198
S3 バケットからのドキュメントの追加	200
よくある質問 (FAQ) のインデックスへの追加	203
よくある質問ファイルのインデックスフィールドの作成	204
基本 CSV ファイル	205
カスタム CSV ファイル	205
JSON ファイル	207
よくある質問ファイルの使用	210
英語以外の言語のよくある質問ファイル	211
カスタムドキュメントフィールドの作成	212
カスタムドキュメントフィールドの更新	212
トークンによるドキュメントへのアクセスの制御	216
OpenID の使用	217
共有シークレットで JSON ウェブトークン (JWT) を使用する	220
パブリックキーでの JSON ウェブトークン (JWT) の使用	223
JSON の使用	227
データソースコネクタの作成	230
更新スケジュールの設定	231
言語設定	231
データソースコネクタ	231
データソーステンプレートスキーマ	233
Adobe Experience Manager	607
Alfresco	617
Aurora (MySQL)	626
Aurora (PostgreSQL)	635
Amazon FSx (Windows)	643
Amazon FSx (NetApp ONTAP)	652
Amazon RDS/Aurora	660
Amazon RDS (Microsoft SQL Server)	669
Amazon RDS (MySQL)	678
Amazon RDS (Oracle)	687
Amazon RDS (PostgreSQL)	695

Amazon S3	704
Amazon Kendra ウェブクロージャー	721
[Box] (ボックス)	743
Confluence	751
カスタムデータソースコネクタ	773
Dropbox	781
Drupal	791
GitHub	801
Gmail	812
Google Drive	822
IBM DB2	841
Jira	849
Microsoft Exchange	857
Microsoft OneDrive	866
Microsoft SharePoint	882
Microsoft SQL Server	916
Microsoft Teams	925
Microsoft Yammer	936
MySQL	944
Oracle Database	953
PostgreSQL	962
Quip	970
Salesforce	977
ServiceNow	996
Slack	1016
Zendesk	1026
データソースフィールドのマッピング	1035
Amazon Kendra 予約済みまたは一般的なドキュメントフィールドの使用	17
英語以外の言語でドキュメントを追加する	1040
を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC	1043
の設定 Amazon VPC	1044
への接続 Amazon VPC	1046
データベースへの接続	1048
VPC 接続の問題のトラブルシューティング	1050
インデックス、データソース、またはバッチアップロードされたドキュメントの削除	1053
インデックスを削除する	1053

データソースの削除	1054
バッチアップロードしたドキュメントの削除	1056
取り込み中のドキュメントの強化	1058
Custom Document Enrichment の仕組み	1058
メタデータを変更する基本操作	1059
Lambda 関数:メタデータまたはコンテンツの抽出と変更	1068
Lambda 関数のデータ制約	1076
構造化ドキュメントの形式	1078
データ制約に準拠する Lambda 関数の例	1078
インデックスの検索	1082
インデックスのクエリ	1083
前提条件	1084
インデックスの検索 (コンソール)	1084
インデックスの検索 (SDK)	1085
インデックスの検索 (Postman)	1087
高度なクエリ構文による検索	1089
各言語での検索	1094
パッセージを取得する	1097
インデックスの閲覧	1101
検索結果を目立たせる	1104
HTML の表形式検索	1107
クエリの提案	1112
クエリ履歴を使用したクエリの提案	1113
ドキュメントフィールドを使用したクエリの提案	1119
特定のクエリやドキュメントフィールドの内容を提案からブロックする	1124
クエリスペルチェッカー	1129
クエリスペルチェッカーをデフォルトの制限付きで使用する	1130
フィルタリングとファセット検索	1131
ファセット	1131
ドキュメント属性を使用した検索結果のフィルタリング	1136
検索結果内の各ドキュメント属性のフィルタリング	1137
ユーザーコンテキストでのフィルタリング	1138
ユーザートークンによるフィルタリング	1139
ユーザー ID とグループによるフィルタリング	1140
ユーザー属性でフィルタリングする	1141
インデックスに直接追加されたドキュメントのユーザーコンテキストフィルタリング	1142

よくある質問に対するユーザーコンテキストのフィルタリング	1143
データソースのユーザーコンテキストフィルタリング	1143
クエリレスポンスとレスポンスタイプ	1161
クエリレスポンス	1162
レスポンスのタイプ	1165
レスポンスのチューニングとソート	1170
レスポンスのチューニング	1170
レスポンスのソート	1171
クエリ結果の折りたたみ/展開	1174
結果の折りたたみ	1176
ソート順を使用してプライマリドキュメントを選択する	1176
ドキュメントのキーストラテジーの欠損	1177
結果の拡張	1177
他の Amazon Kendra 機能とのやり取り	1177
検索の関連性のチューニング	1179
インデックスレベルでの関連性のチューニング	1180
クエリレベルでの関連性のチューニング	1181
検索分析で同作を得る	1183
検索のメトリクス	1183
クリックスルー率	1184
ゼロクリック率	1184
ゼロ検索結果率	1185
即時回答率	1185
上位のクエリ	1185
ゼロクリックの上位クエリ	1185
ゼロ検索結果の上位クエリ	1186
クリックされた上位ドキュメント	1186
合計クエリ数	1187
合計ドキュメント	1187
メトリクスデータの取得例	1187
メトリクスから実用的なインサイトまで	1189
検索分析の視覚化とレポート	1189
合計クエリグラフ	1190
クリックスルー率グラフ	1190
ゼロクリック率グラフ	1190
ゼロ検索結果率グラフ	1190

即時回答率グラフ	1191
増分学習のためのフィードバックの送信	1192
Amazon Kendra JavaScript ライブラリを使用したフィードバックの送信	1194
ステップ 1: Amazon Kendra 検索アプリケーションにスクリプトタグを挿入する	1194
ステップ 2: フィードバックトークンを検索結果に追加する	1197
ステップ 3: フィードバックスクリプトをテストする	1197
Amazon Kendra API を使用してフィードバックを送信する	1198
インデックスへのカスタムシノニムの追加	1201
シソーラスファイルの作成	1203
シソーラスをインデックスに追加する	1205
シソーラスを更新する	1210
シソーラスを削除する	1214
検索結果の強調表示	1216
チュートリアル:インテリジェント検索ソリューションの構築	1217
前提条件	1218
ステップ 1: ドキュメントを追加する	1219
サンプルデータセットをダウンロードする	1220
Amazon S3 バケットの作成	1221
S3 バケットにデータフォルダとメタデータフォルダを作成する	1224
入力データをアップロードする	1227
ステップ 2: エンティティを検出する	1229
Amazon Comprehend でエンティティ分析ジョブを実行する	1229
ステップ 3: メタデータの書式設定	1239
Amazon Comprehend の出力をダウンロードして抽出する	1239
S3 バケットに出力をアップロードする	1243
Amazon Kendra メタデータ形式への出力変換	1245
Amazon S3 バケットをクリーンアップする	1249
ステップ 4: インデックスを作成し、メタデータを取り込む	1251
Amazon Kendra インデックスの作成	1252
Amazon S3 アクセスのための IAM ロールの更新	1260
Amazon Kendra カスタム検索インデックスフィールドを作成する	1264
Amazon S3 バケットをインデックスのデータソースとして追加する	1269
Amazon Kendra インデックスの同期	1274
ステップ 5: インデックスをクエリする	1277
Amazon Kendra インデックスをクエリする	1277
検索結果のフィルタリング	1283

ステップ 6: クリーンアップする	1287
ファイルをクリーンアップする	1287
.....	1288
モニタリングとログ記録	1290
インデックスのモニタリング	1290
CloudTrail を使用したAmazon Kendra API コールのモニタリング	1294
CloudTrail 内の Amazon Kendra 情報	1294
例: Amazon Kendra ログファイルのエントリ	1295
CloudTrail を使用した Amazon Kendra インテリジェントランキング API コールのモニタリ ング	1296
CloudTrail 内の Amazon Kendra インテリジェントランキングの情報	1297
例: Amazon Kendra インテリジェントランキングのログファイルのエントリ	1298
CloudWatch による Amazon Kendra のモニタリング	1299
Amazon Kendra メトリクスの表示	1299
アラームを作成する	1300
インデックス同期ジョブの CloudWatch メトリクス	1301
Amazon Kendra データソースのメトリクス	1302
インデックス作成されたドキュメントのメトリクス	1305
CloudWatch Logs による Amazon Kendra のモニタリング	1306
データソースログストリーム	1307
ドキュメントログストリーム	1308
同期ジョブの Amazon Kendra メトリクスを表示する	1309
セキュリティ	1312
データ保護	1313
保管中の暗号化	1314
転送中の暗号化	1314
キー管理	1314
VPC エンドポイントAWS PrivateLink	1315
Amazon Kendra および Amazon Kendra Intelligent Ranking VPC エンドポイントに関する考 慮事項	1315
Amazon Kendra および Amazon Kendra Intelligent Ranking 用のインターフェイス VPC エ ンドポイントの作成	1315
Amazon Kendra および Amazon Kendra Intelligent Ranking 用の VPC エンドポイントポリ シーの作成	1316
Identity and Access Management	1317
対象者	1318

アイデンティティを使用した認証	1318
ポリシーを使用したアクセスの管理	1322
Amazon Kendra で IAM が機能する仕組み	1324
アイデンティティベースのポリシーの例	1330
AWS マネージドポリシー	1336
トラブルシューティング	1341
セキュリティに関するベストプラクティス	1343
最小特権の原則を適用する	1343
ロールベースのアクセスコントロール (RBAC) の許可	1344
Amazon Kendra でのログ記録とモニタリング	1344
コンプライアンス検証	1344
耐障害性	1345
インフラストラクチャセキュリティ	1346
設定と脆弱性の分析	1346
クォータ	1348
サポートされるリージョン	1348
クォータ	1348
インデックスクォータ	1348
データソースコネクタのクォータ	1349
よくある質問のクォータ	1351
シソーラスクォータ	1351
Amazon Kendra エクスペリエンスクォータ	1352
クエリと検索結果のクォータ	1352
クエリ提案クォータ	1354
ドキュメントクォータ	1355
注目の検索結果クォータ	1357
検索結果クォータのリスコア/リランク	1357
トラブルシューティング	1359
データソースのトラブルシューティング	1359
マイドキュメントにインデックスが作成されませんでした	1359
同期ジョブが失敗しました	1360
同期ジョブが不完全です	1360
同期ジョブは成功しましたが、インデックス付きドキュメントがありません	1361
データソースの同期中にファイル形式の問題が発生しました。	1362
ドキュメントの同期履歴レポートを生成したい	1362
データソースの同期にはどのくらいの時間がかかりますか?	1364

データソースの同期にかかる料金はいくらですか？	1364
Amazon EC2 認可エラーが出ます。	1364
検索インデックスリンクを使用して Amazon S3 オブジェクトを開くことができない	1364
「SSL 証明書ファイル使用時にアクセスが拒否されました」というエラーメッセージが表示されます	1365
SharePoint データソースを使用すると認可エラーが発生します	1365
インデックスが Confluence データソースからのドキュメントにクロールされません	1365
ドキュメントの検索結果のトラブルシューティング	1365
検索結果が検索クエリと無関係です	1365
なぜ 100 件しか表示されないのですか。	1366
見ようとしているドキュメントがないのはなぜですか？	1366
ACL ポリシーが設定されているドキュメントが表示されるのはなぜですか。	1366
一般的な問題のトラブルシューティング	1367
Amazon Kendra インテリジェントランキング	1368
セルフマネージド OpenSearch のインテリジェントランキング	1368
インテリジェント検索プラグインの仕組み	1368
インテリジェント検索プラグインの設定	1369
インテリジェント検索プラグインとのやり取り	1375
OpenSearch の結果と Amazon Kendra 結果の比較	1381
検索サービスの結果をセマンティックにランク付けする	1382
API リファレンス	1392
ドキュメント履歴	1393
.....	mcdxi

とは Amazon Kendra

Amazon Kendra は、自然言語処理と高度な深層学習モデルを使用するマネージド情報検索およびインテリジェント検索サービスです。従来のキーワードベースの検索とは異なり、はセマンティックおよびコンテキストの類似性、およびランキング機能 Amazon Kendra を使用して、テキストチャンクまたはドキュメントが検索クエリに関連しているかどうかを判断します。

を使用すると Amazon Kendra、複数のデータリポジトリをインデックスに接続し、ドキュメントの取り込みとクロールを行うことで、統一された検索と取得エクスペリエンスを作成できます。ドキュメントのメタデータを利用して、ユーザーに機能豊富でカスタマイズされた検索環境を提供できるため、ユーザーはクエリに対する正しい回答を効率的に見つけることができます。

Amazon Kendra は、データの取得拡張生成 (RAG) とエンタープライズ検索に非常に正確な GenAI インデックスを提供します。[Amazon Q Business](#) および [Amazon Bedrock ナレッジベース](#) で Kendra GenAI インデックスを使用して、独自のデータを使用して生成 AI アプリケーションを構築できます。

Note

Amazon Kendraのセマンティック検索機能を使用して、別の検索サービスの結果を再ランク付けすることもできます。詳細については、「[Amazon Kendra Intelligent Ranking](#)」を参照してください。

とは Amazon Kendra

クエリ Amazon Kendra

Amazon Kendra 次のタイプのクエリを質問できます。

Factoid 型の質問 - 誰が、何を、いつ、どこでの単純な質問。例: 「シアトルに最も近いサービスセンターはどこですか?」 Factoid 型の質問には、事実ベースの回答を 1 単語または 1 語句で返すことができます。回答は、FAQ またはインデックスが作成されたドキュメントから取得されます。

説明的な質問 - 1 文、1 節、またはドキュメント全体が答えとなる質問。例: 「Echo Plus をネットワークに接続するにはどうすればよいですか?」 または 「低所得世帯向けの税制上の優遇措置を受けるにはどうすればよいですか?」

キーワードおよび自然言語に関する質問 - 意味がはっきりしない、複雑な会話内容を含む質問。例えば、キーノートのアドレス。Amazon Kendra では、複数の文脈上の意味を持つ「address」のような単語が見つかったら、検索クエリの意味を正しく推測し、関連情報を返します。

の利点 Amazon Kendra

Amazon Kendra はスケーラビリティが高く、パフォーマンスの需要を満たすことができ、[Amazon Q Business](#)、などの他の AWS サービスと緊密に統合されており[Amazon Bedrock](#)[Amazon S3](#)[Amazon Lex](#)、エンタープライズレベルのセキュリティを提供します。Amazon Kendra を使用する利点のいくつかを以下に示します。

シンプル — 検索するドキュメントを管理するためのコンソールと API Amazon Kendra を提供します。シンプルな検索 API を使用して、ウェブサイトやモバイルアプリケーションなどのクライアントアプリケーション Amazon Kendra に統合できます。

接続 — は、Microsoft SharePoint などのサードパーティーのデータソースに接続Amazon Kendra できます。データソースを使用して、ドキュメントのインデックス作成と検索を簡単に行うことができます。

正確性 — キーワード検索を使用する従来の検索サービスとは異なり、Amazon Kendra は質問のコンテキストを理解し、クエリに最も関連性の高い単語、スニペット、またはドキュメントを返します。Amazon Kendra は機械学習を使用して、時間の経過とともに検索結果を改善します。

セキュリティ — 安全性の高いエンタープライズ検索エクスペリエンスAmazon Kendra を提供します。検索結果には、組織のセキュリティモデルが反映され、ドキュメントへのユーザーまたはグループのアクセスに基づいてフィルタリングできます。お客様は、ユーザーのアクセスを認証し、認可する責任を負うものとします。

Amazon Kendra エディション

Amazon Kendra には、GenAI Enterprise Edition、Basic Enterprise Edition、Basic Developer Edition の 3 つのインデックスタイプがあります。

GenAI Enterprise Edition は、最新の情報取得テクノロジーとセマンティックモデルを活用することで、最高の精度を実現します。高可用性を提供し、本稼働ワークロード向けに構築されています。最高のエクスペリエンスを得るには、GenAI インデックスを使用することをお勧めします。

Basic Enterprise Edition はセマンティック検索機能を提供し、本番ワークロードに適した高可用性サービスを提供します。Basic Developer Edition には、proof-of-conceptソリューションの構築用に設計されたセマンティック検索機能も用意されていますが、本番ワークロードにはお勧めしません。

これらのインデックスの概要については、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

 Note

でサポートされているリージョン、エンドポイント、およびサービスクォータのリストについては Amazon Kendra、[Amazon Kendra 「エンドポイントとクォータ」](#)を参照してください。

の料金 Amazon Kendra

最初の 30 日間に最大 750 時間の使用を提供する、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスまたは Amazon Kendra Developer Edition インデックスを無料で使い始めることができます。

 Note

コネクタの使用は、無料利用の対象にはなりません。

トライアルの有効期限が切れると、プロビジョニングされた Amazon Kendra インデックスが空でクエリが実行されない場合でも、すべてのプロビジョニングされたインデックスに対して課金されます。試用期間が終了すると、Amazon Kendra データソースを使用したドキュメントのスキャンおよび同期には追加料金がかかります。

課金および料金の詳細なリストについては、[「Amazon Kendra の料金」](#)を参照してください。

を初めて Amazon Kendra お使いになる方向けの情報

を初めて使用する場合は Amazon Kendra、次のセクションを順に読むことをお勧めします。

1	2	3	4	5	6
の Amazon Kendra 仕組み	入門	インデックスの作成	バッチアップロードを使用したドキュメントのインデックスへの直接追加	データソースコネクタの作成	インデックスの検索
Amazon Kendra コンポーネントを紹介し、それらを使用して検索ソリューションを作成する方法について説明します。	アカウントをセットアップし、Amazon Kendra 検索 API をテストする方法について説明します。	Amazon Kendra を使用して検索インデックスを作成し、データソースを追加してドキュメントを同期する方法について説明します。	Amazon Kendra インデックスにドキュメントを直接追加する方法について説明します。	データリポジトリから Amazon Kendra インデックスにドキュメントを追加する方法について説明します。	Amazon Kendra 検索 API を使用してインデックスを検索する方法について説明します。

の Amazon Kendra 仕組み

Amazon Kendra は、アプリケーションの検索および取得拡張生成 (RAG) 機能を提供します。ドキュメントに直接、またはサードパーティーのドキュメントリポジトリからインデックスを作成し、ユーザーに関連情報をインテリジェントに提供します。Amazon Kendra を使用して、さまざまなタイプのドキュメントの更新可能なインデックスを作成できます。でサポートされているドキュメントタイプのリストについては Amazon Kendra、[「ドキュメントのタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra は他の サービスと統合されます。Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスを [Amazon Q Business](#) および [Amazon Bedrock](#) に接続して、RAG チャットソリューションを作成できます。または、Amazon Kendra 検索で [Amazon Lex チャットボット](#) を強化して、ユーザーの質問に有用な回答を提供できます。 [Amazon Simple Storage Service バケット](#) を のデータソースとして使用 Amazon Kendra して、ドキュメントに接続してインデックスを作成することもできます。

Amazon Kendra には次のコンポーネントがあります。

- ドキュメントを格納して検索できるようにする [インデックス](#)。
- ドキュメントを保存して Amazon Kendra を接続する [データソース](#)。データソースを Amazon Kendra インデックスと自動的に同期して、インデックスをソースリポジトリで更新し続けることができます。
- ドキュメントをインデックスに直接追加する [ドキュメント追加 API](#)。
- 入力クエリが与えられた関連するパッセージまたはテキストの抜粋を取得する [取得 API](#)。
- 入力 [クエリを指定してインデックスを検索するクエリ API](#)。

コンソールまたは API Amazon Kendra を使用して を使用できます。インデックスを作成、編集、削除できます。インデックスを削除すると、そのデータソースコネクタがすべて削除され、すべてのドキュメント情報が完全に削除されます Amazon Kendra。

トピック

- [Amazon Kendra のインデックス](#)
- [ドキュメント](#)
- [データソース](#)
- [クエリ](#)

- [\[タグ\]](#)

Amazon Kendra のインデックス

インデックスにはドキュメントの内容が格納され、ドキュメントを検索できるように構造化されています。このセクションでは、サポートされているインデックスタイプとインデックス機能の概要を説明します。

トピック

- [Amazon Kendra のインデックスタイプ](#)
- [Amazon Kendra でのインデックスへのドキュメントの追加](#)
- [Amazon Kendra 予約済みまたは一般的なドキュメントフィールドの使用](#)
- [Amazon Kendra のインデックスからレスポンスを取得する](#)

Amazon Kendra のインデックスタイプ

Amazon Kendra には、GenAI Enterprise Edition インデックス、Enterprise Edition インデックス、および Developer Edition インデックスの 3 つのインデックスタイプがあります。以下のセクションでは、各インデックスの機能について説明します。

トピック

- [Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックス](#)
- [Amazon Kendra Enterprise Edition インデックス](#)
- [Amazon Kendra Developer Edition インデックス](#)

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックス

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、Retrieve API オペレーションと Retrieval Augmented Generation (RAG) ユースケースで最高の精度を提供します。ハイブリッド検索 (キーワードとベクトル)、セマンティック埋め込み、再ランク付けモデルなど、最新の情報検索テクノロジーを利用しており、さまざまなデータセットでテストされています。クエリ API オペレーションは、Amazon Kendra Developer Edition および Amazon Kendra Enterprise Edition インデックスと比較して、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスに同様の精度を提供します。

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスを使用すると、インデックス化されたデータを AWS 生成 AI サービス間で移動できます。この機能を使用すると、インデックスを再構築す

ることなく、投資をシームレスに再利用できます。[Amazon Bedrock ナレッジベース](#)でマネージドリトリバーとして使用し、エージェントやプロンプトフローなどの Amazon Bedrock ツールと統合して高度な AI アシスタントを構築できます。また、フルマネージド型デジタルアシスタント [Amazon Q Business](#) にも使用できます。

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、他の 2 つのインデックスタイプと比較して、より小さく、より詳細なキャパシティユニットと低い開始価格を提供します。これにより、キャパシティ使用率をより効率的に行うことができます。

Note

最高のエクスペリエンスと精度を得るには、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスを選択することをお勧めします。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [制限](#)

サポートされている機能

RAG ユースケースに [Retrieve](#) API オペレーションを使用している場合、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスでは以下の機能がサポートされています。

- フルサポート – [信頼スコアバケット](#)、[フィルタリング](#)、[ファセット](#)、[関連性の調整](#)、[カスタムドキュメントエンリッチメント](#)、[カスタムメタデータ](#)、[クエリ容量とドキュメント容量の調整](#)。
- 部分的なサポート – [データソースコネクタ](#)と[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)。部分的にサポートされている機能の詳細については、「[の制限](#)」を参照してください。

検索ユースケースに [Query](#) API オペレーションを使用している場合、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスでは以下の機能がサポートされています。

- フルサポート – [ドキュメントランキング](#)、[抽出型質問回答](#)、[信頼スコアバケット](#)、[フィルタリング](#)、[ファセット](#)、[ソート](#)、[クエリ結果の折りたたみと展開](#)、[インデックスブラウジング](#)、[ブールクエリ](#)、[完全一致](#)、[ワイルドカードクエリ](#)、[クエリ提案](#)、[クエリスペルチェッカー](#)、[関連性チューニング](#)、[増分学習](#)、[カスタムドキュメントエンリッチメント](#)、[カスタムメタデータ](#)、[クエリ容量とドキュメント容量の調整](#)、[検索エクスペリエンス](#)。

- 部分的なサポート – [データソースコネクタ](#)と[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)。部分的にサポートされている機能の詳細については、「[の制限](#)」を参照してください。

制限

以下は、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスの既知の制限の概要です。

- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、米国東部 (バージニア北部) および米国西部 (オレゴン) でのみ使用できます。
- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、英語コンテンツのみをサポートします。
- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、v2.0 Amazon Kendra データソースコネクタのみをサポートします。
- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスでは、[ユーザー属性](#)のみを使用して、ユーザーコンテキストで検索結果をフィルタリングできます。
- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、[トークンベースのユーザーアクセスコントロール](#)や、ドキュメントに対する[ユーザー ID およびグループベースのユーザーアクセスコントロール](#)をサポートしていません。
- [CreateAccessControlConfiguration](#) API オペレーションは、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスでは無効になっています。
- で Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスを使用している場合は Amazon Q Business、ドキュメントへのエンドユーザーアクセスの制御について次の点に注意してください。

Amazon Q Business は、ユーザー E メール ID を使用して、インデックス内のドキュメントへのエンドユーザーアクセスを決定します。Amazon Kendra インデックスを に接続すると Amazon Q Business、 はユーザーの識別 E メール ID を Amazon Kendra に Amazon Q Business リレーして、エンドユーザーのドキュメントフィルタリングを有効にします。Amazon Kendra インデックスに接続されたデータソースが E メール ID ベースのドキュメントフィルタリングを使用しない場合、または E メール ID が存在しない場合、 はパブリックドキュメントからのみレスポンス Amazon Q Business を生成します。

Amazon Kendra Enterprise Edition インデックス

Amazon Kendra Enterprise Edition インデックスはセマンティック検索機能を提供し、本稼働ワークロードに適した高可用性サービスを提供します。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [制限](#)

サポートされている機能

RAG ユースケースで [Retrieve](#) API オペレーションを使用している場合、Amazon Kendra Enterprise Edition インデックスでは次の機能がサポートされています。[アドバンスドクエリ構文](#)を使用したクエリ、クエリのス**[ペル修正の提案](#)**、**[ファセット](#)**、検索クエリを自動入力するための**[クエリ提案](#)**、**[増分学習](#)**。

検索ユースケースに [Query](#) API オペレーションを使用している場合、すべての機能は Amazon Kendra Enterprise Edition インデックスでサポートされています。

制限

Amazon Kendra Enterprise Edition インデックスの既知の制限事項を以下に示します。

- で Amazon Kendra Enterprise Edition インデックスを使用している場合は Amazon Q Business、ドキュメントへのエンドユーザーアクセスの制御について次の点に注意してください。

Amazon Q Business は、ユーザー E メール ID を使用して、インデックス内のドキュメントへのエンドユーザーアクセスを決定します。Amazon Kendra インデックスを に接続すると Amazon Q Business、 はユーザーの識別 E メール ID を Amazon Kendra に Amazon Q Business リレーして、エンドユーザーのドキュメントフィルタリングを有効にします。Amazon Kendra インデックスに接続されたデータソースが E メール ID ベースのドキュメントフィルタリングを使用しない場合、または E メール ID が存在しない場合、 はパブリックドキュメントからのみレスポンス Amazon Q Business を生成します。

Amazon Kendra Developer Edition インデックス

Amazon Kendra Developer Edition インデックスは、ユースケースをテストするためのセマンティック検索機能も提供します。ただし、本番環境のユースケースにはお勧めしません。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [制限](#)

サポートされている機能

RAG ユースケースに [Retrieve](#) API オペレーションを使用している場合、Amazon Kendra Developer Edition インデックスでは次の機能がサポートされています。[アドバンスドクエリ構文](#)を使用したクエリ、クエリのス**[ペル修正の提案](#)**、**[ファセット](#)**、検索クエリを自動入力するための**[クエリ提案](#)**、**[増分学習](#)**。

検索ユースケースに [Query](#) API オペレーションを使用している場合、すべての機能は Amazon Kendra Developer Edition インデックスでサポートされます。

制限

Amazon Kendra Developer Edition インデックスの既知の制限事項を以下に示します。

- で Amazon Kendra Developer Edition インデックスを使用している場合は Amazon Q Business、ドキュメントへのエンドユーザーアクセスの制御について次の点に注意してください。

Amazon Q Business は、ユーザー E メール ID を使用して、インデックス内のドキュメントへのエンドユーザーアクセスを決定します。Amazon Kendra インデックスを に接続すると Amazon Q Business、 はユーザーの識別 E メール ID を Amazon Kendra に Amazon Q Business リレーして、エンドユーザーのドキュメントフィルタリングを有効にします。Amazon Kendra インデックスに接続されたデータソースが E メール ID ベースのドキュメントフィルタリングを使用しない場合、または E メール ID が存在しない場合、 はパブリックドキュメントからのみレスポンス Amazon Q Business を生成します。

Amazon Kendra でのインデックスへのドキュメントの追加

インデックスにドキュメントを追加する方法は、ドキュメントの保存方法によって異なります。

- Amazon S3 バケットや Microsoft SharePoint サイトなどの何らかのリポジトリにドキュメントを保存する場合は、[データソースコネクタ](#)を使用してリポジトリからドキュメントのインデックスを作成します。
- ドキュメントをリポジトリに保存しない場合は、[BatchPutDocument](#) API オペレーションを使用してドキュメントのインデックスを直接作成します。
- (Amazon Kendra Amazon S3) バケットに保存する必要があるよくある質問の質問と回答については、バケットからアップロードします。

インデックスは、Amazon Kendra コンソール、AWS CLI、または AWS SDK を使用して作成できます。インデックス作成可能なドキュメントのタイプについては、「[Document types](#)」を参照してください。

Amazon Kendra 予約済みまたは一般的なドキュメントフィールドの使用

[UpdateIndex](#) API オペレーションを使用すると、リザーブドフィールドまたは共通フィールドを作成できます。これを行うには、`DocumentMetadataConfigurationUpdates`、Amazon Kendra 予約済みインデックスフィールド名を指定して、同等のドキュメント属性/フィールド名にマッピングします。カスタムフィールドも作成できます。

データソースコネクタを使用する場合、データソースドキュメントフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングするフィールドマッピングがほとんど含まれます。コンソールを使用する場合は、データソースを選択し、編集アクションを選択してから、フィールドマッピングセクションの横に進んでデータソースを設定して、フィールドを更新します。

Search オブジェクトを設定して、フィールドを表示可能、ファセット可能、検索可能、ソート可能のいずれかに設定できます。特定のフィールド値にマッピングされたブースト、新しさ、重要度の値に適用するフィールドのランク順序、ブースト期間、または期間を設定するように Relevance オブジェクトを設定できます。

コンソールを使用する場合は、ナビゲーションメニューでファセットオプションを選択して、フィールドの検索設定を構成できます。関連性調整を設定するには、ナビゲーションメニューでインデックスを検索するオプションを選択し、クエリを入力し、サイドパネルのオプションを使用して検索の関連性を調整します。フィールドの作成後にフィールドタイプを変更することはできません。

Amazon Kendra には、使用できる以下の予約済みまたは共通のドキュメントフィールドがあります。

- `_authors` – ドキュメントの内容を担当する 1 人以上の作成者のリスト。
- `_category` – ドキュメントを特定のグループに配置するカテゴリ。
- `_created_at` – ドキュメントが作成された ISO 8601 形式の日付と時刻。たとえば、中央ヨーロッパ時間の 2012-03-25T12:30 (プラス 10 秒) の ISO 8601 日時形式は 2012 年 3 月 25 日です。
- `_data_source_id` – ドキュメントを含むデータソースの識別子。
- `_document_body` – ドキュメントのコンテンツ。
- `_document_id` – ドキュメントの一意の識別子。
- `_document_title` – ドキュメントのタイトル。

- `_excerpt_page_number` – ドキュメントの抜粋が表示される PDF ファイルのページ番号。2020 年 9 月 8 日より前にインデックスが作成された場合、この属性を使用する前に、ドキュメントのインデックスを再作成する必要があります。
- `_faq_id` – これが質疑応答タイプドキュメント (FAQ) の場合、よくある質問の一意の識別子。
- `_file_type` – pdf や doc など、ドキュメントのファイルタイプ。
- `_last_updated_at` – ドキュメントが最後に更新された ISO 8601 形式の日付と時刻。たとえば、中央ヨーロッパ時間の 2012-03-25T12:30 (プラス 10 秒) の ISO 8601 日時形式は 2012 年 3 月 25 日です。
- `_source_uri` – ドキュメントが利用可能な URI。たとえば、企業ウェブサイト上のドキュメントの URI。
- `_version` – ドキュメントの特定のバージョンの識別子。
- `_view_count` – ドキュメントが表示された回数。
- `_language_code` (文字列) - ドキュメントに適用される言語のコード。言語を指定しないと、デフォルトで英語になります。コードを含む、サポートされている言語の詳細については、[英語以外の言語でドキュメントを追加する](#)を参照してください。

予約済みフィールドまたは共通フィールドを作成する場合と同様に、UpdateIndex API オペレーション `DocumentMetadataConfigurationUpdates` を使用してカスタムフィールドを作成します。カスタムフィールドには適切なデータタイプを設定する必要があります。

コンソールを使用する場合は、データソースを選択し、編集アクションを選択してから、フィールドマッピングセクションの横に進んでデータソースを設定して、フィールドを更新します。一部のデータソースは、新しいフィールドやカスタムフィールドの追加をサポートしていません。フィールドの作成後にフィールドタイプを変更することはできません。

以下は、カスタムフィールドに対して設定できるタイプです。

- 日付
- 数値
- String
- 文字列リスト

[BatchPutDocument](#) API オペレーションを使用してインデックスにドキュメントを追加した場合、はドキュメントのフィールド/属性を `Attributes` 一覧表示し、`DocumentAttribute` オブジェクトを使用してフィールドを作成します。

Amazon S3 データソースからインデックス化されたドキュメントの場合、フィールド情報を含む [JSON メタデータファイル](#) を使用してフィールドを作成します。

サポートされているデータベースをデータソースとして使用する場合は、[フィールドマッピングオプション](#) を使用してフィールドを設定できます。

Amazon Kendra のインデックスからレスポンスを取得する

インデックスの作成後は、ドキュメントの検索を開始できます。

Amazon Kendra インデックスを検索するには、[Retrieve](#) API オペレーションまたは [Query](#) API オペレーションのいずれかを使用します。

API の取得オペレーションは、取得拡張生成 (RAG) のユースケースに最適です。特定のクエリでは、最大 200 個のトークン単語の意味的に関連するパッセージのランク付けされたリストを返します。これらが大規模言語モデル (LLM) に送信して、RAG を使用して回答を生成できます。詳細については、「[インデックスの検索](#)」を参照してください。

クエリ API オペレーションは、ドキュメント検索のユースケースに最適です。特定のクエリについて、クエリに関連する 100 語の抜粋を含むランク付けされたドキュメントのリストを返します。これは、ユーザーがランク付けされたドキュメントのリストを参照している従来のドキュメント検索のユースケースに役立ちます。

各インデックスタイプの取得およびクエリ API オペレーションでサポートされている機能を確認するには、「[インデックスタイプ](#)」を参照してください。

ドキュメント

このセクションでは、がサポートする多数のドキュメント形式と、ドキュメントのさまざまなフィールド/属性の Amazon Kendra インデックスを作成する方法について説明します。

トピック

- [ドキュメントタイプまたは書式](#)
- [ドキュメントの属性またはフィールド](#)

ドキュメントタイプまたは書式

Amazon Kendra は、PDF、HTML、Word、PowerPoint などの一般的なドキュメントタイプまたは形式をサポートしています。インデックスには複数のドキュメント形式を含めることができます。

Amazon Kendra は、ドキュメントを検索可能にするために、ドキュメント内のコンテンツを抽出します。抽出されたテキストとドキュメント内の表形式のコンテンツ (HTML テーブル) での検索が最適化されるように、ドキュメントが解析されます。つまり、ドキュメントを、検索で使用するフィールドまたは属性に構築します。最終更新日などのドキュメントメタメタデータは、検索に役立つフィールドになります。

ドキュメントは行と列に編成できます。例えば、各ドキュメントは行で、タイトルや本文コンテンツなどの各ドキュメントフィールド/属性は列にします。例えば、データベースをデータソースとして使用する場合、データは行と列に構築または整理する必要があります。

ドキュメントをインデックスに追加するには、次の方法があります。

- [BatchPutDocument](#) API
- [データソースコネクタ](#)

よくある質問ファイルを追加する場合は、[CreateFaq](#) API を使用して、Amazon S3 バケットに保存されているファイルを追加します。基本的な CSV 形式、ヘッダーにカスタムフィールド/属性を含む CSV 形式、カスタムフィールドを含む JSON 形式から選択できます。デフォルトの形式は基本的な CSV です。

以下では、サポートされている各ドキュメント形式と、Amazon Kendra がドキュメントのインデックス作成時に各形式をどのように処理するかについて説明します。

ドキュメントの形式	処理方法	ドキュメントの処理方法	元の構造
ポータブルドキュメント形式 (PDF)	HTML	HTML に変換してから、コンテンツを抽出します。	構造化されない
HyperText マークアップ言語 (HTML)	HTML	HTML タグをフィルターで除外して、コンテンツを抽出します。コンテンツはメインの HTML 開始タグと終了タグ (<HTML>content</	半構造化

ドキュメントの形式	処理方法	ドキュメントの処理方法	元の構造
拡張マークアップ言語 (XML)	XML	HTML>) の間にある必要があります。 XML タグをフィルターで除外して、コンテンツを抽出します。	半構造化
拡張スタイルシート言語変換 (XSLT)	XSLT	タグをフィルターで除外して、コンテンツを抽出します。	半構造化
Markdown (MD)	プレーンテキスト	コンテンツは Markdown 構文を含めた状態抽出されます。	半構造化
カンマ区切り値 (CSV)	CSV	各セルから抽出されたコンテンツで、1 つのファイルが 1 つのドキュメント結果として扱われます。	よくある質問ファイルの場合は構造化、それ以外は半構造化
Microsoft Excel (XLS および XLSX)	XLS および XLSX	各セルから抽出されたコンテンツで、1 つのファイルが 1 つのドキュメント結果として扱われます。	半構造化
JavaScript Object Notation (JSON)	プレーンテキスト	コンテンツは JSON 構文を含めた状態で抽出されます。	半構造化
リッチテキスト形式 (RTF)	RTF	RTF 構文はフィルターで除外され、内容が抽出されます。	半構造化

ドキュメントの形式	処理方法	ドキュメントの処理方法	元の構造
Microsoft PowerPoint (PPT)	PPT、PPTX	検索のために PowerPoint スライドからテキストコンテンツのみが抽出されます。イメージやその他のコンテンツは抽出されません。	構造化されない
Microsoft Word	DOC、DOCX	検索のために Word ページからテキストコンテンツのみが抽出されます。イメージやその他のコンテンツは抽出されません。	構造化されない
プレーンテキスト (TXT)	TXT	テキストドキュメント内のすべてのテキストが抽出されます。	構造化されない

ドキュメントの属性またはフィールド

ドキュメントには属性またはフィールドが関連付けられています。ドキュメントのフィールドは、ドキュメントのプロパティ、またはドキュメントの構造に含まれる属性です。たとえば、各ドキュメントにタイトル、本文、著者が含まれている場合があります。特定の文書にカスタムフィールドを追加することもできます。例えば、インデックスが税務文書を検索する場合、W-2、1099 などの税文書の種類にカスタムフィールドを指定できます。

クエリでドキュメント属性を使用するには、その前にインデックスフィールドにマッピングする必要があります。例えば、タイトルフィールドをフィールド `_document_title` にマッピングできます。詳細については、「[Mapping fields](#)」を参照してください。新しいフィールドを追加するには、フィールドをマッピングするインデックスフィールドを作成する必要があります。コンソールを使用して、または [UpdateIndex](#) API を使用してインデックスフィールドを作成します。

ドキュメントフィールドを使用して、レスポンスをフィルタリングし、ファセット検索結果を作成できます。例えば、特定のバージョンのドキュメントのみを返すように応答をフィルタリングしたり、検索条件に一致する 1099 タイプの税務文書のみを返すように検索をフィルタリングできます。詳細については、「[Filtering and facet search](#)」を参照してください。

ドキュメントフィールドを使用して、クエリレスポンスを手動で調整することもできます。例えば、タイトルフィールドの重要度を上げて、レスポンスで返すドキュメントを決定するときに `g` フィールド Amazon Kendra に割り当てる重みを増やすことができます。詳細については、「[Tuning search relevance](#)」を参照してください。

ドキュメントをインデックスに直接追加する場合は、[BatchPutDocument](#) API に [ドキュメント](#) 入力パラメータのフィールドを指定します。[DocumentAttribute](#) オブジェクト配列のカスタム属性値を指定します。データソースを使用している場合、ドキュメントフィールドを追加するために使用する方法は、データソースによって異なります。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Amazon Kendra 予約済みまたは一般的なドキュメントフィールドの使用

[UpdateIndex API](#) では、`DocumentMetadataConfigurationUpdates` を使用して Amazon Kendra 予約済みインデックスフィールド名を指定することにより、予約フィールドまたは共通フィールドを作成し、対応するドキュメント属性/フィールド名にマッピングできます。カスタムフィールドも作成できます。データソースコネクタを使用する場合、データソースドキュメントフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングするフィールドマッピングがほとんど含まれます。コンソールを使用する場合は、データソースを選択し、編集アクションを選択してから、フィールドマッピングセクションの横に進んでデータソースを設定して、フィールドを更新します。

Search オブジェクトを設定して、フィールドを表示可能、ファセット可能、検索可能、ソート可能のいずれかに設定できます。特定のフィールド値にマッピングされたブースト、新しさ、重要度の値に適用するフィールドのランク順序、ブースト期間、または期間を設定するように Relevance オブジェクトを設定できます。コンソールを使用する場合は、ナビゲーションメニューのファセットオプションを選択して、フィールドの検索設定をセットできます。関連性調整を設定するには、ナビゲーションメニューでインデックスを検索するオプションを選択し、クエリを入力し、サイドパネルのオプションを使用して検索の関連性を調整します。フィールドを作成すると、フィールドタイプを変更することはできません。

Amazon Kendra には、使用できる以下の予約済みまたは共通ドキュメントフィールドがあります。

- `_authors` - ドキュメントの内容を担当する 1 人以上の作成者のリスト。

- `_category` - ドキュメントを特定のグループに配置するカテゴリ。
- `_created_at` - ドキュメントが作成された ISO 8601 形式の日付と時刻。例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。
- `_data_source_id` - ドキュメントを含むデータソースの識別子。
- `_document_body` - ドキュメントのコンテンツ。
- `_document_id` - ドキュメントの一意的識別子。
- `_document_title` - ドキュメントのタイトル。
- `_excerpt_page_number` - ドキュメントの抜粋が表示される PDF ファイルのページ番号。2020 年 9 月 8 日より前にインデックスが作成された場合、この属性を使用する前に、ドキュメントのインデックスを再作成する必要があります。
- `_faq_id` - これが質疑応答タイプのドキュメント (よくある質問) の場合、よくある質問の固有識別子です。
- `_file_type` - pdf や doc など、ドキュメントのファイルタイプ。
- `_last_updated_at` - ドキュメントが最後に更新された ISO 8601 形式の日付と時刻。例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。
- `_source_uri` - ドキュメントが利用可能な URI。例えば、会社のウェブサイト上のドキュメントの URI などです。
- `_version` - ドキュメントの特定のバージョンの識別子。
- `_view_count` - ドキュメントが表示された回数。
- `_language_code` (文字列) - ドキュメントに適用される言語のコード。言語を指定しないと、デフォルトで英語になります。コードを含む、サポートされている言語の詳細については、[英語以外の言語でドキュメントを追加する](#)を参照してください。

カスタムフィールドの場合、予約フィールドまたは共通フィールドを作成する場合と同じように、UpdateIndex API で DocumentMetadataConfigurationUpdates を使用してこれらのフィールドを作成します。カスタムフィールドには適切なデータタイプを設定する必要があります。コンソールを使用する場合は、データソースを選択し、編集アクションを選択してから、フィールドマッピングセクションの横に進んでデータソースを設定して、フィールドを更新します。一部のデータソースは、新しいフィールドやカスタムフィールドの追加をサポートしていません。フィールドを作成すると、フィールドタイプを変更することはできません。

カスタムフィールドには以下のタイプを設定できます。

- 日付
- 数値
- String
- 文字列リスト

[BatchPutDocument](#) API を使用してインデックスにドキュメントを追加した場合、Attributes は、ドキュメントのフィールド/属性を一覧表示し、DocumentAttribute オブジェクトを使用してフィールドを作成します。

Amazon S3 データソースからインデックス化されたドキュメントの場合、フィールド情報を含む [JSON メタデータファイル](#) を使用してフィールドを作成します。

サポートされているデータベースをデータソースとして使用する場合は、[フィールドマッピングオプション](#) を使用してフィールドを設定できます。

データソース

データソースは、ドキュメントまたはコンテンツ Amazon Kendra に接続してインデックスを作成するデータリポジトリまたは場所です。たとえば、Microsoft SharePoint に接続する Amazon Kendra ように を設定して、このソースに保存されているドキュメントをクロールしてインデックスを作成できます。クロール Amazon Kendra する URLs を指定して、ウェブページのインデックスを作成することもできます。データソースを Amazon Kendra インデックスと自動的に同期して、データソース内の追加、更新、または削除されたドキュメントもインデックスで追加、更新、または削除されるようにできます。

サポートされているデータソースは以下の通りです。

- [Adobe Experience Manager](#)
- [Alfresco](#)
- [Aurora \(MySQL\)](#)
- [Aurora \(PostgreSQL\)](#)
- [Amazon FSx \(Windows\)](#)
- [Amazon FSx \(NetApp ONTAP\)](#)
- [データベースデータソース](#)
- [Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\)](#)

- [Amazon RDS \(MySQL\)](#)
- [Amazon RDS \(Oracle\)](#)
- [Amazon RDS \(PostgreSQL\)](#)
- [Amazon S3 バケット](#)
- [Amazon Kendra ウェブクローラー](#)
- [\[Box\] \(ボックス\)](#)
- [Confluence](#)
- [カスタムデータソース](#)
- [Dropbox](#)
- [Drupal](#)
- [GitHub](#)
- [Gmail](#)
- [Google Workspace ドライブ](#)
- [IBM DB2](#)
- [Jira](#)
- [Microsoft Exchange](#)
- [Microsoft OneDrive](#)
- [Microsoft SharePoint](#)
- [Microsoft Teams](#)
- [Microsoft SQL Server](#)
- [Microsoft Yammer](#)
- [MySQL](#)
- [Oracle Database](#)
- [\[PostgreSQL\]](#)
- [Quip](#)
- [Salesforce](#)
- [ServiceNow](#)
- [Slack](#)
- [Zendesk](#)

でサポートされているドキュメントタイプまたは形式のリストについては、「[ドキュメントタイプ](#) Amazon Kendra」を参照してください。データソースからドキュメントにインデックスを付けるデータソースコネクタを作成する前に、まずインデックスを作成する必要があります。

Note

ドキュメントのインデックスを作成するには、データソースは必要ありません。バッチアップロードを使用すると、ドキュメントをインデックスに直接追加できます。詳細については、「[Adding documents directly to an index](#)」を参照してください。

Amazon Kendra コンソール、AWS CLI、または SDKs」を参照してください。 <https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/getting-started.html>

クエリ

回答を得るために、ユーザーはインデックスをクエリします。ユーザーはクエリで自然言語を使用できます。レスポンスは、最も良い答えを提供するインデックスにタイトル、テキストの抜粋、ドキュメントの場所などの情報を含みます。

Amazon Kendra は、ドキュメントの内容だけでなく、ドキュメントに関して提供したすべての情報を使用して、ドキュメントがクエリに関連しているかどうかを判断します。たとえば、インデックスにドキュメントが最後に更新された日時に関する情報が含まれている場合は、最近更新されたドキュメントにより高い関連性を割り当てる Amazon Kendra ように指示できます。

クエリには、ガフィルター条件を満たすドキュメントのみを Amazon Kendra 返すようにレスポンスをフィルタリングする方法の基準を含めることもできます。例えば、department というインデックスフィールドを作成した場合、部門フィールドが legal に設定されているドキュメントのみが返されるように応答をフィルタリングできます。詳細については、「[Filtering search](#)」を参照してください。

インデックス内の個々のフィールドの関連性をチューニングすることで、クエリの結果に影響を与えることができます。チューニングによって、結果に対するフィールドの重要性が変わります。例えば、new カテゴリを持つドキュメントの重要性を上げる場合、このカテゴリのドキュメントがレスポンスに含まれる可能性が高くなります。詳細については、「[Tuning search relevance](#)」を参照してください。

クエリの使用に関する詳細については、「[Searching an index](#)」を参照してください。

[タグ]

タグまたはラベルを割り当てて、インデックス、データソース、FAQsを管理します。タグを使用して、さまざまな方法で Amazon Kendra リソースを分類できます。例えば、目的、所有者、アプリケーション、または任意の組み合わせで分類します。タグはそれぞれ、1つのキーと1つの値で構成されており、どちらもお客様側が定義します。

タグを使用すると、次のことができます。

- AWS リソースを特定して整理します。多くの AWS サービスはタグ付けをサポートしているため、異なるサービスのリソースに同じタグを割り当てて、リソースが関連していることを示すことができます。たとえば、インデックスと、インデックスを使用する Amazon Lex ボットに同じタグを付けることができます。
- コストの割り当て。AWS Billing and Cost Management ダッシュボードでタグをアクティブ化します。AWS はタグを使用してコストを分類し、毎月のコスト配分レポートを配信します。詳細については、AWS「[請求とコスト管理について](#)」の「[コスト配分とタグ付け](#)」を参照してください。
- リソースへのアクセス制御。AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーのタグを使用して、Amazon Kendra リソースへのアクセスを制御できます。これらのポリシーを IAM ロールまたはユーザーにアタッチして、タグベースのアクセスコントロールをアクティブ化できます。詳細については、「[Authorization based on tags](#)」を参照してください。

タグを作成および管理するには、AWS Command Line Interface (AWS CLI) AWS Management Console、または Amazon Kendra API を使用します。

リソースのタグ付け

Amazon Kendra コンソールを使用している場合は、リソースの作成時にタグ付けするか、後で追加できます。コンソールを使用して、タグを更新または削除することもできます。

AWS Command Line Interface (AWS CLI) または Amazon Kendra API を使用している場合は、次のオペレーションを使用してリソースのタグを管理します。

- [CreateDataSource](#) - データソース作成時のタグの適用。
- [CreateFaq](#) - よくある質問作成時のタグの適用。
- [CreateIndex](#) - インデックス作成時のタグの適用。
- [ListTagsForResource](#) - リソースに関連付けられているタグの表示。

- [TagResource](#) - リソースのタグの追加および変更。
- [UntagResource](#) - リソースからのタグの削除。

タグの制限

Amazon Kendra リソースのタグには、次の制限が適用されます。

- タグの最大数 - 50
- キーの最大長 - 128 文字
- 最大値の長さ - 256 文字
- キーと値の有効な文字は、a~z、A~Z、スペース、特殊文字 (_ . : / = + - @) です。
- キーと値は大文字と小文字が区別されます
- aws: をキーのプレフィックスとして使用しないでください。AWS 用に予約済みです。

Amazon Kendra のセットアップ

Amazon Kendra を使用する前に、Amazon Web Services (AWS) アカウントを持っている必要があります。AWS アカウントを作成したら、Amazon Kendra コンソール、(AWS CLI)、AWS Command Line Interface または AWS SDKs から Amazon Kendra にアクセスできます。

このガイドには AWS CLI、Java、Python の例が含まれています。

トピック

- [にサインアップする AWS](#)
- [リージョンとエンドポイント](#)
- [のセットアップ AWS CLI](#)
- [AWS SDKsのセットアップ](#)

にサインアップする AWS

Amazon Web Services (AWS) にサインアップすると AWS、Amazon Kendra を含む のすべてのサービスにアカウントが自動的にサインアップされます。料金は、使用するサービスの料金のみが請求されます。

AWS アカウントがすでにある場合は、次のタスクに進んでください。AWS アカウントをお持ちでない場合は、以下の手順に従ってアカウントを作成してください。

にサインアップするには AWS

1. <https://aws.amazon.com> を開き、AWS アカウントの作成を選択します。
2. 画面上の指示に従ってアカウントの作成を完了します。12 桁の AWS アカウント番号を書き留めます。サインアップ手順の一環として、通話呼び出しを受け取り、電話のキーパッドを用いて PIN を入力することが求められます。
3. AWS Identity and Access Management (IAM) 管理者ユーザーを作成します。作成手順については、AWS Identity and Access Management IAM ユーザーガイドの[最初の IAM ユーザーおよびグループの作成](#)を参照してください。

リージョンとエンドポイント

エンドポイントは、ウェブサービスのエン트리ポイントとなるURLです。各エンドポイントは、特定の AWS リージョンに関連付けられています。Amazon Kendra コンソール、AWS CLI および Amazon Kendra SDKs の組み合わせを使用する場合は、特定のキャンペーンのすべての Amazon Kendra コンポーネント (インデックス、クエリなど) を同じリージョンで作成する必要があるため、デフォルトのリージョンに注意してください。Amazon Kendra でサポートされているリージョンやエンドポイントについては、[リージョンとエンドポイント](#)を参照してください。

のセットアップ AWS CLI

AWS コマンドラインインターフェイス (AWS CLI) は、Amazon Kendra を含む のサービスを管理する AWS ための統合デベロッパーツールです。このツールをインストールすることをお勧めします。

1. をインストールするには AWS CLI、[AWS 「コマンドラインインターフェイスユーザーガイド」](#)のAWS 「コマンドラインインターフェイスのインストール」の手順に従います。
2. を設定し AWS CLI、 を呼び出すプロファイルを設定するには AWS CLI、AWS 「コマンドラインインターフェイスユーザーガイド」の「[の設定 AWS CLI](#)」の手順に従います。
3. AWS CLI プロファイルが正しく設定されていることを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
aws configure --profile default
```

プロファイルが正しく設定されている場合は、次のような出力が表示されます。

```
AWS Access Key ID [*****52FQ]:
AWS Secret Access Key [*****xgyZ]:
Default region name [us-west-2]:
Default output format [json]:
```

4. AWS CLI が Amazon Kendra で使用するよう設定されていることを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
aws kendra help
```

が正しく設定されている場合 AWS CLI、Amazon Kendra、Amazon Kendra ランタイム、および Amazon Kendra イベントでサポートされている AWS CLI コマンドのリストが表示されます。

AWS SDKsのセットアップ

使用する AWS SDKsをダウンロードしてインストールします。このガイドでは、Python の例を示しています。その他の AWS SDKs「[アマゾン ウェブ サービスのツール](#)」を参照してください。

Python SDK 用のパッケージは Boto3 と呼ばれています。

以下の Python コマンドを実行する前に、まず、ご使用のオペレーティングシステム用の [Python 3.6 以降](#)をダウンロードして、インストールする必要があります。Python 3.5 以前のサポートは廃止されました。Python Scripts ディレクトリに pip が含まれていない場合は、[get-pip.py](#) をダウンロードして Scripts ディレクトリに保存できます。ターミナルプログラムを使用して Python ディレクトリを [Path 変数または環境変数](#)として設定することもできます。

```
# Install the latest Boto3 release via pip
pip install boto3

# You can install a specific version of Boto3 for compatibility reasons
# Install Boto3 version 1.0 specifically
pip install boto3==1.0.0

# Make sure Boto3 is no older than version 1.15.0
pip install boto3>=1.15.0

# Avoid versions of Boto3 newer than version 1.15.3
pip install boto3<=1.15.3
```

Boto3 を使用するには、[IAM コンソール](#)を使用して AWS アカウントの認証情報を設定する必要があります。

IAM のアクセスロール Amazon Kendra

インデックス、データソース、または FAQ を作成する場合、は AWS リソースの作成に必要な Amazon Kendra リソースにアクセス Amazon Kendra する必要があります。Amazon Kendra リソースを作成する前に AWS Identity and Access Management、(IAM) ポリシーを作成する必要があります。オペレーションを呼び出すときに、ポリシーをアタッチしたロールの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。たとえば、[BatchPutDocument](#) API を呼び出して Amazon S3 バケットからドキュメントを追加する場合は、バケットにアクセスできるポリシーを持つロールを Amazon Kendra に提供します。

Amazon Kendra コンソールで新しい IAM ロールを作成するか、使用する IAM 既存のロールを選択できます。コンソールには、ロール名に「kendra」か、「Kendra」という文字列を含むロールが表示されます。

次のトピックでは、必要なポリシーの詳細について説明します。Amazon Kendra コンソールを使用して IAM ロールを作成すると、これらのポリシーが自動的に作成されます。

トピック

- [IAM インデックスの ロール](#)
- [IAM BatchPutDocument API の ロール](#)
- [IAM データソースの ロール](#)
- [Virtual Private Cloud \(VPC\) IAM ロール](#)
- [IAM よくある質問 \(FAQs\) の ロール](#)
- [IAM クエリ提案の ロール](#)
- [IAM ユーザーとグループのプリンシパルマッピング用の ロール](#)
- [IAM の ロール AWS IAM Identity Center](#)
- [IAM Amazon Kendra エクスペリエンスの ロール](#)
- [IAM カスタムドキュメントエンリッチメントの ロール](#)

IAM インデックスの ロール

インデックスを作成するときは、に書き込むアクセス許可を持つ IAM ロールを指定する必要があります Amazon CloudWatch。また、 がロールを引き受けること Amazon Kendra を許可する信頼ポリシーを指定する必要があります。次のポリシーを提供する必要があります。

IAM インデックスの ロール

が CloudWatch ログにアクセス Amazon Kendra することを許可するロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "cloudwatch:PutMetricData",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "cloudwatch:namespace": "AWS/Kendra"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "logs:DescribeLogGroups",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "logs:CreateLogGroup",
      "Resource": "arn:aws:logs:your-region:your-account-id:log-group:/aws/kendra/*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:DescribeLogStreams",
        "logs:CreateLogStream",
        "logs:PutLogEvents"
      ],
      "Resource": "arn:aws:logs:your-region:your-account-id:log-group:/aws/kendra/*:log-stream:*"
    }
  ]
}
```

Amazon Kendra がアクセスすることを許可するロールポリシー AWS Secrets Manager。をキーの場所 Secrets Manager としてユーザーコンテキストを使用している場合は、次のポリシーを使用できます。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "cloudwatch:PutMetricData",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "cloudwatch:namespace": "AWS/Kendra"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "logs:DescribeLogGroups",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "logs:CreateLogGroup",
      "Resource": "arn:aws:logs:your-region:your-account-id:log-group:/aws/kendra/*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:DescribeLogStreams",
        "logs:CreateLogStream",
        "logs:PutLogEvents"
      ],
      "Resource": "arn:aws:logs:your-region:your-account-id:log-group:/aws/kendra/*:log-stream:*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
```

```

    "Action":[
      "secretsmanager:GetSecretValue"
    ],
    "Resource":[
      "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
    ]
  },
  {
    "Effect":"Allow",
    "Action":[
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource":[
      "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
    ],
    "Condition":{"StringLike":{"kms:ViaService":["secretsmanager.your-region.amazonaws.com"]}}
  }
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement":[
    {
      "Effect":"Allow",
      "Principal":{"Service":"kendra.amazonaws.com"},
      "Action":["sts:AssumeRole"]
    }
  ]
}

```

```
}
```

IAM BatchPutDocument API の ロール

Warning

Amazon Kendra は、S3 バケットを操作するアクセス許可をプリン Amazon Kendra シンパルに付与するバケットポリシーを使用しません。代わりに IAM ロールを使用します。Amazon Kendra が信頼されたメンバーとしてバケットポリシーに含まれていないことを確認します。これにより、任意のプリンシパルに誤ってアクセス許可を付与する際のデータセキュリティの問題を回避できます。ただし、バケットポリシーを追加して、異なるアカウント間で Amazon S3 バケットを使用できます。詳細については、「[複数のアカウント間で Amazon S3 を使用するポリシー](#)」を参照してください。S3 データソースの IAM ロールについては、「[IAM ロール](#)」を参照してください。

[BatchPutDocument](#) API を使用して Amazon S3 バケット内のドキュメントのインデックスを作成する場合は、バケットへのアクセス権を持つ IAM ロールを Amazon Kendra に提供する必要があります。また、IAM ロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシーを指定する必要があります。バケット内のドキュメントが暗号化されている場合は、AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用してドキュメントを復号化するアクセス許可を付与する必要があります。

IAM BatchPutDocument API の ロール

Amazon Kendra が バケットにアクセス Amazon S3 するために必要なロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ]
    }
  ]
}
```



```
    ]
  }
]
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

信頼ポリシーには `aws:sourceAccount` と `aws:sourceArn` を含めることをお勧めします。これにより、アクセス許可が制限され、`aws:sourceAccount` および `aws:sourceArn` が `sts:AssumeRole` アクションの IAM ロールポリシーで指定されているものと同じかどうか安全にチェックされます。これにより、権限のないエンティティが IAM ロールとそのアクセス許可にアクセスできなくなります。詳細については、[混乱した代理問題](#)に関する AWS Identity and Access Management ガイドを参照してください。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": [
```

```

        "kendra.amazonaws.com"
    ],
    },
    "Action": "sts:AssumeRole",
    "Condition": {
        "StringEquals": {
            "aws:SourceAccount": "your-account-id"
        },
        "StringLike": {
            "aws:SourceArn": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/*"
        }
    }
}

```

Amazon Kendra がカスタマーマスターキー (CMK) を使用して AWS KMS Amazon S3 バケット内のドキュメントを復号できるようにするオプションのロールポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "kms:Decrypt"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
            ]
        }
    ]
}

```

IAM データソースの ロール

[CreateDataSource](#) API を使用する場合は、リソースへのアクセス許可を持つ Amazon Kendra IAM ロールを付与する必要があります。必要な固有のアクセス許可は、データソースによって異なります。

IAM Adobe Experience Manager データソースの ロール

Adobe Experience Manager を使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- Adobe Experience Manager を認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Adobe Experience Manager コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

を介して Adobe Experience Manager データソースを Amazon Kendra に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    }
  ],
}
```

```

{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[key-id]"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:PutPrincipalMapping",
    "kendra:DeletePrincipalMapping",
    "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
    "kendra:DescribePrincipalMapping"
  ],
  "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
}
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Alfresco データソースの ロール

Alfresco を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- Alfresco を認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Alfresco コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Alfresco データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

        "secretsmanager:GetSecretValue"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
    ]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[[key-id]]"
    ],
    "Condition": {
        "StringLike": {
            "kms:ViaService": [
                "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/
{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-
id}}/data-source/*"]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/
{{index-id}}"
}]

```

```
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAMAurora (MySQL) データソースの ロール

Aurora (MySQL) を使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Aurora (MySQL) を認証するアクセス許可。
- Aurora (MySQL) コネクタに必要なパブリック APIs を呼び出すアクセス許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping、および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Aurora (MySQL) データソースは、 を介して Amazon Kendra に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[secret_id]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[key_id]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
      ],
      "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
        "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
```



```

    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAMAurora (PostgreSQL) データソースの ロール

Aurora (PostgreSQL) を使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- (Aurora PostgreSQL) を認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Aurora (PostgreSQL) コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Aurora (PostgreSQL) データソースは、 を介して Amazon Kendra に接続できます Amazon VPC。 を使用している場合は Amazon VPC、 [追加のアクセス許可](#) を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[secret_id]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[key_id]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
```

```

        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
"arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:BatchPutDocument",
            "kendra:BatchDeleteDocument"
        ],
        "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
    }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "kendra.amazonaws.com"
            },
            "Action": "sts:AssumeRole"
        }
    ]
}

```

IAM Amazon FSx データソースの ロール

を使用する場合は Amazon FSx、次のポリシーでロールを指定します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Amazon FSx ファイルシステムを認証するアクセス許可。

- ファイルシステムが存在する (Amazon Virtual Private Cloud Amazon FSx VPC) へのアクセス許可。
- Amazon FSx ファイルシステムの Active Directory のドメイン名を取得するアクセス許可。
- Amazon FSx コネクタに必要なパブリック API アクションの呼び出し許可。
- インデックスを更新する BatchPutDocument および BatchDeleteDocument API の呼び出し許可。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:{{secret-id}}"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/{{key-id}}"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ],
  {
    "Effect": "Allow",
```

```

        "Action": [
            "ec2:CreateNetworkInterface",
            "ec2>DeleteNetworkInterface"
        ],
        "Resource": [
            "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
            "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:subnet/[[subnet-
ids]]"
        ]
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:DescribeSubnets",
            "ec2:DescribeNetworkInterfaces"
        ],
        "Resource": "*"
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:CreateNetworkInterfacePermission"
        ],
        "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
        "Condition": {
            "StringEquals": {
                "ec2:AuthorizedService": "kendra.*.amazonaws.com"
            },
            "ArnEquals": {
                "ec2:Subnet": [
                    "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:subnet/[[subnet-
ids]]"
                ]
            }
        }
    },
    {
        "Sid": "AllowsKendraToGetDomainNameOfActiveDirectory",
        "Effect": "Allow",
        "Action": "ds:DescribeDirectories",
        "Resource": "*"
    },

```

```

    {
      "Sid": "AllowsKendraToCallRequiredFsxAPIs",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "fsx:DescribeFileSystems"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Sid": "iamPassRole",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "iam:PassRole",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "iam:PassedToService": [
            "kendra.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
    }
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {

```

```

        "Effect": "Allow",
        "Principal": {
            "Service": "kendra.amazonaws.com"
        },
        "Action": "sts:AssumeRole"
    }
]
}

```

IAM データベースデータソースの ロール

データベースをデータソースとして使用する場合は、への接続に必要なアクセス許可を持つロールを Amazon Kendra に提供します。具体的には次のとおりです。

- サイトのユーザー名とパスワードを含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容の詳細については、「[データソース](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。
- サイトとの通信に使用される SSL 証明書を含む Amazon S3 バケットへのアクセス許可。

Note

データベースデータソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    }
  ]
}

```

```

    ],
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "kendra.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ]
    }
  ]
}

```

データソースで利用できるポリシーには 2 つのオプションがあります。

との通信に使用される SSL 証明書を含む Amazon S3 バケットを暗号化している場合は、キー Amazon Kendra へのアクセスを許可するポリシーを指定します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}
```

VPC を使用している場合は、必要なリソース Amazon Kendra へのアクセスを許可するポリシーを指定します。必要なポリシーについては「[データソースおよび VPC の IAM ロール](#)」を参照してください。

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースの ロール

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースコネクタを使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースインスタンスを認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースコネクタに必要なパブリック APIs を呼び出すアクセス許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

(Amazon RDS Microsoft SQL Server) データソースは、 Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
```

```

    "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[key_id]]"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.*.amazonaws.com"
      ]
    }
  },
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:PutPrincipalMapping",
    "kendra:DeletePrincipalMapping",
    "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
    "kendra:DescribePrincipalMapping"
  ],
  "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
    "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"],
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {

```

```

        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM (MySQL) データソースの Amazon RDS ロール

Amazon RDS (MySQL) データソースコネクタを使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- Amazon RDS (MySQL) データソースインスタンスを認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Amazon RDS (MySQL) データソースコネクタに必要なパブリック APIs を呼び出すアクセス許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Amazon RDS (MySQL) データソースは、[こちら](#)を介して Amazon Kendra に接続できます。Amazon VPC を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
      ]
    }
  ]
}

```

```

    ],
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[key_id]"
    ],
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.*.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:PutPrincipalMapping",
      "kendra:DeletePrincipalMapping",
      "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
      "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
      "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"],
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM (Oracle) データソースの Amazon RDS ロール

Amazon RDS Oracle データソースコネクタを使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- Amazon RDS (Oracle) データソースインスタンスを認証するためにシー AWS Secrets Manager クレジットにアクセスするアクセス許可。
- Amazon RDS (Oracle) データソースコネクタに必要なパブリック APIs を呼び出すアクセス許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Amazon RDS Oracle データソース Amazon Kendra は、[を介して](#) に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```

"Statement": [
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "secretsmanager:GetSecretValue"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[secret_id]"
  ]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[key_id]"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.*.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:PutPrincipalMapping",
    "kendra:DeletePrincipalMapping",
    "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
    "kendra:DescribePrincipalMapping"
  ],
  "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
    "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
}
]

```

```
}]  
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Effect": "Allow",  
      "Principal": {  
        "Service": "kendra.amazonaws.com"  
      },  
      "Action": "sts:AssumeRole"  
    }  
  ]  
}
```

IAM Amazon RDS (PostgreSQL) データソースの ロール

Amazon RDS (PostgreSQL) データソースコネクタを使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- Amazon RDS (PostgreSQL) データソースインスタンスを認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Amazon RDS (PostgreSQL) データソースコネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Amazon RDS (PostgreSQL) データソースは、 を介して Amazon Kendra に接続できます Amazon VPC。 を使用している場合は Amazon VPC、 [追加のアクセス許可](#) を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[secret_id]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[key_id]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
      ],
      "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
        "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
```

```

    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Amazon S3 データソースの ロール

Warning

Amazon Kendra は、S3 バケットを操作するアクセス許可をプリン Amazon Kendra シバ
ルに付与するバケットポリシーを使用しません。代わりに、IAM ロールを使用します。
Amazon Kendra が信頼されたメンバーとしてバケットポリシーに含まれていないことを確
認します。これにより、任意のプリンシパルに誤ってアクセス許可を付与する際のデー
タセキュリティの問題を回避できます。ただしバケットポリシーを追加すれば、異なるアカ
ウント間で Amazon S3 バケットを使用できます。詳細については、「[複数のアカウントで Amazon S3 を使用するためのポリシー](#) (下にスクロール)」を参照してください。

Amazon S3 バケットをデータソースとして使用するときは、バケットにアクセスし、 および BatchPutDocumentBatchDeleteDocument オペレーションを使用するアクセス許可を持つロールを指定します。バケット内のドキュメントが Amazon S3 暗号化されている場合は、AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用してドキュメントを復号化するアクセス許可を付与する必要があります。

次のロールポリシーでは、Amazon Kendra がロールを引き受けることを許可する必要があります。下にスクロールすると、ロールを引き受けるための信頼ポリシーが表示されます。

が Amazon S3 バケット Amazon Kendra をデータソースとして使用するのに必要なロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Action": [
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": [
```

```

        "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
    ]
}

```

Amazon Kendra がカスターマスターキー (CMK) を使用して AWS KMS Amazon S3 バケット内のドキュメントを復号できるようにするオプションのロールポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}

```

アクセス AWS KMS 許可を Amazon S3 アクティブ化 AWS KMS または共有 Amazon VPCすることなく、の使用中に Amazon Kendra が バケットにアクセスできるようにするオプションのロールポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],

```

```

    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::{{bucket-name}}/*"
    ],
    "Effect": "Allow"
  },
  {
    "Action": [
      "s3:ListBucket"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::{{bucket-name}}"
    ],
    "Effect": "Allow"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:CreateNetworkInterface"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:subnet/[[subnet-ids]]",
      "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:security-group/
[[security-group]]"
    ]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:CreateNetworkInterface"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "aws:RequestTag/AWS_KENDRA": "kendra_{{your-account-id}}_{{index-
id}}_{{data-source-id}}_*"
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:CreateTags"
    ],

```

```

    "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
    "Condition": {
        "StringEquals": {
            "ec2:CreateAction": "CreateNetworkInterface"
        }
    },
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:DescribeSubnets"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:DescribeNetworkInterfaces"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:CreateNetworkInterfacePermission"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-accoount-id}}:network-
interface/*",
    "Condition": {
        "StringEquals": {
            "ec2:AuthorizedService": "kendra.amazonaws.com"
        },
        "ArnEquals": {
            "ec2:Subnet": [
                "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:subnet/[["subnet-
ids]]"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [

```

```

        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra>DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}",
        "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/
data-source/*"
    ]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/
{{index-id}}"
}
]
}

```

の使用中に Amazon Kendra が Amazon S3 バケットにアクセスできるようにするオプションのロールポリシーで Amazon VPC、アクセス AWS KMS 許可が有効になっています。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Action": [
                "s3:GetObject"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:s3:::{{bucket-name}}/*"
            ],
            "Effect": "Allow"
        },
        {

```

```

    "Action": [
      "s3:ListBucket"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::{{bucket-name}}"
    ],
    "Effect": "Allow"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/{{key-id}}"
    ],
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "s3.{{your-region}}.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:CreateNetworkInterface"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:subnet/[[subnet-ids]]",
      "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:security-group/
[[security-group]]"
    ]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "ec2:CreateNetworkInterface"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
    "Condition": {
      "StringLike": {

```



```

        "aws:RequestTag/AWS_KENDRA": "kendra_{{your-account-id}}_{{index-
id}}_{{data-source-id}}_*"
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:CreateTags"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
    "Condition": {
        "StringEquals": {
            "ec2:CreateAction": "CreateNetworkInterface"
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:DescribeSubnets"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:DescribeNetworkInterfaces"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "ec2:CreateNetworkInterfacePermission"
    ],
    "Resource": "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:network-
interface/*",
    "Condition": {
        "StringEquals": {
            "ec2:AuthorizedService": "kendra.amazonaws.com"
        },
        "ArnEquals": {

```

```

        "ec2:Subnet": [
            "arn:aws:ec2:{{your-region}}:{{your-account-id}}:subnet/[[subnet-ids]]"
        ]
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:PutPrincipalMapping",
            "kendra:DeletePrincipalMapping",
            "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
            "kendra:DescribePrincipalMapping"
        ],
        "Resource": [
            "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}",
            "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"
        ]
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:BatchPutDocument",
            "kendra:BatchDeleteDocument"
        ],
        "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
    }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {

```

```

        "Effect": "Allow",
        "Principal": {
            "Service": "kendra.amazonaws.com"
        },
        "Action": "sts:AssumeRole"
    }
]
}

```

複数のアカウントで Amazon S3 を使用するためのポリシー

Amazon S3 バケットが Amazon Kendra インデックスに使用するアカウントとは異なるアカウントにある場合は、アカウント間でバケットを使用するポリシーを作成できます。

Amazon S3 バケットが Amazon Kendra インデックスとは異なるアカウントにある場合に、バケットをデータソースとして使用するロールポリシー。なお `s3:PutObject` および `s3:PutObjectAcl` はオプションであり、[アクセス制御リストに設定ファイルを含めたい場合](#)に使用してください。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::$bucket-in-other-account/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Action": [
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::$bucket-in-other-account/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    }
  ]
}

```

```

    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kendra:$your-region:$your-account-id:index/$index-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:PutObject",
        "s3:PutObjectAcl"
      ],
      "Resource": "arn:aws:s3:::$bucket-in-other-account/*"
    }
  ]
}

```

Amazon S3 データソースロールがアカウント間でバケットにアクセスできるようにする Amazon S3 バケットポリシー。なお s3:PutObject および s3:PutObjectAcl はオプションであり、[アクセス制御リストに設定ファイルを含めたい場合](#)に使用してください。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "$kendra-s3-connector-role-arn"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:PutObject",
        "s3:PutObjectAcl"
      ]
    }
  ]
}

```

```

    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:s3:::$bucket-in-other-account/*"
    ]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "AWS": "$kendra-s3-connector-role-arn"
    },
    "Action": "s3:ListBucket",
    "Resource": "arn:aws:s3:::$bucket-in-other-account"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Web Crawler データソースの Amazon Kendra ロール

Amazon Kendra Web Crawler を使用する場合は、次のポリシーでロールを指定します。

- 基本認証でバックアップされたウェブサイトまたはウェブプロキシサーバーに接続するための認証情報を含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Web クローラーデータソースの使用](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。
- Amazon S3 バケットを使用してシード URLs またはサイトマップのリストを保存する場合は、Amazon S3 バケットへのアクセス許可を含めます。

Note

Web Amazon Kendra Crawler データソースは、を介して Amazon Kendra に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    ],
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
  }
]
}

```

シード URLs またはサイトマップを Amazon S3 バケットに保存する場合は、このアクセス許可をロールに追加する必要があります。

```

{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "s3:GetObject"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [

```

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "Service": "kendra.amazonaws.com"
  },
  "Action": "sts:AssumeRole"
}
```

IAM Box データソースの ロール

Box を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- シー AWS Secrets Manager クレットにアクセスして Slack を認証するアクセス許可。
- Box コネクタに必要なパブリック API アクションの呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping、および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Box データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:{{secret-id}}"
      ]
    }
  ]
}
```



```

    ]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[key-id]"
    ],
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:PutPrincipalMapping",
      "kendra:DeletePrincipalMapping",
      "kendra:ListGroupsOlderThan0orderingId",
      "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
  }
]

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Confluence データソースの ロール

IAM Confluence Connector v1.0 の ロール

Confluence サーバーをデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- Confluence への接続に必要な認証情報を含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容の詳細については、「[Confluence データソース](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスタークー (CMK) を使用して、 に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。

Note

Confluence データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
    }
  ]
}
```

VPC を使用している場合は、必要なリソース Amazon Kendra へのアクセスを許可するポリシーを指定します。必要なポリシーについては「[データソースおよび VPC の IAM ロール](#)」を参照してください。

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Confluence Connector v2.0 の ロール

Confluence コネクタ v2.0 データソース用には、以下のようなポリシーを提供します。

- Confluence の認証情報を含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容の詳細については、「[Confluence データソース](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、 に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 AWS Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。

また、 がロールを引き受けることを許可する信頼ポリシー Amazon Kendra をアタッチする必要があります。

Note

Confluence データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

が Confluence に接続 Amazon Kendra できるようにするロールポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra>DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id",
      "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id/data-source/*"
    ]
  }
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Dropbox データソースの ロール

Dropbox を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Dropbox を認証するアクセス許可。
- Dropbox コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。

- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Dropbox データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[[key-id]]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
```

```

    "kendra:DescribePrincipalMapping"
  ],
  "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
},
{"Effect": "Allow",
 "Action": [
   "kendra:BatchPutDocument",
   "kendra:BatchDeleteDocument"
 ],
 "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Drupal データソースの ロール

Drupal を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- Drupal を認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Drupal コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。

- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Drupal データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[{{key_id}}]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ],
  {
    "Effect": "Allow",
```

```

    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
        "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"],
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:BatchPutDocument",
            "kendra:BatchDeleteDocument"
        ],
        "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
    }
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を使用することを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "kendra.amazonaws.com"
            },
            "Action": "sts:AssumeRole"
        }
    ]
}

```

IAM GitHub データソースの ロール

GitHub を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして GitHub を認証するアクセス許可。
- GitHub コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

GitHub データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[[key-id]]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```

    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:PutPrincipalMapping",
      "kendra:DeletePrincipalMapping",
      "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
      "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を利用することを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

```
}
```

IAM Gmail データソースの ロール

Gmail を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Gmail を認証するアクセス許可。
- Gmail コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Gmail データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[[key-id]]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
```

```

        "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
    ]
}
},
{"Effect": "Allow",
 "Action": [
     "kendra:PutPrincipalMapping",
     "kendra:DeletePrincipalMapping",
     "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
     "kendra:DescribePrincipalMapping"
 ],
 "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/
{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-
id}}/data-source/*"]
},
{"Effect": "Allow",
 "Action": [
     "kendra:BatchPutDocument",
     "kendra:BatchDeleteDocument"
 ],
 "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/
{{index-id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を利用することを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

```
}
```

IAM Google Drive データソースの ロール

Google Workspace Drive データソースを使用する場合は、サイトへの接続に必要なアクセス許可を持つロールを Amazon Kendra 付与します。具体的には次のとおりです。

- Google Drive サイトへの接続に必要なクライアントアカウントの E メール、管理者アカウントの E メール、プライベートキーを含む AWS Secrets Manager シークレットを取得および復号するアクセス許可。シークレットの内容の詳細については、「[Google Drive データソース](#)」を参照してください。
- [BatchPutDocument API](#) と [BatchDeleteDocument API](#) を使用する許可。

Note

Google Drive データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

次の IAM ポリシーは、必要なアクセス許可を提供します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```


IAM IBM DB2 データソースの ロール

Confluence サーバーをデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- シー AWS Secrets Manager クレットにアクセスして IBM DB2 データソースインスタンスを認証するアクセス許可。
- IBM DB2 データソースコネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

IBM DB2 データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[[secret_id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[[key_id]]"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.*.amazonaws.com"
        ]
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
      ],
      "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
        "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
    }
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },

```

```

        "Action": "sts:AssumeRole"
    }
}
}

```

IAM Jira データソースの ロール

Jira を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Jira を認証するアクセス許可。
- Jira コネクタに必要なパブリック API アクションの呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Jira データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ]
    }
  ]
}

```

```

    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[{{key-id}}]"
    ],
    "Condition": {
        "StringLike": {
            "kms:ViaService": [
                "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",

```

```
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "Service": "kendra.amazonaws.com"
    },
    "Action": "sts:AssumeRole"
  }
]
```

IAM Microsoft Exchange データソースの ロール

Microsoft Exchange データソースを使用する場合は、サイトへの接続に必要なアクセス許可を持つロールを Amazon Kendra に提供します。具体的には次のとおりです。

- Microsoft Exchange サイトへの接続に必要なアプリケーション ID と AWS Secrets Manager シークレットキーを含むシークレットを取得および復号するアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Microsoft Exchange データソース](#)」を参照してください。
- [BatchPutDocument API](#) と [BatchDeleteDocument API](#) を使用する許可。

Note

Microsoft Exchange データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

次の IAM ポリシーは、必要なアクセス許可を提供します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

    "secretsmanager:GetSecretValue"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
  ]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
}]
}

```

インデックスを作成するユーザーのリストを Amazon S3 バケットに保存する場合は、S3 GetObject オペレーションを使用するアクセス許可も指定する必要があります。次の IAM ポリシーで、必要な許可が提供されます。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",

```

```

"Statement": [
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "secretsmanager:GetSecretValue"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
  ]
},
{
  "Action": [
    "s3:GetObject"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
  ],
  "Effect": "Allow"
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/[key-ids]"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.your-region.amazonaws.com",
        "s3.your-region.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
}
]

```

```
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Microsoft OneDrive データソースの ロール

Microsoft OneDrive データソースを使用する場合は、サイトへの接続に必要なアクセス許可を持つロールを Amazon Kendra に提供します。具体的には次のとおりです。

- OneDrive サイトへの接続に必要なアプリケーション ID とシークレットキー AWS Secrets Manager を含むシークレットを取得および復号するアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Microsoft OneDrive データソース](#)」を参照してください。
- [BatchPutDocument API](#) と [BatchDeleteDocument API](#) を使用する許可。

Note

Microsoft OneDrive データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

次の IAM ポリシーは、必要なアクセス許可を提供します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
    }
  ]
}
```

インデックスを作成するユーザーのリストを Amazon S3 バケットに保存する場合は、S3 GetObject オペレーションを使用するアクセス許可も指定する必要があります。次の IAM ポリシーで、必要な許可が提供されます。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/[key-ids]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.your-region.amazonaws.com",
            "s3.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```

    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Microsoft SharePoint データソースの ロール

IAM SharePoint Connector v1.0 の ロール

Microsoft SharePoint v1.0 をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーを持つロールを提供します。

- SharePoint サイトのユーザー名とパスワードを含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Microsoft SharePoint データソース](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、 に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 AWS Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。
- SharePoint サイトとの通信に使用される SSL 証明書を含む Amazon S3 バケットへのアクセス許可。

また、 がロールを引き受けることを許可する信頼ポリシー Amazon Kendra をアタッチする必要があります。

Note

Microsoft SharePoint データソースは、 Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、 [追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

        "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
    ]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
    ],
    "Condition": {
        "StringLike": {
            "kms:ViaService": [
                "kendra.your-region.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "s3:GetObject"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
    ]
}
]
}

```

SharePoint サイトとの通信に使用される SSL 証明書を含む Amazon S3 バケットを暗号化している場合は、キー Amazon Kendra へのアクセスを許可するポリシーを指定します。

JSON

```
{
```

```
"Version": "2012-10-17",
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
    ]
  }
]
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM SharePoint Connector v2.0 の ロール

Microsoft SharePoint Connector v2.0 をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーを持つロールを提供します。

- SharePoint サイトの認証情報を含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Microsoft SharePoint データソース](#)」を参照してください。

- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、 に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 AWS Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。
- SharePoint サイトとの通信に使用される SSL 証明書を含む Amazon S3 バケットへのアクセス許可。

また、 がロールを引き受けることを許可する信頼ポリシー Amazon Kendra をアタッチする必要があります。

Note

Microsoft SharePoint データソースは、 Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、 [追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
        ]
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id",
        "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id/data-source/*"
      ]
    },
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/key-name"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
      ],
      "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:CreateNetworkInterface"
      ],
      "Resource": [

```



```

        "arn:aws:ec2:your-region:your-account-id:subnet/subnet-ids",
        "arn:aws:ec2:your-region:your-account-id:security-group/security-group"
    ],
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:CreateNetworkInterface"
        ],
        "Resource": "arn:aws:ec2:region:account-id:network-interface/*",
        "Condition": {
            "StringLike": {
                "aws:RequestTag/AWS_KENDRA": "kendra_your-account-id_index-id_*"
            }
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:CreateTags"
        ],
        "Resource": "arn:aws:ec2:your-region:your-account-id:network-interface/*",
        "Condition": {
            "StringEquals": {
                "ec2:CreateAction": "CreateNetworkInterface"
            }
        }
    },
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:CreateNetworkInterfacePermission"
        ],
        "Resource": "arn:aws:ec2:your-region:your-account-id:network-interface/*",
        "Condition": {
            "StringLike": {
                "aws:ResourceTag/AWS_KENDRA": "kendra_your-account-id_index-id_*"
            }
        }
    },
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [

```

```

        "ec2:DescribeNetworkInterfaces",
        "ec2:DescribeAvailabilityZones",
        "ec2:DescribeNetworkInterfaceAttribute",
        "ec2:DescribeVpcs",
        "ec2:DescribeRegions",
        "ec2:DescribeNetworkInterfacePermissions",
        "ec2:DescribeSubnets"
    ],
    "Resource": "*"
}
]
}
```

SharePoint サイトとの通信に使用される SSL 証明書を含む Amazon S3 バケットを暗号化している場合は、キー Amazon Kendra へのアクセスを許可するポリシーを指定します。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:youraccount-id:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "Service": "kendra.amazonaws.com"
    },
    "Action": "sts:AssumeRole"
  }
]
```

IAM Microsoft SQL Server データソースの ロール

Microsoft SQL Server をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Microsoft SQL Server インスタンスを認証するアクセス許可。
- Microsoft SQL Server コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Microsoft SQL Server データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
    ]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[{{key_id}}]"
    ],
    "Condition": {
        "StringLike": {
            "kms:ViaService": [
                "secretsmanager.*.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
        "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"
    ],
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:BatchPutDocument",
            "kendra:BatchDeleteDocument"
        ],
        "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
    }
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Microsoft Teams データソースの ロール

Microsoft Teams データソースを使用する場合は、サイトへの接続に必要なアクセス許可を持つロールを Amazon Kendra に提供します。具体的には次のとおりです。

- Microsoft Teams への接続に必要なクライアント ID とクライアント AWS Secrets Manager シークレットを含むシークレットを取得および復号するアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Microsoft Teams データソース](#)」を参照してください。

Note

Microsoft Teams データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

次の IAM ポリシーは、必要なアクセス許可を提供します。

JSON

```
{
```

```
"Version": "2012-10-17",
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "secretsmanager:GetSecretValue"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:secretsmanager:your-region:client-id:secret:secret-id"
    ]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
    ],
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
  }
]
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Microsoft Yammer データソースの ロール

Microsoft Yammer データソースを使用する場合は、サイトへの接続に必要なアクセス許可を持つロールを Amazon Kendra に提供します。具体的には次のとおりです。

- Microsoft Yammer サイトへの接続に必要なアプリケーション ID とシークレットキー AWS Secrets Manager を含むシークレットを取得および復号するアクセス許可。シークレットの内容に関する詳細は、「[Microsoft Yammer データソース](#)」を参照してください。
- [BatchPutDocument API](#) と [BatchDeleteDocument API](#) を使用する許可。

 Note

Microsoft Yammer データソースは、Amazon Kendra を介してに接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

次の IAM ポリシーは、必要なアクセス許可を提供します。

JSON

```
{
```

```

"Version": "2012-10-17",
"Statement": [
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "secretsmanager:GetSecretValue"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
  ]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
  ],
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
}]
}

```

インデックスを作成するユーザーのリストを Amazon S3 バケットに保存する場合は、S3 GetObject オペレーションを使用するアクセス許可も指定する必要があります。次の IAM ポリシーで、必要な許可が提供されます。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/[key-ids]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.your-region.amazonaws.com",
            "s3.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
}]
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM MySQL データソースの ロール

My SQL をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして My SQL データソースインスタンスを認証するアクセス許可。
- My SQL データソースコネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

 Note

MySQL データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[{{key_id}}]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",

```

```

    "kendra:DescribePrincipalMapping"
  ],
  "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
    "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kendra:BatchPutDocument",
    "kendra:BatchDeleteDocument"
  ],
  "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Oracle データソースの ロール

Oracle をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして Oracle データソースインスタンスを認証するアクセス許可。
- Oracle データソースコネクタに必要なパブリック API アクションの呼び出し許可。

- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Oracle データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[{{key_id}}]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ],
  {
    "Effect": "Allow",
```

```

    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra>DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
        "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"],
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:BatchPutDocument",
            "kendra:BatchDeleteDocument"
        ],
        "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
    }
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を使用することを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "kendra.amazonaws.com"
            },
            "Action": "sts:AssumeRole"
        }
    ]
}

```

IAM PostgreSQL データソースの ロール

PostgreSQL をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- AWS Secrets Manager シークレットにアクセスして PostgreSQL データソースインスタンスを認証するアクセス許可。
- PostgreSQL データソースコネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

PostgreSQL データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{region}}:{{account_id}}:secret:[{{secret_id}}]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{region}}:{{account_id}}:key/[{{key_id}}]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.*.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```

    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:PutPrincipalMapping",
      "kendra:DeletePrincipalMapping",
      "kendra:ListGroupsWithOrderingId",
      "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}",
      "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}/data-source/*"]
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{region}}:{{account_id}}:index/{{index_id}}"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```


IAM Quip データソースの ロール

Quip を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- Quip を認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Quip コネクタに必要なパブリック API アクションの呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

を介して Quip データソースを に接続できます Amazon Kendra Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[[key-id]]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
```

```

        "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
        ]
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{your-index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{your-index-id}}/data-source/*"]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "kendra.amazonaws.com"
            },

```

```

        "Action": "sts:AssumeRole"
    }
}
}

```

IAM Salesforce データソースの ロール

Salesforce をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- Salesforce サイトのユーザー名とパスワードを含む AWS Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容の詳細については、「[Salesforce データソース](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、 に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。

Note

Salesforce データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {

```

```

    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
    ],
    "Condition": {
        "StringLike": {
            "kms:ViaService": [
                "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:account-id:index/index-id"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra を許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "kendra.amazonaws.com"
            },
            "Action": "sts:AssumeRole"
        }
    ]
}

```

```
}
```

IAM ServiceNow データソースの ロール

ServiceNow をデータソースとして使用する場合は、以下のようなポリシーでロールを指定します。

- ServiceNow サイトのユーザー名とパスワードを含む Secrets Manager シークレットへのアクセス許可。シークレットの内容の詳細については、「[ServiceNow データソース](#)」を参照してください。
- AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して、 に保存されているユーザー名とパスワードシークレットを復号するアクセス許可 Secrets Manager。
- インデックスを更新するために BatchPutDocument および BatchDeleteDocument オペレーションを使用する許可。

Note

Amazon Kendra を介して ServiceNow データソースを に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:your-region:your-account-id:secret:secret-id"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
    ],
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "kms:ViaService": [
          "secretsmanager.your-region.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

IAM Slack データソースの ロール

Slack を使用する場合、次のポリシーでロールを提供します。

- シー AWS Secrets Manager クレットにアクセスして Slack を認証するアクセス許可。
- Slack コネクタに必要なパブリック API アクションの呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Amazon Kendra 経由で Slack データソースを に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{account-id}}:key/[[key-id]]"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
```

```

        "kms:ViaService": [
            "secretsmanager.{{region}}.amazonaws.com"
        ]
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:PutPrincipalMapping",
        "kendra:DeletePrincipalMapping",
        "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
        "kendra:DescribePrincipalMapping"
    ],
    "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
}]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
    "Version": "2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "kendra.amazonaws.com"
            },

```



```
        "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM Zendesk データソースの ロール

Zendesk を使用する場合、以下のようなポリシーでロールを提供します。

- Zendesk Suite を認証するためにシー AWS Secrets Manager クレットにアクセスするアクセス許可。
- Zendesk コネクタに必要なパブリック API の呼び出し許可。
- BatchPutDocument、BatchDeleteDocument、PutPrincipalMapping、DeletePrincipalMapping および ListGroupsOlderThanOrderingId API を呼び出す許可。

Note

Zendesk データソースは、Amazon Kendra を介して に接続できます Amazon VPC。を使用している場合は Amazon VPC、[追加のアクセス許可](#)を追加する必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "secretsmanager:GetSecretValue"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:secretsmanager:{{your-region}}:{{your-account-id}}:secret:
[[secret-id]]"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
```

```

    "Action": [
        "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kms:{{your-region}}:{{your-account-id}}:key/[key-id]"
    ],
    "Condition": {
        "StringLike": {
            "kms:ViaService": [
                "secretsmanager.{{your-region}}.amazonaws.com"
            ]
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:PutPrincipalMapping",
            "kendra:DeletePrincipalMapping",
            "kendra:ListGroupsOlderThanOrderingId",
            "kendra:DescribePrincipalMapping"
        ],
        "Resource": ["arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}", "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}/data-source/*"]
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "kendra:BatchPutDocument",
            "kendra:BatchDeleteDocument"
        ],
        "Resource": "arn:aws:kendra:{{your-region}}:{{your-account-id}}:index/{{index-id}}"
    }
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

Virtual Private Cloud (VPC) IAM ロール

Virtual Private Cloud (VPC) を使用してデータソースに接続する場合は、次の追加のアクセス許可を提供する必要があります。

VPC IAM ロール

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "ec2:CreateNetworkInterface",
    "ec2:DeleteNetworkInterface"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:ec2:{{region}}:{{account_id}}:subnet/[{{subnet_ids}}]",
    "arn:aws:ec2:{{region}}:{{account_id}}:security-group/[{{security_group}}]"
  ]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "ec2:CreateNetworkInterface",
    "ec2:DeleteNetworkInterface"
  ],
  "Resource": "arn:aws:ec2:{{region}}:{{account_id}}:network-interface/*",
  "Condition": {
```

```

        "StringLike": {
            "aws:RequestTag/AWS_KENDRA": "kendra_{{account_id}}_{{index_id}}_*"
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:CreateTags"
        ],
        "Resource": "arn:aws:ec2:{{region}}:{{account_id}}:network-interface/*",
        "Condition": {
            "StringEquals": {
                "ec2:CreateAction": "CreateNetworkInterface"
            }
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:CreateNetworkInterfacePermission"
        ],
        "Resource": "arn:aws:ec2:{{region}}:{{account_id}}:network-interface/*",
        "Condition": {
            "StringLike": {
                "aws:ResourceTag/AWS_KENDRA": "kendra_{{account_id}}_{{index_id}}_*"
            }
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ec2:DescribeNetworkInterfaces",
            "ec2:DescribeAvailabilityZones",
            "ec2:DescribeNetworkInterfaceAttribute",
            "ec2:DescribeVpcs",
            "ec2:DescribeRegions",
            "ec2:DescribeNetworkInterfacePermissions",
            "ec2:DescribeSubnets"
        ],
        "Resource": "*"
    }
}

```

```
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM よくある質問 (FAQsの ロール

[CreateFaq](#) API を使用して質問と回答をインデックスにロードする場合は、ソースファイルを含む Amazon S3 バケットへのアクセス権を IAM ロール Amazon Kendra に付与する必要があります。ソースファイルが暗号化されている場合は、AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用してファイルを復号するためのアクセス許可を提供する必要があります。

IAM FAQsの ロール

Amazon Kendra が バケットにアクセス Amazon S3 するために必要なロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```

        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ]
    }
  ]
}

```

Amazon Kendra がカスタマーマスターキー (CMK) を使用して AWS KMS Amazon S3 バケット内のファイルを復号できるようにするオプションのロールポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ],
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:ViaService": [
            "kendra.your-region.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

IAM クエリ提案の ロール

Amazon S3 ファイルをクエリ提案ブロックリストとして使用するときは、Amazon S3 ファイルと Amazon S3 バケットへのアクセス許可を持つロールを指定します。バケット内のブロックリストテキストファイル (Amazon S3 ファイル) Amazon S3 が暗号化されている場合は、AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用してドキュメントを復号化するアクセス許可を提供する必要があります。

IAM クエリ提案の ロール

Amazon Kendra が Amazon S3 ファイルをクエリ提案ブロックリストとして使用するために必要なロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
      ]
    }
  ]
}
```

```
    ]
  }
]
}
```

Amazon Kendra がカスタマーマスターキー (CMK) を使用して AWS KMS Amazon S3 バケット内のドキュメントを復号できるようにするオプションのロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```



```
}  
]  
}
```

IAM ユーザーとグループのプリンシパルマッピング用の ロール

[PutPrincipalMapping](#) API を使用してユーザーをグループにマッピングし、検索結果をユーザーコンテキストでフィルタリングするには、グループに属するユーザーまたはサブグループのリストを提供する必要があります。リストが 1 つのグループの 1,000 人を超えるユーザーまたはサブグループである場合は、リストの Amazon S3 ファイルと Amazon S3 バケットにアクセスする権限を持つロールを指定する必要があります。Amazon S3 バケット内のリストのテキストファイル (Amazon S3 ファイル) が暗号化されている場合は、AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用してドキュメントを復号化するアクセス許可を付与する必要があります。

IAM プリンシパルマッピングの ロール

Amazon Kendra が Amazon S3 ファイルをグループに属するユーザーとサブグループのリストとして使用するのに必要なロールポリシー。

JSON

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Effect": "Allow",  
      "Action": [  
        "s3:GetObject"  
      ],  
      "Resource": [  
        "arn:aws:s3:::bucket-name/*"  
      ]  
    }  
  ]  
}
```

Amazon Kendra がカスタマーマスターキー (CMK) を使用して AWS KMS Amazon S3 バケット内のドキュメントを復号できるようにするオプションのロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
      ]
    }
  ]
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

信頼ポリシーには `aws:sourceAccount` と `aws:sourceArn` を含めることをお勧めします。これにより、アクセス許可が制限され、`aws:sourceAccount` および `aws:sourceArn` が `sts:AssumeRole` アクションの IAM ロールポリシーで指定されているものと同じかどうか安全にチェックされます。これにより、権限のないエンティティが IAM ロールとそのアクセス許可にア

クセスできなくなります。詳細については、[混乱した代理問題](#)に関する AWS Identity and Access Management ガイドを参照してください。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": [
          "kendra.amazonaws.com"
        ]
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "your-account-id"
        },
        "StringLike": {
          "aws:SourceArn": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index-id/*"
        }
      }
    }
  ]
}
```

IAM の ロール AWS IAM Identity Center

[UserGroupResolutionConfiguration](#) オブジェクトを使用して AWS IAM Identity Center ID ソースからグループとユーザーのアクセスレベルを取得する場合は、アクセス許可を持つロールを指定する必要があります IAM Identity Center。

IAM の ロール AWS IAM Identity Center

にアクセスを許可するために必要なロールポリシー Amazon Kendra IAM Identity Center。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "sso-directory:SearchUsers",
        "sso-directory:ListGroupsForUser",
        "sso-directory:DescribeGroups",
        "sso:ListDirectoryAssociations"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    },
    {
      "Sid": "iamPassRole",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "iam:PassRole",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "iam:PassedToService": [
            "kendra.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
```

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "Service": "kendra.amazonaws.com"
  },
  "Action": "sts:AssumeRole"
}
]
```

IAMAmazon Kendra エクスペリエンスの ロール

[CreateExperience](#) API または [UpdateExperience](#) API を使用して、検索アプリケーションを作成または更新する場合、必要なオペレーションおよび IAM Identity Center へのアクセス許可を持つロールを提供する必要があります。

IAMAmazon Kendra 検索エクスペリエンスの ロール

Amazon Kendra がユーザーおよびグループ情報を保存するQueryオペレーション、QuerySuggestionsオペレーション、SubmitFeedbackオペレーション、および IAM Identity Center にアクセスするために必要なロールポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "AllowsKendraSearchAppToCallKendraApi",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:GetQuerySuggestions",
        "kendra:Query",
        "kendra:DescribeIndex",
        "kendra:ListFaqs",
        "kendra:DescribeDataSource",
        "kendra:ListDataSources",
        "kendra:DescribeFaq",
        "kendra:SubmitFeedback"
      ],
    }
  ],
}
```

```

    "Resource": [
      "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id"
    ],
  },
  {
    "Sid": "AllowKendraSearchAppToDescribeDataSourcesAndFaq",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:DescribeDataSource",
      "kendra:DescribeFaq"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id/data-  
source/data-source-id",
      "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index/index-id/faq/faq-id"
    ],
  },
  {
    "Sid": "AllowKendraSearchAppToCallSSODescribeUsersAndGroups",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "sso-directory:ListGroupsForUser",
      "sso-directory:SearchGroups",
      "sso-directory:SearchUsers",
      "sso-directory:DescribeUser",
      "sso-directory:DescribeGroup",
      "sso-directory:DescribeGroups",
      "sso-directory:DescribeUsers",
      "sso:ListDirectoryAssociations"
    ],
    "Resource": [
      "*"
    ],
  },
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "kms:ViaService": [
        "kendra.your-region.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

信頼ポリシーには `aws:sourceAccount` と `aws:sourceArn` を含めることをお勧めします。これにより、アクセス許可が制限され、`aws:sourceAccount` および `aws:sourceArn` が `sts:AssumeRole` アクションの IAM ロールポリシーで指定されているものと同じかどうか安全にチェックされます。これにより、権限のないエンティティが IAM ロールとそのアクセス許可にアクセスできなくなります。詳細については、[混乱した代理問題](#)に関する AWS Identity and Access Management ガイドを参照してください。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": [
          "kendra.amazonaws.com"
        ]
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {

```

```

        "aws:SourceAccount": "your-account-id"
      },
      "StringLike": {
        "aws:SourceArn": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index-id/*"
      }
    }
  }
]
}

```

IAM カスタムドキュメントエンリッチメントの ロール

[CustomDocumentEnrichmentConfiguration](#) オブジェクトを使用してドキュメントのメタデータとコンテンツの高度な変更を適用する場合、PreExtractionHookConfiguration および/または PostExtractionHookConfiguration の実行に必要な許可を持つロールを提供する必要があります。PreExtractionHookConfiguration および/または PostExtractionHookConfiguration の Lambda 関数を設定して、取り込みプロセス中にドキュメントのメタデータとコンテンツの高度な変更を適用します。Amazon S3 バケットのサーバー側の暗号化を有効にする場合は、AWS KMS カスタマーマスターキー (CMK) を使用して Amazon S3 バケットに保存されているオブジェクトを暗号化および復号化するアクセス許可を付与する必要があります。

IAM カスタムドキュメントエンリッチメントの ロール

がバケット Amazon Kendra の暗号化PostExtractionHookConfigurationを使用して PreExtractionHookConfigurationおよび Amazon S3 を実行するために必要なロールポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Action": [
      "s3:GetObject",
      "s3:PutObject"
    ],
    "Resource": [

```



```

    "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
  ],
  "Effect": "Allow"
},
{
  "Action": [
    "s3:ListBucket"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:s3:::bucket-name"
  ],
  "Effect": "Allow"
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt",
    "kms:GenerateDataKey"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:kms:your-region:your-account-id:key/key-id"
  ]
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "lambda:InvokeFunction"
  ],
  "Resource": "arn:aws:lambda:your-region:your-account-id:function:lambda-function"
}]
}

```

Amazon S3 バケット Amazon Kendra の暗号化PostExtractionHookConfigurationなしでPreExtractionHookConfigurationと の実行を許可するオプションのロールポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{

```

```

    "Action": [
      "s3:GetObject",
      "s3:PutObject"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::bucket-name/*"
    ],
    "Effect": "Allow"
  },
  {
    "Action": [
      "s3:ListBucket"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::bucket-name"
    ],
    "Effect": "Allow"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "lambda:InvokeFunction"
    ],
    "Resource": "arn:aws:lambda:your-region:your-account-id:function:lambda-function"
  }
]
}

```

がロールを引き受け Amazon Kendra ることを許可する信頼ポリシー。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}

```

```

    }
  ]
}

```

信頼ポリシーには `aws:sourceAccount` と `aws:sourceArn` を含めることをお勧めします。これにより、アクセス許可が制限され、`aws:sourceAccount` および `aws:sourceArn` が `sts:AssumeRole` アクションの IAM ロールポリシーで指定されているものと同じかどうか安全にチェックされます。これにより、権限のないエンティティが IAM ロールとそのアクセス許可にアクセスできなくなります。詳細については、[混乱した代理問題](#)に関する AWS Identity and Access Management ガイドを参照してください。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": [
          "kendra.amazonaws.com"
        ]
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "your-account-id"
        },
        "StringLike": {
          "aws:SourceArn": "arn:aws:kendra:your-region:your-account-id:index-id/*"
        }
      }
    }
  ]
}

```

デプロイ Amazon Kendra

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

ウェブサイト に Amazon Kendra 検索をデプロイするときは、React で使用できるソースコードを提供して、アプリケーションの使用を開始できます。ソースコードは、改定版 MIT ライセンスの下で無償で提供されます。それをそのまま使うことも、自分のニーズに合わせて変更することもできます。提供されている React アプリは、作業の開始に役立つサンプルです。本番環境に対応したアプリではありません。

コードなしで検索アプリケーションをデプロイし、アクセス制御付きの検索ページにエンドポイント URL を生成する方法については、[「Amazon Kendra Experience Builder」](#)を参照してください。

次のコード例では、既存の React ウェブアプリケーションに Amazon Kendra 検索を追加します。

- <https://kendrasamples.s3.amazonaws.com/kendrasamples-react-app.zip> - デベロッパーが既存の React ウェブアプリケーションに機能検索エクスペリエンスを組み込むために使用できるサンプルファイル。

例は、Amazon Kendra コンソールの検索ページに基づいてモデル化されています。これらには、検索結果を検索および表示するための同じ機能があります。例全体を使用することも、独自の使用のために機能を 1 つだけ選択することもできます。

Amazon Kendra コンソールで検索ページの 3 つのコンポーネントを表示するには、右側のメニューからコードアイコン (</>) を選択します。各セクションにポインタを置くと、コンポーネントの簡単な説明が表示され、コンポーネントのソースの URL が表示されます。

トピック

- [概要](#)
- [前提条件](#)
- [例をセットアップする](#)

- [メイン検索ページ](#)
- [検索コンポーネント](#)
- [結果コンポーネント](#)
- [ファセットコンポーネント](#)
- [ページ割りコンポーネント](#)
- [コードなしで検索エクスペリエンスを構築する](#)

概要

既存の React アプリケーションにサンプルコードを追加して、検索を有効にします。サンプルコードには、新しい React 開発環境を設定する手順が記載された Readme ファイルが含まれています。サンプルコード内のサンプルデータは、検索のデモンストレーションに使用できます。サンプル内の検索ファイルとコンポーネントは、次のように構成されています。

- メイン検索ページ (Search.tsx) - これは、すべてのコンポーネントを含むメインページです。ここでは、アプリケーションを Amazon Kendra API と統合します。
- 検索バー - これはユーザーが検索語を入力し、検索機能呼び出すコンポーネントです。
- 結果 - これは結果を表示するコンポーネントです Amazon Kendra。提案された回答、よくある質問の結果、推奨ドキュメントの 3 つのコンポーネントがあります。
- ファセット - これは検索結果にファセットを表示するコンポーネントで、ファセットを選択して検索を狭めることができます。
- ページ割り - これは Amazon Kendraからの応答をページ分割するコンポーネントです。

前提条件

開始するには、以下が必要です。

- Node.js と npm が[インストール済み](#)。Node.js バージョン 19 以前が必要です。
- Python 3 または Python 2 が[ダウンロードおよびインストール済み](#)。
- Amazon Kendraへの API コールを実行する [SDK for Java](#) または [AWS SDK for JavaScript](#)。
- 既存の React ウェブアプリケーション。サンプルコードには、必須フレームワーク/ライブラリの使用を含む、新しい React 開発環境を設定する手順が記載された Readme ファイルが含まれています。[React ウェブアプリの作成に関する React ドキュメント](#)のクイックスタート手順に従うこともできます。

- 開発環境で設定されている必要なライブラリと依存関係。サンプルコードには、必要なライブラリとパッケージの依存関係について記載された Readme ファイルが含まれています。sass は必須であり、node-sass は廃止済みであることに注意してください。以前に node-sass をインストールしていた場合は、これをアンインストールしてから sass をインストールしてください。

例をセットアップする

React アプリケーションに Amazon Kendra 検索を追加する完全な手順は、コード例に含まれている Readme ファイルにあります。

kendrasamples-react-app.zip の使用開始方法

1. Node.js と npm のダウンロードとインストールを含め、[前提条件](#) が完了していることを確認してください。
2. kendrasamples-react-app.zip をダウンロードして解凍します。
3. ターミナルを開いて、aws-kendra-example-react-app/src/services/ に進みます。local-dev-credentials.json を開いて認証情報を提供します。このファイルをパブリックリポジトリに追加しないでください。
4. aws-kendra-example-react-app に進み、依存関係を package.json にインストールしてください。npm install を実行します。
5. ローカルサーバーでアプリのデモ版を起動します。npm start を実行します。キーボードで Cmd/Ctrl + C を入力すると、ローカルサーバーを停止できます。
6. ポートまたはホスト (IP アドレスなど) を変更するには、package.json に移動してホストとポートを "start": "HOST=[host] PORT=[port] react-scripts start" に更新します。Windows を使用している場合: "start": "set HOST=[host] && set PORT=[port] && react-scripts start"。
7. ウェブサイトのドメインを登録済みの場合は、アプリ名の後の package.json でこれを指定できます。例えば、"homepage": "https://mywebsite.com" と指定します。新しい依存関係を更新するためには npm install をもう一度実行してから、npm start を実行する必要があります。
8. アプリを構築するには、npm build を実行します。ビルドディレクトリの内容をホスティングプロバイダーにアップロードします。

⚠ Warning

React アプリは本番環境に対応していません。これは、Amazon Kendra 検索用にアプリケーションをデプロイする例です。

メイン検索ページ

メイン検索ページ (Search.tsx) には、すべてのサンプル検索コンポーネントが含まれています。これには、出力用の検索バーコンポーネント、[Query](#) API からのレスポンスを表示する結果コンポーネント、およびレスポンスをページングするためのページ割りコンポーネントが含まれています。

検索コンポーネント

検索コンポーネントには、クエリテキストを入力するためのテキストボックスがあります。onSearch 機能は、メイン機能を Search.tsx で呼び出すフックで、Amazon Kendra [Query](#) API コールを行います。

結果コンポーネント

結果コンポーネントには、Query API からのレスポンスが表示されます。結果は 3 つの別個のエリアに表示されます。

- 提案された回答 - これらは、Query API により返された上位結果です。提案された回答は最大 3 つまで含まれます。レスポンスには、結果タイプ ANSWER があります。
- よくある質問の回答 - これらはレスポンスが返すよくある質問の結果です。よくある質問はインデックスに別々に追加されます。レスポンスには、タイプ QUESTION_ANSWER があります。詳細については、[質問と回答](#)を参照してください。
- 推奨ドキュメント - これらは、レスポンスで Amazon Kendra が返す追加のドキュメントです。Query API からのレスポンスには、DOCUMENT タイプがあります。

結果コンポーネントは、強調表示、タイトル、リンクなどの機能のコンポーネントを共有します。結果コンポーネントが機能するには、共有コンポーネントが存在する必要があります。

ファセットコンポーネント

ファセットコンポーネントには、検索結果で使用可能なファセットが一覧表示されます。各ファセットは、製作者などの特定のディメンションに沿ってレスポンスを分類します。リストからファセットを選択して、検索を特定のファセットに絞り込むことができます。

ファセットを選択すると、コンポーネントによって、ファセットに一致するドキュメントの検索を制限する属性フィルターを使用して Query が呼び出されます。

ページ割りコンポーネント

ページ割りコンポーネントを使用すると、複数のページでの Query API からの検索結果の表示が可能になります。Query API を PageSize および PageNumber パラメータで呼び出し、結果の特定のページを取得します。

コードなしで検索エクスペリエンスを構築する

フロントエンドコードなしで Amazon Kendra 検索アプリケーションを構築およびデプロイできます。Amazon Kendra Experience Builder は、数回のクリックで完全に機能する検索アプリケーションの構築とデプロイを支援し、すぐに検索を開始できます。検索ページをカスタム設計し、検索を調整して、ユーザーのニーズに合わせてエクスペリエンスを調整できます。は、検索ページの一意で完全にホストされたエンドポイント URL Amazon Kendra を生成して、ドキュメントやFAQsの検索を開始します。検索エクスペリエンスの概念実証をすばやく構築し、他のユーザーと共有できます。

ビルダーで使用可能な検索エクスペリエンステンプレートを使用して、検索をカスタマイズします。他のユーザーを招待して検索エクスペリエンスを構築したり、チューニング目的で検索結果を評価したりできます。ユーザーが検索を開始する準備ができたなら、セキュリティで保護されたエンドポイント URL を共有するだけです。

検索 Experience Builder の仕組み

検索エクスペリエンスを構築するための全体的なプロセスを次に示します。

1. 検索エクスペリエンスを作成するには、名前、説明を指定し、検索エクスペリエンスに使用するデータソースを選択します。
2. でユーザーとグループのリストを設定し AWS IAM Identity Center 、検索エクスペリエンスへのアクセス権を割り当てます。自分をエクスペリエンスのオーナーとして含めます。詳細については、[「the section called “検索ページへのアクセスを提供する”」](#)を参照してください。

3. Amazon Kendra Experience Builder を開いて、検索ページを設計および調整します。独自の編集アクセス権または表示検索アクセス権を割り当てた他のユーザーと、検索エクスペリエンスのエンドポイント URL を共有できます。

[CreateExperience](#) API を呼び出して、検索エクスペリエンスを作成および設定します。コンソールを使用する場合は、インデックスを選択し、ナビゲーションメニューで [エクスペリエンス] を選択してエクスペリエンスを設定します。

検索エクスペリエンスを設計してチューニングする

検索エクスペリエンスを作成して設定したら、エンドポイント URL を使用して検索エクスペリエンスを開き、編集アクセス権を持つ所有者としての検索のカスタマイズを開始します。検索ボックスにクエリを入力し、サイドパネルの編集オプションを使用して検索をカスタマイズし、ページに適用する方法を確認します。公開する準備ができたなら、[Publish] (公開) をクリックします。[Switch to live view] (ライブビューに切り替える) をクリックして、検索ページの最新公開バージョンを表示し、[Switch to build mode] (構築モードに切り替える) をクリックして、検索ページを編集またはカスタマイズすることもできます。

以下は、検索エクスペリエンスをカスタマイズする方法です。

フィルター

ファセット検索を追加するか、ドキュメント属性でフィルタリングします。これには、カスタム属性が含まれます。独自の設定済みのメタデータフィールドを使用して、フィルターを追加できます。例えば、各都市のカテゴリでファセット検索を行うには、すべての都市カテゴリを含む `_category` カスタムドキュメント属性を使用します。

提案する回答

機械学習で生成された回答をユーザーのクエリに追加します。例えば、「How difficult is this course?」と入力します。は、コースの難易度を参照するすべてのドキュメントから最も関連性の高いテキストを取得し、最も関連性の高い回答を提案 Amazon Kendra できます。

よくある質問

よくある質問への回答を得るには、よくある質問ドキュメントを追加します。例えば、「何時間で本コースを完了できますか?」とすると、この質問に対する回答を含む FAQ ドキュメントを使用して正しい回答を得ることができます。Amazon Kendra

並べ替え

検索結果のソートを追加して、ユーザーが関連性、作成時刻、最終更新時刻、その他のソート基準で結果を整理できるようにします。

ドキュメント

検索ページでのドキュメントまたは検索結果の表示方法を設定します。ページに表示する結果の数を構成したり、ページ番号などのページ割りを追加したり、ユーザーフィードバックボタンを有効にしたり、検索結果にドキュメントメタデータフィールドを表示する方法を調整したりできます。

言語

言語を選択して、選択した言語で検索結果またはドキュメントをフィルタリングします。

検索ボックス

検索ボックスのサイズとプレースホルダテキストを設定し、クエリ提案を有効にします。

関連性チューニング

ドキュメントメタデータフィールドにブーストを追加して、ユーザーがドキュメントを検索するときにこれらのフィールドに重みを付けます。1 から始まり、10 に徐々に増加する重みを追加できます。テキスト、日付、および数値フィールドの種類をブーストできます。例えば、`_last_updated_at` および `_created_at` の他のフィールドよりも重い、または重要な重みまたは重要度を付けるには、これらのフィールドの重要度に応じて 1~10 の重みを指定します。検索アプリケーションまたはエクスペリエンスごとに異なる関連性チューニング設定を適用できます。

検索ページへのアクセスを提供する

検索エクスペリエンスには IAM Identity Center からアクセスします。検索エクスペリエンスを設定するときは、Identity Center ディレクトリにリストされている他のユーザーに Amazon Kendra 検索ページへのアクセスを許可します。それらのユーザーは、IAM Identity Center で自身の資格情報を使用してサインインし検索ページにアクセスするように導く、E メールを受け取ります。IAM Identity Center は組織レベルまたは AWS Organizations のアカウント所有者レベルでセットアップする必要があります。IAM Identity Center の詳細については、「[Getting started with IAM Identity Center](#)」を参照してください。

検索エクスペリエンスの IAM Identity Center でユーザーアイデンティティを有効にして、API またはコンソールを使用し、閲覧者または所有者アクセス許可を割り当てます。

- 閲覧者: クエリを発行し、検索に関連する提案された回答を受け取り、フィードバックを Amazon Kendra に提供して、検索を改善し続けることができます。
- 所有者: 検索ページのデザインをカスタマイズし、検索をチューニングし、検索アプリケーションを閲覧者として使用できます。コンソールで閲覧者へのアクセスを無効にすることは、現在サポートされていません。

他のユーザーに検索エクスペリエンスへのアクセスを割り当てるには、まず

[ExperienceConfiguration](#) オブジェクトを使用して、IAM Identity Center でユーザー ID を自分の Amazon Kendra エクスペリエンスでアクティブ化します。ユーザー名や E メールアドレスなど、ユーザーの識別子を含むフィールド名を指定します。次に、[AssociateEntitiesToExperience](#) API を使用して、ユーザーのリストに検索エクスペリエンスへのアクセス権を付与し、[AssociatePersonasToEntities](#) API を使用して、アクセス許可を閲覧者または所有者に定義します。[EntityConfiguration](#) オブジェクトを使用して各ユーザーまたはグループを指定し、[EntityPersonaConfiguraton](#) オブジェクトを使用してそのユーザーまたはグループが閲覧者か所有者かを指定します。

コンソールを使用して他のユーザーに検索エクスペリエンスへのアクセス権を割り当てるには、まずエクスペリエンスを作成し、自分のアイデンティティと自分が所有者であることを確認する必要があります。その後、他のユーザーまたはグループを閲覧者または所有者として割り当てることができます。コンソールで、インデックスを選択し、ナビゲーションメニューの [Experiences] (エクスペリエンス) を選択します。エクスペリエンスを作成したら、リストからエクスペリエンスを選択できます。[Access management] (アクセス管理) に移動し、ユーザーまたはグループを閲覧者または所有者として割り当てます。

検索エクスペリエンスの設定

次に、検索エクスペリエンスを構成または作成する例を示します。

Console

Amazon Kendra 検索エクスペリエンスを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインの [Indexes] (インデックス) で、[Experiences] (エクスペリエンス)、[Create experiences] (エクスペリエンスの作成) の順に選択します。
2. [Configure experience] (エクスペリエンスの設定) ページで、エクスペリエンスの名前と説明を入力し、コンテンツソースを選択し、エクスペリエンスの IAM ロールを選択します。IAM ロールの詳細については、[Amazon Kendra 「エクスペリエンスの IAM ロール」](#) を参照してください。

3. [ディレクトリからアイデンティティを確認する] ページで、E メールなどのユーザー ID を選択します。Identity Center ディレクトリがない場合、フルネームと E メールを入力するだけで、Identity Center ディレクトリを作成できます。これには、エクスペリエンスのユーザーとしてのユーザーも含まれ、所有者のアクセス権が自動的に割り当てられます。
4. [Review to open Experience Builder] (確認してエクスペリエンスビルダーを開く) ページで、設定の詳細を確認し、[Create experience and open Experience Builder] (エクスペリエンスを作成し、エクスペリエンスビルダーを開く) をクリックして、検索ページの編集を開始します。

CLI

Amazon Kendra エクスペリエンスの作成方法

```
aws kendra create-experience \  
  --name experience-name \  
  --description "experience description" \  
  --index-id index-id \  
  --role-arn arn:aws:iam::account-id:role/role-name \  
  --configuration '{"ExperienceConfiguration":[{"ContentSourceConfiguration":  
{"DataSourceIds":["data-source-1","data-source-2"]},  
"UserIdentityConfiguration":"identity attribute name"]}]}'  
  
aws kendra describe-experience \  
  --endpoints experience-endpoint-URL(s)
```

Python

Amazon Kendra エクスペリエンスの作成方法

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
import pprint  
import time  
  
kendra = boto3.client("kendra")  
  
print("Create an experience.")  
  
# Provide a name for the experience  
name = "experience-name"  
# Provide an optional description for the experience
```

```
description = "experience description"
# Provide the index ID for the experience
index_id = "index-id"
# Provide the IAM role ARN required for Amazon Kendra experiences
role_arn = "arn:aws:iam:${account-id}:role/${role-name}"
# Configure the experience
configuration = {"ExperienceConfiguration":
    [{
        "ContentSourceConfiguration":{"DataSourceIds":["data-source-1","data-
source-2"]},
        "UserIdentityConfiguration":"identity attribute name"
    ]
}

try:
    experience_response = kendra.create_experience(
        Name = name,
        Description = description,
        IndexId = index_id,
        RoleArn = role_arn,
        Configuration = configuration
    )

    pprint.pprint(experience_response)

    experience_endpoints = experience_response["Endpoints"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the experience.")

    while True:
        # Get the details of the experience, such as the status
        experience_description = kendra.describe_experience(
            Endpoints = experience_endpoints
        )
        status = experience_description["Status"]
        print(" Creating experience. Status: "+status)
        time.sleep(60)
        if status != "CREATING":
            break

except ClientError as e:
    print("%s" % e)
```

```
print("Program ends.")
```

Java

を作成するには Amazon Kendra

```
package com.amazonaws.kendra;

import java.util.concurrent.TimeUnit;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateExperienceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateExperienceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeExperienceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeExperienceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ExperienceStatus;

public class CreateExperienceExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {
        System.out.println("Create an experience");

        String experienceName = "experience-name";
        String experienceDescription = "experience description";
        String indexId = "index-id";
        String experienceRoleArn = "arn:aws:iam::account-id:role/role-name";

        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        CreateExperienceRequest createExperienceRequest = CreateExperienceRequest
            .builder()
            .name(experienceName)
            .description(experienceDescription)
            .roleArn(experienceRoleArn)
            .configuration(
                ExperienceConfiguration
                    .builder()
                    .contentSourceConfiguration(
                        ContentSourceConfiguration(
                            .builder()
                            .dataSourceIds("data-source-1","data-source-2")
                            .build()
                        )
                    )
            )
    }
```

```
        .userIdentityConfiguration(
            UserIdentityConfiguration(
                .builder()
                .identityAttributeName("identity-attribute-name")
                .build()
            )
        ).build()
    ).build();

    CreateExperienceResponse createExperienceResponse =
kendra.createExperience(createExperienceRequest);
    System.out.println(String.format("Experience response %s",
createExperienceResponse));

    String experienceEndpoints = createExperienceResponse.endpoints();

    System.out.println(String.format("Wait for Kendra to create the
experience.", experienceEndpoints));
    while (true) {
        DescribeExperienceRequest describeExperienceRequest =
DescribeExperienceRequest.builder().endpoints(experienceEndpoints).build();
        DescribeExperienceResponse describeExperienceResponse =
kendra.describeExperience(describeExperienceRequest);
        ExperienceStatus status = describeExperienceResponse.status();
        TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
        if (status != ExperienceStatus.CREATING) {
            break;
        }
    }

    System.out.println("Experience creation is complete.");
}
}
```

容量の調整

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra は、インデックスのリソースをキャパシティーユニットで提供します。各キャパシティーユニットは、インデックスの追加リソースを提供します。ドキュメントストレージとクエリには、個別のキャパシティーユニットがあります。GenAI Enterprise Edition および Amazon Kendra Enterprise インデックスにのみキャパシティーユニットを追加できます。デベロッパーエディションのインデックスに容量を追加することはできません。

ドキュメントストレージキャパシティーユニットは、インデックス用に次の追加のストレージを提供します。

- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition – 20,000 件のドキュメントまたは 200MB の抽出されたテキスト。
- Amazon Kendra Enterprise Edition – 100,000 ドキュメントまたは 30 GB のストレージ。

クエリキャパシティーユニットは、インデックス用に次の追加のクエリを提供します。1 秒あたりのクエリは、取得 API とクエリ API 間で共有されます。

- Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition – 1 秒あたり 0.1 クエリ、または 1 日あたり約 8,000 クエリ。
- Amazon Kendra Enterprise Edition – 1 秒あたり 0.1 クエリ、または 1 日あたり約 8,000 クエリ。

各インデックスには、1 キャパシティーユニット (30 GB/200 MB のストレージと 1 秒あたり 0.1 クエリ) に等しい基本容量が付属しています。追加キャパシティーユニットごとに追加料金が発生します。詳細については、[「Amazon Kendra 料金表」](#)を参照してください。

インデックス用のストレージおよびクエリリソースには、最大 100 の追加キャパシティーユニットを追加できます。さらにユニットが必要な場合は、[サポートにお問い合わせ](#)ください。

キャパシティーユニットを 1 日あたり最大 5 回調整して、使用要件に合わせることができます。インデックスに保存されているドキュメントの数を下回るドキュメントのストレージキャパシティーを減らすことはできません。例えば、150,000 のドキュメントを保存する場合、ストレージキャパシティーを 1 追加ユニット未満に減らすことはできません。

インデックスの名前を選択してインデックス設定やその他の情報を開くか、[DescribeIndex](#) API を使用して、インデックスが使用しているリソースをコンソールで表示できます。

Amazon Kendra は、インデックスの容量を超えたときに例外も返します。すべてのドキュメントの抽出合計サイズがインデックスの制限を超えた場合、`ServiceQuotaExceededException` を受け取ります。ドキュメント数がインデックスの制限を超えた場合、各ドキュメントごとに、`InvalidRequest` を受け取ります。1 秒あたりのクエリ数が制限を超えた場合、`ThrottlingException` を受け取ります。制限の詳細については、「[Amazon Kendra のクォータ](#)」を参照してください。

累積クエリは最大 24 時間続きます。

容量の表示

詳細にアクセスするインデックスの名前を選択して、インデックスが Amazon Kendra コンソールで使用しているリソースを表示します。コンソールには使用量のグラフが表示されるため、インデックスが使用するストレージおよびクエリキャパシティーを判断できます。この情報を使用して、キャパシティーの追加計画を立てることができます。

ドキュメントストレージとクエリの使用を表示するには (コンソール)

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/home> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. インデックスのリストから、アクセスするインデックスを選択します。
3. 設定セクションまでスクロールすると、現在のドキュメントストレージとクエリの合計キャパシティーが表示されます。

Amazon Kendra API を使用して容量を表示するには、[DescribeIndex](#) API の `CapacityUnits` パラメータを使用します。

キャパシティの追加および削除

インデックスに追加の容量が必要な場合は、コンソールまたは Amazon Kendra API を使用して追加できます。

ストレージまたはクエリキャパシティーを追加または削除するには (コンソール)

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/home> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. インデックスのリストから、アクセスするインデックスを選択します。
3. [編集] を選択するか、[アクション] ドロップダウンから [編集] を選択します。
4. [次へ] を選択して、プロビジョニングの詳細ページに移動します。
5. ドキュメントストレージやクエリキャパシティーユニットを追加または削除します。
6. 続けて [次へ] を選択してレビューページに移動し、[更新] を選択して変更を保存します。

インデックスのキャパシティーを更新した後、変更が適用されるまで数分かかることがあります。

Amazon Kendra API を使用して容量を追加または削除するには、[UpdateIndex](#) API の CapacityUnits パラメータを使用します。

Amazon Kendra インテリジェントランキングの容量

キャパシティーユニットは、再スコア実行プランの 1 秒あたりの、次の再スコアリクエストを提供します。再スコア実行プランは [Rescore](#) API のプロビジョニングに使用されるリソースです。

- 1 秒あたり 0.01 のリクエストです。

各再スコア実行プランには、1 キャパシティーユニット (0.01 リクエスト/秒) に等しい基本キャパシティーがあります。追加キャパシティーユニットごとに追加料金が発生します。詳細については、「[Amazon Kendra 料金表](#)」を参照してください。

最大 1000 個の追加キャパシティーユニットを再スコア実行プランに追加できます。さらにユニットが必要な場合は、[サポートにお問い合わせ](#)ください。

クエリ提案キャパシティ

[\[query suggestions\]](#) (クエリ提案) の使用時、1 秒あたり 2.5 回の [GetQuerySuggestions](#) コールのベースクエリキャパシティがあります。GetQuerySuggestions キャパシティは、インデックスのプロビジョニングされたクエリキャパシティの 5 倍、または 1 秒あたり 2.5 コールのベースキャパシティのどちらか高い方です。例えば、インデックスのベースキャパシティは 1 秒あたり 0.1 クエリであり、GetQuerySuggestions キャパシティのベースは 1 秒あたり 2.5 コールです。インデックスの 1 秒あたりの合計 0.2 クエリに 1 秒あたり 0.1 クエリを追加すると、GetQuerySuggestions キャパシティは 1 秒あたり 2.5 コール (1 秒あたり 0.2 クエリの場合の 5 倍以上) になります。

Amazon Kendra エクスペリエンスキャパシティ

検索エクスペリエンスのキャパシティ

Amazon Kendra は Query、1 秒あたり 15 リクエスト QuerySuggestions、およびクエリバースト SubmitFeedback の 1 秒あたり 40 リクエストで Amazon Kendra、エクスペリエンスに合わせて、の スロットリングを開始します。150 を超えるクエリキャパシティユニットを持つインデックスの場合、これらの制限は引き続き適用されます。

例えば、インデックスのクエリキャパシティユニットは 150 であるため、検索エクスペリエンスアプリケーションでは 1 秒あたり 15 のリクエストを処理できます。ただし、クエリキャパシティユニットを 200 にスケールしても、検索エクスペリエンスアプリケーションで処理されるのは 1 秒あたり 15 リクエストのみです。クエリキャパシティユニットを 100 にスケールすると、検索エクスペリエンスアプリケーションで処理されるのは 1 秒あたり 10 リクエストのみです。

適応型クエリバースト

Amazon Kendra には、1 クエリキャパシティユニットのプロビジョニングされたベースキャパシティがあります。1 日あたり最大 8,000 クエリを使用し、最小スループットは 1 秒あたり 0.1 クエリ (クエリキャパシティユニットあたり) です。蓄積されたクエリは最長 24 時間持続し、トラフィックの急増にも対応できます。許容されるバーストの量は、その時点でのクラスターの負荷によって異なるため、変化します。ピーク時の負荷レベルに対応できる十分なクエリキャパシティユニットをプロビジョニングします。

プロビジョニングされたスループットを超えるトラフィックの予期しないバーストを処理するアダプティブアプローチは、組み込み Amazon Kendra のアダプティブクエリバーストです。適応型クエリバーストは、Amazon Kendra の Enterprise Edition でのみ使用できます。

アダプティブクエリバーストは、未使用のクエリ容量を適用して予期しないトラフィックを処理できる組み込み機能です。は、Amazon Kendra インデックスにプロビジョニングしたクエリの最大数まで、1 秒ごとにプロビジョニングされたクエリのレートで未使用のクエリを Amazon Kendra 蓄積します。これらの累積クエリは、割り当てられたキャパシティを超える予期しないトラフィックに使用されます。適応型クエリバーストの最適なパフォーマンスは、合計インデックスサイズ、クエリの複雑さ、累積された未使用のクエリ、インデックスの全体的なロードなど、いくつかの要因によって異なります。バーストキャパシティを正確に測定するには、独自のロードテストを実行することをお勧めします。

入門

このセクションでは、データソースを作成し、ドキュメントを Amazon Kendra インデックスに追加する方法について説明します。手順については、AWS コンソール AWS CLI、を使用する Python プログラム AWS SDK for Python (Boto3)、およびを使用する Java プログラムについて説明します AWS SDK for Java。

トピック

- [前提条件](#)
- [Amazon Kendra コンソールの開始方法](#)
- [開始方法 \(AWS CLI\)](#)
- [開始方法 \(AWS SDK for Python \(Boto3\)\)](#)
- [開始方法 \(AWS SDK for Java\)](#)
- [Amazon S3 データソースの開始方法 \(コンソール\)](#)
- [MySQL データベースデータソースの開始方法 \(コンソール\)](#)
- [AWS IAM Identity Center ID ソースの開始方法 \(コンソール\)](#)

前提条件

以下のステップは、入門ガイド演習の前提条件です。この手順では、アカウントを設定し、ユーザーに代わって呼び出しを行うアクセス許可を付与 Amazon Kendra する IAM ロールを作成し、Amazon S3 バケットからドキュメントのインデックスを作成する方法を示します。例として S3 バケットを使用しますが、Amazon Kendra がサポートする他のデータソースを使用することもできます。「[Data sources](#)」を参照してください。

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. <https://portal.aws.amazon.com/billing/signup> を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

にサインアップすると AWS アカウント、AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、[ルートユーザーアクセスが必要なタスク](#)の実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。<https://aws.amazon.com/> の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、 を保護し AWS IAM Identity Center、 を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者[AWS Management Console](#)として にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

ルートユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン ユーザーガイドの[ルートユーザーとしてサインインする](#)を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

手順については、IAM [ユーザーガイドの AWS アカウント 「ルートユーザー \(コンソール\) の仮想 MFA デバイス](#)を有効にする」を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[AWS IAM Identity Centerの有効化](#)」を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、AWS IAM Identity Center 「ユーザーガイド」の[「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」](#)を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン「ユーザーガイド」の[AWS 「アクセスポータルにサインインする」](#)を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の[「権限設定を作成する」](#)を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の[「グループの結合」](#)を参照してください。

- テストにドキュメントを含む S3 バケットを使用している場合は Amazon Kendra、使用しているリージョンと同じリージョンに S3 バケットを作成します Amazon Kendra。手順については、Amazon Simple Storage Service コンソールユーザーガイドの[S3 バケットの作成と設定](#)を参照してください。

ドキュメントを S3 バケットにアップロードします。手順については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの[オブジェクトのアップロード、ダウンロードおよび管理](#)を参照してください。

別のデータソースを使用している場合は、データソースに接続するためのアクティブなサイトと認証情報が必要です。

コンソールを使用して開始する場合は、[Amazon Kendra コンソールの開始方法](#) で開始します。

Amazon Kendra リソース : AWS CLI、SDK、コンソール

CLI、SDK、またはコンソールを使用する場合は、特定の権限が必要です。

を CLI、SDK、またはコンソール Amazon Kendra に使用するには、 がユーザーに代わってリソースを作成および管理 Amazon Kendra できるようにするアクセス許可が必要です。ユースケースに応じて、これらのアクセス許可には Amazon Kendra API 自体へのアクセスが含まれます。カスタム CMK を介してデータを暗号化 AWS KMS keys する場合は、 と統合 AWS IAM Identity Center するか、[検索エクスペリエンスを作成する](#) 場合は Identity Center デイレクトリを使用します。さまざまなユースケースのための権限の一覧については、「[IAM roles](#)」を参照してください。

まず、以下のアクセス許可を IAM ユーザーにアタッチする必要があります。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "Stmt1644430853544",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant",
        "kms:DescribeKey"
      ],
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Sid": "Stmt1644430878150",
      "Action": "kendra:*",
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Sid": "Stmt1644430973706",
      "Action": [
        "sso:AssociateProfile",
        "sso:CreateManagedApplicationInstance",
        "sso>DeleteManagedApplicationInstance",
        "sso:DisassociateProfile",
```



```
        "sso:GetManagedApplicationInstance",
        "sso:GetProfile",
        "sso:ListDirectoryAssociations",
        "sso:ListProfileAssociations",
        "sso:ListProfiles"
    ],
    "Effect": "Allow",
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "Stmt1644430999558",
    "Action": [
        "sso-directory:DescribeGroup",
        "sso-directory:DescribeGroups",
        "sso-directory:DescribeUser",
        "sso-directory:DescribeUsers"
    ],
    "Effect": "Allow",
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "Stmt1644431025960",
    "Action": [
        "identitystore:DescribeGroup",
        "identitystore:DescribeUser",
        "identitystore:ListGroups",
        "identitystore:ListUsers"
    ],
    "Effect": "Allow",
    "Resource": "*"
}
]
```

次に、CLI または SDK を使用する場合は、アクセスする IAM ロールとポリシーも作成する必要があります Amazon CloudWatch Logs。コンソールを使用している場合は、このロール IAM とポリシーを作成する必要はありません。これはコンソール手順の一部として作成します。

がアクセス Amazon Kendra できるようにする および SDK の IAM ロール AWS CLI とポリシーを作成します Amazon CloudWatch Logs。

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/iam/> で IAM コンソールを開きます。
2. 左側のメニューで、[Policies] (ポリシー) を選択し、[Create policy] (ポリシーの作成) を選択します。
3. [JSON] を選択し、デフォルトのポリシーを以下に置き換えます。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "cloudwatch:PutMetricData"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "cloudwatch:namespace": "AWS/Kendra"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:DescribeLogGroups"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:CreateLogGroup"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:logs:region:account ID:log-group:/aws/kendra/*"
      ]
    }
  ]
}
```

```

    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:DescribeLogStreams",
        "logs:CreateLogStream",
        "logs:PutLogEvents"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:logs:region:account ID:log-group:/aws/kendra/*:log-
stream:*"
      ]
    }
  ]
}

```

4. [Review policy] (ポリシーの確認) を選択します。
5. ポリシー "KendraPolicyForGettingStartedIndex" に名前を付け、[ポリシーを作成] を選択します。
6. 左側のメニューから、[Roles] (ロール) を選択し、[Create role] (ロールの作成) を選択します。
7. 別の AWS アカウントを選択し、アカウント ID にアカウント ID を入力します。[Next: Permissions] (次へ: アクセス許可) を選択します。
8. 上記の手順で作成したポリシーを選択し、[Next: Tags] (次へ: タグ) を選択します。
9. タグを追加しないでください。[Next: Review] (次へ: レビュー) を選択します。
10. ロール "KendraRoleForGettingStartedIndex" に名前を付け、[ロールの作成] を選択します。
11. 先ほど作成したロールを検索します。ロールの名前を選択し、[概要] を開きます。[Trust relationships] (信頼関係) を選択し、[Edit trust relationship] (信頼関係の編集) を選択します。
12. 既存の信頼関係を、次のものに置き換えます。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },

```

```

        "Action": "sts:AssumeRole"
      }
    ]
  }

```

13. [Update trust policy] (信頼ポリシーの更新) を選択します。

3 つ目 Amazon S3 は、を使用してドキュメントを保存する場合、または S3 を使用してテストする場合は Amazon Kendra、バケットにアクセスするための IAM ロールとポリシーも作成する必要があります。別のデータソースを使用している場合は、「[IAM roles for data sources](#)」を参照してください。

が Amazon S3 バケット Amazon Kendra にアクセスしてインデックスを作成する IAM ロールとポリシーを作成するには。

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/iam/> で IAM コンソールを開きます。
2. 左側のメニューで、[Policies] (ポリシー) を選択し、[Create policy] (ポリシーの作成) を選択します。
3. [JSON] を選択し、デフォルトのポリシーを以下に置き換えます。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::bucket name/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Action": [
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [

```

```

        "arn:aws:s3:::bucket name"
    ],
    "Effect": "Allow"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kendra:BatchPutDocument",
      "kendra:BatchDeleteDocument"
    ],
    "Resource": "arn:aws:kendra:region:account ID:index/*"
  }
]
}

```

4. [Review policy] (ポリシーの確認) を選択します。
5. ポリシーに「KendraPolicyForGettingStartedDataSource」という名前を付けて、[Create policy] (ポリシーの作成) を選択します。
6. 左側のメニューから、[Roles] (ロール) を選択し、[Create role] (ロールの作成) を選択します。
7. 別の AWS アカウントを選択し、アカウント ID にアカウント ID を入力します。[Next: Permissions] (次へ: アクセス許可) を選択します。
8. 上記の手順で作成したポリシーを選択し、[Next: Tags] (次へ: タグ) を選択します。
9. タグを追加しないでください。[Next: Review] (次へ: レビュー) を選択します。
10. ロールに「KendraRoleForGettingStartedDataSource」という名前を付けて、[Create role] (ロールの作成) を選択します。
11. 先ほど作成したロールを検索します。ロールの名前を選択し、[概要] を開きます。[Trust relationships] (信頼関係) を選択し、[Edit trust relationship] (信頼関係の編集) を選択します。
12. 既存の信頼関係を、次のものに置き換えます。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },

```

```
        "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

13. [Update trust policy] (信頼ポリシーの更新) を選択します。

Amazon Kendra API の使用方法に応じて、次のいずれかを実行します。

- [開始方法 \(AWS CLI\)](#)
- [開始方法 \(AWS SDK for Java\)](#)
- [開始方法 \(AWS SDK for Python \(Boto3\)\)](#)

Amazon Kendra コンソールの開始方法

次の手順は、AWS コンソールを使用して Amazon Kendra インデックスを作成およびテストする方法を示しています。この手順では、インデックスのインデックスとデータソースを作成します。最後に、検索リクエストを作成してインデックスをテストします。

ステップ 1: インデックスを作成するには (コンソール)

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、<https://console.aws.amazon.com/kendra/> でコンソールを開きます Amazon Kendra 。
2. [インデックス] セクションで、[インデックスの作成] を選択します。
3. [インデックスの詳細の指定] ページで、インデックスに名前と説明を付けます。
4. [IAM ロール] で、[新しいロールを作成] を選択してから、ロールに名前を付けます。IAM ロールには「AmazonKendra-」というプレフィックスが付けられます。
5. その他のフィールドはすべてデフォルトのままにしておきます。[次へ] を選択します。
6. [Configure user access control] (ユーザーアクセスコントロールの設定) ページで、[Next] (次へ) をクリックします。
7. [Provisioning details] (プロビジョニングの詳細) ページで、[Developer edition] (デベロッパーエディション) を選択します。
8. [Create] (作成) を選択してインデックスを作成します。
9. インデックスが作成されるまで待ちます。はインデックスのハードウェアを Amazon Kendra プロビジョニングします。この演算には時間がかかる場合があります。

ステップ 2: データソースをインデックスに追加するには (コンソール)

1. ドキュメント Amazon Kendra に接続してインデックスを作成するために使用可能な[データソース](#)を表示します。
2. ナビゲーションペインで [データソース] を選択してから、選択したデータソースの [データソースを追加] を選択します。
3. 手順に従ってデータソースを設定します。

ステップ 3: インデックスを検索するには (コンソール)

1. ナビゲーションペインで、インデックスを検索するオプションを選択します。
2. インデックスに適した検索用語を入力します。上位の結果および上位のドキュメント結果が表示されます。

開始方法 (AWS CLI)

次の手順は、を使用して Amazon Kendra インデックスを作成する方法を示しています AWS CLI。手順は、データソースとインデックスを作成し、インデックスに対してクエリを実行します。

Amazon Kendra インデックスを作成するには (CLI)

1. [前提条件](#) を実行します。
2. 以下のコマンドを入力してインデックスを作成します。

```
aws kendra create-index \  
  --name cli-getting-started-index \  
  --description "Index for CLI getting started guide." \  
  --role-arn arn:aws:iam::account id:role/KendraRoleForGettingStartedIndex
```

3. がインデックスを作成する Amazon Kendra のを待ちます。次のコマンドを使用してポリシーをチェックします。ステータスフィールドが ACTIVE の場合、次のステップに進みます。

```
aws kendra describe-index \  
  --id index id
```

4. コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力してデータソースを作成します。

```
aws kendra create-data-source \  

```

```
--index-id index id \  
--name data source name \  
--role-arn arn:aws:iam::account id:role/KendraRoleForGettingStartedDataSource \  
--type S3 \  
--configuration '{"S3Configuration":{"BucketName":"S3 bucket name"}}'
```

テンプレートスキーマを使用してデータソースに接続する場合は、テンプレートスキーマを設定します。

```
aws kendra create-data-source \  
--index-id index id \  
--name data source name \  
--role-arn arn:aws:iam::account id:role/KendraRoleForGettingStartedDataSource \  
--type TEMPLATE \  
--configuration '{"TemplateConfiguration":{"Template":{"JSON schema"}}}'
```

5. データソースの作成には Amazon Kendra 時間がかかります。次のコマンドを入力してプロセスをチェックします。ステータスが ACTIVE の場合、次のステップに進みます。

```
aws kendra describe-data-source \  
--id data source ID \  
--index-id index ID
```

6. 次のコマンドを入力して、データソースを同期します。

```
aws kendra start-data-source-sync-job \  
--id data source ID \  
--index-id index ID
```

7. Amazon Kendra はデータソースのインデックスを作成します。かかる時間は、ドキュメントの数によって異なります。次のコマンドを使用して、ジョブ同期のステータスをチェックできます。ステータスが ACTIVE の場合、次のステップに進みます。

```
aws kendra describe-data-source \  
--id data source ID \  
--index-id index ID
```

8. 次のコマンドを入力してクエリを保存します。

```
aws kendra query \  
--index-id index ID \  

```



```
--query-text "search term"
```

検索の結果が JSON 形式で表示されます。

開始方法 (AWS SDK for Python (Boto3))

次のプログラムは、Python プログラム Amazon Kendra で使用する例です。このプログラムでは次のアクションを実行しています。

1. [CreateIndex](#) 演算を使用して新しいインデックスを作成します。
2. インデックスの作成が完了するのを待ちます。これは、[DescribeIndex](#) 演算を使用して、インデックスのステータスをモニタリングします。
3. インデックスがアクティブになると、このインデックスは、[CreateDataSource](#) 演算を使用してデータソースを作成します。
4. データソースの作成が完了するのを待ちます。これは、[DescribeDataSource](#) 演算を使用して、データソースのステータスをモニタリングします。
5. データソースがアクティブになると、[StartDataSourceSyncJob](#) 演算を使用して、インデックスがデータソースの内容と同期されます。

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Create an index.")

# Provide a name for the index
index_name = "python-getting-started-index"
# Provide an optional decription for the index
description = "Getting started index"
# Provide the IAM role ARN required for indexes
index_role_arn = "arn:aws:iam::${accountId}:role/KendraRoleForGettingStartedIndex"

try:
    index_response = kendra.create_index(
        Description = description,
```

```

        Name = index_name,
        RoleArn = index_role_arn
    )

pprint.pprint(index_response)

index_id = index_response["Id"]

print("Wait for Amazon Kendra to create the index.")

while True:
    # Get the details of the index, such as the status
    index_description = kendra.describe_index(
        Id = index_id
    )
    # When status is not CREATING quit.
    status = index_description["Status"]
    print(" Creating index. Status: "+status)
    time.sleep(60)
    if status != "CREATING":
        break

print("Create an S3 data source.")

# Provide a name for the data source
data_source_name = "python-getting-started-data-source"
# Provide an optional description for the data source
data_source_description = "Getting started data source."
# Provide the IAM role ARN required for data sources
data_source_role_arn = "arn:aws:iam::${accountId}:role/
KendraRoleForGettingStartedDataSource"
# Provide the data source connection information
S3_bucket_name = "S3-bucket-name"
data_source_type = "S3"
# Configure the data source
configuration = {"S3Configuration":
    {
        "BucketName": S3_bucket_name
    }
}

"""
If you connect to your data source using a template schema,
configure the template schema

```

```
configuration = {"TemplateConfiguration":
    {
        "Template": {JSON schema}
    }
}
"""

data_source_response = kendra.create_data_source(
    Name = data_source_name,
    Description = data_source_name,
    RoleArn = data_source_role_arn,
    Type = data_source_type,
    Configuration = configuration,
    IndexId = index_id
)

pprint.pprint(data_source_response)

data_source_id = data_source_response["Id"]

print("Wait for Amazon Kendra to create the data source.")

while True:
    # Get the details of the data source, such as the status
    data_source_description = kendra.describe_data_source(
        Id = data_source_id,
        IndexId = index_id
    )
    # If status is not CREATING, then quit
    status = data_source_description["Status"]
    print(" Creating data source. Status: "+status)
    time.sleep(60)
    if status != "CREATING":
        break

print("Synchronize the data source.")

sync_response = kendra.start_data_source_sync_job(
    Id = data_source_id,
    IndexId = index_id
)

pprint.pprint(sync_response)
```

```
print("Wait for the data source to sync with the index.")

while True:

    jobs = kendra.list_data_source_sync_jobs(
        Id = data_source_id,
        IndexId = index_id
    )

    # For this example, there should be one job
    status = jobs["History"][0]["Status"]

    print(" Syncing data source. Status: "+status)
    if status != "SYNCING":
        break
    time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

開始方法 (AWS SDK for Java)

次のプログラムは、Java プログラム Amazon Kendra で を使用する例です。このプログラムでは次のアクションを実行しています。

1. [CreateIndex](#) 演算を使用して新しいインデックスを作成します。
2. インデックスの作成が完了するのを待ちます。これは、[DescribeIndex](#) 演算を使用して、インデックスのステータスをモニタリングします。
3. インデックスがアクティブになると、このインデックスは、[CreateDataSource](#) 演算を使用してデータソースを作成します。
4. データソースの作成が完了するのを待ちます。これは、[DescribeDataSource](#) 演算を使用して、データソースのステータスをモニタリングします。
5. データソースがアクティブになると、[StartDataSourceSyncJob](#) 演算を使用して、インデックスがデータソースの内容と同期されます。

```
package com.amazonaws.kendra;
```

```
import java.util.concurrent.TimeUnit;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceConfiguration;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceSyncJob;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceSyncJobStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceType;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.IndexStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3DataSourceConfiguration;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobResponse;

public class CreateIndexAndDataSourceExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {
        System.out.println("Create an index");

        String indexDescription = "Getting started index for Kendra";
        String indexName = "java-getting-started-index";
        String indexRoleArn = "arn:aws:iam::<your AWS account ID>:role/<name of an IAM role>";

        System.out.println(String.format("Creating an index named %s", indexName));
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        CreateIndexRequest createIndexRequest = CreateIndexRequest
            .builder()
            .description(indexDescription)
            .name(indexName)
            .roleArn(indexRoleArn)
            .build();
        CreateIndexResponse createIndexResponse =
            kendra.createIndex(createIndexRequest);
```

```
System.out.println(String.format("Index response %s", createIndexResponse));

String indexId = createIndexResponse.id();

System.out.println(String.format("Waiting until the index with index ID %s is
created", indexId));
while (true) {
    DescribeIndexRequest describeIndexRequest =
DescribeIndexRequest.builder().id(indexId).build();
    DescribeIndexResponse describeIndexResponse =
kendra.describeIndex(describeIndexRequest);
    IndexStatus status = describeIndexResponse.status();
    if (status != IndexStatus.CREATING) {
        break;
    }

    TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
}

System.out.println("Creating an S3 data source");
String dataSourceName = "java-getting-started-data-source";
String dataSourceDescription = "Getting started data source";
String s3BucketName = "amzn-s3-demo-bucket";
String dataSourceRoleArn = "arn:aws:iam::<your AWS account ID>:role/<name of an
IAM role>";

CreateDataSourceRequest createDataSourceRequest = CreateDataSourceRequest
    .builder()
    .indexId(indexId)
    .name(dataSourceName)
    .description(dataSourceDescription)
    .roleArn(dataSourceRoleArn)
    .type(DataSourceType.S3)
    .configuration(
        DataSourceConfiguration
            .builder()
            .s3Configuration(
                S3DataSourceConfiguration
                    .builder()
                    .bucketName(s3BucketName)
                    .build()
            ).build()
    ).build();
```

```
        CreateDataSourceResponse createDataSourceResponse =
kendra.createDataSource(createDataSourceRequest);
        System.out.println(String.format("Response of creating data source: %s",
createDataSourceResponse));

        String dataSourceId = createDataSourceResponse.id();
        System.out.println(String.format("Waiting for Kendra to create the data source
%s", dataSourceId));
        DescribeDataSourceRequest describeDataSourceRequest = DescribeDataSourceRequest
            .builder()
            .indexId(indexId)
            .id(dataSourceId)
            .build();

        while (true) {
            DescribeDataSourceResponse describeDataSourceResponse =
kendra.describeDataSource(describeDataSourceRequest);

            DataSourceStatus status = describeDataSourceResponse.status();
            System.out.println(String.format("Creating data source. Status: %s",
status));
            if (status != DataSourceStatus.CREATING) {
                break;
            }

            TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
        }

        System.out.println(String.format("Synchronize the data source %s",
dataSourceId));
        StartDataSourceSyncJobRequest startDataSourceSyncJobRequest =
StartDataSourceSyncJobRequest
            .builder()
            .indexId(indexId)
            .id(dataSourceId)
            .build();
        StartDataSourceSyncJobResponse startDataSourceSyncJobResponse =
kendra.startDataSourceSyncJob(startDataSourceSyncJobRequest);
        System.out.println(String.format("Waiting for the data
source to sync with the index %s for execution ID %s", indexId,
startDataSourceSyncJobResponse.executionId()));

        // For this particular list, there should be just one job
```

```
ListDataSourceSyncJobsRequest listDataSourceSyncJobsRequest =
ListDataSourceSyncJobsRequest
    .builder()
    .indexId(indexId)
    .id(dataSourceId)
    .build();

while (true) {
    ListDataSourceSyncJobsResponse listDataSourceSyncJobsResponse =
kendra.listDataSourceSyncJobs(listDataSourceSyncJobsRequest);
    DataSourceSyncJob job = listDataSourceSyncJobsResponse.history().get(0);
    System.out.println(String.format("Syncing data source. Status: %s",
job.status()));

    if (job.status() != DataSourceSyncJobStatus.SYNCING) {
        break;
    }

    TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
}

System.out.println("Index setup is complete");
}
```

Amazon S3 データソースの開始方法 (コンソール)

Amazon Kendra コンソールを使用して、データストアとして Amazon S3 バケットの使用を開始できます。コンソールを使用して、バケットのコンテンツのインデックス作成に必要なすべての接続情報を指定できます。詳細については、「[Amazon S3](#)」を参照してください。

デフォルト設定を使用して基本的な S3 バケットデータソースを作成するには、次の手順に従います。この手順では、[Amazon Kendra コンソールの開始方法](#) のステップ 1 の手順に従ってインデックスを作成していることを前提としています。

Amazon Kendra コンソールを使用して S3 バケットデータソースを作成するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/home> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. インデックスのリストから、データソースを追加するインデックスを選択します。

3. [Add data sources] (データソースの追加) を選択します。
4. データソースコネクタのリストから、[Amazon S3] を選択します。
5. [Define attributes] (属性の定義) ページで、データソースに名前と説明 (オプション) を入力します。[Tags] (タグ) フィールドは空白のままにします。[Next] (次へ) を選択して続行します。
6. [Enter the data source location] (データソースの場所を入力) フィールドに、ドキュメントが含まれる S3 バケットの名前を入力します。名前を直接入力することも、[Browse] (ブラウズ) を選択して名前を参照することもできます。バケットはインデックスと同じリージョンにある必要があります。
7. [IAM IAM ロール] で、[新しいロールを作成] を選択し、ロールの名前を入力します。詳細については、[IAMAmazon S3 「データソースのロール」](#) を参照してください。
8. [Set sync run schedule] (同期実行スケジュールの設定) セクションで、[Run on demand] (オンデマンドで実行する) を選択します。
9. [次へ] を選択して続行します。
10. [Review and create] (確認と作成) ページで、S3 データソースの詳細を確認します。変更が必要な場合は、変更する項目の隣にある [Edit] (編集) ボタンを押します。選択した内容が正しければ、[Create] (作成) をクリックして S3 データソースを作成します。

Create を選択すると、はデータソースの作成 Amazon Kendra を開始します。データソースが作成されるまでに数分かかる場合があります。終了すると、データソースのステータスは [Creating] (作成中) から [Active] (アクティブ) に変わります。

データソースを作成したら、Amazon Kendra インデックスをデータソースと同期する必要があります。[Sync now] (今すぐ同期) をクリックして、同期プロセスを開始します。ドキュメントの数とサイズによっては、データソースの同期に数分から数時間かかる場合があります。

MySQL データベースデータソースの開始方法 (コンソール)

Amazon Kendra コンソールを使用して、データソースとして MySQL データベースの使用を開始できます。コンソールを使用する場合は、MySQL データベースのコンテンツのインデックス作成をするために必要な接続情報を指定します。詳細については、[データベースデータソースの使用](#) を参照してください。

まず MySQL データベースを作成してから、データベースのデータソースを作成できます。

次の手順に従って、基本的な MySQL データベースを作成します。この手順では、[Amazon Kendra コンソールの開始方法](#) のステップ 1 に従ってすでにインデックスを作成していることを前提としています。

MySQL データベースを作成するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/rds/> で Amazon RDS コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Subnet groups] (サブネットグループ)、[Create DB Subnet Group] (DB サブネットグループの作成) の順に選択します。
3. グループに名前を付けて、Virtual Private Cloud (VPC) を選択します。VPC の設定の詳細については、「[VPC を使用する Amazon Kendra ようにを設定する](#)」を参照してください。
4. VPC のプライベートサブネットを追加します。プライベートサブネットは、NAT に接続されていないサブネットです。[作成] を選択します。
5. ナビゲーションペインで、[Databases] (データベース)、[Create database] (データベースの作成) の順に選択します。
6. データベースを作成するには、以下のパラメータを使用します。その他のパラメータはすべてフォルトのままにしておきます。
 - エンジンのオプション - MySQL
 - テンプレート - 無料利用枠
 - 認証情報の設定 - パスワードを入力して確認する
 - [Connectivity] (接続性) で、[Additional connectivity configuration] (追加の接続性設定) をクリックします。以下の選択を行います。
 - サブネットグループ - ステップ 4 で作成したサブネットグループを選択します。
 - VPC セキュリティグループ - VPC で作成したインバウンドルールとアウトバウンドルールの両方を含むグループを選択します。例えば、**DataSourceSecurityGroup**。VPC の設定方法の詳細については、「[Configuring Amazon Kendra to use a VPC](#)」を参照してください。
 - [Additional configuration] (追加の設定) の [Initial database name] (初期データベース名) を **content** に設定します。
7. [Create database] (データベース) の作成を選択します。
8. データベースのリストから、新しいデータベースを選択します。データベースエンドポイントを書きとめておきます。

9. データベースを作成した後、ドキュメントを格納するためのテーブルを作成する必要があります。テーブルの作成は、これらの手順の適用範囲外です。テーブルを作成する際は、以下の点に注意してください。

- データベース名 - **content**
- テーブル名 - **documents**
- 列 - **ID**、**Title**、**Body**、**LastUpdate**。必要に応じて追加の列を含めることができます。

これで MySQL データベースを作成したので、データベースのデータソースを作成できます。

MySQL データソースを作成するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/home> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Indexes] (インデックス)を選択してインデックスを選択します。
3. [Add data sources] (データソースの追加) を選択して [Amazon RDS] を選択します。
4. データソースの名前と説明を入力し、[Next] (次へ) を選択します。
5. [MySQL] を選択します。
6. [Connection access] (接続アクセス) で以下の情報を入力します。
 - [エンドポイント] - 前に作成したデータベースのエンドポイント。
 - [ポート] - データベースのポート番号。MySQL のデフォルトポートは 3306 です。
 - [認証のタイプ] - [新規] を選択します。
 - [新しいシークレットコンテナ名] - データベース認証情報の Secrets Manager コンテナの名前。
 - [ユーザー名] - データベースへの管理者アクセス権を持つユーザーの名前。
 - [パスワード] - ユーザーのパスワードで、入力後に [認証を保存] を選択します。
 - [データベース名] - **content**。
 - [テーブル名] - **documents**。
 - [IAM ロール] - [新しいロールの作成] を選択してから、ロールの名前を入力します。
7. [列設定] に、次の内容を入力します。
 - [ドキュメント ID 列名] - **ID**
 - [ドキュメントタイトル列名] - **Title**

- [ドキュメントデータ列名] - **Body**
8. [Column change detection] (列変更検出) に、次のように入力します。
- [検出列の変更] - **LastUpdate**
9. [Configure VPC & security group] (VPC とセキュリティグループを設定する) で、以下を指定します。
- [仮想プライベートクラウド (VPC)] で、VPC を選択します。
 - [Subnets] (サブネット) で、VPC で作成したプライベートサブネットを選択します。
 - [VPC security groups] (VPC セキュリティグループ) で、MySQL の VPC で作成したインバウンドルールとアウトバウンドルールの両方を含むセキュリティグループを選択します。例えば、**DataSourceSecurityGroup**。
10. [Set sync run schedule] (同期実行スケジュールの設定) で、[Run on demand] (オンデマンドで実行)、[Next] (次へ) の順に選択します。
11. [Data source field mapping] (データソースフィールドのマッピング) で、[Next] (次へ) をクリックします。
12. データソースの設定が正しいことを確認します。すべてが正しいことを確認したら、[Create] (作成) をクリックします。

AWS IAM Identity Center ID ソースの開始方法 (コンソール)

AWS IAM Identity Center ID ソースには、ユーザーとグループに関する情報が含まれています。これは、ユーザーコンテキストフィルタリングを設定するのに役立ちます。は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、さまざまなユーザーの検索結果を Amazon Kendra フィルタリングします。

IAM Identity Center のアイデンティティソースを作成するには、IAM Identity Center をアクティベートし、AWS Organizationsで組織を作成する必要があります。IAM Identity Center をアクティベートし、組織を初めて作成すると、デフォルトのアイデンティティソースとして Identity Center ディレクトリが自動的に作成されます。アイデンティティソースとしてアクティブディレクトリ (Amazon が管理するまたは自己管理の) または外部アイデンティティプロバイダーに変更できます。このためには、正しいガイダンスに従う必要があります。「[Changing your IAM Identity Center identity source](#)」を参照してください。ID ソースは 組織あたり 1 つのみ持つことができます。

ユーザーとグループにドキュメントに対するさまざまなレベルのアクセス権を割り当てるには、ドキュメントをインデックスに取り込むときに、アクセスコントロールリストにユーザーとグループ

を含める必要があります。これにより、ユーザーとグループはアクセスのレベルに応じて Amazon Kendra でドキュメントを検索できます。クエリを発行する場合、ユーザー ID は、IAM Identity Center のユーザー名と完全に一致する必要があります。

また、で IAM Identity Center を使用するために必要なアクセス許可も付与する必要があります Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for IAM Identity Center](#)」を参照してください。

IAM Identity Center アイデンティティソースを設定するには

1. [IAM Identity Center コンソール](#)を開きます。
2. 「IAM Identity Center を有効にする」を選択し、AWS 「組織の作成」を選択します。

Identity Center ディレクトリがデフォルトで作成され、組織に関連付けられている E メールアドレスを検証するための E メールが送信されます。

3. AWS 組織にグループを追加するには、ナビゲーションペインでグループを選択します。
4. [Groups page] (グループページ) で、[Create group] (グループの作成) を選択し、ダイアログボックスにグループ名と説明を入力します。[Create] (作成) を選択します。
5. 組織にユーザーを追加するには、ナビゲーションペインで [ユーザー] を選択します。
6. [Users] (ユーザー) ページで、[Add user] (ユーザーを追加) を選択します。[User details] (ユーザーの詳細) で、すべての必須フィールドを指定します。[Password] (パスワード) で、[Send an email to the user] (ユーザーにメールを送信) を選択します。[次へ] を選択します。
7. ユーザーをグループに追加するには、[Groups] (グループ) をクリックし、グループを選択します。
8. グループの [Details] (詳細) ページにある [Group members] (グループメンバー) で、[Add user] (ユーザーの追加) をクリックします。
9. [Add users to group] (ユーザーをグループに追加) ページで、グループのメンバーとして追加するユーザーを選択します。複数のユーザーを選択してグループに追加できます。
10. ユーザーおよびグループのリストを IAM Identity Center と同期するには、アイデンティティソースをアクティブディレクトリまたは外部アイデンティティプロバイダーに変更します。

Identity Center ディレクトリはデフォルトのアイデンティティソースであり、プロバイダーによって管理される独自のリストがない場合は、このソースを使用してユーザーおよびグループを手動で追加する必要があります。アイデンティティソースを変更するには、正しいガイダンスに従う必要があります。「[Changing your IAM Identity Center identity source](#)」を参照してください。

 Note

アクティブディレクトリまたは外部アイデンティティプロバイダーをアイデンティティソースとして使用する場合は、ユーザーの E メールアドレスをクロスドメインアイデンティティ管理 (SCIM) プロトコルを指定する際の IAM Identity Center ユーザー名にマッピングする必要があります。詳細については、「[IAM Identity Center guide on SCIM for enabling IAM Identity Center](#)」を参照してください。

IAM Identity Center アイデンティティソースをセットアップしたら、インデックスの作成または編集時に、コンソールでこれを有効にできます。インデックスの設定の [ユーザーアクセスコントロール] に移動し、IAM Identity Center からユーザーグループ情報を取得できるように設定を編集します。

[UserGroupResolutionConfiguration](#) オブジェクトを使用して IAM Identity Center をアクティブ化することもできます。を UserGroupResolutionModeとして指定AWS_SS0し、sso:ListDirectoryAssociations、sso-directory:SearchUsers、を呼び出すアクセス許可を付与する sso-directory:ListGroupForUser IAM ロールを作成しますsso-directory:DescribeGroups。

 Warning

Amazon Kendra は現在、IAM Identity Center ID ソースの組織メンバーアカウントUserGroupResolutionConfigurationでの AWS の使用をサポートしていません。UserGroupResolutionConfiguration を使用するには、その組織の管理アカウントでインデックスを作成する必要があります。

次のものは、UserGroupResolutionConfiguration でデータソースを設定する方法、およびユーザーコンテキストで検索結果をフィルタリングするユーザーアクセス制御の概要です。これは、インデックスの と IAM ロールが既に作成されていることを前提としています。[CreateIndex](#) API を使用してインデックスを作成し、IAM ロールを指定します。

UserGroupResolutionConfiguration およびユーザーコンテキストフィルタリングによるデータソースの設定

1. IAM Identity Center アイデンティティソースにアクセスする権限を付与する [IAM ロール](#)を作成します。

2. モードを `AWS_SSO` に設定し、[UpdateIndex](#) を呼び出し、IAM Identity Center を使用するようにインデックスを更新して、[UserGroupResolutionConfiguration](#) を構成します。
3. トークンベースのユーザーアクセス制御を使用してユーザーコンテキストで検索結果をフィルタリングする場合は、`UpdateIndex` の呼び出し時に [UserContextPolicy](#) を `USER_TOKEN` にセットします。それ以外の場合、ほとんどのデータソースコネクタの各ドキュメントのアクセスコントロールリストを Amazon Kendra クロールします。また、`UserContext` にユーザーやグループの情報を入力して、[クエリ](#) API のユーザーコンテキストに基づいて検索結果をフィルターすることもできます。クエリを発行するときにユーザー ID を指定するだけで済むようにするため、[PutPrincipalMapping](#) を使用してユーザーをグループにマッピングすることもできます。
4. データソースにアクセスするためのアクセス許可を付与する [IAM ロール](#) を作成します。
5. データソースを[設定](#)します。データソースに接続するために必要な接続情報を提供する必要があります。
6. [CreateDataSource](#) API を使用してデータソースを作成します。TemplateConfiguration、インデックスの ID、データソースの IAM ロール、データソースタイプを含む DataSourceConfiguration オブジェクトを指定し、データソースに名前を付けます。データソースを更新することもできます。

IAM Identity Center アイデンティティソースの変更

Warning

IAM Identity Center の [設定] でアイデンティティソースを変更すると、ユーザーおよびグループ情報の保存が影響を受ける可能性があります。これを安全に行うには、[アイデンティティソースの変更に関する考慮事項](#)を確認することをお勧めします。アイデンティティソースを変更する場合、新しいアイデンティティソース ID が生成されます。[UserGroupResolutionConfiguration](#) でモードを `AWS_SSO` に設定する前に、正しい ID を使用していることを確認してください。

IAM Identity Center アイデンティティソースを変更するには

1. [\[IAM Identity Center\] > \[コンソール\]](#) を開きます。
2. [Settings] (設定) を選択します。

3. [Settings] (設定) ページの [Identity source] (アイデンティティソース) で、[Change] (変更) を選択します。
4. [Change identity source] (アイデンティティソースの変更) ページで、優先するアイデンティティソースを選択し、[Next] (次へ) をクリックします。

インデックスの作成

インデックスを作成するには、コンソールを使用するか、[CreateIndex](#) API を呼び出します。API で AWS Command Line Interface (AWS CLI) または SDK を使用できます。インデックスを作成したら、ドキュメントをインデックスに直接追加したり、データソースからドキュメントを追加したりできます。

インデックスを作成するには、インデックスがアクセスする () ロールの Amazon リソースネーム AWS Identity and Access Management (ARN IAM) を指定する必要があります CloudWatch。詳細については、「[IAM roles for indexes](#)」を参照してください。

以下のタブでは、を使用してインデックスを作成する手順と AWS Management Console、Python AWS CLIおよび Java SDKs。

Console

インデックスを作成するには

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、<https://console.aws.amazon.com/kendra/> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. [インデックス] セクションで、[インデックスの作成] を選択します。
3. [インデックスの詳細の指定] で、インデックスに名前と説明を付けます。
4. IAM ロールで IAM ロールを指定します。ロールを見つけるには、「kendra」という単語を含むアカウントでロールから選択するか、別のロールの名前を入力します。ロールが必要とするアクセス許可の詳細については、「[IAM roles for indexes](#)」を参照してください。
5. [次へ] を選択します。
6. [ユーザーアクセスコントロールの設定] ページで、[次へ] をクリックします。インデックスを作成した後、アクセス制御にトークンを使用するようにインデックスを更新できます。詳細については、「[Controlling access to documents](#)」を参照してください。
7. [プロビジョニングの詳細] ページで、[作成] を選択します。
8. インデックスが作成されるまでにしばらく時間がかかることがあります。インデックスのリストをチェックして、インデックスの作成の進行状況を確認します。インデックスのステータスが ACTIVE の場合、インデックスが使用する準備ができています。

AWS CLI

インデックスを作成するには

1. 以下のコマンドを使用してインデックスを作成します。は、Amazon Kendra アクションを実行できる IAM ロールの Amazon リソースネーム (ARN) `role-arn`である必要があります。詳細については、「[IAM roles](#)」を参照してください。

次のコマンドは、Linux と macOS 用にフォーマットされています。Windows を使用している場合、Unix 行連結記号 (`\`) をキャレット (^) に置き換えます。

```
aws kendra create-index \  
  --name index name \  
  --description "index description" \  
  --role-arn arn:aws:iam::account ID:role/role name
```

2. インデックスが作成されるまでにしばらく時間がかかることがあります。インデックスの状態をチェックするには、以下のコマンドで `create-index` によって返されるインデックス ID を使用します。インデックスのステータスが `ACTIVE` の場合、インデックスが使用する準備ができています。

```
aws kendra describe-index \  
  --index-id index ID
```

Python

インデックスを作成するには

- 次のコード例で、次の変数の値を指定します。
 - `description` - 作成するインデックスの説明。これはオプションです。
 - `index_name` - 作成するインデックスの名前。
 - `role_arn`— Amazon Kendra APIs を実行できるロールの Amazon リソースネーム (ARN)。詳細については、「[IAM roles](#)」を参照してください。

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
import pprint
```

```
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Create an index.")

# Provide a name for the index
index_name = "index-name"
# Provide an optional description for the index
description = "index description"
# Provide the IAM role ARN required for indexes
role_arn = "arn:aws:iam::${account id}:role/${role name}"

try:
    index_response = kendra.create_index(
        Name = index_name,
        Description = description,
        RoleArn = role_arn
    )

    pprint.pprint(index_response)

    index_id = index_response["Id"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the index.")

    while True:
        # Get the details of the index, such as the status
        index_description = kendra.describe_index(
            Id = index_id
        )
        # If status is not CREATING, then quit
        status = index_description["Status"]
        print(" Creating index. Status: "+status)
        if status != "CREATING":
            break
        time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

インデックスを作成するには

- 次のコード例で、次の変数の値を指定します。
 - `description` - 作成するインデックスの説明。これはオプションです。
 - `index_name` - 作成するインデックスの名前。
 - `role_arn`— Amazon Kendra APIs を実行できるロールの Amazon リソースネーム (ARN)。詳細については、「[IAM roles](#)」を参照してください。

```
package com.amazonaws.kendra;

import java.util.concurrent.TimeUnit;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.IndexStatus;

public class CreateIndexExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {

        String indexDescription = "Getting started index for Kendra";
        String indexName = "java-getting-started-index";
        String indexRoleArn = "arn:aws:iam::<your AWS account ID>:role/KendraRoleForGettingStartedIndex";

        System.out.println(String.format("Creating an index named %s",
            indexName));
        CreateIndexRequest createIndexRequest = CreateIndexRequest
            .builder()
            .description(indexDescription)
            .name(indexName)
            .roleArn(indexRoleArn)
            .build();
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();
```

```
        CreateIndexResponse createIndexResponse =
kendra.createIndex(createIndexRequest);
        System.out.println(String.format("Index response %s",
createIndexResponse));

        String indexId = createIndexResponse.id();

        System.out.println(String.format("Waiting until the index with ID %s is
created.", indexId));
        while (true) {
            DescribeIndexRequest describeIndexRequest =
DescribeIndexRequest.builder().id(indexId).build();
            DescribeIndexResponse describeIndexResponse =
kendra.describeIndex(describeIndexRequest);
            IndexStatus status = describeIndexResponse.status();
            if (status != IndexStatus.CREATING) {
                break;
            }

            TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
        }

        System.out.println("Index creation is complete.");
    }
}
```

インデックスを作成したら、そのインデックスにドキュメントを追加します。これらは直接追加することも、定期的にインデックスを更新するデータソースを作成することもできます。

トピック

- [バッチアップロードを使用したドキュメントのインデックスへの直接追加](#)
- [よくある質問 \(FAQ\) のインデックスへの追加](#)
- [カスタムドキュメントフィールドの作成](#)
- [トークンによるドキュメントへのアクセスの制御](#)

バッチアップロードを使用したドキュメントのインデックスへの直接追加

[BatchPutDocument](#) API を使用して、ドキュメントをインデックスに直接追加できます。コンソールを使用してドキュメントを直接追加することはできません。コンソールを使用する場合、データソースに接続して、ドキュメントをインデックスに追加します。ドキュメントは S3 バケットから追加することも、バイナリデータとして指定することもできます。でサポートされているドキュメントタイプのリストについては、「[ドキュメントのタイプ](#) Amazon Kendra」を参照してください。

BatchPutDocument を使用したインデックスへのドキュメントの追加は、非同期演算です。BatchPutDocument API を呼び出した後、[BatchGetDocumentStatus](#) API を使用して、ドキュメントのインデックス作成の進行状況をモニタリングします。ドキュメント ID のリストで BatchGetDocumentStatus API を呼び出すと、ドキュメントのステータスが返されます。ドキュメントのステータスが INDEXED または FAILED の場合、ドキュメントの処理は完了しています。ステータスが FAILED の場合、BatchGetDocumentStatus API は、ドキュメントにインデックス作成できなかった理由を返します。

ドキュメント取り込みプロセス中にコンテンツやドキュメントメタデータのフィールドや属性を変更する場合は、「[Amazon Kendra Custom Document Enrichment](#)」を参照してください。カスタムデータソースを使用する場合、BatchPutDocument API を使用して送信する各ドキュメントには、属性またはフィールドとしてデータソース ID と実行 ID が必要です。詳細については、「[Required attributes for custom data sources](#)」を参照してください。

Note

各ドキュメント ID はインデックスごとに一意である必要があります。一意の ID でドキュメントにインデックスを付けるデータソースを作成してから、BatchPutDocument API を使用して同じドキュメントにインデックスを付けることはできません。その逆も同様です。データソースを削除してから BatchPutDocument API を使用して同じドキュメントにインデックスを付けることができます。その逆も可能です。BatchPutDocument と BatchDeleteDocument API を同じドキュメントセットの Amazon Kendra データソースコネクタと組み合わせて使用すると、データに不整合が生じる可能性があります。代わりに、[Amazon Kendra カスタムデータソースコネクタ](#)の使用をお勧めします。

次のデベロッパーガイドドキュメントでは、ドキュメントをインデックスに直接追加する方法を示します。

トピック

- [BatchPutDocument API を使用したドキュメントの追加](#)
- [S3 バケットからのドキュメントの追加](#)

BatchPutDocument API を使用したドキュメントの追加

次の例では、[BatchPutDocument](#) を呼び出して、テキストの blob をインデックスに追加します。BatchPutDocument API を使用して、インデックスに直接ドキュメントを追加できます。でサポートされているドキュメントタイプのリストについては、「[ドキュメントのタイプ](#) Amazon Kendra 」を参照してください。

AWS CLI および SDKs」を参照してください。 <https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/create-index.html> CLI と SDK をセットアップするには、「[Setting up Amazon Kendra](#)」を参照してください。

Note

インデックスに追加されるファイルは、UTF-8 でエンコードされたバイトストリームに存在する必要があります。

次の例では、UTF-8 でエンコードされたテキストをインデックスに追加します。

CLI

で AWS Command Line Interface、次のコマンドを使用します。次のコマンドは、Linux と macOS 用にフォーマットされています。Windows を使用している場合、Unix 行連結記号 (\) を キャレット (^) に置き換えます。

```
aws kendra batch-put-document \  
  --index-id index-id \  
  --documents '{"Id":"doc-id-1", "Blob":"Amazon.com is an online retailer.",  
  "ContentType":"PLAIN_TEXT", "Title":"Information about Amazon.com"}'
```

Python

```
import boto3  
  
kendra = boto3.client("kendra")
```

```
# Provide the index ID
index_id = "index-id"

# Provide the title and text
title = "Information about Amazon.com"
text = "Amazon.com is an online retailer."

document = {
    "Id": "1",
    "Blob": text,
    "ContentType": "PLAIN_TEXT",
    "Title": title
}

documents = [
    document
]

result = kendra.batch_put_document(
    IndexId = index_id,
    Documents = documents
)

print(result)
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.core.SdkBytes;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.BatchPutDocumentRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.BatchPutDocumentResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ContentType;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.Document;

public class AddDocumentsViaAPIExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String indexId = "yourIndexId";
```



```
Document testDoc = Document
    .builder()
    .title("The title of your document")
    .id("a_doc_id")
    .blob(SdkBytes.fromUtf8String("your text content"))
    .contentType(ContentType.PLAIN_TEXT)
    .build();

BatchPutDocumentRequest batchPutDocumentRequest = BatchPutDocumentRequest
    .builder()
    .indexId(indexId)
    .documents(testDoc)
    .build();

BatchPutDocumentResponse result =
kendra.batchPutDocument(batchPutDocumentRequest);

System.out.println(String.format("BatchPutDocument Result: %s", result));
}
}
```

S3 バケットからのドキュメントの追加

[BatchPutDocument](#) API を使用して、Amazon S3 バケットからインデックスに直接ドキュメントを追加できます。同じコールで最大 10 個のドキュメントを追加できます。S3 バケットを使用する場合は、IAM ロールにドキュメントを含むバケットへのアクセス許可を付与する必要があります。RoleArn パラメータでロールを指定します。

[BatchPutDocument](#) API を使用して Amazon S3 バケットからドキュメントを追加する操作は 1 回限りです。インデックスをバケットのコンテンツと同期させるには、Amazon S3 データソースを作成します。詳細については、「[Amazon S3 data source](#)」を参照してください。

AWS CLI および SDKs」を参照してください。 <https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/create-index.html> CLI と SDK をセットアップするには、「[Setting up Amazon Kendra](#)」を参照してください。S3 バケットの作成については、[Amazon Simple Storage Service ドキュメント](#)を参照してください。

次の使用例は、BatchPutDocument API を使用して、インデックスに 2 つの Microsoft Word ドキュメントを追加します。

Python

```
import boto3

kendra = boto3.client("kendra")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"
# Provide the IAM role ARN required to index documents in an S3 bucket
role_arn = "arn:aws:iam:${accountID}:policy/${roleName}"

doc1_s3_file_data = {
    "Bucket": "bucket-name",
    "Key": "document1.docx"
}

doc1_document = {
    "S3Path": doc1_s3_file_data,
    "Title": "Document 1 title",
    "Id": "doc_1"
}

doc2_s3_file_data = {
    "Bucket": "bucket-name",
    "Key": "document2.docx"
}

doc2_document = {
    "S3Path": doc2_s3_file_data,
    "Title": "Document 2 title",
    "Id": "doc_2"
}

documents = [
    doc1_document,
    doc2_document
]

result = kendra.batch_put_document(
    Documents = documents,
    IndexId = index_id,
    RoleArn = role_arn
)
```

```
print(result)
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.BatchPutDocumentRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.BatchPutDocumentResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.Document;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3Path;

public class AddFilesFromS3Example {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String indexId = "yourIndexId";
        String roleArn = "yourIndexRoleArn";

        Document pollyDoc = Document
            .builder()
            .s3Path(
                S3Path.builder()
                    .bucket("amzn-s3-demo-bucket")
                    .key("What is Amazon Polly.docx")
                    .build()
            )
            .title("What is Amazon Polly")
            .id("polly_doc_1")
            .build();

        Document rekognitionDoc = Document
            .builder()
            .s3Path(
                S3Path.builder()
                    .bucket("amzn-s3-demo-bucket")
                    .key("What is Amazon Rekognition.docx")
                    .build()
            )
            .title("What is Amazon rekognition")
            .id("rekognition_doc_1")
            .build();

        BatchPutDocumentRequest batchPutDocumentRequest = BatchPutDocumentRequest
            .builder()
```

```
        .indexId(indexId)
        .roleArn(roleArn)
        .documents(pollyDoc, rekognitionDoc)
        .build();

    BatchPutDocumentResponse result =
kendra.batchPutDocument(batchPutDocumentRequest);

    System.out.println(String.format("BatchPutDocument result: %s", result));
}
}
```

よくある質問 (FAQ) のインデックスへの追加

Note

機能のサポートは、使用するインデックスタイプと検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

コンソールまたは [CreateFAQ](#) API を使用して、よくある質問 (FAQ) をインデックスに直接追加できます。インデックスへのよくある質問の追加は、非同期演算です。よくある質問のデータは、Amazon Simple Storage Service バケットに保存するファイルに入力します。CSV ファイルまたは JSON ファイルをよくある質問の入力として使用できます。

- 基本 CSV — 各行に質問、回答、オプションのソース URI が含まれる CSV ファイル。
- カスタム CSV - 質問、回答、およびよくある質問のレスポンスのファセット、表示、またはソートに使用できるカスタムフィールド/属性のヘッダーを含む CSV ファイル。アクセスコントロールフィールドを定義して、よくある質問のレスポンスを、よくある質問のレスポンスを許可されている特定のユーザーおよびグループに制限することもできます。
- JSON - 質問、回答、およびよくある質問のレスポンスのファセット、表示、またはソートに使用できるカスタムフィールド/属性を含む JSON ファイル。アクセスコントロールフィールドを定義して、よくある質問のレスポンスを、よくある質問のレスポンスを許可されている特定のユーザーおよびグループに制限することもできます。

例えば、以下は、米国ワシントン州スポケーンと米国ミズーリ州マウンテンビューにある無料診療所に関する質問に対する回答を提供する基本 CSV ファイルです。

```
How many free clinics are in Spokane WA?, 13
How many free clinics are there in Mountain View Missouri?, 7
```

Note

FAQ ファイルは UTF-8 でエンコードされたファイルである必要があります。

トピック

- [よくある質問ファイルのインデックスフィールドの作成](#)
- [基本 CSV ファイル](#)
- [カスタム CSV ファイル](#)
- [JSON ファイル](#)
- [よくある質問ファイルの使用](#)
- [英語以外の言語のよくある質問ファイル](#)

よくある質問ファイルのインデックスフィールドの作成

Note

機能のサポートは、使用するインデックスタイプと検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

入力に[カスタム CSV](#) または [JSON](#) ファイルを使用すると、よくある質問の質問のカスタムフィールドを宣言できます。例えば、各よくある質問の質問にビジネス部門を割り当てるカスタムフィールドを作成できます。よくある質問がレスポンスで返されたら、部門をファセットとして使用して、例えば「HR」や「Finance」のみに検索を絞り込めます。

カスタムフィールドは、インデックスフィールドにマッピングする必要があります。コンソールでは、[ファセットの定義] ページを使用して、インデックスフィールドを作成します。最初に、[UpdateIndex](#) API を使用してインデックスフィールドを作成する必要があります。

よくある質問ファイルのフィールド/属性タイプは、関連するインデックスフィールドのタイプと一致する必要があります。例えば、「Department」フィールドは `STRING_LIST` タイプフィールドです。そのため、よくある質問ファイルでは、部門フィールドの値を、文字列リストとして指定する必要があります。インデックスフィールドのタイプは、コンソールの [ファセットの定義] ページを使用して、または [DescribeIndex](#) API を使用してチェックできます。

カスタム属性にマッピングするインデックスフィールドを作成する場合、その属性を表示可能、ファセット可能、またはソート可能にマークできます。カスタム属性を検索可能にすることはできません。

カスタム属性に加えて、カスタム CSV または JSON ファイル内の Amazon Kendra 予約フィールドや共通フィールドを使用することもできます。詳細については、「[Document attributes or fields](#)」を参照してください。

基本 CSV ファイル

よくある質問に単純な構造を使用する場合は、基本 CSV ファイルを使用します。基本 CSV ファイルには、各行に、質問、回答、および詳細情報を含むドキュメントを参照するオプションのソース URI の 2 つまたは 3 つのフィールドがあります。

ファイルの内容は、[カンマ区切り値 \(CSV\) ファイルの RFC 4180 共通形式と MIME タイプ](#) に従う必要があります。

以下は、基本 CSV 形式のよくある質問ファイルです。

```
How many free clinics are in Spokane WA?, 13, https://s3.region.company.com/bucket-name/directory/faq.csv
How many free clinics are there in Mountain View Missouri?, 7, https://s3.region.company.com/bucket-name/directory/faq.csv
```

カスタム CSV ファイル

よくある質問の質問にカスタムフィールド/属性を追加する場合は、カスタム CSV ファイルを使用します。カスタム CSV ファイルでは、CSV ファイルのヘッダー行を使用して、追加の属性を定義します。

CSV ファイルには、2 つの必須フィールドが含まれている必要があります。

- `_question` - よくある質問

- `_answer` - よくある質問への回答

カスタム CSV ファイルには、Amazon Kendra 予約済みフィールド (`_faq_id`、`_data_source_id`、`_document_title`、およびを除く `_file_type`) と任意のカスタムフィールドの両方を含めることができます。

次はカスタム CSV ファイルの例です。

```
_question,_answer,_last_updated_at,custom_string
How many free clinics are in Spokane WA?, 13, 2012-03-25T12:30:10+01:00, Note: Some
free clinics require you to meet certain criteria in order to use their services
How many free clinics are there in Mountain View Missouri?, 7,
2012-03-25T12:30:10+01:00, Note: Some free clinics require you to meet certain
criteria in order to use their services
```

カスタムファイルの内容は、[カンマ区切り値 \(CSV\) ファイルの RFC 4180 共通形式と MIME タイプ](#)に従う必要があります。

カスタムフィールドの種類を以下に示します。

- 日付 — ISO 8601 でエンコードされた日付と時刻の値。

例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。

- 長整数 — 1234 などの数字。
- 文字列 — 文字列値。文字列にカンマが含まれている場合は、値全体を二重引用符 (") で囲みます (例えば、"custom attribute, and more")。
- 文字列リスト - 文字列値のリスト。値を引用符 (") で囲んだカンマ区切りリストの数値を一覧表示します (例えば、"item1, item2, item3")。リストにエントリが 1 つしか含まれていない場合は、引用符を省略できます (例えば、item1)。

カスタム CSV ファイルにはユーザーアクセスコントロールフィールドを含められます。これらのフィールドを使用して、よくある質問へのアクセスを特定のユーザーおよびグループに制限できます。ユーザーコンテキストでフィルタリングするには、ユーザーはクエリでユーザーおよびグループ情報を提供する必要があります。それ以外の場合は、関連するよくある質問がすべて返されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

よくある質問のユーザーコンテキストフィルターを以下に示します。

- `_acl_user_allow` — 許可リストのユーザーは、クエリレスポンスでよくある質問を確認できます。よくある質問は他のユーザーには返されません。
- `_acl_user_deny` — 拒否リストのユーザーは、クエリレスポンスでよくある質問を確認できません。よくある質問は、クエリに関連する場合に、他のすべてのユーザーに返されます。
- `_acl_group_allow` — 許可されたグループのメンバーであるユーザーは、クエリレスポンスでよくある質問を確認できます。よくある質問は、別のグループのメンバーであるユーザーには返されません。
- `_acl_group_deny` — 拒否されたグループのメンバーであるユーザーは、クエリレスポンスでよくある質問を確認できません。よくある質問は、クエリに関連する場合に、他のグループに返されます。

許可リストと拒否リストの値を、引用符で囲んだコンマ区切りのリストで指定します (例えば、`"user1,user2,user3"`)。許可リストまたは拒否リストのいずれかにユーザーまたはグループを含めることはできますが、同一ユーザーが個別に許可されているもののグループでは拒否されているような場合は、両方に含めることはできません。両方にユーザーまたはグループを含めると、エラーが発生します。

次はユーザーコンテキスト情報を含むカスタム CSV ファイルの例です。

```
_question, _answer, _acl_user_allow, _acl_user_deny, _acl_group_allow, _acl_group_deny
How many free clinics are in Spokane WA?, 13, "userID6201,userID7552",
"userID1001,userID2020", groupBasicPlusRate, groupPremiumRate
```

JSON ファイル

JSON ファイルを使用して、インデックスの質問、回答、およびフィールドを指定できます。よくある質問には、任意の Amazon Kendra 予約済みフィールドまたはカスタムフィールドを追加できます。

以下に、JSON のスキーマを示します。

```
{
  "SchemaVersion": 1,
  "FaqDocuments": [
    {
      "Question": string,
      "Answer": string,
```



```

    "Attributes": {
      string: object
      additional attributes
    },
    "AccessControlList": [
      {
        "Name": string,
        "Type": enum( "GROUP" | "USER" ),
        "Access": enum( "ALLOW" | "DENY" )
      },
      additional user context
    ]
  },
  additional FAQ documents
]
}

```

次の JSON ファイルの例は、2 つのよくある質問ドキュメントを示しています。1 つのドキュメントには、必要な質問と回答のみが含まれています。もう 1 つのドキュメントには、追加のフィールド情報、ユーザーコンテキスト、またはアクセスコントロール情報も含まれています。

```

{
  "SchemaVersion": 1,
  "FaqDocuments": [
    {
      "Question": "How many free clinics are in Spokane WA?",
      "Answer": "13"
    },
    {
      "Question": "How many free clinics are there in Mountain View Missouri?",
      "Answer": "7",
      "Attributes": {
        "_source_uri": "https://s3.region.company.com/bucket-name/directory/faq.csv",
        "_category": "Charitable Clinics"
      },
      "AccessControlList": [
        {
          "Name": "user@amazon.com",
          "Type": "USER",
          "Access": "ALLOW"
        },
        {

```

```

        "Name": "Admin",
        "Type": "GROUP",
        "Access": "ALLOW"
    }
]
}
}
}

```

カスタムフィールドの種類を以下に示します。

- 日付 - ISO 8601 でエンコードされた日付と時刻値を持つ JSON 文字列値。例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。
- 長整数 — 1234 などの JSON 数値。
- 文字列 - JSON 文字列値 (例えば、"custom attribute")。
- 文字列リスト - 文字列値の JSON 配列 (例えば、["item1,item2,item3"])

JSON ファイルには、ユーザーアクセスコントロールフィールドを含めることができます。これらのフィールドを使用して、よくある質問へのアクセスを特定のユーザーおよびグループに制限できます。ユーザーコンテキストでフィルタリングするには、ユーザーはクエリでユーザーおよびグループ情報を提供する必要があります。それ以外の場合は、関連するよくある質問がすべて返されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

許可リストまたは拒否リストのいずれかにユーザーまたはグループを含めることはできますが、同一ユーザーが個別に許可されているもののグループでは拒否されているような場合は、両方に含めることはできません。両方にユーザーまたはグループを含めると、エラーが発生します。

以下は、JSON のよくある質問に、ユーザーアクセスコントロールを含める例です。

```

"AccessControlList": [
    {
        "Name": "group or user name",
        "Type": "GROUP | USER",
        "Access": "ALLOW | DENY"
    },
    additional user context
]

```

よくある質問ファイルの使用

よくある質問入力ファイルを S3 バケットに保存した後、コンソールまたは CreateFaq API を使用して、質問と回答をインデックスに入れます。よくある質問を更新する場合は、よくある質問を削除してもう一度作成します。DeleteFaq API を使用してよくある質問を削除します。

ソースファイルを含む S3 バケットにアクセスできる IAM ロールを指定する必要があります。ロールは、コンソールまたは RoleArn パラメータで指定します。次は、よくある質問ファイルをインデックスに追加する例です。

Python

```
import boto3

kendra = boto3.client("kendra")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"
# Provide the IAM role ARN required to index documents in an S3 bucket
role_arn = "arn:aws:iam::${accountId}:role/${roleName}"

# Provide the S3 bucket path information to the FAQ file
faq_path = {
    "Bucket": "bucket-name",
    "Key": "FreeClinicsUSA.csv"
}

response = kendra.create_faq(
    S3Path = faq_path,
    Name = "FreeClinicsUSA",
    IndexId = index_id,
    RoleArn = role_arn
)

print(response)
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateFaqRequest;
```

```
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateFaqResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3Path;

public class AddFaqExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String indexId = "yourIndexId";
        String roleArn = "your role for accessing S3 files";

        CreateFaqRequest createFaqRequest = CreateFaqRequest
            .builder()
            .indexId(indexId)
            .name("FreeClinicsUSA")
            .roleArn(roleArn)
            .s3Path(
                S3Path
                    .builder()
                    .bucket("amzn-s3-demo-bucket")
                    .key("FreeClinicsUSA.csv")
                    .build()
            )
            .build();

        CreateFaqResponse response = kendra.createFaq(createFaqRequest);

        System.out.println(String.format("The result of creating FAQ: %s",
            response));
    }
}
```

英語以外の言語のよくある質問ファイル

よくある質問は、サポートされている言語でインデックスを作成できます。言語を指定しない場合、デフォルトでは英語で Amazon Kendra インデックスFAQsできます。言語コードは、[CreateFaq](#) 演算を呼び出すか、よくある質問のメタデータによくある質問の言語コードをフィールドとして含める場合に指定します。よくある質問のメタデータフィールドで指定されたメタデータに言語コードがない場合、よくある質問は、CreateFAQ 演算を呼び出したときに指定した言語コードを使用してインデックス作成されます。コンソールでサポートされている言語でよくある質問ドキュメントのインデックス作成をするには、[FAQs] (よくある質問) iley 移動し、[Add FAQ] (よくある質問の追加) を選択します。[言語] のドロップダウンから言語を選択します。

カスタムドキュメントフィールドの作成

Note

機能のサポートは、使用するインデックスタイプと検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスの検索」](#)を参照してください。

Amazon Kendra インデックスでドキュメントのカスタム属性またはフィールドを作成できます。例えば、「HR」、「Sales」、「Manufacturing」という値を持つ「Department」というカスタムフィールドまたは属性を作成できます。これらのカスタムフィールドまたは属性を Amazon Kendra インデックスにマッピングする場合、それらを使用して検索結果をフィルタリングし、「HR」部門属性でドキュメントを含めることができます。

カスタムフィールドまたは属性を使用するには、まずインデックスにフィールドを作成する必要があります。インデックスフィールドを作成するには、コンソールを使用してデータソースフィールドマッピングを編集し、カスタムフィールドを追加するか、[UpdateIndex](#) API を使用します。フィールドを作成すると、フィールドデータ型を変更することはできません。

ほとんどのデータソースの場合、外部データソースのフィールドを Amazon Kendra の対応するフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。S3 データソースでは、JSON メタデータファイルを使用してカスタムフィールドまたは属性を作成できます。

最大 500 のカスタムフィールドまたは属性を作成できます。

Amazon Kendra 予約済みフィールドまたは共通フィールドを使用することもできます。詳細については、「[Document attributes or fields](#)」を参照してください。

トピック

- [カスタムドキュメントフィールドの更新](#)

カスタムドキュメントフィールドの更新

UpdateIndex API では、DocumentMetadataConfigurationUpdates パラメータを使用してカスタムフィールドまたは属性を追加します

次の JSON の例では、DocumentMetadataConfigurationUpdates を使用して「Department」というフィールドをインデックスに追加します。

```
"DocumentmetadataConfigurationUpdates": [  
  {  
    "Name": "Department",  
    "Type": "STRING_VALUE"  
  }  
]
```

以下のセクションでは、[BatchPutDocument](#) と Amazon S3 データソースを使用してカスタム属性またはフィールドを追加する例を示します。

トピック

- [BatchPutDocument API を使用したカスタム属性またはフィールドの追加](#)
- [Amazon S3 データソースへのカスタム属性またはフィールドの追加](#)

BatchPutDocument API を使用したカスタム属性またはフィールドの追加

[BatchPutDocument](#) API を使用してドキュメントをインデックスに追加する場合、Attributes の一部としてカスタムフィールドまたは属性を指定します。API を呼び出すと、複数のフィールドまたは属性を追加できます。最大 500 のカスタムフィールドまたは属性を作成できます。次の例は、ドキュメントに「Department」を追加するカスタムフィールドまたは属性です。

```
"Attributes":  
  {  
    "Department": "HR",  
    "_category": "Vacation policy"  
  }
```

Amazon S3 データソースへのカスタム属性またはフィールドの追加

S3 バケットをインデックスのデータソースとして使用する場合は、コンパニオンメタデータファイルを使用してドキュメントにメタデータを追加します。メタデータ JSON ファイルは、ドキュメントと平行なディレクトリ構造に配置します。詳細については、「[S3 document metadata](#)」を参照してください。

カスタムフィールドまたは属性は、Attributes JSON 構造で指定します。最大 500 のカスタムフィールドまたは属性を作成できます。例えば、以下の例では Attributes を使用して 3 つのカスタムフィールドまたは属性と 1 つの予約フィールドを定義しています。

```
"Attributes": {
  "brand": "Amazon Basics",
  "price": 1595,
  "_category": "sports",
  "subcategories": ["outdoors", "electronics"]
}
```

次の手順では、Amazon S3 データソースにカスタム属性を追加する手順を説明します。

トピック

- [ステップ 1: Amazon Kendra インデックスを作成する](#)
- [ステップ 2: インデックスを更新してカスタムドキュメントフィールドを追加する](#)
- [ステップ 3: Amazon S3 データソースを作成し、データソースフィールドをカスタム属性にマッピングする](#)

ステップ 1: Amazon Kendra インデックスを作成する

の手順に従って Amazon Kendra インデックス [インデックスの作成](#) を作成します。

ステップ 2: インデックスを更新してカスタムドキュメントフィールドを追加する

インデックスを作成したら、そのインデックスにフィールドを追加します。次の手順は、コンソールと CLI を使用してインデックスにフィールドを追加する方法を示しています。

Console

インデックスフィールドを作成するには

1. [インデックスが作成され](#)ていることを確認します。
2. 次に、左側のナビゲーションメニューから、データ管理からファセット定義を選択します。
3. インデックスフィールド設定ガイドのインデックスフィールドから、フィールドの追加を選択してカスタムフィールドを追加します。
4. [Add index field] (インデックスフィールドの追加) ダイアログボックスで、以下の操作を行います。

- フィールド名 – フィールド名を追加します。
- データ型 - 文字列、文字列リスト、日付のいずれかのデータ型を選択します。
- 使用タイプ – ファセット可能、検索可能、表示可能、ソート可能のいずれかの使用タイプを選択します。

次に、追加を選択します。

マッピングする他のフィールドについても、最後のステップを繰り返します。

CLI

```
aws kendra update-index \
--region $region \
--endpoint-url $endpoint \
--application-id $applicationId \
--index-id $indexId \
--document-metadata-configuration-updates \
"[
  {
    "Name": "string",
    "Type": "STRING_VALUE"|"STRING_LIST_VALUE"|"LONG_VALUE"|"DATE_VALUE",
    "Relevance": {
      "Freshness": true|false,
      "Importance": integer,
      "Duration": "string",
      "RankOrder": "ASCENDING"|"DESCENDING",
      "ValueImportanceMap": {"string": integer
      ...}
    },
    "Search": {
      "Facetable": true|false,
      "Searchable": true|false,
      "Displayable": true|false,
      "Sortable": true|false
    }
  }
  ...
]"
```


ステップ 3: Amazon S3 データソースを作成し、データソースフィールドをカスタム属性にマッピングする

Amazon S3 データソースを作成し、フィールドにマッピングするには、「」の手順に従います [Amazon S3](#)。

API を使用している場合は、[CreateDataSource](#) API を使用する configuration ときの `fieldMappings` 属性を使用します。

データソースフィールドのマッピング方法の概要については、「」を参照してください [データソースフィールドのマッピング](#)。

トークンによるドキュメントへのアクセスの制御

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、「[インデックスタイプ](#)」を参照してください。

Important

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、トークンベースのユーザーアクセスコントロールをサポートしていません。

インデックス内の特定のドキュメントにアクセスしたり検索結果に特定のドキュメントを表示したりできるユーザーまたはグループを制御できます。これはユーザーコンテキストのフィルタリングと呼ばれます。ドキュメントへのアクセスをコントロールできるという利点を持つ、パーソナライズされた検索の一種です。例えば、企業ポータルで情報を検索するすべてのチームが会社の極秘文書にアクセスする必要があるわけではなく、これらの文書がすべてのユーザーに関連しているわけでもありません。極秘文書へのアクセス許可を与えられた特定のユーザーまたはチームグループのみが、検索結果でこれらの文書を参照できます。

Amazon Kendra エンタープライズインデックスとデベロッパーインデックスは、次のトークンタイプを使用したトークンベースのユーザーアクセスコントロールをサポートします。

- オープン ID

- 共有シークレットを持つ JWT
- パブリックキーを持つ JWT
- JSON

Amazon Kendra は、取得および検索アプリケーションに対して安全なエンタープライズ検索を提供するために使用できます。クエリと取得中、はリクエストでUserContext指定されたAttributeFilters に基づいて検索結果を Amazon Kendra フィルタリングします。は、クローラと取り込み中にコネクタによって収集されたドキュメントアクセスコントロールリスト (ACLs) を Amazon Kendra 読み取ります。取得と検索結果は、元のドキュメントリポジトリを指す URLs と短い抜粋を返します。ドキュメント全体へのアクセスは、元のリポジトリによって引き続き適用されます。

トピック

- [OpenID の使用](#)
- [共有シークレットで JSON ウェブトークン \(JWT\) を使用する](#)
- [パブリックキーでの JSON ウェブトークン \(JWT\) の使用](#)
- [JSON の使用](#)

OpenID の使用

アクセスコントロールに OpenID トークンを使用するように Amazon Kendra インデックスを設定するには、OpenID プロバイダーの OpenIDが必要です。ほとんどの場合、JWKS URL は `https://domain-name/.well_known/jwks.json` の形式になります (OpenID ディスカバリーに従っている場合)。

次の例は、インデックスの作成時にユーザーアクセスコントロールに OpenID トークンを使用する方法を示しています。

Console

1. [Create index] (インデックスの作成) を選択して、新しいインデックスの作成を開始します。
2. [Specify index details] (インデックスの詳細の指定) ページで、インデックスに名前と説明を付けます。
3. [IAM ロール] には、[ロール] を選択するか、または [新規ロールを作成] を選択し、新しいロールを作成してロール名を指定します。IAM ロールには、プレフィックス「AmazonKendra-」が付いています。

4. その他のフィールドはすべてデフォルトのままにしておきます。[Next (次へ)] を選択します。
5. [Configure user access control] (ユーザーアクセスコントロールの設定) ページの、[Access control settings] (アクセスコントロールの設定) で、[Yes] (はい) を選択し、アクセス制御にトークンを使用します。
6. [Token configuration] (トークンの設定) を選択し、[Token type] (トークンタイプ) は [OpenID] を選択します。
7. [Signing key URL] (署名キー URL) を指定します。URL は JSON ウェブキーのセットを参照する必要があります。
8. [Advanced configuration] (詳細設定) の [Optional] (オプション):
 - a. [Username] (ユーザーネーム) を指定して ACL チェックで使します。
 - b. 1 つ以上の [Groups] (グループ) を指定して、ACL チェックで使します。
 - c. トークン発行者を検証する [Issuer] (発行者) を指定します。
 - d. [Client Id(s)] (クライアント ID) を指定します。JWT のオーディエンスと一致する正規表現を指定する必要があります。
9. [Provisioning details] (プロビジョニングの詳細) ページで、[Developer edition] (デベロッパーエディション) を選択します。
10. [Create] (作成) を選択してインデックスを作成します。
11. インデックスが作成されるまで待ちます。は、インデックスのハードウェアを Amazon Kendra プロビジョニングします。この演算には時間がかかる場合があります。

CLI

JSON 入力ファイル AWS CLI を使用して でインデックスを作成するには、まず目的のパラメータを使用して JSON ファイルを作成します。

```
{
  "Name": "user-context",
  "Edition": "ENTERPRISE_EDITION",
  "RoleArn": "arn:aws:iam::account-id:role:/my-role",
  "UserTokenConfigurations": [
    {
      "JwtTokenTypeConfiguration": {
        "KeyLocation": "URL",
        "Issuer": "optional: specify the issuer url",

```

```

        "ClaimRegex": "optional: regex to validate claims in the token",
        "UserNameAttributeField": "optional: user",
        "GroupAttributeField": "optional: group",
        "URL": "https://example.com/.well-known/jwks.json"
    }
},
"UserContextPolicy": "USER_TOKEN"
}

```

デフォルトのユーザーフィールド名とグループフィールド名を上書きできます。UserNameAttributeField のデフォルト値は「ユーザー」です。GroupAttributeField のデフォルト値は「グループ」です。

次に、入力ファイルを使用して、create-index を呼び出します。例えば、JSON ファイルの名前が create-index-openid.json の場合、以下を使用できます。

```
aws kendra create-index --cli-input-json file://create-index-openid.json
```

Python

```

response = kendra.create_index(
    Name='user-context',
    Edition='ENTERPRISE_EDITION',
    RoleArn='arn:aws:iam::account-id:role:/my-role',
    UserTokenConfigurations=[
        {
            "JwtTokenTypeConfiguration": {
                "KeyLocation": "URL",
                "Issuer": "optional: specify the issuer url",
                "ClaimRegex": "optional: regex to validate claims in the token",
                "UserNameAttributeField": "optional: user",
                "GroupAttributeField": "optional: group",
                "URL": "https://example.com/.well-known/jwks.json"
            }
        }
    ],
    UserContextPolicy='USER_TOKEN'
)

```

共有シークレットで JSON ウェブトークン (JWT) を使用する

次の例は、インデックスの作成時に、共有シークレットトークンで JSON ウェブトークン (JWT) をユーザーアクセスコントロールに使用方法を示しています。

Console

1. [Create index] (インデックスの作成) を選択して、新しいインデックスの作成を開始します。
2. [Specify index details] (インデックスの詳細の指定) ページで、インデックスに名前と説明を付けます。
3. [IAM role] (IAM ロール) には、ロールを選択するか、または [Create a new role] (新規ロールの作成) を選択し、新しいロールを作成してロール名を指定します。IAM ロールには、プレフィックス「AmazonKendra-」が付いています。
4. その他のフィールドはすべてデフォルトのままにしておきます。[Next (次へ)] を選択します。
5. [Configure user access control] (ユーザーアクセスコントロールの設定) ページの、[Access control settings] (アクセスコントロールの設定) で、[Yes] (はい) を選択し、アクセス制御にトークンを使用します。
6. [Token configuration] (トークンの設定) で、[JWT with shared secret] (共有シークレットを使用したJWT) を [Token type] (トークンタイプ) として選択します。
7. [共有シークレットに署名するためのパラメータ] で、[シークレットのタイプ] を選択します。既存の AWS Secrets Manager 共有シークレット、または新しい共有シークレットを使用できます。

新しい共有シークレットを作成するには、[New] (新規) を選択し、次に、以下のステップを実行します。

- a. 新しい AWS Secrets Manager シークレットで、シークレット名を指定します。プレフィックス AmazonKendra- は、パブリックキーを保存すると追加されます。
- b. [Key ID] (キー ID) を指定します。キー ID は、トークンの JSON ウェブ署名をセキュア化するために使用されたキーを示すヒントです。
- c. トークンに署名 [Algorithm] (アルゴリズム) を選択します。これは、ID トークンの保護に使用される暗号化アルゴリズムです。RSA の詳細については、[RSA Cryptography](#) を参照してください。
- d. base64 URL でエンコードされたシークレットを入力して、[共有シークレット] を指定します。また、[シークレットの生成] を選択して、自分のシークレットを生成できま

す。シークレットが base64 URL でエンコードされていることを確認する必要があります。

e. (オプション) 共有シークレットが有効になるタイミングを指定します。シークレットの有効開始日、有効期限、またはその両方を指定できます。シークレットは、指定された時間間隔の間、有効です。

f. [Save secret] (シークレットの保存) を選択して新しいシークレットを保存します。

8. (オプション) [詳細設定]:

a. [Username] (ユーザーネーム) を指定して ACL チェックで使⽤します。

b. 1 つ以上の [Groups] (グループ) を指定して、ACL チェックで使⽤します。

c. トークン発⾏者を検証する [Issuer] (発⾏者) を指定します。

d. [クレーム ID] を指定します。JWT のオーディエンスと一致する正規表現を指定する必要があります。

9. [Provisioning details] (プロビジョニングの詳細) ページで、[Developer edition] (デベロッパーエディション) を選択します。

10. [Create] (作成) を選択してインデックスを作成します。

11. インデックスが作成されるまで待ちます。は、インデックスのハードウェアを Amazon Kendra プロビジョニングします。この演算には時間がかかる場合があります。

CLI

JWT トークンは、内の共有シークレットで使⽤できます AWS Secrets Manager。シークレットは、base64 URL でエンコードされている必要があります。Secrets Manager ARN が必要であり、Amazon Kendra ロールには Secrets Manager リソース `GetSecretValue` のへのアクセス権が必要です。で Secrets Manager リソースを暗号化する場合 AWS KMS、ロールには復号アクションへのアクセス権も必要です。

JSON 入力ファイル AWS CLI を使⽤して でインデックスを作成するには、まず目的のパラメータを使⽤して JSON ファイルを作成します。

```
{
  "Name": "user-context",
  "Edition": "ENTERPRISE_EDITION",
  "RoleArn": "arn:aws:iam::account-id:role:/my-role",
  "UserTokenConfigurations": [
    {
```

```

    "JwtTokenTypeConfiguration": {
      "KeyLocation": "SECRET_MANAGER",
      "Issuer": "optional: specify the issuer url",
      "ClaimRegex": "optional: regex to validate claims in the token",
      "UserNameAttributeField": "optional: user",
      "GroupAttributeField": "optional: group",
      "SecretManagerArn": "arn:aws:secretsmanager:us-west-2:account
id:secret:/my-user-context-secret
    }
  },
  "UserContextPolicy": "USER_TOKEN"
}

```

デフォルトのユーザーフィールド名とグループフィールド名を上書きできます。UserNameAttributeField のデフォルト値は「ユーザー」です。GroupAttributeField のデフォルト値は「グループ」です。

次に、入力ファイルを使用して、create-index を呼び出します。例えば、JSON ファイルの名前が create-index-openid.json の場合、以下を使用できます。

```
aws kendra create-index --cli-input-json file://create-index-openid.json
```

シークレットの形式は次のとおりです AWS Secrets Manager。

```

{
  "keys": [
    {
      "kid": "key_id",
      "alg": "HS256|HS384|HS512",
      "kty": "OCT",
      "use": "sig", //this value can be sig only for now
      "k": "secret",
      "nbf": "ISO1806 date format"
      "exp": "ISO1806 date format"
    }
  ]
}

```

JWT の詳細については、jwt.io を参照してください。

Python

JWT トークンは、内の共有シークレットで使えます AWS Secrets Manager。シークレットは、base64 URL でエンコードされている必要があります。Secrets Manager ARN が必要であり、Amazon Kendra ロールには Secrets Manager リソース `GetSecretValue` の へのアクセス権が必要です。で Secrets Manager リソースを暗号化する場合 AWS KMS、ロールには復号アクションへのアクセス権も必要です。

```
response = kendra.create_index(  
    Name='user-context',  
    Edition='ENTERPRISE_EDITION',  
    RoleArn='arn:aws:iam::account-id:role:/my-role',  
    UserTokenConfigurations=[  
        {  
            "JwtTokenTypeConfiguration": {  
                "KeyLocation": "URL",  
                "Issuer": "optional: specify the issuer url",  
                "ClaimRegex": "optional: regex to validate claims in the token",  
                "UserNameAttributeField": "optional: user",  
                "GroupAttributeField": "optional: group",  
                "SecretManagerArn": "arn:aws:secretsmanager:us-west-2:account  
id:secret:/my-user-context-secret"  
            }  
        }  
    ],  
    UserContextPolicy='USER_TOKEN'  
)
```

パブリックキーでの JSON ウェブトークン (JWT) の使用

次の例は、インデックスを作成するときに、パブリックキーで JSON ウェブトークン (JWT) をユーザーアクセスコントロールに使用する方法を示しています。JWT の詳細については、jwt.io を参照してください。

Console

1. [Create index] (インデックスの作成) を選択して、新しいインデックスの作成を開始します。
2. [Specify index details] (インデックスの詳細の指定) ページで、インデックスに名前と説明を付けます。

3. [IAM role] (IAM ロール) には、ロールを選択するか、または [Create a new role] (新規ロールの作成) を選択し、新しいロールを作成してロール名を指定します。IAM ロールには、プレフィックス「AmazonKendra-」が付いています。
4. その他のフィールドはすべてデフォルトのままにしておきます。[Next (次へ)] を選択します。
5. [Configure user access control] (ユーザーアクセスコントロールの設定) ページの、[Access control settings] (アクセスコントロールの設定) で、[Yes] (はい) を選択し、アクセス制御にトークンを使用します。
6. [Token configuration] (トークンの設定) で、[JWT with public key] (パブリックキーを使用したJWT) を [Token type] (トークンタイプ) として選択します。
7. [Parameters for signing public key] (パブリックキーに署名するためのパラメータ) で、[Type of secret] (シークレットのタイプ) を選択します。既存の AWS Secrets Manager シークレットを使用するか、新しいシークレットを作成できます。

新しいシークレットを作成するには、[New] (新規) を選択し、次に、以下のステップを実行します。

- a. 新しい AWS Secrets Manager シークレットで、シークレット名を指定します。プレフィックス AmazonKendra- は、パブリックキーを保存すると追加されます。
- b. [Key ID] (キー ID) を指定します。キー ID は、トークンの JSON ウェブ署名をセキュア化するために使用されたキーを示すヒントです。
- c. トークンに署名 [Algorithm] (アルゴリズム) を選択します。これは、ID トークンの保護に使用される暗号化アルゴリズムです。RSA の詳細については、[RSA Cryptography](#) を参照してください。
- d. [Certificate attributes] (証明書属性) で、オプションの [Certificate chain] (証明書チェーン) を指定します。証明書チェーンは、証明書のリストで構成されます。サーバーの証明書で始まり、ルート証明書で終了します。
- e. オプション [Thumbprint or fingerprint] (サムプリントまたはフィンガープリント) を指定します。これは、すべての証明書データとその署名に対してコンピューティングされた証明書のハッシュです。
- f. [Exponent] (指数) を指定します。これは RSA パブリックキーの指数値です。これは、Base64urlUInt でエンコードされた値として表されます。
- g. [Modulus] (係数) を指定します。これは RSA パブリックキーの指数値です。これは、Base64urlUInt でエンコードされた値として表されます。
- h. [Save key] (キーを保存) を選択して新しいキーを保存します。

8. [Advanced configuration] (詳細設定) の [Optional] (オプション):
 - a. [Username] (ユーザーネーム) を指定して ACL チェックで使します。
 - b. 1 つ以上の [Groups] (グループ) を指定して、ACL チェックで使します。
 - c. トークン発行者を検証する [Issuer] (発行者) を指定します。
 - d. [Client Id(s)] (クライアント ID) を指定します。JWT のオーディエンスと一致する正規表現を指定する必要があります。
9. [Provisioning details] (プロビジョニングの詳細) ページで、[Developer edition] (デベロッパーエディション) を選択します。
10. [Create] (作成) を選択してインデックスを作成します。
11. インデックスが作成されるまで待ちます。は、インデックスのハードウェアを Amazon Kendra プロビジョニングします。この演算には時間がかかる場合があります。

CLI

JWT は、AWS Secrets Manager の内部のパブリックキーで使できます。Secrets Manager ARN が必要であり、Amazon Kendra ロールには Secrets Manager リソース `GetSecretValue` のへのアクセス権が必要です。Secrets Manager リソースを で暗号化する場合 AWS KMS、ロールには復号アクションへのアクセス権も必要です。

JSON 入力ファイル AWS CLI を使して でインデックスを作成するには、まず目的のパラメータを使して JSON ファイルを作成します。

```
{
  "Name": "user-context",
  "Edition": "ENTERPRISE_EDITION",
  "RoleArn": "arn:aws:iam::account id:role:/my-role",
  "UserTokenConfigurationList": [
    {
      "JwtTokenTypeConfiguration": {
        "KeyLocation": "SECRET_MANAGER",
        "Issuer": "optional: specify the issuer url",
        "ClaimRegex": "optional: regex to validate claims in the token",
        "UserNameAttributeField": "optional: user",
        "GroupAttributeField": "optional: group",
        "SecretManagerArn": "arn:aws:secretsmanager:us-west-2:account
id:secret:/my-user-context-secret"
      }
    }
  ]
}
```

```
    ],      "UserContextPolicy": "USER_TOKEN"
  }
```

デフォルトのユーザーフィールド名とグループフィールド名を上書きできます。UserNameAttributeField のデフォルト値は「ユーザー」です。GroupAttributeField のデフォルト値は「グループ」です。

次に、入力ファイルを使用して、create-index を呼び出します。例えば、JSON ファイルの名前が create-index-openid.json の場合、以下を使用できます。

```
aws kendra create-index --cli-input-json file://create-index-openid.json
```

シークレットの形式は次のとおりです Secrets Manager。

```
{
  "keys": [
    {
      "alg": "RS256|RS384|RS512",
      "kty": "RSA", //this can be RSA only for now
      "use": "sig", //this value can be sig only for now
      "n": "modulus of standard pem",
      "e": "exponent of standard pem",
      "kid": "key_id",
      "x5t": "certificate thumbprint for x.509 cert",
      "x5c": [
        "certificate chain"
      ]
    }
  ]
}
```

JWT の詳細については、jwt.io を参照してください。

Python

```
response = kendra.create_index(
    Name='user-context',
    Edition='ENTERPRISE_EDITION',
    RoleArn='arn:aws:iam::account_id:role:/my-role',
    UserTokenConfigurationList=[
        {
            "JwtTokenTypeConfiguration": {
```

```
        "KeyLocation": "URL",
        "Issuer": "optional: specify the issuer url",
        "ClaimRegex": "optional: regex to validate claims in the token",
        "UserNameAttributeField": "optional: user",
        "GroupAttributeField": "optional: group",
        "SecretManagerArn": "arn:aws:secretsmanager:us-west-2:account
id:secret:/my-user-context-secret"
    }
}
],
UserContextPolicy='USER_TOKEN'
)
```

JSON の使用

次の例は、インデックスの作成時にユーザーアクセスコントロールに JSON を使用方法を示しています。

Warning

JSON トークンは検証されていないペイロードです。これは、Amazon Kendra へのリクエストが信頼できるサーバーから送信され、ブラウザからのリクエストではない場合にのみ使用してください。

Console

1. [Create index] (インデックスの作成) を選択して、新しいインデックスの作成を開始します。
2. [Specify index details] (インデックスの詳細の指定) ページで、インデックスに名前と説明を付けます。
3. [IAM ロール] には、[ロール] を選択するか、または [新規ロールを作成] を選択し、新しいロールを作成してロール名を指定します。IAM ロールには「AmazonKendra-」というプレフィックスが付きます。
4. その他のフィールドはすべてデフォルトのままにしておきます。[Next (次へ)] を選択します。
5. [Configure user access control] (ユーザーアクセスコントロールの設定) ページの、[Access control settings] (アクセスコントロールの設定) で、[Yes] (はい) を選択し、アクセス制御にトークンを使用します。

6. [Token configuration] (トークンの設定) で、[Token type] (トークンタイプ) は [JSON] を選択します。
7. [ユーザー名] を指定して ACL チェックで使⽤します。
8. 1 つ以上の [Groups] (グループ) を指定して、ACL チェックで使⽤します。
9. [Next (次へ)] を選択します。
10. [Provisioning details] (プロビジョニングの詳細) ページで、[Developer edition] (デベロッパーエディション) を選択します。
11. [Create] (作成) を選択してインデックスを作成します。
12. インデックスが作成されるまで待ちます。は、インデックスのハードウェアを Amazon Kendra プロビジョニングします。この演算には時間がかかる場合があります。

CLI

JSON 入力ファイル AWS CLI を使⽤して でインデックスを作成するには、まず目的のパラメータを使⽤して JSON ファイルを作成します。

```
{
  "Name": "user-context",
  "Edition": "ENTERPRISE_EDITION",
  "RoleArn": "arn:aws:iam::account-id:role:/my-role",
  "UserTokenConfigurations": [
    {
      "JsonTokenTypeConfiguration": {
        "UserNameAttributeField": "user",
        "GroupAttributeField": "group"
      }
    }
  ],
  "UserContextPolicy": "USER_TOKEN"
}
```

次に、入力ファイルを使⽤して、create-index を呼び出します。例えば、JSON ファイルの名前が create-index-openid.json の場合、以下を使⽤できます。

```
aws kendra create-index --cli-input-json file://create-index-openid.json
```

に Open ID を使⽤していない場合は AWS IAM Identity Center、トークンを JSON 形式で送信できます。その場合は、JSON トークンのどのフィールドにユーザー名が含まれ、どのフィールド

にグループが含まれているかを指定する必要があります。グループフィールドの値は JSON 文字列配列でなければなりません。例えば、SAML を使用している場合、トークンは次のようになります。

```
{
  "username" : "user1",
  "groups": [
    "group1",
    "group2"
  ]
}
```

TokenConfiguration は、ユーザー名とグループフィールド名を指定します。

```
{
  "UserNameAttributeField": "username",
  "GroupAttributeField": "groups"
}
```

Python

```
response = kendra.create_index(
    Name='user-context',
    Edition='ENTERPRISE_EDITION',
    RoleArn='arn:aws:iam::account-id:role:/my-role',
    UserTokenConfigurations=[
        {
            "JwtTokenTypeConfiguration": {
                "UserNameAttributeField": "user",
                "GroupAttributeField": "group",
            }
        }
    ],
    UserContextPolicy='USER_TOKEN'
)
```

データソースコネクタの作成

のデータソースコネクタを作成して Amazon Kendra、ドキュメントに接続してインデックスを作成できます。は、Microsoft SharePoint、Google Drive、およびその他の多くのプロバイダーに接続 Amazon Kendra できます。データソースコネクタを作成するときは、ソースリポジトリへの接続に必要な Amazon Kendra 設定情報を指定します。ドキュメントをインデックスに直接追加する場合とは異なり、データソースを定期的にスキャンしてインデックスを更新できます。

たとえば、Amazon S3 バケットに保存されている税ドキュメントのリポジトリがあるとします。ときどき、既存のドキュメントが変更され、新しいドキュメントが随時リポジトリに追加されます。リポジトリをデータソース Amazon Kendra として に追加した場合、データソースとインデックス間の定期的な同期を設定することで、インデックスを最新の状態に保つことができます。

コンソールまたは [StartDataSourceSyncJob](#) API を使用してインデックスを手動で更新することを選択できます。それ以外の場合は、インデックスを更新してデータソースと同期させるスケジュールを設定します。

インデックスには複数のデータソースを使用できます。各データソースには、独自の更新スケジュールを設定できます。例えば、アーカイブが変更されるたびに、アーカイブされたドキュメントを手動で更新しながら、作業中のドキュメントのインデックスを毎日更新したり、時間ごとに更新したりできます。

ドキュメント取り込みプロセス中にドキュメントメタデータまたは属性とコンテンツを変更する場合は、「[Amazon Kendra Custom Document Enrichment](#)」を参照してください。

Note

各ドキュメント ID はインデックスごとに一意である必要があります。一意の ID でドキュメントにインデックスを付けるデータソースを作成してから、BatchPutDocument API を使用して同じドキュメントにインデックスを付けることはできません。その逆も同様です。データソースを削除してから BatchPutDocument API を使用して同じドキュメントにインデックスを付けることができます。その逆も可能です。BatchPutDocument および BatchDeleteDocument APIs を同じドキュメントセットの Amazon Kendra データソースコネクタと組み合わせて使用すると、データとの不整合が発生する可能性があります。代わりに、[Amazon Kendra カスタムデータソースコネクタ](#)の使用をお勧めします。

Note

インデックスに追加されるファイルは、UTF-8 でエンコードされたバイトストリームに存在する必要があります。のドキュメントの詳細については Amazon Kendra、[「ドキュメント」](#)を参照してください。

更新スケジュールの設定

データソースを作成または更新するときに、コンソールか、または Schedule パラメータを使用して、データソースを定期的に更新するように構成します。パラメータの内容は、cron 形式スケジュール文字列、またはインデックスをオンデマンドで更新することを示す空の文字列のいずれかを保持する文字列です。cron 式の形式については、[「ユーザーガイド」の「ルールのスケジュール式」](#)を参照してください。は cron 式のみ Amazon Kendra をサポートしています。Amazon CloudWatch Events rate 式はサポートしていません。

言語設定

サポートされている言語で、データソース内のすべてのドキュメントにインデックスを作成できます。[CreateDataSource](#) を呼び出すときに、データソース内のすべてのドキュメントの言語コードを指定します。ドキュメントにメタデータフィールドで指定された言語コードがない場合、データソースレベルですべてのドキュメントに指定された言語コードを使用して、ドキュメントのインデックスが作成されます。言語を指定しない場合、Amazon Kendra はデフォルトで英語でデータソースのドキュメントをインデックス作成します。コードを含む、サポートされている言語の詳細については、[英語以外の言語でドキュメントを追加する](#)を参照してください。

コンソールを使用するサポートされている言語で、データソース内のすべてのドキュメントにインデックスを作成できます。新しいデータソースを追加する場合、[データソース] に移動してデータソースを編集するか、[データソースを追加] します。[Specify data source details] (データソースの詳細を指定) ページで、[Language] (言語) のドロップダウンから言語を選択します。Update (更新) を選択するか、続けて構成情報を入力してデータソースに接続します。

データソースコネクタ

このセクションでは、と Amazon Kendra APIs Amazon Kendra でを使用して、サポートされているデータベース AWS Management Console とデータソースリポジトリ Amazon Kendra に接続する方法について説明します。

トピック

- [データソーステンプレートスキーマ](#)
- [Adobe Experience Manager](#)
- [Alfresco](#)
- [Aurora \(MySQL\)](#)
- [Aurora \(PostgreSQL\)](#)
- [Amazon FSx \(Windows\)](#)
- [Amazon FSx \(NetApp ONTAP\)](#)
- [Amazon RDS/Aurora](#)
- [Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\)](#)
- [Amazon RDS \(MySQL\)](#)
- [Amazon RDS \(Oracle\)](#)
- [Amazon RDS \(PostgreSQL\)](#)
- [Amazon S3](#)
- [Amazon Kendra ウェブクローラー](#)
- [\[Box\] \(ボックス\)](#)
- [Confluence](#)
- [カスタムデータソースコネクタ](#)
- [Dropbox](#)
- [Drupal](#)
- [GitHub](#)
- [Gmail](#)
- [Google Drive](#)
- [IBM DB2](#)
- [Jira](#)
- [Microsoft Exchange](#)
- [Microsoft OneDrive](#)
- [Microsoft SharePoint](#)
- [Microsoft SQL Server](#)

- [Microsoft Teams](#)
- [Microsoft Yammer](#)
- [MySQL](#)
- [Oracle Database](#)
- [PostgreSQL](#)
- [Quip](#)
- [Salesforce](#)
- [ServiceNow](#)
- [Slack](#)
- [Zendesk](#)

データソーステンプレートスキーマ

以下は、テンプレートがサポートされているデータソースのテンプレートスキーマです。

トピック

- [Adobe Experience Manager テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon FSx \(Windows\) テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon FSx \(NetApp ONTAP\) テンプレートスキーマ](#)
- [Alfresco テンプレートスキーマ](#)
- [Aurora \(MySQL\) テンプレートスキーマ](#)
- [Aurora \(PostgreSQL\) テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\) テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon RDS \(MySQL\) テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon RDS \(Oracle\) テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon RDS \(PostgreSQL\) テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon S3 テンプレートスキーマ](#)
- [Amazon Kendra ウェブクローラーテンプレートスキーマ](#)
- [Confluence テンプレートスキーマ](#)
- [Dropbox テンプレートスキーマ](#)

- [Drupal テンプレートスキーマ](#)
- [GitHub テンプレートスキーマ](#)
- [Gmail テンプレートスキーマ](#)
- [Google Drive テンプレートスキーマ](#)
- [IBM DB2 テンプレートスキーマ](#)
- [Microsoft Exchange テンプレートスキーマ](#)
- [Microsoft OneDrive テンプレートスキーマ](#)
- [Microsoft SharePoint テンプレートスキーマ](#)
- [Microsoft SQL サーバーテンプレートスキーマ](#)
- [Microsoft Teams テンプレートスキーマ](#)
- [Microsoft Yammer テンプレートスキーマ](#)
- [MySQL テンプレートスキーマ](#)
- [Oracle Database テンプレートスキーマ](#)
- [PostgreSQL テンプレートスキーマ](#)
- [Salesforce テンプレートスキーマ](#)
- [ServiceNow テンプレートスキーマ](#)
- [Slack テンプレートスキーマ](#)
- [Zendesk テンプレートスキーマ](#)

Adobe Experience Manager テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。Adobe Experience Manager ホスト URL、認証タイプ、接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、Adobe Experience Manager (AEM) をクラウドサービスとして使用するか AEM オンプレミスとして使用するかを指定します。また、データソースのタイプを AEM に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。詳細については、「[Adobe Experience Manager JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、AEM JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
aemUrl	Adobe Experience Manager ホスト URL。 例えば、AEM オンプレミスを使用する場合は、ホスト名とポートを含めます。https://hostname:port。または、AEM をクラウドサービスとして使用する場合は、作成者 URL を使用できます。https://author-xxxxxx-xxxxxx.adobe.aemcloud.com。
authType	使用する認証のタイプ (Basic または OAuth2)。
deploymentType	使用する Adobe Experience Manager のタイプ (CLOUD または ON_PREMISE)。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。 例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- page - アセット	Adobe Experience Manager ページとアセットの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
timeZoneId	AEM オンプレミスを使用し、サーバーのタイムゾーンが Amazon Kendra AEM コネクタまたはインデックスのタイムゾーンと異なる場合は、AEM コネクタまたはインデックスに合わせてサーバーのタイムゾーンを指定できます。

設定	説明
	AEM オンプレミスのデフォルトのタイムゾーンは、Amazon Kendra AEM コネクタまたはインデックスのタイムゾーンです。クラウドサービスとしての AEM のデフォルトのタイムゾーンはグリニッジ標準時です。
• pageRootPaths • assetRootPaths	ページとアセットのルートパスのリスト。例えば、ページのルートパスは /content/sub で、アセットのルートパスは /content/sub/asset1 という場合があります。
crawlAssets	アセットをクロールする場合は、true にします。
crawlPages	ページをクロールする場合は、true にします。
• pagePathInclusionPatterns • pageNameInclusionPatterns • assetPathInclusionPatterns • assetTypeInclusionPatterns • assetNameInclusionPatterns	特定のページやアセットを Adobe Experience Manager データソースに含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するページやアセットは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないページやアセットは、インデックスから除外されます。ページやアセットが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。

設定	説明
• <code>pagePathExclusionPatterns</code> • <code>pageNameExclusionPatterns</code> • <code>assetPathExclusionPatterns</code> • <code>assetTypeInclusionPatterns</code> • <code>assetNameInclusionPatterns</code>	Adobe Experience Manager データソースにある特定のページやアセットを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するページやアセットは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないページやアセットは、インデックスに含まれます。ページやアセットが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。
<code>pageComponents</code>	インデックスを作成する特定のページコンポーネントの名前のリスト。
<code>contentFragmentVariations</code>	インデックスを作成する Adobe Experience Manager コンテンツフラグメントの特定の保存済みバリエーションの名前のリスト。
<code>type</code>	データソースのタイプ。データソースタイプとして AEM を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	Adobe Experience Manager への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。これらのキーと値のペアの詳細については、「<u>Adobe Experience Manager の接続手順</u>」を参照してください。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Adobe Experience Manager JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    {
      "connectionConfiguration": {
        "type": "object",
        "properties": {
          {
            "repositoryEndpointMetadata": {
              {
                "type": "object",
                "properties": {
                  {
                    "aemUrl": {
                      {
                        "type": "string",
                        "pattern": "https:.*"
                      },
                    },
                    "authType": {
                      "type": "string",
                      "enum": ["Basic", "OAuth2"]
                    },
                    "deploymentType": {
                      "type": "string",
                      "enum": ["CLOUD", "ON_PREMISE"]
                    }
                  },
                },
                "required": [
                  "aemUrl",
                  "authType",
                  "deploymentType"
                ]
              },
            },
            "required": [
              "repositoryEndpointMetadata"
            ]
          },
        },
        "repositoryConfigurations": {
```



```
"type": "object",
"properties":
{
  "page":
  {
    "type": "object",
    "properties":
    {
      "fieldMappings":
      {
        "type": "array",
        "items":
        [
          {
            "type": "object",
            "properties":
            {
              "indexFieldName":
              {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType":
              {
                "type": "string",
                "enum":
                [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "DATE",
                  "LONG"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName":
              {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat":
              {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            },
            "required":
            [
```

```
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
    }
    ]
    },
    "required":
    [
        "fieldMappings"
    ]
},
"asset":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":
                    {
                        "indexFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType":
                        {
                            "type": "string",
                            "enum":
                            [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE",
                                "LONG"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName":
                        {
```

```

        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "timeZoneId": {
      "type": "string",
      "enum": [
        "Africa/Abidjan",
        "Africa/Accra",
        "Africa/Addis_Ababa",
        "Africa/Algiers",
        "Africa/Asmara",
        "Africa/Asmera",
        "Africa/Bamako",
        "Africa/Bangui",
        "Africa/Banjul",
        "Africa/Bissau",
        "Africa/Blantyre",
        "Africa/Brazzaville",

```

```
"Africa/Bujumbura",
"Africa/Cairo",
"Africa/Casablanca",
"Africa/Ceuta",
"Africa/Conakry",
"Africa/Dakar",
"Africa/Dar_es_Salaam",
"Africa/Djibouti",
"Africa/Douala",
"Africa/El_Aaiun",
"Africa/Freetown",
"Africa/Gaborone",
"Africa/Harare",
"Africa/Johannesburg",
"Africa/Juba",
"Africa/Kampala",
"Africa/Khartoum",
"Africa/Kigali",
"Africa/Kinshasa",
"Africa/Lagos",
"Africa/Libreville",
"Africa/Lome",
"Africa/Luanda",
"Africa/Lubumbashi",
"Africa/Lusaka",
"Africa/Malabo",
"Africa/Maputo",
"Africa/Maseru",
"Africa/Mbabane",
"Africa/Mogadishu",
"Africa/Monrovia",
"Africa/Nairobi",
"Africa/Ndjamena",
"Africa/Niamey",
"Africa/Nouakchott",
"Africa/Ouagadougou",
"Africa/Porto-Novo",
"Africa/Sao_Tome",
"Africa/Timbuktu",
"Africa/Tripoli",
"Africa/Tunis",
"Africa/Windhoek",
"America/Adak",
"America/Anchorage",
```

```
"America/Anguilla",
"America/Antigua",
"America/Araguaina",
"America/Argentina/Buenos_Aires",
"America/Argentina/Catamarca",
"America/Argentina/ComodRivadavia",
"America/Argentina/Cordoba",
"America/Argentina/Jujuy",
"America/Argentina/La_Rioja",
"America/Argentina/Mendoza",
"America/Argentina/Rio_Gallegos",
"America/Argentina/Salta",
"America/Argentina/San_Juan",
"America/Argentina/San_Luis",
"America/Argentina/Tucuman",
"America/Argentina/Ushuaia",
"America/Aruba",
"America/Asuncion",
"America/Atikokan",
"America/Atka",
"America/Bahia",
"America/Bahia_Banderas",
"America/Barbados",
"America/Belem",
"America/Belize",
"America/Blanc-Sablon",
"America/Boa_Vista",
"America/Bogota",
"America/Boise",
"America/Buenos_Aires",
"America/Cambridge_Bay",
"America/Campo_Grande",
"America/Cancun",
"America/Caracas",
"America/Catamarca",
"America/Cayenne",
"America/Cayman",
"America/Chicago",
"America/Chihuahua",
"America/Ciudad_Juarez",
"America/Coral_Harbour",
"America/Cordoba",
"America/Costa_Rica",
"America/Creston",
```

```
"America/Cuiaba",
"America/Curacao",
"America/Danmarkshavn",
"America/Dawson",
"America/Dawson_Creek",
"America/Denver",
"America/Detroit",
"America/Dominica",
"America/Edmonton",
"America/Eirunepe",
"America/El_Salvador",
"America/Ensenada",
"America/Fort_Nelson",
"America/Fort_Wayne",
"America/Fortaleza",
"America/Glace_Bay",
"America/Godthab",
"America/Goose_Bay",
"America/Grand_Turk",
"America/Grenada",
"America/Guadeloupe",
"America/Guatemala",
"America/Guayaquil",
"America/Guyana",
"America/Halifax",
"America/Havana",
"America/Hermosillo",
"America/Indiana/Indianapolis",
"America/Indiana/Knox",
"America/Indiana/Marengo",
"America/Indiana/Petersburg",
"America/Indiana/Tell_City",
"America/Indiana/Vevay",
"America/Indiana/Vincennes",
"America/Indiana/Winamac",
"America/Indianapolis",
"America/Inuvik",
"America/Iqaluit",
"America/Jamaica",
"America/Jujuy",
"America/Juneau",
"America/Kentucky/Louisville",
"America/Kentucky/Monticello",
"America/Knox_IN",
```

```
"America/Kralendijk",
"America/La_Paz",
"America/Lima",
"America/Los_Angeles",
"America/Louisville",
"America/Lower_Princes",
"America/Maceio",
"America/Managua",
"America/Manaus",
"America/Marigot",
"America/Martinique",
"America/Matamoros",
"America/Mazatlan",
"America/Mendoza",
"America/Menominee",
"America/Merida",
"America/Metlakatla",
"America/Mexico_City",
"America/Miquelon",
"America/Moncton",
"America/Monterrey",
"America/Montevideo",
"America/Montreal",
"America/Montserrat",
"America/Nassau",
"America/New_York",
"America/Nipigon",
"America/Nome",
"America/Noronha",
"America/North_Dakota/Beulah",
"America/North_Dakota/Center",
"America/North_Dakota/New_Salem",
"America/Nuuk",
"America/Ojinaga",
"America/Panama",
"America/Pangnirtung",
"America/Paramaribo",
"America/Phoenix",
"America/Port-au-Prince",
"America/Port_of_Spain",
"America/Porto_Acre",
"America/Porto_Velho",
"America/Puerto_Rico",
"America/Punta_Arenas",
```

```
"America/Rainy_River",
"America/Rankin_Inlet",
"America/Recife",
"America/Regina",
"America/Resolute",
"America/Rio_Branco",
"America/Rosario",
"America/Santa_Isabel",
"America/Santarem",
"America/Santiago",
"America/Santo_Domingo",
"America/Sao_Paulo",
"America/Scoresbysund",
"America/Shiprock",
"America/Sitka",
"America/St_Barthelemy",
"America/St_Johns",
"America/St_Kitts",
"America/St_Lucia",
"America/St_Thomas",
"America/St_Vincent",
"America/Swift_Current",
"America/Tegucigalpa",
"America/Thule",
"America/Thunder_Bay",
"America/Tijuana",
"America/Toronto",
"America/Tortola",
"America/Vancouver",
"America/Virgin",
"America/Whitehorse",
"America/Winnipeg",
"America/Yakutat",
"America/Yellowknife",
"Antarctica/Casey",
"Antarctica/Davis",
"Antarctica/DumontDUrville",
"Antarctica/Macquarie",
"Antarctica/Mawson",
"Antarctica/McMurdo",
"Antarctica/Palmer",
"Antarctica/Rothera",
"Antarctica/South_Pole",
"Antarctica/Syowa",
```



```
"Antarctica/Troll",  
"Antarctica/Vostok",  
"Arctic/Longyearbyen",  
"Asia/Aden",  
"Asia/Almaty",  
"Asia/Amman",  
"Asia/Anadyr",  
"Asia/Aqtau",  
"Asia/Aqtobe",  
"Asia/Ashgabat",  
"Asia/Ashkhabad",  
"Asia/Atyrau",  
"Asia/Baghdad",  
"Asia/Bahrain",  
"Asia/Baku",  
"Asia/Bangkok",  
"Asia/Barnaul",  
"Asia/Beirut",  
"Asia/Bishkek",  
"Asia/Brunei",  
"Asia/Calcutta",  
"Asia/Chita",  
"Asia/Choibalsan",  
"Asia/Chongqing",  
"Asia/Chungking",  
"Asia/Colombo",  
"Asia/Dacca",  
"Asia/Damascus",  
"Asia/Dhaka",  
"Asia/Dili",  
"Asia/Dubai",  
"Asia/Dushanbe",  
"Asia/Famagusta",  
"Asia/Gaza",  
"Asia/Harbin",  
"Asia/Hebron",  
"Asia/Ho_Chi_Minh",  
"Asia/Hong_Kong",  
"Asia/Hovd",  
"Asia/Irkutsk",  
"Asia/Istanbul",  
"Asia/Jakarta",  
"Asia/Jayapura",  
"Asia/Jerusalem",
```

```
"Asia/Kabul",
"Asia/Kamchatka",
"Asia/Karachi",
"Asia/Kashgar",
"Asia/Kathmandu",
"Asia/Katmandu",
"Asia/Khandyga",
"Asia/Kolkata",
"Asia/Krasnoyarsk",
"Asia/Kuala_Lumpur",
"Asia/Kuching",
"Asia/Kuwait",
"Asia/Macao",
"Asia/Macau",
"Asia/Magadan",
"Asia/Makassar",
"Asia/Manila",
"Asia/Muscat",
"Asia/Nicosia",
"Asia/Novokuznetsk",
"Asia/Novosibirsk",
"Asia/Omsk",
"Asia/Oral",
"Asia/Phnom_Penh",
"Asia/Pontianak",
"Asia/Pyongyang",
"Asia/Qatar",
"Asia/Qostanay",
"Asia/Qyzylorda",
"Asia/Rangoon",
"Asia/Riyadh",
"Asia/Saigon",
"Asia/Sakhalin",
"Asia/Samarkand",
"Asia/Seoul",
"Asia/Shanghai",
"Asia/Singapore",
"Asia/Srednekolymsk",
"Asia/Taipei",
"Asia/Tashkent",
"Asia/Tbilisi",
"Asia/Tehran",
"Asia/Tel_Aviv",
"Asia/Thimbu",
```

```
"Asia/Thimphu",
"Asia/Tokyo",
"Asia/Tomsk",
"Asia/Ujung_Pandang",
"Asia/Ulaanbaatar",
"Asia/Ulan_Bator",
"Asia/Urumqi",
"Asia/Ust-Nera",
"Asia/Vientiane",
"Asia/Vladivostok",
"Asia/Yakutsk",
"Asia/Yangon",
"Asia/Yekaterinburg",
"Asia/Yerevan",
"Atlantic/Azores",
"Atlantic/Bermuda",
"Atlantic/Canary",
"Atlantic/Cape_Verde",
"Atlantic/Faeroe",
"Atlantic/Faroe",
"Atlantic/Jan_Mayen",
"Atlantic/Madeira",
"Atlantic/Reykjavik",
"Atlantic/South_Georgia",
"Atlantic/St_Helena",
"Atlantic/Stanley",
"Australia/ACT",
"Australia/Adelaide",
"Australia/Brisbane",
"Australia/Broken_Hill",
"Australia/Canberra",
"Australia/Currie",
"Australia/Darwin",
"Australia/Eucla",
"Australia/Hobart",
"Australia/LHI",
"Australia/Lindeman",
"Australia/Lord_Howe",
"Australia/Melbourne",
"Australia/NSW",
"Australia/North",
"Australia/Perth",
"Australia/Queensland",
"Australia/South",
```

```
"Australia/Sydney",
"Australia/Tasmania",
"Australia/Victoria",
"Australia/West",
"Australia/Yancowinna",
"Brazil/Acre",
"Brazil/DeNoronha",
"Brazil/East",
"Brazil/West",
"CET",
"CST6CDT",
"Canada/Atlantic",
"Canada/Central",
"Canada/Eastern",
"Canada/Mountain",
"Canada/Newfoundland",
"Canada/Pacific",
"Canada/Saskatchewan",
"Canada/Yukon",
"Chile/Continental",
"Chile/EasterIsland",
"Cuba",
"EET",
"EST5EDT",
"Egypt",
"Eire",
"Etc/GMT",
"Etc/GMT+0",
"Etc/GMT+1",
"Etc/GMT+10",
"Etc/GMT+11",
"Etc/GMT+12",
"Etc/GMT+2",
"Etc/GMT+3",
"Etc/GMT+4",
"Etc/GMT+5",
"Etc/GMT+6",
"Etc/GMT+7",
"Etc/GMT+8",
"Etc/GMT+9",
"Etc/GMT-0",
"Etc/GMT-1",
"Etc/GMT-10",
"Etc/GMT-11",
```

```
"Etc/GMT-12",  
"Etc/GMT-13",  
"Etc/GMT-14",  
"Etc/GMT-2",  
"Etc/GMT-3",  
"Etc/GMT-4",  
"Etc/GMT-5",  
"Etc/GMT-6",  
"Etc/GMT-7",  
"Etc/GMT-8",  
"Etc/GMT-9",  
"Etc/GMT0",  
"Etc/Greenwich",  
"Etc/UCT",  
"Etc/UTC",  
"Etc/Universal",  
"Etc/Zulu",  
"Europe/Amsterdam",  
"Europe/Andorra",  
"Europe/Astrakhan",  
"Europe/Athens",  
"Europe/Belfast",  
"Europe/Belgrade",  
"Europe/Berlin",  
"Europe/Bratislava",  
"Europe/Brussels",  
"Europe/Bucharest",  
"Europe/Budapest",  
"Europe/Busingen",  
"Europe/Chisinau",  
"Europe/Copenhagen",  
"Europe/Dublin",  
"Europe/Gibraltar",  
"Europe/Guernsey",  
"Europe/Helsinki",  
"Europe/Isle_of_Man",  
"Europe/Istanbul",  
"Europe/Jersey",  
"Europe/Kaliningrad",  
"Europe/Kiev",  
"Europe/Kirov",  
"Europe/Kyiv",  
"Europe/Lisbon",  
"Europe/Ljubljana",
```

```
"Europe/London",
"Europe/Luxembourg",
"Europe/Madrid",
"Europe/Malta",
"Europe/Mariehamn",
"Europe/Minsk",
"Europe/Monaco",
"Europe/Moscow",
"Europe/Nicosia",
"Europe/Oslo",
"Europe/Paris",
"Europe/Podgorica",
"Europe/Prague",
"Europe/Riga",
"Europe/Rome",
"Europe/Samara",
"Europe/San_Marino",
"Europe/Sarajevo",
"Europe/Saratov",
"Europe/Simferopol",
"Europe/Skopje",
"Europe/Sofia",
"Europe/Stockholm",
"Europe/Tallinn",
"Europe/Tirane",
"Europe/Tiraspol",
"Europe/Ulyanovsk",
"Europe/Uzhgorod",
"Europe/Vaduz",
"Europe/Vatican",
"Europe/Vienna",
"Europe/Vilnius",
"Europe/Volgograd",
"Europe/Warsaw",
"Europe/Zagreb",
"Europe/Zaporozhye",
"Europe/Zurich",
"GB",
"GB-Eire",
"GMT",
"GMT0",
"Greenwich",
"Hongkong",
"Iceland",
```

```
"Indian/Antananarivo",
"Indian/Chagos",
"Indian/Christmas",
"Indian/Cocos",
"Indian/Comoro",
"Indian/Kerguelen",
"Indian/Mahe",
"Indian/Maldives",
"Indian/Mauritius",
"Indian/Mayotte",
"Indian/Reunion",
"Iran",
"Israel",
"Jamaica",
"Japan",
"Kwajalein",
"Libya",
"MET",
"MST7MDT",
"Mexico/BajaNorte",
"Mexico/BajaSur",
"Mexico/General",
"NZ",
"NZ-CHAT",
"Navajo",
"PRC",
"PST8PDT",
"Pacific/Apia",
"Pacific/Auckland",
"Pacific/Bougainville",
"Pacific/Chatham",
"Pacific/Chuuk",
"Pacific/Easter",
"Pacific/Efate",
"Pacific/Enderbury",
"Pacific/Fakaofu",
"Pacific/Fiji",
"Pacific/Funafuti",
"Pacific/Galapagos",
"Pacific/Gambier",
"Pacific/Guadalcanal",
"Pacific/Guam",
"Pacific/Honolulu",
"Pacific/Johnston",
```

```
"Pacific/Kanton",
"Pacific/Kiritimati",
"Pacific/Kosrae",
"Pacific/Kwajalein",
"Pacific/Majuro",
"Pacific/Marquesas",
"Pacific/Midway",
"Pacific/Nauru",
"Pacific/Niue",
"Pacific/Norfolk",
"Pacific/Noumea",
"Pacific/Pago_Pago",
"Pacific/Palau",
"Pacific/Pitcairn",
"Pacific/Pohnpei",
"Pacific/Ponape",
"Pacific/Port_Moresby",
"Pacific/Rarotonga",
"Pacific/Saipan",
"Pacific/Samoa",
"Pacific/Tahiti",
"Pacific/Tarawa",
"Pacific/Tongatapu",
"Pacific/Truk",
"Pacific/Wake",
"Pacific/Wallis",
"Pacific/Yap",
"Poland",
"Portugal",
"ROK",
"Singapore",
"SystemV/AST4",
"SystemV/AST4ADT",
"SystemV/CST6",
"SystemV/CST6CDT",
"SystemV/EST5",
"SystemV/EST5EDT",
"SystemV/HST10",
"SystemV/MST7",
"SystemV/MST7MDT",
"SystemV/PST8",
"SystemV/PST8PDT",
"SystemV/YST9",
"SystemV/YST9YDT",
```



```
"Turkey",
"UCT",
"US/Alaska",
"US/Aleutian",
"US/Arizona",
"US/Central",
"US/East-Indiana",
"US/Eastern",
"US/Hawaii",
"US/Indiana-Starke",
"US/Michigan",
"US/Mountain",
"US/Pacific",
"US/Samoa",
"UTC",
"Universal",
"W-SU",
"WET",
"Zulu",
"EST",
"HST",
"MST",
"ACT",
"AET",
"AGT",
"ART",
"AST",
"BET",
"BST",
"CAT",
"CNT",
"CST",
"CTT",
"EAT",
"ECT",
"IET",
"IST",
"JST",
"MIT",
"NET",
"NST",
"PLT",
"PNT",
"PRT",
```

```
        "PST",
        "SST",
        "VST"
    ],
    "pageRootPaths":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "assetRootPaths":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "crawlAssets":
    {
        "type": "boolean"
    },
    "crawlPages":
    {
        "type": "boolean"
    },
    "pagePathInclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "pagePathExclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    }
}
```

```
    },
    "pageNameInclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "pageNameExclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "assetPathInclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "assetPathExclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "assetTypeInclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
        "items":
        {
            "type": "string"
        }
    },
    "assetTypeExclusionPatterns":
    {
        "type": "array",
```

```
    "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "assetNameInclusionPatterns":
    {
      "type": "array",
      "items":
        {
          "type": "string"
        }
    },
    "assetNameExclusionPatterns":
    {
      "type": "array",
      "items":
        {
          "type": "string"
        }
    },
    "pageComponents": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "object"
      }
    },
    "contentFragmentVariations": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "object"
      }
    },
    "cugExemptedPrincipals": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  },
  "required":
  [
  ],
  "type": {
```

```

    "type": "string",
    "pattern": "AEM"
  },
  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string",
    "minLength": 20,
    "maxLength": 2048
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}

```

Amazon FSx (Windows) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。ファイルシステム ID は、接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として指定します。また、データソースのタイプを FSX、認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定と

して指定する必要があります。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon FSx \(Windows\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon FSx (Windows) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
fileSystemId	Amazon FSx ファイルシステムの識別子。ファイルシステム ID は、Amazon FSx コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。
fileSystemType	Amazon FSx ファイルシステムタイプ。をファイルシステムのタイプWindows File Serverとして使用するには、を指定しますWINDOWS。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
すべて	Amazon FSx データソース内のファイルの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
isCrawlAcl	true ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールしま

設定	説明
	す。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「User context filtering」を参照してください。
inclusionPatterns	Amazon FSx データソースに特定のファイルを含めるための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
exclusionPatterns	Amazon FSx データソース内の特定のファイルを除外する正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
type	データソースのタイプ。Windows ファイルシステムデータソースの場合は、 を指定しますFSX。

Amazon FSx (Windows) JSON スキーマ

```
{
```



```

"$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
"type": "object",
"properties": {
  "connectionConfiguration": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "repositoryEndpointMetadata": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "fileSystemId": {
            "type": "string",
            "pattern": "fs-.*"
          },
          "fileSystemType": {
            "type": "string",
            "pattern": "WINDOWS"
          }
        },
        "required": ["fileSystemId", "fileSystemType"]
      }
    },
    "required": ["fileSystemId", "fileSystemType"]
  },
  "repositoryConfigurations": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "All": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
              {
                "type": "object",
                "properties": {
                  "indexFieldName": {
                    "type": "string"
                  },
                  "indexFieldType": {
                    "type": "string",
                    "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "DATE"]
                  },
                  "dataSourceFieldName": {
                    "type": "string"
                  }
                }
              }
            ]
          }
        }
      }
    }
  }
}
```

```
        "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}

]
}
},
"required": ["fieldMappings"]
}
},
"required": ["All"]
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "isCrawlAcl": {
            "type": "boolean"
        },
        "exclusionPatterns": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string"
            }
        },
        "inclusionPatterns": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string"
            }
        }
    },
    "required": []
},
"enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
},
"syncMode": {
```

```

    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL"
    ]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "FSX"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "enableIdentityCrawler",
  "additionalProperties",
  "type"
]
}

```

Amazon FSx (NetApp ONTAP) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、ファイルシステム ID とストレージ仮想マシン (SVM) を指定します。また、データソースのタイプを FSXONTAP、認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定として指定する必要があります。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon FSx \(NetApp ONTAP\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon FSx (NetApp ONTAP) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
fileSystemId	Amazon FSx ファイルシステムの識別子。ファイルシステム ID は、Amazon FSx コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。NetApp ONTAP の Amazon FSx コンソールでファイルシステムを作成する方法については、FSx for ONTAP ユーザーガイドの NetApp ONTAP 入門ガイド 」を参照してください。
fileSystemType	Amazon FSx ファイルシステムタイプ。をファイルシステムのタイプNetApp ONTAPとして使用するには、 を指定しますONTAP。
svmlId	のファイルシステムで使用する Amazon FSx ストレージ仮想マシン (SVM) の識別子NetApp p ONTAP。SVM ID をを見つけるには、Amazon FSx コンソールのファイルシステムダッシュボードに移動し、ファイルシステム ID を選択してから、Storage 仮想マシンを選択します。の Amazon FSx コンソールでファイルシステムを作成する方法についてはNetApp ONTAP、「FSx for ONTAP ユーザーガイド」の NetApp ONTAP 入門ガイド 」を参照してください。
protocolType	Windows に Common Internet File System (CIFS) プロトコルを使用するか、Linux に Network File System (NFS) プロトコルを使用するか。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。

設定	説明
ファイル	Amazon FSx データソース内のファイルの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。データソースフィールド名は、ファイルカスタムメタデータに存在する必要があります。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
crawlAcl	true ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「 User context filtering 」を参照してください。
inclusionPatterns	Amazon FSx データソースに特定のファイルを含めるための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
exclusionPatterns	Amazon FSx データソース内の特定のファイルを除外する正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
type	データソースのタイプ。NetApp ONTAP ファイルシステムのデータソースには、 を指定しますFSXONTAP。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
secretArn	Amazon FSx ファイルシステムへの接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "username": " <i>user@corp.example.com</i> ", "password": " <i>password</i>" }</pre> Amazon FSx ファイルシステムに NFS プロトコルを使用する場合、シークレットは次のキーを含む JSON 構造に保存されます。 <pre>{ "leftId": " <i>left ID</i> ", "rightId": " <i>right ID</i> ", "preSharedKey": " <i>pre-shared key</i> " }</pre>

Amazon FSx (NetApp ONTAP) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fileSystemId": {
              "type": "string",
              "pattern": "^(fs-[0-9a-f]{8,21})$"
            }
          }
        }
      }
    }
  }
}
```

```

    },
    "fileSystemType": {
      "type": "string",
      "enum": ["ONTAP"]
    },
    },
    "svmId": {
      "type": "string",
      "pattern": "^(svm-[0-9a-f]{17,21})$"
    },
    },
    "protocolType": {
      "type": "string",
      "enum": [
        "CIFS",
        "NFS"
      ]
    }
  },
  },
  "required": [
    "fileSystemId",
    "fileSystemType"
  ]
}
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "file": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "^[a-zA-Z_]{1,20})$"
                },
                "indexFieldType": {

```



```

        "type": "string",
        "enum": [
            "STRING",
            "STRING_LIST",
            "DATE",
            "LONG"
        ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
        "type": "string",
        "pattern": "^[a-zA-Z_]{1,20}$"
    },
    "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
],
"maxItems": 50
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
}
},
"required": [
    "file"
]
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "crawlAcl": {
            "type": "boolean"
        },
        "inclusionPatterns": {
            "type": "array",

```

```
    "items": {
      "type": "string",
      "maxLength": 30
    },
    "maxItems": 100
  },
  "exclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string",
      "maxLength": 30
    },
    "maxItems": 100
  }
},
"type": {
  "type": "string",
  "pattern": "FSXONTAP"
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FORCED_FULL_CRAWL",
    "FULL_CRAWL"
  ]
},
"secretArn": {
  "type": "string",
  "pattern": "arn:aws:secretsmanager:.*"
}
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Alfresco テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。Alfresco サイト ID、リポジトリ URL、ユーザーインターフェイス URL、認証タイプ、クラウドとオンプレミスのどちらを使用するか、クロールするコンテンツのタイプを指定します。これは接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として指定します。また、データソースのタイプを ALFRESCO に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Alfresco JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Alfresco JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
siteId	Alfresco サイトの識別子。
repoUrl	Alfresco リポジトリの URL。リポジトリ URL は Alfresco 管理者から取得できます。例えば、Alfresco クラウド (PaaS) を使用している場合、リポジトリ URL は、https://company.alfrescocloud.com になる可能性があります。または、Alfresco オンプレミスを使用している場合は、リポジトリ URL は https://company-alfresco-instance.company-domain.suffix:port になる可能性があります。
webAppUrl	Alfresco ユーザーインターフェイスの URL。Alfresco ユーザーインターフェイスの URL は Alfresco 管理者から取得できます。例えば、ユーザーインターフェイス URL は https://example.com とすることができます。

設定	説明
repositoryAdditionalProperties	リポジトリ/データソースエンドポイントに接続するための追加プロパティ。
authType	使用する認証のタイプ (OAuth2 または Basic)。
タイプ: (デプロイ)	使用する Alfresco のタイプ (PAAS または ON-PREM)
crawlType	クロールするコンテンツのタイプ。ASPECT (Alfresco で「アスペクト」とマークされているコンテンツ)、SITE_ID (特定の Alfresco サイト内のコンテンツ)、または ALL_SITES (すべての Alfresco サイトにわたるコンテンツ) のいずれかです。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- ドキュメント - コメント	Alfresco ドキュメントとコメントの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
aspectName	インデックスを作成する特定の「アスペクト」の名前。
aspectProperties	インデックスを作成する特定の「アスペクト」コンテンツプロパティのリスト。

設定	説明
enableFineGrainedControl	「アспект」をクロールする場合は、true にします。
isCrawlComment	true コメントをクロールします。
- inclusionFileNamePatterns - inclusionFileTypePatterns - inclusionFilePathPatterns	特定のファイルを Alfresco データソースに含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
- exclusionFileNamePatterns - exclusionFileTypePatterns - exclusionFilePathPatterns	Alfresco データソースにある特定のファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして ALFRESCO を指定します。

設定	説明
secretArn	への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)Alfresco。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 基本認証を使用している場合。 <pre>{ "username": " <i>user name</i>", "password": " <i>password</i>" }</pre> OAuth 2.0 認証を使用している場合。 <pre>{ "clientId": " <i>client ID</i>", "clientSecret": " <i>client secret</i>", "tokenUrl": " <i>token URL</i>" }</pre>

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Alfresco JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
```

```
"type": "object",
"properties": {
  "connectionConfiguration": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "repositoryEndpointMetadata": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "siteId": {
            "type": "string"
          },
          "repoUrl": {
            "type": "string"
          },
          "webAppUrl": {
            "type": "string"
          },
          "repositoryAdditionalProperties": {
            "type": "object",
            "properties": {
              "authType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "OAuth2",
                  "Basic"
                ]
              },
              "type": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "PAAS",
                  "ON_PREM"
                ]
              },
              "crawlType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "ASPECT",
                  "SITE_ID",
                  "ALL_SITES"
                ]
              }
            }
          }
        }
      }
    }
  }
}
```



```

    }
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
],
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": {
            "anyOf": [
              {
                "type": "object",
                "properties": {
                  "indexFieldName": {
                    "type": "string"
                  },
                  "indexFieldType": {
                    "type": "string",
                    "enum": [
                      "STRING",
                      "DATE",
                      "STRING_LIST",
                      "LONG"
                    ]
                  }
                }
              },
              {
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              },
              {
                "dateFieldFormat": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                }
              }
            ]
          }
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    }
  }
}

```

```

        ]
      }
    ]
  }
},
"required": [
  "fieldMappings"
],
"comment": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": {
        "anyOf": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "DATE",
                  "STRING_LIST",
                  "LONG"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            }
          },
          {
            "type": "string"
          }
        ]
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}

```

```

        ]
      }
    ]
  }
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "aspectName": {
      "type": "string"
    },
    "aspectProperties": {
      "type": "array"
    },
    "enableFineGrainedControl": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlComment": {
      "type": "boolean"
    },
    "inclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "inclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "inclusionFilePathPatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionFilePathPatterns": {
      "type": "array"
    }
  }
}

```

```
    }
  }
},
"type": {
  "type": "string",
  "pattern": "ALFRESCO"
},
"secretArn": {
  "type": "string",
  "minLength": 20,
  "maxLength": 2048
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FORCED_FULL_CRAWL",
    "FULL_CRAWL"
  ]
},
"enableIdentityCrawler": {
  "type": "boolean"
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
}
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "additionalProperties",
  "type",
  "secretArn"
]
}
```

Aurora (MySQL) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを `mysql` に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として `TEMPLATE` を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Aurora \(MySQL\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Aurora (MySQL) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
<code>connectionConfiguration</code>	データソースのエンドポイントの設定情報。
<code>repositoryEndpointMetadata</code>	データソースの接続に必要な設定情報。 <code>dbType</code> — 使用する Java データベースのタイプ。、、<code>mysql</code>、<code>db2</code>、<code>postgresql</code>、<code>oracle</code>、または のいずれかで <code>sqlserver</code>。 <code>dbHost</code> - データベースのホスト名。 <code>dbPort</code> - データベースポート。 <code>dbInstance</code> - データベースインスタンス。
<code>repositoryConfigurations</code>	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
<code>additionalProperties</code>	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "database user name", "password": "password"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Aurora (MySQL) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          },
          "required": [
            "dbType",
            "dbHost",
            "dbPort",
            "dbInstance"
          ]
        }
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  },
  },
  "required": [
    "repositoryEndpointMetadata"
  ]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
        "isSslEnabled": {
            "type": "boolean"
        },
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
},
"type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
},
"syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
        "FORCED_FULL_CRAWL",
        "FULL_CRAWL",
        "CHANGE_LOG"
    ]
},
"secretArn": {
    "type": "string"
}
},
"version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
        {
            "pattern": "1.0.0"
        }
    ]
},
"required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
]
}
```

Aurora (PostgreSQL) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを postgresql に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Aurora \(PostgreSQL\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Aurora (PostgreSQL) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。 - dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、db2、postgresql、oracle、または のいずれかで sqlserver 。 - dbHost - データベースのホスト名。 - dbPort - データベースポート。 - dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "database user name", "password": "password"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Aurora (PostgreSQL) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          },
          "required": [
            "dbType",
            "dbHost",
            "dbPort",
            "dbInstance"
          ]
        }
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  },
  "required": [
    "repositoryEndpointMetadata"
  ]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを sqlserver に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon RDS (Microsoft SQL Server) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。 - dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、postgres、oracle、またはのいずれかで sqlserver。 - dbHost - データベースのホスト名。 - dbPort - データベースポート。 - dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "database user name", "password": "password"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        "required": [
          "dbType",
          "dbHost",
          "dbPort",
          "dbInstance"
        ]
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  },
  "required": [
    "repositoryEndpointMetadata"
  ]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Amazon RDS (MySQL) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを mysql に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon RDS \(MySQL\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon RDS (MySQL) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。 - dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、db2、postgresql、oracle、または のいずれかで sqlserver 。 - dbHost - データベースのホスト名。 - dbPort - データベースポート。 - dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "database user name", "password": "password"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Amazon RDS (MySQL) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        "required": [
          "dbType",
          "dbHost",
          "dbPort",
          "dbInstance"
        ]
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Amazon RDS (Oracle) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを `oracle` に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として `TEMPLATE` を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon RDS \(Oracle\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon RDS (Oracle) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
<code>connectionConfiguration</code>	データソースのエンドポイントの設定情報。
<code>repositoryEndpointMetadata</code>	データソースの接続に必要な設定情報。 <code>dbType</code> — 使用する Java データベースのタイプ。、、<code>mysql</code>、<code>postgresql</code>、<code>oracle</code>、またはのいずれかで <code>sqlserver</code>。 <code>dbHost</code> - データベースのホスト名。 <code>dbPort</code> - データベースポート。 <code>dbInstance</code> - データベースインスタンス。
<code>repositoryConfigurations</code>	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
<code>additionalProperties</code>	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定の

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "<i>database user name</i>", "password": "<i>password</i>"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Amazon RDS (Oracle) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          },
          "required": [
            "dbType",
            "dbHost",
            "dbPort",
            "dbInstance"
          ]
        }
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Amazon RDS (PostgreSQL) テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを postgresql に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon RDS \(PostgreSQL\) JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon RDS (PostgreSQL) JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。 - dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、db2、postgresql、oracle、または のいずれかで sqlserver 。 - dbHost - データベースのホスト名。 - dbPort - データベースポート。 - dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、 はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "database user name", "password": "password"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Amazon RDS (PostgreSQL) JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        "required": [
          "dbType",
          "dbHost",
          "dbPort",
          "dbInstance"
        ]
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Amazon S3 テンプレートスキーマ

テンプレート設定の一部として、データソーススキーマを含む JSON を含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として S3 バケットの名前を指定します。また、データソースのタイプを S3 として指定し、その他の必要な設定も指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[S3 JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、JSON Amazon S3 スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
BucketName	Amazon S3 バケットの名前。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。 例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
- inclusionPatterns - exclusionPatterns - inclusionPrefixes - exclusionPrefixes	Amazon S3 データソース内の特定のファイルを含めるか除外する正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
aclConfigurationFilePath	Amazon Kendra インデックス内のドキュメントへのアクセスを制御するファイルパス。
metadataFilesPrefix	バケット内のメタデータファイルの場所。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして S3 を指定します。
version	サポートされているテンプレートのバージョン。

S3 JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "BucketName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      }
    }
  }
}
```

```
    }
  },
  "required": [
    "BucketName"
  ]
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
],
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",
                  "enum": [
                    "STRING"
                  ]
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    }
  ]
}
```

```
    },
    "required": [
      "fieldMappings"
    ]
  },
  "required": [
    "document"
  ]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "inclusionPatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionPatterns": {
      "type": "array"
    },
    "inclusionPrefixes": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionPrefixes": {
      "type": "array"
    },
    "aclConfigurationFilePath": {
      "type": "string"
    },
    "metadataFilesPrefix": {
      "type": "string"
    }
  }
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FULL_CRAWL",
    "FORCED_FULL_CRAWL"
  ]
},
"type": {
  "type": "string",
  "pattern": "S3"
},
```



```
{
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  },
  "required": [
    "connectionConfiguration",
    "type",
    "syncMode",
    "repositoryConfigurations"
  ]
}
```

Amazon Kendra ウェブクロラーテンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。

接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、シード URL または開始ポイント URL を指定するか、サイトマップ URL を指定できます。すべての URLs を手動で一覧表示する代わりに、シード URLs またはサイトマップ XML ファイルのリストのテキストファイルを保存する Amazon S3 バケットへのパスを指定できます。このパスは、S3 の ZIP ファイルにまとめることができます。

また、データソースのタイプを WEBCRAWLERV2、ウェブサイトで認証が必要な場合はウェブサイトの認証情報と認証タイプ、その他の必要な設定として指定します。

次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

Important

Web Crawler v2.0 コネクタの作成は ではありません AWS CloudFormation。AWS CloudFormation サポートが必要な場合は、Web Crawler v1.0 コネクタを使用します。

インデックス作成するウェブサイトを選択するときは、[Amazon 利用規定ポリシー](#)およびその他の Amazon 規約のすべてに準拠している必要があります。Web Amazon Kendra Crawler は、独自のウェブページ、またはインデックス作成の権限を持つウェブページのインデックス作成にのみ使用

する必要がありますことに注意してください。Amazon Kendra ウェブクローラーによるウェブサイトのインデックスの作成を停止する方法については、「[Amazon Kendra Web Crawler 用の robots.txt ファイルの設定](#)」を参照してください。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Amazon Kendra ウェブクローラー JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Amazon Kendra Web Crawler JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
siteMapUrls	クロールするウェブサイトのサイトマップ URL のリスト。サイトマップの URL は最大 3 つまで一覧表示できます。
s3SeedUrl	シードまたは開始ポイント URL のリストを格納するテキストファイルへの S3 パス。例えば、s3://bucket-name/directory/。テキストファイル内の各 URL は、別々の行にフォーマットする必要があります。最大 100 件のシード URL を一覧表示できます。
s3SiteMapUrl	サイトマップ XML ファイルへの S3 パス。例えば、s3://bucket-name/directory/。サイトマップ XML ファイルは最大 3 件まで一覧表示できます。複数のサイトマップファイルを ZIP ファイルにまとめ、その ZIP ファイルを Amazon S3 バケットに保存できます。
seedUrlConnections	クロールするウェブサイトのシードまたは開始ポイント URL のリスト。最大 100 件のシード URL を一覧表示できます。
seedUrl	シードまたは開始点 URL。

設定	説明
認証	ウェブサイトが同じ認証を必要とする場合は認証タイプ、それ以外の場合は、NoAuthentication を指定します。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- webPage - 添付	ウェブページとウェブページファイルの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。例えば、HTML ウェブページのタイトルタグを _document_title インデックスフィールドにマッピングできます。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
<code>additionalProperties</code>	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
<code>rateLimit</code>	1 分あたりウェブサイトホストごとにクロールされる URL の最大数。
<code>maxFileSize</code>	クロールするウェブページまたは添付ファイルの最大サイズ (MB 単位)。
<code>crawlDepth</code>	シード URL からクロールするレベル数。例えば、シード URL ページは深度 1 で、このページ上でクロールされるハイパーリンクはすべて深度 2 です。
<code>maxLinksPerUrl</code>	ウェブサイトをクロールするときに含めるウェブページ上の URL の最大数。この数字はウェブページごとです。ウェブサイトのウェブページがクロールされると、ウェブページがリンクしているすべての URL もクロールされます。ウェブページ上の URL は、表示順にクロールされます。
<code>crawlSubDomain</code>	ウェブサイトのホスト名をサブドメインでクロールする場合は、 <code>true</code> にします。例えば、シード URL が「 <code>abc.example.com</code> 」の場合、「 <code>a.abc.example.com</code> 」と「 <code>b.abc.example.com</code> 」もクロールされます。 <code>crawlSubDomain</code> または <code>crawlAllDomain</code> を に設定しない場合 <code>true</code> 、はクロールするウェブサイトのドメイン Amazon Kendra のみをクロールします。

設定	説明
crawlAllDomain	ウェブページがリンクするサブドメインおよびその他のドメインでウェブサイトのドメインをクロールする場合は、true にします。crawlSubDomain または crawlAllDomain を に設定しない場合true、はクロールするウェブサイトのドメイン Amazon Kendra のみをクロールします。
honorRobots	クロールするウェブサイトの robots.txt ディレクティブを優先する場合は、true にします。これらのディレクティブは、 が特定のコンテンツのみをクロール Amazon Kendra できるかどうかにかかわらず、 Amazon Kendra Web Crawler がウェブサイトをクロールする方法を制御します。
crawlAttachments - inclusionURLCrawlPatterns - inclusionURLIndexPatterns	ウェブページのリンク先のファイルをクロールする場合は、true にします。 特定の URL のクロールや、これらの URL ウェブページ上のハイパーリンクのインデックス作成を含む正規表現パターンのリスト。パターンに一致する URL は、インデックスに含まれます。パターンに一致しない URL は、インデックスから除外されます。URL が包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、その URL/ウェブサイトのウェブページはインデックスに含まれません。

設定	説明
- exclusionURLCrawlPatterns - exclusionURLIndexPatterns	特定の URL のクローलや、これらの URL ウェブページ上のハイパーリンクのインデックス作成を除外する正規表現パターンのリスト。パターンに一致する URL は、インデックスから除外されます。パターンに一致しない URL は、インデックスに含まれます。URL が包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、その URL/ウェブサイトのウェブページはインデックスに含まれません。
inclusionFileIndexPatterns	特定のウェブページを含めるための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
exclusionFileIndexPatterns	特定のウェブページを除外するための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
implicitWaitDuration	implicitWaitDuration は、ウェブページをクローलする前にコネクタが待機する時間を秒単位で指定します。 範囲: 0 ~ 10 例: "implicitWaitDuration": "5"

設定	説明
proxy	ウェブプロキシ経由で内部ウェブサイトに接続するために必要となる構成情報。
ホスト	内部ウェブサイトへの接続に使用するプロキシサーバーのホストの名前。例えば、https://a.example.com/page1.html のホスト名は「a.example.com」です。
port	内部ウェブサイトへの接続に使用するプロキシサーバーのポート数。例えば、443 は HTTPS の標準ポートです。
secretArn (proxy)	ウェブサイトホストに接続するためにウェブプロキシ認証情報が必要な場合は、認証情報を保存する AWS Secrets Manager シークレットを作成できます。シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして WEBCRAWLERV2 を指定します。

設定	説明
secretArn	ウェブサイトアクセスするために認証が必要な場合に使用される AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。ウェブサイトの認証情報は、JSON キーと値のペアを含むシークレットに保存します。 ベーシックまたは NTLM/Kerberos を使用している場合は、ユーザー名とパスワードを入力します。シークレットの JSON キーは、username と password である必要があります。NTLM 認証プロトコルにはパスワードハッシュが含まれ、Kerberos 認証プロトコルにはパスワード暗号化が含まれます。 SAML 認証またはフォーム認証を使用する場合は、ユーザー名とパスワード、ユーザー名フィールド (SAML を使用する場合はユーザー名ボタン) に XPath、パスワードフィールドとボタンには XPath、ログインページの URL を入力します。シークレットの JSON キーは、username、password、usernameFieldXPath 、usernameButtonXPath 、passwordFieldXPath 、passwordButtonXPath 、と loginPageUrl である必要があります。要素の XPath (XML パス言語) は、ウェブブラウザのデベロッパーツールを使用して確認できます。XPath は通常、次の形式に従います。//tagname[@Attribute='Value'] 。 Amazon Kendra は、シークレットに含まれるエンドポイント情報 (シード URLs) が、データソースエンドポイント設定の詳細で指定された

設定	説明
	エンドポイント情報と同じかどうかを確認します。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Amazon Kendra ウェブクロラー JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "siteMapUrls": {
              "type": "array",
              "items": {
                "type": "string",
                "pattern": "https://.*"
              }
            },
            "s3SeedUrl": {
              "type": "string",
              "pattern": "s3:.*"
            },
            "s3SiteMapUrl": {
              "type": "string",
              "pattern": "s3:.*"
            },
            "seedUrlConnections": {
              "type": "array",
              "items": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {
                    "seedUrl": {
```

```

        "type": "string",
        "pattern": "https://.*"
      }
    },
    "required": [
      "seedUrl"
    ]
  }
],
},
"authentication": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "NoAuthentication",
    "BasicAuth",
    "NTLM_Kerberos",
    "Form",
    "SAML"
  ]
}
}
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "webPage": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",

```

```

        "enum": [
            "STRING",
            "DATE",
            "LONG"
        ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"attachment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "DATE",

```

```

        "LONG"
      ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
      "type": "string",
      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
  },
  "required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
  ]
}
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
}
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FORCED_FULL_CRAWL",
    "FULL_CRAWL"
  ]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "rateLimit": {
      "type": "string",
      "default": "300"
    },
    "maxFileSize": {
      "type": "string",
      "default": "50"
    }
  },

```

```
"crawlDepth": {
  "type": "string",
  "default": "2"
},
"maxLinksPerUrl": {
  "type": "string",
  "default": "100"
},
"crawlSubDomain": {
  "type": "boolean",
  "default": false
},
"crawlAllDomain": {
  "type": "boolean",
  "default": false
},
"honorRobots": {
  "type": "boolean",
  "default": false
},
"crawlAttachments": {
  "type": "boolean",
  "default": false
},
"inclusionURLCrawlPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionURLCrawlPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionURLIndexPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionURLIndexPatterns": {
  "type": "array",
```

```
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionFileIndexPatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFileIndexPatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "proxy": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "host": {
          "type": "string"
        },
        "port": {
          "type": "string"
        },
        "secretArn": {
          "type": "string",
          "minLength": 20,
          "maxLength": 2048
        }
      }
    },
    "implicitWaitDuration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "innerNumber": {
          "type": "number",
          "minimum": 0,
          "maximum": 10
        }
      }
    },
    "required": [
```

```

        "rateLimit",
        "maxFileSize",
        "crawlDepth",
        "crawlSubDomain",
        "crawlAllDomain",
        "maxLinksPerUrl",
        "honorRobots"
    ],
    },
    "type": {
        "type": "string",
        "pattern": "WEBCRAWLERV2"
    },
    "secretArn": {
        "type": "string",
        "minLength": 20,
        "maxLength": 2048
    }
},
"version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
        {
            "pattern": "1.0.0"
        }
    ]
},
"required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "type",
    "additionalProperties"
]
}

```

Confluence テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、Confluence ホスト URL、ホスティング方法、認証タイプを指定します。また、データソースのタイプを CONFLUENCEV2 に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Confluence JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Confluence JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
hostUrl	Confluence インスタンスの URL。例えば、 <i>https://example.confluence.com</i> などです。
type	Confluence インスタンスのホスティング方法 (SAAS および ON_PREM)。
authType	Confluence インスタンスの認証方法 (Basic、OAuth2、Personal-token)。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- スペース - page - ブログ - コメント - 添付	Confluence スペース、ページ、ブログ、コメント、添付ファイルの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。Confluence データソースのフィールド名は、Confluence カスタムメタデータ内に存在する必要があります。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
isCrawlAcl	ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロー

設定	説明
	ルリスト (ACL) 情報をクローलtrueするように を設定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定することに注意してください。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。つまり、isCrawlACL をオフにすると、ドキュメントをパブリックに検索できます。詳細については、「 User context filtering 」を参照してください。
fieldForUserId	ユーザー ID にユーザー E メールを使用するemailかどうかを指定します。email はデフォルトで使用され、現在サポートされている唯一のユーザー ID タイプです。
- inclusionSpaceKeyFilter - exclusionSpaceKeyFilter - pageTitleRegEX - blogTitleRegEX - commentTitleRegEX - attachmentTitleRegEX - inclusionFileTypePatterns - exclusionFileTypePatterns - inclusionUrlPatterns - exclusionUrlPatterns	Confluence データソースに特定のファイルを含めるか、除外するための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
proxyHost	http:// または https://プロトコルを含まない、使用するウェブプロキシのホスト名。
proxyPort	ホスト URL トランスポートプロトコルで使用するポート番号。これは 0～65535 の範囲の値にする必要があります。

設定	説明
- isCrawlPersonalSpace - isCrawlArchivedSpace - isCrawlArchivedPage - isCrawlPage - isCrawlBlog - isCrawlPageComment - isCrawlPageAttachment - isCrawlBlogComment - isCrawlBlogAttachment	true は、Confluence の個人用スペース、ページ、ブログ、ページコメント、ページ添付ファイル、ブログコメント、ブログ添付ファイルのファイルをクロールします。
maxFileSizeInMegaBytes	クロール Amazon Kendra できるファイルサイズ制限を MBs 単位で指定します。定義したサイズ制限内のファイルのみを Amazon Kendra クロールします。デフォルトのファイルサイズは 50 MB です。最大ファイルサイズは 0 MB より大きくし、50 MB 以下にする必要があります。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして CONFLUENCEV2 を指定します。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretARN	Confluence への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。これらのキーと値のペアの詳細については、「Confluence の接続手順」を参照してください。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Confluence JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
```

```
    "type": "object",
    "properties": {
      "hostUrl": {
        "type": "string",
        "pattern": "https:.*"
      },
      "type": {
        "type": "string",
        "enum": [
          "SAAS",
          "ON_PREM"
        ]
      },
      "authType": {
        "type": "string",
        "enum": [
          "Basic",
          "OAuth2",
          "Personal-token"
        ]
      }
    },
    "required": [
      "hostUrl",
      "type",
      "authType"
    ]
  },
  "required": [
    "repositoryEndpointMetadata"
  ],
  "repositoryConfigurations": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "space": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
              {
                "type": "object",
```

```

    "properties": {
      "indexFieldName": {
        "type": "string"
      },
      "indexFieldType": {
        "type": "string",
        "enum": [
          "STRING",
          "STRING_LIST",
          "DATE"
        ]
      },
      "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"page": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    }
  }
}

```

```

    },
    "indexFieldType": {
      "type": "string",
      "enum": [
        "STRING",
        "STRING_LIST",
        "DATE",
        "LONG"
      ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
      "type": "string",
      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
  },
  "required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
  ]
}

]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"blog": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {

```

```

        "type": "string",
        "enum": [
            "STRING",
            "STRING_LIST",
            "DATE",
            "LONG"
        ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"comment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [

```

```

        "STRING",
        "STRING_LIST",
        "DATE",
        "LONG"
    ]
},
"dataSourceFieldName": {
    "type": "string"
},
"dateFieldFormat": {
    "type": "string",
    "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
}
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"attachment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",

```



```

        "DATE",
        "LONG"
    ]
},
"dataSourceFieldName": {
    "type": "string"
},
"dateFieldFormat": {
    "type": "string",
    "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
}
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
}
}
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "usersAclS3FilePath": {
            "type": "string"
        },
        "isCrawlAcl": {
            "type": "boolean"
        },
        "fieldForUserId": {
            "type": "string"
        },
        "inclusionSpaceKeyFilter": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string"
            }
        }
    }
}

```

```
    },
    "exclusionSpaceKeyFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "pageTitleRegEX": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "blogTitleRegEX": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "commentTitleRegEX": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "attachmentTitleRegEX": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "isCrawlPersonalSpace": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlArchivedSpace": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlArchivedPage": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlPage": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlBlog": {
```

```
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlPageComment": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlPageAttachment": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlBlogComment": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlBlogAttachment": {
    "type": "boolean"
  },
  "maxFileSizeInMegabytes": {
    "type": "string"
  },
  "inclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionUrlPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionUrlPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "proxyHost": {
    "type": "string"
  },
}
```

```
    "proxyPort": {
      "type": "string"
    },
    "required": [],
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "CONFLUENCEV2"
  },
  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FULL_CRAWL",
      "FORCED_FULL_CRAWL"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string",
    "minLength": 20,
    "maxLength": 2048
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  },
  "required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

Dropbox テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。認証情報を保存するシークレットの一部として、Dropbox アプリキー、アプリシークレット、アクセストークンを指定します。データソースのタイプを DROPBOX として指定し、使用するアクセストークンのタイプ (一時的または永続的)、その他の必要な設定も指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Dropbox JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Dropbox JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。このデータソースは repositoryEndpointMetadata のエンドポイントを指定していません。接続情報は、を指定する AWS Secrets Manager シークレットに含まれます secretArn 。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- ファイル - paper - papert - shortcut	Dropbox ファイル、Dropbox Paper、ショートカットの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。

設定	説明
	• <code>FORCED_FULL_CRAWL</code> は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • <code>FULL_CRAWL</code> は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • <code>CHANGE_LOG</code> は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
<code>enableIdentityCrawler</code>	<code>true</code> は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

設定	説明
secretARN	Dropbox への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre> { "appKey": "Dropbox app key", "appSecret": "Dropbox app secret", "accesstoken": "temporary access token or refresh access token" } </pre>
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
isCrawlAcl	true ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「User context filtering」を参照してください。
- inclusionFileNamePatterns - inclusionFileTypePatterns	特定のファイルを Dropbox データソースに含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
- exclusionFileNamePatterns - exclusionFileTypePatterns	Dropbox データソース内の特定のファイル名とタイプを除外するための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
- crawlFile - crawlPaper - crawlPapert - crawlShortcut	true は、Dropbox、Dropbox Paper ドキュメント、Dropbox Paper テンプレート、Dropbox に保存されているウェブページショートカット内のファイルをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして DROPBOX を指定します。
tokenType	アクセストークンのタイプ (永続的アクセストークンまたは一時アクセストークン) を指定します。4 時間後に有効期限が切れる 1 回限りのアクセストークンに頼るのではなく、Dropbox で有効期限が切れることのない更新アクセストークンを作成することをお勧めします。Dropbox デベロッパーコンソールでアプリと更新アクセストークンを作成し、シークレットでアクセストークンを渡します。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Dropbox JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
```



```
"properties": {
  "connectionConfiguration": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "repositoryEndpointMetadata": {
        "type": "object",
        "properties": {
        }
      }
    },
    "required": [
      "repositoryEndpointMetadata"
    ],
  },
  "repositoryConfigurations": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "file": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
              "anyOf": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {
                    "indexFieldName": {
                      "type": "string"
                    },
                    "indexFieldType": {
                      "type": "string",
                      "enum": [
                        "STRING",
                        "STRING_LIST",
                        "LONG",
                        "DATE"
                      ]
                    },
                    "dataSourceFieldName": {
                      "type": "string"
                    },
                    "dateFieldFormat": {
                      "type": "string",
```

```

        "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"paper": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": {
        "anyOf": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "LONG",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",

```

```

        "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"papert": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": {
        "anyOf": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "LONG",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",

```

```

        "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"shortcut": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": {
        "anyOf": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "LONG",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",

```

```

        "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FULL_CRAWL",
    "FORCED_FULL_CRAWL",
    "CHANGE_LOG"
  ]
},
"enableIdentityCrawler": {
  "type": "boolean"
},
"secretArn": {
  "type": "string"
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "isCrawlAcl": {
      "type": "boolean"
    },
    "inclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array"
    }
  }
}

```

```
    },
    "inclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array"
    },
    "crawlFile": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlPaper": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlPapert": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlShortcut": {
      "type": "boolean"
    }
  }
},
"type": {
  "type": "string",
  "pattern": "DROPBOX"
},
"tokenType": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "PERMANENT",
    "TEMPORARY"
  ]
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
}
},
"additionalProperties": false,
"required": [
  "connectionConfiguration",
```

```

    "repositoryConfigurations",
    "additionalProperties",
    "syncMode",
    "enableIdentityCrawler",
    "secretArn",
    "type",
    "tokenType"
  ]
}
```

Drupal テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、Drupal ホスト URL と認証タイプを指定します。また、データソースのタイプを DRUPAL に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Drupal JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Drupal JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
hostUrl	Drupal ウェブサイトのホスト URL。例えば、 <i>https://<hostname>/<drupal<site>name></i> 。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。
- content - コメント - 添付	Drupal ファイルの属性またはフィールド名をマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。Drupal データ

設定	説明
	ソースのフィールド名は、Drupal カスタムメタデータ内に存在する必要があります。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
- inclusionFileNamePatterns - articleTitleInclusionPatterns - pageTitleInclusionPatterns - customContentTitleInclusionPatterns - basicBlockTitleInclusionPatterns - customBlockTitleInclusionPatterns	Drupal データソースにある特定のファイルを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
- exclusionFileNamePatterns - articleTitleExclusionPatterns - pageTitleExclusionPatterns - customContentTitleExclusionPatterns - basicBlockTitleExclusionPatterns - customBlockTitleExclusionPatterns	Drupal データソースにある特定のファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
contentDefinitions	クロールするコンテンツタイプと、選択したコンテンツタイプのコメントと添付ファイルをクロールするかどうかを指定します。
- contentType - fieldDefinition - isCrawlComments - isCrawlFiles - isCrawlArticle - isCrawlBasicPage - isCrawlBasicBlock - isCrawlCustomContentTypesList	

設定	説明
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして DRUPAL を指定します。
authType	使用する認証のタイプ (BASIC-AUTH または OAUTH2)。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
secretARN	Drupal への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 基本認証を使用している場合。 <pre>{ "username": "user name", "passwords": "password" }</pre> OAuth 2.0 認証を使用している場合。 <pre>{ "username": "user name", "password": "password", "clientId": "client id", "clientSecret": "client secret" }</pre>
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Drupal JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "hostUrl": {
              "type": "string",
              "pattern": "https:.*"
            }
          },
          "required": [
            "hostUrl"
          ]
        }
      },
      "required": [
        "repositoryEndpointMetadata"
      ]
    },
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "content": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fieldMappings": {
              "type": "array",
              "items": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {
                    "indexFieldName": {
                      "type": "string"
                    },
                    "indexFieldType": {
                      "type": "string",
                      "enum": [
```

```
        "STRING",
        "DATE"
    ],
    },
    "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
    }
    ],
    }
    },
    "required": [
        "fieldMappings"
    ]
    },
    "comment": {
        "type": "object",
        "properties": {
            "fieldMappings": {
                "type": "array",
                "items": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": [
                                    "STRING",
                                    "DATE"
                                ]
                            }
                        }
                    }
                ]
            }
        }
    },
    }
```

```
    "dataSourceFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
      "type": "string",
      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
  },
  "required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
  ]
}
],
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
],
},
"attachment": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "STRING",
                "DATE"
              ]
            }
          },
          "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType"
          ]
        }
      ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
```

```
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "isCrawlArticle": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlBasicPage": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlBasicBlock": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlCustomContentTypesList": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "crawlCustomBlockTypesList": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  },
  "filePath": {
```

```
"anyOf": [
  {
    "type": "string",
    "pattern": "s3:.*"
  },
  {
    "type": "string",
    "pattern": ""
  }
],
"inclusionFileNamePatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionFileNamePatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"articleTitleInclusionPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"articleTitleExclusionPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"pageTitleInclusionPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"pageTitleExclusionPatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
```

```
    "type": "string"
  },
  "customContentTitleInclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "customContentTitleExclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "basicBlockTitleInclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "basicBlockTitleExclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "customBlockTitleInclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "customBlockTitleExclusionPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "contentDefinitions": {
    "type": "array",
    "items": {
      "properties": {
        "contentType": {
```



```
    "type": "string"
  },
  "fieldDefinition": {
    "type": "array",
    "items": [
      {
        "type": "object",
        "properties": {
          "machineName": {
            "type": "string"
          },
          "type": {
            "type": "string"
          }
        }
      },
      {
        "type": "object",
        "properties": {
          "machineName": {
            "type": "string"
          },
          "type": {
            "type": "string"
          }
        }
      }
    ],
    "required": [
      "machineName",
      "type"
    ]
  },
  "isCrawlComments": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlFiles": {
    "type": "boolean"
  },
  "required": [
    "contentType",
    "fieldDefinition",
    "isCrawlComments",
    "isCrawlFiles"
  ],
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "DRUPAL"
  },
  "required": []
}
```

```
"authType": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "BASIC-AUTH",
    "OAUTH2"
  ]
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FORCED_FULL_CRAWL",
    "FULL_CRAWL",
    "CHANGE_LOG"
  ]
},
"enableIdentityCrawler": {
  "type": "boolean"
},
"secretArn": {
  "type": "string",
  "minLength": 20,
  "maxLength": 2048
}
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

GitHub テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。GitHub ホスト URL、組織名、および接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として GitHub クラウドとオンプレミスGitHubを使用するかを指定します。また、データソースのタイプを GITHUB に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[GitHub JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、GitHub JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
type	タイプを SAASまたは として指定しますON_PREMISE 。
hostUrl	GitHub ホスト URL。例えば、GitHub SaaS/Enterprise Cloud を使用する場合は: https://api.github.com。または、GitHub オンプレミス/エンタープライズサーバーを使用している場合は: https://on-prem-host-url/api/v3/。
organizationName	GitHub デスクトップにログインし、プロフィール写真ドロップダウンの下で組織に移動すると、組織名を見つけることができます。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- ghRepository - ghCommit - ghIssueDocument	GitHub コンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細

設定	説明
• ghIssueComment • ghIssueAttachment • ghPRDocument • ghPRComment • ghPRAttachment	については、「データソースフィールドのマッピング」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
isCrawlAcl	true ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスおよび検索できるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「User context filtering」を参照してください。
fieldForUserId	ACL クローリングに使用するユーザー ID のタイプを指定します。ユーザー ID にユーザー E メールを使用する email か、ユーザー ID にユーザー名を使用する username かを指定します。オプションを指定しない場合、email はデフォルトで使用されます。
repositoryFilter	インデックスを作成する特定のリポジトリ名とブランチ名のリスト。
crawlRepository	true リポジトリをクロールします。
crawlRepositoryDocuments	true リポジトリドキュメントをクロールします。
crawlIssue	true をクロールします。

設定	説明
<code>crawlIssueComment</code>	<code>true</code> 問題コメントをクロールします。
<code>crawlIssueCommentAttachment</code>	<code>true</code> は、問題コメントの添付ファイルをクロールします。
<code>crawlPullRequest</code>	<code>true</code> プルリクエストをクロールします。
<code>crawlPullRequestComment</code>	<code>true</code> プルリクエストのコメントをクロールします。
<code>crawlPullRequestCommentAttachment</code>	<code>true</code> は、プルリクエストのコメントアタッチメントをクロールします。
<code>inclusionFolderNamePatterns</code> <code>inclusionFileTypePatterns</code> <code>inclusionFileNamePatterns</code>	GitHub データソースに特定のコンテンツを含めるための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するコンテンツは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないコンテンツは、インデックスから除外されます。コンテンツが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。
<code>exclusionFolderNamePatterns</code> <code>exclusionFileTypePatterns</code> <code>exclusionFileNamePatterns</code>	GitHub データソース内の特定のコンテンツを除外するための正規表現パターンのリスト。パターンに一致するコンテンツは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないコンテンツは、インデックスに含まれます。コンテンツが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。
<code>type</code>	データソースのタイプ。データソースタイプとして GITHUB を指定します。

設定	説明
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報 PutPrincipalMapping をアップロードすることもできます。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
secretArn	GitHub への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "personalToken": " <i>token</i>"}</pre>
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

GitHub JSON スキーマ

GitHub JSON スキーマは次のとおりです。

```
{  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",  "type": "object",  "properties": {    "connectionConfiguration": {      "type": "object",      "properties": {        "repositoryEndpointMetadata": {          "type": "object",          "properties": {            "type": {              "type": "string"            },            "hostUrl": {              "type": "string",              "pattern": "https://.*"            },            "organizationName": {              "type": "string"            }          }        }      }    }  },
```

```

        "required": [
            "type",
            "hostUrl",
            "organizationName"
        ]
    },
    "required": [
        "repositoryEndpointMetadata"
    ]
},
"repositoryConfigurations": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "ghRepository": {
            "type": "object",
            "properties": {
                "fieldMappings": {
                    "type": "array",
                    "items": [
                        {
                            "type": "object",
                            "properties": {
                                "indexFieldName": {
                                    "type": "string"
                                },
                                "indexFieldType": {
                                    "type": "string",
                                    "enum": [
                                        "STRING",
                                        "STRING_LIST",
                                        "DATE"
                                    ]
                                },
                                "dataSourceFieldName": {
                                    "type": "string"
                                },
                                "dateFieldFormat": {
                                    "type": "string",
                                    "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                                }
                            }
                        }
                    ]
                },
                "required": [
                    "indexFieldName",

```



```

        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"ghCommit": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ]
        },
        "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
        ]
    }
}

```

```

        }
    ]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"ghIssueDocument": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ],
            "required": [
                "indexFieldName",
                "indexFieldType",
                "dataSourceFieldName"
            ]
        }
    ]
}
}

```

```

    },
    "required": [
        "fieldMappings"
    ]
},
"ghIssueComment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ]
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"

```

```

    ]
  },
  "ghIssueAttachment": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            }
          }
        ],
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "required": [
      "fieldMappings"
    ]
  },
  "ghPRDocument": {

```

```

    "type": "object",
    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            },
            "required": [
              "indexFieldName",
              "indexFieldType",
              "dataSourceFieldName"
            ]
          }
        ]
      },
      "required": [
        "fieldMappings"
      ]
    },
    "ghPRComment": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {

```

```

        "type": "array",
        "items": [
            {
                "type": "object",
                "properties": {
                    "indexFieldName": {
                        "type": "string"
                    },
                    "indexFieldType": {
                        "type": "string",
                        "enum": [
                            "STRING",
                            "STRING_LIST",
                            "DATE"
                        ]
                    },
                    "dataSourceFieldName": {
                        "type": "string"
                    },
                    "dateFieldFormat": {
                        "type": "string",
                        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                    }
                },
                "required": [
                    "indexFieldName",
                    "indexFieldType",
                    "dataSourceFieldName"
                ]
            }
        ]
    },
    "required": [
        "fieldMappings"
    ],
    "ghPRAttachment": {
        "type": "object",
        "properties": {
            "fieldMappings": {
                "type": "array",
                "items": [
                    {

```

```
"type": "object",
  "properties": {
    "indexFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "indexFieldType": {
      "type": "string",
      "enum": [
        "STRING",
        "STRING_LIST",
        "DATE"
      ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
      "type": "string",
      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
  },
  "required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
  ]
},
{
  "required": [
    "fieldMappings"
  ]
}
],
{
  "required": [
    "fieldMappings"
  ]
}
}],
{
  "additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "isCrawlAcl": {
        "type": "boolean"
      },
      "fieldForUserId": {
        "type": "string"
      }
    }
  }
}
```

```
    },
    "crawlRepository": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlRepositoryDocuments": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlIssue": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlIssueComment": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlIssueCommentAttachment": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlPullRequest": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlPullRequestComment": {
      "type": "boolean"
    },
    "crawlPullRequestCommentAttachment": {
      "type": "boolean"
    },
    "repositoryFilter": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "repositoryName": {
              "type": "string"
            },
            "branchNameList": {
              "type": "array",
              "items": {
                "type": "string"
              }
            }
          }
        }
      ]
    },
  },
}
```



```
    "inclusionFolderNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFolderNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  },
  "required": [],
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "GITHUB"
  },
  "syncMode": {
```

```
        "type": "string",
        "enum": [
            "FULL_CRAWL",
            "FORCED_FULL_CRAWL",
            "CHANGE_LOG"
        ],
    },
    "enableIdentityCrawler": {
        "type": "boolean"
    },
    "secretArn": {
        "type": "string",
        "minLength": 20,
        "maxLength": 2048
    }
},
"version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
        {
            "pattern": "1.0.0"
        }
    ]
},
"required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "enableIdentityCrawler"
]
}
```

Gmail テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを GMAIL に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Gmail JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Gmail JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。このデータソースは repositoryEndpointMetadata のエンドポイントを指定していません。接続情報は、を指定する AWS Secrets Manager シークレットに含まれます secretArn 。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
- message - 添付ファイル	Gmail メッセージと添付ファイルの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
- inclusionLabelNamePatterns - exclusionLabelNamePatterns - inclusionAttachmentTypePatterns - exclusionAttachmentTypePatterns - inclusionAttachmentNamePatterns - exclusionAttachmentNamePatterns - inclusionSubjectFilter - exclusionSubjectFilter - isSubjectAnd	Gmail データソースにある特定の件名のメールを含めるまたは除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
- inclusionFromFilter - exclusionFromFilter - inclusionToFilter - exclusionToFilter - inclusionCcFilter - exclusionCcFilter - inclusionBccFilter - exclusionBccFilter	
beforeDateFilter	特定の日付より前に含めるメッセージと添付ファイルを指定します。
afterDateFilter	特定の日付以降に含めるメッセージと添付ファイルを指定します。
isCrawlAttachment	添付ファイルをクロールするかどうかを選択するブール値。メッセージは自動的にクロールされます。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして GMAIL を指定します。
shouldCrawlDraftMessages	ドラフトメッセージをクロールするかどうかを選択するブール値。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。  Important 完全に削除された Gmail メッセージ、新規、変更、または削除されたコンテンツ同期を更新する API がないため： • Gmail から完全に削除されたメッセージを Amazon Kendra インデックスから削除しない • Gmail E メールラベルの変更を同期しない Gmail データソースラベルの変更と完全に削除された E メールメッセージを Amazon Kendra インデックスに同期す

設定	説明
	るには、定期的にフルクローलを実行する必要があります。
secretARN	Gmail への接続に必要なキーと値のペアが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "adminAccountEmailId": " <i>service account email</i>", "clientEmailId": " <i>user account email</i>", "privateKey": " <i>private key</i>" }</pre>
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Gmail JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
      }
    },
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "message": {
          "type": "object",
          "properties": {

```

```

    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "DATE"]
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat": {
              "type": "string"
            }
          },
          "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
          ]
        }
      ]
    },
    "attachments": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",

```

```

        "enum": ["STRING"]
      },
      "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
}
},
"required": []
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "inclusionLabelNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionLabelNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionAttachmentTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionAttachmentTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  }
}

```



```
    }
  },
  "inclusionAttachmentNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionAttachmentNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionSubjectFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionSubjectFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "isSubjectAnd": {
    "type": "boolean"
  },
  "inclusionFromFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFromFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionToFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
```

```
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionToFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionCcFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionCcFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionBccFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionBccFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "beforeDateFilter": {
      "anyOf": [
        {
          "type": "string",
          "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
        },
        {
          "type": "string",
          "pattern": ""
        }
      ]
    }
  ]
}
```

```
    },
    "afterDateFilter": {
      "anyOf": [
        {
          "type": "string",
          "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
        },
        {
          "type": "string",
          "pattern": ""
        }
      ]
    },
    "isCrawlAttachment": {
      "type": "boolean"
    },
    "shouldCrawlDraftMessages": {
      "type": "boolean"
    }
  },
  "required": [
    "isCrawlAttachment",
    "shouldCrawlDraftMessages"
  ],
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "GMAIL"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  }
}
```

```
    }
  ]
}
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "additionalProperties",
  "syncMode",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Google Drive テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを GOOGLEDRIVE2 に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Google Drive JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Google Drive JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースに関する設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。このデータソースはエンドポイントを指定していません。認証タイプを選択します。serviceAccount と OAuth2。接続情報は、を指定する AWS Secrets Manager シークレットに含まれています secretArn 。
authType	ユースケースに基づいて serviceAccount と OAuth2 のどちらかを選んでください。

設定	説明
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- ファイル - コメント	Google Drive の属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
maxFileSizeInMegabytes	クロール Amazon Kendra するファイルサイズ制限を MBs 単位で指定します。
iscrawlComment	true Google Drive データソースのコメントをクロールします。
isCrawlMyDriveAndSharedWithMe	true は、Google Drive データソースで MyDrive と共有された Me Drive をクロールします。
isCrawlSharedDrives	true は、Google Drive データソースの共有ドライブをクロールします。
isCrawlAcl	true ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスおよび検索できるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「 User context filtering 」を参照してください。

設定	説明
• excludeUserAccounts • excludeSharedDrives • excludeMimeType • exclusionFileTypePatterns • exclusionFileNamePatterns • exclusionFilePathFilter	Google Drive データソースにある特定のファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
• includeUserAccounts • includeSharedDrives • includeMimeType • inclusionFileTypePatterns • inclusionFileNamePatterns • inclusionFilePathFilter	Google Drive データソースにある特定のファイルを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして G000GLEDRIVEV2 を指定します。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
secretARN	Google ドライブへの接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 Google サービスアカウント認証を使用している場合。 <pre>{ "clientEmail": " <i>user account email</i>", "adminAccountEmail": " <i>service account email</i>", "privateKey": " <i>private key</i>" }</pre> OAuth 2.0 認証を使用している場合。 <pre>{ "clientId": " <i>OAuth client ID</i>", "clientSecret": " <i>client secret</i>", "refreshToken": " <i>refresh token</i>" }</pre>
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Google Drive JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
```



```
    "repositoryEndpointMetadata": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "authType": {
          "type": "string",
          "enum": [
            "serviceAccount",
            "OAuth2"
          ]
        }
      },
      "required": [
        "authType"
      ]
    },
    "required": [
      "repositoryEndpointMetadata"
    ],
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "file": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fieldMappings": {
              "type": "array",
              "items": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {
                    "indexFieldName": {
                      "type": "string"
                    },
                    "indexFieldType": {
                      "type": "string",
                      "enum": [
                        "STRING",
                        "DATE",
                        "STRING_LIST",
                        "LONG"
                      ]
                    }
                  }
                }
              ]
            }
          }
        }
      }
    },
```

```

        "dataSourceFieldName": {
            "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}

]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"comment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "DATE",
                                "STRING_LIST"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        }
                    }
                }
            ]
        }
    }
}

```

```
        "dateFieldFormat": {
          "type": "string",
          "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
      },
      "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
      ]
    }
  ]
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "maxFileSizeInMegabytes": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlComment": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlMyDriveAndSharedWithMe": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlSharedDrives": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlAcl": {
      "type": "boolean"
    },
    "excludeUserAccounts": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  }
},
```

```
"excludeSharedDrives": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"excludeMimeType": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"includeUserAccounts": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"includeSharedDrives": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"includeMimeType": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"includeTargetAudienceGroup": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionFileTypePatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionFileNamePatterns": {
  "type": "array",
```

```
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionFilePathFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFilePathFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "GOOGLEDRIVEV2"
  },
  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  }
}
```

```
    },
    "secretArn": {
      "type": "string",
      "minLength": 20,
      "maxLength": 2048
    }
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  },
  "required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

IBM DB2 テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを db2 に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[IBM DB2 JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、IBM DB2 JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。

設定	説明
	• dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、postgres、oracle、または のいずれかで sqlserver 。 • dbHost - データベースのホスト名。 • dbPort - データベースポート。 • dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。

設定	説明
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。

設定	説明
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "user name": "<i>database user name</i>", "password": "<i>password</i>" }</pre>
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

IBM DB2 JSON スキーマ

```
{  
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",  
  "type": "object",  
  "properties": {  
    "connectionConfiguration": {  
      "type": "object",  
      "properties": {  
        "repositoryEndpointMetadata": {  
          "type": "object",  
          "properties": {  
            "dbType": {  
              "type": "string",  
              "enum": [  
                "mysql",  
                "db2",  
                "postgresql",  
                "oracle",  
                "sqlserver"  
              ]  
            },  
            "dbHost": {  
              "type": "string"  
            }  
          }  
        }  
      }  
    }  
  }  
}
```

```
    },
    "dbPort": {
      "type": "string"
    },
    "dbInstance": {
      "type": "string"
    }
  },
  "required": [
    "dbType",
    "dbHost",
    "dbPort",
    "dbInstance"
  ]
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
],
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
```

```

        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
}
},
"required": [
]
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "primaryKey": {
            "type": "string"
        },
        "titleColumn": {
            "type": "string"
        },
        "bodyColumn": {
            "type": "string"
        },
        "sqlQuery": {
            "type": "string",
            "not": {
                "pattern": ";+"
            }
        },
        "timestampColumn": {
            "type": "string"
        },
        "timestampFormat": {
            "type": "string"
        },
        "timezone": {
            "type": "string"
        },
        "changeDetectingColumns": {
            "type": "array",

```

```
    "items": {
      "type": "string"
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    },
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  },
  "required": [
```

```

    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

Microsoft Exchange テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。テナント ID は、接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として指定します。また、データソースのタイプを MSEXCHANGE に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Microsoft Exchange JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Microsoft Exchange JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
tenantId	Microsoft 365 テナント ID。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- email - 添付 - カレンダー	Microsoft Exchange データソースの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングするオブジェクトのリ

設定	説明
- contacts - 注意事項	スト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
inclusionPatterns	Microsoft Exchange のデータソースにある特定のファイルを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
exclusionPatterns	Microsoft Exchange のデータソースにある特定のファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
- inclusionUsersList - inclusionUsersFileName - inclusionDomainUsers	Microsoft Exchange のデータソースにある特定のユーザーおよびユーザーファイルを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するユーザーは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないユーザーは、インデックスから除外されます。ユーザーが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのユーザーはインデックスに含まれません。

設定	説明
- exclusionUsersList - exclusionUsersFileName - exclusionDomainUsers	Microsoft Exchange のデータソースにある特定のユーザーおよびユーザーファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するユーザーは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないユーザーは、インデックスに含まれます。ユーザーが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのユーザーはインデックスに含まれません。
s3bucketName	S3 バケットの名前 (使用する場合)。
- crawlCalendar - crawlNotes - crawlContacts - crawlFolderAcl	true Microsoft Exchange データソースのこれらのタイプのコンテンツとアクセスコントロール情報をクロールするには、 を使用します。
startCalendarDateTime	カレンダーのコンテンツには特定の開始日時を設定できます。
endCalendarDateTime	カレンダーのコンテンツには特定の終了日時を設定できます。
subject	メールコンテンツには特定の件名を設定できます。
emailFrom	「差出人」または送信者のメールコンテンツに特定のメールを設定できます。
emailTo	「宛先」または受信者のメールコンテンツに特定のメールを設定できます。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして MSEXCHANGE を指定します。
secretARN	Microsoft Exchange への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。これには、Azure Portal で OAuth アプリケーションを作成したときに生成されるクライアント ID とクライアントシークレットが含まれます。

設定	説明
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Microsoft Exchange JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "tenantId": {
              "type": "string",
              "pattern": "^[0-9a-f]{8}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}$",
              "minLength": 36,
              "maxLength": 36
            }
          },
          "required": ["tenantId"]
        }
      },
      "required": ["tenantId"]
    },
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "email": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fieldMappings": {
              "type": "array",
              "items": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {
                    "indexFieldName": {
```

```

        "type": "string"
      },
      "indexFieldType": {
        "type": "string",
        "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "DATE"]
      },
      "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"attachment": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": ["STRING", "DATE", "LONG"]
            },
            "dataSourceFieldName": {

```

```

        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"calendar": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "DATE"]
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat": {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            }
          }
        }
      ]
    }
  }
},

```

```

        "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
        ]
    },
]
},
"required": [
    "fieldMappings"
],
},
"contacts": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "DATE"]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ],
            "required": [
                "indexFieldName",
                "indexFieldType",
                "dataSourceFieldName"
            ]
        }
    }
}
]

```

```

        }
    },
    "required": [
        "fieldMappings"
    ]
},
"notes": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": ["STRING", "DATE"]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                },
                "required": [
                    "indexFieldName",
                    "indexFieldType",
                    "dataSourceFieldName"
                ]
            ]
        }
    },
    "required": [
        "fieldMappings"
    ]
}
},

```

```
    "required": ["email"]
  },
  "additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "inclusionPatterns": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "exclusionPatterns": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "inclusionUsersList": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string",
          "format": "email"
        }
      },
      "exclusionUsersList": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string",
          "format": "email"
        }
      },
      "s3bucketName": {
        "type": "string"
      },
      "inclusionUsersFileName": {
        "type": "string"
      },
      "exclusionUsersFileName": {
        "type": "string"
      },
      "inclusionDomainUsers": {
        "type": "array",
        "items": {
```

```
    "type": "string"
  },
  "exclusionDomainUsers": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "crawlCalendar": {
    "type": "boolean"
  },
  "crawlNotes": {
    "type": "boolean"
  },
  "crawlContacts": {
    "type": "boolean"
  },
  "crawlFolderAcl": {
    "type": "boolean"
  },
  "startCalendarDateTime": {
    "anyOf": [
      {
        "type": "string",
        "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
      },
      {
        "type": "string",
        "pattern": ""
      }
    ]
  },
  "endCalendarDateTime": {
    "anyOf": [
      {
        "type": "string",
        "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
      },
      {
        "type": "string",
        "pattern": ""
      }
    ]
  }
}
```



```
    },
    "subject": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "emailFrom": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string",
        "format": "email"
      }
    },
    "emailTo": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string",
        "format": "email"
      }
    }
  },
  "required": [
  ],
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FORCED_FULL_CRAWL",
    "FULL_CRAWL",
    "CHANGE_LOG"
  ]
},
"type" : {
  "type" : "string",
  "pattern": "MSEXCHANGE"
},
"secretArn": {
  "type": "string"
}
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
```

```
{
  "pattern": "1.0.0"
}
],
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Microsoft OneDrive テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。テナント ID は接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として指定します。また、データソースのタイプを ONEDRIVEV2 に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Microsoft OneDrive JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Microsoft OneDrive JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
tenantId	Microsoft 365 テナント ID。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。

設定	説明
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
ファイル	Microsoft OneDrive ファイルの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
• userNameFilter • userFilterPath • inclusionFileTypePatterns • exclusionFileTypePatterns • inclusionFileNamePatterns • exclusionFileNamePatterns • inclusionFilePathPatterns • exclusionFilePathPatterns • inclusionOneNoteSectionNamePatterns • exclusionOneNoteSectionNamePatterns • inclusionOneNotePageNamePatterns • exclusionOneNotePageNamePatterns	特定のファイル、OneNote セクション、One Note ページのインデックスを作成したり、ユーザー名でフィルタリングできます。
isUserNameOnS3	Amazon S3に保存されているファイル内のユーザー名のリストを提供する場合は、true にします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして ONEDRIVEV2 を指定します。

設定	説明
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報 PutPrincipalMapping をアップロードすることもできます。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして ONEDRIVEV2 を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretARN	Microsoft OneDrive への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "clientId": " <i>client ID</i>", "clientSecret": " <i>client secret</i>" }</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Microsoft OneDrive JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "tenantId": {
              "type": "string",
              "pattern": "^[0-9a-f]{8}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{12}$",
              "minLength": 36,
              "maxLength": 36
            }
          },
          "required": [
            "tenantId"
          ]
        }
      },
      "required": [
        "repositoryEndpointMetadata"
      ]
    },
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "file": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fieldMappings": {
              "type": "array",
              "items": [
```

```
{
  "type": "object",
  "properties": {
    "indexFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "indexFieldType": {
      "type": "string",
      "enum": [
        "STRING",
        "STRING_LIST",
        "DATE",
        "LONG"
      ]
    },
    "dataSourceFieldName": {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
      "type": "string",
      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
  },
  "required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
  ]
}

],
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "userNameFilter": {
      "type": "array",
      "items": {
```

```
    "type": "string"
  },
  "userFilterPath": {
    "type": "string"
  },
  "isUserNameOnS3": {
    "type": "boolean"
  },
  "inclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionFileNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFileNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionFilePathPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFilePathPatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  }
}
```



```
    },
    "inclusionOneNoteSectionNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionOneNoteSectionNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionOneNotePageNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionOneNotePageNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  },
  "required": [],

  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "ONEDRIVEV2"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FULL_CRAWL",
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  }
},
```

```
"secretArn": {
  "type": "string",
  "minLength": 20,
  "maxLength": 2048
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
```

Microsoft SharePoint テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、SharePoint サイトの URL/URLs、ドメイン、および必要に応じてテナント ID を指定します。また、データソースのタイプを SHAREPOINTV2 に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに [タイプ] として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[SharePoint JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Microsoft SharePoint JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。

設定	説明
tenantId	SharePoint アカウントのテナント ID。
ドメイン	SharePoint アカウントのドメイン。
siteUrls	SharePoint アカウントのホスト URL。
repositoryAdditionalProperties	リポジトリ/データソースエンドポイントに接続するための追加プロパティ。
s3bucketName	Azure AD 自己署名 X.509 証明書を保存する Amazon S3 バケットの名前。
s3certificateName	Amazon S3 バケットに保存されている Azure AD 自己署名 X.509 証明書の名前。
authType	使用する認証のタイプ。 、 、 OAuth2、 OAuth2Certificate OAuth2App、 Basic、 OAuth2_RefreshToken NTLM、 または のいずれかですKerberos。
version	使用する SharePoint バージョンOnline。Server または 。
onPremVersion	、 、 2019または のいずれかで、使用する SharePoint Server 2013 2016 のバージョンSubscriptionEdition 。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。

設定	説明
- イベント - page - ファイル - link (リンク) - 添付 - コメント	SharePoint コンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「データソースフィールドのマッピング」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
- eventTitleFilterRegex - pageTitleFilterRegex - linkTitleFilterRegex - inclusionFilePath - exclusionFilePath - inclusionFileTypePatterns - exclusionFileTypePatterns - inclusionFileNamePatterns - exclusionFileNamePatterns - inclusionOneNoteSectionNamePatterns - exclusionOneNoteSectionNamePatterns - inclusionOneNotePageNamePatterns - exclusionOneNotePageNamePatterns	SharePoint データソース内の特定のコンテンツを含める/除外する正規表現パターンのリスト。包含パターンに一致するコンテンツテーマは、インデックスに含まれます。包含パターンと一致しないコンテンツ項目はインデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
- crawlFiles - crawlPages - crawlEvents - crawlComments - crawlLinks - crawlAttachments	true は、これらのタイプのコンテンツをクロールします。

設定	説明
crawlAcl	true ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスおよび検索できるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「 User context filtering 」を参照してください。
fieldForUserId	ユーザー ID にユーザー E メールを使用する email か、ユーザー ID にユーザー名を使用する userPrincipalName かを指定します。オプションを指定しない場合、email はデフォルトで使用されます。
aclConfiguration	ACLWithLDAPEmailFmt 、ACLWithManualEmailFmt 、または のいずれかを指定します ACLWithUsernameFmtM 。
emailDomain	Eメールのドメイン。例: <i>"amazon.com"</i> 。
- isCrawlLocalGroupMapping - isCrawlAdGroupMapping	true グループマッピング情報をクロールします。
proxyHost	http:// または https:// プロトコルを使用しない、使用するウェブプロキシのホスト名。
proxyPort	ホスト URL トランスポートプロトコルで 사용되는ポート番号。これは 0~65535 の範囲の値にする必要があります。
type	データソースタイプとして SHAREPOINTV2 を指定します。

設定	説明
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報 PutPrincipalMapping をアップロードすることもできます。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

設定	説明
secretARN	SharePoint への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。これらのキーと値のペアについては、「 Connection instructions for SharePoint Online and SharePoint Server 」を参照してください。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

SharePoint JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "tenantId": {
              "type": "string",
              "pattern": "^[0-9a-f]{8}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{12}$",
              "minLength": 36,
              "maxLength": 36
            },
            "domain": {
              "type": "string"
            }
          },
          "siteUrls": {
            "type": "array",
            "items": {
              "type": "string",
              "pattern": "https://.*"
            }
          },
          "repositoryAdditionalProperties": {
```

```
"type": "object",
"properties": {
  "s3bucketName": {
    "type": "string"
  },
  "s3certificateName": {
    "type": "string"
  },
  "authType": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "OAuth2",
      "OAuth2Certificate",
      "OAuth2App",
      "Basic",
      "OAuth2_RefreshToken",
      "NTLM",
      "Kerberos"
    ]
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "Server",
      "Online"
    ]
  },
  "onPremVersion": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "",
      "2013",
      "2016",
      "2019",
      "SubscriptionEdition"
    ]
  }
},
"required": [
  "authType",
  "version"
]
},
},
```



```
    "required": [
      "siteUrls",
      "domain",
      "repositoryAdditionalProperties"
    ]
  },
  "required": [
    "repositoryEndpointMetadata"
  ],
  "repositoryConfigurations": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "event": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
              {
                "type": "object",
                "properties": {
                  "indexFieldName": {
                    "type": "string"
                  },
                  "indexFieldType": {
                    "type": "string",
                    "enum": [
                      "STRING",
                      "STRING_LIST",
                      "DATE"
                    ]
                  }
                }
              }
            ]
          },
          "dataSourceFieldName": {
            "type": "string"
          },
          "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
          }
        }
      },
      "required": [
        "indexFieldName",
```

```
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"page": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "DATE",
                                "LONG"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ],
            "required": [
                "indexFieldName",
                "indexFieldType",
                "dataSourceFieldName"
            ]
        }
    }
}
```

```
    }
  ]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
],
"file": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "STRING",
                "DATE",
                "LONG"
              ]
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat": {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
```

```

    },
    "required": [
      "fieldMappings"
    ]
  },
  "link": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            }
          }
        ]
      },
      "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
      ]
    }
  },
  "required": [
    "fieldMappings"
  ]
}

```

```

    ]
  },
  "attachment": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "STRING_LIST",
                  "DATE"
                ]
              },
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat": {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            },
          },
        ],
      },
      "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
      ],
    },
  },
  "required": [
    "fieldMappings"
  ],
},
"comment": {

```

```
"type": "object",
"properties": {
  "fieldMappings": {
    "type": "array",
    "items": [
      {
        "type": "object",
        "properties": {
          "indexFieldName": {
            "type": "string"
          },
          "indexFieldType": {
            "type": "string",
            "enum": [
              "STRING",
              "STRING_LIST",
              "DATE"
            ]
          },
          "dataSourceFieldName": {
            "type": "string"
          },
          "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
          }
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    ]
  },
  "required": [
    "fieldMappings"
  ]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
```

```
"properties": {
  "eventTitleFilterRegEx": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "pageTitleFilterRegEx": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "linkTitleFilterRegEx": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionFilePath": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFilePath": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionFileNamePatterns": {
```

```
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFileNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionOneNoteSectionNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionOneNoteSectionNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionOneNotePageNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionOneNotePageNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "crawlFiles": {
    "type": "boolean"
  },
  "crawlPages": {
    "type": "boolean"
  },
  "crawlEvents": {
    "type": "boolean"
  },
}
```



```
"crawlComments": {
  "type": "boolean"
},
"crawlLinks": {
  "type": "boolean"
},
"crawlAttachments": {
  "type": "boolean"
},
"crawlListData": {
  "type": "boolean"
},
"crawlAcl": {
  "type": "boolean"
},
"fieldForUserId": {
  "type": "string"
},
"aclConfiguration": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "ACLWithLDAPEmailFmt",
    "ACLWithManualEmailFmt",
    "ACLWithUsernameFmt"
  ]
},
"emailDomain": {
  "type": "string"
},
"isCrawlLocalGroupMapping": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlAdGroupMapping": {
  "type": "boolean"
},
"proxyHost": {
  "type": "string"
},
"proxyPort": {
  "type": "string"
}
},
"required": [
]
```

```
    },
    "type": {
      "type": "string",
      "pattern": "SHAREPOINTV2"
    },
    "enableIdentityCrawler": {
      "type": "boolean"
    },
    "syncMode": {
      "type": "string",
      "enum": [
        "FULL_CRAWL",
        "FORCED_FULL_CRAWL",
        "CHANGE_LOG"
      ]
    },
    "secretArn": {
      "type": "string",
      "minLength": 20,
      "maxLength": 2048
    }
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  },
  "required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "enableIdentityCrawler",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

Microsoft SQL サーバーテンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを sqlserver に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Microsoft SQL サーバー JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表は、Microsoft SQL Server JSON スキーマのパラメータを示しています。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。 - dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、postgres、oracle、または のいずれかで sqlserver 。 - dbHost - データベースのホスト名。 - dbPort - データベースポート。 - dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、 はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "<i>database user name</i>", "password": "<i>password</i>"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Microsoft SQL サーバー JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        "required": [
          "dbType",
          "dbHost",
          "dbPort",
          "dbInstance"
        ]
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```



```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Microsoft Teams テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。テナント ID は、接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として指定します。また、データソースのタイプを MSTEAMS に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Microsoft Teams JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Microsoft Teams JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
tenantId	Microsoft 365 テナント ID。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
• chatMessage • chatAttachment • channelPost • channelWiki • channelAttachment • meetingChat • meetingFile • meetingNote • calendarMeeting	Microsoft Teams コンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。

設定	説明
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
paymentModel	Microsoft Teams データソースで使用する支払いモデルのタイプを指定します。モデル A の支払いモデルは、セキュリティコンプライアンスを必要とするライセンスモデルと支払いモデルに限定されます。モデル B の支払いモデルは、セキュリティコンプライアンスを必要としないライセンスモデルや支払いモデルに適しています。
- inclusionTeamNameFilter - inclusionChannelNameFilter - inclusionFileNamePatterns - inclusionFileTypePatterns - inclusionUserEmailFilter - inclusionOneNoteSectionNamePatterns - inclusionOneNotePageNamePatterns	Microsoft Teams データソースにある特定のコンテンツを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するコンテンツは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないコンテンツは、インデックスから除外されます。コンテンツが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。
- exclusionTeamNameFilter - exclusionChannelNameFilter - exclusionFileNamePatterns - exclusionFileTypePatterns - exclusionUserEmailFilter - exclusionOneNoteSectionNamePatterns - exclusionOneNotePageNamePatterns	Microsoft Teams のデータソースにある特定のコンテンツを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するコンテンツは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないコンテンツは、インデックスに含まれます。コンテンツが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。

設定	説明
• isCrawlChatMessage • isCrawlChatAttachment • isCrawlChannelPost • isCrawlChannelAttachment • isCrawlChannelWiki • isCrawlCalendarMeeting • isCrawlMeetingChat • isCrawlMeetingFile • isCrawlMeetingNote	true は、Microsoft Teams データソース内のこれらのタイプのコンテンツをクロールします。
startCalendarDateTime	カレンダーのコンテンツには特定の開始日時を設定できます。
endCalendarDateTime	カレンダーのコンテンツには特定の終了日時を設定できます。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして MSTEAMS を指定します。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	Microsoft Teams への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。これには、Azure Portal で OAuth アプリケーションを作成したときに生成されるクライアント ID とクライアントシークレットが含まれます。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Microsoft Teams JSON スキーマ

```

{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "tenantId": {
              "type": "string",
              "pattern": "^[0-9a-f]{8}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{4}-[0-9a-f]{12}$",
              "minLength": 36,
              "maxLength": 36
            }
          },
          "required": [
            "tenantId"
          ]
        },
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "required": [
            "repositoryEndpointMetadata"
          ]
        }
      },
      "required": [
        "repositoryConfigurations"
      ],
      "repositoryConfigurations": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "chatMessage": {
            "type": "object",
            "properties": {
              "fieldMappings": {
                "type": "array",
                "items": [
                  {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                      "indexFieldName": {
                        "type": "string"
                      }
                    }
                  }
                ]
              }
            }
          }
        }
      }
    }
  }
}

```

```

        "indexFieldType": {
            "type": "string",
            "enum": [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE"
            ]
        },
        "dataSourceFieldName": {
            "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}

]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"chatAttachment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [

```



```

        "STRING",
        "DATE",
        "LONG"
    ]
},
"dataSourceFieldName": {
    "type": "string"
},
"dateFieldFormat": {
    "type": "string",
    "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
}
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"channelPost": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        }
                    }
                }
            ]
        }
    }
}

```

```

        ]
      },
      "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"channelWiki": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "STRING",
                "DATE",
                "LONG"
              ]
            }
          }
        }
      ]
    },
    "dataSourceFieldName": {

```

```

        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"channelAttachment": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "STRING",
                "DATE",
                "LONG"
              ]
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat": {

```

```

        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}

],
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"meetingChat": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ]
        }
    }
}

```

```

        },
        "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
        ]
    }
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"meetingFile": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "DATE",
                                "LONG"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                }
            ]
        },
        "required": [
            "indexFieldName",

```

```

        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"meetingNote": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": [
                {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                        "indexFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType": {
                            "type": "string",
                            "enum": [
                                "STRING",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName": {
                            "type": "string"
                        },
                        "dateFieldFormat": {
                            "type": "string",
                            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                        }
                    }
                },
                "required": [
                    "indexFieldName",
                    "indexFieldType",
                    "dataSourceFieldName"
                ]
            ]
        }
    }
}

```

```

        ]
      }
    },
    "required": [
      "fieldMappings"
    ]
  },
  "calendarMeeting": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "DATE"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            }
          },
          "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
          ]
        ]
      }
    ]
  },
  "required": [

```

```
        "fieldMappings"
      ]
    }
  },
  "additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
      "paymentModel": {
        "type": "string",
        "enum": [
          "A",
          "B",
          "Evaluation Mode"
        ]
      },
      "inclusionTeamNameFilter": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "exclusionTeamNameFilter": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "inclusionChannelNameFilter": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "exclusionChannelNameFilter": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "inclusionFileNamePatterns": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      }
    }
  }
}
```



```
    }
  },
  "exclusionFileNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionFileTypePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionUserEmailFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionOneNoteSectionNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionOneNoteSectionNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionOneNotePageNamePatterns": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  },
```

```
"exclusionOneNotePageNamePatterns": {
  "type": "array",
  "items": {
    "type": "string"
  }
},
"isCrawlChatMessage": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlChatAttachment": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlChannelPost": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlChannelAttachment": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlChannelWiki": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlCalendarMeeting": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlMeetingChat": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlMeetingFile": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlMeetingNote": {
  "type": "boolean"
},
"startCalendarDateTime": {
  "anyOf": [
    {
      "type": "string",
      "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
    },
    {
      "type": "string",
      "pattern": ""
    }
  ]
}
```

```
    },
    "endCalendarDateTime": {
      "anyOf": [
        {
          "type": "string",
          "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
        },
        {
          "type": "string",
          "pattern": ""
        }
      ]
    },
    "required": [],
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "MSTEAMS"
  },
  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string",
    "minLength": 20,
    "maxLength": 2048
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  }
]
```

```
  },
  "required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

Microsoft Yammer テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを YAMMER に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに [タイプ] として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。

次の表に、Microsoft Yammer JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースに関する設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。このデータソースは repositoryEndpointMetadata のエンドポイントを指定していません。接続情報は、を指定する AWS Secrets Manager シークレットに含まれます secretArn 。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- community - ユーザー - message	Microsoft Yammer の属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細

設定	説明
添付	については、「データソースフィールドのマッピング」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
inclusionPatterns	Microsoft Yammer データソースにある特定のファイルを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
exclusionPatterns	Microsoft Yammer データソースにある特定のファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
sinceDate	Microsoft Yammer コネクタが特定の sinceDate に基づいてコンテンツをクロールするように sinceDate パラメータを設定できます。
communityNameFilter	特定のコミュニティコンテンツのインデックスを作成できます。
- isCrawlMessage - isCrawlAttachment - isCrawlPrivateMessage	true メッセージ、メッセージ添付ファイル、プライベートメッセージをクロールするには、を使用します。

設定	説明
type	データソースタイプとして YAMMER を指定します。
secretARN	Microsoft Yammer への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。これには、Microsoft Yammer のユーザー名とパスワード、Azure ポータルで OAuth アプリケーションを作成したときに生成されるクライアント ID とクライアントシークレットが含まれます。
useChangeLog	true は、Microsoft Yammer 変更ログを使用して、インデックスで更新する必要があるドキュメントを決定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報 PutPrincipalMapping をアップロードすることもできます。

Microsoft Yammer JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
          }
        }
      },
      "required": [
        "repositoryEndpointMetadata"
      ]
    },
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "community": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fieldMappings": {
              "type": "array",
              "items": {
                "anyOf": [
                  {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                      "indexFieldName": {
                        "type": "string"
                      }
                    },
                  {
                    "type": "object",
                    "properties": {
                      "indexFieldType": {
                        "type": "string",
                        "enum": [
                          "STRING",
                          "DATE"
                        ]
                      }
                    }
                  }
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              }
            }
          }
        }
      }
    }
  }
}
```



```

        },
        "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}

]
}
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"user": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
                "anyOf": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": [
                                    "STRING",
                                    "DATE"
                                ]
                            },
                            "dataSourceFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "dateFieldFormat": {

```

```

        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    },
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"message": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
                "anyOf": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": [
                                    "STRING",
                                    "DATE"
                                ]
                            },
                            "dataSourceFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "dateFieldFormat": {
                                "type": "string",
                                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                            }
                        }
                    }
                ]
            }
        }
    }
}

```

```

        }
      },
      "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
      ]
    }
  ]
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
},
"attachment": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": {
        "anyOf": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "DATE"
                ]
              }
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat": {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            }
          }
        ]
      }
    }
  },

```

```

        "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
        ]
    }
]
}
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
}
}
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "inclusionPatterns": {
            "type": "array"
        },
        "exclusionPatterns": {
            "type": "array"
        },
        "sinceDate": {
            "type": "string",
            "pattern": "^(19|2[0-9])[0-9]{2}-(0[1-9]|1[012])-(0[1-9]|[12][0-9]|
3[01])T(0[0-9]|1[0-9]|2[0-3]):([0-5][0-9]):([0-5][0-9])(\\+|-)(0[0-9]|1[0-9]|2[0-3]):
([0-5][0-9]))? $"
        },
        "communityNameFilter": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string"
            }
        },
        "isCrawlMessage": {
            "type": "boolean"
        },
        "isCrawlAttachment": {
            "type": "boolean"
        },
        "isCrawlPrivateMessage": {

```

```
        "type": "boolean"
      },
    },
    "required": [
      "sinceDate"
    ]
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "YAMMER"
  },
  "secretArn": {
    "type": "string",
    "minLength": 20,
    "maxLength": 2048
  },
  "useChangeLog": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "true",
      "false"
    ]
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  }
},
"required": [
```

```
"connectionConfiguration",
"repositoryConfigurations",
"additionalProperties",
"type",
"secretArn",
"syncMode"
]
}
```

MySQL テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを `mysql` に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに `Type` として `TEMPLATE` を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[MySQL JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、MySQL JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
<code>connectionConfiguration</code>	データソースのエンドポイントの設定情報。
<code>repositoryEndpointMetadata</code>	データソースの接続に必要な設定情報。 <code>dbType</code> — 使用する Java データベースのタイプ。、、<code>mysql</code>、<code>db2</code>、<code>postgresql</code>、<code>oracle</code>、または のいずれかで <code>sqlserver</code>。 <code>dbHost</code> - データベースのホスト名。 <code>dbPort</code> - データベースポート。 <code>dbInstance</code> - データベースインスタンス。
<code>repositoryConfigurations</code>	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。

設定	説明
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。

設定	説明
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "<i>database user name</i>", "password": "<i>password</i>"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

MySQL JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          },
          "required": [
            "dbType",
            "dbHost",
            "dbPort",
            "dbInstance"
          ]
        }
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Oracle Database テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを `oracle` に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として `TEMPLATE` を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Oracle Database JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Oracle Database JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
<code>connectionConfiguration</code>	データソースのエンドポイントの設定情報。
<code>repositoryEndpointMetadata</code>	データソースの接続に必要な設定情報。 <code>dbType</code> — 使用する Java データベースのタイプ。、<code>mysql</code>、<code>postgresql</code>、<code>oracle</code>、または のいずれかで <code>sqlserver</code>。 <code>dbHost</code> - データベースのホスト名。 <code>dbPort</code> - データベースポート。 <code>dbInstance</code> - データベースインスタンス。
<code>repositoryConfigurations</code>	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
<code>additionalProperties</code>	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のコ

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "<i>database user name</i>", "password": "<i>password</i>"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

Oracle Database JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          },
          "required": [
            "dbType",
            "dbHost",
            "dbPort",
            "dbInstance"
          ]
        }
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

PostgreSQL テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。データソースのタイプを JDBC に指定し、データベースタイプを postgresql に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[PostgreSQL JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、PostgreSQL JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースの接続に必要な設定情報。 - dbType — 使用する Java データベースのタイプ。、mysql、postgres、oracle、または sqlserver。 - dbHost - データベースのホスト名。 - dbPort - データベースポート。 - dbInstance - データベースインスタンス。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。データソースのタイプとシークレット ARN を指定します。
ドキュメント	データベースコンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。データベースデータソースに特定のク

設定	説明
	コンテンツを含めたり除外したりするのに使用します。
primaryKey	データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
titleColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
bodyColumn	データベーステーブル内の文書タイトル列の名前を指定します。
sqlQuery	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
timestampColumn	タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
timestampFormat	コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプ形式を含む列の名前を入力します。
timezone	クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
changeDetectingColumns	Amazon Kendra がコンテンツの変更を検出するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、 はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。

設定	説明
allowedUsersColumns	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
allowedGroupsColumn	コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
sourceURIColumn	インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
isSslEnabled	SELECT や JOIN 操作などの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして JDBC を指定します。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretArn	データベースに接続するためのユーザー名とパスワードが含まれている Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre data-bbox="836 1627 1502 1816">{ "user name": "database user name", "password": " password"}</pre>

設定	説明
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

PostgreSQL JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "dbType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "mysql",
                "db2",
                "postgresql",
                "oracle",
                "sqlserver"
              ]
            },
            "dbHost": {
              "type": "string"
            },
            "dbPort": {
              "type": "string"
            },
            "dbInstance": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        "required": [
          "dbType",
          "dbHost",
          "dbPort",
          "dbInstance"
        ]
      }
    }
  }
}
```

```

    ]
  }
},
"required": [
  "repositoryEndpointMetadata"
]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "document": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string"
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "fieldMappings": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        },
        {
          "type": "object",
          "properties": {
            "indexFieldName": {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType": {
              "type": "string"
            },
            "dataSourceFieldName": {
              "type": "string"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}
},
"required": [
  "fieldMappings"
]
}
},
"required": [

```

```
]
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "primaryKey": {
      "type": "string"
    },
    "titleColumn": {
      "type": "string"
    },
    "bodyColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sqlQuery": {
      "type": "string",
      "not": {
        "pattern": ";+"
      }
    },
    "timestampColumn": {
      "type": "string"
    },
    "timestampFormat": {
      "type": "string"
    },
    "timezone": {
      "type": "string"
    },
    "changeDetectingColumns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "allowedUsersColumn": {
      "type": "string"
    },
    "allowedGroupsColumn": {
      "type": "string"
    },
    "sourceURIColumn": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```
    "isSslEnabled": {
      "type": "boolean"
    },
    "required": ["primaryKey", "titleColumn", "bodyColumn", "sqlQuery"]
  },
  "type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "JDBC"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string"
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
},
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
  "syncMode",
  "additionalProperties",
  "secretArn",
  "type"
]
}
```

Salesforce テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として Salesforce ホスト URL を指定します。また、データソースのタイプを SALESFORCEV2 に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Salesforce JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Salesforce JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
hostUrl	インデックスを作成する Salesforce インスタンスの URL。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- アカウント - contact - キャンペーン - case - product - lead - contract - partner - profile - idea - pricebook	Salesforce エンティティの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。

設定	説明
• タスク • solution • 添付 • ユーザー • ドキュメント • knowledgeArticles • グループ • opportunity • chatter • customEntity	

設定	説明
secretARN	Salesforce への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "authenticationUrl": " <i>OAUTH endpoint that Amazon Kendra connects to get an OAUTH token</i>", "consumerKey": " <i>Application public key generated when you created your Salesforce application</i> ", "consumerSecret": " <i>Application private key generated when you created your Salesforce application</i> ", "password": " <i>Password associated with the user logging in to the Salesforce instance</i> ", "securityToken": " <i>Token associated with the user account logging in to the Salesforce instance</i> ", "username": " <i>User name of the user logging in to the Salesforce instance</i>"}</pre>
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。

設定	説明
• accountFilter • contactFilter • caseFilter • campaignFilter • contractFilter • groupFilter • leadFilter • productFilter • opportunityFilter • partnerFilter • pricebookFilter • ideaFilter • profileFilter • taskFilter • solutionFilter • userFilter • chatterFilter • documentFilter • knowledgeArticleFilter • customEntities	フィルタリングするエンティティを指定する文字列のコレクション。

設定	説明
inclusionPatterns - inclusionDocumentFileTypePatterns - inclusionDocumentFileNamePatterns - inclusionAccountFileTypePatterns - inclusionCampaignFileTypePatterns - inclusionDocumentFileNamePatterns - inclusionCampaignFileNamePatterns - inclusionCaseFileTypePatterns - inclusionCaseFileNamePatterns - inclusionContactFileTypePatterns - inclusionContractFileNamePatterns - inclusionLeadFileTypePatterns - inclusionLeadFileNamePatterns - inclusionOpportunityFileTypePatterns - inclusionOpportunityFileNamePatterns - inclusionSolutionFileTypePatterns - inclusionSolutionFileNamePatterns - inclusionTaskFileTypePatterns - inclusionTaskFileNamePatterns - inclusionGroupFileTypePatterns - inclusionGroupFileNamePatterns - inclusionChatterFileTypePatterns - inclusionChatterFileNamePatterns - inclusionCustomEntityFileTypePatterns - inclusionCustomEntityFileNamePatterns	特定のファイルを Salesforce データソースに含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
exclusionPatterns • exclusionDocumentFileTypePatterns • exclusionDocumentFileNamePatterns • exclusionAccountFileTypePatterns • exclusionCampaignFileTypePatterns • exclusionCampaignFileNamePatterns • exclusionCaseFileTypePatterns • exclusionCaseFileNamePatterns • exclusionContactFileTypePatterns • exclusionContractFileNamePatterns • exclusionLeadFileTypePatterns • exclusionLeadFileNamePatterns • exclusionOpportunityFileTypePatterns • exclusionOpportunityFileNamePatterns • exclusionSolutionFileTypePatterns • exclusionSolutionFileNamePatterns • exclusionTaskFileTypePatterns • exclusionTaskFileNamePatterns • exclusionGroupFileTypePatterns • exclusionGroupFileNamePatterns • exclusionChatterFileTypePatterns • exclusionChatterFileNamePatterns • exclusionCustomEntityFileTypePatterns • exclusionCustomEntityFileNamePatterns	特定のファイルを Salesforce データソースから除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
• isCrawlAccount • isCrawlContact • isCrawlCase • isCrawlCampaign • isCrawlProduct • isCrawlLead • isCrawlContract • isCrawlPartner • isCrawlProfile • isCrawlIdea • isCrawlPricebook • isCrawlDocument • crawlSharedDocument • isCrawlGroup • isCrawlOpportunity • isCrawlChatter • isCrawlUser • isCrawlSolution • isCrawlTask • isCrawlAccountAttachments • isCrawlContactAttachments • isCrawlCaseAttachments • isCrawlCampaignAttachments • isCrawlLeadAttachments • isCrawlContractAttachments • isCrawlGroupAttachments • isCrawlOpportunityAttachments • isCrawlChatterAttachments • isCrawlSolutionAttachments	true は、Salesforce アカウントのこれらのタイプのファイルをクロールします。

設定	説明
• isCrawlTaskAttachments • isCrawlCustomEntityAttachments • isCrawlKnowledgeArticles • isCrawlDraft • isCrawlPublish • isCrawlArchived	
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして SALESFORCEV2 を指定します。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendraの ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Salesforce JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    {
      "connectionConfiguration": {
```

```
"type": "object",
"properties":
{
  "repositoryEndpointMetadata":
  {
    "type": "object",
    "properties":
    {
      "hostUrl":
      {
        "type": "string",
        "pattern": "https:.*"
      }
    },
    "required":
    [
      "hostUrl"
    ]
  },
  "required":
  [
    "repositoryEndpointMetadata"
  ],
  "repositoryConfigurations": {
    "type": "object",
    "properties":
    {
      "account":
      {
        "type": "object",
        "properties":
        {
          "fieldMappings":
          {
            "type": "array",
            "items":
            [
              {
                "type": "object",
                "properties":
                {
                  "indexFieldName":
```

```
        {
          "type": "string"
        },
        "indexFieldType":
        {
          "type": "string",
          "enum":
          [
            "STRING",
            "STRING_LIST",
            "DATE",
            "LONG"
          ]
        },
        "dataSourceFieldName":
        {
          "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat":
        {
          "type": "string",
          "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
      },
      "required":
      [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
      ]
    }
  ]
},
"required":
[
  "fieldMappings"
]
},
"contact":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
```



```
"fieldMappings":
{
  "type": "array",
  "items":
  [
    {
      "type": "object",
      "properties":
      {
        "indexFieldName":
        {
          "type": "string"
        },
        "indexFieldType":
        {
          "type": "string",
          "enum":
          [
            "STRING",
            "STRING_LIST",
            "DATE"
          ]
        },
        "dataSourceFieldName":
        {
          "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat":
        {
          "type": "string",
          "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
      },
      "required":
      [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
      ]
    }
  ]
},
"required":
```

```
[
  "fieldMappings"
],
"campaign":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType":
            {
              "type": "string",
              "enum":
              [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE",
                "LONG"
              ]
            },
            "dataSourceFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat":
            {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            }
          }
        }
      ]
    },
    "required":
```

```
        [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
        ]
    },
    ],
    },
    },
    },
    },
    "required":
    [
        "fieldMappings"
    ]
},
"case":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":
                    {
                        "indexFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType":
                        {
                            "type": "string",
                            "enum":
                            [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                    },
                    "dataSourceFieldName":
                    {
```

```

        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat":
      {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required":
    [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
}
},
"required":
[
  "fieldMappings"
]
},
"product":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType":
            {
              "type": "string",

```

```
        "enum":
        [
            "STRING",
            "STRING_LIST",
            "DATE"
        ]
    },
    "dataSourceFieldName":
    {
        "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat":
    {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
},
"required":
[
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"lead":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
```

```
    "properties":
    {
        "indexFieldName":
        {
            "type": "string"
        },
        "indexFieldType":
        {
            "type": "string",
            "enum":
            [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE",
                "LONG"
            ]
        },
        "dataSourceFieldName":
        {
            "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat":
        {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required":
    [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}

]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"contract":
{
```

```
"type": "object",
"properties":
{
  "fieldMappings":
  {
    "type": "array",
    "items":
    [
      {
        "type": "object",
        "properties":
        {
          "indexFieldName":
          {
            "type": "string"
          },
          "indexFieldType":
          {
            "type": "string",
            "enum":
            [
              "STRING",
              "STRING_LIST",
              "DATE"
            ]
          },
          "dataSourceFieldName":
          {
            "type": "string"
          },
          "dateFieldFormat":
          {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
          }
        },
        "required":
        [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    ]
  }
}
```

```
    }
  },
  "required":
  [
    "fieldMappings"
  ]
},
"partner":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType":
            {
              "type": "string",
              "enum":
              [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE"
              ]
            },
            "dataSourceFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat":
            {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            }
          }
        }
      ]
    }
  }
}
```



```
    },
    "required":
    [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
    }
    ]
    }
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"profile":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":
                    {
                        "indexFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType":
                        {
                            "type": "string",
                            "enum":
                            [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        }
                    }
                }
            ]
        },
    },
},
```

```

        "dataSourceFieldName":
        {
            "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat":
        {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required":
    [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"idea":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":
                    {
                        "indexFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        },
                    },
                    "indexFieldType":

```

```

        {
            "type": "string",
            "enum":
            [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE",
                "LONG"
            ]
        },
        "dataSourceFieldName":
        {
            "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat":
        {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required":
    [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"pricebook":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":

```

```
[
  {
    "type": "object",
    "properties":
    {
      "indexFieldName":
      {
        "type": "string"
      },
      "indexFieldType":
      {
        "type": "string",
        "enum":
        [
          "STRING",
          "STRING_LIST",
          "DATE"
        ]
      },
      "dataSourceFieldName":
      {
        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat":
      {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required":
    [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
],
"required":
[
  "fieldMappings"
],
},
```

```
"task":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType":
            {
              "type": "string",
              "enum":
              [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE"
              ]
            },
            "dataSourceFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat":
            {
              "type": "string",
              "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
            }
          },
          "required":
          [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
          ]
        }
      ]
    }
  }
}
```

```
        }
      ]
    }
  },
  "required":
  [
    "fieldMappings"
  ]
},
"solution":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType":
            {
              "type": "string",
              "enum":
              [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE"
              ]
            },
            "dataSourceFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "dateFieldFormat":
            {
              "type": "string",
```

```

        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required":
    [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
},
"required":
[
  "fieldMappings"
]
},
"attachment":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {
              "type": "string"
            },
            "indexFieldType":
            {
              "type": "string",
              "enum":
              [
                "STRING",
                "STRING_LIST",
                "DATE",

```

```

        "LONG"
      ]
    },
    "dataSourceFieldName":
    {
      "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat":
    {
      "type": "string",
      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
    }
  },
  "required":
  [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
  ]
}
]
}
},
"required":
[
  "fieldMappings"
]
},
"user":
{
  "type": "object",
  "properties":
  {
    "fieldMappings":
    {
      "type": "array",
      "items":
      [
        {
          "type": "object",
          "properties":
          {
            "indexFieldName":
            {

```



```

        "type": "string"
      },
      "indexFieldType": {
        "type": "string",
        "enum": [
          "STRING",
          "STRING_LIST",
          "DATE"
        ]
      },
      "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
      },
      "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
]
},
"required": [
  "fieldMappings"
],
"document": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "fieldMappings": {

```

```
    "type": "array",
    "items":
    [
      {
        "type": "object",
        "properties":
        {
          "indexFieldName":
          {
            "type": "string"
          },
          "indexFieldType":
          {
            "type": "string",
            "enum":
            [
              "STRING",
              "STRING_LIST",
              "DATE",
              "LONG"
            ]
          },
          "dataSourceFieldName":
          {
            "type": "string"
          },
          "dateFieldFormat":
          {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
          }
        },
        "required":
        [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    ]
  },
  "required":
  [
```

```
        "fieldMappings":
        ]
    },
    "knowledgeArticles":
    {
        "type": "object",
        "properties":
        {
            "fieldMappings":
            {
                "type": "array",
                "items":
                [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties":
                        {
                            "indexFieldName":
                            {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType":
                            {
                                "type": "string",
                                "enum":
                                [
                                    "STRING",
                                    "STRING_LIST",
                                    "DATE"
                                ]
                            },
                            "dataSourceFieldName":
                            {
                                "type": "string"
                            },
                            "dateFieldFormat":
                            {
                                "type": "string",
                                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                            }
                        }
                    },
                    "required":
                    [
                        "indexFieldName",
```

```
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"group":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":
                    {
                        "indexFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType":
                        {
                            "type": "string",
                            "enum":
                            [
                                "STRING",
                                "STRING_LIST",
                                "DATE"
                            ]
                        },
                        "dataSourceFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        }
                    }
                }
            ]
        }
    }
}
```

```
        "dateFieldFormat":
        {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
        }
    },
    "required":
    [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"opportunity":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":
                    {
                        "indexFieldName":
                        {
                            "type": "string"
                        },
                        "indexFieldType":
                        {
                            "type": "string",
                            "enum":
                            [
```

```

        "STRING",
        "STRING_LIST",
        "DATE",
        "LONG"
    ]
},
"dataSourceFieldName":
{
    "type": "string"
},
"dateFieldFormat":
{
    "type": "string",
    "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
}
},
"required":
[
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required":
[
    "fieldMappings"
]
},
"chatter":
{
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "fieldMappings":
        {
            "type": "array",
            "items":
            [
                {
                    "type": "object",
                    "properties":

```

```
{
  "indexFieldName":
  {
    "type": "string"
  },
  "indexFieldType":
  {
    "type": "string",
    "enum":
    [
      "STRING",
      "STRING_LIST",
      "DATE"
    ]
  },
  "dataSourceFieldName":
  {
    "type": "string"
  },
  "dateFieldFormat":
  {
    "type": "string",
    "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
  }
},
"required":
[
  "indexFieldName",
  "indexFieldType",
  "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required":
[
  "fieldMappings"
]
},
"customEntity":
{
  "type": "object",
  "properties":
```

```
{
  "fieldMappings":
  {
    "type": "array",
    "items":
    [
      {
        "type": "object",
        "properties":
        {
          "indexFieldName":
          {
            "type": "string"
          },
          "indexFieldType":
          {
            "type": "string",
            "enum":
            [
              "STRING",
              "STRING_LIST",
              "DATE"
            ]
          },
          "dataSourceFieldName":
          {
            "type": "string"
          },
          "dateFieldFormat":
          {
            "type": "string",
            "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
          }
        },
        "required":
        [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    ]
  }
},
```



```
        "required":
        [
            "fieldMappings"
        ]
    }
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties":
    {
        "accountFilter":{
            "type": "array",
            "items":
            {
                "type": "string"
            }
        },
        "contactFilter":{
            "type": "array",
            "items":
            {
                "type": "string"
            }
        },
        "caseFilter":{
            "type": "array",
            "items":
            {
                "type": "string"
            }
        },
        "campaignFilter":{
            "type": "array",
            "items":
            {
                "type": "string"
            }
        },
        "contractFilter":{
            "type": "array",
            "items":
            {
                "type": "string"
```

```
    }
  },
  "groupFilter":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "leadFilter":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "productFilter":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "opportunityFilter":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "partnerFilter":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "pricebookFilter":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
},
```

```
"ideaFilter":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"profileFilter":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"taskFilter":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"solutionFilter":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"userFilter":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"chatterFilter":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"documentFilter":{
  "type": "array",
```

```
    "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "knowledgeArticleFilter":{
      "type": "array",
      "items":
        {
          "type": "string"
        }
    },
    "customEntities":{
      "type": "array",
      "items":
        {
          "type": "string"
        }
    },
    "isCrawlAccount": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlContact": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlCase": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlCampaign": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlProduct": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlLead": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlContract": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlPartner": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlProfile": {
```

```
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlIdea": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlPricebook": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlDocument": {
    "type": "boolean"
  },
  "crawlSharedDocument": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlGroup": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlOpportunity": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlChatter": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlUser": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlSolution": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlTask": {
    "type": "boolean"
  },

  "isCrawlAccountAttachments": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlContactAttachments": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlCaseAttachments": {
    "type": "boolean"
  },
  "isCrawlCampaignAttachments": {
    "type": "boolean"
  }
```

```
    },
    "isCrawlLeadAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlContractAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlGroupAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlOpportunityAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlChatterAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlSolutionAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlTaskAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlCustomEntityAttachments": {
      "type": "boolean"
    },
    "isCrawlKnowledgeArticles": {
      "type": "object",
      "properties": {
        {
          "isCrawlDraft": {
            "type": "boolean"
          },
          "isCrawlPublish": {
            "type": "boolean"
          },
          "isCrawlArchived": {
            "type": "boolean"
          }
        }
      }
    },
    "inclusionDocumentFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {

```

```
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionDocumentFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionDocumentFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionDocumentFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionAccountFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionAccountFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionAccountFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    }
  }
}
```

```
},
"exclusionAccountFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionCampaignFileTypePatterns": {
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionCampaignFileTypePatterns": {
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionCampaignFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionCampaignFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionCaseFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionCaseFileTypePatterns":{
```



```
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"inclusionCaseFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"exclusionCaseFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"inclusionContactFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"exclusionContactFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"inclusionContactFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"exclusionContactFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
```

```
{
  "type": "string"
},
"inclusionContractFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionContractFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionContractFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionContractFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionLeadFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionLeadFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
}
```

```
    }
  },
  "inclusionLeadFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionLeadFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionOpportunityFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionOpportunityFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "inclusionOpportunityFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
  "exclusionOpportunityFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
      "type": "string"
    }
  },
},
```

```
"inclusionSolutionFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionSolutionFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionSolutionFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionSolutionFileNamePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionTaskFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"exclusionTaskFileTypePatterns":{
  "type": "array",
  "items":
  {
    "type": "string"
  }
},
"inclusionTaskFileNamePatterns":{
  "type": "array",
```

```
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"exclusionTaskFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"inclusionGroupFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"exclusionGroupFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"inclusionGroupFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"exclusionGroupFileNamePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
        "type": "string"
    }
},
"inclusionChatterFileTypePatterns":{
    "type": "array",
    "items":
    {
```

```
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionChatterFileTypePatterns":{
      "type": "array",
      "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionChatterFileNamePatterns":{
      "type": "array",
      "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionChatterFileNamePatterns":{
      "type": "array",
      "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionCustomEntityTypePatterns":{
      "type": "array",
      "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionCustomEntityTypePatterns":{
      "type": "array",
      "items":
      {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionCustomEntityFileNamePatterns":{
      "type": "array",
      "items":
      {
        "type": "string"
      }
    }
  }
```

```
    },
    "exclusionCustomEntityFileNamePatterns": {
      "type": "array",
      "items": [
        {
          "type": "string"
        }
      ]
    },
    "required": [
    ],
  },
  "enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "SALESFORCEV2"
  },
  "syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
      "FULL_CRAWL",
      "FORCED_FULL_CRAWL",
      "CHANGE_LOG"
    ]
  },
  "secretArn": {
    "type": "string",
    "minLength": 20,
    "maxLength": 2048
  }
},
"version": {
  "type": "string",
  "anyOf": [
    {
      "pattern": "1.0.0"
    }
  ]
}
],
"required": [
  "connectionConfiguration",
  "repositoryConfigurations",
```

```

    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

ServiceNow テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として、ServiceNow ホスト URL、認証タイプ、およびインスタンスバージョンを指定します。また、データソースのタイプを `SERVICENOWV2` に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに `Type` として `TEMPLATE` を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[ServiceNow JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、ServiceNow JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
<code>connectionConfiguration</code>	データソースのエンドポイントの設定情報。
<code>repositoryEndpointMetadata</code>	データソースのエンドポイント情報。
<code>hostUrl</code>	ServiceNow ホスト URL。例えば、 <i>your-domain.service-now.com</i> です。
<code>authType</code>	使用する認証のタイプ (<code>basicAuth</code> または <code>OAuth2</code>)。
<code>servicenowInstanceVersion</code>	使用する ServiceNow バージョン。Tokyo、San Diego、Rome のいずれかを選択できます <code>Others</code> 。
<code>repositoryConfigurations</code>	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
<code>knowledgeArticle</code>	ServiceNow ナレッジ記事、添付ファイル、サービスカタログ、およびインシデントの属性またはフィールド

設定	説明
- 添付 - serviceCatalog - インシデント	名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「データソースフィールドのマッピング」を参照してください。ServiceNow データソースのフィールド名は、ServiceNow カスタムメタデータ内に存在する必要があります。
その他のプロパティ	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。
maxFileSizeInMegabytes	Amazon Kendra がクロールするファイルサイズ制限を MBs 単位で指定します。Amazon Kendra は、定義したサイズ制限内のファイルのみをクロールします。デフォルトのファイルサイズは 50 MB です。最大ファイルサイズは 0 MB より大きくし、50 MB 以下にする必要があります。
- knowledgeArticleFilter - incidentQueryFilter - serviceCatalogQueryFilter - knowledgeArticleTitleRegExp - serviceCatalogTitleRegExp - incidentTitleRegExp - inclusionFileTypePatterns - exclusionFileTypePatterns - inclusionFileNamePatterns - exclusionFileNamePatterns - incidentStateType	ServiceNow データソースにある特定のファイルを含めるか、除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。

設定	説明
• isCrawlKnowledgeArticle • isCrawlKnowledgeArticleAttachment • includePublicArticlesOnly • isCrawlServiceCatalog • isCrawlServiceCatalogAttachment • isCrawlActiveServiceCatalog • isCrawlInactiveServiceCatalog • isCrawlIncident • isCrawlIncidentAttachment • isCrawlActiveIncident • isCrawlInactiveIncident • applyACLForKnowledgeArticle • applyACLForServiceCatalog • applyACLForIncident	true は、ServiceNow ナレッジ記事、サービスカタログ、インシデント、添付ファイルをクロールします。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして <code>SERVICENOWV2</code> を指定します。
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API PutPrincipalMapping を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

設定	説明
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
secretARN	ServiceNow への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "username": " <i>user name</i>", "password": " <i>password</i>" }</pre> OAuth2 認証を使用する場合、シークレットには、次のキーを含む JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "username": " <i>user name</i>", "password": " <i>password</i>", "clientId": " <i>client id</i>", "clientSecret": " <i>client secret</i>" }</pre>
version	現在サポートされているテンプレートのバージョン。

ServiceNow JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "hostUrl": {
              "type": "string",
              "pattern": "^(?!^(https?|ftp|file):\\|\\|)[a-z0-9-]+(\\.service-
now.com|\\.servicenowservices.com)$",
              "minLength": 1,
              "maxLength": 2048
            },
            "authType": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "basicAuth",
                "OAuth2"
              ]
            },
            "servicenowInstanceVersion": {
              "type": "string",
              "enum": [
                "Tokyo",
                "SanDiego",
                "Rome",
                "Others"
              ]
            }
          ],
          "required": [
            "hostUrl",
            "authType",
            "servicenowInstanceVersion"
          ]
        }
      },
      "required": [

```

```

    "repositoryEndpointMetadata"
  ]
},
"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "knowledgeArticle": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",
                  "enum": [
                    "STRING",
                    "DATE",
                    "STRING_LIST"
                  ]
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "dateFieldFormat": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    }
  },
  "required": [

```

```

        "fieldMappings"
      ]
    },
    "attachment": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",
                  "enum": [
                    "STRING",
                    "LONG",
                    "DATE",
                    "STRING_LIST"
                  ]
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "dateFieldFormat": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                }
              }
            },
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",
                  "enum": [
                    "STRING",
                    "LONG",
                    "DATE",
                    "STRING_LIST"
                  ]
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "dateFieldFormat": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                }
              }
            }
          ]
        }
      }
    },
    "required": [
      "indexFieldName",
      "indexFieldType",
      "dataSourceFieldName"
    ]
  }
}

```

```

    },
    "serviceCatalog": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",
                  "enum": [
                    "STRING",
                    "DATE",
                    "STRING_LIST"
                  ]
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "dateFieldFormat": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                }
              }
            }
          ]
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "required": [
      "fieldMappings"
    ]
  },
  "incident": {
    "type": "object",

```

```

    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": [
                  "STRING",
                  "DATE",
                  "STRING_LIST"
                ]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
              }
            },
            "required": [
              "indexFieldName",
              "indexFieldType",
              "dataSourceFieldName"
            ]
          }
        ]
      },
      "required": [
        "fieldMappings"
      ]
    },
    "additionalProperties": {
      "type": "object",
      "properties": {

```



```
"maxFileSizeInMegabytes": {
  "type": "string"
},
"isCrawlKnowledgeArticle": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlKnowledgeArticleAttachment": {
  "type": "boolean"
},
"includePublicArticlesOnly": {
  "type": "boolean"
},
"knowledgeArticleFilter": {
  "type": "string"
},
"incidentQueryFilter": {
  "type": "string"
},
"serviceCatalogQueryFilter": {
  "type": "string"
},
"isCrawlServiceCatalog": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlServiceCatalogAttachment": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlActiveServiceCatalog": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlInactiveServiceCatalog": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlIncident": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlIncidentAttachment": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlActiveIncident": {
  "type": "boolean"
},
"isCrawlInactiveIncident": {
  "type": "boolean"
}
```

```
    },
    "applyACLForKnowledgeArticle": {
      "type": "boolean"
    },
    "applyACLForServiceCatalog": {
      "type": "boolean"
    },
    "applyACLForIncident": {
      "type": "boolean"
    },
    "incidentStateType": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string",
        "enum": [
          "Open",
          "Open - Unassigned",
          "Resolved",
          "All"
        ]
      }
    },
    "knowledgeArticleTitleRegExp": {
      "type": "string"
    },
    "serviceCatalogTitleRegExp": {
      "type": "string"
    },
    "incidentTitleRegExp": {
      "type": "string"
    },
    "inclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "exclusionFileTypePatterns": {
      "type": "array",
      "items": {
        "type": "string"
      }
    },
    "inclusionFileNamePatterns": {
```

```
        "type": "array",
        "items": {
            "type": "string"
        }
    },
    "exclusionFileNamePatterns": {
        "type": "array",
        "items": {
            "type": "string"
        }
    }
},
"required": []
},
"type": {
    "type": "string",
    "pattern": "SERVICENOWV2"
},
"enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
},
"syncMode": {
    "type": "string",
    "enum": [
        "FORCED_FULL_CRAWL",
        "FULL_CRAWL"
    ]
},
"secretArn": {
    "type": "string",
    "minLength": 20,
    "maxLength": 2048
}
},
"version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
        {
            "pattern": "1.0.0"
        }
    ]
}
},
"required": [
    "connectionConfiguration",
```

```
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type"
  ]
}
```

Slack テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部としてホスト URL を指定します。また、データソースのタイプを SLACK に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Slack JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Slack JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
teamId	Slack メインページの URL からコピーした Slack チーム ID。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
すべて	Slack コンテンツの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。

設定	説明
inclusionPatterns	Slack データソースにある特定のコンテンツを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するコンテンツは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないコンテンツは、インデックスから除外されます。コンテンツが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。
exclusionPatterns	Slack データソースの特定のコンテンツを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するコンテンツは、インデックスから除外されます。パターンと一致しないコンテンツは、インデックスに含まれます。コンテンツが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのコンテンツはインデックスに含まれません。
crawlBotMessages	true ボットメッセージをクロールします。
excludeArchived	true アーカイブされたメッセージのクロールを除外します。
conversationType	PUBLIC_CHANNEL 、 、 PRIVATE_CHANNEL GROUP_MESSAGE および のインデックスを作成する会話のタイプDIRECT_MESSAGE 。
channelFilter	インデックスを作成するチャンネルのタイプ (private_channel または public_channel)。
sinceDate	Slack コネクタが特定の sinceDate に基づいてコンテンツをクロールするように sinceDate パラメータを設定できます。

設定	説明
lookBack	コネクタが更新または削除されたコンテンツを、最後のSlackコネクタ同期前の指定された時間までクロールするようにlookBackパラメータを設定できます。
syncMode	データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。以下のいずれかから選択できます。 • FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。 • FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。 • CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
type	データソースのタイプ。データソースタイプとして SLACK を指定します。

設定	説明
enableIdentityCrawler	true は、Amazon Kendra の ID クローラを使用して、特定のドキュメントにアクセスできるユーザーとグループの ID/プリンシパル情報を同期します。ID クローラがオフになっている場合、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、API を使用してユーザーおよびグループのアクセス情報 PutPrincipalMapping をアップロードすることもできます。
secretArn	への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) Slack。シークレットには、次のキーを持つ JSON 構造を含める必要があります。 <pre>{ "slackToken": " <i>token</i>" }</pre>
version	現在サポートされているこのテンプレートのバージョン。

Slack JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
```

```
        "teamId": {
          "type": "string"
        },
        "required": ["teamId"]
      }
    },
    "repositoryConfigurations": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "All": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "fieldMappings": {
              "type": "array",
              "items": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {
                    "indexFieldName": {
                      "type": "string"
                    },
                    "indexFieldType": {
                      "type": "string",
                      "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "DATE", "LONG"]
                    },
                    "dataSourceFieldName": {
                      "type": "string"
                    },
                    "dateFieldFormat": {
                      "type": "string",
                      "pattern": "yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ss'Z'"
                    }
                  }
                }
              ]
            },
            "required": [
              "indexFieldName",
              "indexFieldType",
              "dataSourceFieldName"
            ]
          }
        }
      }
    }
  },
}
```



```
        "required": [
            "fieldMappings"
        ]
    },
    "required": [
    ],
},
"additionalProperties": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "exclusionPatterns": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string"
            }
        },
        "inclusionPatterns": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string"
            }
        },
        "crawlBotMessages": {
            "type": "boolean"
        },
        "excludeArchived": {
            "type": "boolean"
        },
        "conversationType": {
            "type": "array",
            "items": {
                "type": "string",
                "enum": [
                    "PUBLIC_CHANNEL",
                    "PRIVATE_CHANNEL",
                    "GROUP_MESSAGE",
                    "DIRECT_MESSAGE"
                ]
            }
        },
        "channelFilter": {
            "type": "object",
            "properties": {
```

```
      "private_channel": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      },
      "public_channel": {
        "type": "array",
        "items": {
          "type": "string"
        }
      }
    }
  },
  "channelIdFilter": {
    "type": "array",
    "items": {
      "type": "string"
    }
  },
  "sinceDate": {
    "anyOf": [
      {
        "type": "string",
        "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2}T[0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}Z$"
      },
      {
        "type": "string",
        "pattern": ""
      }
    ]
  },
  "lookBack": {
    "type": "string",
    "pattern": "^[0-9]*$"
  }
},
"required": [
]
},
"syncMode": {
  "type": "string",
  "enum": [
    "FORCED_FULL_CRAWL",
```

```

        "FULL_CRAWL",
        "CHANGE_LOG"
    ]
},
"type" : {
    "type" : "string",
    "pattern": "SLACK"
},
"enableIdentityCrawler": {
    "type": "boolean"
},
"secretArn": {
    "type": "string"
}
},
"version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
        {
            "pattern": "1.0.0"
        }
    ]
},
"required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "syncMode",
    "additionalProperties",
    "secretArn",
    "type",
    "enableIdentityCrawler"
]
}

```

Zendesk テンプレートスキーマ

データソーススキーマを含む JSON を [TemplateConfiguration](#) オブジェクトの一部として含めます。接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部としてホスト URL を指定します。また、データソースのタイプを ZENDESK に指定します。認証情報のシークレット、およびその他の必要な設定を指定します。次に、[CreateDataSource](#) を呼び出すときに Type として TEMPLATE を指定します。

このデベロッパーガイドで提供されているテンプレートを使用できます。「[Zendesk JSON スキーマ](#)」を参照してください。

次の表に、Zendesk JSON スキーマのパラメータを示します。

設定	説明
connectionConfiguration	データソースのエンドポイントの設定情報。
repositoryEndpointMetadata	データソースのエンドポイント情報。
hostURL	Zendesk のホスト URL。例えば、https://yoursubdomain.zendesk.com。
repositoryConfigurations	データソースのコンテンツに関する設定情報。例えば、特定のタイプのコンテンツやフィールドマッピングの設定などです。
- ticket - ticketComment - ticketCommentAttachment - article - articleComment - articleAttachment - communityTopic - communityPostComment	Zendesk チケットの属性またはフィールド名を Amazon Kendra インデックスフィールド名にマッピングするオブジェクトのリスト。詳細については、「 データソースフィールドのマッピング 」を参照してください。
secretARN	Zendesk への接続に必要なキーと値のペアを含む AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN)。シークレットには、ホスト URL、クライアント ID、クライアントシークレット、ユーザー名、パスワードのキーを含む JSON 構造が含まれている必要があります。
additionalProperties	データソース内のコンテンツ用の追加設定オプション。

設定	説明
organizationNameFilter	特定の [組織] 内に存在するチケットのインデックスを作成できます。
sinceDate	Zendesk コネクタが特定の sinceDate に基づいてコンテンツをクロールするように sinceDate パラメータを設定できます。
inclusionPatterns	Zendesk データソースにある特定のファイルを含めるための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスに含まれます。パターンに一致しないファイルは、インデックスから除外されます。ファイルが包含パターンと除外パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
exclusionPatterns	Zendesk データソースにある特定のファイルを除外するための正規表現のパターンのリスト。パターンに一致するファイルは、インデックスから除外されます。パターンに一致しないファイルは、インデックスに含まれます。ファイルが除外パターンと包含パターンの両方に一致する場合、除外パターンが優先され、そのファイルはインデックスに含まれません。
- isCrawlTicket - isCrawlTicketComment - isCrawlTicketCommentAttachment - isCrawlArticle - isCrawlArticleComment - isCrawlArticleAttachment - isCrawlCommunityTopic - isCrawlCommunityPost - isCrawlCommunityPostComment	これらのタイプのコンテンツをクロールするには、true「」を入力します。

設定	説明
type	データソースタイプとして ZENDESK を指定します。
useChangeLog	Zendesk 変更ログを使用して、どのドキュメントをインデックスで更新する必要があるかを判断するには、true「」を入力します。変更ログのサイズによっては、Zendesk でドキュメントをスキャンする方が速い場合があります。Zendesk データソースをインデックスに初めて同期する場合は、すべてのドキュメントがスキャンされます。

Zendesk JSON スキーマ

```
{
  "$schema": "http://json-schema.org/draft-04/schema#",
  "type": "object",
  "properties": {
    "connectionConfiguration": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "repositoryEndpointMetadata": {
          "type": "object",
          "properties": {
            "hostUrl": {
              "type": "string",
              "pattern": "https:.*"
            }
          },
          "required": [
            "hostUrl"
          ]
        }
      },
      "required": [
        "repositoryEndpointMetadata"
      ]
    }
  },
  "required": [
    "connectionConfiguration"
  ]
}
```

```

"repositoryConfigurations": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "ticket": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",
          "items": {
            "anyOf": [
              {
                "type": "object",
                "properties": {
                  "indexFieldName": {
                    "type": "string"
                  },
                  "indexFieldType": {
                    "type": "string",
                    "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
                  },
                  "dataSourceFieldName": {
                    "type": "string"
                  },
                  "dateFieldFormat": {
                    "type": "string",
                    "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
                  }
                }
              },
              {
                "type": "string"
              }
            ]
          }
        },
        "required": [
          "indexFieldName",
          "indexFieldType",
          "dataSourceFieldName"
        ]
      }
    },
    "ticketComment": {

```

```

    "type": "object",
    "properties": {
      "fieldMappings": {
        "type": "array",
        "items": {
          "anyOf": [
            {
              "type": "object",
              "properties": {
                "indexFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "indexFieldType": {
                  "type": "string",
                  "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
                },
                "dataSourceFieldName": {
                  "type": "string"
                },
                "dateFieldFormat": {
                  "type": "string",
                  "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
                }
              },
              "required": [
                "indexFieldName",
                "indexFieldType",
                "dataSourceFieldName"
              ]
            }
          ]
        }
      },
      "required": [
        "fieldMappings"
      ]
    },
    "ticketCommentAttachment": {
      "type": "object",
      "properties": {
        "fieldMappings": {
          "type": "array",

```



```

      "items": {
        "anyOf": [
          {
            "type": "object",
            "properties": {
              "indexFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "indexFieldType": {
                "type": "string",
                "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
              },
              "dataSourceFieldName": {
                "type": "string"
              },
              "dateFieldFormat": {
                "type": "string",
                "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
              }
            },
            "required": [
              "indexFieldName",
              "indexFieldType",
              "dataSourceFieldName"
            ]
          }
        ]
      },
      "required": [
        "fieldMappings"
      ],
      "article": {
        "type": "object",
        "properties": {
          "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
              "anyOf": [
                {
                  "type": "object",
                  "properties": {

```

```

        "indexFieldName": {
            "type": "string"
        },
        "indexFieldType": {
            "type": "string",
            "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
        },
        "dataSourceFieldName": {
            "type": "string"
        },
        "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"communityPostComment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
                "anyOf": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",

```

```

        "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
    },
    "dataSourceFieldName": {
        "type": "string"
    },
    "dateFieldFormat": {
        "type": "string",
        "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
    }
},
"required": [
    "indexFieldName",
    "indexFieldType",
    "dataSourceFieldName"
]
}
]
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"articleComment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
                "anyOf": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
                            },
                            "dataSourceFieldName": {
                                "type": "string"
                            }
                        }
                    }
                ]
            }
        }
    }
}

```

```

        "dateFieldFormat": {
            "type": "string",
            "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]
}
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"articleAttachment": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
                "anyOf": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
                            },
                            "dataSourceFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "dateFieldFormat": {
                                "type": "string",
                                "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
                            }
                        }
                    }
                ]
            }
        }
    }
},

```

```

        "required": [
            "indexFieldName",
            "indexFieldType",
            "dataSourceFieldName"
        ]
    }
]
}
}
},
"required": [
    "fieldMappings"
]
},
"communityTopic": {
    "type": "object",
    "properties": {
        "fieldMappings": {
            "type": "array",
            "items": {
                "anyOf": [
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
                            },
                            "dataSourceFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "dateFieldFormat": {
                                "type": "string",
                                "pattern": "dd-MM-yyyy HH:mm:ss"
                            }
                        }
                    },
                    {
                        "type": "object",
                        "properties": {
                            "indexFieldName": {
                                "type": "string"
                            },
                            "indexFieldType": {
                                "type": "string",
                                "enum": ["STRING", "STRING_LIST", "LONG", "DATE"]
                            },
                            "dataSourceFieldName": {
                                "type": "string"
                            }
                        }
                    }
                ]
            }
        }
    },
    "required": [
        "indexFieldName",
        "indexFieldType",
        "dataSourceFieldName"
    ]
}
]

```

```

        }
      ]
    }
  },
  "required": [
    "fieldMappings"
  ]
}
},
"secretArn": {
  "type": "string",
  "minLength": 20,
  "maxLength": 2048
},
"additionalProperties": {
  "type": "object",
  "properties": {
    "organizationNameFilter": {
      "type": "array"
    },
    "sinceDate": {
      "type": "string",
      "pattern": "^[0-9]{4}-[0-9]{2}-[0-9]{2} [0-9]{2}:[0-9]{2}:[0-9]{2}$"
    },
    "inclusionPatterns": {
      "type": "array"
    },
    "exclusionPatterns": {
      "type": "array"
    },
    "isCrawlTicket": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlTicketComment": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlTicketCommentAttachment": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlArticle": {
      "type": "string"
    }
  },

```

```

    "isCrawlArticleAttachment": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlArticleComment": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlCommunityTopic": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlCommunityPost": {
      "type": "string"
    },
    "isCrawlCommunityPostComment": {
      "type": "string"
    }
  },
  "type": {
    "type": "string",
    "pattern": "ZENDESK"
  },
  "useChangeLog": {
    "type": "string",
    "enum": ["true", "false"]
  },
  "version": {
    "type": "string",
    "anyOf": [
      {
        "pattern": "1.0.0"
      }
    ]
  },
  "additionalProperties": false,
  "required": [
    "connectionConfiguration",
    "repositoryConfigurations",
    "additionalProperties",
    "useChangeLog",
    "secretArn",
    "type"
  ]

```

```
}
```

Adobe Experience Manager

Note

Adobe Experience Manager コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで、既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合では、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Adobe Experience Manager は、ウェブサイトまたはモバイルアプリケーションのコンテンツの作成に使用されるコンテンツ管理システムです。を使用して Amazon Kendra、ページ Adobe Experience Manager とコンテンツアセットに接続してインデックスを作成できます。

Amazon Kendra は Adobe Experience Manager、(AEM) を Cloud Service の作成者インスタンスおよび Adobe Experience Manager オンプレミスの作成者およびパブリッシュインスタンスとしてサポートします。

[Amazon Kendra コンソール](#) または [TemplateConfiguration](#) API を使用して Adobe Experience Manager データソース Amazon Kendra に接続できます。

Adobe Experience Manager データソースコネクタ Amazon Kendra のトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

Adobe Experience Manager データソースコネクタは以下の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- OAuth 2.0 と基本的な認証
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して Adobe Experience Manager データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Adobe Experience Manager および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Adobe Experience Manager で以下を確認してください。

- 管理者権限を持つアカウント、または管理者ユーザーへのアクセス。
- Adobe Experience Manager ホスト URL をコピー済み。

Note

(オンプレミス/サーバー) Amazon Kendra AWS Secrets Manager は、に含まれるエンドポイント情報が、データソース設定の詳細で指定されたエンドポイント情報と同じかどうかを確認します。[混乱する代理問題](#)は、ユーザーがアクションを実行するアクセス許可がないにもかかわらず、Amazon Kendra をプロキシとして使用して設定された秘密にアクセスし、アクションを実行するセキュリティの問題です。後でエンドポイント情報を変更する場合は、新しいシークレットを作成してこの情報を同期する必要があります。

- 管理者ユーザー名とパスワードの基本認証情報を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- オプション: Adobe Experience Manager (AEM) で OAuth 2.0 認証情報をクラウドサービスまたは AEM オンプレミスとして設定しました。AEM オンプレミスを使用する場合、認証情報にはクライ

アント ID、クライアントシークレット、プライベートキーが含まれます。AEM をクラウドサービスとして使用する場合、認証情報にはクライアント ID、クライアントシークレット、プライベートキー、組織 ID、テクニカルアカウント ID、および Adobe Identity Management System (IMS) ホストが含まれます。[AEM をクラウドサービスとして使用するための認証情報を生成する方法については、「Adobe Experience Manager ドキュメント」](#)を参照してください。AEM オンプレミスでは、Adobe Granite OAuth 2.0 サーバー実装 (com.adobe.granite.oauth.server) が AEM の OAuth 2.0 サーバー機能をサポートしています。

- 各ドキュメントが Adobe Experience Manager および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Adobe Experience Manager の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合はシークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Adobe Experience Manager データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成で

きます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Adobe Experience Manager データソース Amazon Kendra に接続するには、がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Adobe Experience Manager データソースの必要な詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、Adobe Experience Manager 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Adobe Experience Manager

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Adobe Experience Manager コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Adobe Experience Manager コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。

6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。

- a. [ソース] - [AEM オンプレミス] または [クラウドサービスとしての AEM] を選択します。

Adobe Experience Manager ホスト URL を入力します。例えば、AEM オンプレミスを使用する場合は、ホスト名とポートを含めます。https://hostname:port。または、AEM をクラウドサービスとして使用する場合は、作成者 URL を使用できます。https://author-xxxxxxx-xxxxxxx.adobecloud.com。

- b. [SSL 証明書の場所] - Amazon S3 バケットに保存されている SSL 証明書へのパスを入力します。これを使用して、安全な SSL 接続で AEM オンプレミスに接続します。
- c. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- d. [認証] - [基本認証] または [OAuth 2.0 認証] を選択します。次に、既存の AWS Secrets Manager シークレットを選択するか、新しいシークレットを作成して Adobe Experience Manager 認証情報を保存します。新しいシークレットを作成すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

[基本認証] を選択した場合は、シークレットの名前、Adobe Experience Manager サイトユーザー名、パスワードを入力します。ユーザーは管理者アクセス許可を持っているか、管理者ユーザーである必要があります。

[OAuth 2.0 認証] を選択し、AEM オンプレミスを使用する場合は、シークレットの名前、クライアント ID、クライアントシークレット、およびプライベートキーを入力します。AEM をクラウドサービスとして使用する場合は、シークレット、クライアント ID、クライアントシークレット、プライベートキー、組織 ID、テクニカルアカウント ID、および Adobe Identity Management System (IMS) ホストの名前を入力します。

シークレットを追加する を保存します。

- e. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- f. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、

Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

- g. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- h. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [同期の範囲] - 特定のコンテンツタイプ、ページコンポーネント、ルートパスのクローラに制限を設定し、正規表現パターンを使用してコンテンツをフィルタリングします。
 - i. [コンテンツタイプ] - ページまたはアセットのみ、あるいはその両方をクローラするかを選択します。
 - ii. (オプション) [その他の設定] で、次のオプションフィールドを設定します。
 - [ページコンポーネント] - ページコンポーネントの特定の名前。ページコンポーネントは、Adobe Experience Manager テンプレートエディタと連携するように設計された拡張可能なページコンポーネントで、ページヘッダー/フッターコンポーネントと構造コンポーネントをテンプレートエディタで組み立てることが可能です。
 - [コンテンツフラグメントバリエーション] - コンテンツフラグメントバリエーションの具体的な名前。コンテンツフラグメントを使用すると、Adobe Experience Manager でページに依存しないコンテンツをデザイン、作成、キュレーション、公開できます。これにより、複数の場所や複数のチャネルですぐに使用できるコンテンツを準備できます。
 - [ルートパス] - 特定のコンテンツへのルートパス。

- [正規表現パターン] - 特定のページやアセットを含めるまたは除外する正規表現パターン。
- b. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- c. [タイムゾーン ID] - EM オンプレミスを使用していて、サーバーのタイムゾーンが Amazon Kendra AEM コネクタまたはインデックスのタイムゾーンと異なる場合は、AEM コネクタまたはインデックスに合わせてサーバーのタイムゾーンを指定できます。AEM オンプレミスのデフォルトのタイムゾーンは、Amazon Kendra AEM コネクタまたはインデックスのタイムゾーンです。クラウドサービスとしての AEM のデフォルトのタイムゾーンはグリニッジ標準時です。
- d. 頻度の同期実行スケジュール — データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. インデックスにマッピングする Amazon Kendra 、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。カスタムデータソースフィールドを追加するには、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - b. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Adobe Experience Manager

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ AEM を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- AEM ホスト URL - Adobe Experience Manager ホスト URL を指定します。例えば、AEM オンプレミスを使用する場合は、ホスト名とポートを含めます。https://hostname:port。または、AEM をクラウドサービスとして使用する場合は、作成者 URL を使用できます。https://author-xxxxxx-xxxxxx.adobecloud.com。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- 認証タイプ - 使用する認証タイプを指定します (Basic または OAuth2)。
- AEM タイプ - 使用する Adobe Experience Manager のタイプを指定します (CLOUD または ON_PREMISE)。

- シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) - AEM オンプレミスまたは Cloud のいずれかで基本認証を使用する場合は、ユーザー名とパスワードの認証情報を保存するシークレットを指定します。AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "aemUrl": "Adobe Experience Manager On-Premise host URL",
  "username": "user name with admin permissions",
  "password": "password with admin permissions"
}
```

AEM オンプレミスに OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットは次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "aemUrl": "Adobe Experience Manager host URL",
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "client secret",
  "privateKey": "private key"
}
```

AEM の OAuth 2.0 認証をクラウドサービスとして使用する場合、シークレットは次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "client secret",
  "privateKey": "private key",
  "orgId": "organization ID",
  "technicalAccountId": "technical account ID",
  "imsHost": "Adobe Identity Management System (IMS) host"
}
```

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で、シークレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Adobe Experience Manager コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Adobe Experience Manager data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- タイムゾーン ID — AEM オンプレミスを使用し、サーバーのタイムゾーンが Amazon Kendra AEM コネクタまたはインデックスのタイムゾーンと異なる場合は、AEM コネクタまたはインデックスに合わせてサーバーのタイムゾーンを指定できます。

AEM オンプレミスのデフォルトのタイムゾーンは、Amazon Kendra AEM コネクタまたはインデックスのタイムゾーンです。クラウドサービスとしての AEM のデフォルトのタイムゾーンはグリニッジ標準時です。

サポートされているタイムゾーン ID の詳細については、「[Adobe Experience Manager JSON schema](#)」を参照してください。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のページやアセットを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - Adobe Experience Manager のデータソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Adobe Experience Manager template schema](#)」を参照してください。

Alfresco

Note

Alfresco コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされています。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Alfresco は、お客様のコンテンツの保存と管理を支援するコンテンツ管理サービスです。を使用して Amazon Kendra、Alfresco ドキュメントライブラリ、Wiki、ブログのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra はオンプレミスと Alfresco クラウド (Platform as a Service) Alfresco をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)または [TemplateConfiguration](#) API を使用して Alfresco データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Alfresco データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Alfresco データソースコネクタは以下の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- OAuth 2.0 と基本的な認証
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Alfresco データソースのインデックスを作成する前に、Alfrescoと でこれらの変更を行います AWS アカウント。

Alfresco で以下を確認してください。

- Alfresco リポジトリ URL とウェブアプリケーション URL をコピー済み。特定の Alfresco サイトのみのインデックスを作成する場合は、サイト ID もコピーしてください。
- 少なくとも読み取りアクセス許可のあるユーザー名とパスワードを含む Alfresco 認証情報を記録しました。OAuth 2.0 認証を使用する場合は、ユーザーを Alfresco 管理者グループに追加する必要があります。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- オプション: で OAuth 2.0 認証情報を設定しました Alfresco。認証情報には、クライアント ID、クライアントシークレット、およびトークン URL が含まれます。クライアントを Alfresco オンプレミス用に設定する方法について詳しくは、[Alfresco のドキュメント](#)を参照してください。Alfresco クラウド (PaaS) を使用している場合は、[Hyland サポート](#)に連絡して Alfresco OAuth 2.0 認証を受ける必要があります。
- 各ドキュメントが Alfresco および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Alfresco 認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合はシークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Alfresco データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Alfresco データソース Amazon Kendra に接続するには、[データ Amazon Kendra にアクセスできるように、Alfresco データソースの必要な詳細を指定する必要があります。](#) Alfresco をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Alfresco

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで Alfresco コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 を使用している場合 (該当する場合)、 「V2.0」 タグが付いた Alfresco コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。

- a. Alfresco type — Alfresco オンプレミス/サーバーまたはAlfrescoクラウド (Platform as a Service) のどちらを使用するかを選択します。
- b. Alfresco リポジトリ URL - Alfresco リポジトリ URL を入力します。例えば、Alfresco クラウド (PaaS) を使用している場合、リポジトリ URL は、`https://company.alfrescocloud.com` になる可能性があります。または、Alfresco オンプレミスを使用している場合は、リポジトリ URL は `https://company-alfresco-instance.company-domain.suffix:port` になる可能性があります。
- c. Alfresco ユーザーアプリケーション。URL - Alfresco ユーザーインターフェイスの URL を入力します。リポジトリ URL は Alfresco 管理者から取得できます。例えば、ユーザーインターフェイス URL は `https://example.com` とすることができます。
- d. SSL 証明書の場所 — Amazon S3 バケットに保存されている SSL 証明書へのパスを入力します。これを使用して、安全な SSL 接続で Alfresco オンプレミスに接続します。
- e. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- f. [認証] - [基本認証] または [OAuth 2.0 認証] を選択します。次に、既存の Secrets Manager シークレットを選択するか、新しいシークレットを作成して Alfresco 認証情報を保存します。新しいシークレットを作成すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

[基本認証] を選択した場合は、シークレットの名前、Alfresco サイトユーザー名、パスワードを入力します。

[OAuth 2.0 認証]を選択した場合は、シークレットの名前、クライアント ID、クライアントシークレット、トークン URL を入力します。

- g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- h. ID クローラ — Amazon Kendraの ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、

すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

- i. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- j. [次へ] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

- a. [同期の範囲] - 特定のコンテンツのクローラに制限を設定し、正規表現パターンを使用してコンテンツをフィルタリングします。
- b. i. [コンテンツ] - Alfresco の「アスペクト」とマークされたコンテンツ、特定の Alfresco サイト内のコンテンツ、またはすべての Alfresco サイトにわたるコンテンツをクローラするかどうかを選択します。
 - ii. (オプション) [その他の設定] - 以下の設定を設定します。
 - [コメントを含める] - Alfresco ドキュメントライブラリとブログにコメントを含めるかどうかを選択します。
 - [正規表現パターン] - 特定のファイルを含めるまたは除外する正規表現パターン。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクローラされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra

は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. インデックスにマッピングする、Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. カスタムデータソースフィールドを追加するには、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Alfresco

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ ALFRESCO を使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- Alfresco サイト ID - Alfresco サイト ID を指定します。
- Alfresco リポジトリ URL - Alfresco リポジトリ URL を指定します。リポジトリ URL は Alfresco 管理者から取得できます。例えば、Alfresco クラウド (PaaS) を使用している場合、リポジトリ URL は、<https://company.alfrescocloud.com> になる可能性があります。または、Alfresco オンプレミスを使用している場合は、リポジトリ URL は <https://company-alfresco-instance.company-domain.suffix:port> になる可能性があります。
- Alfresco ウェブアプリケーション URL - Alfresco ユーザーインターフェイス URL を指定します。リポジトリ URL は Alfresco 管理者から取得できます。例えば、ユーザーインターフェイス URL は <https://example.com> とすることができます。
- 認証タイプ - 使用する認証タイプを指定します (OAuth2 または Basic)。

- Alfresco タイプ - 使用する PAAS のタイプを指定します。Alfresco (クラウド/Platform as a Service) または ON_PREM (オンプレミス) のいずれかを使用するかを指定します。
- シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) - 基本認証を使用する場合は、ユーザー名とパスワードの認証情報を保存するシークレットを指定します。AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}
```

OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "client secret",
  "tokenUrl": "token URL"
}
```

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で、シークレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Alfresco コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Alfresco data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- コンテンツタイプ - クロールするコンテンツのタイプ。Alfresco の「アスペクト」でマークされたコンテンツ、特定の Alfresco サイト内のコンテンツ、またはすべての Alfresco サイトにわたるコンテンツ。特定の「アスペクト」コンテンツを一覧表示することもできます。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- **同期モード** — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- **FORCED_FULL_CRAWL** は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- **FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- **ID クローラ** — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- **フィールドマッピング** - データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Alfresco template schema](#)」を参照してください。

詳細はこちら

Alfresco データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [を使用してAlfrescoコンテンツをインテリジェントに検索する Amazon Kendra](#)

Aurora (MySQL)

Note

Aurora (MySQL) コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Aurora は、クラウド用に構築されたリレーショナルデータベース管理システム (RDBMS) です。Aurora ユーザーの場合は、を使用して Aurora (MySQL) データソース Amazon Kendra のインデックスを作成できます。データソースコネクタは Aurora MySQL Amazon Kendra Aurora (MySQL)3 と Aurora Serverless MySQL 8.0 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用してAurora (MySQL)データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Aurora (MySQL)トラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用してAurora (MySQL)データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Aurora (MySQL)および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Aurora (MySQL) で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。この情報は Amazon RDS コンソールで確認できます。

- 各ドキュメントが Aurora (MySQL) および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Aurora (MySQL) の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、コンソールを使用して、Aurora (MySQL) データソースを接続するときに新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Aurora (MySQL) データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガ](#)データにアクセスできるように Amazon Kendra、Aurora (MySQL) 認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、Aurora (MySQL) Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Aurora (MySQL)

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Aurora (MySQL)コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたAurora (MySQL)コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. ホスト - データベースのホスト URL を入力します (例: `http://instance URL.region.rds.amazonaws.com`)。
 - c. ポート - データベースポートを入力します (例: 5432)。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. [認証] には、次の情報を入力します。

- AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Aurora (MySQL)新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Aurora (MySQL)-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
- f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- g. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- h. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。SQL クエリは 32KB 未満で、セミコロン (;) を含まない必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。

- [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
- b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
 - タイムスタンプ列 - タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
- 8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
- 9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Aurora (MySQL)

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを mySql として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。

- **FORCED_FULL_CRAWL** は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- **FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- **CHANGE_LOG** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Aurora (MySQL) アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "user name": "database user name",  
  "password": "password"  
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- **IAM role** — を呼び出し `CreateDataSource` で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Aurora (MySQL) コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Aurora \(MySQL\) data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。

- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Aurora (MySQL) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Aurora \(MySQL\) テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Aurora (PostgreSQL)

Note

Aurora (PostgreSQL) コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Aurora は、クラウド向けに構築されたリレーショナルデータベース管理システム (RDBMS) です。Aurora ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Aurora (PostgreSQL) データソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra Aurora (PostgreSQL) Aurora PostgreSQL 1 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して Aurora (PostgreSQL) データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Aurora (PostgreSQL) トラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期

- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して Aurora (PostgreSQL) データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Aurora (PostgreSQL) および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Aurora (PostgreSQL) で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが Aurora (PostgreSQL) および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Aurora (PostgreSQL) の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Aurora (PostgreSQL) データソースの接続時にコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Aurora (PostgreSQL) データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Aurora (PostgreSQL) 認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、Aurora (PostgreSQL) Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Aurora (PostgreSQL)

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Aurora (PostgreSQL)コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたAurora (PostgreSQL)コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. ホスト - データベースのホスト URL を入力します (例: `http://instanceURL.region.rds.amazonaws.com`)。
 - c. ポート - データベースポートを入力します (例: 5432)。
 - d. インスタンス - データベースインスタンスを入力します (例: postgres)。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Aurora (PostgreSQL) 新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Aurora (PostgreSQL)-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
 - g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
- [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。SQL クエリは 32KB 未満で、セミコロン (;) を含まない必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
- b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、 はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。

- タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Aurora (PostgreSQL)

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを postgresql として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Aurora (PostgreSQL) アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "user name": "database user name",
  "password": "password"
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し>CreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Aurora (PostgreSQL)コネクタとに必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Aurora \(PostgreSQL\) data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Aurora (PostgreSQL) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Aurora \(PostgreSQL\) テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Amazon FSx (Windows)

Amazon FSx (Windows) は、共有ストレージ機能を提供するフルマネージド型のクラウドベースのファイルサーバーシステムです。Amazon FSx (Windows) ユーザーの場合は、を使用して Amazon Kendra Amazon FSx (Windows) データソースのインデックスを作成できます。

Note

Amazon Kendra がアップグレードされた Amazon FSx (Windows) コネクタをサポートするようになりました。

コンソールが自動的にアップグレードされました。コンソールで作成する新しいコネクタは、アップグレードされたアーキテクチャを使用します。API を使用する場合、コネクタを設定するには、オブジェクトの代わりに [TemplateConfiguration](#) FSxConfiguration オブジェクトを使用する必要があります。

古いコンソールと API アーキテクチャを使用して設定されたコネクタは、引き続き設定どおりに機能します。ただし、編集または更新することはできません。コネクタ設定を編集または更新する場合は、新しいコネクタを作成する必要があります。

コネクタワークフローをアップグレードされたバージョンに移行することをお勧めします。古いアーキテクチャを使用して設定されたコネクタのサポートは、2024 年 6 月までに終了する予定です。

[Amazon Kendra コンソール](#) または [TemplateConfiguration](#) API を使用して、Amazon FSx (Windows) データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Amazon FSx (Windows) データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Amazon FSx (Windows) データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- ユーザー ID クローリング
- 包含フィルターと除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Amazon FSx (Windows) データソースのインデックスを作成する前に、Amazon FSx (Windows) と の詳細を確認してください AWS アカウント。

Amazon FSx (Windows) の場合は、以下があることを確認してください。

- 読み取りおよびマウントのアクセス許可で Amazon FSx (Windows) を設定します。
- ファイルシステム ID を記録しました。ファイルシステム ID は、Amazon FSx (Windows) コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。
- Amazon FSx (Windows) ファイルシステムが存在する Amazon VPC を使用して仮想プライベートクラウドを設定しました。
- Active Directory ユーザーアカウントの Amazon FSx (Windows) 認証情報を記録しました。これには、DNS ドメイン名 (user@corp.example.com など) とパスワードを含む Active Directory ユーザー名が含まれます。

Note

コネクタが機能するために必要な認証情報のみを使用します。ドメイン管理者などの特権認証情報を使用しないでください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- 各ドキュメントが Amazon FSx (Windows) および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Amazon FSx (Windows) 認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録しました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Amazon FSx (Windows) データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Amazon FSx (Windows) データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra](#) にアクセスできるように Amazon FSx (Windows) データソースの必要な詳細を指定する必要があります。(Amazon FSx Windows) をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「[」を参照してください前提条件。](#)

Console

Amazon FSx (Windows) ファイルシステム Amazon Kendra に接続するには

1. [にサインイン AWS Management Console](#) し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。

2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Amazon FSx (Windows) コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Amazon FSx (Windows) コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Amazon FSx (Windows) ファイルシステム ID - Amazon FSx (Windows) から取得した既存のファイルシステム ID をドロップダウンから選択します。または、[Amazon FSx \(Windows\) ファイルシステム](#) を作成します。ファイルシステム ID は、Amazon FSx (Windows) コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。
 - b. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

- c. 認証 - 既存の AWS Secrets Manager シークレットを選択するか、新しいシークレットを作成してファイルシステムの認証情報を保存します。新しいシークレットを作成すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

ユーザー名とパスワードの認証情報を保存するシークレットを指定します。ユーザー名には DNS ドメイン名を含める必要があります。例えば、user@corp.example.com と入力します。

シークレットを保存して追加します。

- d. Virtual Private Cloud (VPC) — Amazon VPC Amazon FSx (Windows) が存在する を選択する必要があります。VPC サブネットとセキュリティグループを含めます。 [「 の設定 Amazon VPC 」](#) を参照してください。
- e. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- f. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. 同期スコープ、正規表現パターン - 特定のファイルを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。
 - b. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。 Amazon Kendra

は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- c. 同期実行スケジュール - 頻度 で、データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - d. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. インデックスにマッピングするファイルの Amazon Kendra 生成されたデフォルトフィールドから選択します。カスタムデータソースフィールドを追加するには、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - b. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon FSx (Windows) ファイルシステム Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマFSXを使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- ファイルシステム ID - Amazon FSx (Windows) ファイルシステムの識別子。ファイルシステム ID は、 Amazon FSx (Windows) コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。
- ファイルシステムタイプ - ファイルシステムのタイプを WINDOWS として指定します。
- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「 [を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#) 」を参照してください。

Note

Amazon FSx (Windows) が存在する を選択する必要があります Amazon VPC 。VPC サブネットとセキュリティグループを含めます。

- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — (Windows) アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム Amazon FSx (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user@corp.example.com",
  "password": "password"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Amazon FSx (Windows) コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、[IAM Amazon FSx 「\(Windows\) データソースの ロール」](#) を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- アクセスコントロールリスト (ACL) - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクローलするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

Note

ユーザーに対してユーザーコンテキストフィルタリングをテストするには、クエリを発行するときにユーザー名の一部として DNS ドメイン名を含める必要があります。Active Directory ドメインの管理用のアクセス許可が必要です。グループ名でユーザーコンテキストフィルタリングをテストすることもできます。

- フィールドマッピング - 選択すると、Amazon FSx (Windows) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定する他の重要な JSON キーのリストについては、[Amazon FSx 「\(Windows\) テンプレートスキーマ」](#)を参照してください。

詳細

(Amazon FSx Windows) データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [for Amazon FSx \(Windows\) for の Amazon Kendra コネクタを使用して、Windows ファイルシステムで非構造化データを安全に検索しますWindows File Server。](#)

Amazon FSx (NetApp ONTAP)

Amazon FSx (NetApp ONTAP) は、共有ストレージ機能を提供するフルマネージド型のクラウドベースのファイルサーバーシステムです。Amazon FSx (NetApp ONTAP) ユーザーの場合は、を使用して Amazon Kendra Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソースのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)または [TemplateConfiguration](#) API を使用して、Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含フィルターと除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソースのインデックスを作成する前に、Amazon FSx (NetApp ONTAP) との詳細を確認してください AWS アカウント。

Amazon FSx (NetApp ONTAP) の場合は、以下があることを確認してください。

- 読み取りおよびマウントのアクセス許可で Amazon FSx (NetApp ONTAP) を設定します。
- ファイルシステム ID を記録しました。ファイルシステム ID は Amazon FSx 、 (NetApp ONTAP) コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。
- ファイルシステムで使用するストレージ仮想マシン (SVM) ID を記録しました。SVM ID は、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コンソールのファイルシステムダッシュボードに移動し、ファイルシステム ID を選択し、ストレージ仮想マシンを選択することで確認できます。
- Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステムが存在する Amazon VPC を使用して仮想プライベートクラウドを設定しました。
- Active Directory ユーザーアカウントの Amazon FSx (NetApp ONTAP) 認証情報を記録しました。これには、DNS ドメイン名 (user@corp.example.com など) とパスワードを含む Active Directory ユーザー名が含まれます。Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステムに Network File System (NFS) プロトコルを使用する場合、認証情報には左 ID、右 ID、および事前共有キーが含まれます。

Note

コネクタが機能するために必要な認証情報のみを使用します。ドメイン管理者などの特権認証情報を使用しないでください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- 各ドキュメントが Amazon FSx (NetApp ONTAP) および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、

データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Amazon FSx (NetApp ONTAP) 認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録しました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Amazon FSx \(NetApp ONTAP\) データソースの必要な詳細を指定する必要があります。](#) (Amazon FSx NetApp ONTAP) をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステム Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Amazon FSx (NetApp ONTAP) コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. ソース - ファイルシステム情報を提供します。
 - ファイルシステムプロトコル - Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステムのプロトコルを選択します。Common Internet File System (CIFS) プロトコル、または Linux 用の Network File System (NFS) プロトコルのいずれかを選択できます。
 - Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステム ID - Amazon FSx (NetApp ONTAP) から取得した既存のファイルシステム ID をドロップダウンから選択します。また

は、[Amazon FSx \(NetApp ONTAP\) ファイルシステム](#)を作成します。ファイルシステム ID は、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。

- SVM ID (Amazon FSx (NetApp ONTAP) NetApp ONTAPのみ) — (NetApp ONTAP) のストレージ仮想マシン Amazon FSx (SVM) ID を指定します。SVM ID を見つけるには、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コンソールのファイルシステムダッシュボードに移動し、ファイルシステム ID を選択し、ストレージ仮想マシンを選択します。
- b. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- c. 認証 - 既存の AWS Secrets Manager シークレットを選択するか、新しいシークレットを作成してファイルシステムの認証情報を保存します。新しいシークレットを作成すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

ユーザー名とパスワードの認証情報を保存するシークレットを指定します。ユーザー名には DNS ドメイン名を含める必要があります。例えば、user@corp.example.com と入力します。

Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステムに NFS プロトコルを使用する場合は、左 ID、右 ID、および事前共有キーの認証情報を保存するシークレットを指定します。

シークレットを保存して追加します。

- d. Virtual Private Cloud (VPC) — Amazon VPC Amazon FSx (NetApp ONTAP) が存在するを選択する必要があります。VPC サブネットとセキュリティグループを含めます。「[の設定 Amazon VPC](#)」を参照してください。
- e. IAM ロール - 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- f. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. 同期スコープ、正規表現パターン - 正規表現パターンを追加して、特定のファイルを含めるか除外します。
 - b. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - c. 同期実行スケジュール - 頻度 で、データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - d. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. インデックスにマッピングするファイルの Amazon Kendra 生成されたデフォルトフィールドから選択します。カスタムデータソースフィールドを追加するには、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - b. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステム Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマFSXONTAPを使用する場合は、データソースタイプを[TemplateConfiguration](#)として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースをとして指定します。
- ファイルシステム ID — Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステムの識別子。ファイルシステム ID は、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コンソールのファイルシステムダッシュボードにあります。
- SVM ID — ファイルシステムで使用されるストレージ仮想マシン (SVM) ID。SVM ID は、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コンソールのファイルシステムダッシュボードに移動し、ファイルシステム ID を選択し、ストレージ仮想マシンを選択することで確認できます。
- プロトコルタイプ - Linux で共通インターネットファイルシステム (CIFS) プロトコルを使用するか、ネットワークファイルシステム (NFS) プロトコルを使用するかを指定します。
- ファイルシステムタイプ - ファイルシステムのタイプをとして指定しますFSXONTAP。
- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。



Note

Amazon FSx (NetApp ONTAP) が存在する Amazon VPC を選択する必要があります。VPC サブネットとセキュリティグループを含めます。

- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — (NetApp ONTAP) アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム Amazon FSx (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user@corp.example.com",
  "password": "password"
}
```

Amazon FSx (NetApp ONTAP) ファイルシステムに NFS プロトコルを使用する場合、シークレットは次のキーを持つ JSON 構造に保存されます。

```
{
  "leftId": "left ID",
  "rightId": "right ID",
  "preSharedKey": "pre-shared key"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Amazon FSx (NetApp ONTAP) コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、[IAM Amazon FSx 「\(NetApp ONTAP\) データソースの ロール」](#) を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- `FORCED_FULL_CRAWL` データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルを含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定

した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- アクセスコントロールリスト (ACL) - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクローलするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

Note

ユーザーに対してユーザーコンテキストフィルタリングをテストするには、クエリを発行するときにユーザー名の一部として DNS ドメイン名を含める必要があります。Active Directory ドメインの管理用のアクセス許可が必要です。グループ名でユーザーコンテキストフィルタリングをテストすることもできます。

- フィールドマッピング - 選択すると、Amazon FSx (NetApp ONTAP) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[Amazon FSx 「\(NetApp ONTAP\) テンプレートスキーマ」](#)を参照してください。

Amazon RDS/Aurora

データベースデータソースを使用して、データベースに保存されているドキュメントにインデックスを作成することができます。データベースの接続情報を指定すると、はドキュメント Amazon Kendra の接続とインデックス作成を行います。

Amazon Kendra は、次のデータベースをサポートしています。

- Amazon Aurora MySQL
- Amazon Aurora PostgreSQL
- Amazon RDS MySQL 用
- Amazon RDS PostgreSQL 用

 Note

サーバーレス Aurora データベースはサポートされていません。

 Important

この Amazon RDS/Aurora コネクタは、2023 年末までに廃止される予定です。Amazon Kendra は、新しいデータベースデータソースコネクタをサポートするようになりました。エクスペリエンスを向上させるために、ユースケースに応じて次の新しいコネクタから選択することをお勧めします。

- [Aurora \(MySQL\)](#)
- [Aurora \(PostgreSQL\)](#)
- [Amazon RDS \(MySQL\)](#)
- [Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\)](#)
- [Amazon RDS \(Oracle\)](#)
- [Amazon RDS \(PostgreSQL\)](#)
- [IBM DB2](#)
- [Microsoft SQL Server](#)
- [MySQL](#)
- [Oracle Database](#)
- [\[PostgreSQL\]](#)

[Amazon Kendra コンソール](#)と [DatabaseConfiguration](#) API を使用して、データベースデータソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra データベースデータソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra データベースデータソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用してデータベースデータソースのインデックスを作成する前に、データベースと AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

データベースで以下を確認してください。

- データベースのユーザー名とパスワードの基本認証情報を記録しました。
- ホスト名、ポート番号、ホストアドレス、データベース名、ドキュメントデータが含まれているデータテーブルの名前をコピーしました。PostgreSQL の場合、データテーブルはパブリックテーブルまたはパブリックスキーマである必要があります。

Note

ホストとポートは、インターネット上のデータベースサーバー Amazon Kendra の場所を指示します。データベース名とテーブル名は、データベースサーバー上のドキュメントデータ Amazon Kendra の場所を示します。

- ドキュメントデータを含むデータテーブル内の列の名前をコピーしました。ドキュメント ID、ドキュメント本文、ドキュメントが変更されたかどうかを検出する列 (最終更新列など)、カスタムインデックスフィールドにマッピングされるオプションのデータテーブル列を含める必要があります。[Amazon Kendra の予約済みフィールド名](#)をテーブルの列にマッピングできます。
- MySQL Amazon RDS に を使用するか別のタイプを使用するかなどのデータベースエンジンタイプ情報をコピーしました。

- 各ドキュメントがデータベースおよび同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- データベースの認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、データベースデータソースを接続するときにコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

データベースデータソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、データベースデータソースの必要な詳細を指定する必要があります。](#)データベースをまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

データベース Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、データベースコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたデータベースコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [エンドポイント] - DNS ホスト名、IPv4 アドレス、または IPv6 アドレス。
 - b. [ポート] - ポート番号。
 - c. [データベース] - データベース名。
 - d. [テーブル名] - テーブル名。

- e. [認証のタイプ] で [既存] または [新規] を選択してデータベース認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-database-」が自動的に追加されます。
 - B. [ユーザー名] と [パスワード] - データベースアカウントから認証情報の値を入力します。
 - C. [認証を保存] を選択します。
- f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

 Note

プライベートサブネットを使用する必要があります。RDS インスタンスが VPC のパブリックサブネットにある場合は、パブリックサブネット内の NAT ゲートウェイへのアウトバウンドアクセス権を持つプライベートサブネットを作成します。VPC 設定で指定するサブネットは、米国西部 (オレゴン)、米国東部 (バージニア北部)、欧州 (アイルランド) のいずれかに存在する必要があります。

- g. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- h. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. ユースケースに基づいて [Aurora MySQL]、[MySQL]、[Aurora PostgreSQL]、[PostgreSQL] の中から選択してください。

- b. [SQL 識別子を二重引用符で囲む] - 選択して SQL 識別子を二重引用符で囲んでください。例えば、“columnName”。
 - c. ACL 列と変更検出列 - が変更検出 Amazon Kendra に使用する列 (最終更新日列など) とアクセスコントロールリストを設定します。
 - d. 同期実行スケジュールで、頻度 - がデータソースと同期 Amazon Kendra する頻度を選択します。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Amazon Kendra デフォルトフィールドマッピング - インデックスにマッピングする Amazon Kendra、生成されたデフォルトデータソースフィールドから選択します。document_id および document_body の [データベース列] 値を追加する必要があります。
 - b. [カスタムフィールドマッピング] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

データベース Amazon Kendra に接続するには

次の [DatabaseConfiguration](#) API を指定する必要があります。

- ColumnConfiguration - インデックスがデータベースからドキュメント情報を取得する必要がある場所に関する情報。詳細については、「[ColumnConfiguration](#)」を参照してください。DocumentDataColumnName (ドキュメント本文または本文)、DocumentIdColumnName、および ChangeDetectingColumn (最終更新列など) フィールドを指定する必要があります。DocumentIdColumnName フィールドにマッピングされた列は整数の列である必要があります。次の例は、データベースデータソースの単純な列構成を示しています。

```
"ColumnConfiguration": {  
  "ChangeDetectingColumns": [  
    "LastUpdateDate",
```

```

        "LastUpdateTime"
    ],
    "DocumentDataColumnName": "TextColumn",
    "DocumentIdColumnName": "IdentifierColumn",
    "DocumentTitleColumnName": "TitleColumn",
    "FieldMappings": [
        {
            "DataSourceFieldName": "AbstractColumn",
            "IndexFieldName": "Abstract"
        }
    ]
}

```

- **ConnectionConfiguration** - データベースに接続するために必要な設定情報。詳細については、「[ConnectionConfiguration](#)」を参照してください。
- **DatabaseEngineType** - データベースを実行するデータベースエンジンのタイプ。の **DatabaseHost** フィールドは、データベースの Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) インスタンスエンドポイント **ConnectionConfiguration** である必要があります。クラスターエンドポイントを使用しないでください。
- **シークレット Amazon リソースネーム (ARN)** — データベースアカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```

{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}

```

次の例は、シークレット ARN を含むデータベース設定を示します。

```

"DatabaseConfiguration": {
  "ConnectionConfiguration": {
    "DatabaseHost": "host.subdomain.domain.tld",
    "DatabaseName": "DocumentDatabase",
    "DatabasePort": 3306,
    "SecretArn": "arn:aws:secretmanager:region:account ID:secret/secret name",
    "TableName": "DocumentTable"
  }
}

```

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、データベースコネクタ および に必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for database data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - データソース設定の一部として VpcConfiguration を指定します。「[VPC を使用するための Amazon Kendra の設定](#)」を参照してください。

Note

プライベートサブネットのみを使用する必要があります。RDS インスタンスが VPC のパブリックサブネットにある場合は、パブリックサブネット内の NAT ゲートウェイへのアウトバウンドアクセス権を持つプライベートサブネットを作成します。VPC 設定で指定するサブネットは、米国西部 (オレゴン)、米国東部 (バージニア北部)、欧州 (アイルランド) のいずれかに存在する必要があります。

- フィールドマッピング - 選択すると、データベースデータソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合、はドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

Amazon RDS (Microsoft SQL Server)

Note

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされています。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

SQL Server は、Microsoft によって開発されたデータベース管理システムです。Amazon RDS for SQL Server を使用すると、クラウドでの SQL Server のデプロイを簡単にセットアップ、運用、スケーリングできます。Amazon RDS (Microsoft SQL Server) ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースのインデックスを作成できます。Amazon Kendra JDBC データソースコネクタは、Microsoft SQL Server 2019 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して Amazon RDS 、 (Microsoft SQL Server) データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースのインデックスを作成する前に、Amazon RDS (Microsoft SQL Server) と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) で、以下があることを確認します。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが Amazon RDS (Microsoft SQL Server) および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- (Amazon RDS Microsoft SQL Server) 認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合はシークレットの ARN を記録しました。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソース Amazon Kendra に接続するには、Amazon Kendra がデータにアクセスできるように Amazon RDS (Microsoft SQL Server) 認証情報の詳細を指定する必要があります。(Amazon RDS Microsoft SQL Server) をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (Microsoft SQL Server)

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Amazon RDS (Microsoft SQL Server) コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Amazon RDS (Microsoft SQL Server) コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
 - c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする - SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Amazon RDS (Microsoft SQL Server) 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

- A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。プレフィックスAmazonKendra-Amazon RDS (Microsoft SQL Server)- がシークレット名に自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
- B. [保存] を選択します。
- g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。

 Note

テーブル名に特殊文字 (英数字以外) が含まれている場合は、テーブル名の周囲に角括弧を使用する必要があります。たとえば、`[my-database-table]` ## * #####。

- [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。

- [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
- b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
 - タイムスタンプ列 - タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
 - e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (Microsoft SQL Server)

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを `sqlserver` として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。

Note

テーブル名に特殊文字 (英数字以外) が含まれている場合は、テーブル名の周囲に角括弧を使用する必要があります。たとえば、`[my-database-table] ## * #####`。

- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- `FORCED_FULL_CRAWL` は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — (Microsoft SQL Server) アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム Amazon RDS (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "user name": "database user name",  
  "password": "password"  
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Amazon RDS (Microsoft SQL Server) コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、[IAM Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\) データソースの ロール](#) を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング — 選択すると、Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\) テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。

- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Amazon RDS (MySQL)

Note

Amazon RDS (MySQL) コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合では、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Amazon RDS (Amazon Relational Database Service) は、AWS クラウドでのリレーショナルデータベースのセットアップ、運用、スケーリングを容易にするウェブサービスです。Amazon RDS ユーザーの場合は、を使用してAmazon RDS (MySQL)データソース Amazon Kendra のインデックスを作成できます。Amazon Kendra データソースコネクタは、Amazon RDS MySql 5.6、5.7、および 8.0 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用してAmazon RDS (MySQL)データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Amazon RDS (MySQL)トラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して Amazon RDS (MySQL) データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Amazon RDS (MySQL) および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Amazon RDS (MySQL) で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。この情報は Amazon RDS コンソールで確認できます。
- 各ドキュメントが Amazon RDS (MySQL) および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Amazon RDS (MySQL) の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、コンソールを使用して、Amazon RDS (MySQL) データソースを接続するときに新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Amazon RDS (MySQL) データソース Amazon Kendra に接続するには、[データ Amazon Kendra](#) にアクセスできるように、Amazon RDS (MySQL) 認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、Amazon RDS (MySQL) Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (MySQL)

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Amazon RDS (MySQL)コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたAmazon RDS (MySQL)コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. ホスト - データベースのホスト URL を入力します (例: `http://instance URL.region.rds.amazonaws.com`)。
 - c. ポート - データベースポートを入力します (例: 5432)。
 - d. インスタンス - データベースインスタンスを入力します (例: postgres)。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Amazon RDS (MySQL)新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

- A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Amazon RDS (MySQL)-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
- B. [保存] を選択します。
- g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。SQL クエリは 32KB 未満で、セミコロン (;) を含まない必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
 - b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。

- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
 - タイムスタンプ列 - タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。

8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (MySQL)

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを `mySql` として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - `FORCED_FULL_CRAWL` は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

- `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Amazon RDS (MySQL) アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "user name": "database user name",
  "password": "password"
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Amazon RDS (MySQL) コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Amazon RDS \(MySQL\) data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Amazon RDS (MySQL) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Amazon RDS \(MySQL\) テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Amazon RDS (Oracle)

Note

Amazon RDS (Oracle) コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Amazon RDS (Amazon Relational Database Service) は、AWS クラウドでのリレーショナルデータベースのセットアップ、運用、スケーリングを容易にするウェブサービスです。Amazon RDS (Oracle) ユーザーの場合は、を使用してAmazon RDS (Oracle)データソース Amazon Kendra のインデックスを作成できます。データソースコネクタは、Amazon RDS Oracle Database Amazon Kendra Amazon RDS (Oracle)21c、Oracle Database 19c、Oracle Database 12c をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用してAmazon RDS (Oracle)データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Amazon RDS (Oracle)トラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター

- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して Amazon RDS (Oracle) データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Amazon RDS (Oracle) および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Amazon RDS (Oracle) で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが Amazon RDS (Oracle) および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Amazon RDS (Oracle) の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、コンソールを使用して、Amazon RDS (Oracle) データソースを接続するときに新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Amazon RDS (Oracle) データソース Amazon Kendra に接続するには、がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Amazon RDS (Oracle) 認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、Amazon RDS (Oracle) Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (Oracle)

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Amazon RDS (Oracle) コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Amazon RDS (Oracle) コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
 - c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Amazon RDS (Oracle) 新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Amazon RDS (Oracle)-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
 - g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
 - b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
 - 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。

- タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (Oracle)

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを `oracle` として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - `FORCED_FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Amazon RDS (Oracle) アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "user name": "database user name",  
  "password": "password"  
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し>CreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Amazon RDS (Oracle)コネクタとに必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Amazon RDS \(Oracle\) data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Amazon RDS (Oracle) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Amazon RDS \(Oracle\) テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Amazon RDS (PostgreSQL)

Note

Amazon RDS (PostgreSQL) コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで、既存のお客様に対して完全にサポートされ続けます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検

討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Amazon RDS は、AWS クラウドでのリレーショナルデータベースのセットアップ、運用、スケーリングを容易にするウェブサービスです。Amazon RDS ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用してAmazon RDS (PostgreSQL)データソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra Amazon RDS (PostgreSQL) PostgreSQL 9.6 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用してAmazon RDS (PostgreSQL) データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Amazon RDS (PostgreSQL)トラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用してAmazon RDS (PostgreSQL)データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Amazon RDS (PostgreSQL)および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Amazon RDS (PostgreSQL) で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。この情報は Amazon RDS コンソールで確認できます。
- 各ドキュメントが Amazon RDS (PostgreSQL) および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Amazon RDS (PostgreSQL) の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Amazon RDS (PostgreSQL) データソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Amazon RDS (PostgreSQL) データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Amazon RDS (PostgreSQL) 認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、Amazon RDS (PostgreSQL) Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (PostgreSQL)

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Amazon RDS (PostgreSQL)コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたAmazon RDS (PostgreSQL)コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。

- d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. ホスト - データベースのホスト URL を入力します (例: `http://instance URL.region.rds.amazonaws.com`)。
 - c. ポート - データベースポートを入力します (例: 5432)。
 - d. インスタンス - データベースインスタンスを入力します (例: postgres)。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする - SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Amazon RDS (PostgreSQL) 新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Amazon RDS (PostgreSQL)-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
 - g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

i. [次へ] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。

- [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32KB 未満である必要があります。SQL クエリは 32KB 未満で、セミコロン (;) を含まない必要があります。Amazon Kendra は、クエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
- [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
- 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。

b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。

- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
- [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
- [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
- [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
- タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。

- [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Amazon RDS (PostgreSQL)

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを postgresql として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Amazon RDS (PostgreSQL) アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "user name": "database user name",
  "password": "password"
}
```


Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し>CreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Amazon RDS (PostgreSQL)コネクタとに必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Amazon RDS \(PostgreSQL\) data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Amazon RDS (PostgreSQL) データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Amazon RDS \(PostgreSQL\) テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Amazon S3

Amazon S3 は、バケット内のオブジェクトとしてデータを保存するオブジェクトストレージサービスです。を使用して Amazon Kendra 、ドキュメントの Amazon S3 バケットリポジトリのインデックスを作成できます。

Warning

Amazon Kendra は、S3 バケットを操作するアクセス許可をプリン Amazon Kendra シバに付与するバケットポリシーを使用しません。代わりに、IAM ロールを使用します。Amazon Kendra が信頼されたメンバーとしてバケットポリシーに含まれていないことを確認します。これにより、任意のプリンシパルに誤ってアクセス許可を付与する際のデータセキュリティの問題を回避できます。ただしバケットポリシーを追加すれば、異なるアカウント間で Amazon S3 バケットを使用できます。詳細については、「[Amazon S3 アカウントで使用するポリシー](#)」(S3 IAM ロールタブの [データソースの IAM ロール]) を参照してください。S3 データソースの IAM ロールの詳細については、[IAM 「ロール」](#) を参照してください。

Note

Amazon Kendra がアップグレードされた Amazon S3 コネクタをサポートするようになりました。

コンソールが自動的にアップグレードされました。コンソールで作成する新しいコネクタは、アップグレードされたアーキテクチャを使用します。API を使用する場合は、[TemplateConfiguration](#) オブジェクトの代わりに S3DataSourceConfiguration オブジェクトを使用してコネクタを設定する必要があります。

古いコンソールと API アーキテクチャを使用して設定されたコネクタは、引き続き設定どおりに機能します。ただし、編集または更新することはできません。コネクタ設定を編集または更新する場合は、新しいコネクタを作成する必要があります。

コネクタワークフローをアップグレードされたバージョンに移行することをお勧めします。古いアーキテクチャを使用して設定されたコネクタのサポートは、2024 年 6 月までに終了する予定です。

[Amazon Kendra コンソール](#)または [TemplateConfiguration](#) API を使用して Amazon S3 データソースに接続できます。

Note

Amazon S3 データソースの同期ステータスレポートを生成するには、[「データソースのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

Amazon Kendra S3 データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [Amazon S3 データソースの作成](#)
- [Amazon S3 ドキュメントメタデータ](#)
- [Amazon S3 データソースのアクセスコントロール](#)
- [データソース Amazon VPC での Amazon S3 の使用](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して S3 データソースのインデックスを作成する前に、S3 および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

S3 で、次のものが揃っていることを確認してください。

- Amazon S3 バケットの名前をコピーしました。

Note

バケットは Amazon Kendra インデックスと同じリージョンにあり、インデックスにはドキュメントを含むバケットへのアクセス許可が必要です。

- 各ドキュメントが S3 および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていない必要があります。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

AWS アカウントで、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

既存の IAM ロールがない場合は、S3 データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

S3 データソース Amazon Kendra に接続するには、[S3 データソース](#) Amazon Kendra にアクセスできるように、S3 データソースの必要な詳細を指定する必要があります。S3 をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、[「S3 データソース」](#)を参照してください[前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Amazon S3

1. [サインイン AWS Management Console](#) し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、S3 コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた S3 コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次のオプション情報を入力します。

- a. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- b. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - c. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. データソースの場所 — データが保存されている Amazon S3 バケットへのパスを指定します。S3 の参照 を選択して、S3 バケットを選択します。
 - b. 最大ファイルサイズ - この制限未満のファイルのみをクロールするには、MB 単位で制限を指定します。ファイルの最大サイズ Amazon Kendra は 50 MB です。
 - c. (オプション) メタデータファイルのプレフィックスフォルダの場所 — フィールド/属性およびその他のドキュメントメタデータが保存されているフォルダへのパスを指定します。[S3 をブラウズ] を選択してメタデータフォルダを探します。
 - d. (オプション) アクセスコントロールリスト設定ファイルの場所 — ユーザーの JSON 構造とドキュメントへのアクセスを含むファイルへのパスを指定します。[S3 をブラウズ] を選択して ACL ファイルを探します。
 - e. (オプション) [復号キーを選択] - 復号キーを使用する場合は選択します。既存の AWS KMS キーを使用することを選択できます。
 - f. (オプション) 追加設定 — 特定のファイルを含めるか除外するパターンを追加します。すべてのパスは、データソースの場所の S3 バケットに相対的です。
 - g. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- h. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - i. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次のオプション情報を入力します。
 - a. デフォルトのフィールドマッピング — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
 9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Amazon S3

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ S3 を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- BucketName - ドキュメントが含まれているバケットの名前。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モード オプショ

ンとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。

- **FORCED_FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
- **FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- **IAM role** — を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、S3 コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[S3 データソースの IAM ロール](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- **[仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration** で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- **包含フィルターと除外フィルター** — 特定のファイル名、ファイルタイプ、ファイルパスを含めるか除外するかを指定します。glob パターン (ワイルドカードパターンを特定のパターンに一致するパス名のリストに展開できるパターン) を使用します。例については、「[AWS CLI コマンドリファレンス](#)」の「[フィルタの除外と包含の使用](#)」を参照してください。
- **ドキュメントメタデータとアクセスコントロール設定** — ソース URI、ドキュメント作成者、カスタムドキュメント属性/フィールド、ユーザー、アクセスできるドキュメントなどの情報を含むドキュメントメタデータとアクセスコントロールファイルを追加します。各メタデータファイルには、1 つのドキュメントに関するメタデータが含まれています。
- **フィールドマッピング** - 選択すると、S3 データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメ

ント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[S3 template schema](#)」を参照してください。

詳細はこちら

S3 データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [VPC サポートで Amazon Kendra S3 Connector を使用して回答を正確に検索する](#)

Amazon S3 データソースの作成

次の例は、Amazon S3 データソースの作成を示しています。この例では、インデックスからデータを読み取るアクセス許可を持つインデックスと IAM ロールを既に作成していることを前提としています。IAM ロールの詳細については、[IAM 「アクセスロール」](#)を参照してください。インデックスの作成の詳細については、「[インデックスの作成](#)」を参照してください。

CLI

```
aws kendra create-data-source \  
  --index-id index ID \  
  --name example-data-source \  
  --type S3 \  
  --configuration '{"S3Configuration":{"BucketName":"bucket name"}}' \  
  --role-arn 'arn:aws:iam::account id:role:/role name
```

Python

次の Python コードのスニペットは、Amazon S3 データソースを作成します。完全な例については、[開始方法 \(AWS SDK for Python \(Boto3\)\)](#) を参照してください。

```
print("Create an Amazon S3 data source.")  
  
# Provide a name for the data source  
name = "getting-started-data-source"  
# Provide an optional description for the data source  
description = "Getting started data source."
```



```
# Provide the IAM role ARN required for data sources
role_arn = "arn:aws:iam::${accountID}:role/${roleName}"
# Provide the data source connection information
s3_bucket_name = "S3-bucket-name"
type = "S3"
# Configure the data source
configuration = {"S3DataSourceConfiguration":
    {
        "BucketName": s3_bucket_name
    }
}

data_source_response = kendra.create_data_source(
    Configuration = configuration,
    Name = name,
    Description = description,
    RoleArn = role_arn,
    Type = type,
    IndexId = index_id
)
```

データソースの作成には時間がかかることがあります。[DescribeDataSource](#) API を使用して進行状況をモニタリングできます。データソースのステータスが **ACTIVE** の場合、データソースを使用する準備ができています。

次の例は、データソースのステータスの取得を示しています。

CLI

```
aws kendra describe-data-source \
  --index-id index ID \
  --id data source ID
```

Python

次の Python コードのスニペットでは、S3 データソースに関する情報を取得します。完全な例については、[開始方法 \(AWS SDK for Python \(Boto3\)\)](#) を参照してください。

```
print("Wait for Amazon Kendra to create the data source.")

while True:
```

```
data_source_description = kendra.describe_data_source(  
    Id = "data-source-id",  
    IndexId = "index-id"  
)  
status = data_source_description["Status"]  
print(" Creating data source. Status: "+status)  
time.sleep(60)  
if status != "CREATING":  
    break
```

このデータソースにはスケジュールがないため、自動的に実行されません。データソースのインデックスを作成するには、[StartDataSourceSyncJob](#) を呼び出し、インデックスをデータソースと同期させます。

次の例は、データソースの同期を示しています。

CLI

```
aws kendra start-data-source-sync-job \  
--index-id index ID \  
--id data source ID
```

Python

次の Python コードのスニペットで Amazon S3 データソースを同期します。完全な例については、[開始方法 \(AWS SDK for Python \(Boto3\)\)](#) を参照してください。

```
print("Synchronize the data source.")  
  
sync_response = kendra.start_data_source_sync_job(  
    Id = "data-source-id",  
    IndexId = "index-id"  
)
```

Amazon S3 ドキュメントメタデータ

メタデータファイルを使用して、メタデータ、つまりドキュメントに関する追加情報を Amazon S3 バケット内のドキュメントに追加できます。各メタデータファイルは、インデックス作成されたドキュメントに関連付けられます。

メタデータファイルは、インデックス作成されたファイルと同じバケットに保存する必要があります。Amazon S3 データソースの作成時に、コンソールまたは DocumentsMetadataConfiguration パラメータの S3Prefix フィールドを使用して、メタデータファイルのバケット内の場所を指定できます。Amazon S3 プレフィックスを指定しない場合、メタデータファイルはインデックス作成されたドキュメントと同じ場所に保存する必要があります。

メタデータファイルの Amazon S3 プレフィックスを指定した場合、それらはインデックス付きドキュメントと並行するディレクトリ構造にあります。はメタデータの指定されたディレクトリでのみ Amazon Kendra 参照します。メタデータが読み込まれない場合は、ディレクトリの場所がメタデータの場所と一致していることをチェックします。

次の例は、インデックス作成されたドキュメントの場所がメタデータファイルの場所にどのようにマッピングされるかを示しています。ドキュメントの Amazon S3 キーはメタデータの Amazon S3 プレフィックスに追加され、メタデータファイルの Amazon S3 パスを形成する .metadata.json ために サフィックスが付加されることに注意してください。メタデータの Amazon S3 プレフィックスと .metadata.json サフィックスを含む結合 Amazon S3 キーは、合計 1024 文字以下にする必要があります。Amazon S3 キーをプレフィックスとサフィックスと組み合わせるときは、追加文字を考慮してキーを 1000 文字未満にしておくことをお勧めします。

```
Bucket name:
    s3://bucketName
Document path:
    documents
Metadata path:
    none
File mapping
    s3://bucketName/documents/file.txt ->
    s3://bucketName/documents/file.txt.metadata.json
```

```
Bucket name:
    s3://bucketName
Document path:
    documents/legal
Metadata path:
    metadata
File mapping
    s3://bucketName/documents/legal/file.txt ->
    s3://bucketName/metadata/documents/legal/file.txt.metadata.json
```

ドキュメントのメタデータは JSON ファイルで定義されます。ファイルは、BOM マーカーの無い UTF-8 テキストファイルである必要があります。JSON ファイルのファイル名は <document>.<extension>.metadata.json である必要があります。この例では、「document」はメタデータが適用されるドキュメントの名前、「extension」はドキュメントのファイル拡張子です。ドキュメント ID は <document>.<extension>.metadata.json 内で一意である必要があります。

JSON ファイルの内容はこのテンプレートに従います。すべての属性やフィールドはオプションなので、すべての属性を含める必要はありません。含める属性ごとに値を指定する必要があります。値を空にすることはできません。を指定しない場合 _source_uri、検索結果 Amazon Kendra から返されるリンクは、ドキュメントを含む Amazon S3 バケットを指します。DocumentId は フィールドにマッピング s3_document_id され、は S3 のドキュメントへの絶対パスです。

```
{
  "DocumentId": "S3 document ID, the S3 path to doc",
  "Attributes": {
    "_category": "document category",
    "_created_at": "ISO 8601 encoded string",
    "_last_updated_at": "ISO 8601 encoded string",
    "_source_uri": "document URI",
    "_version": "file version",
    "_view_count": number of times document has been viewed,
    "custom attribute key": "custom attribute value",
    additional custom attributes
  },
  "AccessControlList": [
    {
      "Name": "user name",
      "Type": "GROUP | USER",
      "Access": "ALLOW | DENY"
    }
  ],
  "Title": "document title",
  "ContentType": "For example HTML | PDF. For supported content types, see Types of documents."
}
```

_created_at および _last_updated_at メタデータフィールドは ISO 8601 でエンコードされた日付です。例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。

クエリをフィルタリングしたり、クエリ応答をグループ化したりするために使用するドキュメントに関する `Attributes` フィールドに追加情報を追加できます。詳細については、「[カスタムドキュメントフィールドの作成](#)」を参照してください。

`AccessControlList` フィールドを使用して、クエリからのレスポンスをフィルタリングできます。これにより、特定のユーザーおよびグループのみがドキュメントにアクセスできます。詳細については、「[ユーザーコンテキストでのフィルタリング](#)」を参照してください。

Amazon S3 データソースのアクセスコントロール

設定ファイルを使用して、Amazon S3 データソース内のドキュメントへのアクセスを制御できます。ファイルはコンソールで指定するか、[CreateDataSource](#) または [UpdateDataSource](#) API を呼び出すときに `AccessControlListConfiguration` パラメータとして指定します。

設定ファイルには、S3 プレフィックスを識別し、プレフィックスのアクセス設定を一覧表示する JSON 構造が含まれています。プレフィックスには、パス、または個別のファイルを使用できます。プレフィックスがパスの場合、アクセス設定はそのパス内のすべてのファイルに適用されます。JSON 設定ファイルには S3 プレフィックスの最大数とデフォルトの最大ファイルサイズがあります。詳細については、[のクォータ Amazon Kendra](#)を参照してください。

アクセス設定でユーザーとグループの両方を指定できます。インデックスをクエリするときは、ユーザー情報とグループ情報を指定します。詳細については、「[ユーザー属性でフィルタリングする](#)」を参照してください。

設定ファイルの JSON 構造は次のような形式になります。

```
[
  {
    "keyPrefix": "s3://BUCKETNAME/prefix1/",
    "aclEntries": [
      {
        "Name": "user1",
        "Type": "USER",
        "Access": "ALLOW"
      },
      {
        "Name": "group1",
        "Type": "GROUP",
        "Access": "DENY"
      }
    ]
  }
]
```

```
    },
    {
      "keyPrefix": "s3://prefix2",
      "aclEntries": [
        {
          "Name": "user2",
          "Type": "USER",
          "Access": "ALLOW"
        },
        {
          "Name": "user1",
          "Type": "USER",
          "Access": "DENY"
        },
        {
          "Name": "group1",
          "Type": "GROUP",
          "Access": "DENY"
        }
      ]
    }
  ]
}
```

データソース Amazon VPC での Amazon S3 の使用

このトピックでは、Amazon VPC を介して Amazon S3 コネクタを使用して、Amazon S3 バケットに接続する方法を示すステップバイステップの例を示します。この例では、既存の S3 バケットから開始することを前提としています。この例をテストするには、S3 バケットにドキュメントをいくつかアップロードすることをお勧めします。

を介して Amazon S3 バケット Amazon Kendra に接続できます Amazon VPC。そのためには、Amazon S3 データソースコネクタを作成するときに Amazon VPC サブネットと Amazon VPC セキュリティグループを指定する必要があります。

Important

Amazon S3 コネクタが Amazon Kendra Amazon S3 バケットにアクセスできるように、仮想プライベートクラウド (VPC) に Amazon S3 エンドポイントを割り当てていることを確認します。

が介して Amazon S3 バケットからドキュメントを同期 Amazon Kendra するには Amazon VPC、次の手順を実行する必要があります。

- の Amazon S3 エンドポイントを設定します Amazon VPC。Amazon S3 エンドポイントの設定方法の詳細については、「AWS PrivateLink ガイド」の「[のゲートウェイエンドポイント Amazon S3](#)」を参照してください。
- (オプション) Amazon S3 バケットポリシーをチェックして、割り当てた Virtual Private Cloud (VPC) から Amazon S3 バケットにアクセスできることを確認しました Amazon Kendra。詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」の「[バケットポリシーを使用した VPC エンドポイントからのアクセスの制御](#)」を参照してください。Amazon S3

ステップ

- [ステップ 1: を設定する Amazon VPC](#)
- (オプション) [ステップ 2: Amazon S3 バケットポリシーを設定する](#)
- [ステップ 3: テスト Amazon S3 データソースコネクタを作成する](#)

ステップ 1: を設定する Amazon VPC

Amazon S3 ゲートウェイエンドポイントを持つプライベートサブネットと、後で Amazon Kendra 使用するために のセキュリティグループを含む VPC ネットワークを作成します。

プライベートサブネット、S3 エンドポイント、およびセキュリティグループを使用して VPC を設定するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 で Amazon VPC コンソールを開きます<https://console.aws.amazon.com/vpc/>。
2. プライベートサブネットと 用の S3 エンドポイントを使用して VPC を作成し Amazon Kendra 、以下を使用します。

ナビゲーションペインから VPCs、VPC の作成を選択します。

- a. [Resources to create] (作成するリソース) で、[VPC and more] (VPC など) を選択します。
- b. Name タグで、Auto-generate を有効にし、 と入力します **kendra-s3-example**。
- c. IPv4/IPv6 CIDR ブロックの場合は、デフォルト値のままにします。
- d. アベイラビリティゾーンの数 (AZs) で、1 を選択します。

- e. AZs をカスタマイズを選択し、最初のアベイラビリティゾーンリストからアベイラビリティゾーンを選択します。

Amazon Kendra は、特定のアベイラビリティゾーンのセットのみをサポートします。

- f. パブリックサブネットの数 で、0 を選択します。
- g. プライベートサブネットの数 で、1 を選択します。
- h. [NAT ゲートウェイ] には、[なし] を選択します。
- i. VPC エンドポイントの場合は、Amazon S3 ゲートウェイを選択します。
- j. 残りの値はデフォルト設定のままにします。
- k. [VPC の作成] を選択します。

VPC の作成ワークフローが完了するまで待ちます。次に、VPC の表示 を選択して、先ほど作成した VPC を確認します。

これで、パブリックインターネットにアクセスできないプライベートサブネットを持つ VPC ネットワークが作成されました。

3. Amazon S3 エンドポイントの VPC エンドポイント ID をコピーします。

- a. ナビゲーションペインで、[Endpoints] (エンドポイント) を選択します。
- b. エンドポイントリストで、VPC と一緒にkendra-s3-example-vpce-s3作成した Amazon S3 エンドポイントを見つけます。
- c. VPC エンドポイント ID を書き留めます。

これで、サブネットを介して Amazon S3 バケットにアクセスするための Amazon S3 ゲートウェイエンドポイントが作成されました。

4. Amazon Kendra が使用するセキュリティグループを作成します。

- a. ナビゲーションペインで、セキュリティグループを選択し、セキュリティグループの作成を選択します。
- b. [Security group name] (セキュリティグループ名) に **s3-data-source-security-group** と入力します。
- c. リストから VPC を選択します Amazon VPC。
- d. インバウンドルールとアウトバウンドルールはデフォルトのままにします。
- e. [セキュリティグループの作成] を選択してください。

これで VPC セキュリティグループが作成されました。

コネクタ設定プロセス中に作成したサブネットとセキュリティグループを Amazon Kendra Amazon S3 データソースコネクタに割り当てます。

(オプション) ステップ 2: Amazon S3 バケットポリシーを設定する

このオプションのステップでは、Amazon S3 バケットポリシーを設定して、Amazon S3 バケットに割り当てた VPC からのみアクセスできるようにする方法について説明します Amazon Kendra。

Amazon Kendra は IAM ロールを使用して Amazon S3 バケットにアクセスするため、Amazon S3 バケットポリシーを設定する必要はありません。ただし、パブリックインターネットからのアクセスを制限する既存のポリシーを持つ Amazon S3 バケットを使用して Amazon S3 コネクタを設定する場合は、バケットポリシーを作成すると便利です。

Amazon S3 バケットポリシーを設定するには

1. <https://console.aws.amazon.com/s3/> で Amazon S3 コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインから、バケットを選択します。
3. 同期する Amazon S3 バケットの名前を選択します Amazon Kendra。
4. アクセス許可タブを選択し、バケットポリシーまでスクロールダウンして、編集をクリックします。
5. バケットポリシーを追加または変更して、作成した VPC エンドポイントからのアクセスのみを許可します。

以下は、バケットポリシーの例です。*bucket-name* と *vpce-id* を、前にメモした Amazon S3 バケット名と Amazon S3 エンドポイント ID *vpce-id* に置き換えます。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Deny",
      "Principal": "*",
      "Action": "s3:*",
```

```
"Resource": "arn:aws:s3:::bucket-name/*",
"Condition": {
  "StringNotEquals": {
    "aws:SourceVpce": "vpce-id"
  }
}
}
```

6. [変更を保存] を選択します。

S3 バケットは、作成した特定の VPC からのみアクセスできるようになりました。

ステップ 3: テスト Amazon S3 データソースコネクタを作成する

Amazon VPC 設定をテストするには、コネクタを作成します Amazon S3。次に、「」で説明されている手順に従って、作成した VPC で設定します [Amazon S3](#)。

Amazon VPC 設定値については、この例で作成した値を選択します。

- Amazon VPC(VPC) – `kendra-s3-example-vpc`
- サブネット – `kendra-s3-example-subnet-private1-[availability zone]`
- セキュリティグループ – `s3-data-source-security-group`

コネクタの作成が完了するまで待ちます。Amazon S3 コネクタを作成したら、今すぐ同期を選択して同期を開始します。

Amazon S3 バケット内のドキュメントの数によっては、同期が完了するまでに数分から数時間かかる場合があります。この例をテストするには、S3 バケットにドキュメントをいくつかアップロードすることをお勧めします。設定が正しい場合、最終的に同期ステータスは完了と表示されます。

エラーが発生した場合は、[Amazon VPC 「接続のトラブルシューティング」](#) を参照してください。

Amazon Kendra ウェブクローラー

Web Amazon Kendra Crawler を使用して、ウェブページをクロールおよびインデックス作成できます。

クロールできるのは、公開ウェブサイト、または、安全な通信プロトコルである Hypertext Transfer Protocol Secure (HTTPS) を使用する社内ウェブサイトのみです。ウェブサイトをクロールするとき

にエラーが発生した場合は、ウェブサイトのクローリングがブロックされている可能性があります。内部ウェブサイトをクローリングするには、ウェブプロキシを設定できます。ウェブプロキシは公開されている必要があります。認証を使用してウェブサイトにアクセスし、クローリングすることもできます。

インデックス作成するウェブサイトを選択するときは、[Amazon 利用規定ポリシー](#)およびその他の Amazon 規約のすべてに準拠している必要があります。Web Amazon Kendra Crawler は、独自のウェブページ、またはインデックス作成の権限を持つウェブページのインデックス作成にのみ使用する必要があることに注意してください。Amazon Kendra Web Crawler によるウェブサイトのインデックス作成を停止する方法については、「」を参照してください[Amazon Kendra Web Crawler 用の robots.txt ファイルの設定](#)。

 Note

Web Amazon Kendra Crawler を使用して、所有していないウェブサイトやウェブページを積極的にクローリングすることは、許容できる用途とは見なされません。

Amazon Kendra には 2 つのバージョンの web crawler コネクタがあります。各バージョンでサポートされる機能は次のとおりです。

Amazon Kendra Web Crawler コネクタ v1.0 / [WebCrawlerConfiguration](#) API

- ウェブプロキシ
- 包含/除外フィルター

Amazon Kendra ウェブクローラーコネクタ v2.0 / [TemplateConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- ウェブプロキシ
- ウェブサイトの基本認証、NTLM/Kerberos 認証、SAML 認証、フォーム認証
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

⚠ Important

Web Crawler v2.0 コネクタの作成はではサポートされていません AWS CloudFormation。
AWS CloudFormation サポートが必要な場合は、Web Crawler v1.0 コネクタを使用します。

Amazon Kendra ウェブクローラーデータソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [Amazon Kendra ウェブクローラーコネクタ v1.0](#)
- [Amazon Kendra ウェブクローラーコネクタ v2.0](#)
- [Amazon Kendra Web Crawler 用の robots.txt ファイルの設定](#)

Amazon Kendra ウェブクローラーコネクタ v1.0

Web Amazon Kendra Crawler を使用して、ウェブページをクロールおよびインデックス作成できます。

クロールできるのは、公開ウェブサイトと、安全な通信プロトコルである Hypertext Transfer Protocol Secure (HTTPS) を使用するウェブサイトのみです。ウェブサイトをクロールするときにエラーが発生した場合は、ウェブサイトのクロールがブロックされている可能性があります。内部ウェブサイトをクロールするには、ウェブプロキシを設定できます。ウェブプロキシは公開されている必要があります。

インデックス作成するウェブサイトを選択するときは、[Amazon 利用規定ポリシー](#)およびその他の Amazon 規約のすべてに準拠している必要があります。Web Amazon Kendra Crawler は、独自のウェブページ、またはインデックス作成の権限を持つウェブページのインデックス作成にのみ使用する必要があることに注意してください。Amazon Kendra Web Crawler によるウェブサイトのインデックス作成を停止する方法については、「」を参照してください[Amazon Kendra Web Crawler 用の robots.txt ファイルの設定](#)。

i Note

Web Amazon Kendra Crawler を使用して、所有していないウェブサイトやウェブページを積極的にクロールすることは、許容できる用途とは見なされません。

Amazon Kendra ウェブクローラーデータソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

- ウェブプロキシ
- 包含/除外フィルター

前提条件

Amazon Kendra を使用してウェブサイトのインデックスを作成する前に、ウェブサイトと AWS アカウントの詳細を確認してください。

ウェブサイトについて、以下を確認してください。

- インデックス作成するウェブサイトのシードまたはサイトマップ URL をコピーしました。
- 基本認証を必要とするウェブサイトの場合: ユーザー名とパスワードを書き留め、ウェブサイトのホスト名とポート番号をコピーしました。
- オプション:ウェブプロキシを使用して、クローलする内部ウェブサイトに接続する場合に、ウェブサイトのホスト名とポート番号をコピーしました。ウェブプロキシは公開されている必要があります。Amazon Kendra では、基本認証によってバックアップされたウェブプロキシサーバーへの接続がサポートされています。認証なしで接続することもできます。
- インデックスを作成する各ドキュメントが一意であり、同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

AWS アカウントで、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- 認証を必要とするウェブサイトの場合、または認証でウェブプロキシを使用する場合、は認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合はシークレットの ARN を記録しました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、web crawlerデータソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

web crawler データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、web crawlerデータソースの必要な詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、web crawler Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには web crawler

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。

2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、ウェブクローラーコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたウェブクローラーコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] では、ユースケースに応じて [ソース URL] と [ソースサイトマップ] を選択し、それぞれの値を入力します。

ソース URL は 10 個まで、サイトマップは 3 個まで追加できます。

 Note

サイトマップをクローリングする場合は、ベース URL またはルート URL がサイトマップページに記載されている URL と同じであることを確認してください。例えば、サイトマップ URL が `https://example.com/sitemap-page.html` の場

合、このサイトマップページに記載されている URL にもベース URL "https://example.com/" を使用する必要があります。

- b. (オプション) [ウェブプロキシ] - 次の情報を入力します。
 - i. [ホスト名] - ウェブプロキシを必要とするホスト名。
 - ii. [ポート番号] - ホスト URL トランスポートプロトコルが使用するポート。ポート番号は 0 ~ 65535 の数字である必要があります。
 - iii. ウェブプロキシ認証情報の場合 - ウェブプロキシ接続で認証が必要な場合は、既存のシークレットを選択するか、認証情報を保存する新しいシークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - iv. [AWS Secrets Manager Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-WebCrawler-」が自動的に追加されます。
 - B. [ユーザー名] と [パスワード] - ウェブサイトの基本認証情報を入力します。
 - C. [Save] を選択します。
- c. (オプション) [認証済みのホスト] - 選択すると、認証付きのホストをさらに追加できます。
- d. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- e. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [クロール範囲] - クロールするウェブページの種類を選択します。
 - b. クロール深度 - クロール Amazon Kendra するシード URL からレベルの数を選択します。

- c. [クロールの詳細設定] および [追加設定] - 次の情報を入力します。
 - i. [最大ファイルサイズ] - クロールするウェブページまたは添付ファイルの最大サイズ。最小 0.000001 MB (1 バイト)。最大 50 MB。
 - ii. 1 ページあたりの最大リンク数 - 1 ページあたりにクロールされるリンクの最大数。リンクは表示順にクロールされます。1 ページあたり最小 1 リンク。1 ページあたり最大 1000 リンク。
 - iii. 最大スロットリング - ホスト名ごとにクロールされる URL の、1 分あたりの最大数。ホスト名ごとに 1 分あたり最小 1 URL。ホスト名ごとに 1 分あたり最大 300 URL。
 - iv. [正規表現パターン] - 特定の URL を含めるまたは除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。
 - d. 同期実行スケジュールで、頻度 - ガデータソースと同期 Amazon Kendra する頻度を選択します。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
8. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには web crawler

[WebCrawlerConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- URL - [SeedUrlConfiguration](#) と [SiteMapsConfiguration](#) を使用して、ウェブサイトのシード URL または開始ポイント URL、または、クロールするウェブサイトのサイトマップ URL を指定します。

Note

サイトマップをクロールする場合は、ベース URL またはルート URL がサイトマップページに記載されている URL と同じであることを確認してください。例えば、サイトマップ URL が `https://example.com/sitemap-page.html` の場合、このサイトマップページに記載されている URL にもベース URL `"https://example.com/"` を使用する必要があります。

- シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) - ウェブサイトが基本認証を使用する場合は、ホスト名、ポート番号、および、ユーザー名とパスワードの基本認証情報を保存するシークレットを指定します。 [AuthenticationConfiguration](#) API を使用してシークレット ARN を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}
```

AWS Secrets Manager シークレットを使用してウェブプロキシ認証情報を指定することもできます。 [ProxyConfiguration](#) API を使用して、ウェブサイトのホスト名とポート番号、およびウェブプロキシ認証情報を保存するシークレットを指定します。

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、ウェブクローラーコネクタ および に必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「 [IAM roles for web crawler data sources](#) 」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- クロールモード - ウェブサイトのホスト名のみをクロールするか、サブドメインを含むホスト名をクロールするか、ウェブページのリンク先となる他のドメインもクロールするかを選択します。
- 深さ、またはシードレベルからクロールするレベルの数。例えば、シード URL ページは深度 1 で、このページ上でクロールされるハイパーリンクはすべて深度 2 です。
- クロールする単一ウェブページの URL の最大数。
- クロールするウェブページの最大サイズ (MB 単位)。
- 1 分あたりウェブサイトホストごとにクロールされる URL の最大数。
- 内部ウェブサイトに接続してクロールするウェブプロキシのホストとポート番号。例えば、 `https://a.example.com/page1.html` のホスト名は「 `a.example.com` 」で、ポート番号は HTTPS の標準ポートである 443 です。ウェブサイトホストへの接続にウェブプロキシ認証情報が必要な場合は、認証情報を保存する AWS Secrets Manager を作成できます。
- ユーザー認証を必要とするウェブサイトにアクセスしてクロールするための認証情報。
- カスタムドキュメントエンリッチメントツールを使用して、HTML メタタグをフィールドとして抽出できます。詳細については、 [取り込みプロセス中のドキュメントのメタデータのカスタ](#)

[マイズ](#)を参照してください。HTML メタタグの抽出例については、「[CDE サンプル](#)」を参照してください。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定の URL を含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

詳細

データソース Amazon Kendra との統合の詳細についてはweb crawler、以下を参照してください。

- [Amazon Kendraの Web Crawler を使用してナレッジ検出を再検討する](#)

Amazon Kendra ウェブクロールコネクタ v2.0

Web Amazon Kendra Crawler を使用して、ウェブページをクロールおよびインデックス作成できます。

クロールできるのは、公開ウェブサイト、または、安全な通信プロトコルである Hypertext Transfer Protocol Secure (HTTPS) を使用する社内ウェブサイトのみです。ウェブサイトをクロールするときにエラーが発生した場合は、ウェブサイトのクロールがブロックされている可能性があります。内部ウェブサイトをクロールするには、ウェブプロキシを設定できます。ウェブプロキシは公開されている必要があります。認証を使用してウェブサイトにアクセスし、クロールすることもできます。

Amazon Kendra Web Crawler v2.0 は、Selenium ウェブクロールパッケージと Chromium ドライバーを使用します。は、継続的インテグレーション (CI) を使用して Selenium と Chromium ドライバーのバージョン Amazon Kendra を自動的に更新します。

インデックス作成するウェブサイトを選択するときは、[Amazon 利用規定ポリシー](#)およびその他の Amazon 規約のすべてに準拠している必要があります。Web Amazon Kendra Crawler は、独自のウェブページ、またはインデックス作成の権限を持つウェブページのインデックス作成にのみ使用

する必要があります。Amazon Kendra Web Crawler によるウェブサイトのインデックス作成を停止する方法については、「」を参照してください[Amazon Kendra Web Crawler 用の robots.txt ファイルの設定](#)。Web Amazon Kendra Crawler を使用して、所有していないウェブサイトやウェブページを積極的にクロールすることは、許容できる用途とは見なされません。

Amazon Kendra ウェブクローラーデータソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

Note

ウェブクローラーコネクタ v2.0 は、AWS KMS 暗号化された Amazon S3 バケットからのウェブサイトリストのクロールをサポートしていません。Amazon S3 マネージドキーによるサーバー側の暗号化のみをサポートします。

Important

Web Crawler v2.0 コネクタの作成はではサポートされていません AWS CloudFormation。AWS CloudFormation サポートが必要な場合は、Web Crawler v1.0 コネクタを使用します。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- ウェブプロキシ
- ウェブサイトの基本認証、NTLM/Kerberos 認証、SAML 認証、フォーム認証
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用してウェブサイトのインデックスを作成する前に、ウェブサイトと AWS アカウントの詳細を確認してください。

ウェブサイトについて、以下を確認してください。

- インデックス作成するウェブサイトのシードまたはサイトマップ URL をコピーしました。URL をテキストファイルに保存して、それを Amazon S3 バケットにアップロードできます。テキストファイル内の各 URL は、別々の行にフォーマットする必要があります。サイトマップを Amazon S3 バケットに保存する場合は、サイトマップ XML をコピーして XML ファイルに保存していることを確認してください。複数のサイトマップ XML ファイルを 1 つの ZIP ファイルにまとめることもできます。

Note

(オンプレミス/サーバー) Amazon Kendra に含まれるエンドポイント情報が、データソース設定の詳細で指定されたエンドポイント情報 AWS Secrets Manager と同じかどうかを確認します。[混乱する代理問題](#)は、ユーザーがアクションを実行するアクセス許可がないにもかかわらず、Amazon Kendra をプロキシとして使用して設定された秘密にアクセスし、アクションを実行するセキュリティの問題です。後でエンドポイント情報を変更する場合は、新しいシークレットを作成してこの情報を同期する必要があります。

- 基本認証、NTLM 認証、または Kerberos 認証を必要とするウェブサイトの場合:
- ユーザー名とパスワードを含むウェブサイトの認証情報を書き留めました。

Note

Amazon Kendra Web Crawler v2.0 は、パスワードハッシュを含む NTLM 認証プロトコルと、パスワード暗号化を含む Kerberos 認証プロトコルをサポートしています。

- SAML 認証またはログインフォーム認証を必要とするウェブサイトの場合:
- ユーザー名とパスワードを含むウェブサイトの認証情報を書き留めました。
- ユーザー名フィールド (SAML を使用する場合は、加えてユーザー名ボタン)、パスワードフィールド、ボタンの XPath (XML Path Language) をコピーし、ログインページ URL をコピーしました。要素の XPath は、ウェブブラウザのデベロッパーツールを使用して確認できます。XPath は通常、次の形式に従います。//tagname[@Attribute='Value']。

 Note

Amazon Kendra Web Crawler v2.0 では、ヘッドレス Chrome ブラウザとフォームからの情報を使用して、OAuth 2.0 で保護された URL によるアクセスの認証と認可を行います。

- オプション: ウェブプロキシを使用して、クロールする内部ウェブサイトに接続する場合に、ウェブプロキシサーバーのホスト名とポート番号をコピーしました。ウェブプロキシは公開されている必要があります。は、基本認証でバックアップされたウェブプロキシサーバーへの接続 Amazon Kendra をサポートしているか、認証なしで接続できます。
- オプション: VPC を使用して、クロールする内部ウェブサイトに接続する場合は、仮想プライベートクラウド (VPC) のサブネット ID をコピー済み。詳細については、[「 の設定 Amazon VPC 」](#)を参照してください。
- インデックスを作成する各ドキュメントが一意であり、同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

AWS アカウントで、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの Amazon リソースネームを記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- 認証を必要とするウェブサイトの場合、または認証でウェブプロキシを使用する場合、は認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合はシークレットの ARN を記録しました。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、web crawlerデータソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

web crawler データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、web crawlerデータソースの必要な詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、web crawler Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには web crawler

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、ウェブクローラーコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたウェブクローラーコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ソース] - [ソース URL]、[ソースサイトマップ]、[ソース URL ファイル]、[ソースサイトマップファイル] のいずれかを選択します。最大 100 個のシード URLs のリストを含むテキストファイルを使用する場合は、ファイルが保存されている Amazon S3 バケットへのパスを指定します。サイトマップ XML ファイルを使用する場合は、ファイルが保存されている Amazon S3 バケットへのパスを指定します。複数のサイトマップ XML ファイルを 1 つの ZIP ファイルにまとめることもできます。それ以外の場合は、最大 10 個のシードまたは開始ポイント URL と、最大 3 つのサイトマップ URL を手動で入力できます。

 Note

サイトマップをクロールする場合は、ベース URL またはルート URL がサイトマップページに記載されている URL と同じであることを確認してください。例えば、サイトマップ URL が `https://example.com/sitemap-page.html` の場合、このサイトマップページに記載されている URL にもベース URL `"https://example.com/"` を使用する必要があります。

ウェブサイトが、そのウェブサイトアクセスするために認証を必要とする場合は、基本認証、NTLM/Kerberos 認証、SAML 認証、またはフォーム認証のいずれかを選択できます。それ以外の場合は、認証なしのオプションを選択します。

Note

後でデータソースを編集して、認証を含むシード URL をサイトマップに変更する場合は、新しいデータソースを作成する必要があります。Amazon Kendra は認証用の Secrets Manager のシークレット内のシード URL エンドポイント情報を使用してデータソースを設定するため、サイトマップに変更してもデータソースを再設定することはできません。

- AWS Secrets Manager シークレット — ウェブサイトにアクセスするために同じ認証が必要な場合は、既存のシークレットを選択するか、新しいシークレットを作成してウェブサイトの認証情報を保存します。新しいシークレットを作成する場合は、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

[基本] または [NTLM/Kerberos] を選択した場合は、シークレットの名前と、ユーザー名、パスワードを入力します。NTLM 認証プロトコルにはパスワードハッシュが含まれ、Kerberos 認証プロトコルにはパスワード暗号化が含まれます。

[SAML] または [フォーム] を選択した場合は、シークレットの名前と、ユーザー名、パスワードを入力します。ユーザー名フィールドには XPath を使用します (SAML を使用する場合はユーザー名ボタンに XPath を使用します)。パスワードフィールドとボタン、およびログインページの URL には XPath を使用します。要素の XPath (XML パス言語) は、ウェブブラウザのデベロッパーツールを使用して確認できます。XPath は通常、次の形式に従います。//tagname[@Attribute='Value']。

- (オプション) [ウェブプロキシ - 内部ウェブサイトへの接続に使用するプロキシサーバーのホスト名とポート番号を入力します。例えば、https://a.example.com/page1.html のホスト名は「a.example.com」で、ポート番号は HTTPS の標準ポートである 443 です。ウェブサイトホストに接続するためにウェブプロキシ認証情報が必要な場合は、認証情報 AWS Secrets Manager を保存する を作成できます。
- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- e. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] - ドメイン、ファイルサイズ、リンクなど、ウェブページのクロールに制限を設定し、正規表現パターンを使用して URL をフィルタリングします。
 - i. (オプション) [クロールドメイン範囲] - ウェブサイトのドメインのみをクロールするか、サブドメインのあるドメインをクロールするか、ウェブページのリンク先となる他のドメインもクロールするかを選択します。デフォルトでは、Amazon Kendra のみがクロールするウェブサイトのドメインをクロールします。
 - ii. (オプション) [追加設定] - 以下の設定を設定します。
 - [クロールの深さ] - 深さ、またはシードレベルからクロールするレベルの数。例えば、シード URL ページは深度 1 で、このページ上でクロールされるハイパーリンクはすべて深度 2 です。
 - [最大ファイルサイズ] - クロールするウェブページまたは添付ファイルの最大サイズ (MB 単位)。
 - 1 ページあたりの最大リンク数 - クロールする単一ウェブページの URL の最大数。
 - [クロール速度の最大スロットリング] - ウェブサイトホストごとにクロールされる URL の 1 分あたりの最大数。
 - [ファイル] - ウェブページのリンク先のファイルをクロールすることを選択します。
 - [URL のクロールおよびインデックス作成] - 正規表現パターンを追加して、特定の URL のクロールと、その URL ウェブページのハイパーリンクのインデックス作成を含めるか除外します。
 - b. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプション

として完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

c. [同期実行スケジュール] - [頻度] で、Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。

d. [Next (次へ)] を選択します。

8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

a. インデックスにマッピングするウェブページとファイルの Amazon Kendra 生成されたデフォルトフィールドから選択します。

b. [Next (次へ)] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには web crawler

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマWEBCRAWLERV2を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- URL - ウェブサイトのシードまたは開始ポイント URL、またはクロールするウェブサイトのサイトマップ URL を指定します。シード URLs のリストを保存する Amazon S3 バケットへのパスを指定できます。シード URL のテキストファイル内の各 URL は、別々の行にフォーマットする必要があります。サイトマップ XML ファイルを保存する Amazon S3 バケットへのパスを指定することもできます。複数のサイトマップファイルを 1 つの ZIP ファイルにまとめ、その ZIP ファイルを Amazon S3 バケットに保存できます。

Note

サイトマップをクローलする場合は、ベース URL またはルート URL がサイトマップページに記載されている URL と同じであることを確認してください。例えば、サイトマップ URL が `https://example.com/sitemap-page.html` の場合、このサイトマップページに記載されている URL にもベース URL `"https://example.com/"` を使用する必要があります。

- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクローラされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- `FORCED_FULL_CRAWL` データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- 認証 — ウェブサイトで同じ認証を必要とする場合は、`BasicAuth`、`NTLM_Kerberos`、`SAML`、または `Form` 認証のいずれかを指定します。ウェブサイトが認証を必要としない場合は、`NoAuthentication` を指定してください。
- シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) - ウェブサイトで基本認証、NTLM、または Kerberos 認証が必要な場合は、ユーザー名とパスワードの認証情報を保存するシークレットを指定します。AWS Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "seedUrlsHash": "Hash representation of all seed URLs",
  "userName": "user name",
  "password": "password"
}
```

ウェブサイトでの SAML 認証が必要な場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "seedUrlsHash": "Hash representation of all seed URLs",
  "userName": "user name",
  "password": "password",
  "userNameFieldXpath": "XPath for user name field",
  "userNameButtonXpath": "XPath for user name button",
  "passwordFieldXpath": "XPath for password field",
  "passwordButtonXpath": "XPath for password button",
  "loginPageUrl": "Full URL for website login page"
}
```

ウェブサイトではフォーム認証が必要な場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "seedUrlsHash": "Hash representation of all seed URLs",
  "userName": "user name",
  "password": "password",
  "userNameFieldXpath": "XPath for user name field",
  "passwordFieldXpath": "XPath for password field",
  "passwordButtonXpath": "XPath for password button",
  "loginPageUrl": "Full URL for website login page"
}
```

要素の XPath (XML パス言語) は、ウェブブラウザのデベロッパーツールを使用して確認できます。XPath は通常、次の形式に従います。//tagname[@Attribute='Value']。

AWS Secrets Manager シークレットを使用してウェブプロキシ認証情報を指定することもできます。

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、ウェブクローラーコネクタ および に必要なパブリック APIs を呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for web crawler data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- ドメイン範囲 - サブドメインのみを含むウェブサイトドメインをクロールするか、ウェブページのリンク先となる他のドメインもクロールするかを選択します。デフォルトでは、Amazon Kendra のみがクロールするウェブサイトのドメインをクロールします。
- 深さ、またはシードレベルからクロールするレベルの数。例えば、シード URL ページは深度 1 で、このページ上でクロールされるハイパーリンクはすべて深度 2 です。
- クロールする単一ウェブページの URL の最大数。
- クロールするウェブページまたは添付ファイルの最大サイズ (MB 単位)。
- 1 分あたりウェブサイトホストごとにクロールされる URL の最大数。
- 内部ウェブサイトに接続してクロールするウェブプロキシのホストとポート番号。例えば、https://a.example.com/page1.html のホスト名は「a.example.com」で、ポート番号は HTTPS の標準ポートである 443 です。ウェブサイトホストへの接続にウェブプロキシ認証情報が必要な場合は、認証情報を保存する AWS Secrets Manager を作成できます。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定の URL のクローリングと、その URL ウェブページのハイパーリンクのインデックス作成を含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、ウェブページとウェブページファイルのフィールドが Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングされます。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Amazon Kendra ウェブクローラテンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

Amazon Kendra Web Crawler 用の **robots.txt** ファイルの設定

Amazon Kendra は、AWS お客様が選択したドキュメントのインデックス作成と検索に使用するインテリジェントな検索サービスです。ウェブ上のドキュメントのインデックスを作成するには、顧客はウェブクローラーを使用できます。Amazon Kendra このウェブクローラーは、インデックスを作成する URL (複数可) やその他の運用パラメータを示します。Amazon Kendra 顧客は、特定のウェブサイトのインデックスを作成する前に認可を取得する必要があります。

Amazon Kendra Web Crawler は、Allow や などの標準の robots.txt ディレクティブを尊重し、Disallow を使用します。ウェブサイトの robots.txt ファイルを変更して、Amazon Kendra Web Crawler がウェブサイトをクロールする方法を制御できます。

Amazon Kendra Web Crawler がウェブサイトにアクセスする方法の設定

Allow および Disallow ディレクティブを使用して、Amazon Kendra Web Crawler がウェブサイトのインデックスを作成する方法を制御できます。また、インデックス作成されるウェブページとクロールしないウェブページを制御することもできます。

Amazon Kendra Web Crawler が、許可されていないウェブページを除くすべてのウェブページをクロールできるようにするには、次のディレクティブを使用します。

```
User-agent: amazon-kendra # Amazon Kendra Web Crawler
Disallow: /credential-pages/ # disallow access to specific pages
```

Amazon Kendra Web Crawler が特定のウェブページのみをクロールできるようにするには、次のディレクティブを使用します。

```
User-agent: amazon-kendra # Amazon Kendra Web Crawler
Allow: /pages/ # allow access to specific pages
```

Web Crawler Amazon Kendra がすべてのウェブサイトコンテンツをクロールし、他のロボットのクロールを禁止するには、次のディレクティブを使用します。

```
User-agent: amazon-kendra # Amazon Kendra Web Crawler
Allow: / # allow access to all pages
User-agent: * # any (other) robot
Disallow: / # disallow access to any pages
```


Web Amazon Kendra Crawler によるウェブサイトのクローリングの停止

Disallow ディレクティブを使用して、Amazon Kendra Web Crawler によるウェブサイトのインデックス作成を停止できます。また、クロールされるウェブページとクロールしないウェブページを制御できます。

Amazon Kendra Web Crawler によるウェブサイトのクロールを停止するには、次のディレクティブを使用します。

```
User-agent: amazon-kendra # Amazon Kendra Web Crawler
Disallow: / # disallow access to any pages
```

Amazon Kendra Web Crawler に関するご質問やご不明点がございましたら、[AWS サポートチーム](#)にお問い合わせください。

[Box] (ボックス)

Box は、ファイルホスティング機能を提供するクラウドストレージサービスです。を使用して Amazon Kendra 、コメント、タスク、ウェブリンクなど、Box コンテンツ内のコンテンツのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [BoxConfiguration](#) API を使用して Box データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Box データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Box データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング

- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 変更ログ、完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Box データソースのインデックスを作成する前に、Box と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Box で以下を確認してください。

- Box Enterprise または Box Enterprise Plus アカウント。
- JSON ウェブトークン (JWT) を使用したサーバー側の認証を使用して、Box 開発者コンソールで Box カスタムアプリを設定しました。詳細については、[カスタムアプリの作成に関する Box ドキュメント](#)と[JWT Auth の設定に関する Box ドキュメント](#)を参照してください。
- [アプリのアクセスレベル] を [アプリ + エンタープライズアクセス] に設定し、[as-user ヘッダーを使用して API 呼び出しを行えるようにします]。
- 管理者ユーザーを使用して、以下の[アプリケーションのスコープ] を Box アプリに追加しました。
 - Box に保存されているすべてのファイルとフォルダを書き込みます。
 - ユーザーの管理
 - グループの管理
 - エンタープライズプロパティの管理
- クライアント ID、クライアントシークレット、パブリックキー ID、プライベートキー ID、パズフレーズ、および認証情報として使用するエンタープライズ ID を含む、設定済みのパブリック/プライベートキーペア。詳細については、[「パブリックキーペアとプライベートキーペア」](#)を参照してください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- Box Developer Console の設定または Box アプリから Box エンタープライズ ID をコピーしました。例えば、**801234567** です。
- 各ドキュメントが Box および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Box の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Box データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Box データソース Amazon Kendra に接続するには、[Box データソース Amazon Kendra にアクセスできるように、Box データソースの必要な詳細を指定する必要があります。](#) Box for をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Box Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、ボックスコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Box コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。

- a. Box エンタープライズ ID - Box エンタープライズ ID を入力します。例えば、**801234567** です。
- b. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- c. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Box 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Box-」が自動的に追加されます。
 - ii. クライアント ID、クライアントシークレット、パブリックキー ID、プライベートキー ID、パスフレーズ - Box で設定したパブリック/プライベートキーの値を入力します。
 - iii. シークレットを追加して保存します。
- d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- e. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- f. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- g. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. ボックスファイル — ウェブリンク、コメント、タスクをクロールするかどうかを選択します。
 - b. 追加設定の場合 - 特定のコンテンツを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。
 - c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新規および変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - d. Sync run schedule for Frequency — データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [次へ] を選択します。
 8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Box Amazon Kendra に接続するには

[BoxConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

[Box エンタープライズ ID] - Box エンタープライズ ID を入力します。エンタープライズ ID は、Box デベロッパーコンソールの設定、または Box でアプリを設定するときに確認できます。

- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Box アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientId": "client-id",
  "clientSecret": "client-secret",
  "publicKeyId": "public-key-id",
  "privateKey": "private-key",
  "passphrase": "pass-phrase"
}
```

- IAM role - を呼び出し CreateDataSource で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Box コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Box data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - データソース設定の一部として VpcConfiguration を指定します。「[VPC を使用するための Amazon Kendra の設定](#)」を参照してください。
- 変更ログ — Amazon Kendra が Box データソース変更ログメカニズムを使用して、インデックスでドキュメントを更新する必要があるかどうかを判断するかどうか。

 Note

Amazon Kendra にすべてのドキュメントをスキャンさせない場合は、変更ログを使用します。変更ログが大きい場合、変更ログを処理するよりも Box データソース内のドキュメントのスキャンに Amazon Kendra 時間がかかる場合があります。Box データソースをインデックスに初めて同期する場合は、すべてのドキュメントがスキャンされます。

- コメント、タスク、ウェブリンク — これらのタイプのコンテンツをクロールするかどうかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- 包含フィルターと除外フィルター — 特定の Box ファイルとフォルダを含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Box データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

詳細はこちら

Box データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra Box コネクタの開始方法](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。

Confluence

Confluence は、プロジェクト計画、ソフトウェア開発、製品管理を共有、保存、および作業するために設計された共同作業管理ツールです。は、Confluence Server/Data Center と Confluence Cloud の両方 Amazon Kendra をサポートしています。を使用して Amazon Kendra 、次の Confluence エンティティのインデックスを作成できます。

- スペース - 関連コンテンツを整理するための最上位の指定エリア。各スペースはコンテナとして機能し、複数のページ、ブログ、添付ファイルを保持できます。

- ページ – ユーザーがコンテンツを作成および管理できるスペース内の個々のドキュメント。ページには、テキスト、イメージ、テーブル、マルチメディア要素を含めることができ、ネストされたサブページを含めることができます。各ページは 1 つのドキュメントと見なされます。
- ブログ – ページに似たコンテンツ。通常、更新や発表に使用されます。各ブログ投稿は 1 つのドキュメントと見なされます。
- コメント – ユーザーがページやブログ投稿内の特定のコンテンツについてフィードバックを提供したり、議論を行ったりできるようにします。
- 添付ファイル – イメージ、ドキュメント、その他のファイルタイプなど、Confluence のページやブログ投稿にアップロードされたファイル。

デフォルトでは、Amazon Kendra は Confluence アーカイブとパーソナルスペースのインデックスを作成しません。データソースの作成時に、インデックス作成を行うことができます。スペース Amazon Kendra のインデックスを作成しない場合は、Confluence でプライベートにマークします。

[Amazon Kendra コンソール](#)、[TemplateConfiguration](#) API、または [ConfluenceConfiguration](#) API を使用して Confluence データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra には、Confluence コネクタの 2 つのバージョンがあります。以下の機能がサポートされています。

Confluence コネクタ V2.0 / [TemplateConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外パターン
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

Confluence コネクタ V1.0 / [ConfluenceConfiguration](#) API (サポート終了)

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- (Confluence Server のみ) Virtual Private Cloud (VPC)

Note

Confluence コネクタ V1.0 / ConfluenceConfiguration API は 2023 年に終了しました。Confluence コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Confluence データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [Confluence Connector ACLs](#)
- [Confluence コネクタ V2.0](#)
- [Confluence コネクタ V1.0](#)

Confluence Connector ACLs

コネクタは、アクセスコントロールリスト (ACLs) のクローリングと、データソースに基づいて該当する場合は情報の識別をサポートします。ACL を使用せずにドキュメントのインデックスを作成すると、すべてのドキュメントがパブリックと見なされます。ACL を使用してドキュメントのインデックスを作成することで、データのセキュリティが確保されます。

Amazon Kendra Confluence コネクタは、スペースをスキャンして、ACLs。ページまたはブログに制限が適用されていない場合、コネクタはそのスペースからアクセス許可を継承します。特定のユーザーまたはグループの制限がページに適用されている場合、それらのユーザーのみがそのページにアクセスできます。ページがネストされている場合、制限が適用されていない場合、ネストされたページは親ページのアクセス許可を継承します。ブログにも同様のアクセス許可モデルが適用されますが、Confluence はネストされたブログをサポートしていません。

さらに、Amazon Kendra Confluence コネクタは、設定された各スペースのユーザープリンシパル情報 (ローカルユーザーエイリアス、ローカルグループ、フェデレーティッドグループ ID 設定) とそのアクセス許可をクローリングします。

Note

Confluence Cloud コネクタは、マクロ、ホワイトボード、またはデータベースのクローリングをサポートしていません。

Amazon Kendra Confluence コネクタは、データソースコンテンツをクロールするたびに ACL の変更を更新します。正しいユーザーが正しいコンテンツにアクセスできるようにするには、定期的にデータソースを再同期して ACL 更新をキャプチャします。

Confluence コネクタ V2.0

Confluence は、プロジェクト計画、ソフトウェア開発、製品管理の共有、保存、作業を目的とした共同作業管理ツールです。Amazon Kendra を使用して、Confluence のスペース、ページ (ネストされたページを含む)、ブログ、インデックス付きページやブログへのコメントや添付ファイルのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra Confluence データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Confluence データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外パターン
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Confluence データソースのインデックスを作成する前に、Confluence と AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

Confluence で以下を確認してください。

- Confluence インスタンスの URL をコピーしました。例: <https://example.confluence.com>、<https://www.example.confluence.com/>、または

[https:// atlassian.net/](https://atlassian.net/)。Amazon Kendraに接続するには、Confluence インスタンス URL が必要です。

Confluence Cloud を使用している場合、ホスト URL は atlassian.net/ で終わる必要があります。

Note

次の URL 形式はサポートされていません。

- <https://example.confluence.com/xyz>
- <https://www.example.confluence.com/wiki/spacekey/xxx>
- <https://atlassian.net/xyz>

Note

(オンプレミス/サーバー) Amazon Kendra に含まれるエンドポイント情報が、データソース設定の詳細で指定されたエンドポイント情報 AWS Secrets Manager と同じかどうかを確認します。[混乱する代理問題](#)は、ユーザーがアクションを実行するアクセス許可がないにもかかわらず、Amazon Kendra をプロキシとして使用して設定された秘密にアクセスし、アクションを実行するセキュリティの問題です。後でエンドポイント情報を変更する場合は、新しいシークレットを作成してこの情報を同期する必要があります。

- ユーザー名 (Confluence へのログインに使用される E メール ID) とパスワード (Confluence API トークンをパスワードとして使用) を含む基本認証情報を設定しました。[「Atlassian アカountの API トークンの管理」](#)を参照してください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- オプション: Amazon Kendra を Confluence インスタンスに接続できるように、Confluence アプリキー、Confluence アプリシークレット、Confluence アクセストークン、および Confluence リフレッシュトークンを含む OAuth 2.0 認証情報を設定しました。アクセストークンの有効期限が切

れた場合は、更新トークンを使用してアクセストークンと更新トークンのペアを再生成できます。または、認可プロセスを繰り返すこともできます。アクセストークンの詳細については、「[OAuth アクセストークンの管理](#)」を参照してください。

- (Confluence サーバー/データセンターのみ) オプション：Confluence で個人用アクセストークン (PAT) を設定しました。「[個人用アクセストークンの使用](#)」を参照してください。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Confluence の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Confluence データソースの接続時にコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Confluence データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように Confluence データソースの必要な詳細を指定する必要があります。](#) Confluence をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Confluence Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで Confluence コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグを持つ Confluence コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Source で、Confluence Cloud または Confluence Server/Data Center を選択します。

- b. Confluence の URL - Confluence のホスト URL を入力します。例えば、<https://example.confluence.com> などです。
- c. (Confluence Server/Data Center のみ) SSL 証明書の場所 - オプション - Confluence Server の SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力します。
- d. (Confluence サーバー/データセンターのみ) ウェブプロキシ - オプション - ウェブプロキシのホスト名 (http://または https://プロトコルなし) とポート番号 (ホスト URL トランスポートプロトコルで使用されるポート) を入力します。ポート番号は 0~65535 の数字である必要があります。
- e. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- f. 認証 - 基本認証、OAuth 2.0 認証、または (Confluence サーバー/データセンターのみ) 個人用アクセストークン認証を選択します。
- g. [AWS Secrets Manager シークレット] - Confluence の認証情報を保存する既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。ウィンドウで、以下の情報を入力します。
 - i. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Confluence-」が自動的に追加されます。
 - ii. 基本認証を使用する場合 - Confluence で設定したシークレット名、ユーザー名、パスワード (Confluence API トークンをパスワードとして) を入力します。

OAuth2.0 認証を使用する場合 - Confluence で設定したシークレット名、アプリキー、アプリシークレット、アクセストークン、更新トークンを入力します。

(Confluence サーバー/データセンターのみ) 個人用アクセストークン認証を使用している場合は、Confluence で設定したシークレット名と Confluence トークンを入力します。
 - iii. シークレットを保存して追加します。
- h. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- i. ID クローラー - Amazon Kendraの ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- j. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- k. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. 同期スコープの同期コンテンツ - ページ、ページコメント、ページ添付ファイル、ブログ、ブログコメント、ブログ添付ファイル、パーソナルスペース、アーカイブスペースのコンテンツタイプから同期することを選択します。

 Note

ページコメントとページ添付ファイルは、ページを同期することを選択した場合のみ削除できます。ブログコメントとブログ添付ファイルは、ブログの同期を選択した場合にのみ削除できます。

 Important

追加設定でスペースキー正規表現パターンを指定しない場合、すべてのページとブログはデフォルトでクロールされます。

- b. 追加設定で、ファイルの最大サイズ - クロールするファイルサイズの制限を MBs Amazon Kendra 単位で指定します。Amazon Kendra は、定義したサイズ制限内のファイルのみをクロールします。デフォルトのファイルサイズは 50 MB です。最大ファイルサイズは 0 MB より大きく、50 MB 以下である必要があります。

Spaces 正規表現パターンの場合 - 以下を使用して、インデックスに特定のスペースを含めるか除外するかを指定します。

- スペースキー (*my-space-123* など)

 Note

スペースキー正規表現パターンを指定しない場合、すべてのページとブログはデフォルトでクロールされます。

- URL (*.* / ##MySite/MyDocuments /*)
- ファイルタイプ (*.* \.pdf#.* \.txt* など)

エンティティタイトル正規表現パターンの場合 - 特定のブログ、ページ、コメント、添付ファイルをタイトルで含めるか除外するように正規表現パターンを指定します。

 Note

特定のページまたはサブページのクローリングを含めるか除外する場合は、ページタイトル正規表現パターンを使用できます。

- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. インデックスにマッピングする、Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。カスタムデータソースフィールドを追加するには、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - b. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Confluence Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマ CONFLUENCEV2 を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- ホスト URL - Confluence ホスト URL インスタンスを指定します。例えば、<https://example.confluence.com> などです。
- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに インデックスを更新する方法 Amazon Kendra を指定します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオフ

ションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。

- **FORCED_FULL_CRAWL** データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- **FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- **認証タイプ** - 認証のタイプを指定します。Basic、OAuth2、(Confluence サーバーのみ) のいずれかを指定します **Personal-token**。
- (オプション - Confluence サーバーのみ) **SSL 証明書** の場所 - SSL 証明書の保存に使用した **S3bucketName** および **s3certificateName** を指定します。
- **シークレット Amazon リソースネーム (ARN)** — Confluence で設定した認証情報を含む **Secrets Manager** シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。基本認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "email ID or user name",
  "password": "Confluence API token"
}
```

OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "confluenceAppKey": "app key",
  "confluenceAppSecret": "app secret",
  "confluenceAccessToken": "access token",
  "confluenceRefreshToken": "refresh token"
}
```

(Confluence サーバーのみ) 基本認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "hostUrl": "Confluence Server host URL",
  "username": "Confluence Server user name",
}
```

```
"password": "Confluence Server password"
}
```

(Confluence サーバーのみ) パーソナルアクセストークン認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "hostUrl": "Confluence Server host URL",
  "patToken": "personal access token"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Confluence コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Confluence data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- ファイルサイズ - クロールする最大ファイルサイズを指定します。
- ドキュメント/コンテンツタイプ - ページ、ページコメント、ページ添付ファイル、ブログ、ブログコメント、ブログ添付ファイル、スペース、アーカイブされたスペースをクロールするかどうかを指定します。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のスペース、ページ、ブログ、コメントや添付ファイルを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ウェブプロキシ - ウェブプロキシ経由で Confluence URL インスタンスに接続する場合は、ウェブプロキシ情報を指定します。このオプションは Confluence サーバーに使用できます。
- アクセスコントロールリスト (ACL) - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクローलするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Confluence データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Confluence テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- 個人用アクセストークン (PAT) は Confluence クラウドでは使用できません。

Confluence コネクタ V1.0

Confluence は、プロジェクト計画、ソフトウェア開発、製品管理の共有、保存、作業を目的とした共同作業管理ツールです。Amazon Kendra を使用して、Confluence のスペース、ページ (ネストされたページを含む)、ブログ、インデックス付きページやブログへのコメントや添付ファイルのインデックスを作成できます。

Note

Confluence コネクタ V1.0 / ConfluenceConfiguration API は 2023 年に終了しました。Confluence コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Confluence データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Confluence データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- (Confluence サーバーのみ) 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Confluence データソースのインデックスを作成する前に、Confluence と AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

Confluence で以下を確認してください。

- Confluence インスタンス内のすべてのコンテンツを表示する Amazon Kendra アクセス許可を付与
 - confluence-administrators グループのメンバー Amazon Kendra にする。
 - 既存のすべてのスペース、ブログ、ページにサイト管理者アクセス許可を付与する。
- Confluence インスタンスの URL をコピーしました。
- SSO (シングルサインオン) ユーザー向け: Confluence データセンターで Confluence 認証方法を設定するときに、ユーザー名とパスワードの [ログインページに表示] をアクティブ化しました。
- Confluence サーバー用
 - Amazon Kendraに接続するための Confluence 管理アカウントのユーザー名とパスワードを含む基本認証情報を記録しました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- オプション: Amazon Kendraに接続するための個人アクセストークンが Confluence アカウントで生成されました。詳細については、「[個人用アクセストークンの生成に関する Confluence ドキュメント](#)」を参照してください。
- Confluence クラウド用
 - Amazon Kendraに接続するための Confluence 管理アカウントのユーザー名とパスワードを含む基本認証情報を記録しました。
 - 各ドキュメントが Confluence および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。

- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Confluence の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Confluence データソースの接続時にコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Confluence データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように Confluence 認証情報の詳細を指定する必要があります](#)。Confluence をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Confluence Amazon Kendra に接続するには

- AWS マネジメントコンソールにサインインし、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
- 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. [データソースを追加] ページで、[Confluence コネクタ V1.0] を選択し、[データソースを追加] を選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Confluence Cloud と Confluence Server のいずれかを選択します。
 - b. Confluence Cloud を選択した場合は、次の情報を入力します。
 - i. [Confluence URL] - ユーザーの Confluence URL。
 - ii. AWS Secrets Manager secret - 既存のシークレットを選択するか、Confluence 認証情報を保存する新しい Secrets Manager シークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - i. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Confluence-」が自動的に追加されます。

- II. ユーザー名とパスワード - Confluence のユーザー名とパスワードを入力します。
 - III. [認証を保存] を選択します。
- c. Confluence Server を選択した場合は、次の情報を入力します。
- i. [Confluence URL] - お客様の Confluence ユーザー名とパスワード。
 - ii. (オプション) [ウェブプロキシ] には次の情報を入力します。
 - A. [ホスト名] - Confluence アカウントのホスト名。
 - B. [ポート番号] - ホスト URL トランスポートプロトコルが使用するポート。
 - iii. 認証には、基本認証または (Confluence サーバーのみ) 個人用アクセストークンを選択します。
 - iv. AWS Secrets Manager secret - 既存のシークレットを選択するか、Confluence 認証情報を保存する新しい Secrets Manager シークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Confluence-」が自動的に追加されます。
 - II. ユーザー名とパスワード - Confluence で設定した認証情報の値を入力します。基本認証を使用する場合は、Confluence ユーザー名 (E メール ID) とパスワード (API トークン) を使用します。個人用アクセストークンを使用する場合は、Confluence アカウントで設定した個人用アクセストークンの詳細を入力します。
 - III. シークレットを保存して追加します。
- d. IAM ロール - 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- e. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [個人用スペースを含める] と [アーカイブされたスペースを含む] の場合 - このデータソースに含めるオプションのスペースタイプを選択します。
 - b. [追加設定] の場合: 特定のコンテンツを含めるか除外する正規表現パターンを指定します。最大 100 のパターンを追加できます。
 - c. 選択したスペース内の添付ファイルをクロールすることもできます。
 - d. 同期実行スケジュールで、頻度 - がデータソースと同期 Amazon Kendra する頻度を選択します。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. スペース、ページ、ブログ - Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドまたは追加の推奨フィールドマッピングから選択して、インデックスフィールドを追加します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Confluence Amazon Kendra に接続するには

[ConfluenceConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- Confluence バージョン - CLOUD または SERVER として使用している Confluence インスタンスのバージョンを指定します。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Confluence 認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。

Confluence Server を使用する場合は、Confluence ユーザー名とパスワード、または個人用アクセストークンを認証情報として使用できます。

Confluence ユーザー名とパスワードを認証情報として使用する場合は、次の認証情報を JSON 構造としてシークレットに Secrets Manager 保存します。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}
```

個人用アクセストークンを使用して Confluence Server を接続する場合は Amazon Kendra、次の認証情報を JSON 構造としてシークレットに Secrets Manager 保存します。

```
{
  "patToken": "personal access token"
}
```

Confluence Cloud を使用する場合は、Confluence で設定された Confluence ユーザー名と API トークンをパスワードとして使用します。次の認証情報を JSON 構造として Secrets Manager シークレットに保存します。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "API token"
}
```

- IAM role - を呼び出し CreateDataSource で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Confluence コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Confluence data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- ウェブプロキシ - ウェブプロキシ経由で Confluence URL インスタンスに接続するかどうか。このオプションは Confluence サーバーに使用できます。
- (Confluence サーバーのみ) [仮想プライベートクラウド (VPC)] - データソース設定の一部として VpcConfiguration を指定します。 [「VPC を使用する Amazon Kendra ように を設定する」](#) を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のスペース、ブログ投稿、ページ、スペース、および添付ファイルを含めるか除外する正規表現パターンを指定します。添付ファイルのインデックスを作成する場合は、インデックスで指定されたページおよびブログへの添付ファイルのみがインデックス作成されます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、Confluence データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、 [「データソースフィールドのマッピング」](#) を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合、 はドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクローリングします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、 [「User context filtering」](#) を参照してください。

詳細

Amazon Kendra と Confluence データソースとの統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra Confluence Server コネクタの設定](#)

カスタムデータソースコネクタ

データソースコネクタをまだ提供 Amazon Kendra していないリポジトリがある場合は、カスタムデータソースを使用します。リポジトリの同期に の Amazon Kendra データソースを使用できない場合でも、Amazon Kendra データソースが提供するのと同じ実行履歴メトリクスを表示できます。これを使用して、Amazon Kendra データソースとカスタムデータソース間で一貫した同期モニタリングエクスペリエンスを作成します。具体的には、カスタムデータソースを使用して、[BatchPutDocument](#) および [BatchDeleteDocument](#) API を使用して作成したデータソースコネクタの同期メトリクスを確認します。

Amazon Kendra データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「[データソースのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

カスタムデータソースを作成すると、インデックスを作成するドキュメントの選択方法を完全に制御できます。は、データソース同期ジョブのモニタリングに使用できるメトリクス情報 Amazon Kendra のみを提供します。データソースインデックスを決定するクローラを作成し、実行する必要があります。

Query 結果のレスポンスに DocumentTitle と DocumentURI を含めるには、[ドキュメント](#)オブジェクトを使用してドキュメントのメインタイトルを指定し、[DocumentAttribute](#) で `_source_uri` を指定する必要があります。

コンソールを使用して、または [CreateDataSource](#) API を使用してカスタムデータソースの識別子を作成します。コンソールを使用するには、データソースに名前を付け、オプションで説明とリソースタグを指定します。データソースが作成されると、データソース ID が表示されます。この ID をコピーして、データソースをインデックスと同期するときに使用します。

Specify data source details

Name data source

Data source name

Maximum of 1000 alphanumeric characters. Can include hyphens (-), but not spaces.

Description - optional

Tags (0) - optional [Info](#)

A tag is an administrative label that you assign to AWS resources to make it easier to manage them. Each tag consists of a key and an optional value. Use tags to search and filter your resources or track your AWS costs.

This resource has no tags

Add new tag

You can add up to 50 more tags.

Cancel

Next

CreateDataSource API を使用して、カスタムデータソースを作成することもできます。この API は、データソースを同期するときに使用する ID を返します。CreateDataSource API を使用してカスタムデータソースを作成する場合、Configuration、RoleArn または Schedule パラメータは設定できません。これらのパラメータを設定すると、ValidationException 例外 Amazon Kendra を返します。

カスタムデータソースを使用するには、Amazon Kendra インデックスの更新を担当するアプリケーションを作成します。アプリケーションは、作成するクローラによって異なります。クローラーはリポジトリ内のドキュメントを読み取り、Amazon Kendra に送信するドキュメントを決定します。アプリケーションでは、以下のステップを実行する必要があります。

1. リポジトリをクロールし、リポジトリ内の追加、更新、または削除されるドキュメントのリストを作成します。

2. [StartDataSourceSyncJob](#) API を呼び出して、同期ジョブが開始されていることを通知します。同期するデータソースを識別するデータソース ID を指定します。は実行 ID を Amazon Kendra 返し、特定の同期ジョブを識別します。
3. [BatchDeleteDocument](#) API を呼び出して、インデックスからドキュメントを削除します。同期しているデータソースと、この更新が関連付けられているジョブを識別するために、データソース ID と実行 ID を指定します。
4. [StopDataSourceSyncJob](#) API を呼び出し、同期ジョブの終了を通知します。StopDataSourceSyncJob API を呼び出すと、関連付けられた実行 ID は無効になります。
5. インデックスとデータソース識別子を使用して [ListDataSourceSyncJobs](#) API を呼び出し、データソースの同期ジョブを一覧表示し、同期ジョブのメトリクスを表示します。

同期ジョブを終了したら、新しい同期ジョブを開始できます。提出されたすべてのドキュメントがインデックスに追加されるまで期間がある場合があります。ListDataSourceSyncJobs API を使用して、同期ジョブのステータスを確認します。同期ジョブに対して返された Status が SYNCING_INDEXING の場合、一部のドキュメントはまだインデックス作成中です。前のジョブのステータスが FAILED または SUCCEEDED の場合は、新しい同期ジョブを開始できます。

StopDataSourceSyncJob API を呼び出した後、同期ジョブ識別子は、BatchPutDocument または BatchDeleteDocument API への呼び出しには使えません。呼び出しに使用した場合、送信されたすべてのドキュメントは、API からの FailedDocuments レスポンスメッセージに返されます。

必須属性

BatchPutDocument API Amazon Kendra を使用して にドキュメントを送信する場合、各ドキュメントには、そのドキュメントが属するデータソースと同期実行を識別するための 2 つの属性が必要です。カスタムデータソースのドキュメントを Amazon Kendra インデックスに正しくマッピングするには、次の 2 つの属性を指定する必要があります。

- `_data_source_id` - データソースの識別子。これは、コンソールまたは CreateDataSource API を使用してデータソースを作成したときに返されます。
- `_data_source_sync_job_execution_id` - 同期実行の識別子。これは、StartDataSourceSyncJob API とのインデックスの同期を開始したときに返されます。

カスタムデータソースを使用してドキュメントのインデックスを作成するために必要な JSON を次に示します。

```
{
```



```

"Documents": [
  {
    "Attributes": [
      {
        "Key": "_data_source_id",
        "Value": {
          "StringValue": "data source identifier"
        }
      },
      {
        "Key": "_data_source_sync_job_execution_id",
        "Value": {
          "StringValue": "sync job identifier"
        }
      }
    ],
    "Blob": "document content",
    "ContentType": "content type",
    "Id": "document identifier",
    "Title": "document title"
  }
],
"IndexId": "index identifier",
"RoleArn": "IAM role ARN"
}

```

BatchDeleteDocument API を使用してインデックスからドキュメントを削除すると、DataSourceSyncJobMetricTarget パラメータで次の 2 つのフィールドを指定する必要があります。

- DataSourceId - データソースの識別子。これは、コンソールまたは CreateDataSource API を使用してデータソースを作成したときに返されます。
- DataSourceSyncJobId - 同期実行の識別子。これは、StartDataSourceSyncJob API とのインデックスの同期を開始したときに返されます。

以下は、BatchDeleteDocument API を使用してインデックスからドキュメントを削除するのに必要な JSON です。

```

{
  "DataSourceSyncJobMetricTarget": {
    "DataSourceId": "data source identifier",

```

```
    "DataSourceSyncJobId": "sync job identifier"
  },
  "DocumentIdList": [
    "document identifier"
  ],
  "IndexId": "index identifier"
}
```

メトリクスの表示

同期ジョブが終了したら、[DataSourceSyncJobMetrics](#) API を使用して、同期ジョブに関連付けられたメトリクスを取得します。これを使用して、カスタムデータソースの同期をモニタリングします。

同じドキュメントを複数回提出する場合、BatchPutDocument API、BatchDeleteDocument API のいずれかの一部で、ドキュメントが追加と削除の両方で送信された場合、ドキュメントはメトリクスで一度だけカウントされます。

- DocumentsAdded - インデックスに初めて追加されたこの同期ジョブに関連付けられた BatchPutDocument API で送信されたドキュメントの数。ドキュメントが同期で複数回追加されるように送信された場合、そのドキュメントはメトリクスで 1 回だけカウントされます。
- DocumentsDeleted - インデックスから削除されたこの同期ジョブに関連付けられた BatchDeleteDocument API を使用して送信されたドキュメントの数。ドキュメントが同期で複数回削除されるように送信された場合、そのドキュメントはメトリクスで 1 回だけカウントされます。
- DocumentsFailed - インデックス作成に失敗したこの同期ジョブに関連付けられているドキュメントの数。これらは、Amazon Kendra がインデックス作成のために受け入れましたが、インデックス作成または削除はできなかったドキュメントです。ドキュメントが によって受け入れられない場合 Amazon Kendra、ドキュメントの識別子は BatchPutDocument および BatchDeleteDocument API の FailedDocuments レスポンスプロパティで返されます。APIs
- DocumentsModified— この同期ジョブに関連付けられた BatchPutDocument API を使用して送信された、Amazon Kendra インデックスで変更された変更されたドキュメントの数。

Amazon Kendra は、ドキュメントのインデックス作成中に Amazon CloudWatch メトリクスも出力します。詳細については、「[Amazon Kendra によるモニタリング Amazon CloudWatch](#)」を参照してください。

Amazon Kendra は、カスタムデータソースの DocumentsScanned メトリクスを返しません。また、データソースの CloudWatch メトリクス ドキュメントにリストされているメトリクスも出力します。 [Amazon Kendra](#)

詳細

カスタムデータソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [へのカスタムデータソースの追加 Amazon Kendra](#)

カスタムデータソース (Java)

以下のコードは、Java を使用したカスタムデータソースの実装の例を示します。プログラムはまずカスタムデータソースを作成し、次に新しく追加されたドキュメントをカスタムデータソースを持つインデックスに同期します。

次のコードは、カスタムデータソースを作成して使用方法を示しています。アプリケーションでカスタムデータソースを使用している場合は、インデックスをデータソースと同期するたびに新しいデータソースを作成する必要はありません (1 回限りのプロセス)。インデックス ID とデータソース ID を使用してデータを同期します。

```
package com.amazonaws.kendra;

import java.util.concurrent.TimeUnit;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.BatchPutDocumentRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.BatchPutDocumentResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceType;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.Document;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StopDataSourceSyncJobRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StopDataSourceSyncJobResponse;

public class SampleSyncForCustomDataSource {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();
```

```
String myIndexId = "yourIndexId";
String dataSourceName = "custom data source";
String dataSourceDescription = "Amazon Kendra custom data source connector"

// Create custom data source
CreateDataSourceRequest createDataSourceRequest = CreateDataSourceRequest
    .builder()
    .indexId(myIndexId)
    .name(dataSourceName)
    .description(dataSourceDescription)
    .type(DataSourceType.CUSTOM)
    .build();

CreateDataSourceResponse createDataSourceResponse =
kendra.createDataSource(createDataSourceRequest);
System.out.println(String.format("Response of creating data source: %s",
createDataSourceResponse));

// Get the data source ID from createDataSourceResponse
String dataSourceId = createDataSourceResponse.Id();

// Wait for the custom data source to become active
System.out.println(String.format("Waiting for Amazon Kendra to create the data
source %s", dataSourceId));
// You can use the DescribeDataSource API to check the status
DescribeDataSourceRequest describeDataSourceRequest = DescribeDataSourceRequest
    .builder()
    .indexId(myIndexId)
    .id(dataSourceId)
    .build();

while (true) {
    DescribeDataSourceResponse describeDataSourceResponse =
kendra.describeDataSource(describeDataSourceRequest);

    DataSourceStatus status = describeDataSourceResponse.status();
    System.out.println(String.format("Creating data source. Status: %s", status));
    if (status != DataSourceStatus.CREATING) {
        break;
    }

    TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
}
```

```
// Start syncing your data source by calling StartDataSourceSyncJob and providing
your index ID
// and your custom data source ID
System.out.println(String.format("Synchronize the data source %s", dataSourceId));
StartDataSourceSyncJobRequest startDataSourceSyncJobRequest =
StartDataSourceSyncJobRequest
    .builder()
    .indexId(myIndexId)
    .id(dataSourceId)
    .build();
StartDataSourceSyncJobResponse startDataSourceSyncJobResponse =
kendra.startDataSourceSyncJob(startDataSourceSyncJobRequest);

// Get the sync job execution ID from startDataSourceSyncJobResponse
String executionId = startDataSourceSyncJobResponse.ExecutionId();
System.out.println(String.format("Waiting for the data source to sync with the index
%s for execution ID %s", indexId, startDataSourceSyncJobResponse.executionId()));

// Add 2 documents uploaded to S3 bucket to your index using the BatchPutDocument
API
// The added documents should sync with your custom data source
Document pollyDoc = Document
    .builder()
    .s3Path(
        S3Path.builder()
            .bucket("amzn-s3-demo-bucket")
            .key("what_is_Amazon_Polly.docx")
            .build()
    ).title("What is Amazon Polly?")
    .id("polly_doc_1")
    .build();

Document rekognitionDoc = Document
    .builder()
    .s3Path(
        S3Path.builder()
            .bucket("amzn-s3-demo-bucket")
            .key("what_is_amazon_rekognition.docx")
            .build()
    ).title("What is Amazon rekognition?")
    .id("rekognition_doc_1")
    .build();

BatchPutDocumentRequest batchPutDocumentRequest = BatchPutDocumentRequest
```

```

        .builder()
        .indexId(myIndexId)
        .documents(pollyDoc, rekognitionDoc)
        .build();

BatchPutDocumentResponse result = kendra.batchPutDocument(batchPutDocumentRequest);
System.out.println(String.format("BatchPutDocument result: %s", result));

// Once custom data source synced, stop the sync job using the
StopDataSourceSyncJob API
StopDataSourceSyncJobResponse stopDataSourceSyncJobResponse =
kendra.stopDataSourceSyncJob(
    StopDataSourceSyncJobRequest()
        .indexId(myIndexId)
        .id(dataSourceId)
);

// List your sync jobs
ListDataSourceSyncJobsRequest listDataSourceSyncJobsRequest =
ListDataSourceSyncJobsRequest
    .builder()
    .indexId(myIndexId)
    .id(dataSourceId)
    .build();

while (true) {
    ListDataSourceSyncJobsResponse listDataSourceSyncJobsResponse =
kendra.listDataSourceSyncJobs(listDataSourceSyncJobsRequest);
    DataSourceSyncJob job = listDataSourceSyncJobsResponse.history().get(0);
    System.out.println(String.format("Status: %s", job.status()));
}
}
}

```

Dropbox

Dropbox は、クラウドストレージ、ドキュメント整理、ドキュメントテンプレートサービスを提供するファイルホスティングサービスです。Dropbox ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Dropbox ファイル、Dropbox Paper、Dropbox Paper Templates、およびウェブページへの保存されたショートカットのインデックスを作成できます。特定の Dropbox ファイル、Dropbox Paper、Dropbox Paper Templates、およびウェブページへの保存されたショートカットのインデックス Amazon Kendra を作成するように を設定することもできます。

Amazon Kendra は、Dropbox Business 用の Dropbox と Dropbox Advanced の両方をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して Dropbox データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Dropbox データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Dropbox データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Dropbox データソースのインデックスを作成する前に、Dropbox と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Dropbox で以下を確認してください。

- Dropbox Advanced アカウントを作成し、管理者ユーザーを設定しました。
- 一意のアプリ名で Dropbox アプリを設定し、スコープ付きアクセスをアクティブ化しました。[アプリの作成については Dropbox のドキュメントを参照してください](#)。

- Dropbox コンソールで [フル Dropbox] アクセス許可を有効にし、次のアクセス許可を追加しました。
 - files.content.read
 - files.metadata.read
 - sharing.read
 - file_requests.read
 - groups.read
 - team_info.read
 - team_data.content.read
- 基本認証情報として Dropbox アプリキー、Dropbox アプリシークレット、Dropbox アクセストークンを記録しました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- Dropbox アプリの一時的な OAuth 2.0 アクセストークンを設定してコピーしました。このトークンは一時的なもので、4 時間後に有効期限が切れます。[OAuth 認証については Dropbox のドキュメント](#)を参照してください。

 Note

4 時間後に有効期限が切れる 1 回限りのアクセストークンに頼るのではなく、有効期限のない Dropbox 更新アクセストークンを作成することをお勧めします。更新アクセストークンは永続的で有効期限がないため、今後もデータソースを同期し続けることができます。

- 推奨： が中断することなくデータソース Amazon Kendra の同期を継続できるように、有効期限のない Dropbox 永続更新トークンを設定しました。[更新トークンについては Dropbox のドキュメント](#)を参照してください。
- 各ドキュメントが Dropbox および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Dropbox の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Dropbox データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Dropbox データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Dropbox データソースの必要な詳細を指定する必要があります](#)。Dropbox をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Dropbox Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。

2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Dropbox コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Dropbox コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - b. 認証トークンのタイプ — 永続トークン (推奨) または一時的なアクセストークンを選択します。
 - c. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Dropbox 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

- i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレットネームには「AmazonKendra-Dropbox-」というプレフィックスが自動的に追加されます。
 - B. アプリキー、アプリシークレット、トークン情報 (永続的または一時的) の場合 - Dropbox で設定された認証情報値を入力します。
- ii. シークレットを保存して追加します。
- d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- e. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- f. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- g. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. エンティティまたはコンテンツタイプの選択 — クロールする Dropbox エンティティまたはコンテンツタイプを選択します。
 - b. [正規表現パターン] の [追加設定] - 特定のファイルを含めたり除外する正規表現パターンを追加します。

- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. ファイル、Dropbox Paper、Dropbox Paper テンプレート — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
 9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Dropbox Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマDROPBOXを使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- アクセストークンタイプ - 認証認証情報を保存する AWS Secrets Manager シークレットに永続的アクセストークンを使用するか一時的なアクセストークンを使用するかを指定します。

 Note

4 時間後に有効期限が切れる 1 回限りのアクセストークンに頼るのではなく、Dropbox で有効期限が切れることのない更新アクセストークンを作成することをお勧めします。Dropbox デベロッパーコンソールでアプリと更新アクセストークンを作成し、シークレットでアクセストークンを渡します。

- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Dropbox アカountの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "appKey": "Dropbox app key",
```

```
"appSecret": "Dropbox app secret",  
"accesstoken": "temporary access token or refresh access token"  
}
```

- ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Dropbox コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Dropbox data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- ドキュメント/コンテンツタイプ — Dropbox、Dropbox Paper ドキュメント、Dropbox Paper テンプレート、Dropbox に保存されているウェブページショートカット内のファイルをクロールするかどうかを指定します。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルを含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- アクセスコントロールリスト (ACL) — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクローलするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Dropbox データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Dropbox テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

詳細はこちら

Amazon Kendra と Dropbox データソースとの統合について詳しくは、以下を参照してください。

- [Amazon Kendraの Dropbox コネクタを使用して Dropbox コンテンツのインデックスを作成してください](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。

Drupal

Note

Drupal コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされています。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Drupal は、ウェブサイトやウェブアプリケーションの作成に使用できるオープンソースのコンテンツ管理システム (CMS) です。Amazon Kendra を使用して、Drupal で次のインデックスを作成できます。

- コンテンツ - 記事、基本ページ、基本ブロック、ユーザー定義コンテンツタイプ、ユーザー定義ブロックタイプ、カスタムコンテンツタイプ、カスタムブロックタイプ
- コメント - すべてのコンテンツタイプとブロックタイプに対応
- 添付ファイル - すべてのコンテンツタイプとブロックタイプに対応

[Amazon Kendra コンソール](#)または [TemplateConfiguration](#) API を使用して Drupal データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Drupal データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Drupal データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Drupal データソースのインデックスを作成する前に、Drupal と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Drupal で以下を確認してください。

- Drupal (スタンダード) Suite のアカウントと管理者ロールを持つユーザーを作成しました。
- Drupal サイト名をコピーし、ホスト URL を設定しました。例えば、`https://<hostname>/<drupalsitename>`。
- ユーザー名 (Drupal ウェブサイトのログインユーザー名) とパスワード (Drupal ウェブサイトのパスワード) を含む基本認証情報を設定しました。
- 推奨: OAuth 2.0 認証情報トークンを設定しました。このトークンを、接続先の Drupal パスワード付与、クライアント ID、クライアントシークレット、ユーザー名 (Drupal ウェブサイトのログインユーザー名)、パスワード (Drupal ウェブサイトのパスワード) とともに使用して Amazon Kendra に接続します。
- 管理者ロールを使用して Drupal アカウントに次のアクセス許可を追加しました。
 - ブロックを管理
 - block_content の表示を管理
 - block_content フィールドを管理
 - block_content の形式表示を管理
 - ビューを管理
 - ユーザーの E メールアドレスを表示
 - 自分の未公開コンテンツを表示
 - ページリビジョンを表示

- 記事のリビジョンを表示
- すべてのリビジョンを表示
- 管理テーマを表示
- コンテンツへのアクセス
- コンテンツへのアクセスの概要
- コメントへのアクセス
- コンテンツを検索
- ファイルへのアクセスの概要
- コンテキストリンクへのアクセス

 Note

ユーザー定義のコンテンツタイプまたはユーザー定義のブロックタイプがある場合、またはビューやブロックを Drupal ウェブサイトに追加する場合は、それらに管理者アクセスを提供する必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Drupal の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシーク

レットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Drupal データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Drupal データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように Drupal 認証情報の詳細を指定する必要があります。Drupal をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Drupal Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Drupal コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Drupal コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。

- c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ソース] の [ホスト URL] - Drupal サイトのホスト URL。例えば、`https://<hostname>/<drupal_sitename>`。
 - b. [SSL 証明書の場所] - Amazon S3 バケットに保存されている SSL 証明書へのパスを入力します。
 - c. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - d. 認証用 - ユースケースに応じて、[基本認証] と [OAuth 2.0 認証] のいずれかを選択します。
 - e. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Drupal 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [基本認証] を選択した場合は、コピーした [シークレット名]、[ユーザー名] (Drupal サイトのユーザー名)、および [パスワード] (Drupal サイトのパスワード) を入力し、[保存してシークレットを追加] を選択します。
 - B. [OAuth 2.0 認証] を選択した場合は、Drupal アカウントで生成された [シークレット名]、[ユーザー名] (Drupal サイトのユーザー名)、[パスワード] (Drupal サイトのパスワード)、[クライアント ID]、および [クライアントシークレット] を入力して、[シークレットを保存して追加] を選択します。
 - ii. [保存] を選択します。

- f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- g. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [同期の範囲] は、次のオプションから選択します。

 Note

[記事]、[基本ページ]、[基本ブロック] のクローラを選択すると、それぞれのデフォルトのフィールドが自動的に同期されます。コメント、添付ファイル、カスタムフィールド、その他のカスタムエンティティを同期することもできます。

- [エンティティを選択] の場合。
 - 記事 - [記事]、そのコメント [コメント]、および [添付ファイル] をクローラするかどうかを選択します。

- [基本ページ] - [基本ページ]、その [コメント]、その [添付ファイル] をクロールするかどうかを選択します。
 - [基本ブロック] - [基本ブロック]、その [コメント]、その [添付ファイル] をクロールするかどうかを選択します。
 - [カスタムコンテンツタイプ] と [カスタムブロック] を追加することもできます。
- b. [追加設定 - オプション]。
- [正規表現パターン] - 特定のエンティティタイトルとファイル名を含めるか除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. コンテンツ、コメント、添付ファイル - インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Drupal Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマDRUPALを使用する場合、データソースタイプを[TemplateConfiguration](#)として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースをとして指定します。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Drupal アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。

基本認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}
```

OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。


```
{
  "username": "user name",
  "password": "password",
  "clientId": "client id",
  "clientSecret": "client secret"
}
```

 Note

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Drupal コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Drupal data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - コンテンツ、コメント、添付ファイルを含めるかどうかを指定できます。また、コンテンツ、コメント、添付ファイルを含めるか除外する正規表現パターンを指定することもできます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定

した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Drupal データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Drupal テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- Drupal API には公式なスロットリング制限はありません。
- Java SDK は Drupal では使用できません。
- Drupal データは、ネイティブ JSON API を使用してのみ取得できます。
- どの Drupal [ビュー] にも関連付けられていないコンテンツタイプはクローलできません。
- Drupal [ブロック] からデータをクロールするには、管理者権限が必要です。
- HTTP 動詞を使用してユーザー定義コンテンツタイプを作成するための JSON API はありません。

- [記事]、[基本ページ]、[基本ブロック]、ユーザー定義コンテンツタイプ、ユーザー定義ブロックタイプのドキュメント本文とコメントは HTML 形式で表示されます。HTML コンテンツの形式が正しくない場合、HTML 関連のタグがドキュメント本文とコメントに表示され、Amazon Kendra 検索結果に表示されます。
- 説明や本文のないコンテンツタイプとブロックタイプは取り込まれません Amazon Kendra。そのようなコンテンツまたはブロックタイプのコメントと添付ファイルのみが Amazon Kendra インデックスに取り込まれます。

GitHub

GitHub は、バージョン管理機能を備えたコードストレージおよび管理サービスを提供するソフトウェア開発用のウェブベースのホスティングサービスです。を使用して Amazon Kendra、GitHub Enterprise Cloud (SaaS) および GitHub Enterprise Server (オンプレミス) リポジトリファイルのインデックス作成、リクエストの発行とプル、リクエストのコメントの発行とプル、コメントの添付ファイルの発行とプルを行うことができます。また、特定のファイルを含めるまたは除外することもできます。

Note

Amazon Kendra はアップグレードされた GitHub コネクタをサポートするようになりました。

コンソールが自動的にアップグレードされました。コンソールで作成する新しいコネクタは、アップグレードされたアーキテクチャを使用します。API を使用する場合は、[TemplateConfiguration](#) オブジェクトではなく `GitHubConfiguration` オブジェクトを使用してコネクタを設定する必要があります。

古いコンソールと API アーキテクチャを使用して設定されたコネクタは、引き続き設定どおりに機能します。ただし、編集または更新することはできません。コネクタ設定を編集または更新する場合は、新しいコネクタを作成する必要があります。

コネクタワークフローをアップグレードされたバージョンに移行することをお勧めします。古いアーキテクチャを使用して設定されたコネクタのサポートは、2024 年 6 月までに終了する予定です。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して GitHub データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra GitHub データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra GitHub データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して GitHub データソースのインデックスを作成する前に、GitHub および AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

GitHub で、以下を確認してください。

- GitHub 組織への管理者アクセス許可を持つ GitHub ユーザーを作成済み。
- Git Hub で、 を認証情報として使用するよう個人用アクセストークンを設定しました。 [個人アクセストークンの作成については、GitHub のドキュメントを参照してください](#)。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- 推奨：認証情報用に OAuth トークンを設定しました。API のスロットル制限とコネクタのパフォーマンスを向上させるには、OAuth トークンを使用してください。[OAuth 認証に関する GitHub のドキュメント](#)を参照してください。
- 使用している GitHub サービスのタイプに対応する GitHub ホスト URL を記録済み。####GitHub ##### URL # `https://api.github.com` ##GitHub ##### URL # `https://on-prem-host-url/api/v3/` である可能性があります。
- 接続先の GitHub GitHub Enterprise Cloud (SaaS) アカウントまたは GitHub Enterprise Server (オンプレミス) アカウントの組織の名前を記録しました。組織名は、GitHub Desktop にログインし、プロフィール写真のドロップダウンから [組織] を選択して確認できます。
- オプション (サーバーのみ): SSL 証明書を生成し、Amazon S3 バケットに保存されている証明書へのパスをコピーしました。安全な SSL 接続が必要な場合は、これを使用して GitHub に接続します。OpenSSL を使用して、任意のコンピュータで自己署名 X509 証明書を生成できます。OpenSSL を使用して X509 証明書を作成する例については、「[X509 証明書の作成と署名](#)」を参照してください。
- 以下のアクセス許可を追加しました。

GitHub Enterprise Cloud (SaaS) の場合

- `repo:status` - パブリックおよびプライベートリポジトリのコミットステータスへの読み取り/書き込みアクセスを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、プライベートリポジトリのコミットステータスへのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `repo_deployment` - パブリックおよびプライベートリポジトリのデプロイステータスへのアクセスを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、デプロイステータスへのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `public_repo` - パブリックリポジトリへのアクセスを制限します。これには、パブリックリポジトリと組織のコード、コミットステータス、リポジトリプロジェクト、共同作者、デプロイステータスへの読み取り/書き込みアクセスが含まれます。パブリックリポジトリのスター付けにも必要です。
- `repo:invite` - リポジトリで共同作業を行うための招待を承諾/拒否することを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、招待へのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `security_events` - コードスキャン API のセキュリティイベントへの読み取りおよび書き込みアクセスを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、セキュリティイベントへのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。

- `read:org` – 組織メンバーシップ、組織プロジェクト、チームメンバーシップへの読み取り専用アクセス。
- `user:email` – ユーザーの E メールアドレスへの読み取りアクセスを許可します。Amazon Kendra が ACLs クロールするために必要です。
- `user:follow` – 他のユーザーをフォローまたはフォロー解除するためのアクセス許可を付与します。Amazon Kendra が ACLs クロールするために必要です。
- `read:user` – ユーザーのプロファイルデータを読み取るためのアクセス許可を付与します。Amazon Kendra が ACLs クロールするために必要です。
- `workflow` – GitHub Actions ワークフローファイルを追加および更新する機能を付与します。同じリポジトリ内の別のブランチに同じファイル (同じパスとコンテンツの両方を持つ) が存在する場合、このスコープなしでワークフローファイルをコミットできます。

詳細については、GitHub Docs の「[Scopes for OAuth apps](#)」を参照してください。

GitHub Enterprise Server (On Prem) の場合

- `repo:status` – パブリックおよびプライベートリポジトリのコミットステータスへの読み取り/書き込みアクセスを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、プライベートリポジトリのコミットステータスへのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `repo_deployment` – パブリックおよびプライベートリポジトリのデプロイステータスへのアクセスを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、デプロイステータスへのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `public_repo` – パブリックリポジトリへのアクセスを制限します。これには、パブリックリポジトリと組織のコード、コミットステータス、リポジトリプロジェクト、共同作業、デプロイステータスへの読み取り/書き込みアクセスが含まれます。パブリックリポジトリのスター付けにも必要です。
- `repo:invite` – リポジトリで共同作業を行うための招待を承諾/拒否することを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、招待へのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `security_events` – コードスキャン API のセキュリティイベントへの読み取りおよび書き込みアクセスを許可します。コードへのアクセスを許可せずに、セキュリティイベントへのアクセスを他のユーザーまたはサービスに許可する場合にのみこのスコープが必要になります。
- `read:user` – ユーザーのプロファイルデータを読み取るためのアクセス許可を付与します。Amazon Q Business が ACL をクロールするために必要です。

- `user:email` – ユーザーの E メールアドレスへの読み取りアクセスを許可します。Amazon Q Business が ACL をクローलするために必要です。
- `user:follow` – 他のユーザーをフォローまたはフォロー解除するためのアクセス許可を付与します。Amazon Q Business が ACL をクローलするために必要です。
- `site_admin` – サイト管理者に GitHub Enterprise Server Administration API エンドポイントへのアクセスを許可します。
- `workflow` – GitHub Actions ワークフローファイルを追加および更新する機能を付与します。同じリポジトリ内の別のブランチに同じファイル (同じパスとコンテンツの両方を持つ) が存在する場合、このスコープなしでワークフローファイルをコミットできます。

詳細については、「[Docs での OAuth アプリケーションのスコープ](#)」および「GitHubDeveloper GitHub での OAuth アプリケーションのスコープの理解」を参照してください。 [OAuth](#)

- 各ドキュメントが GitHub および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- GitHub の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシーク

レットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、GitHub データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

GitHub データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように GitHub データソースの必要な詳細を指定する必要があります。GitHub をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

GitHub Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで GitHub コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。
バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた GitHub コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。

- c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。

- a. [GitHub ソース] - [GitHub エンタープライズクラウド] と [GitHub Enterprise Server] のいずれかを選択します。
- b. GitHub ホスト URL - 例えば、GitHub クラウドのホスト URL は <https://api.github.com> で、GitHub サーバーのホスト URL は <https://on-prem-host-url/api/v3/> です。
- c. GitHub 組織名 - GitHub の組織名を入力します。組織の情報は GitHub アカウントで確認できます。

 Note

GitHub コネクタは、データソースコネクタインスタンスごとに 1 つの組織のクローリングをサポートします。

- d. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- e. AWS Secrets Manager secret - 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して GitHub 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-GitHub-」が自動的に追加されます。
 - B. GitHub トークンの場合 - GitHub で設定された認証情報の値を入力します。

- ii. シークレットを保存して追加します。
- f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- g. ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- h. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. Select repositories - すべてのリポジトリをクロールするか、選択します。

選択したリポジトリをクロールする場合は、リポジトリの名前を追加し、オプションで特定のブランチの名前を追加します。
 - b. コンテンツタイプ - ファイル、問題、プルリクエストなどからクロールするコンテンツタイプを選択します。
 - c. [正規表現パターン] - 特定のファイルを含めるまたは除外する正規表現パターンを追加します。
 - d. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプション

として完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
- 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

e. Sync run schedule for Frequency — データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。

f. [Next (次へ)] を選択します。

8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. デフォルトのデータソースフィールド - インデックスにマッピングする Amazon Kendra 、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
- b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
- c. [Next (次へ)] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

GitHub Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマGITHUBを使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- GitHub タイプ - タイプを SAASまたは として指定しますON_PREMISE。
- ホスト URL - GitHub ホスト URL または API エンドポイント URL を指定します。例えば、GitHub SaaS/Enterprise Cloud を使用する場合は、ホスト URL は になりhttps://api.github.com、GitHub オンプレミス/エンタープライズサーバーの場合、ホスト URL は になりますhttps://on-prem-host-url/api/v3/。
- 組織名 - GitHub アカウントの組織の名前を指定します。組織名は、GitHub Desktop にログインし、プロフィール写真のドロップダウンから [組織] を選択して確認できます。
- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- ID クローラー - Amazon Kendraの ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、 [PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — GitHub アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "personalToken": "token"  
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、GitHub コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for GitHub data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。

Note

GitHub サーバーを使用する場合は、Amazon VPC を使用して GitHub サーバーに接続する必要があります。

- リポジトリフィルター - リポジトリを名前とブランチ名でフィルタリングします。
- ドキュメント/コンテンツタイプ - リポジトリドキュメント、問題、問題コメント、問題コメント添付ファイル、プルリクエスト、プルリクエストコメント、プルリクエストコメント添付ファイルをクローलするかどうかを指定します。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルとフォルダを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定

した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- アクセスコントロールリスト (ACL) - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクローलするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、GitHub データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。ドキュメント、コミット、問題、問題添付ファイル、問題コメント、プルリクエスト、プルリクエスト添付ファイル、プルリクエストコメントのフィールドを含めることができます。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

Amazon Kendra がドキュメントを検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[GitHub template schema](#)」を参照してください。

詳細

Amazon Kendra と GitHub データソースとの統合の詳細については、以下を参照してください。

- [GitHub コネクタの機能を使用して Amazon Kendra GitHub リポジトリの検索を再検討する](#)

Gmail

Gmail は Google が開発した E メールクライアントで、添付ファイル付きのメールメッセージを送信できます。Gmail のメッセージは、フォルダやラベルを使用して Eメールの受信トレイ内で分類して保存できます。を使用して Amazon Kendra、Eメールメッセージとメッセージ添付ファイルのイ

ンデックスを作成できます。インデックス作成のために、特定の E メールメッセージ、メッセージ添付ファイル、ラベルを含めるか除外 Amazon Kendra するように を設定することもできます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して Gmail データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Gmail データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Gmail データソースのインデックスを作成する前に、Gmail とアカウントでこれらの変更を行ってください AWS 。

Gmail で以下を確認してください。

- Google Cloud Platform の管理者アカウントを作成し、Google Cloud プロジェクトを作成しました。
- 管理者アカウントで Gmail API と管理者 SDK API を有効にしました。

- サービスアカウントを作成し、Gmail の JSON プライベートキーをダウンロードしました。プライベートキーを作成してアクセスする方法については、Google Cloud のドキュメントの「[サービスアカウントキーの作成方法](#)」と「[サービスアカウントの認証情報](#)」を参照してください。
- 認証情報として使用する管理者アカウントの E メール、サービスアカウントの E メール、プライベートキーをコピーしました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- ユーザーおよびインデックスを作成する共有ディレクトリに、次の OAuth スコープ (管理者ロールを使用) を追加しました。
 - <https://www.googleapis.com/auth/admin.directory.user.readonly>
 - <https://www.googleapis.com/auth/gmail.readonly>
- 各ドキュメントが Gmail および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Gmail の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Gmail データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Gmail データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように Gmail 認証情報の詳細を指定する必要があります。Gmail をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Gmail Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで Gmail コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Gmail コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - b. シーAWS Secrets Manager クレットの認証 - 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Gmail 認証情報を保存します。新しいシークレットを作成することを選択した場合は、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。
 - B. [クライアント E メール] - Google サービスアカウントからコピーしたクライアント E メール。
 - C. [管理者アカウント E メール] - 使用する管理者アカウントの E メールです。
 - D. [プライベートキー] - Google サービスアカウントからコピーしたプライベートキー。
 - E. シークレットを保存して追加します。
 - c. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- d. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- e. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. ForEntity タイプ - 選択すると、メッセージの添付ファイルが同期されます。
 - b. (オプション) [追加設定] で、以下の情報を入力します。
 - i. 日付範囲 - クロールする E メールを開始日と終了日を指定する日付範囲を入力します。
 - ii. E メールドメイン - 「to」、「from」、「cc」、「bcc」の E メールドメインに基づいて、特定の E メールを包含または除外します。
 - iii. 件名のキーワード - E メール件名のキーワードに基づいて E メールを包含または除外します。

 Note

また、入力した件名のキーワードすべてに一致するドキュメントを含めることもできます。

- iv. ラベル - 特定の E メールラベルを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。
 - v. 添付ファイル - 特定の E メール添付ファイルを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

 Important

完全に削除された Gmail メッセージ、新規、変更、または削除されたコンテンツの同期を更新する API がいないため：

- Gmail から完全に削除されたメッセージをインデックスから削除 Amazon Kendra しない
- Gmail E メールラベルの変更を同期しない

Gmail のデータソースラベルの変更や完全に削除されたメールメッセージを Amazon Kendra インデックスに同期するには、定期的にフルクロールを実行する必要があります。

- d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド - インデックスにマッピングする Amazon Kendra 、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。

 Note

Amazon Kendra Gmail データソースコネクタは、API の制限によりカスタムインデックスフィールドの作成をサポートしていません。

- b. [Next (次へ)] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Gmail Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマGMAILを使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。

Important

完全に削除された Gmail メッセージ、新規、変更、または削除されたコンテンツの同期を更新する API がないため：

- Gmail から完全に削除されたメッセージをインデックスから削除 Amazon Kendra し
ない
- Gmail E メールラベルの変更を同期しない

Gmail データソースラベルの変更と完全に削除された E メールメッセージを Amazon Kendra インデックスに同期するには、定期的にフルクロールを実行する必要があります。

- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Gmail アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "adminAccountId": "service account email",
  "clientId": "user account email",
  "privateKey": "private key"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Gmail コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Gmail data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定の「to」、「from」、「cc」、「bcc」の E メールを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合、はドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

- フィールドマッピング - 選択すると、Gmail データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

 Note

Amazon Kendra Gmail データソースコネクタは、API の制限によりカスタムインデックスフィールドの作成をサポートしていません。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Gmail template schema](#)」を参照してください。

詳細

Amazon Kendra と Gmail データソースとの統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra の Gmail コネクタを使用して、Google ワークスペース内のメール全体でインテリジェントな検索を実行します。](#)

メモ

- 完全に削除された Gmail メッセージを更新する API がないため、FULL_CRAWL/[新規、変更、削除したコンテンツの同期] は以下ようになります。
- Gmail から完全に削除されたメッセージを Amazon Kendra インデックスから削除しない
- Gmail のメールラベルの変更は同期されません。

Gmail データソースラベルの変更と完全に削除された E メールメッセージを Amazon Kendra インデックスに同期するには、定期的にフルクロールを実行する必要があります。

- Amazon Kendra Gmail データソースコネクタは、API の制限によりカスタムインデックスフィールドの作成をサポートしていません。

Google Drive

Google Drive はクラウドベースのファイルストレージサービスです。Amazon Kendra を使用して、Google Drive データソースの共有ドライブ、My Drives、共有フォルダに保存されているドキュメントのインデックスを作成できます。Google WorkSpace のドキュメントと、[ドキュメントのタイプ](#)に記載されているドキュメントの両方にインデックスを作成できます。包含フィルターと除外フィルターを使用して、ファイル名、ファイルタイプ、ファイルパスでコンテンツにインデックスを作成することもできます。

[Amazon Kendra コンソール](#)、[TemplateConfiguration](#) API、または [GoogleDriveConfiguration](#) API を使用して、Google Drive データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra には Google Drive コネクタの 2 つのバージョンがあります。各バージョンでサポートされる機能は次のとおりです。

Google Drive コネクタ V1.0/[GoogleDriveConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター

Google コネクタ V2.0 / [TemplateConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

 Note

Google Drive コネクタ V1.0 / Google DriveConfiguration API は 2023 年に終了しました。Google Drive コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Google Drive データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [Google Drive コネクタ V1.0](#)
- [Google Drive コネクタ V2.0](#)

Google Drive コネクタ V1.0

Google Drive はクラウドベースのファイルストレージサービスです。を使用して Amazon Kendra、Google Drive データソースの共有ドライブ、My Drives、および Shared with me フォルダに保存されているドキュメントとコメントのインデックスを作成できます。Google WorkSpace のドキュメントと、[ドキュメントのタイプ](#)に記載されているドキュメントにインデックスを作成できます。包含フィルターと除外フィルターを使用して、ファイル名、ファイルタイプ、ファイルパスでコンテンツにインデックスを作成することもできます。

 Note

Google Drive コネクタ V1.0 / Google DriveConfiguration API は 2023 年に終了しました。Google Drive コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Google Drive データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

- [詳細](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター

前提条件

Amazon Kendra を使用して Google Drive データソースのインデックスを作成する前に、Google Drive と AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

Google Drive で以下を確認してください。

- スーパー管理者ロールからアクセスを許可されているか、管理者権限を持つユーザーであるかのどちらかです。スーパー管理者ロールからアクセス許可を付与されている場合は、スーパー管理者ロールは必要ありません。
- [G Suite ドメイン全体の委任を有効にする] を有効にしたサービスアカウントを作成し、そのアカウントを使用してプライベートキーとして JSON キーを作成しました。
- ユーザーアカウント E メールとサービスアカウント E メールをコピーしました。に接続する Amazon Kendra ときは、ユーザーアカウントの E メールを管理者アカウントの E メールとして、サービスアカウントの E メールをクライアント E メールとして AWS Secrets Manager シークレットに入力します。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- 管理者 SDK API と Google Drive API がアカウントに追加されました。
- スーパー管理者ロールを使用して、以下のアクセス許可をサービスアカウントに追加しました (またはスーパー管理者ロールを持つユーザーに追加を依頼しました)。
 - <https://www.googleapis.com/auth/drive.readonly>

- <https://www.googleapis.com/auth/drive.metadata.readonly>
- <https://www.googleapis.com/auth/admin.directory.user.readonly>
- <https://www.googleapis.com/auth/admin.directory.group.readonly>
- 各ドキュメントが Google Drive および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Google Drive の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Google Drive データソースを接続するときにコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Google Drive データソース Amazon Kendra に接続するには、がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Google Drive データソースの必要な詳細を指定する必要があります。用に Google Drive をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Google Drive Amazon Kendra に接続するには

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. [データソースを追加する] ページで [Google Drive コネクタ V1.0] を選択し、[コネクタを追加] を選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [認証のタイプ] の場合 - [既存] と [新規] を選択します。既存のシークレットを使用する場合は、[シークレットを選択] を使用してシークレットを選択してください。

- b. 新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットオプションが開きます。
 - [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレットネームには「AmazonKendra-Google Drive-」というプレフィックスが自動的に追加されます。
 - B. [管理者アカウントの E メール]、[クライアントの E メール]、[プライベートキー] の場合 - Google Drive アカウントから生成してダウンロードした認証情報の値を入力します。
 - C. [認証を保存] を選択します。
- c. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- d. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ユーザーアカウントを除外する] - インデックスから除外する Google Drive ユーザー。最大 100 件のユーザーアカウントを追加できます。
 - b. [共有ドライブを除外する] - インデックスから除外する Google Drive の共有ドライブ。最大 100 件の共有ドライブを追加できます。
 - c. [ファイルタイプのドライブを除外する] - インデックスから除外する Google Drive のファイルタイプ。MIME タイプの選択を編集することもできます。
 - d. [追加設定] の場合: 特定のコンテンツを含めるか除外する正規表現パターンを指定します。最大 100 のパターンを追加できます。
 - e. [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
 - f. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. GoogleDrive フィールド名とその他の推奨フィールドマッピングの場合 - インデックスにマッピングする Amazon Kendra、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Google Drive Amazon Kendra に接続するには

[GoogleDriveConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Google Drive アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientAccount": "service account email",
  "adminAccount": "user account email",
  "privateKey": "private key"
}
```

- IAM role - を呼び出し CreateDataSource で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Google Drive コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Google Drive data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- 包含フィルターと除外フィルター - デフォルトでは、Amazon Kendra は Google Drive 内のすべてのドキュメントのインデックスを作成します。共有ドライブ、ユーザーアカウント、ドキュメント MIME タイプ、ファイルに特定のコンテンツを含めるか除外するかを指定できます。ユーザーアカウントを除外すると、そのアカウントが所有する My Drive 内のファイルには

インデックスが作成されません。ユーザーと共有されているファイルは、ファイルの所有者も除外されない限り、インデックスが作成されます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、Google Drive データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります `_document_body`。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合、はドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

詳細

Amazon Kendra と Google Drive データソースとの統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra Google Drive コネクタの開始方法](#)

Google Drive コネクタ V2.0

Google Drive はクラウドベースのファイルストレージサービスです。を使用して Amazon Kendra、Google Drive データソースの共有ドライブ、My Drives、および Shared with me フォルダに保存されているドキュメントとコメントのインデックスを作成できます。Google Workspace のドキュメントと、[ドキュメントのタイプ](#)に記載されているドキュメントにインデックスを作成できます。包含フィルターと除外フィルターを使用して、ファイル名、ファイルタイプ、ファイルパスでコンテンツにインデックスを作成することもできます。

Note

Google Drive コネクタ V1.0 / Google DriveConfiguration API は 2023 年に終了しました。Google Drive コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Google Drive データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Google Drive データソースのインデックスを作成する前に、Google Drive と AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

Google Drive で以下を確認してください。

- スーパー管理者ロールからアクセスを許可されているか、管理者権限を持つユーザーであるかのどちらかです。スーパー管理者ロールからアクセス許可を付与されている場合は、スーパー管理者ロールは必要ありません。
- 管理者アカウントの E メール、クライアントの E メール (サービスアカウントの E メール)、シークレットキーを含む Google Drive サービスアカウントの接続認証情報を設定しました。[サービスアカウントキーの作成と削除については、Google Cloud のドキュメント](#)を参照してください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- サーバー間認証で [G Suite ドメイン全体の委任を有効にする] を有効化して Google Cloud サービスアカウント (ユーザー ID を引き継ぐ権限が委任されたアカウント) を作成し、そのアカウントを使用して JSON プライベートキーを生成しました。

Note

シークレットキーは、サービスアカウントの作成後に生成する必要があります。

- ユーザーアカウントに管理 SDK API と Google Drive API が追加されました。
- オプション: クライアント ID、クライアントシークレット、更新トークンを含む Google Drive OAuth 2.0 接続認証情報を特定のユーザーの接続認証情報として設定しました。これは個々のアカウントデータをクロールするのに必要です。[OAuth 2.0 を使用して API にアクセスする方法については、Google のドキュメント](#)を参照してください。
- スーパー管理者ロールを使用して、以下の OAuth スコープをサービスアカウントに追加しました (またはスーパー管理者ロールを持つユーザーに追加を依頼しました)。これらの API スコープは、Google Workspace ドメイン内のすべてのドキュメントとアクセスコントロール (ACL) 情報をクロールするために必要です。

- <https://www.googleapis.com/auth/drive.readonly> - Google Drive のファイルをすべて表示してダウンロードします
- <https://www.googleapis.com/auth/drive.metadata.readonly> - Google Drive 内のファイルのメタデータを表示します。
- <https://www.googleapis.com/auth/admin.directory.group.readonly> - スコープは、グループ、グループエイリアス、およびメンバー情報のみを取得するためのものです。これは Amazon Kendra ID クローラーに必要です。
- <https://www.googleapis.com/auth/admin.directory.user.readonly> - スコープは、ユーザーまたはユーザーエイリアスのみを取得するためのものです。これは、Amazon Kendra ID クローラーにユーザーを一覧表示し、ACLs を設定するために必要です。
- <https://www.googleapis.com/auth/cloud-platform> - スコープは、大きな Google Drive ファイルのコンテンツを取得するためのアクセストークンを生成するためのものです。
- <https://www.googleapis.com/auth/forms.body.readonly> - スコープは、Google フォームからデータを取得するためのものです。

Forms API をサポートするには、以下のスコープを追加してください。

- <https://www.googleapis.com/auth/forms.body.readonly>
- 各ドキュメントが Google Drive および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Google Drive の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Google Drive データソースを接続するときにコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Google Drive データソース Amazon Kendra に接続するには、[Google Drive データソース](#) Amazon Kendra にアクセスできるように、Google Drive データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Google Drive をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Google Drive Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Google Drive コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Google Drive コネクタを選択します。

5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - b. [認証] 用 - ユースケースに基づいて [Google サービスアカウント] と [OAuth 2.0 認証] のいずれかを選択します。
 - c. AWS Secrets Manager secret - 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Google Drive 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. Google サービスアカウントを選択した場合は、シークレットの名前、サービスアカウント設定の管理者ユーザーの E メール ID または「サービスアカウントユーザー」(管理者 E メール)、サービスアカウントの E メール ID (クライアント E メール)、およびサービスアカウントで作成したプライベートキーを入力します。

シークレットを保存して追加する
 - ii. OAuth 2.0 認証を選択した場合は、OAuth アカウントで作成したシークレット、クライアント ID、クライアントシークレット、および更新トークンの名前を入力します。ユーザーメール ID (接続の詳細が設定されたユーザー) は ACL として設定されます。API の制限により、コネクタは他のユーザー/グループのプリンシパル情報を ACL として設定しません。

シークレットを保存して追加します。

- d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- e. (Google サービスアカウント認証ユーザーのみ)

ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

- f. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- g. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. 同期コンテンツ - クロールするオプションまたはコンテンツを選択します。マイドライブ (個人用フォルダ)、共有ドライブ (共有フォルダ)、またはその両方をクロールできます。ファイルコメントを含めることもできます。
 - b. 追加設定 - オプション 次のオプション情報を入力することもできます。
 - i. 最大ファイルサイズ - クロールするファイルの最大サイズ制限を MBs 単位で設定します。
 - ii. ユーザー E メール - 含める、または除外するユーザー E メールを追加します。
 - iii. 共有ドライブ - 含める、または除外する共有ドライブ名を追加します。

- iv. MIME タイプ - 含めたり除外したりする MIME タイプを追加します。
- v. エンティティ正規表現パターン - 正規表現パターンを追加して、サポートされているすべてのエンティティの特定のアタッチメントを含めるか除外します。最大 100 のパターンを追加できます。

ファイル名、ファイルタイプ、ファイルパスの正規表現パターンを含める/除外を設定できます。

- ファイル名 - 含めるか除外するファイルの名前。たとえば、 という名前のファイルのインデックスを作成するには `teamroster.txt`、 を指定します `teamroster`。
 - ファイルタイプ - 含めるか除外するファイルのタイプ。例えば、 `.pdf` `.txt` `.docx` などです。
 - ファイルパス - 含めるか除外するファイルのパス。たとえば、ドライブ `Products list` のフォルダ内のファイルのみをインデックス化するには、 を指定します `/Products list`。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新しい変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

 Important

Google Drive API は、完全に削除されたファイルからのコメントの取得をサポートしていません。ゴミ箱に捨てられたファイルからのコメントは取得可能です。ファイルが廃棄されると、コネクタは Amazon Kendra インデックスからコメントを削除します。

- d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. 同期実行履歴で、データソースを同期 Amazon S3 するときに、自動生成されたレポートを に保存することを選択します。これは、データソースをサイクリングするときの問題を追跡するのに役立ちます。
 - f. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. ファイル - インデックスにマッピングする、Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。

 Note

Google Drive API はカスタムフィールドの作成をサポートしていません。Google Drive コネクタではカスタムフィールドマッピングは使用できません。

- b. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Google Drive Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマGOOGLEDRIVEV2を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- 認証タイプ - サービスアカウント認証と OAuth 2.0 認証のどちらを使用するかを指定します。
- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。

 Important

Google Drive API は、完全に削除されたファイルからのコメントの取得をサポートしていません。ゴミ箱に捨てられたファイルからのコメントは取得可能です。ファイルがゴミ箱に捨てられると、コネクタは Amazon Kendra インデックスからコメントを削除します。

- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Google Drive アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。Google サービスアカウント認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientEmail": "user account email",
  "adminAccountEmail": "service account email",
  "privateKey": "private key"
```



```
}
```

OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "clientId": "OAuth client ID",  
  "clientSecret": "client secret",  
  "refreshToken": "refresh token"  
}
```

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Google Drive コネクタとに必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Google Drive data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- マイドライブ、共有ドライブ、コメント - これらのタイプのコンテンツをクロールするかどうかを指定できます。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のユーザーアカウント、共有ドライブ、MIME タイプを含めるか除外するかを指定できます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- アクセスコントロールリスト (ACL) - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクロールするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループの

ドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

- ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Google Drive データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Google Drive template schema](#)」を参照してください。

メモ

- Google Drive UI はカスタムフィールドの作成をサポートしていないため、Google Drive コネクタではカスタムフィールドマッピングを使用できません。
- Google Drive API は、完全に削除されたファイルからのコメントの取得をサポートしていません。ただし、ゴミ箱に捨てられたファイルのコメントは取得できます。ファイルがゴミ箱に捨てられると、Amazon Kendra コネクタは Amazon Kendra インデックスからコメントを削除します。
- Google Drive API は .docx ファイルにあるコメントを返しません。
- 特定の Google document (ドキュメント、スプレッドシート、スライドなど) のアクセス許可が一般アクセスに設定されている場合: リンクを持つユーザー、または特定の企業ドメインに共有され

ているユーザーは、クエリを行うユーザーがドキュメントにアクセスするまで、そのドキュメントは Amazon Kendra 検索ユーザーに表示されません。

IBM DB2

Note

IBM DB2 コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

IBM DB2 は、IBM によって開発されたリレーショナルデータベース管理システムです。IBM DB2 ユーザーであれば、Amazon Kendra を使用して IBM DB2 データソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra IBM DB2 DB2 11.5.7 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して IBM DB2 データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra IBM DB2 トラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング

- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して IBM DB2 データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、IBM DB2 および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

IBM DB2 で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが IBM DB2 および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- IBM DB2 の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、IBM DB2データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

IBM DB2 データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、IBM DB2認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、IBM DB2 Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには IBM DB2

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、IBM DB2コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたIBM DB2コネクタを選択します。

5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
 - c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、IBM DB2新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-IBM DB2-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
 - g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
 - b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
 - 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。

- タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには IBM DB2

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを db2 として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — IBM DB2 アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。


```
{  
  "user name": "database user name",  
  "password": "password"  
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で、シー Secrets Manager クレジットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、IBM DB2コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for IBM DB2 data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、IBM DB2 データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[IBM DB2 テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Jira

Jira はソフトウェア開発、製品管理、バグ追跡のためのプロジェクト管理ツールです。Amazon Kendra を使用して、Jira プロジェクト、問題、コメント、添付ファイル、作業ログ、ステータスのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra 現在、 は Jira Cloud のみをサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)または [JiraConfiguration API を使用して Jira](#) データソース Amazon Kendra に接続できます。それぞれがサポートしている機能のリストについては、「[サポートされている機能](#)」を参照してください。

Amazon Kendra Jira データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Jira データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Jira データソースのインデックスを作成する前に、Jira および AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

Jira で以下を確認してください。

- Jira ID (ユーザー名または E メール) と Jira 認証情報 (Jira API トークン) を含む API トークンの認証情報を設定しました。「[API トークンの管理に関する Atlassian のドキュメント](#)」を参照してください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- Jira アカウント設定の Jira アカウント URL を記録した。例えば、<https://company.atlassian.net/>。
- 各ドキュメントが Jira および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Jira の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Jira データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Jira データソース Amazon Kendra に接続するには、[Jira データソース](#) Amazon Kendra にアクセスできるように、Jira データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Jira をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、[「 」](#)を参照してください[前提条件](#)。

Console

Jira Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで Jira コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Jira コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。

- a. Jira アカウント URL - Jira アカウント URL を入力します。例えば、<https://company.atlassian.net/>。
- b. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- c. AWS Secrets Manager secret - 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Jira 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。プレフィックス「AmazonKendra-Jira-」がシークレット名に自動的に追加されます。
 - B. [Jira ID] の場合 - Jira のユーザー名または E メールアドレスを入力します。
 - C. パスワード/トークン - Jira で設定された Jira API トークンを入力します。
 - ii. シークレットを保存して追加します。
- d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- e. ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーとグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- f. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- g. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. インデックスを作成する Jira プロジェクトを選択する - すべてのプロジェクトまたは特定のプロジェクトをクロールすることを選択します。
 - b. 追加設定 - 特定のステータスと問題タイプを指定します。コメント、添付ファイル、作業ログをクロールするには、 を選択します。正規表現パターンを使用して、特定のコンテンツを含めるか除外します。
 - c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新しい変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
 8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. デフォルトのデータソースフィールド - インデックスにマッピングする Amazon Kendra、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Jira Amazon Kendra に接続するには

[JiraConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- データソース URL - Jira アカウントの URL を指定します。例えば、*company.atlassian.net*。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Jira アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "jiraId": "Jira user name or email",
  "jiraCredential": "Jira API token"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Jira コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Jira data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - データソース設定の一部として `VpcConfiguration` を指定します。「[VPC を使用するための Amazon Kendra の設定](#)」を参照してください。
- 変更ログ — Amazon Kendra が Jira データソース変更ログメカニズムを使用して、インデックスでドキュメントを更新する必要があるかどうかを判断する必要があるかどうか。

Note

Amazon Kendra にすべてのドキュメントをスキャンさせない場合は、変更ログを使用します。変更ログが大きい場合、変更ログを処理するよりも Jira データソース内のドキュメントのスキャンにかかる時間が Amazon Kendra 短くなることがあります。Jira データソースをインデックスに初めて同期する場合は、すべてのドキュメントがスキャンされます。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルを含めるか除外するかを指定できます。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- コメント、添付ファイル、作業ログ — 特定のコメント、添付ファイル、作業ログの問題をクローリングかどうかを指定できます。
- プロジェクト、問題、ステータス — 特定のプロジェクト IDs、問題タイプ、ステータスをクローリングかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合、はドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクローリングします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Jira データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメ

ント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。
_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

詳細

Amazon Kendra と Jira データソースとの統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Jira Cloud コネクタを使用して Amazon Kendra Jira プロジェクトをインテリジェントに検索する](#)

Microsoft Exchange

Microsoft Exchange は、メッセージング、会議、ファイル共有のためのエンタープライズコラボレーションツールです。Microsoft Exchange ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Microsoft Exchange データソースのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して、Microsoft Exchange データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Microsoft Exchange データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Microsoft Exchange データソースのインデックスを作成する前に、Microsoft Exchange と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Microsoft Exchange で以下を確認してください。

- Office 365 で Microsoft Exchange アカウントを作成しました。

- Microsoft 365 のテナント ID を記録しました。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- Azure ポータルで OAuth アプリケーションを設定し、クライアント ID とクライアントシークレットまたはクライアント認証情報を記録しました。詳細については、[Microsoft チュートリアルと登録済みアプリケーションの例](#)を参照してください。

Note

Azure ポータルでアプリを作成または登録すると、シークレット ID は実際のシークレット値を表します。シークレットとアプリを作成するときは、すぐに実際のシークレット値を書き留めるか保存する必要があります。Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、証明書とシークレットのメニューオプションに移動することで、シークレットにアクセスできます。

クライアント ID にアクセスするには、Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、概要ページに移動します。アプリケーション (クライアント) ID はクライアント ID です。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

- コネクタアプリケーションに次のアクセス許可を追加しました。

Microsoft Graph	Office 365 Exchange Online
• Mail.Read (アプリケーション) • Mail.ReadBasic (アプリケーション) • Mail.ReadBasic.All (アプリケーション) • Calendars.Read (アプリケーション) • User.Read.All (アプリケーション) • Contacts.Read (アプリケーション)	• full_access_as_app (アプリケーション)

Microsoft Graph

Office 365 Exchange Online

- Notes.Read.All (アプリケーション)
 - Directory.Read.All (アプリケーション)
 - EWS.AccessAsUser.All (委任)
- 各ドキュメントが Microsoft Exchange および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Microsoft Exchange の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、コンソールを使用して、Microsoft Exchange データソースを接続するときに新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます

Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Microsoft Exchange データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra](#) にアクセスできるように、Microsoft Exchange データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Microsoft Exchange をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Microsoft Exchange Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Microsoft Exchange コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Microsoft Exchange コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。

6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. テナント ID — Microsoft 365 テナント ID を入力します。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
 - b. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - c. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Microsoft Exchange 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。プレフィックス 'AmazonKendra-Microsoft Exchange
 - B. クライアント ID、クライアントシークレット - Microsoft Exchange で設定された認証情報を Azure ポータルに入力します。
 - ii. シークレットを保存して追加します。
 - d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - e. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- f. [次へ] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

- a. ユーザー IDs - 特定の E メールでコンテンツをフィルタリングする場合は、ユーザー E メールを指定します。
- b. 追加設定 — クロールするコンテンツのタイプを指定します。
 - エンティティタイプ — カレンダー、OneNotes、または連絡先のコンテンツをクロールできます。
 - カレンダークロール — 開始日と終了日を入力して、特定の日付間でコンテンツをクロールします。
 - E メールを含める — クロールする特定の E メールをフィルタリングするには、「to」、「from」、および Eメールの件名を入力します。
 - 共有フォルダアクセス — 選択すると、Microsoft Exchange データソースのアクセスコントロールのアクセスコントロールリストのクロールが有効になります。
 - ドメインの正規表現 — 特定の E メールドメインを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。
 - [正規表現パターン] - 特定のファイルを含めるまたは除外する正規表現パターンを追加します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。

- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。

 Note

Amazon Kendra Microsoft Exchange データソースコネクタは、カスタムフィールドマッピングをサポートしていません。

- b. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Microsoft Exchange Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ MSEXCHANGE を使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- テナント ID - テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニ

ズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

- `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Microsoft Exchange アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "client secret"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で、シークレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Microsoft Exchange コネクタと必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Microsoft Exchange data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のコンテンツを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- アクセスコントロールリスト (ACL) — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントの ACL 情報をクロールするかどうかを指定します。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Microsoft Exchange データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Microsoft Exchange テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

詳細はこちら

Microsoft Exchange データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra の Exchange コネクタを使用して Microsoft Exchange コンテンツのインデックスを作成する](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期 ACLs を無効にすることをお勧めします。

Microsoft OneDrive

Microsoft OneDrive は、コンテンツの保存、共有、およびホストに使用できるクラウドベースのストレージサービスです。Amazon Kendra を使用して OneDrive データソースのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と OneDrive [OneDriveConfiguration](#) データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra には OneDrive コネクタの 2 つのバージョンがあります。各バージョンでサポートされる機能は次のとおりです。

Microsoft OneDrive コネクタ V1.0/[OneDriveConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- 包含/除外フィルター

Microsoft OneDrive コネクタ V2.0/[TemplateConfiguration](#) API

- ユーザーコンテキストフィルタリング
- ユーザー ID クローラ
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

Note

OneDrive コネクタ V1.0/OneDriveConfiguration API のサポートは、2023 年 6 月までに終了する予定です。OneDrive コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API を使用することをお勧めします。

Amazon Kendra OneDrive データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [Microsoft OneDrive コネクタ V1.0](#)
- [Microsoft OneDrive コネクタ V2.0](#)
- [詳細はこちら](#)
- [メモ](#)

Microsoft OneDrive コネクタ V1.0

Microsoft OneDrive は、コンテンツの保存、共有、およびホストに使用できるクラウドベースのストレージサービスです。Amazon Kendra を使用して Microsoft OneDrive データソースのインデックスを作成できます。

Note

OneDrive コネクタ V1.0/Microsoft OneDrive API のサポートは、2023 年 6 月までに終了する予定です。OneDrive コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API を使用することをお勧めします。

Amazon Kendra OneDrive データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- 包含/除外フィルター

前提条件

Amazon Kendra を使用して OneDrive データソースのインデックスを作成する前に、OneDrive と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Azure Active Directory (AD) で、以下を確認します。

- Azure Active Directory (AD) アプリケーションを作成しました。
- AD アプリケーション ID を使用して AD サイト上のアプリケーションのシークレットキーを登録しました。シークレットキーには、アプリケーション ID とシークレットキーが含まれている必要があります。
- 組織の AD ドメインをコピーしました。
- Microsoft Graph オプションで AD アプリケーションに次のアプリケーションアクセス許可を追加しました。
 - すべてのサイトコレクション内のファイルを読み取る (File.Read.All)
 - すべてのユーザーの完全なプロフィールを読み取る (User.Read.All)
 - ディレクトリデータを読み取る (Directory.Read.All)
 - すべてのグループを読み取る (Group.Read.All)
 - すべてのサイトコレクションの項目を読み取る (Site.Read.All)
- インデックスを作成する必要があるドキュメントを持つユーザーのリストをコピーしました。ユーザー名のリストを指定するか、Amazon S3に保存されているファイルにユーザー名を指定できます。データソースを作成すると、次のことが行なえます。
 - ユーザーのリストを変更します。
 - ユーザーのリストから Amazon S3 バケットに保存されているリストに変更します。
 - ユーザーのリストの Amazon S3 バケットの場所を変更します。バケットの場所を変更する場合は、データソースの IAM ロールを更新して、バケットにアクセスできるようにする必要があります。

 Note

バケットにユーザー名のリストを保存する場合 Amazon S3 、データソースの IAM ポリシーは、バケットへのアクセスと、バケットが暗号化されたキーへのアクセスを提供する必要があります。

- 各ドキュメントが OneDrive および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- OneDrive の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、OneDrive データソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

OneDrive データソース Amazon Kendra に接続するには、[データ Amazon Kendra にアクセスできるように、OneDrive 認証情報の詳細を指定する必要があります。](#) OneDrive をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

OneDrive Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、OneDrive コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた OneDrive コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. OneDrive テナント ID - OneDrive テナント ID をプロトコルなしで入力します。
 - b. [認証のタイプ] の場合 - [新規] と [既存] を選択します。
 - c.
 - i. [既存] を選択した場合は、[シークレットを選択] で既存のシークレットを選択します。
 - ii. [新規] を選択した場合は、[新規の AWS Secrets Manager シークレット] セクションに次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-OneDrive-」が自動的に追加されます。
 - B. [アプリケーション ID] および [アプリケーションパスワード] - OneDrive アカウントの認証情報の値を入力し、[認証を保存] を選択します。
 - d. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- e. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. ユースケースに基づいて、[リストファイル] と [名前リスト] のどちらかを選択します。
 - i. [リストファイル] を選択した場合は、次の情報を入力します。
 - [場所を選択する] - Amazon S3 バケットへのパスを入力します。

ユーザーリストファイルを に追加する Amazon S3 — ユーザーリストファイルを Amazon S3 バケットに追加する場合に選択します。

[ユーザーローカルグループマッピング] - ロールグループマッピングを使用してコンテンツをフィルタリングします。
 - ii. [名前リスト] を選択した場合は、次の情報を入力します。
 - ユーザー名 - インデックスを作成するユーザードライブを最大 10 件入力します。10 件以上のユーザーを追加するには、名前を含むファイルを作成します。

[別のものを追加] - さらにユーザーを追加します。

[ユーザーローカルグループマッピング] - ロールグループマッピングを使用してコンテンツをフィルタリングします。
 - b. [追加設定] の場合 - 特定のファイルを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。
 - c. 同期実行スケジュールで、頻度 - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度を選択します。
 - d. [次へ] を選択します。
 8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. デフォルトのデータソースフィールドとその他の推奨フィールドマッピングの場合 — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

OneDrive Amazon Kendra に接続するには

[OneDriveConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- テナント ID - 組織の Azure Active Directory ドメインを指定します。
- OneDrive ユーザー - インデックスを作成する必要があるドキュメントを持つユーザーアカウントのリストを指定します。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — OneDrive アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "OAuth client ID",
  "password": "client secret"
}
```

- IAM role — を呼び出し CreateDataSource で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、OneDrive コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for OneDrive data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のドキュメントを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、OneDrive データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

Microsoft OneDrive コネクタ V2.0

Microsoft OneDrive は、コンテンツの保存、共有、およびホストに使用できるクラウドベースのストレージサービスです。Amazon Kendra を使用して OneDrive データソースのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#) と OneDrive [OneDriveConfiguration](#) データソース Amazon Kendra に接続できます。

 Note

OneDrive コネクタ V1.0/OneDriveConfiguration API のサポートは、2023 年 6 月までに終了する予定です。OneDrive コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API を使用することをお勧めします。バージョン 2.0 では、ACL と ID クローラー機能が追加されています。

Amazon Kendra OneDrive データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra OneDrive データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して OneDrive データソースのインデックスを作成する前に、OneDrive と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

OneDrive で、以下があることを確認します。

- Office 365 で OneDrive アカウントを作成しました。
- Microsoft 365 のテナント ID を記録しました。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- Azure ポータルに OAuth アプリケーションを作成し、シークレットによる認証に使用されるクライアント ID とクライアント AWS Secrets Manager シークレット、またはクライアント認証情報

を記録しました。詳細については、[Microsoft チュートリアル](#)と[登録済みアプリケーションの例](#)を参照してください。

 Note

Azure ポータルでアプリを作成または登録すると、シークレット ID は実際のシークレット値を表します。シークレットとアプリを作成するときは、すぐに実際のシークレット値を書き留めるか保存する必要があります。Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、証明書とシークレットのメニューオプションに移動することで、シークレットにアクセスできます。

クライアント ID にアクセスするには、Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、概要ページに移動します。アプリケーション (クライアント) ID はクライアント ID です。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- AD アプリケーション ID を使用して AD サイト上のアプリケーションのシークレットキーを登録しました。シークレットキーには、アプリケーション ID とシークレットキーが含まれている必要があります。
- 組織の AD ドメインをコピーしました。
- Microsoft Graph オプションで、AD アプリケーションに次アクセス許可を追加しました。
 - すべてのサイトコレクション内のファイルを読み取る (File.Read.All)
 - すべてのユーザーの完全なプロフィールを読み取る (User.Read.All)
 - すべてのグループを読み取る (Group.Read.All)
 - すべてのメモを読む (Notes.Read.All)
- インデックスを作成する必要があるドキュメントを持つユーザーのリストをコピーしました。ユーザー名のリストを指定するか、Amazon S3に保存されているファイルにユーザー名を指定できます。データソースを作成すると、次のことが行なえます。
 - ユーザーのリストを変更します。

- ユーザーのリストから Amazon S3 バケットに保存されているリストに変更します。
- ユーザーのリストの Amazon S3 バケットの場所を変更します。バケットの場所を変更する場合は、データソースの IAM ロールを更新して、バケットにアクセスできるようにする必要があります。

 Note

バケットにユーザー名のリストを保存する場合 Amazon S3、データソースの IAM ポリシーは、バケットへのアクセスと、バケットが暗号化されたキーへのアクセスを提供する必要があります。

OneDrive コネクタは、[OneDrive ユーザープロパティ]にある [連絡先情報からの E メール] を使用します。データをクロールするユーザーの [連絡先情報] ページの E メールフィールドが設定されていることを確認します。新規ユーザーの場合は、このフィールドは空白になる場合があります。

AWS アカウントで、以下があることを確認します。

- Amazon Kendra インデックスを作成し、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの IAM ロールを作成し、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。
- OneDrive の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合はシークレットの ARN を記録済み。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、OneDrive データソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

OneDrive データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、OneDrive 認証情報の詳細を指定する必要があります。OneDrive をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

OneDrive Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、OneDrive コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた OneDrive コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. OneDrive テナント ID - OneDrive テナント ID をプロトコルなしで入力します。
 - b. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

- c. [認証] - [新規] または [既存] を選択します。
- d.
 - i. [既存] を選択した場合は、[シークレットを選択] で既存のシークレットを選択します。
 - ii. [新規] を選択した場合は、[新規の AWS Secrets Manager シークレット] セクションに次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-OneDrive-」が自動的に追加されます。
 - B. クライアント ID とクライアントシークレット - クライアント ID とクライアントシークレットを入力します。
- e. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- f. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- g. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- h. [次へ] を選択します。
- 7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - 8.
 - a. [同期の範囲] の場合 - インデックスを作成するユーザーの OneDrive データを選択します。最大 10 のユーザーを手動で追加できます。

- b. [追加設定] の場合 - 特定のコンテンツを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。
 - c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [次へ] を選択します。
9. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [次へ] を選択します。
10. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

OneDrive Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ ONEDRIVEV2 を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- テナント ID - Microsoft 365 テナント ID を指定します。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — OneDrive アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。

OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "client secret"
}
```

- IAM role — を呼び出し CreateDataSource で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、OneDrive コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for OneDrive data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイル、OneNote セクション、および OneNote ページを含めるか除外するかを指定できます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング — Amazon Kendra OneDrive コネクタの組み込みインデックスフィールドまたは共通インデックスフィールドのみをマッピングできます。API の制限により、OneDrive コネクタではカスタムフィールドマッピングは使用できません。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[OneDrive テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

詳細はこちら

OneDrive データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra用の更新された Microsoft OneDrive コネクタ \(V2\) を発表します。](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。OneDrive 代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。

Microsoft SharePoint

SharePoint は、ウェブコンテンツをカスタマイズしたり、ページ、サイト、ドキュメントライブラリ、リストを作成したりできる、コラボレーション用ウェブサイト構築サービスです。Amazon Kendra を使用して SharePoint データソースのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra は現在、SharePoint Online と SharePoint Server (バージョン 2013、2016、2019、サブスクリプションエディション) をサポートしています。

コンソール、[TemplateConfiguration](#) API [Amazon Kendra](#)、または [SharePointConfiguration](#) API を使用して、SharePoint データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra には SharePoint コネクタの 2 つのバージョンがあります。各バージョンでサポートされる機能は次のとおりです。

SharePoint Connector V1.0/[SharePointConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 変更ログ
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

SharePoint Connector V2.0 / [TemplateConfiguration](#) API

- フィールドマッピング

- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

 Note

SharePoint コネクタ V1.0 / SharePointConfiguration API は 2023 年に終了しました。SharePoint コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra SharePoint データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [SharePoint コネクタ V1.0](#)
- [SharePoint コネクタ V2.0](#)

SharePoint コネクタ V1.0

SharePoint は、ウェブコンテンツをカスタマイズしたり、ページ、サイト、ドキュメントライブラリ、リストを作成したりできる、コラボレーション用ウェブサイト構築サービスです。SharePoint ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して SharePoint データソースのインデックスを作成できます。

 Note

SharePoint コネクタ V1.0 / SharePointConfiguration API は 2023 年に終了しました。SharePoint コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra SharePoint データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 変更ログ
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して SharePoint データソースのインデックスを作成する前に、SharePoint と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

シー AWS Secrets Manager クレットに安全に保存されている認証情報を指定する必要があります。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

SharePoint では、次のものがあることを確認してください。

- インデックスを作成する SharePoint サイトの URL を記録しました。
- SharePoint オンラインの場合:
 - サイト管理者権限を持つユーザー名とパスワードを含む基本認証資格情報を記録しました。
 - オプション: ユーザー名、パスワード、クライアント ID、クライアントシークレットを含む OAuth 2.0 認証情報を生成しました。

- 管理者ユーザーを使用して Azure Portal の [セキュリティデフォルト] を無効にしました。Azure Portal でのセキュリティのデフォルト設定の管理の詳細については、[セキュリティのデフォルトを有効または無効にする方法に関する Microsoft のドキュメント](#)を参照してください。
- SharePoint Server の場合:
 - SharePoint Server のドメイン名 (アクティブディレクトリの NetBIOS 名) を記録しました。これを SharePoint 基本認証のユーザー名とパスワードとともに使用して、SharePoint Server を Amazon Kendraに接続します。

Note

SharePoint Server を使用し、ユーザーコンテキストでフィルタリングするためにアクセスコントロールリスト (ACL) を E メール形式に変換する必要がある場合は、LDAP サーバーの URL と LDAP 検索ベースを指定します。または、ディレクトリドメインの上書きを使用することもできます。LDAP サーバーの URL は、完全なドメイン名およびポート番号 (例えば、`ldap://example.com:389`) です。LDAP 検索ベースは、ドメインコントローラの「example」と「com」です。ディレクトリドメインの上書きでは、LDAP サーバーの URL と LDAP 検索ベースを使用する代わりに、E メールドメインを使用できます。例えば、「`username@example.com`」の E メールドメインは「example.com」です。この上書きは、ドメインの検証について心配がなく、単に E メールドメインを使用する場合に使用できます。

- SharePoint アカウントに次のアクセス許可を追加しました。

SharePoint リストの場合

- アイテムを開く - サーバー側のファイルハンドラを使用してドキュメントのソースを表示します。
- アプリケーションページの表示 - フォーム、ビュー、およびアプリケーションページを表示します。リストを一覧表示します。
- アイテムの表示 - リスト内のアイテムとドキュメントライブラリ内のドキュメントを表示します。
- バージョンの表示 - リスト項目またはドキュメントの過去のバージョンを表示します。

SharePoint ウェブサイトの場合

- ディレクトリの参照 - SharePoint Designer および Web DAV インターフェイスを使用してウェブサイトのファイルとフォルダを一覧表示します。
- ユーザー情報の参照 - ウェブサイトのユーザーに関する情報を表示します。

- アクセス許可の一覧表示 - ウェブサイト、リスト、フォルダ、ドキュメント、またはリスト項目に対する許可を一覧表示します。
- 開く - ウェブサイト、リスト、またはフォルダを開き、コンテナ内のアイテムにアクセスします。
- クライアント統合機能の使用 - SOAP、WebDAV、クライアントオブジェクトモデル、または SharePoint Designer インターフェイスを使用してウェブサイトアクセスします。
- リモートインターフェイスの使用 - クライアントアプリケーションを起動する機能を使用します。
- ページの表示 - ウェブサイトのページを表示します。
- 各ドキュメントが SharePoint および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認します。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- SharePoint の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、SharePoint データソースを接続するときにコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

SharePoint データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータにアクセスできるように Amazon Kendra、SharePoint 認証情報の詳細を指定する必要があります。SharePoint をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

SharePoint Amazon Kendra に接続するには

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. [データソースを追加] ページで、[SharePoint connector v1.0] を選択し、[データソースを追加] を選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。

6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ホスティング方法] の場合 - [SharePoint Online] と [SharePoint Server] のどちらかを選択します。
 - i. [SharePoint Online] の場合 - SharePoint リポジトリ固有のサイト URL を入力します。
 - ii. SharePoint Server の場合 - SharePoint バージョンを選択し、SharePoint リポジトリに固有のサイト URLs を入力し、SSL 証明書の場所への Amazon S3 パスを入力します。
 - b. (SharePoint Server のみ) [Web プロキシ] の場合 - 内部 SharePoint インスタンスの [ホスト名] と [ポート番号] を入力します。ポート番号は 0～65535 の数字である必要があります。
 - c. [認証] の場合 - ユースケースに基づいて以下のオプションから選択してください。
 - i. SharePoint Online の場合:[基本認証] と [OAuth 2.0 認証] のどちらかを選択します。
 - ii. SharePoint Server の場合 - [なし]、[LDAP]、[手動] のいずれかを選択します。
 - d. AWS Secrets Manager シークレットの場合 — 既存のシークレットを選択するか、SharePoint 認証情報を保存する新しい Secrets Manager シークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。[シークレット名] を入力する必要があります。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-SharePoint-」が自動的に追加されます。
 - e. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次のその他の情報を入力します。
 - i. ユースケースに基づいて、次の SharePoint Cloud 認証オプションから選択してください。
 - A. [基本認証] - SharePoint アカウントのユーザー名を [ユーザー名] に、SharePoint アカウントのパスワードを [パスワード] に入力します。
 - B. [OAuth 2.0 認証] - SharePoint アカウントのユーザー名を [ユーザー名] に、SharePoint アカウントのパスワードを [パスワード] に、自動生成された一意の SharePoint ID を [クライアント ID] として、SharePoint と Amazon Kendra の両方で [クライアントシークレット] として使用される共有シークレット文字列を入力します。
 - ii. ユースケースに基づいて、次の SharePoint Server 認証オプションから選択してください。

- A. [なし] - SharePoint アカウントのユーザー名を [ユーザー名] に、SharePoint アカウントのパスワードを [パスワード] に入力し、[サーバーのドメイン名] を入力します。
 - B. [LDAP] - SharePoint アカウントのユーザー名を [ユーザー名] に、SharePoint アカウントのパスワードを [パスワード] に入力し、[LDAP サーバーエンドポイント] (プロトコルとポート番号を含む。例えば、*ldap://example.com:389*)、[LDAP 検索ベース] (例えば、*dc=example, dc=com*) を入力します。
 - C. [手動] - SharePoint アカウントのユーザー名を [ユーザー名] に、SharePoint アカウントのパスワードを [パスワード] に入力し、[E メールドメインの上書き] (ディレクトリユーザーまたはグループの E メールドメイン) を入力します。
- iii. [保存] を選択します。
- f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - [サブネット] と [VPC セキュリティグループ] も追加する必要があります。

 Note

SharePoint Server を使用する場合は、VPC を使用する必要があります。
Amazon VPC は他の SharePoint バージョンではオプションです。

- g. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。
インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- h. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [変更ログを使用] - 選択すると、すべてのファイルを同期する代わりにインデックスを更新できます。
 - b. [添付ファイルをクロール] - 選択すると添付ファイルがクロールされます。

- c. [ローカルグループマッピングを使用] - 選択すると、ドキュメントが適切にフィルター処理されます。
 - d. [追加設定] - 特定のファイルを含めるか除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。
 - e. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
 - f. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra デフォルトフィールドマッピング — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトデータソースフィールドから選択します。
 - b. [カスタムフィールドマッピング] の場合 - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

SharePoint Amazon Kendra に接続するには

[SharePointConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- SharePoint バージョン - SharePoint を構成するときに使用する SharePoint バージョンを指定します。これは、SharePoint Server 2013、SharePoint Server 2016、SharePoint Server 2019、または SharePoint Online のどれを使用しても当てはまります。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — SharePoint アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは JSON 構造に保存されます。

SharePoint Online 基本認証の場合、シークレットに含める必要がある最小の JSON 構造は次のとおりです。

```
{
  "userName": "user name",
  "password": "password"
}
```

```
}
```

SharePoint Online OAuth 2.0 認証の場合、シークレットに含める必要がある最小の JSON 構造は次のとおりです。

```
{
  "userName": "SharePoint account user name",
  "password": "SharePoint account password",
  "clientId": "SharePoint auto-generated unique client id",
  "clientSecret": "secret string shared by Amazon Kendra and SharePoint to
  authorize communications"
}
```

SharePoint Server 基本認証の場合、シークレットに含める必要がある最小の JSON 構造は次のとおりです。

```
{
  "userName": "user name",
  "password": "password",
  "domain": "server domain name"
}
```

SharePoint Server の LDAP 認証の場合 (ユーザーコンテキストでフィルタリングするためにアクセスコントロールリスト (ACL) を E メール形式に変換する必要がある場合は、シークレットに LDAP サーバーの URL と LDAP 検索ベースを含めることができます)、シークレットに含める必要がある最小の JSON 構造は次のとおりです。

```
{
  "userName": "user name",
  "password": "password",
  "domain": "server domain name"
  "ldapServerUrl": "ldap://example.com:389",
  "ldapSearchBase": "dc=example,dc=com"
}
```

SharePoint Server 手動認証の場合、シークレットに含める必要がある最小の JSON 構造は次のとおりです。

```
{
  "userName": "user name",
```

```
"password": "password",  
"domain": "server domain name",  
"emailDomainOverride": "example.com"  
}
```

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、SharePoint コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for SharePoint data sources](#)」を参照してください。
- Amazon VPC - SharePoint Server を使用する場合は、データソース構成の一部として VpcConfiguration を指定してください。「[VPC を使用する Amazon Kendra ように を設定する](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- ウェブプロキシ - ウェブプロキシ経由で SharePoint サイトの URL に接続するかどうか。このオプションは SharePoint Server でのみ使用できます。
- インデックス作成リスト — が添付ファイルの内容を SharePoint リスト項目にインデックス Amazon Kendra 作成するかどうか。
- 変更ログ — Amazon Kendra が SharePoint データソース変更ログメカニズムを使用して、インデックスでドキュメントを更新する必要があるかどうかを判断するかどうか。

 Note

Amazon Kendra にすべてのドキュメントをスキャンさせない場合は、変更ログを使用します。変更ログが大きい場合、SharePoint データソース内のドキュメントのスキャンには、変更ログの処理よりも Amazon Kendra 時間がかかる場合があります。SharePoint データソースをインデックスに初めて同期する場合は、すべてのドキュメントがスキャンされます。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のコンテンツを含めるか除外するかを指定できます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定

した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、SharePoint データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

詳細はこちら

SharePoint データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra SharePoint Online コネクタの開始方法](#)

SharePoint コネクタ V2.0

SharePoint は、ウェブコンテンツをカスタマイズしたり、ページ、サイト、ドキュメントライブラリ、リストを作成したりできる、コラボレーション用ウェブサイト構築サービスです。Amazon Kendra を使用して SharePoint データソースのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra は現在、SharePoint Online と SharePoint Server (2013、2016、2019、サブスクリプションエディション) をサポートしています。

Note

SharePoint コネクタ V1.0 / SharePointConfiguration API は 2023 年に終了しました。SharePoint コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra SharePoint データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra SharePoint データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して SharePoint データソースのインデックスを作成する前に、SharePoint と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

シー AWS Secrets Manager クレットに安全に保存されている認証情報を指定する必要があります。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレット

を、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

SharePoint Online では、次のものがあることを確認してください。

- SharePoint インスタンスの URL をコピーしました。入力したホスト URL の形式は <https://yourdomain.com/sites/mysite> です。URL は https で始まる必要があります。
- SharePoint インスタンス URL のドメイン名をコピーしました。
- SharePoint Online に接続するためのサイト管理者権限を持つユーザー名とパスワードを含む基本認証資格情報を記録しました。
- 管理者ユーザーを使用して Azure Portal の [セキュリティデフォルト] を無効にした。Azure Portal でのセキュリティのデフォルト設定の管理の詳細については、[セキュリティのデフォルトを有効または無効にする方法に関する Microsoft のドキュメント](#)を参照してください。
- SharePoint アカウントの多要素認証 (MFA) を非アクティブ化し、Amazon Kendra が SharePoint コンテンツのクロールをブロックしないようにします。
- 基本認証以外の認証タイプを使用している場合: SharePoint インスタンスのテナント ID をコピーしました。テナント ID を確認する方法の詳細については、「[Find your Microsoft 365 tenant ID](#)」を参照してください。
- Microsoft Entra を使用してクラウドユーザー認証に移行する必要がある場合は、[クラウド認証に関する Microsoft のドキュメント](#)を参照してください。
- OAuth 2.0 認証および OAuth 2.0 更新トークン認証の場合: SharePoint Online への接続に使用するユーザー名とパスワードと、SharePoint を Azure AD に登録した後に生成されたクライアント ID とクライアントシークレットを含む基本的な認証情報を記録しました。
- ACL を使用していない場合は、次のアクセス許可が追加されました。

Microsoft Graph	SharePoint
• Notes.Read.All (アプリケーション) - OneNote ノートブックをすべて読み込む • Sites.Read.All (アプリケーション) - すべてのサイトコレクションの項目を読み取る	• AllSites.Read (委任) - すべてのサイトコレクションの項目を読み取る

Note

Note.Read.All と Site.Read.All は OneNote ドキュメントをクローलする場合のみ必要です。

特定のサイトをクローलする場合、アクセス許可は、ドメインで利用可能なすべてのサイトではなく、特定のサイトに制限できます。Site.Selected (アプリケーション) アクセス許可を設定します。この API アクセス許可では、Microsoft Graph API を使用してすべてのサイトにアクセス許可を明示的に設定する必要があります。詳細については、[Sites.Selected アクセス許可に関する Microsoft のブログ](#)を参照してください。

- ACL を使用している場合は、次のアクセス許可を追加した。

Microsoft Graph	SharePoint
• Group.Member.Read.All (アプリケーション) - すべてのグループメンバーシップを読み取る • Notes.Read.All (アプリケーション) - OneNote ノートブックをすべて読み込む • Sites.FullControl.All (委任) — ドキュメントの ACLs を取得するために必要です • Sites.Read.All (アプリケーション) - すべてのサイトコレクションの項目を読み取る • User.Read.All (アプリケーション) - すべてのユーザーの完全なプロフィールを読み取る	• AllSites.Read (委任) - すべてのサイトコレクションの項目を読み取る

Note

GroupMember.read.all と User.Read.All は [ID クローラー] がアクティブ化されている場合にのみ必要です。

特定のサイトをクローलする場合、アクセス許可は、ドメインで利用可能なすべてのサイトではなく、特定のサイトに制限できます。Site.Selected (アプリケーション) アクセス許可を設定します。この API アクセス許可では、Microsoft Graph API を使用し

てすべてのサイトにアクセス許可を明示的に設定する必要があります。詳細については、[Sites.Selected アクセス許可に関する Microsoft のブログ](#)を参照してください。

- Azure AD アプリ専用認証の場合： Azure AD に SharePoint を登録した後に生成したプライベートキーとクライアント ID。また、X.509 証明書にも注意してください。
- ACL を使用していない場合は、次のアクセス許可が追加されました。

SharePoint

- Sites.Read.All (アプリケーション) — すべてのサイトコレクションの項目とリストにアクセスするために必要です

Note

特定のサイトをクローलする場合、アクセス許可は、ドメインで利用可能なすべてのサイトではなく、特定のサイトに制限できます。Sites.Selected (Application) アクセス許可を設定します。この API アクセス許可では、Microsoft Graph API を使用してすべてのサイトにアクセス許可を明示的に設定する必要があります。詳細については、[Sites.Selected アクセス許可に関する Microsoft のブログ](#)を参照してください。

- ACL を使用している場合は、次のアクセス許可を追加した。

SharePoint

- Sites.FullControl.All (アプリケーション) — ドキュメントの ACLs を取得するために必要です

Note

特定のサイトをクローलする場合、アクセス許可は、ドメインで利用可能なすべてのサイトではなく、特定のサイトに制限できます。Site.Selected (アプリケーション) アクセス許可を設定します。この API アクセス許可では、Microsoft Graph API を使用し

てすべてのサイトにアクセス許可を明示的に設定する必要があります。詳細については、[Sites.Selected アクセス許可に関する Microsoft のブログ](#)を参照してください。

- SharePoint アプリ専用認証の場合: SharePoint アプリのみに権限を付与する際に生成された SharePoint クライアント ID とクライアントシークレット、および SharePoint アプリを Azure AD に登録したときに生成されたクライアント ID とクライアントシークレットを記録しました。

Note

SharePoint アプリ専用認証は、SharePoint 2013 バージョンではサポートされていません。

- (オプション) OneNote ドキュメントをクロールしていて [ID クローラー] を使用している場合、次のアクセス許可が追加されました。

Microsoft Graph

- GroupMember.Read.All (アプリケーション) - すべてのグループメンバーシップを読み取る
- Notes.Read.All (アプリケーション) - OneNote ノートブックをすべて読み込む
- Sites.Read.All (アプリケーション) - すべてのサイトコレクションの項目を読み取る
- User.Read.All (アプリケーション) - すべてのユーザーの完全なプロフィールを読み取る

Note

[基本認証] と SharePoint アプリ専用認証を使用してエンティティをクロールする場合、API アクセス許可は必要ありません。

SharePoint Server では、次のものがあることを確認してください。

- SharePoint インスタンス URL と SharePoint URL のドメイン名をコピーしました。入力したホスト URL の形式は `https://yourcompany/sites/mysite` です。URL は https で始まる必要があります。

 Note

(オンプレミス/サーバー) Amazon Kendra AWS Secrets Manager は、 に含まれるエンドポイント情報が、データソース設定の詳細で指定されたエンドポイント情報と同じかどうかを確認します。[混乱する代理問題](#)は、ユーザーがアクションを実行するアクセス許可がないにもかかわらず、Amazon Kendra をプロキシとして使用して設定された秘密にアクセスし、アクションを実行するセキュリティの問題です。後でエンドポイント情報を変更する場合は、新しいシークレットを作成してこの情報を同期する必要があります。

- SharePoint アカウントの多要素認証 (MFA) を非アクティブ化し、Amazon Kendra が SharePoint コンテンツのクロールをブロックしないようにします。
- アクセス制御に [SharePoint アプリ専用認証] を使用する場合:
 - サイトレベルでアプリのみを登録したときに生成された SharePoint クライアント ID をコピーしました。クライアント ID 形式は ClientId@TenantId です。例: `ffa956f3-8f89-44e7-b0e4-49670756342c@888d0b57-69f1-4fb8-957f-e1f0bedf82fe`。
 - サイトレベルでアプリのみを登録したときに生成された SharePoint クライアントシークレットをコピーしました。

注: クライアント ID とクライアントシークレットは、SharePoint Server をアプリ専用認証に登録した場合にのみ単一サイト用に生成されるため、SharePoint アプリ専用認証でサポートされるサイト URL は 1 つだけです。

 Note

SharePoint アプリ専用認証は、SharePoint 2013 バージョンではサポートされていません。

- [カスタムドメイン付き E メール ID] をアクセス制御に使用する場合:
 - カスタムメールアドレスの値 (例: `"amazon.com"`) を記録しました。
- IDP 認可のドメインで E メール ID を使用する場合は、以下をコピーします。
 - LDAP サーバーエンドポイント (プロトコルとポート番号を含む LDAP サーバーのエンドポイント)。例: `ldap://example.com:389`。

- LDAP 検索ベース (LDAP ユーザーの検索ベース)。例: `CN=Users#DC=sharepoint#DC=com`。
- LDAP ユーザー名と LDAP パスワード。
- 設定済みの NTLM 認証資格情報、またはユーザー名 (SharePoint アカウントユーザー名) とパスワード (SharePoint アカウントパスワード) を含む設定済みの Kerberos 認証資格情報のいずれか。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- SharePoint の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、SharePoint データソースを接続するときにコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

SharePoint データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータにアクセスできるように Amazon Kendra 、SharePoint 認証情報の詳細を指定する必要があります。SharePoint をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console: SharePoint Online

SharePoint Online Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、SharePoint コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた SharePoint コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. ホスティング方法 — SharePoint Online を選択します。

- b. [SharePoint リポジトリ固有のサイト URL] - SharePoint ホストの URL を入力します。入力したホスト URL の形式は `https://yourdomain.sharepoint.com/sites/mysite` です。URL は https プロトコルで始まる必要があります。URL は改行で区切ります。最大 100 個の URL を追加できます。
- c. [ドメイン] - SharePoint ドメインを入力します。例えば、URL `https://yourdomain.sharepoint.com/sites/mysite` のドメインは `yourdomain` です。
- d. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

ユーザープリンシパル名か Azure Portal から取得したユーザー E メールかにかかわらず、ユーザー ID のタイプを選択することもできます。を指定しない場合、E メールはデフォルトで使用されます。

- e. 認証 — 基本認証、OAuth 2.0、Azure AD App-Only 認証、SharePoint App-Only 認証、または OAuth 2.0 更新トークン認証のいずれかを選択します。既存の AWS Secrets Manager シークレットを選択して認証情報を保存するか、シークレットを作成します。
 - i. 基本認証を使用する場合、シークレットにはシークレット名、SharePoint ユーザー名とパスワードを含める必要があります。
 - ii. OAuth 2.0 認証を使用する場合、シークレットには、SharePoint テナント ID、シークレット名、SharePoint ユーザー名、パスワード、Azure AD に SharePoint を登録するときに生成される Azure AD クライアント ID、および Azure AD に SharePoint を登録するときに生成される Azure AD クライアントシークレットを含める必要があります。
 - iii. Azure AD App-Only 認証を使用する場合、シークレットには、SharePoint テナント ID、Azure AD 自己署名 X.509 証明書、シークレット名、Azure AD に SharePoint を登録したときに生成された Azure AD クライアント ID、および Azure AD のコネクタを認証するためのプライベートキーを含める必要があります。
 - iv. SharePoint App-Only 認証を使用する場合、シークレットには、SharePoint テナント ID、シークレット名、テナントレベルでの App Only の登録時に生成した SharePoint クライアント ID、テナントレベルでの App Only の登録時に生成した SharePoint クライアントシークレット、Azure AD に SharePoint を登録するときに生成した Azure AD クライアント ID、および Azure AD への SharePoint の登録時に生成した Azure AD クライアントシークレットを含める必要があります。

SharePoint クライアント ID 形式は *ClientID@TenantId* です。例:

ffa956f3-8f89-44e7-b0e4-49670756342c@888d0b57-69f1-4fb8-957f-e1f0bedf82fe。

- v. OAuth 2.0 更新トークン認証を使用する場合、シークレットには、SharePoint テナント ID、シークレット名、Azure AD に SharePoint を登録するときに生成された一意の Azure AD クライアント ID、SharePoint を Azure AD に登録するときに生成された Azure AD クライアントシークレット、SharePoint Amazon Kendra に接続するために生成された更新トークンが含まれている必要があります。
- f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- g. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

ローカルグループマッピングまたは Azure Active Directory グループマッピングをクローラすることもできます。

 Note

AD グループマッピングクローラは、OAuth 2.0、OAuth 2.0 更新トークン、SharePoint SharePoint App Only 認証でのみ使用できます。

- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - i. [エンティティの選択] - クロールするエンティティを選択します。[すべて] のエンティティをクロールするか、[ファイル]、[添付ファイル]、[リンク]、[ページ]、[イベント]、[コメント]、[リストデータ] を組み合わせてクロールするかを選択できます。
 - ii. [追加の設定] では、[エンティティ正規表現パターン] の場合 - [リンク]、[ページ]、[イベント] に正規表現パターンを追加して、すべてのドキュメントを同期する代わりに特定のエンティティを含めることができます。
 - iii. [正規表現パターン] - すべてのドキュメントを同期する代わりに、[ファイルパス]、[ファイル名]、[ファイルタイプ]、[OneNote セクション名]、[OneNote ページ名] でファイルを含めたり除外したりする正規表現パターンを追加します。最大 100 個を追加できます。

Note

OneNote クローリングは、OAuth 2.0、OAuth 2.0 更新トークン、SharePoint アプリ専用認証にのみ使用できます。

- b. [同期モード] では、データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。Amazon Kendra でデータソースを初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツが同期されます。
 - [完全同期] - 前回の同期ステータスに関係なく、すべてのコンテンツを同期します。
 - [新規または変更済みのドキュメントを同期] - 新規または変更済みのドキュメントのみを同期します。

- [新規、変更済み、または削除されたドキュメントを同期] - 新規、変更済み、または削除されたドキュメントのみを同期します。
 - c. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - d. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

Console: SharePoint Server

SharePoint Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、SharePoint コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた SharePoint コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. ホスティング方法 — SharePoint Server を選択します。
 - b. SharePoint バージョンを選択 — SharePoint 2013、SharePoint 2016、SharePoint 2019、SharePoint SharePoint (サブスクリプションエディション) のいずれかを選択します。
 - c. [SharePoint リポジトリ固有のサイト URL] - SharePoint ホストの URL を入力します。入力したホスト URL の形式は *https://yourcompany/sites/mysite* です。URL は https プロトコルで始まる必要があります。URL は改行で区切ります。最大 100 個の URL を追加できます。
 - d. [ドメイン] - SharePoint ドメインを入力します。例えば、URL *https://yourcompany/sites/mysite* のドメインは *yourcompany* です
 - e. SSL 証明書の場所 — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力します。
 - f. (オプション) [ウェブプロキシ] の場合: ホスト名 (http:// または https:// プロトコルなし) と、ホスト URL トランスポートプロトコルで使用するポート番号を入力します。ポート番号の数値は 0 ~ 65535 の間である必要があります。
 - g. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

SharePoint Server の場合は、次の ACL オプションから選択できます。

- i. IDP からのドメインを持つ E メール ID - ユーザー ID は IDs を持つ E メール ID に基づいています。IDP 接続の詳細を認証の一部としてシークレットに指定します Secrets Manager。
 - ii. カスタムドメインを持つ E メール ID - ユーザー ID はカスタム E メールドメイン値に基づいています。例: *"amazon.com"*。E メールドメインは、アクセス制御用の E メール ID の作成に使用されます。カスタム E メールドメインを入力する必要があります。
 - iii. Domain\User with Domain — ユーザー ID は Domain\User ID 形式を使用して構築されます。有効なドメイン名を指定する必要があります。例えば、アクセス制御を構築するには *"sharepoint2019"* と入力します。
- h. 認証では、SharePoint アプリ専用認証、NTLM 認証、または Kerberos 認証のいずれかを選択します。認証情報を保存する既存の AWS Secrets Manager シークレットを選択するか、シークレットを作成します。
- i. NTLM 認証または Kerberos 認証を使用する場合は、シークレット名、SharePoint ユーザー名とパスワードをシークレットに含める必要があります。

[IDP からのドメイン付き E メール ID] を使用している場合は、次の情報も入力してください。

- [LDAP サーバーエンドポイント] - プロトコルとポート番号を含む LDAP サーバーのエンドポイント。例: *ldap://example.com:389*。
 - [LDAP 検索ベース] - LDAP ユーザーの検索ベース。例:
CN=Users#DC=sharepoint#DC=com。
 - [LDAP ユーザー名] - LDAP ユーザー名。
 - [LDAP パスワード] - LDAP パスワード。
- ii. SharePoint アプリ専用認証を使用する場合、シークレットにはシークレット名、サイトレベルでアプリ専用を登録したときに生成した SharePoint クライアント ID、サイトレベルでアプリ専用を登録したときに生成した SharePoint クライアントシークレットを含める必要があります。

SharePoint クライアント ID 形式は *ClientID@TenantId* です。例:

ffa956f3-8f89-44e7-b0e4-49670756342c@888d0b57-69f1-4fb8-957f-e1f0bedf82fe。

注: クライアント ID とクライアントシークレットは、SharePoint Server をアプリ専用認証に登録した場合にのみ単一サイト用に生成されるため、SharePoint アプリ専用認証でサポートされるサイト URL は 1 つだけです。

[IDP からのドメイン付き E メール ID] を使用している場合は、次の情報も入力してください。

- [LDAP サーバーエンドポイント] - プロトコルとポート番号を含む LDAP サーバーのエンドポイント。例: `ldap://example.com:389`。
 - [LDAP 検索ベース] - LDAP ユーザーの検索ベース。例: `CN=Users#DC=sharepoint#DC=com`。
 - [LDAP ユーザー名] - LDAP ユーザー名。
 - [LDAP パスワード] - LDAP パスワード。
- i. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- j. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

ローカルグループマッピングまたは Azure Active Directory グループマッピングをクローラすることもできます。

 Note

AD グループのマッピングクローラは、SharePoint アプリのみの認証でのみ使用できます。

- k. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- I. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - i. [エンティティの選択] - クロールするエンティティを選択します。[すべて] のエンティティをクロールするか、[ファイル]、[添付ファイル]、[リンク]、[ページ]、[イベント]、[リストデータ] を組み合わせてクロールするかを選択できます。
 - ii. [追加の設定] では、[エンティティ正規表現パターン] の場合 - [リンク]、[ページ]、[イベント] に正規表現パターンを追加して、すべてのドキュメントを同期する代わりに特定のエンティティを含めることができます。
 - iii. [正規表現パターン] - すべてのドキュメントを同期する代わりに、[ファイルパス]、[ファイル名]、[ファイルタイプ]、[OneNote セクション名]、[OneNote ページ名] でファイルを含めたり除外したりする正規表現パターンを追加します。最大 100 個を追加できます。

Note

OneNote クローリングは、SharePoint アプリのみの認証でのみ使用できます。

- b. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新規および変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、

データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - c. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - d. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

SharePoint Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ SHAREPOINTV2 を使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- リポジトリエンドポイントメタデータ - SharePoint インスタンスの tenantID domain と siteUrls を指定します。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプショ

ンとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。

- `FORCED_FULL_CRAWL` は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- **ID クローラ** — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

 Note

ID クローラは、`crawlAcl` に設定した場合にのみ使用できます `true`。

- **リポジトリの追加プロパティ** - 以下を指定します。
 - (Azure AD の場合) `s3bucketName` と `s3certificateName` を使用して Azure AD 自己署名 X.509 証明書を保存します。
 - 使用する認証タイプ
(`auth_Type`)、`OAuth2`、`OAuth2App`、`OAuth2Certificate`、`Basic`、`OAuth2_RefreshToken` および `Kerberos`
 - 使用するバージョン (`version`) `Online`、`Server` または `onPremVersion` を `2013`、`2016`、`2019`、または `SubscriptionEdition` としてさらに指定できます。

- Secret Amazon Resource Name (ARN) — SharePoint アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。

SharePoint Online を使用している場合は、基本、OAuth 2.0、Azure AD アプリ専用、SharePoint アプリ専用の認証を選択できます。各認証オプションでシークレットに含める必要がある最小の JSON 構造を次に示します。

- 基本認証

```
{
  "userName": "SharePoint account user name",
  "password": "SharePoint account password"
}
```

- OAuth 2.0 認証

```
{
  "clientId": "client id generated when registering SharePoint with Azure AD",
  "clientSecret": "client secret generated when registering SharePoint with Azure AD",
  "userName": "SharePoint account user name",
  "password": "SharePoint account password"
}
```

- Azure AD アプリ専用認証

```
{
  "clientId": "client id generated when registering SharePoint with Azure AD",
  "privateKey": "private key to authorize connection with Azure AD"
}
```

- SharePoint アプリ専用認証

```
{
  "clientId": "client id generated when registering SharePoint for App Only at Tenant Level",
  "clientSecret": "client secret generated when registering SharePoint for App Only at Tenant Level",
  "adClientId": "client id generated while registering SharePoint with Azure AD",
  "adClientSecret": "client secret generated while registering SharePoint with Azure AD"
}
```

```
}
```

- OAuth 2.0 更新トークン認証

```
{
  "clientId": "client id generated when registering SharePoint with Azure AD",
  "clientSecret": "client secret generated when registering SharePoint with Azure AD",
  "refreshToken": "refresh token generated to connect to SharePoint"
}
```

SharePoint Server を使用している場合は、SharePoint アプリケーション専用認証、NTLM 認証、Kerberos 認証のいずれかを選択できます。各認証オプションでシークレットに含める必要がある最小の JSON 構造を次に示します。

- SharePoint アプリ専用認証

```
{
  "siteUrlsHash": "Hash representation of SharePoint site URLs",
  "clientId": "client id generated when registering SharePoint for App Only at Site Level",
  "clientSecret": "client secret generated when registering SharePoint for App Only at Site Level"
}
```

- IDP 認可からのドメインによる SharePoint App-Only 認証

```
{
  "siteUrlsHash": "Hash representation of SharePoint site URLs",
  "clientId": "client id generated when registering SharePoint for App Only at Site Level",
  "clientSecret": "client secret generated when registering SharePoint for App Only at Site Level",
  "ldapUrl": "LDAP Account url eg. ldap://example.com:389",
  "baseDn": "LDAP Account base dn eg. CN=Users,DC=sharepoint,DC=com",
  "ldapUser": "LDAP account user name",
  "ldapPassword": "LDAP account password"
}
```

- (サーバーのみ) NTLM または Kerberos 認証

```
{
  "siteUrlsHash": "Hash representation of SharePoint site URLs",
```

```

    "userName": "SharePoint account user name",
    "password": "SharePoint account password"
  }

```

- (サーバーのみ) IDP 認可からのドメインによる NTLM または Kerberos 認証

```

{
  "siteUrlsHash": "Hash representation of SharePoint site URLs",
  "userName": "SharePoint account user name",
  "password": "SharePoint account password",
  "ldapUrl": "ldap://example.com:389",
  "baseDn": "CN=Users,DC=sharepoint,DC=com",
  "ldapUser": "LDAP account user name",
  "ldapPassword": "LDAP account password"
}

```

- IAM role - を呼び出し CreateDataSource で、Secrets Manager シークレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、SharePoint コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for SharePoint data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター — 特定のファイル、OneNotes、およびその他のコンテンツを含めるか除外するかを指定できます。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、SharePoint データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[SharePoint テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- コネクタは [ファイル] エンティティのカスタムフィールドマッピングのみをサポートします。
- SharePoint Server のすべてのバージョンで、ACL トークンは小文字にする必要があります。[IDP からのドメイン付き E メール ID] および [カスタムドメイン付き E メール ID] の場合 (例: *user@sharepoint2019.com*)。[ドメイン\ドメイン付きユーザー] ACL の場合 (例: *sharepoint2013\user*)。
- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。SharePoint 代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。
- このコネクタは、SharePoint 2013 の変更ログモード/新規または変更されたコンテンツの同期をサポートしていません。
- エンティティ名の名前に % 文字が含まれている場合、API の制限によりコネクタはこれらのファイルをスキップします。
- OneNote をクロールできるのは、テナント ID を使用し、SharePoint Online で OAuth 2.0、OAuth 2.0 更新トークン、または SharePoint アプリケーション専用認証が有効になっているコネクタだけです。
- コネクタは、ドキュメントの名前が変更された場合でも、OneNote ドキュメントの最初のセクションを既定の名前のみでクロールします。

- コネクタは、SharePoint 2019、SharePoint Online、およびサブスクリプションエディションのリンクを、クロールするエンティティとして [リンク] に加えて [ページ] と [ファイル] が選択されている場合にのみクロールします。
- クロールするエンティティとしてリンクが選択されている場合、コネクタは SharePoint 2013 と SharePoint 2016 の [リンク] をクロールします。
- コネクタがリストの添付ファイルとコメントをクロールするのは、クロール対象のエンティティとして [リストデータ] も選択されている場合のみです。
- コネクタがイベント添付ファイルをクロールするのは、クロール対象のエンティティとして [イベント] も選択されている場合のみです。
- SharePoint Online バージョンの場合、ACL トークンは小文字になります。例えば、Azure ポータルの [ユーザープリンシパル名] が *MaryMajor@domain.com* の場合、SharePoint コネクタの ACL トークンは *marymajor@domain.com* になります。
- SharePoint Online および Server 用の [ID クローラー] では、ネストされたグループをクロールする場合、AD グループクロールだけでなくローカルクロールも有効にする必要があります。
- SharePoint Online を使用していて、Azure ポータルのユーザープリンシパル名が大文字と小文字の組み合わせである場合、SharePoint API は内部的にこれを小文字に変換します。このため、Amazon Kendra SharePoint コネクタは ACL を小文字に設定します。

Microsoft SQL Server

Note

Microsoft SQL Server コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Microsoft SQL Server は、Microsoft が開発したリレーショナルデータベース管理システム (RDBMS) です。Microsoft SQL Server ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Microsoft SQL Server

データソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra Microsoft SQL ServerMS SQL Server 2019 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用してMicrosoft SQL Serverデータソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Microsoft SQL Serverトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用してMicrosoft SQL Serverデータソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Microsoft SQL Serverおよび AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Microsoft SQL Server で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが Microsoft SQL Server および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Microsoft SQL Server の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Microsoft SQL Server データソースの接続時にコンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Microsoft SQL Server データソース Amazon Kendra に接続するには、[データにアクセスできるように Amazon Kendra、Microsoft SQL Server 認証情報の詳細を指定する必要があります。](#)をまだ設定していない場合は、Microsoft SQL Server Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Microsoft SQL Server

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Microsoft SQL Serverコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたMicrosoft SQL Serverコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できませんが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。

- b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
- c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
- d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
- e. SSL 証明書の場所を有効にする - SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
- f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Microsoft SQL Server新しいシークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Microsoft SQL Server-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
- g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。

- [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。

 Note

テーブル名に特殊文字 (英数字以外) が含まれている場合は、テーブル名の周囲に角括弧を使用する必要があります。たとえば、`[my-database-table]` ## * #####。

- [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
- b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
 - タイムスタンプ列 - タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。

- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
 - e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
 9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Microsoft SQL Server

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを `sqlserver` として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。

 Note

テーブル名に特殊文字 (英数字以外) が含まれている場合は、テーブル名の周囲に角括弧を使用する必要があります。たとえば、`[my-database-table] ## * #####`。

- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Microsoft SQL Server アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "user name": "database user name",
  "password": "password"
}
```

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで、シークレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Microsoft SQL Serverコネクタと 必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Microsoft SQL Server data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Microsoft SQL Server データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Microsoft SQL サーバー テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Microsoft Teams

Microsoft Teams は、メッセージング、会議、ファイル共有のためのエンタープライズコラボレーションツールです。Microsoft Teams ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Microsoft Teams データソースのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して、Microsoft Teams データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Microsoft Teams データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「[データソースのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Microsoft Teams データソースのインデックスを作成する前に、Microsoft Teams と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Microsoft Teams で以下を確認してください。

- Office 365 で Microsoft Teams アカウントを作成しました。
- Microsoft 365 のテナント ID を記録しました。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- Azure ポータルで OAuth アプリケーションを設定し、クライアント ID とクライアントシークレットまたはクライアント認証情報を記録しました。詳細については、[Microsoft チュートリアルと登録済みアプリケーションの例](#)を参照してください。

Note

Azure ポータルでアプリを作成または登録すると、シークレット ID は実際のシークレット値を表します。シークレットとアプリを作成するときは、すぐに実際のシークレット値を書き留めるか保存する必要があります。Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、証明書とシークレットのメニューオプションに移動することで、シークレットにアクセスできます。

クライアント ID にアクセスするには、Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、概要ページに移動します。アプリケーション (クライアント) ID はクライアント ID です。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

- 必要なアクセス権限を追加しました。すべてのアクセス許可を追加するか、クロールするエンティティに基づいてより少ないアクセス許可を選択することで範囲を制限できます。次の表に、対応するエンティティ別のアプリケーションレベルのアクセス許可を示します。

エンティティ	データ同期に必要なアクセス許可	ID 同期に必要なアクセス許可
チャンネル投稿	- ChannelMessage.Read.All - Group.Read.All - User.Read - User.Read.All	TeamMember.Read.All
チャンネル添付ファイル	- ChannelMessage.Read.All - Group.Read.All - User.Read - User.Read.All	TeamMember.Read.All
チャンネル Wiki	- Group.Read.All - User.Read - User.Read.All	TeamMember.Read.All
チャットメッセージ	- Chat.Read.All - ChatMessage.Read.All - ChatMember.Read.All - User.Read - User.Read.All	TeamMember.Read.All

エンティティ	データ同期に必要なアクセス許可	ID 同期に必要なアクセス許可
	• Group.Read.All	
会議チャット	• Chat.Read.All • ChatMessage.Read • ChatMember.Read.All • User.Read • User.Read.All • Group.Read.All	TeamMember.Read.All
チャット添付ファイル	• Chat.Read.All • ChatMessage.Read • ChatMember.Read.All • User.Read • User.Read.All • Group.Read.All	TeamMember.Read.All
会議ファイル	• Chat.Read.All • ChatMessage.Read.All • ChatMember.Read.All • User.Read • User.Read.All • Group.Read.All • Files.Read.All	TeamMember.Read.All

エンティティ	データ同期に必要なアクセス許可	ID 同期に必要なアクセス許可
カレンダー会議	• Chat.Read.All • ChatMessage.Read.All • ChatMember.Read.All • User.Read • User.Read.All • Group.Read.All • Files.Read.All	TeamMember.Read.All
会議メモ	• User.Read • User.Read.All • Group.Read.All • Files.Read.All	TeamMember.Read.All

- 各ドキュメントが Microsoft Teams および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Microsoft Teams の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録しました。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Microsoft Teams データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Microsoft Teams データソース Amazon Kendra に接続するには、がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Microsoft Teams データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Microsoft Teams をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Microsoft Teams Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Microsoft Teams コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Microsoft Teams コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. テナント ID — Microsoft 365 テナント ID を入力します。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
 - b. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - c. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Microsoft Teams 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Microsoft Teams-」が自動的に追加されます。
 - B. クライアント ID とクライアントシークレット - Azure ポータルの Microsoft Teams で設定された認証情報を入力します。
 - ii. シークレットを保存して追加します。
 - d. [支払いモデル] - Microsoft Teams アカウントのライセンスと支払いモデルを選択できます。モデル A の支払いモデルは、セキュリティコンプライアンスを必要とするライセンスモデルと支払いモデルに限定されます。モデル B の支払いモデルは、セキュリティコンプライアンスを必要としないライセンスモデルや支払いモデルに適しています。

- e. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- f. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- g. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- h. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. コンテンツの同期 — クロールするコンテンツのタイプを選択します。チャット、チーム、カレンダーのコンテンツをクロールすることを選択できます。
 - b. 追加設定 — 特定のカレンダーの開始日と終了日、ユーザー E メール、チーム名、チャンネル名、添付ファイル、OneNotes を指定します。
 - c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。

- 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
 9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Microsoft Teams Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマMSTEAMSを使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- テナント ID - テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォ

トですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。

- **FORCED_FULL_CRAWL** は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- **FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- **CHANGE_LOG** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- **Secret Amazon Resource Name (ARN)** — Microsoft Teams アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "client secret"
}
```

- **IAM role** - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Microsoft Teams コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Microsoft Teams data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- **[仮想プライベートクラウド (VPC)]** - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- **ドキュメント/コンテンツタイプ** — チャットメッセージと添付ファイル、チャンネル投稿と添付ファイル、チャンネル Wiki、カレンダーコンテンツ、会議のチャットとファイル、メモをクロールするかどうかを指定します。

- カレンダーコンテンツ — カレンダーコンテンツをクローलする開始日時と終了日時を指定します。
- 包含フィルターと除外フィルター - Microsoft Teams で特定のコンテンツを含めるか除外するかを指定します。チーム名、チャンネル名、ファイル名とファイルタイプ、ユーザーの E メール、OneNote セクション、および OneNote ページを含めたり除外したりできます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Microsoft Teams データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[「Microsoft Teams テンプレートスキーマ」](#)を参照してください。

詳細はこちら

Microsoft Teams データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Microsoft Teams の Amazon Kendra コネクタを使用して組織の Microsoft Teams データソースをインテリジェントに検索する](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) が有効になっている場合、Microsoft Teams API の制限により、「新規または変更されたコンテンツの同期のみ」オプションは使用できません。代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。

Microsoft Yammer

Note

Microsoft Yammer コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで、既存のお客様に対して完全にサポートされ続けます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Microsoft Yammer は、メッセージング、会議、ファイル共有のためのエンタープライズコラボレーションツールです。Microsoft Yammer ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Microsoft Yammer データソースのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して、Microsoft Yammer データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra Microsoft Yammer データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Microsoft Yammer データソースのインデックスを作成する前に、Microsoft Yammer と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Microsoft Yammer で以下を確認してください。

- Office 365 に Microsoft Yammer 管理アカウントを作成しました。
- Microsoft Yammer のユーザー名とパスワードを記録しました。
- Microsoft 365 のテナント ID を記録しました。テナント ID は Azure Active Directory ポータルのプロパティまたは OAuth アプリケーションで確認できます。
- Azure ポータルで OAuth アプリケーションを設定し、クライアント ID とクライアントシークレットまたはクライアント認証情報を記録しました。詳細については、[Microsoft チュートリアルと登録済みアプリケーションの例](#)を参照してください。

Note

Azure ポータルでアプリを作成または登録すると、シークレット ID は実際のシークレット値を表します。シークレットとアプリを作成するときは、すぐに実際のシークレット値を書き留めるか保存する必要があります。Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、証明書とシークレットのメニューオプションに移動することで、シークレットにアクセスできます。

クライアント ID にアクセスするには、Azure ポータルでアプリケーションの名前を選択し、概要ページに移動します。アプリケーション (クライアント) ID はクライアント ID です。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- 各ドキュメントが Microsoft Yammer および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Microsoft Yammer の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録しました。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Microsoft Yammer データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Microsoft Yammer データソース Amazon Kendra に接続するには、ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Microsoft Yammer データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Microsoft Yammer をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Microsoft Yammer Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Microsoft Yammer コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Microsoft Yammer コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。

- d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - b. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Microsoft Yammer 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Microsoft Yammer-」が自動的に追加されます。
 - B. [ユーザー名]、[パスワード] - Microsoft Yammer のユーザー名とパスワードを入力します。
 - C. クライアント ID、クライアントシークレット - Azure ポータルの Microsoft Yammer で設定された認証情報を入力します。
 - ii. シークレットを保存して追加します。
 - c. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - d. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を

使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

- e. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- f. [次へ] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

- a. [開始日] - Microsoft Yammer でデータのクローリングを開始する日付を指定します。
- b. コンテンツの同期 — クロールするコンテンツのタイプを選択します。例えば、公開メッセージ、非公開メッセージ、添付ファイルなどです。
- c. 追加設定 — クロールする特定のコミュニティ名を指定し、正規表現パターンを使用して特定のコンテンツを含めるか除外します。
- d. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- e. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - f. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Microsoft Yammer Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマYAMMERを使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

- `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Microsoft Yammer アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "username": "user name",  
  "password": "password",  
  "clientId": "client ID",  
  "clientSecret": "client secret"  
}
```

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Microsoft Yammer コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Microsoft Yammer data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- ドキュメント/コンテンツタイプ — コミュニティコンテンツ、メッセージと添付ファイル、プライベートメッセージをクロールするかどうかを指定します。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のコンテンツを含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラ を有効にするかどうかを指定します。ID クローラ は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラ をオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラ がオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラ がオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Microsoft Yammer データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Microsoft Yammer テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

詳細はこちら

Microsoft Yammer データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [の Yammer コネクタの発表 Amazon Kendra](#)

MySQL

Note

MySQL コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断

することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

MySQL は、オープンソースのリレーショナルデータベース管理システムです。MySQL ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用してMySQLデータソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra MySQL MySQL 8.0 をサポートしています。21.

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用してMySQLデータソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra MySQLトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用してMySQLデータソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、MySQLおよびAWS アカウントでこれらの変更を行います。

MySQL で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

⚠ Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが MySQL および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

i Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- MySQL の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

i Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、コンソールを使用して、MySQLデータソースを接続するときに新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

MySQL データソース Amazon Kendra に接続するには、がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、MySQL認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、MySQL Amazon Kendra 「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには MySQL

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、MySQLコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたMySQLコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。

- e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
 - c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、MySQL新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-MySQL-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
 - g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。

- [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
- [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
- 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。

b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。

- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
- [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
- [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
- [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
- タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
- [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
- [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。

c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプション

として完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
- 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。

e. [次へ] を選択します。

8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
- b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
- c. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには MySQL

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。

- データベースタイプ - データベースタイプを `mysql` として指定する必要があります。
- SQL クエリ — `SELECT` オペレーションや `JOIN` オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - `FORCED_FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — MySQL アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "user name": "database user name",
  "password": "password"
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレジットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、MySQLコネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for MySQL data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクローलします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、MySQL データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。

- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Oracle Database

Note

Oracle Database コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Oracle Database はデータベース管理システムです。Oracle Database ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して Oracle Database データソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra Oracle Database、Oracle Database 18c、19c、21c をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して Oracle Database データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra Oracle Database トラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して Oracle Database データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、Oracle Database および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Oracle Database で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが Oracle Database および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Oracle Database の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Oracle Database データソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Oracle Database データソース Amazon Kendra に接続するには、[データ Amazon Kendra](#) にアクセスできるように、Oracle Database 認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、Oracle Database Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには Oracle Database

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Oracle Databaseコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたOracle Databaseコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
 - c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする — SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、Oracle Database新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

- A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Oracle Database-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
- B. [保存] を選択します。
- g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
 - b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。

- 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。
 - タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。

8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには Oracle Database

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを `oracle` として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - `FORCED_FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツに新しいインデックスを作成します。
 - `FULL_CRAWL` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。

- `CHANGE_LOG` は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Oracle Database アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{  
  "user name": "database user name",  
  "password": "password"  
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Oracle Database コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Oracle Database data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクローリングします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検

索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

- フィールドマッピング - 選択すると、Oracle Database データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[Oracle Database テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

PostgreSQL

Note

PostgreSQL コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。このフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

PostgreSQL は、オープンソースのデータベース管理システムです。PostgreSQL ユーザーの場合は、Amazon Kendra を使用して PostgreSQL データソースのインデックスを作成できます。データソースコネクタは Amazon Kendra PostgreSQL PostgreSQL 9.6 をサポートしています。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して PostgreSQL データソース Amazon Kendra に接続できます。

データソースコネクタの Amazon Kendra PostgreSQL トラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

- フィールドマッピング
- ユーザーコンテキストフィルタリング
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

を使用して PostgreSQL データソース Amazon Kendra のインデックスを作成する前に、PostgreSQL および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

PostgreSQL で以下を確認してください。

- データベースユーザー名とパスワードを記録済み。

Important

ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。

- コピーしたデータベースのホスト URL、ポート、インスタンス。
- 各ドキュメントが PostgreSQL および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- PostgreSQL の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、PostgreSQLデータソースの接続時に コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

PostgreSQL データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、PostgreSQL認証情報の詳細を指定する必要があります。をまだ設定していない場合は、PostgreSQL Amazon Kendra 「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

Amazon Kendra に接続するには PostgreSQL

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、PostgreSQLコネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いたPostgreSQLコネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - ドキュメントをインデックス用にフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ソース] には、次の情報を入力します。
 - b. [ホスト] - データベースのホスト名を入力します。
 - c. [ポート] - データベースのポートを入力します。
 - d. [インスタンス] - データベースインスタンスを入力します。
 - e. SSL 証明書の場所を有効にする - SSL 証明書ファイルへの Amazon S3 パスを入力する場合に選択します。
 - f. [認証] には、次の情報を入力します。
 - AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、PostgreSQL 新しい Secrets Manager シークレットを作成して認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - A. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - I. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-PostgreSQL-」が自動的に追加されます。
 - II. [データベースユーザー名] と [パスワード] - データベースからコピーした認証情報の値を入力します。
 - B. [保存] を選択します。
 - g. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- h. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [同期の範囲] で、次のオプションから選択します。
 - [SQL クエリ] - SELECT や JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを入力します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
 - [プライマリキー列] - データベーステーブルのプライマリキーを指定します。これにより、データベース内のテーブルが識別されます。
 - [タイトル列] - データベーステーブル内のドキュメントタイトル列の名前を指定します。
 - 本文列 — データベーステーブル内のドキュメント本文列の名前を指定します。
 - b. [その他の設定 - オプション] で、すべてのファイルを同期する代わりに特定のコンテンツを同期するには、次のオプションから選択します。
 - 変更検出列 — コンテンツの変更を検出 Amazon Kendra するために使用する列の名前を入力します。これらの列のいずれかに変更があると、はコンテンツのインデックスを再 Amazon Kendra 作成します。
 - [ユーザー ID 列] - コンテンツへのアクセスを許可するユーザー ID を含む列の名前を入力します。
 - [グループ列] - コンテンツへのアクセスを許可するグループを含む列の名前を入力します。
 - [ソース URL 列] - インデックスを作成するソース URL を含む列の名前を入力します。

- タイムスタンプ列 — タイムスタンプを含む列の名前を入力します。は、タイムスタンプ情報 Amazon Kendra を使用してコンテンツの変更を検出し、変更されたコンテンツのみを同期します。
 - [タイムゾーン列] - クロールするコンテンツのタイムゾーンを含む列の名前を入力します。
 - [タイムスタンプの形式] - コンテンツの変更を検出してコンテンツを再同期するために使用するタイムスタンプの形式を含む列の名前を入力します。
- c. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい、変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- d. [同期実行スケジュール] の [頻度] - Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
- e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングするドキュメント IDs、ドキュメントタイトル、ソース URLs など、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Amazon Kendra に接続するには PostgreSQL

[TemplateConfiguration](#) API を使用して、以下を指定する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ JDBC を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- データベースタイプ - データベースタイプを postgresql として指定する必要があります。
- SQL クエリ — SELECT オペレーションや JOIN オペレーションなどの SQL クエリステートメントを指定します。SQL クエリは 32 KB 未満にする必要があります。Amazon Kendra はクエリに一致するすべてのデータベースコンテンツをクロールします。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースを と Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみをインデックス化します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — PostgreSQL アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "user name": "database user name",
  "password": "password"
}
```

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- IAM role — を呼び出し `CreateDataSource` で、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、PostgreSQLコネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for PostgreSQL data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - ユーザー ID、グループ、ソース URL、タイムスタンプ、タイムゾーンを使用して、特定のコンテンツを含めるかどうかを指定できます。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、PostgreSQL データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについての詳細は、「[PostgreSQL テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

メモ

- が更新されたコンテンツ Amazon Kendra をチェックする場合、削除されたデータベース行は 追跡されません。
- データベースの 1 行のフィールド名と値のサイズは 400 KB を超えることはできません。
- データベースデータソースに大量のデータがあり、最初の同期後にすべてのデータベースコンテンツの Amazon Kendra インデックスを作成しない場合は、新規、変更、または削除されたドキュメントのみを同期できます。
- ベストプラクティスとして、Amazon Kendra に読み取り専用データベース認証情報を指定します。
- ベストプラクティスとして、機密データや個人を特定できる情報 (PII) を含むテーブルを追加することは避けてください。

Quip

Note

Quip コネクタは、2026 年 5 月 31 日まで既存のお客様に対して完全にサポートされます。このコネクタは新しいユーザーには使用できなくなりましたが、現在のユーザーは中断することなく引き続き使用できます。コネクタポートフォリオは、よりスケーラブルでカスタマイズ可能なソリューションを提供するために継続的に進化しています。今後の統合のために、Amazon Kendra Custom Connector Framework[1] を検討することをお勧めします。こ

のフレームワークは、柔軟性を高めながら、より広範なエンタープライズユースケースをサポートするように設計されています。

Quip は、リアルタイムのドキュメント作成機能を提供する共同生産性向上ソフトウェアです。Amazon Kendra を使用して、Quip フォルダ、ファイル、ファイルコメント、チャットルーム、添付ファイルのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [QuipConfiguration](#) API を使用して Quip データソース Amazon Kendra に接続できます。

Quip データソースコネクタ Amazon Kendra のトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Quip データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Quip データソースのインデックスを作成する前に、Quip と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Quip で以下を確認してください。

- 管理者アクセス許可を持つ Quip アカウント。

- 個人アクセストークンを含む Quip 認証情報の作成。トークンは、AWS Secrets Manager シークレットに保存されている認証情報として使用されます。詳細については、[認証に関する Quip ドキュメント](#)を参照してください。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- Quip サイトドメインのコピー。例えば、<https://quip-company.quipdomain.com/browse> の場合、ドメインは [quipdomain](#) です。
- 各ドキュメントが Quip および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Quip の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシーク

レットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Quip データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Quip データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Quip データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Quip をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Quip Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Quip コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Quip コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。

- c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. Quip ドメイン名 - Quip アカウントからコピーした Quip を入力します。
 - b. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Quip 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Quip-」が自動的に追加されます。
 - B. Quip トークン — Quip 個人用アクセス設定 Quip を入力します。
 - ii. シークレットを追加して保存します。
 - c. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - d. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。
-  Note
- IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。
- e. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. クロールする Quip フォルダ ID を追加 - クロールする Quip フォルダ ID。

Note

すべてのサブフォルダとドキュメントを含むルートフォルダをクロールするには、ルートフォルダ ID を追加します。特定のサブフォルダをクロールするには、特定のサブフォルダ ID を追加します。

- b. 追加設定 (コンテンツタイプ) - クロールするコンテンツタイプを入力します。
 - c. [正規表現パターン] - 特定のファイルを含めるまたは除外する正規表現パターン。最大 100 のパターンを追加できます。
 - d. 同期実行スケジュールでの頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - e. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. Amazon Kendra インデックスにマッピングする、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Quip Amazon Kendra に接続するには

[QuipConfiguration](#) API を使用して以下を指定する必要があります。

- Quip サイトドメイン - 例えば、<https://quip-company.quipdomain.com/browse> の場合、ドメインは [quipdomain](#) です。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Quip アカountの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
```



```
"accessToken": "token"
}
```

- IAM role — を呼び出し>CreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレジットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Quip コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[Quip データソースのためのIAM ロール](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - データソース設定の一部として VpcConfiguration を指定します。「[VPC を使用するための Amazon Kendra の設定](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のファイルを含めるか除外するかを指定します。

Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フォルダ - インデックスを作成する Quip フォルダとサブフォルダを指定します。

Note

すべてのサブフォルダとその中のドキュメントを含むルートフォルダをクローलするには、ルートフォルダ ID を入力します。特定のサブフォルダをクローलするには、特定のサブフォルダ ID を追加します。

- 添付ファイル、チャットルーム、ファイルコメント — 添付ファイル、チャットルームのコンテンツ、ファイルコメントのクローリングを含めるかどうかを選択します。
- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

- フィールドマッピング - 選択すると、Quip データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

詳細はこちら

Quip データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [の Quip コネクタを使用して、インテリジェント検索で Quip ドキュメントでナレッジを検索する Amazon Kendra](#)

Salesforce

Salesforce は、サポート、営業、マーケティングの各チームを管理するための顧客関係管理 (CRM) ツールです。を使用して Amazon Kendra、Salesforce 標準オブジェクトやカスタムオブジェクトのインデックスを作成できます。

[Amazon Kendra コンソール](#)、[TemplateConfiguration](#) API、または [SalesforceConfiguration](#) API を使用して、Salesforce データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra には Salesforce コネクタの 2 つのバージョンがあります。各バージョンでサポートされる機能は次のとおりです。

Salesforce コネクタ V1.0 / [SalesforceConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター

Salesforce コネクタ V2.0 / [TemplateConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

Note

Salesforce コネクタ V1.0 / SalesforceConfiguration API は 2023 年に終了しました。Salesforce コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Salesforce データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [Salesforce コネクタ V1.0](#)
- [Salesforce コネクタ V2.0](#)

Salesforce コネクタ V1.0

Salesforce は、サポート、営業、マーケティングの各チームを管理するための顧客関係管理 (CRM) ツールです。を使用して Amazon Kendra、Salesforce 標準オブジェクトやカスタムオブジェクトのインデックスを作成できます。

Important

Amazon Kendra は Salesforce API バージョン 48 を使用します。Salesforce API は、1 日あたりに可能なリクエストの数を制限します。Salesforce がこれらのリクエストを超えると、続行できるまで再試行されます。

 Note

Salesforce コネクタ V1.0 / SalesforceConfiguration API は 2023 年に終了しました。Salesforce コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Salesforce データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Salesforce データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター

前提条件

Amazon Kendra を使用して Salesforce データソースのインデックスを作成する前に、Salesforce と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Salesforce で、次の作業を行ったことを確認してください。

- Salesforce アカウントを作成し、Salesforce への接続に使用するユーザー名とパスワードをメモすること。
- OAuth を有効にした Salesforce 接続アプリケーションアカウントを作成し、Salesforce 接続アプリケーションに割り当てられたコンシューマーキー (クライアント ID) とコンシューマーシークレット (クライアントシークレット) をコピーすること。クライアント ID とクライアントシークレットは、AWS Secrets Manager シークレットに保存されている認証情報として使用されま

す。詳細については、[接続アプリケーションに関する Salesforce のドキュメント](#)を参照してください。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- Salesforce への接続に使用されるアカウントに関連付けられた Salesforce セキュリティトークンをコピーすること。
- インデックスを作成する Salesforce インスタンスの URL をコピーすること。通常、URL は <https://<company>.salesforce.com/> です。サーバーは Salesforce 接続アプリケーションを実行している必要があります。
- ReadOnly プロファイルのクローンを作成し、すべてのデータの表示権限および記事の管理権限を追加して、Salesforce への読み取り専用アクセス権を持つユーザーに対する認証情報を Salesforce サーバーに追加すること。これらの認証情報は、接続を行うユーザーと、Amazon Kendra が接続する Salesforce 接続アプリケーションを識別します。
- 各ドキュメントが Salesforce および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であるを確認すること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Salesforce の認証資格情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Salesforce データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Salesforce データソース Amazon Kendra に接続するには、ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Salesforce データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Salesforce をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Salesforce Amazon Kendra に接続するには

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. [データソースを追加する] ページで [Salesforce コネクタ V1.0] を選択し、[コネクタを追加] を選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [データソース名] - データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. [デフォルト言語] - インデックスのドキュメントをフィルターする言語。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。メタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. [新しいタグを追加] - リソースの検索とフィルタリング、共有コストの追跡を行うためのタグ。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. [Salesforce URL] - インデックスを作成する Salesforce サイトのインスタンス URL を入力します。
 - b. [認証のタイプ] で [既存] または [新規] を選択して Salesforce 認証情報を保存します。新しいシークレットを作成すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Salesforce-」が自動的に追加されます。
 - B. [ユーザー名]、[パスワード]、[セキュリティトークン]、[コンシューマーキー]、[コンシューマーシークレット]、[認証 URL] には、Salesforce アカウントで作成した認証情報の値を入力します。
 - C. [認証を保存] を選択します。
 - c. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- d. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [添付ファイルのクロール] - 選択すると、添付されたすべてのオブジェクト、記事、フィードがクロールされます。
 - b. [標準オブジェクト]、[ナレッジ記事]、[Chatter フィード] - クロールする Salesforce エンティティまたはコンテンツタイプを選択します。

 Note

インデックス作成には、標準オブジェクト、ナレッジ記事、または Chatter フィードのうち少なくとも 1 つの設定情報を入力する必要があります。[ナレッジ記事] をクロールすると選択した場合は、インデックスを作成するナレッジ記事のタイプ、記事の名前、すべてのナレッジ記事の標準フィールドをインデックス化するか、カスタム記事タイプのフィールドのみをインデックス化するかを指定する必要があります。カスタム記事のインデックスを作成する場合は、記事タイプの内部名を指定する必要があります。最大 10 個の記事タイプを指定できます。

- c. 頻度 — Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
 - d. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. 標準ナレッジ記事、標準オブジェクトアタッチメント、および追加の推奨フィールドマッピング - インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。

 Note

`_document_body` へのインデックスマッピングが必要です。Salesforce ID フィールドと Amazon Kendra `_document_id` フィールド間のマッピングは変更できません。

- b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
- c. [次へ] を選択します。

9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Salesforce Amazon Kendra に接続するには

[SalesforceConfiguration](#) API では以下を指定する必要があります。

- サーバー URL - インデックスを作成する Salesforce サイトのインスタンス URL。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Salesforce アカountの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "authenticationUrl": "OAUTH endpoint that Amazon Kendra connects to get an OAUTH token",
  "consumerKey": "Application public key generated when you created your Salesforce application",
  "consumerSecret": "Application private key generated when you created your Salesforce application.",
  "password": "Password associated with the user logging in to the Salesforce instance",
  "securityToken": "Token associated with the user account logging in to the Salesforce instance",
  "username": "User name of the user logging in to the Salesforce instance"
}
```

- IAM role — を呼び出しCreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Salesforce コネクタとに必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[Salesforce データソースのIAM ロール](#)」を参照してください。
- インデックス作成には、標準オブジェクト、ナレッジ記事、または Chatter フィードのうち少なくとも1つの設定情報を入力する必要があります。
- 標準オブジェクト - [標準オブジェクト] のクローラを選択した場合は、標準オブジェクトの名前と、ドキュメントコンテンツを含む標準オブジェクトテーブル内のフィールドの名前を指定する必要があります。

- ナレッジ記事 - [ナレッジ記事] をクロールすると選択した場合は、インデックスを作成するナレッジ記事のタイプ、インデックスを作成するナレッジの状態、すべてのナレッジ記事の標準フィールドをインデックス化するのか、カスタム記事タイプのフィールドのみをインデックス化するのかを指定する必要があります。
- Chatter フィード - [Chatter フィード] のクロールを選択した場合は、インデックスを作成するコンテンツが含まれている Salesforce FeedItem テーブルの列の名前を指定する必要があります。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- 包含フィルターと除外フィルター - 特定の添付ファイルを含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、Salesforce データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール —Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。

Salesforce コネクタ V2.0

Salesforce は、サポート、営業、マーケティングの各チームを管理するための顧客関係管理 (CRM) ツールです。を使用して Amazon Kendra、Salesforce 標準オブジェクトやカスタムオブジェクトのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra Salesforce データソースコネクタは、次の Salesforce エディションをサポートしています: Developer Edition と Enterprise Edition。

Note

Salesforce コネクタ V1.0 / SalesforceConfiguration API は 2023 年に終了しました。Salesforce コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra Salesforce データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Salesforce データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Salesforce データソースのインデックスを作成する前に、Salesforce と AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Salesforce で、次の作業を行ったことを確認してください。

- Salesforce 管理アカウントを作成し、Salesforce への接続に使用するユーザー名とパスワードをメモすること。
- Salesforce への接続に使用されるアカウントに関連付けられた Salesforce セキュリティトークンをコピーすること。
- OAuth を有効にした Salesforce 接続アプリケーションアカウントを作成し、Salesforce 接続アプリケーションに割り当てられたコンシューマーキー (クライアント ID) とコンシューマーシークレット (クライアントシークレット) をコピーすること。クライアント ID とクライアントシークレットは、AWS Secrets Manager シークレットに保存されている認証情報として使用されます。詳細については、[接続アプリケーションに関する Salesforce のドキュメント](#)を参照してください。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- インデックスを作成する Salesforce インスタンスの URL をコピーすること。通常、URL は <https://<company>.salesforce.com/> です。サーバーは Salesforce 接続アプリケーションを実行している必要があります。
- ReadOnly プロファイルのクローンを作成し、すべてのデータの表示権限および記事の管理権限を追加して、Salesforce への読み取り専用アクセス権を持つユーザーに対する認証情報を Salesforce サーバーに追加すること。これらの認証情報は、接続を行うユーザーと、Amazon Kendra が接続する Salesforce 接続アプリケーションを識別します。
- 各ドキュメントが Salesforce および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であること確認すること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Salesforce の認証資格情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Salesforce データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Salesforce データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、Salesforce データソースの必要な詳細を指定する必要があります](#)。Salesforce をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Salesforce Amazon Kendra に接続するには：

1. にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。

2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

 Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Salesforce コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Salesforce コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [Salesforce URL] - インデックスを作成する Salesforce サイトのインスタンス URL を入力します。
 - b. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - c. 既存のシークレットを入力するか、新しいシークレットを作成すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。

- 認証 — Secrets Manager シークレットの作成 AWS ウィンドウに次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Salesforce-」が自動的に追加されます。
 - B. [ユーザー名]、[パスワード]、[セキュリティトークン]、[コンシューマーキー]、[コンシューマーシークレット]、[認証 URL] には、Salesforce アカウントで生成してダウンロードした認証情報の値を入力します。

 Note

Salesforce Developer Edition を使用する場合は、`https://login.salesforce.com/services/oauth2/token` または My Domain ログイン URL (`https://MyCompany.my.salesforce.com##`) を認証 URL として使用します。Salesforce Sandbox Edition を使用する場合は、`https://test.salesforce.com/services/oauth2/token` または My Domain ログイン URL (`MyDomainName--SandboxName.sandbox.my.salesforce.com` など) を認証 URL として使用します。

- C. [認証を保存] を選択します。
- d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- e. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- f. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうかは不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

g. [次へ] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

- a. [添付ファイルのクロール] - 選択すると、添付されたすべての Salesforce オブジェクトがクロールされます。
- b. [標準オブジェクト]、[添付ファイル付き標準オブジェクト]、[添付ファイルなしの標準オブジェクト]、[ナレッジ記事] - クロールする Salesforce エンティティまたはコンテンツタイプを選択します。
- c. インデックス作成には、標準オブジェクト、ナレッジ記事、または Chatter フィードのうち少なくとも 1 つの設定情報を入力する必要があります。[ナレッジ記事] のクロールを選択した場合は、インデックスを作成するナレッジ記事の種類を指定する必要があります。公開済み、アーカイブ済み、ドラフト、添付ファイルを選択できます。

[正規表現フィルター] - 特定のカタログアイテムを含む正規表現パターンを指定します。

8. [追加の設定]:

- [ACL 情報] デフォルトでは、すべてのアクセスコントロールリストが含まれます。アクセスコントロールリストを選択解除すると、そのカテゴリのファイルがすべて公開されます。
- [正規表現パターン] - 特定のファイルを含めるまたは除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。

[同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。

- 新規および変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

9. [次へ] を選択します。

10. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。

- a. 標準ナレッジ記事、標準オブジェクトアタッチメント、および追加の推奨フィールドマッピング - インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。

 Note

_document_body へのインデックスマッピングが必要です。Salesforce ID フィールドと Amazon Kendra _document_id フィールド間のマッピングは変更できません。Salesforce フィールドは、ドキュメントタイトルまたはドキュメント本文の Amazon Kendra 予約済み/デフォルトインデックスフィールドにマッピングできます。

Salesforce フィールドを Amazon Kendra ドキュメントタイトルとドキュメント本文フィールドにマッピングすると、Amazon Kendra はドキュメントタイトルと本文フィールドのデータを検索レスポンスで 사용합니다。

- b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
- c. [次へ] を選択します。

11. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Salesforce Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して[データソーススキーマ](#)の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマ SALESFORCEV2 を使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- ホスト URL - Salesforce インスタンスのホスト URL を指定します。
- 同期モード — データソースコンテンツが変更されたときに ガインデックスを更新する方法 Amazon Kendra を指定します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モード オプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
 - FORCED_FULL_CRAWL は、すべてのコンテンツの新しいインデックスを作成し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
 - CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Salesforce アカountの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "authenticationUrl": "OAUTH endpoint that Amazon Kendra connects to get an OAUTH token",
  "consumerKey": "Application public key generated when you created your Salesforce application",
  "consumerSecret": "Application private key generated when you created your Salesforce application",
  "password": "Password associated with the user logging in to the Salesforce instance",
  "securityToken": "Token associated with the user account logging in to the Salesforce instance",
  "username": "User name of the user logging in to the Salesforce instance"
```

```
}
```

- IAM role — を呼び出し>CreateDataSourceで IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Salesforce コネクタとに必要なパブリック APIsを呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[Salesforce データソースのIAM ロール](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定のドキュメント、アカウント、キャンペーン、ケース、連絡先、リード、機会、ソリューション、タスク、グループ、Chatter、カスタムエンティティファイルを含めるか除外するかを指定できます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ID クローラ — Amazon Kendraの ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、Salesforce データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

Note

_document_body へのインデックスマッピングが必要です。Salesforce ID フィールドと Amazon Kendra _document_id フィールド間のマッピングは変更できません。Salesforce フィールドは、ドキュメントタイトルまたはドキュメント本文の Amazon Kendra 予約済み/デフォルトインデックスフィールドにマッピングできます。Salesforce フィールドを Amazon Kendra ドキュメントタイトルとドキュメント本文フィールドにマッピングすると、Amazon Kendra はドキュメントタイトルと本文フィールドのデータを検索レスポンスで使します。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[「Salesforce テンプレートスキーマ」](#)を参照してください。

詳細はこちら

Salesforce データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [の更新された Salesforce コネクタ \(V2\) の発表 Amazon Kendra](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。

ServiceNow

ServiceNow は、IT サービス、チケットシステム、サポートなど、組織レベルのワークフローを作成および管理するためのクラウドベースのサービス管理システムを提供します。Amazon Kendra を使用して ServiceNow カタログ、ナレッジ記事、インシデント、および添付ファイルのインデックスを作成できます。

コンソール、[TemplateConfiguration](#) API [Amazon Kendra](#)、または [ServiceNowConfiguration](#) API を使用して、ServiceNow データソース Amazon Kendra に接続できます。

Amazon Kendra には ServiceNow コネクタの 2 つのバージョンがあります。各バージョンでサポートされる機能は次のとおりです。

ServiceNow コネクタ V1.0/[ServiceNowConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ServiceNow インスタンスバージョン: London、その他
- 包含/除外フィルター

ServiceNow コネクタ V2.0/[TemplateConfiguration](#) API

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- ServiceNow インスタンスバージョン: Rome、San Diego、Tokyo、その他
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

Note

ServiceNow コネクタ V1.0 / ServiceNowConfiguration API は 2023 年に終了しました。ServiceNow コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra ServiceNow データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [ServiceNow コネクタ V1.0](#)
- [ServiceNow コネクタ V2.0](#)
- [クエリでインデックス作成するドキュメントを指定する](#)

ServiceNow コネクタ V1.0

ServiceNow は、IT サービス、チケットシステム、サポートなど、組織レベルのワークフローを作成および管理するためのクラウドベースのサービス管理システムを提供します。Amazon Kendra を使用して、ServiceNow カタログ、ナレッジ記事、それらの添付ファイルのインデックスを作成できます。

Note

ServiceNow コネクタ V1.0 / ServiceNowConfiguration API は 2023 年に終了しました。ServiceNow コネクタ V2.0/TemplateConfiguration API に移行するか、こちらを使用することをお勧めします。

Amazon Kendra ServiceNow データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra ServiceNow データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- ServiceNow インスタンスバージョン: London、その他
- 包含/除外パターン: サービスカタログ、ナレッジ記事、およびその添付ファイル

前提条件

Amazon Kendra を使用して ServiceNow データソースのインデックスを作成する前に、ServiceNow とアカウントでこれらの変更を行ってください AWS。

ServiceNow で、次のものがあることを確認してください。

- ServiceNow 管理者アカウントを作成し、ServiceNow インスタンスを作成しました。
- ServiceNow インスタンス URL のホストをコピーしました。例えば、インスタンスの URL が `https://your-domain.service-now.com` の場合、入力するホスト URL の形式は `your-domain.service-now.com` です。
- ServiceNow インスタンスへの Amazon Kendra の接続を許可するユーザー名とパスワードを含む基本認証情報を記録しました。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- オプション：ユーザー名、パスワード、クライアント ID、クライアントシークレットを識別 Amazon Kendra して生成できる OAuth 2.0 認証情報トークンを設定しました。ユーザー名とパスワードは、ServiceNow ナレッジベースとサービスカタログへのアクセスを提供する必要があります。詳細については、[OAuth 2.0 認証に関する ServiceNow のドキュメント](#)を参照してください。
- 以下のアクセス許可を追加しました。
 - kb_category
 - kb_knowledge
 - kb_knowledge_base
 - kb_uc_cannot_read_mtom
 - kb_uc_can_read_mtom
 - sc_catalog
 - sc_category
 - sc_cat_item
 - sys_attachment
 - sys_attachment_doc

- `sys_user_role`
- ServiceNow で、また同じインデックスに使用する予定の他のデータソースでも、各ドキュメントが一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- ServiceNow の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済みです。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、ServiceNow データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

ServiceNow データソース Amazon Kendra に接続するには、がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、ServiceNow データソースの必要な詳細を指定する必要があります。ServiceNow をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください[前提条件](#)。

Console

ServiceNow Amazon Kendra に接続するには

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. [データソースを追加する] ページで [ServiceNow コネクタ V1.0] を選択し、[データソースを追加する] を選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. ServiceNow ホスト - ServiceNow ホスト URL を入力します。
 - b. ServiceNow バージョン - ServiceNow バージョンを選択します。

- c. ユースケースに基づいて、[基本認証] と [OAuth 2.0 認証] のどちらかを選択します。
- d. AWS Secrets Manager secret - 既存のシークレットを選択するか、ServiceNow 認証情報を保存する新しい Secrets Manager シークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-ServiceNow-」が自動的に追加されます。
 - ii. 基本認証を使用している場合 - ServiceNow アカountの [シークレット名]、[ユーザー名]、[パスワード] を入力します。

OAuth2 認証を使用する場合 - ServiceNow アカountで作成した [シークレット名]、[ユーザー名]、[パスワード]、[クライアント ID]、[クライアントシークレット] を入力します。

- iii. [シークレットを保存して追加する] を選択します。
- e. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリ認証情報にアクセスし、コンテンツにインデックスを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- f. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ナレッジ記事を含める] - ナレッジ記事にインデックスを作成することを選択します。
 - b. [ナレッジ記事のタイプ] - ユースケースに基づいて、[パブリック記事のみを含める] または [ServiceNow フィルタークエリに基づいて記事を含める] を選択します。[ServiceNow フィルタークエリに基づいて記事を含める] を選択した場合は、ServiceNow アカountからコピーした [フィルタークエリ] を入力する必要があります。
 - c. [ナレッジ記事の添付ファイルを含める] - ナレッジ記事の添付ファイルにインデックスを作成することを選択します。特定のファイルタイプを選択してインデックスを作成することもできます。
 - d. [カタログ項目を含める] - カatalog項目のインデックスを作成することを選択します。

- e. [カタログ項目の添付ファイルを含める] - カatalog項目の添付ファイルのインデックスを作成することを選択します。特定のファイルタイプを選択してインデックスを作成することもできます。
 - f. 頻度 — Amazon Kendra がデータソースと同期する頻度。
 - g. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. ナレッジ記事とサービスカタログ — Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドと、インデックスにマッピングする追加の推奨フィールドマッピングから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

ServiceNow Amazon Kendra に接続するには

[ServiceNowConfiguration API](#) を使用して以下を指定する必要があります。

- データソース URL - ServiceNow URL を指定します。ホストエンドポイントは、*your-domain.service-now.com* のようになります。
- データソースホストインスタンス - ServiceNow ホストインスタンスのバージョンを LONDON または OTHERS として指定します。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — ServiceNow アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。

基本認証を使用している場合、シークレットは以下のキーを持つ JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}
```

OAuth 2.0 認証を使用している場合、シークレットは以下のキーを持つ JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password",
  "clientId": "client id",
  "clientSecret": "client secret"
}
```

- IAM role - を呼び出し>CreateDataSourceで IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、ServiceNow コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for ServiceNow data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- フィールドマッピング - 選択すると、ServiceNow データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。その他のすべてのフィールドはオプションです。

- 包含フィルターと除外フィルター - カタログとナレッジ記事の特定の添付ファイルを含めるか除外するかを指定します。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定

した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- インデックスパラメータ - 次のことを行うかどうかも指定できます。
 - ナレッジ記事とサービスカタログ、またはその両方にインデックスを作成します。ナレッジ記事とサービスカタログ項目のインデックスを作成する場合は、Amazon Kendra インデックスのインデックسدキュメントコンテンツフィールドにマッピングする ServiceNow フィールドの名前を指定する必要があります。
 - ナレッジ記事とカタログ項目へのインデックス添付ファイル。
 - 1 つ以上のナレッジベースからドキュメントを選択する ServiceNow クエリを使用します。ナレッジベースは、パブリックまたはプライベートのいずれかです。詳細については、[クエリでインデックス作成するドキュメントを指定する](#)を参照してください。

詳細

ServiceNow データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra ServiceNow Online コネクタの開始方法](#)

ServiceNow コネクタ V2.0

ServiceNow は、IT サービス、チケットシステム、サポートなど、組織レベルのワークフローを作成および管理するためのクラウドベースのサービス管理システムを提供します。Amazon Kendra を使用して ServiceNow カタログ、ナレッジ記事、インシデント、および添付ファイルのインデックスを作成できます。

Amazon Kendra ServiceNow データソースコネクタのトラブルシューティングについては、「」を参照してください[データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra ServiceNow データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- ServiceNow インスタンスバージョン: Rome、San Diego、Tokyo、その他
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して ServiceNow データソースのインデックスを作成する前に、ServiceNow とアカウントでこれらの変更を行ってください AWS。

ServiceNow で、次のものがあることを確認してください。

- パーソナルまたはエンタープライズデベロッパーインスタンスを作成し、管理者ロールを持つ ServiceNow インスタンスを作成しました。
- ServiceNow インスタンス URL のホストをコピーしました。入力するホスト URL の形式は *your-domain.service-now.com* です。Amazon Kendra に接続するには、ServiceNow インスタンス URL が必要です。
- が ServiceNow インスタンス Amazon Kendra に接続できるように、ユーザー名とパスワードの基本的な認証情報を記録しました。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- オプション: ユーザー名、パスワード、生成されたクライアント ID、およびクライアントシークレット Amazon Kendra を使用して を識別できる OAuth 2.0 クライアント認証情報を設定しました。詳細については、[OAuth 2.0 認証に関する ServiceNow のドキュメント](#)を参照してください。
- 以下のアクセス許可を追加しました。

- kb_category
 - kb_knowledge
 - kb_knowledge_base
 - kb_uc_cannot_read_mtom
 - kb_uc_can_read_mtom
 - sc_catalog
 - sc_category
 - sc_cat_item
 - sys_attachment
 - sys_attachment_doc
 - sys_user_role
- ServiceNow で、また同じインデックスに使用する予定の他のデータソースでも、各ドキュメントが一意であることが確認されていること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- ServiceNow の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済みです。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシーク

レットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、ServiceNow データソースを接続するときに、コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

ServiceNow データソース Amazon Kendra に接続するには、 がデータ Amazon Kendra にアクセスできるように、ServiceNow データソースの必要な詳細を指定する必要があります。ServiceNow をまだ設定していない場合は、Amazon Kendra 「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

ServiceNow Amazon Kendra に接続するには

1. にサインイン AWS Management Console し、 [Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、ServiceNow コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた ServiceNow コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。

- c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. ServiceNow ホスト - ServiceNow ホスト URL を入力します。入力するホスト URL の形式は *your-domain.service-now.com* です。
 - b. ServiceNow バージョン - ServiceNow インスタンスのバージョンを選択します。ローマ、サンディエゴ、東京、その他から選択できます。
 - c. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - d. 認証 - 基本認証と OAuth 2.0 認証から選択します。
 - e. [AWS Secrets Manager シークレット] - ServiceNow の認証情報を保存する既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。ウィンドウで、以下の情報を入力します。
 - i. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-ServiceNow-」が自動的に追加されます。
 - ii. 基本認証を使用している場合 - ServiceNow アカountの [シークレット名]、[ユーザー名]、[パスワード] を入力します。

OAuth2.0 認証を使用する場合 - ServiceNow アカountで作成した [シークレット名]、[ユーザー名]、[パスワード]、[クライアント ID]、[クライアントシークレット] を入力します。
 - iii. シークレットを保存して追加します。
 - f. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。

- g. ID クローラー - Amazon Kendraの ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- h. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、新しい IAM ロールを作成してリポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスします。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- i. [Next (次へ)] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. [ナレッジ記事] の場合は、以下のオプションから選択してください。
 - [ナレッジ記事] - ナレッジ記事にインデックスを作成することを選択します。
 - [ナレッジ記事の添付ファイル] - ナレッジ記事の添付ファイルにインデックスを作成することを選択します。
 - [ナレッジ記事のタイプ] - ユースケースに基づいて、[パブリック記事のみ] または [ServiceNow フィルタークエリに基づくナレッジ記事] を選択します。[ServiceNow フィルタークエリに基づいて記事を含める] を選択した場合は、ServiceNow アカウントからコピーした [フィルタークエリ] を入力する必要があります。フィルタークエリの例には、`workflow_state=draft^EQ、kb_knowledge_base=dfc19531bf2021003f07e2c.ISNOTEMPTY^EQ、article_type=text^active=true^EQ` などがあります。

⚠ Important

パブリック記事のみのクローリングを選択した場合、は ServiceNow でパブリックアクセスロールが割り当てられたナレッジ記事のみを Amazon Kendra クローリングします。

- [簡単な説明フィルターに基づいて記事を含める] - 特定の文章を含めるか除外する正規表現パターンを指定します。
- b. [サービスカタログ項目] の場合:
- [サービスカタログ項目] - サービスカタログ項目のインデックスを作成することを選択します。
 - [サービスカタログ項目の添付ファイル] - サービスカタログ項目の添付ファイルのインデックスを作成することを選択します。
 - [アクティブなサービスカタログ項目] - アクティブなサービスカタログ項目のインデックスを作成することを選択します。
 - [非アクティブなサービスカタログ項目] - 非アクティブなサービスカタログ項目のインデックスを作成することを選択します。
 - [フィルタークエリ] - ServiceNow インスタンスで定義されたフィルターに基づいてサービスカタログ項目を含めることを選択します。フィルタークエリの例としては、`short_descriptionLIKEAccess^category=2809952237b1300054b6a3549dbe5` などがあります。
 - [簡潔な説明フィルターに基づいてサービスカタログ項目を含める] - 特定のカタログ項目を含めるための正規表現パターンを指定します。
- c. [インシデント] の場合:
- [インシデント] - サービスインシデントのインデックスを作成することを選択します。
 - [インシデント添付ファイル] - インシデント添付ファイルのインデックスを作成することを選択します。
 - [アクティブなインシデント] - アクティブなインシデントのインデックスを作成することを選択します。
 - [非アクティブなインシデント] - 非アクティブなインシデントのインデックスを作成することを選択します。

- [アクティブなインシデントタイプ] - ユースケースに応じて、[すべてのインシデント]、[未解決のインシデント]、[オープン - 未割り当てのインシデント]、[解決済みのインシデント] から選択します。
 - [フィルタークエリ] - ServiceNow インスタンスで定義されたフィルターに基づいてインシデントを含めることを選択します。フィルタークエリの例には、`short_descriptionLIKEtest^urgency=3^state=1^EQ`、`priority=2^category=1` などがあります。
 - [簡単な説明フィルターに基づいてインシデントを含める] - 特定のインシデントを含む正規表現パターンを指定します。
- d. [追加の設定]:
- [ACL 情報] - 選択したエンティティのアクセス制御リストがデフォルトで含まれます。アクセスコントロールリストを選択解除すると、そのカテゴリのファイルがすべて公開されます。選択されていないエンティティの ACL オプションは自動的に無効になります。パブリック記事には ACL は適用されません。
 - 最大ファイルサイズ - Amazon Kendra がクロールするファイルサイズの制限を MBs 単位で指定します。Amazon Kendra は、定義したサイズ制限内のファイルのみをクロールします。デフォルトのファイルサイズは 50 MB です。最大ファイルサイズは 0 MB より大きくし、50 MB 以下にする必要があります。
 - [添付ファイルの正規表現パターン] - カタログ、ナレッジ記事、インシデントの特定の添付ファイルを含めたり除外したりする正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。
- e. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。

- f. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - g. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. デフォルトのフィールドマッピング - インデックスにマッピングする、Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

ServiceNow Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマ `SERVICENOWV2` を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す `TEMPLATE` ときにデータソースをとして指定します。
- ホスト URL - ServiceNow ホストインスタンスのバージョンを指定します。例えば、*your-domain.service-now.com* です。
- 認証タイプ - ServiceNow basicAuth OAuth2 インスタンスに使用する認証のタイプを指定します。
- ServiceNow インスタンスバージョン - Tokyo、San Diego、または のいずれかで Rome、使用する ServiceNow インスタンスを指定します `Others`。
- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに インデックスを更新する方法 Amazon Kendra を指定します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。

- **FORCED_FULL_CRAWL** データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- **FULL_CRAWL** は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — ServiceNow アカウントで作成した認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。

基本認証を使用する場合、シークレットは以下のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password"
}
```

- OAuth2 クライアント認証情報を使用する場合、シークレットは次のキーを持つ JSON 構造に保存されます。

```
{
  "username": "user name",
  "password": "password",
  "clientId": "client id",
  "clientSecret": "client secret"
}
```

- IAM role - を呼び出し `CreateDataSource` で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、ServiceNow コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す `RoleArn` タイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for ServiceNow data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - `VpcConfiguration` で `CreateDataSource` を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。

- 包含フィルターと除外フィルター - ナレッジ記事、サービスカタログ、インシデントのファイル名とファイルタイプを使用して、特定の添付ファイルを含めるか除外するかを指定できます。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- インデックスを作成する特定のドキュメント — ServiceNow クエリを使用して、プライベートナレッジベースを含む 1 つ以上のナレッジベースから必要なドキュメントを指定できます。ナレッジベースへのアクセスは、ServiceNow インスタンスへの接続に使用するユーザーによって決定されます。詳細については、[クエリでインデックス作成するドキュメントを指定する](#)を参照してください。
- インデックスパラメータ - 次のことを行うかどうか指定できます。
 - ナレッジ記事、サービスカタログ、インシデントまたはそのすべてにインデックスを作成します。ナレッジ記事、サービスカタログ項目、インシデントのインデックスを作成する場合は、Amazon Kendra インデックスのインデックスドキュメントコンテンツフィールドにマッピングされている ServiceNow フィールドの名前を指定する必要があります。
 - ナレッジ記事、サービスカタログ項目、インシデントへのインデックス添付ファイル。
 - short description フィルターパターンに基づいてナレッジ記事、サービスカタログ項目、インシデントを含めます。
 - アクティブと非アクティブなサービスカタログ項目とインシデントをフィルタリングすることを選択できます。
 - インシデントタイプに基づいてインシデントをフィルタリングすることを選択します。
 - ACL をクロールするエンティティを選択します。
 - ServiceNow クエリを使用して、プライベートナレッジベースを含む 1 つ以上のナレッジベースから必要なドキュメントを指定できます。ナレッジベースへのアクセスは、ServiceNow インスタンスへの接続に使用するユーザーによって決定されます。詳細については、[クエリでインデックス作成するドキュメントを指定する](#)を参照してください。

- ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- フィールドマッピング - 選択すると、ServiceNow データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントと同等のドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[ServiceNow テンプレートスキーマ](#)」を参照してください。

詳細

ServiceNow データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [の更新された Amazon Kendra ServiceNow コネクタ \(V2\) の発表の開始方法 Amazon Kendra](#)

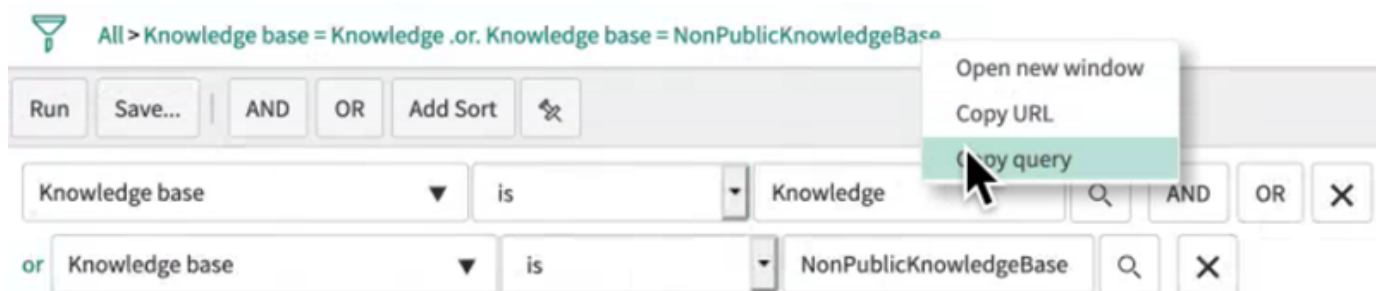
クエリでインデックス作成するドキュメントを指定する

ServiceNow クエリを使用して、Amazon Kendra インデックスに含めるドキュメントを指定できます。クエリを使用する場合、プライベートナレッジベースを含む複数のナレッジベースを指定できます。ナレッジベースへのアクセスは、ServiceNow インスタンスへの接続に使用するユーザーによって決定されます。

クエリを構築するには、ServiceNow クエリビルダーを使用します。ビルダーを使用して、クエリを作成し、クエリが正しいドキュメントのリストを返すことをテストできます。

ServiceNow コンソールを使用してクエリを作成するには

1. ServiceNow コンソールにログインします。
2. 左側のメニューで、[Knowledge] (ナレッジ)、[Article] (記事)、[All] (すべて) の順に選択します。
3. ページの上部で、フィルターのアイコンをクリックします。
4. クエリビルダーを使用してクエリを作成します。
5. クエリが完了したら、クエリを右クリックし、[Copy query] (クエリのコピー) を選択して、クエリビルダーからクエリをコピーします。このクエリを保存して 使用します Amazon Kendra。



クエリをコピーするときに、クエリパラメータを変更しないように注意してください。クエリパラメータのいずれかが認識されない場合、ServiceNow はパラメータを空として扱い、結果をフィルタリングするために使用しません。

Slack

Slack は、ユーザーがさまざまなパブリックチャンネルやプライベートチャンネルを通じてメッセージや添付ファイルを送信できる、エンタープライズコミュニケーションアプリです。Amazon Kendra を使用して、Slack のパブリックチャンネルとプライベートチャンネル、ボットとアーカイブのメッセージ、ファイルと添付ファイル、ダイレクトメッセージとグループメッセージのインデックスを作成できます。また、フィルタリングする特定のコンテンツを選択することもできます。

Note

Amazon Kendra がアップグレードされた Slack コネクタをサポートするようになりました。コンソールが自動的にアップグレードされました。コンソールで作成する新しいコネクタは、アップグレードされたアーキテクチャを使用します。API を使用する場合は、

[TemplateConfiguration](#) オブジェクトではなく [SlackConfiguration](#) オブジェクトを使用してコネクタを設定する必要があります。

古いコンソールと API アーキテクチャを使用して設定されたコネクタは、引き続き設定どおりに機能します。ただし、編集または更新することはできません。コネクタ設定を編集または更新する場合は、新しいコネクタを作成する必要があります。

コネクタワークフローをアップグレードされたバージョンに移行することをお勧めします。古いアーキテクチャを使用して設定されたコネクタのサポートは、2024 年 6 月までに終了する予定です。

[Amazon Kendra コンソール](#) または [TemplateConfiguration](#) API を使用して Slack データソース Amazon Kendra に接続できます。

Slack データソースコネクタ Amazon Kendra のトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Slack データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Slack データソースのインデックスを作成する前に、Slack および AWS アカウントでこれらの変更を行ってください。

Slack で、次の作業を行ったことを確認してください。

- Slack Bot User OAuth トークンまたは Slack User OAuth トークンを設定しました。いずれかのトークンを選択して Slack データソース Amazon Kendra に接続できます。を認証情報として使用するには、トークンが必要です。詳しくは、[アクセストークンに関する Slack のドキュメント](#)をご覧ください。

Note

Slack 認証情報の一部としてボットトークンを使用する場合、ダイレクトメッセージやグループメッセージのインデックスを作成できないため、インデックスを作成するチャンネルにボットトークンを追加する必要があります。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

- Slack ワークスペースのメインページ URL にある Slack ワークスペースチーム ID をメモすること。例えば、<https://app.slack.com/client/T0123456789/...> の **T0123456789** がチーム ID です。
- 次の OAuth スコープ/アクセス許可を追加しました。

ユーザートークンの範囲	ボットトークンの範囲
- channels:history - channels:read - emoji:read - files:read - groups:history - groups:read - im:history - im:read	- channels:history - channels:manage - channels:read - conversations.connect:manage - conversations.connect:read - files:read - groups:history - groups:read

ユーザートークンの範囲	ボットトークンの範囲
• mpim:history • mpim:read • team:read • users.profile:read • users:read • users:read.email	• im:history • im:read • mpim:history • mpim:read • リアクション：読み取り • team:read • usergroups:read • users.profile:read • users:read • users:read.email

- 各ドキュメントが Slack および同じインデックスに使用する予定の他のデータソース間で一意であると確認すること。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。
- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合は、IAM ロールの ARN を記録しました。

Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Slack の認証資格情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録済み。

Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Slack データソースの接続時にコンソールを使用して新しい IAM ロールとシークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Slack データソース Amazon Kendra に接続するには、Slack データ Amazon Kendra にアクセスできるように、Slack データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Slack をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、[「 」を参照してください前提条件](#)。

Console

Slack Amazon Kendra に接続するには

1. [AWS Management Console](#) にサインインし、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Slack コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Slack コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。

- a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索およびフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [Next (次へ)] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
- a. Slack ワークスペースチーム ID の場合 - Slack ワークスペースのチーム ID。チーム ID は、Slack ワークスペースのメインページの URL にあります。例えば、<https://app.slack.com/client/T0123456789/...> の **T0123456789** がチーム ID です。
 - b. 認可 - ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - c. secret - 既存のシーAWS Secrets Manager クレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Slack 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. [AWS Secrets Manager シークレットウィンドウを作成] に次の情報を入力します。
 - A. [シークレット名] - シークレットの名前。シークレット名に、プレフィックス「AmazonKendra-Slack-」が自動的に追加されます。
 - B. Slack トークンの場合 - Slack を設定した認証情報値を入力します。
 - ii. シークレットを保存して追加します。
 - d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
 - e. ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結

果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーとグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。

- f. IAM role - 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- g. [Next (次へ)] を選択します。

7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。

- a. コンテンツのタイプを選択 — クロールする Slack エンティティまたはコンテンツタイプを選択します。すべてのチャンネル、パブリックチャンネル、プライベートチャンネル、グループメッセージ、プライベートメッセージから選択できます。
- b. クロール開始日の選択 — コンテンツのクロールを開始する日付を入力します。
- c. 追加設定 - ボットとアーカイブされたメッセージを含めることを選択し、正規表現パターンを使用して特定のコンテンツを含めるか除外します。

 Note

チャンネル IDs とチャンネル名の両方に を含めることを選択した場合、Slack コネクタはチャンネル名よりもチャンネル IDs Amazon Kendra を優先します。特定のプライベートメッセージとグループメッセージを含めることを選択した場合、Amazon Kendra Slack コネクタはすべてのプライベートメッセージとグループメッセージを無視し、指定したプライベートメッセージとグループメッセージのみをクロールします。

- d. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべ

てのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。

- 完全同期: データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換え、すべてのコンテンツのインデックスを作成します。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
- e. 同期実行スケジュールで、頻度 - データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - f. [Next (次へ)] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド - インデックスにマッピングする Amazon Kendra 、生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Slack Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース - JSON スキーマ SLACK を使用する場合は、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、[CreateDataSource](#) API を呼び出す TEMPLATE ときにデータソースを として指定します。
- Slack ワークスペースチーム ID - Slack のメインページ URL からコピーした Slack チーム ID。

- 開始日 — Slack ワークスペースチームからのデータのクローリングを開始する日付。日付は yyyy-mm-dd の形式にする必要があります。
- 同期モード - データソースコンテンツが変更されたときに Amazon Kendra がインデックスを更新する方法を指定します。データソースをと Amazon Kendra 初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクローラされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。以下のいずれかから選択できます。
- FORCED_FULL_CRAWL データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えて、すべてのコンテンツのインデックスを新しく作成します。
- FULL_CRAWL は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツとインデックスコンテンツを追跡できます。
- CHANGE_LOG は、データソースがインデックスと同期するたびに、新規および変更されたコンテンツのみのインデックスを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、コンテンツの変更を追跡し、前回の同期以降に変更されたコンテンツのインデックスを作成できます。
- ID クローラー - Amazon Kendra の ID クローラーを有効にするかどうかを指定します。ID クローラーは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラーをオンにして、検索結果の [ユーザーコンテキストフィルタリング](#) を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラーがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラーがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリングのためにユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- シークレット Amazon リソースネーム (ARN) — Slack アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "slackToken": "token"
}
```

- IAM role - を呼び出し CreateDataSource で IAM ロールに Secrets Manager シークレットへのアクセス許可を付与し、Slack コネクタとに必要なパブリック APIs を呼び出す RoleArn タ

インデックスを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[Slack データソースの IAM ロール](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。
- 特定のチャンネル — パブリックチャンネルまたはプライベートチャンネルでフィルタリングし、ID で特定のチャンネルを指定します。
- チャンネルとメッセージのタイプ - がパブリックチャンネルとプライベートチャンネル、グループメッセージとダイレクトメッセージ、ボットメッセージとアーカイブメッセージのインデックス Amazon Kendra を作成するかどうか。Slack 認証情報の一部としてボットトークンを使用する場合、インデックスを作成するチャンネルにボットトークンを追加する必要があります。ボットトークンを使用してダイレクトメッセージやグループメッセージのインデックスを作成することはできません。
- ルックバック — Slack コネクタが、最後のコネクタ同期前の指定された時間数まで更新または削除されたコンテンツをクロールするようにlookBackパラメータを設定できます。
- 包含フィルターと除外フィルター - 特定の Slack コンテンツを含めるか除外するかを指定します。Slack 認証情報の一部としてボットトークンを使用する場合、インデックスを作成するチャンネルにボットトークンを追加する必要があります。ボットトークンを使用してダイレクトメッセージやグループメッセージのインデックスを作成することはできません。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- フィールドマッピング - 選択すると、Slack データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定が必要なその他の重要な JSON キーのリストについては、「[Slack template schema](#)」を参照してください。

詳細

Amazon Kendra と Slack データソースとの統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Unravel the knowledge in Slack workspaces with intelligent search using the Amazon Kendra Slack connector](#)

Zendesk

Zendesk は、企業がカスタマーサポートのやり取りを自動化および強化するのに役立つ顧客関係管理システムです。Amazon Kendra を使用して、Zendesk サポートチケット、チケットコメント、チケット添付ファイル、ヘルプセンター記事、記事コメント、記事コメント添付ファイル、ガイドコミュニティトピック、コミュニティ投稿、コミュニティ投稿コメントのインデックスを作成できます。

特定の組織内のチケットのみにインデックスを付ける場合は、組織名でフィルタリングできます。Zendesk からのデータのクロールを開始するタイミングに合わせて、クロール日を設定することもできます。

[Amazon Kendra コンソール](#)と [TemplateConfiguration](#) API を使用して Zendesk データソース Amazon Kendra に接続できます。

Zendesk データソースコネクタ Amazon Kendra のトラブルシューティングについては、「」を参照してください [データソースのトラブルシューティング](#)。

トピック

- [サポートされている機能](#)
- [前提条件](#)
- [接続手順](#)
- [詳細はこちら](#)
- [メモ](#)

サポートされている機能

Amazon Kendra Zendesk データソースコネクタは、次の機能をサポートしています。

- フィールドマッピング
- ユーザーアクセスコントロール
- 包含/除外フィルター
- 変更ログ、完全および増分コンテンツ同期
- 仮想プライベートクラウド (VPC)

前提条件

Amazon Kendra を使用して Zendesk データソースのインデックスを作成する前に、Zendesk および AWS アカウントでこれらの変更を行います。

Zendesk で以下を確認してください。

- Zendesk Suite (Professional/Enterprise) の管理者アカウントを作成しました。
- Zendesk のホスト URL を書き留めました。たとえば、`https://{sub-domain}.zendesk.com/` です。

Note

(オンプレミス/サーバー) Amazon Kendra AWS Secrets Manager は、 に含まれるエンドポイント情報が、データソース設定の詳細で指定されたエンドポイント情報と同じかどうかを確認します。[混乱する代理問題](#)は、ユーザーがアクションを実行するアクセス許可がないにもかかわらず、Amazon Kendra をプロキシとして使用して設定された秘密にアクセスし、アクションを実行するセキュリティの問題です。後でエンドポイント情報を変更する場合は、新しいシークレットを作成してこの情報を同期する必要があります。

- OAuth 2.0 認証をセットアップします。
 1. 管理センターで、アプリと統合 > APIs Zendesk API に移動します。
 2. OAuth クライアントタブを選択し、OAuth クライアントの追加」をクリックします。
 3. 以下の OAuth クライアントの詳細を設定します。クライアント名と説明の設定、クライアントの種類を「機密URLs を追加する、生成されたクライアントシークレットを保存して安全に保存する。
 4. OAuth クライアントに必要な「読み取り」スコープ (書き込みアクセスが必要な場合は「読み取り書き込み」) があることを確認します。
 5. 暗黙的な許可フローを使用してアクセストークンを生成します。
 - ブラウザで、以下に移動します。 `https://{subdomain}.zendesk.com/oauth/authorizations/new?response_type=token&client_id=<your_client_id>&scope=read`
 - プロンプトが表示されたら、アプリケーションを認証して承認します。
 - 認可後、フラグメント内のアクセストークンを含む URL にリダイレクトされます (# の後)。このトークンを抽出します。
 6. 生成されたアクセストークンを安全に保存します。これは、Kendra 統合に使用する「暗黙的な付与トークン」です。
-  **Note**

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することとは推奨しません。
- オプション: Amazon Kendra による接続を許可する SSL 証明書をインストールしました。
- 各ドキュメントが Zendesk および同じインデックスを使用予定の他のデータソース間で一意であることを確認しました。インデックスに使用する各データソースには、データソース全体に同じドキュメントが含まれていてはなりません。ドキュメント ID はインデックス全体に適用され、インデックスごとに一意である必要があります。

で AWS アカウント、以下があることを確認します。

- [Amazon Kendra インデックスを作成し](#)、API を使用している場合はインデックス ID を記録しました。

- データソースの [IAM ロールを作成し](#)、API を使用している場合はロールの ARN を記録しました IAM。

 Note

認証タイプと認証情報を変更する場合は、IAM ロールを更新して正しい AWS Secrets Manager シークレット ID にアクセスする必要があります。

- Zendesk の認証情報を AWS Secrets Manager シークレットに保存し、API を使用している場合は、シークレットの ARN を記録しました。

 Note

認証情報とシークレットは、定期的に更新またはローテーションすることをお勧めします。セキュリティに必要なアクセスレベルのみを提供してください。認証情報とシークレットを、データソース、コネクタバージョン 1.0 と 2.0 (該当する場合) で再利用することは推奨しません。

既存の IAM ロールまたはシークレットがない場合は、Zendesk データソースを接続するときに コンソールを使用して新しい IAM ロールと Secrets Manager シークレットを作成できます Amazon Kendra。API を使用している場合は、既存の IAM ロールと Secrets Manager シークレットの ARN とインデックス ID を指定する必要があります。

接続手順

Zendesk データソース Amazon Kendra に接続するには、[ガデータ Amazon Kendra にアクセスできるように](#)、Zendesk データソースの必要な詳細を指定する必要があります。Zendesk をまだ設定していない場合は Amazon Kendra、「」を参照してください [前提条件](#)。

Console

Zendesk Amazon Kendra に接続するには

- にサインイン AWS Management Console し、[Amazon Kendra コンソール](#)を開きます。
- 左側のナビゲーションペインで、[インデックス] を選択し、インデックスのリストから使用するインデックスを選択します。

Note

[インデックスの設定] で、[ユーザーアクセスコントロール] 設定を設定または編集できます。

3. [使用開始] ページで、[データソースを追加] を選択します。
4. データソースの追加ページで、Zendesk コネクタを選択し、コネクタの追加を選択します。バージョン 2 (該当する場合) を使用している場合は、「V2.0」タグが付いた Zendesk コネクタを選択します。
5. [データソースの詳細を指定] ページで、次の情報を入力します。
 - a. [名前と説明] の [データソース名] に、データソースの名前を入力します。ハイフン (-) は使用できますが、スペースは使用できません。
 - b. (オプション) [説明] - オプションで、データソースの説明を入力します。
 - c. デフォルト言語 - インデックスのドキュメントをフィルタリングする言語を選択します。特に指定しない限り、言語はデフォルトで英語に設定されます。ドキュメントのメタデータで指定された言語は、選択した言語よりも優先されます。
 - d. タグで、新しいタグを追加する - リソースを検索してフィルタリングしたり、AWS コストを追跡したりするためのオプションのタグを含めます。
 - e. [次へ] を選択します。
6. [アクセスとセキュリティの定義] ページで、次の情報を入力します。
 - a. Zendesk URL - Zendesk URL を入力します。たとえば、`https://{sub-domain}.zendesk.com/` です。
 - b. 認可 — ACL があり、アクセスコントロールに使用する場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をオンまたはオフにします。ACL は、ユーザーとグループがアクセスできるドキュメントを指定します。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
 - c. AWS Secrets Manager secret — 既存のシークレットを選択するか、新しい Secrets Manager シークレットを作成して Zendesk 認証情報を保存します。新しいシークレットの作成を選択すると、AWS Secrets Manager シークレットウィンドウが開きます。
 - i. 次の構造で新しいシークレットを作成します。


```
{
    "hostUrl": "https://yoursubdomain.zendesk.com/",
    "accessToken": "your_implicit_grant_access_token"
}
```

- ii. シークレットを保存して追加します。
- d. [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VPC の使用を選択できます。選択する場合は、[サブネット] と [VPC セキュリティグループ] を追加する必要があります。
- e. ID クローラ — Amazon Kendra の ID クローラを有効にするかどうかを指定します。ID クローラは、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報を使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングします。ドキュメントの ACL があり、ACL を使用することを選択した場合は、Amazon Kendra ID クローラをオンにして検索結果の[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)を設定することもできます。それ以外の場合、ID クローラがオフになっていると、すべてのドキュメントをパブリックに検索できます。ドキュメントのアクセスコントロールを使用し、ID クローラがオフになっている場合は、[PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーコンテキストフィルタリング用のユーザーおよびグループのアクセス情報をアップロードすることもできます。
- f. IAM role — 既存の IAM ロールを選択するか、リポジトリの認証情報とインデックスコンテンツにアクセスするための新しい IAM ロールを作成します。

 Note

IAM インデックスに使用される ロールは、データソースには使用できません。インデックスやよくある質問に既存のロールが使用されているかどうか不明な場合は、エラーを避けるため、[新しいロールを作成] を選択してください。

- g. [次へ] を選択します。
7. [同期設定の構成] ページで、次の情報を入力します。
- a. コンテンツの選択 - チケットからクローラするコンテンツのタイプを選択して、記事やコミュニティピックなどを中心にします。
 - b. 組織名 — コンテンツをフィルタリングする Zendesk 組織名を入力します。
 - c. 同期開始日 — コンテンツのクローラを開始する日付を入力します。
 - d. [正規表現パターン] - 特定のファイルを含めるまたは除外する正規表現パターンを追加します。最大 100 のパターンを追加できます。

- e. [同期モード] - データソースのコンテンツが変更されたときのインデックスの更新方法を選択します。データソースを Amazon Kendra と初めて同期すると、デフォルトですべてのコンテンツがクロールされ、インデックスが作成されます。同期モードオプションとして完全同期を選択しなくても、最初の同期が失敗した場合は、データの完全同期を実行する必要があります。
 - 完全同期: すべてのコンテンツを新しくインデックス化し、データソースがインデックスと同期するたびに既存のコンテンツを置き換えます。
 - 新しい変更された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新しいコンテンツと変更されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - 新規、変更、削除された同期: データソースがインデックスと同期するたびに、新規、変更、削除されたコンテンツのインデックスのみを作成します。Amazon Kendra は、データソースのメカニズムを使用して、前回の同期以降に変更されたコンテンツの変更とインデックスコンテンツを追跡できます。
 - f. Sync run schedule for Frequency — データソースコンテンツを同期してインデックスを更新する頻度を選択します。
 - g. [次へ] を選択します。
8. [フィールドマッピングを設定] ページで、次の情報を入力します。
- a. デフォルトのデータソースフィールド — インデックスにマッピングする Amazon Kendra 生成されたデフォルトのデータソースフィールドから選択します。
 - b. [フィールドを追加] - カスタムデータソースフィールドを追加して、マッピング先のインデックスフィールド名とフィールドデータタイプを作成します。
 - c. [次へ] を選択します。
9. [確認と作成] ページで、入力した情報が正しいことを確認し、[データソースを追加] を選択します。このページで情報の編集を選択することもできます。データソースが正常に追加されると、データソースが [データソース] ページに表示されます。

API

Zendesk Amazon Kendra に接続するには

[TemplateConfiguration](#) API を使用して [データソーススキーマ](#) の JSON を指定する必要があります。これには、以下の情報を入力する必要があります。

- データソース — JSON スキーマZENDESKを使用する場合、データソースタイプを [TemplateConfiguration](#) として指定します。また、 [CreateDataSource](#) API を呼び出すTEMPLATEときにデータソースを として指定します。
- ホスト URL - 接続設定またはリポジトリエンドポイントの詳細の一部として Zendesk ホスト URL を提供します。例えば、 <https://yoursubdomain.zendesk.com> です。
- 変更ログ — Amazon Kendra が Zendesk データソース変更ログメカニズムを使用して、インデックスでドキュメントを更新する必要があるかどうかを判断するかどうか。

 Note

Amazon Kendra にすべてのドキュメントをスキャンさせない場合は、変更ログを使用します。変更ログが大きい場合、変更ログを処理するよりも Zendesk データソース内のドキュメントのスキャンに Amazon Kendra 時間がかかる場合があります。Zendesk データソースをインデックスに初めて同期する場合は、すべてのドキュメントがスキャンされます。

- Secret Amazon Resource Name (ARN) — Zendesk アカウントの認証情報を含む Secrets Manager シークレットの Amazon リソースネーム (ARN) を指定します。シークレットは、次のキーを含む JSON 構造に保存されます。

```
{
  "hostUrl": "https://yoursubdomain.zendesk.com",
  "clientId": "client ID",
  "clientSecret": "Zendesk client secret",
  "userName": "Zendesk user name",
  "password": "Zendesk password"
}
```

- IAM role - を呼び出しCreateDataSourceで、シー Secrets Manager クレットにアクセスするためのアクセス許可を IAM ロールに提供し、Zendesk コネクタと に必要なパブリック APIs を呼び出すRoleArnタイミングを指定します Amazon Kendra。詳細については、「[IAM roles for Zendesk data sources](#)」を参照してください。

オプションで、次の機能を追加することもできます。

- [仮想プライベートクラウド (VPC)] - VpcConfiguration で CreateDataSource を呼び出すタイミングを指定します。詳細については、「[を使用する Amazon Kendra ようにを設定する Amazon VPC](#)」を参照してください。

- ドキュメント/コンテンツタイプ — クロールするかどうかを指定します。
- サポートチケット、チケットコメント、チケットコメントの添付ファイル
- ヘルプセンターの記事、記事の添付ファイル、記事のコメント
- コミュニティピック、投稿、投稿コメントのガイド
- 包含フィルターと除外フィルター — 特定の Slack コンテンツを含めるか除外するかを指定します。Slack 認証情報の一部としてボットトークンを使用する場合、インデックスを作成するチャンネルにボットトークンを追加する必要があります。ボットトークンを使用してダイレクトメッセージやグループメッセージのインデックスを作成することはできません。

 Note

ほとんどのデータソースは、フィルターと呼ばれる包含または除外パターンである正規表現パターンを使用しています。包含フィルターを指定すると、包含フィルターに一致するコンテンツのみのインデックスが作成されます。包含フィルターに一致しないドキュメントのインデックスは作成されません。包含フィルターと除外フィルターを指定した場合、除外フィルターに一致するドキュメントは、包含フィルターと一致してもインデックスは作成されません。

- ユーザーコンテキストのフィルタリングとアクセスコントロール — Amazon Kendra ドキュメントの ACL がある場合は、ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) をクロールします。ACL 情報は、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングするために使用されます。詳細については、「[User context filtering](#)」を参照してください。
- フィールドマッピング - 選択すると、Zendesk データソースフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。詳細については、「[データソースフィールドのマッピング](#)」を参照してください。

 Note

がドキュメント Amazon Kendra を検索するには、ドキュメント本文フィールドまたはドキュメントに対応するドキュメント本文が必要です。データソースのドキュメント本文フィールド名をインデックスフィールド名にマッピングする必要があります。_document_body。その他のすべてのフィールドはオプションです。

設定するその他の重要な JSON キーのリストについては、[「Zendesk テンプレートスキーマ」](#)を参照してください。

詳細はこちら

Zendesk データソース Amazon Kendra との統合の詳細については、以下を参照してください。

- [Amazon Kendra インテリジェント検索で Zendesk のインサイトを発見する](#)

メモ

- アクセスコントロールリスト (ACLs) オプションは使用できません。代わりに「完全同期」または「新規、変更、または削除されたコンテンツ同期ACLs を無効にすることをお勧めします。

データソースフィールドのマッピング

Amazon Kendra データソースコネクタは、ドキュメントまたはコンテンツフィールドをデータソースから Amazon Kendra インデックスのフィールドにマッピングできます。デフォルトでは、各コネクタは特定のデータソースフィールドをクローलするように設計されています。既定のデータソースフィールドとそのプロパティは変更またはカスタマイズできません。Amazon Kendra コンソールでは、編集できないデフォルトのフィールドとデフォルトのフィールドプロパティはグレー表示されます。

Amazon Kendra コネクタを使用すると、データソースのカスタムドキュメントまたはコンテンツフィールドをインデックスのカスタムフィールドにマッピングすることもできます。例えば、データソースにドキュメントの部門情報を含む「dept」というフィールドがある場合、それを「Department」というインデックスフィールドにマッピングできます。そうすれば、ドキュメントをクエリするときにフィールドを使用できます。

などの Amazon Kendra 予約済みフィールドや共通フィールドをマッピングすることもできます。_created_at。データソースに「creation_date」というフィールドがある場合は、これを 同等の Amazon Kendra 予約済みフィールドにマッピングできます。_created_at。Amazon Kendra 予約フィールドの詳細については、[「ドキュメント属性またはフィールド」](#)を参照してください。

ほとんどのデータソースのフィールドをマッピングできます。次のデータソースのフィールドマッピングを作成できます。

- Adobe Experience Manager

- Alfresco
- Aurora (MySQL)
- Aurora (PostgreSQL)
- Amazon FSx (Windows)
- Amazon FSx (NetApp ONTAP)
- Amazon RDS/Aurora
- Amazon RDS (Microsoft SQL Server)
- Amazon RDS (MySQL)
- Amazon RDS (Oracle)
- Amazon RDS (PostgreSQL)
- Amazon Kendra ウェブクローラー
- WorkDocs
- [Box] (ボックス)
- Confluence
- Dropbox
- Drupal
- GitHub
- Google Workspace ドライブ
- Gmail
- IBM DB2
- Jira
- Microsoft Exchange
- Microsoft OneDrive
- Microsoft SharePoint
- Microsoft Teams
- Microsoft SQL Server
- Microsoft Yammer
- MySQL
- Oracle Database
- PostgreSQL

- Quip
- Salesforce
- ServiceNow
- Slack
- Zendesk

S3 バケットまたは S3 データソースにドキュメントを保存する場合、JSON メタデータファイルを使用してフィールドを指定します。詳細については、「[S3 data source connector](#)」を参照してください。

データソースフィールドをインデックスフィールドにマッピングするには、次の 3 つの手順を実行します。

1. インデックスを作成します。詳細については、[インデックスの作成](#)を参照してください。
2. インデックスを更新して、フィールドを追加します。
3. データソースを作成し、フィールドマッピングを含めて、リザーブドフィールドとカスタムフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングします。

インデックスを更新してカスタムフィールドを追加するには、コンソールを使用してデータソースフィールドマッピングを編集し、カスタムフィールドを追加するか、[UpdateIndex API](#) を使用します。合計 500 のカスタムフィールドをインデックスに追加できます。

データベースデータソースの場合、データベース列の名前が予約フィールドの名前と一致する場合、フィールドと列は自動的にマッピングされます。

[UpdateIndex](#) API では、DocumentMetadataConfigurationUpdates を使用して予約済みフィールドとカスタムフィールドを追加します。

次の JSON の例では、DocumentMetadataConfigurationUpdates を使用して「Department」というフィールドをインデックスに追加します。

```
"DocumentmetadataConfigurationUpdates": [  
  {  
    "Name": "Department",  
    "Type": "STRING_VALUE"  
  }  
]
```

フィールドを作成するときに、検索でのフィールドの使用方法を設定するオプションがあります。次から選択できます。

- 表示可能 - クエリレスポンスでフィールドを返すかどうかを指定します。デフォルトは `true` です。
- ファセット可能 - フィールドを使用してファセットを作成できることを示します。デフォルトは `false` です。
- 検索可能 - 検索でフィールドを使用するかどうかを指定します。デフォルトは、文字列フィールドに対しては `true`、数値フィールドと日付フィールドに対しては `false` です。
- ソート可能 - フィールドを使用して検索結果をソートできることを示します。日付、数値、および文字列フィールドに対してのみ設定できます。文字列リストフィールドには設定できません。

次の JSON 例では、`DocumentMetadataConfigurationUpdates` を使用して「Department」というフィールドをインデックスに追加し、それをファセット可能としてマークします。

```
"DocumentMetadataConfigurationUpdates": [  
  {  
    "Name": "Department",  
    "Type": "STRING_VALUE",  
    "Search": {  
      "Facetable": true  
    }  
  }  
]
```

Amazon Kendra 予約済みまたは一般的なドキュメントフィールドの使用

[UpdateIndex API](#) では、`DocumentMetadataConfigurationUpdates` を使用して Amazon Kendra 予約済みインデックスフィールド名を指定することにより、予約フィールドまたは共通フィールドを作成し、対応するドキュメント属性/フィールド名にマッピングできます。カスタムフィールドも作成できます。データソースコネクタを使用する場合、データソースドキュメントフィールドを Amazon Kendra インデックスフィールドにマッピングするフィールドマッピングがほとんど含まれます。コンソールを使用する場合は、データソースを選択し、編集アクションを選択してから、フィールドマッピングセクションの横に進んでデータソースを設定して、フィールドを更新します。

`Search` オブジェクトを設定して、フィールドを表示可能、ファセット可能、検索可能、ソート可能のいずれかに設定できます。特定のフィールド値にマッピングされたブースト、新しさ、重要度の値

に適用するフィールドのランク順序、ブースト期間、または期間を設定するように Relevance オブジェクトを設定できます。コンソールを使用する場合は、ナビゲーションメニューのファセットオプションを選択して、フィールドの検索設定をセットできます。関連性調整を設定するには、ナビゲーションメニューでインデックスを検索するオプションを選択し、クエリを入力し、サイドパネルのオプションを使用して検索の関連性を調整します。フィールドを作成すると、フィールドタイプを変更することはできません。

Amazon Kendra には、使用できる以下の予約済みまたは共通ドキュメントフィールドがあります。

- `_authors` - ドキュメントの内容を担当する 1 人以上の作成者のリスト。
- `_category` - ドキュメントを特定のグループに配置するカテゴリ。
- `_created_at` - ドキュメントが作成された ISO 8601 形式の日付と時刻。例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。
- `_data_source_id` - ドキュメントを含むデータソースの識別子。
- `_document_body` - ドキュメントのコンテンツ。
- `_document_id` - ドキュメントの一意の識別子。
- `_document_title` - ドキュメントのタイトル。
- `_excerpt_page_number` - ドキュメントの抜粋が表示される PDF ファイルのページ番号。2020 年 9 月 8 日より前にインデックスが作成された場合、この属性を使用する前に、ドキュメントのインデックスを再作成する必要があります。
- `_faq_id` - これが質疑応答タイプのドキュメント (よくある質問) の場合、よくある質問の固有識別子です。
- `_file_type` - pdf や doc など、ドキュメントのファイルタイプ。
- `_last_updated_at` - ドキュメントが最後に更新された ISO 8601 形式の日付と時刻。例えば、2012-03-25T12:30:10+01:00 は、中央ヨーロッパ時間の 2012 年 3 月 25 日午後 12 時 30 分 (プラス 10 秒) の ISO 8601 の日付/時刻形式です。
- `_source_uri` - ドキュメントが利用可能な URI。例えば、会社のウェブサイト上のドキュメントの URI などです。
- `_version` - ドキュメントの特定のバージョンの識別子。
- `_view_count` - ドキュメントが表示された回数。
- `_language_code` (文字列) - ドキュメントに適用される言語のコード。言語を指定しないと、デフォルトで英語になります。コードを含む、サポートされている言語の詳細については、[英語以外の言語でドキュメントを追加する](#)を参照してください。

カスタムフィールドの場合、予約フィールドまたは共通フィールドを作成する場合と同じように、UpdateIndex API で DocumentMetadataConfigurationUpdates を使用してこれらのフィールドを作成します。カスタムフィールドには適切なデータタイプを設定する必要があります。コンソールを使用する場合は、データソースを選択し、編集アクションを選択してから、フィールドマッピングセクションの横に進んでデータソースを設定して、フィールドを更新します。一部のデータソースは、新しいフィールドやカスタムフィールドの追加をサポートしていません。フィールドを作成すると、フィールドタイプを変更することはできません。

カスタムフィールドには以下のタイプを設定できます。

- 日付
- 数値
- String
- 文字列リスト

[BatchPutDocument](#) API を使用してインデックスにドキュメントを追加した場合、Attributes は、ドキュメントのフィールド/属性を一覧表示し、DocumentAttribute オブジェクトを使用してフィールドを作成します。

Amazon S3 データソースからインデックス化されたドキュメントの場合、フィールド情報を含む [JSON メタデータファイル](#) を使用してフィールドを作成します。

サポートされているデータベースをデータソースとして使用する場合は、[フィールドマッピングオプション](#) を使用してフィールドを設定できます。

英語以外の言語でドキュメントを追加する

ドキュメントは、複数の言語でインデックス作成できます。言語を指定しない場合、Amazon Kendra はデフォルトで英語でドキュメントをインデックス作成します。ドキュメントの言語コードをドキュメントメタデータにフィールドとして含めます。ドキュメントの `_language_code` フィールドの詳細については、「[フィールドマッピング](#)」と「[カスタム属性](#)」を参照してください。

[CreateDataSource](#) を呼び出すときに、データソース内のすべてのドキュメントの言語コードを指定できます。ドキュメントにメタデータフィールドで指定された言語コードがない場合、データソースレベルですべてのドキュメントに指定された言語コードを使用して、ドキュメントのインデックスが作成されます。コンソールでは、データソースレベルでのみ、サポートされている言語でドキュメントのインデックス作成ができます。[Data sources] (データソース) へ移動し、[Specify data source

details] (データソースの詳細を指定) ページで、[Language] (言語) のドロップダウンから言語を選択します。

サポートされている言語でドキュメントを検索またはクエリできます。詳細については、「[各言語での検索](#)」を参照してください。

以下の言語とそのコードがサポートされています (言語を指定しない場合、英語または en はデフォルトでサポートされています。) この表には、フルセマンティック検索で Amazon Kendra がサポートする言語と、単純なキーワードマッチングのみをサポートする言語が含まれています。次の表では、完全なセマンティック検索をサポートする言語にはアスタリスクが付いており、太字で示されています。英語 (デフォルト言語) は完全セマンティック検索でもサポートされています。

言語名	言語コード
アラビア語	ar
アルメニア語	hy
バスク語	eu
ベンガル語	bn
ブルガリア語	bg
カタロニア語	ca
中国語 - 簡体字と繁体字*	zh
チェコ語	cs
デンマーク語	da
オランダ語	nl
フィンランド語	fi
フランス語 - フランス語 (カナダ) を含む*	fr
ガリシア語	gl
ドイツ語*	de

言語名	言語コード
ギリシャ語	el
ヒンディー語	hi
ハンガリー語	hu
インドネシア語	id
アイルランド語	ga
イタリア語	it
日本語*	ja
韓国語*	ko
ラトビア語	lv
リトアニア語	lt
ノルウェー語	no
ペルシャ語	fa
ポルトガル語	pt
ポルトガル語 (ブラジル)*	pt-BR
ルーマニア語	ro
ロシア語	ru
ソラニ語	ckb
スペイン語 - スペイン語 (メキシコ) を含む*	es
スウェーデン語	sv
トルコ語	tr

*その言語ではセマンティック検索がサポートされています。

セマンティック検索をサポートする言語では、以下の機能がサポートされます。

- 単純なキーワードマッチングを超えるドキュメントの関連性。
- 単純なキーワードマッチング以外のよくある質問。
- 読み取りの理解に基づいてドキュメントから回答 Amazon Kendraを抽出する。
- 検索結果の信頼バケット (非常に高い、高い、中程度、低いなど) です。

セマンティック検索をサポートしていない言語では、ドキュメントの関連性やよくある質問に関する単純なキーワードマッチングがサポートされています。

[シノニム](#) (カスタムシノニムを含む)、[増分学習とフィードバック](#)、および[クエリの提案](#)は、英語 (デフォルト言語) でのみサポートされています。

を使用する Amazon Kendra ように を設定する Amazon VPC

Amazon Kendra は、 で作成した Virtual Private Cloud (VPC) に接続 Amazon Virtual Private Cloud して、プライベートクラウドで実行されているデータソースに保存されているコンテンツのインデックスを作成できます。データソースコネクタを作成する場合、データソースを含むサブネットのセキュリティグループとサブネット識別子を指定できます。この情報を使用して、 は VPC 内のデータソースと安全に通信するために使用する Elastic Network Interface Amazon Kendra を作成します。

で Amazon Kendra データソースコネクタをセットアップするには Amazon VPC、AWS Management Console または [CreateDataSource](#) API オペレーションを使用できます。コンソールを使用する場合は、コネクタ設定プロセス中に VPC を接続します。

Note

データソースコネクタを設定する場合、Amazon VPC Amazon Kendra この機能はオプションです。パブリックインターネットからデータソースにアクセスできる場合は、Amazon VPC この機能を有効にする必要はありません。すべての Amazon Kendra データソースコネクタが Amazon VPCをサポートしているわけではありません。

データソースが で実行されておらず Amazon VPC 、パブリックインターネットからアクセスできない場合は、まず仮想プライベートネットワーク (VPN) を使用してデータソースを VPC に接続しま

す。次に、Amazon VPC と の組み合わせ Amazon Kendra を使用して、データソースを に接続できます AWS Virtual Private Network。VPN の設定の詳細については、[AWS VPN ドキュメント](#)を参照してください。

トピック

- [Amazon Kendra コネクタ Amazon VPC のサポートの設定](#)
- [データソースをセットアップ Amazon Kendra して に接続する Amazon VPC](#)
- [VPC のデータベースに接続する](#)
- [VPC 接続の問題のトラブルシューティング](#)

Amazon Kendra コネクタ Amazon VPC のサポートの設定

Amazon Kendra コネクタで使用する Amazon VPC ように を設定するには、次の手順を実行します。

ステップ

- [ステップ 1. の Amazon VPC サブネットを作成する Amazon Kendra](#)
- [ステップ 2. Amazon VPC のセキュリティグループを作成する Amazon Kendra](#)
- [ステップ 3. 外部データソースと Amazon VPC](#)

ステップ 1. の Amazon VPC サブネットを作成する Amazon Kendra

データソースへのアクセスに使用できる既存の Amazon VPC サブネット Amazon Kendra を作成または選択します。準備されたサブネットは、次のいずれかのアベイラビリティゾーン AWS リージョン とアベイラビリティゾーンにある必要があります。

- 米国西部 (オレゴン)/us-west-2-usw2-az1, usw2-az2, usw2-az3
- 米国東部 (バージニア北部)/us-east-1-use1-az1, use1-az2, use1-az4
- 米国東部 (オハイオ)/us-east-2-use2-az1, use2-az2, use2-az3
- アジアパシフィック (東京)/ap-northeast-1-apne1-az1, apne1-az2, apne1-az4
- アジアパシフィック (ムンバイ)/ap-south-1-aps1-az1, aps1-az2, aps1-az3
- アジアパシフィック (シンガポール)/ap-southeast-1-apse1-az1, apse1-az2, apse1-az3
- アジアパシフィック (シドニー)/ap-southeast-2-apse2-az1, apse2-az2, apse2-az3

- カナダ (中部)/ca-central-1-cac1-az1, cac1-az2, cac1-az4
- 欧州 (アイルランド)/eu-west-1-euw1-az1, uew1-az2, euw1-az3
- 欧州 (ロンドン)/eu-west-2—euw2-az1, euw2-az2, euw2-az3

データソースは、Amazon Kendra コネクタに提供したサブネットからアクセス可能である必要があります。

Amazon VPC サブネットの設定方法の詳細については、「[Amazon VPC ユーザーガイド](#)」の「[のサブネット Amazon VPC](#)」を参照してください。

Amazon Kendra が 2 つ以上のサブネット間で接続をルーティングする必要がある場合は、複数のサブネットを準備できます。例えば、データソースを含むサブネットが IP アドレスの範囲外にあると仮定してみましょう。この場合、十分な IP アドレスを持ち、最初のサブネットに接続されている追加のサブネットを Amazon Kendra に提供できます。複数のサブネットを一覧表示する場合、サブネットは相互に通信できる必要があります。

ステップ 2. Amazon VPC のセキュリティグループを作成する Amazon Kendra

Amazon Kendra データソースコネクタを に接続するには Amazon VPC、VPC から に割り当てる 1 つ以上のセキュリティグループを準備する必要があります Amazon Kendra。セキュリティグループは、Amazon Kendraによって作成された Elastic Network Interface に関連付けられます。このネットワークインターフェイスは、Amazon VPC サブネットにアクセスする Amazon Kendra 際の送受信トラフィックを制御します。

セキュリティグループのアウトバウンドルールで、Amazon Kendra データソースコネクタからのトラフィックが、同期するサブネットとデータソースにアクセスすることを許可していることを確認します。例えば、MySQL コネクタを使用して MySQL データベースから同期できます。デフォルトポートを使用している場合、セキュリティグループはデータベースを実行するホストのポート 3306 へのアクセス Amazon Kendra を に許可する必要があります。

次の値を使用する Amazon Kendra デフォルトのセキュリティグループを設定することをお勧めします。

- インバウンドルール – これを空のままにすると、すべてのインバウンドトラフィックがブロックされます。
- アウトバウンドルール – がデータソースからの同期リクエスト Amazon Kendra を開始できるように、すべてのアウトバウンドトラフィックを許可する 1 つのルールを追加します。
 - IP バージョン – IPv4

- タイプ - すべてのトラフィック
- プロトコル - すべてのトラフィック
- ポート範囲 - すべて
- 送信先 - 0.0.0.0/0

Amazon VPC セキュリティグループの設定方法の詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[セキュリティグループルール](#)」を参照してください。

ステップ 3. 外部データソースと Amazon VPC

外部データソースにアクセス Amazon Kendra するための適切なアクセス許可設定とネットワーク設定があることを確認します。データソースの設定方法の詳細については、各コネクタページの前提条件セクションを参照してください。

また、Amazon VPC 設定を確認し、割り当てるサブネットから外部データソースにアクセスできることを確認します Amazon Kendra。これを行うには、同じセキュリティグループを持つ同じサブネットに Amazon EC2 インスタンスを作成し、この Amazon EC2 インスタンスからデータソースへのアクセスをテストすることをお勧めします。詳細については、[Amazon VPC 「接続のトラブルシューティング」](#)を参照してください。

データソースをセットアップ Amazon Kendra して に接続する Amazon VPC

に新しいデータソースを追加するときに Amazon Kendra、選択したデータソースコネクタがこの機能をサポート Amazon VPC している場合は、この機能を使用できます。

AWS Management Console または Amazon Kendra API を使用して、を有効にして新しい Amazon Kendra データソース Amazon VPC を設定できます。具体的には、[CreateDataSource](#) API オペレーションを使用してから、VpcConfiguration パラメータを使用して次の情報を指定します。

- SubnetIds – Amazon VPC サブネットの識別子のリスト
- SecurityGroupIds – Amazon VPC セキュリティグループの識別子のリスト

コンソールを使用する場合は、コネクタの設定中に Amazon VPC 必要な情報を指定します。コンソールを使用してコネクタの Amazon VPC 機能を有効にするには、まず Amazon VPC を選択します。次に、Amazon VPC サブネットの識別子と Amazon VPC セキュリティグループの識別子を指定

します。「[Configuring Amazon VPC](#)」で作成した Amazon VPC サブネットと Amazon VPC セキュリティグループを選択することも、既存のものを使用することもできます。

トピック

- [Amazon VPC 識別子の表示](#)
- [データソース IAM ロールの確認](#)

Amazon VPC 識別子の表示

サブネットとセキュリティグループの識別子は、Amazon VPC コンソールで設定されます。識別子を表示するには、次の手順を使用します。

サブネット識別子を表示するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/vpc/> で Amazon VPC コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Subnets] (サブネット) を選択します。
3. [サブネット] リストから、データベースサーバーを含むサブネットを選択します。
4. [詳細] タブで、[サブネット ID] フィールドに表示される識別子を書き留めます。

セキュリティグループ識別子を表示するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/vpc/> で Amazon VPC コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで [セキュリティグループ] を選択します。
3. セキュリティグループリストで、識別子の対象となるグループを選択します。
4. [詳細] タブで、[セキュリティグループ ID] フィールドに表示される識別子を書き留めます。

データソース IAM ロールの確認

データソースコネクタ (AWS Identity and Access Management (IAM) ロールに、へのアクセス許可が含まれていることを確認します Amazon VPC。

コンソールを使用してロールの新しいロールを作成すると IAM、はユーザーに代わって IAM ロールに正しいアクセス許可 Amazon Kendra を自動的に追加します。API を使用する場合、または既存の IAM ロールを使用する場合は、ロールにアクセスするためのアクセス許可が含まれていることを確

認めます Amazon VPC。適切なアクセス許可があることを確認するには、「VPC の [IAM ロール](#)」を参照してください。

別の Amazon VPC サブネットを使用するように既存のデータソースを変更できます。ただし、データソースの IAM ロールを確認し、必要に応じて Amazon Kendra データソースコネクタが正しく動作するように変更します。

VPC のデータベースに接続する

次の例は、Virtual Private Cloud (VPC) で実行されている MySQL データベースを接続する方法を示しています。この例では、デフォルトの VPC から開始し、MySQL データベースを作成する必要があることを前提としています。VPC がすでに作成されている場合は、次に示すように設定されていることを確認します。MySQL データベースがある場合は、新しいデータベースを作成する代わりにデータベースを使用できます。

ステップ

- [ステップ 1: VPC を設定する](#)
- [ステップ 2: セキュリティグループを作成して設定する](#)
- [ステップ 3: データベースを作成する](#)
- [ステップ 4: データソースコネクタを作成する](#)

ステップ 1: VPC を設定する

サブネットで行われている MySQL データベースにアクセス Amazon Kendra するためのプライベートサブネットと のセキュリティグループを持つように VPC を設定します。VPC 設定で提供されるサブネットは、米国西部 (オレゴン) リージョン、米国東部 (バージニア北部) リージョン、または欧州 (アイルランド) リージョンにある必要があります。

を使用して VPC を設定するには Amazon VPC

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/vpc/> で Amazon VPC コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Route tables] (ルートテーブル) を選択して、[Create route table] (ルートテーブルの作成) を選択します。
3. Name フィールドに「」と入力します **Private subnet route table**。VPC ドロップダウンから VPC を選択し、ルートテーブルの作成を選択します。[Close] (閉じる) をクリックして、ルートテーブルのリストに戻ります。

4. ナビゲーションペインで NAT ゲートウェイを選択し、NAT ゲートウェイの作成を選択します。
5. サブネットドロップダウンから、パブリックサブネットであるサブネットを選択します。サブネット ID を書き留めます。
6. Elastic IP アドレスを持っていない場合は、[Create New EIP] (新しい EIP の作成) で、[Create a NAT Gateway] (NAT ゲートウェイの作成) を選択してから、[Close] (閉じる) をクリックします。
7. ナビゲーションペインから、[ルートテーブル] を選択します。
8. ルートテーブルリストから、ステップ 3 で作成した [Private subnet route table] (プライベートサブネットルートテーブル) を選択します。アクションから、ルートの編集を選択します。
9. [Add Rule] (ルートの追加) を選択します。送信先の場合は、と入力 **0.0.0.0/0** して、インターネットへのすべての送信トラフィックを許可します。[ターゲット] で、[NAT ゲートウェイ] を選択し、次に、ステップ 4 で作成したゲートウェイを選択します。「変更を保存」を選択し、「閉じる」を選択します。
10. [Actions] (アクション) から、[Edit subnet associations] (サブネットの関連付けの編集) を選択します。
11. プライベートにするサブネットを選択します。上記で書き留めた NAT ゲートウェイを持つサブネットを選択しないでください。完了したら、関連付けの保存を選択します。

ステップ 2: セキュリティグループを作成して設定する

次に、データベースのセキュリティグループを設定します。

セキュリティグループを作成して設定するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/vpc/> で Amazon VPC コンソールを開きます。
2. VPC の説明から、IPv4 CIDR を書き留めます。
3. ナビゲーションペインで、セキュリティグループを選択し、セキュリティグループの作成を選択します。
4. [Security group name] (セキュリティグループ名) に **DataSourceInboundSecurityGroup** と入力します。説明を入力し、リストから VPC を選択します。「セキュリティグループの作成」を選択し、「閉じる」を選択します。
5. [Inbound rules] (インバウンドルール) タブを開きます。
6. インバウンドルールの編集 を選択し、ルールの追加 を選択します。

7. データベースの場合は、ポート範囲のポート番号を入力します。たとえば、MySQLの場合は **3306**、HTTPS の場合は **443**。[Source] (ソース) に、VPC のクラスレスドメイン間ルーティング (CIDR) を入力します。[Save rules] (ルールの保存) を選択し、[Close] (閉じる) をクリックします。

セキュリティグループでは、VPC 内のすべてのユーザーがデータベースに接続でき、インターネットへのアウトバウンド接続が許可されます。

ステップ 3: データベースを作成する

ドキュメントを保持するデータベースを作成します。または、既存のデータベースを使用できます。MySQL データベースを作成する方法については、「」を参照してください[MySQL](#)。

ステップ 4: データソースコネクタを作成する

VPC を設定してデータベースを作成したら、データベースのデータソースコネクタを作成できます。が Amazon Kendra サポートするデータベースコネクタの詳細については、「[サポートされているコネクタ](#)」を参照してください。

データベースについては、VPC、VPC で作成したプライベートサブネット、VPC で作成したセキュリティグループを設定してください。

VPC 接続の問題のトラブルシューティング

Virtual Private Cloud (VPC) 接続で問題が発生した場合は、アクセス IAM 許可、セキュリティグループ設定、サブネットのルートテーブルが正しく設定されていることを確認します。

データソースコネクタの同期が失敗する原因の 1 つは、割り当てたサブネットからデータソースにアクセスできない可能性があることです Amazon Kendra。この問題のトラブルシューティングを行うには、同じ Amazon VPC 設定の Amazon EC2 インスタンスを作成することをお勧めします。次に、REST API コールまたは他の方法 (データソースの特定のタイプに基づく) を使用して、この Amazon EC2 インスタンスからデータソースにアクセスしてみてください。

作成した Amazon EC2 インスタンスからデータソースに正常にアクセスすると、このサブネットからデータソースにアクセスできることを意味します。したがって、同期の問題は、データソースにアクセスできないことに関連していません Amazon VPC。

VPC 設定から Amazon EC2 インスタンスにアクセスして、作成した Amazon EC2 インスタンスで検証できない場合は、さらにトラブルシューティングを行う必要があります。例えば、接続の問題に

関するエラーで同期に失敗した Amazon S3 コネクタがある場合、Amazon S3 コネクタに割り当てた設定と同じ Amazon VPC 設定で Amazon EC2 インスタンスを設定できます。次に、この Amazon EC2 インスタンスを使用して、Amazon VPC が正しく設定されているかどうかをテストします。

以下は、Amazon S3 Amazon EC2 インスタンスを設定して データソースと Amazon VPC の接続をトラブルシューティングする例です。

トピック

- [ステップ 1: Amazon EC2 インスタンスを起動する](#)
- [ステップ 2: Amazon EC2 インスタンスに接続する](#)
- [ステップ 3: アクセスをテスト Amazon S3 する](#)

ステップ 1: Amazon EC2 インスタンスを起動する

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/ec2/> で Amazon EC2 コンソールを開きます。
2. インスタンスを起動 を選択します。
3. ネットワーク設定を選択し、編集を選択して、次の操作を行います。
 - a. 割り当てたのと同じ VPC とサブネットを選択します Amazon Kendra。
 - b. [ファイアウォール (セキュリティグループ)] で、[既存のセキュリティグループを選択する] を選択してください。次に、割り当てたセキュリティグループを選択します Amazon Kendra。

Note

セキュリティグループは、へのアウトバウンドトラフィックを許可する必要があります Amazon S3。

- c. パブリック IP の自動割り当てを無効に設定します。
- d. 詳細で、以下を実行します。
 - IAM インスタンスプロファイルで、インスタンスプロファイルを作成して IAM インスタンスにアタッチする新しい IAM プロファイルの作成を選択します。プロファイルにアクセス許可があることを確認します Amazon S3。詳細については、[「」の「Amazon S3 バケットへのアクセス権を Amazon EC2 インスタンスに付与するにはどうすればよいですか？」](#)を参照してください AWS re:Post。

- 他のすべての設定はデフォルトのままにします。
- e. Amazon EC2 インスタンスを確認して起動します。

ステップ 2: Amazon EC2 インスタンスに接続する

Amazon EC2 インスタンスが実行されたら、インスタンスの詳細ページに移動し、インスタンスに接続します。これを行うには、Linux [インスタンス用ユーザーガイドのEC2 Instance Connect Endpoint](#) を使用してパブリック IPv4 アドレスを必要とせずにインスタンスに接続する」の手順を使用します。Amazon EC2

ステップ 3: アクセスをテスト Amazon S3 する

Amazon EC2 インスタンスターミナルに接続したら、AWS CLI コマンドを実行して、このプライベートサブネットから Amazon S3 バケットへの接続をテストします。

Amazon S3 アクセスをテストするには、AWS CLI で次のコマンドを入力します AWS CLI。aws s3 ls

AWS CLI コマンドを実行したら、以下を確認します。

- 必要な IAM アクセス許可を正しく設定し、Amazon S3 設定が正しい場合は、Amazon S3 バケットのリストが表示されます。
- などのアクセス許可エラーが表示された場合はAccess Denied、yourVPC 設定が正しい可能性があります、IAM アクセス許可または Amazon S3 バケットポリシーに問題がある可能性があります。

コマンドがタイムアウトしている場合、VPC の設定が正しくなく、Amazon EC2 インスタンスがサブネットから Amazon S3 にアクセスできないため、接続がタイムアウトしている可能性があります。VPC を再設定して、もう一度試してください。

インデックス、データソース、またはバッチアップロードされたドキュメントの削除

このセクションでは、インデックス、インデックス内のドキュメントのデータソースリポジトリ、またはバッチアップロードしたインデックス内のドキュメントを削除する方法を説明します。

トピック

- [インデックスを削除する](#)
- [データソースの削除](#)
- [バッチアップロードしたドキュメントの削除](#)

インデックスを削除する

インデックスを使用しなくなった Amazon Kendra から、 からインデックスを削除できます。例えば、次の場合にインデックスを削除します。

- インデックスを使用しなくなり、AWS アカウントへの請求を減らしたい。Amazon Kendra インデックスに対してクエリを実行するかどうかにかかわらず、インデックスの実行中に料金が発生します。
- 別のエディションのインデックスを再設定したい Amazon Kendra。既存のインデックスを削除し、別のエディションで新しいインデックスを作成します。
- アカウントのインデックスの最大数に達したが、クォータは超えないようにしたい。既存のインデックスを削除し、新しいインデックスを追加します。作成できるインデックスの最大数の詳細については、「[Quotas](#)」を参照してください。

インデックスを削除するには、コンソール、AWS Command Line Interface AWS CloudFormation スクリプト、または DeleteIndex API を使用します。インデックスを削除すると、インデックスと関連するすべてのデータソースとドキュメントデータが削除されます。インデックスを削除しても、元のドキュメントはストレージから削除されません。

インデックスの削除は、非同期演算です。インデックスの削除を開始すると、インデックスのステータスは DELETING に変わります。インデックスに関連する情報がすべて削除されるまで、ステータスは DELETING のままです。インデックスが削除されると、そのインデックスは、[ListIndices](#) API の呼び出しの結果に表示されなくなります。削除されたインデックスの識別子を使用して [DescribeIndex](#) API を呼び出すと、ResourceNotFound 例外を受け取ります。

インデックスを削除するには (コンソール)

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Indexes] (インデックス) を選択し、削除するインデックスを選択します。
3. [Delete] (削除) を選択して、選択したインデックスを削除します。

インデックスを削除するには (CLI)

- で AWS CLI、次のコマンドを使用します。次のコマンドは、Linux と macOS 用にフォーマットされています。Windows を使用している場合、Unix 行連結記号 (\) をキャレット (^) に置き換えます。

```
aws kendra delete-index \  
  --id index-id
```

データソースの削除

データソースに含まれる情報を Amazon Kendra インデックスから削除する場合は、データソースを削除します。例えば、以下の場合にデータソースを削除してください。

- データソースが誤って構成されている。データソースを削除し、データソースの削除が完了するのを待ってから、再作成します。
- あるデータソースから別のデータソースにドキュメントを移行した。元のデータソースを削除し、新しい場所に再作成します。
- インデックスのデータソースの制限に達した。既存のデータソースの 1 つを削除し、新しいデータソースを追加します。作成可能なデータソースの数については、[クォータ](#) を参照してください。

データソースを削除するには、コンソール、AWS Command Line Interface (AWS CLI)、DeleteDataSource API、または AWS CloudFormation スクリプトを使用します。データソースを削除すると、そのデータソースに関するすべての情報がインデックスから削除されます。データソースの同期のみを停止する場合は、データソースの同期スケジュールを「オンデマンドで実行」に変更します。

データソースの削除は、非同期演算です。データソースの削除を開始すると、データソースのステータスは `DELETING` に変わります。データソースに関連する情報が削除されるまで、ステータスは `DELETING` のままです。データソースが削除されると、そのデータソースは、[ListDataSources](#) API の呼び出しの結果に表示されなくなります。削除されたデータソースの識別子を使用して [DescribeDataSource](#) API を呼び出すと、`ResourceNotFound` 例外を受け取ります。

 Note

データソース全体の削除、データソースから特定のドキュメントを削除した後のインデックスの再同期には、削除するドキュメントの数に応じて、最大で 1 時間以上かかる場合があります。

データソースを削除するには (コンソール)

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Indexes] (インデックス) を選択し、削除するデータソースを含むインデックスを選択します。
3. ナビゲーションペインで、[Data source] (データソース) をクリックします。
4. 削除するデータソースを選択します。
5. [Delete] (削除) をクリックして、データソースを削除します。

データソースを削除するには (CLI)

- で AWS Command Line Interface、次のコマンドを使用します。次のコマンドは、Linux と macOS 用にフォーマットされています。Windows を使用している場合、Unix 行連結記号 (`\`) を キャレット (^) に置き換えます。

```
aws kendra delete-data-source \
  --id data-source-id \
  --index-id index-id
```

データソースを削除すると、 はデータソースに関するすべての保存された情報 Amazon Kendra を削除します。 は、インデックスに保存されているすべてのドキュメントデータ、およびデータソース

に関連付けられたすべての実行履歴とメトリクス Amazon Kendra を削除します。データソースを削除しても、元のドキュメントはストレージから削除されません。

データソース内のドキュメントは、がデータソース Amazon Kendra を削除している間に DescribeIndex API によって返されるドキュメント数に含めることができます。Amazon Kendra がデータソースを削除している間、データソースのドキュメントが検索結果に表示されることがあります。

Amazon Kendra DeleteDataSource API を呼び出すか、コンソールでデータソースを削除するとすぐに、はデータソースのリソースを解放します。データソースを削除してデータソースの数を制限以下に減らす場合は、すぐに新しいデータソースを作成できます。

データソースを削除し、ドキュメントデータに別のデータソースを作成する場合は、最初のデータソースが削除されるのを待ってから、新しいデータソースを同期します。

同期中のデータソースを削除できます Amazon Kendra。同期が停止し、データソースが削除されます。データソースの削除時に同期を開始しようとする、ConflictException 例外を取得します。

関連付けられているインデックスが DELETING ステータスの場合、データソースは削除できません。インデックスを削除すると、そのインデックスのすべてのデータソースが削除されます。インデックスの削除は、そのインデックスのデータソースが DELETING ステータスの間に開始できます。

同じ Amazon S3 バケットを指す 2 つのデータソースなど、同じドキュメントを指す 2 つのデータソースがある場合、データソースの 1 つが削除されると、インデックス内のドキュメントに一貫性がない可能性があります。2 つのデータソースが同じドキュメントを参照する場合、ドキュメントデータのコピーが 1 つだけインデックスに保存されます。1 つのデータソースを削除すると、ドキュメントのインデックスデータが削除されます。もう 1 つのデータソースは、ドキュメントが削除されたことを認識しないため、Amazon Kendra は次回同期するときにドキュメントのインデックスを正しく再作成しません。同じドキュメントの場所を指すデータソースが 2 つある場合は、両方のデータソースを削除してから 1 つを再作成する必要があります。

バッチアップロードしたドキュメントの削除

[BatchDeleteDocument](#) API を使用して、ドキュメントをインデックスから直接削除できます。コンソールを使用してドキュメントを直接削除することはできません。コンソールを使用する場合は、データソースリポジトリから特定のドキュメントを削除してインデックスと再同期するか、データソースコネクタ全体を削除できます。

BatchDeleteDocument を使用したインデックスのドキュメント削除は、非同期演算です。BatchDeleteDocument API を呼び出した後、[BatchGetDocumentStatus](#) API を使用して、ドキュメント削除の進行状況をモニタリングします。ドキュメントがインデックスから削除されると、はステータスNOT_FOUNDとして Amazon Kendra を返します。

 Note

BatchDeleteDocument を使用してインデックスからドキュメントを削除する場合、削除するドキュメントの数に応じて、1 時間以上かかることがあります。

インデックス (CLI) にバッチアップロードしたドキュメントの削除方法。

- で AWS Command Line Interface、次のコマンドを使用します。次のコマンドは、Linux と macOS 用にフォーマットされています。Windows を使用している場合、Unix 行連結記号 (\) を キャレット (^) に置き換えます。

```
aws kendra batch-delete-document \  
  --index-id index-id \  
  --document-id-list 'doc-id-1' 'doc-id-2'
```

取り込み中のドキュメントの強化

Note

機能のサポートは、使用するインデックスタイプと検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

ドキュメントの取り込みプロセス中に、コンテンツおよびドキュメントのメタデータフィールドまたは属性を変更できます。Amazon Kendraのカスタムドキュメントエンリッチメント機能を使用すると、ドキュメントを取り込むときにドキュメント属性とコンテンツを作成、変更、または削除できます Amazon Kendra。つまり、必要に応じて、データを操作して取り込むことができます。

この機能を使用すると、ドキュメントをどのように処理し、Amazon Kendraに取り込むかを制御できます。例えば、ドキュメントの取り込み中に、ドキュメントメタデータ内の個人を特定できる情報をスクラブできます Amazon Kendra。

この機能を使用するもう 1 つの方法は、で Lambda 関数を呼び出し AWS Lambda で、画像、テキストの翻訳、および検索や分析のためにデータを準備するためのその他のタスクで光学文字認識 (OCR) を実行することです。例えば、関数を呼び出すと、画像上で OCR を実行できます。この関数は、画像のテキストを解釈し、各画像をテキスト文書として扱うことができます。郵送された顧客調査を受け取り、これらのアンケートを画像として保存する企業は、これらの画像をテキストドキュメントとして Amazon Kendraに取り込むことができます。その後、企業は Amazon Kendraで貴重な顧客調査情報を検索できます。

基本的な操作を使用してデータの最初の解析として適用し、次に、Lambda 関数を使用して、より複雑な操作をデータに適用できます。例えば、基本的な操作を使用してドキュメントメタデータフィールド「Customer_ID」のすべての値を削除し、Lambda 関数を適用してドキュメント内のテキストの画像からテキストを抽出することができます。

Custom Document Enrichment の仕組み

Custom Document Enrichment の全体のプロセスは次のとおりです。

1. Custom Document Enrichment は、データソースを作成または更新するとき、またはドキュメントのインデックスを直接作成するときに設定します Amazon Kendra。

2. Amazon Kendra はインライン設定または基本ロジックを適用してデータを変更します。詳細については、「[the section called “メタデータを変更する基本操作”](#)」を参照してください。
3. 高度なデータ操作を設定する場合、Amazon Kendra はこれを元の未加工のドキュメントに適用することも、構造化された解析済みドキュメントに適用することもできます。詳細については、「[the section called “Lambda 関数:メタデータまたはコンテンツの抽出と変更”](#)」を参照してください。
4. 変更されたドキュメントが取り込まれます Amazon Kendra。

このプロセスのどの時点でも、構成が有効でない場合、Amazon Kendra はエラーをスローします。

[CreateDataSource](#)、[UpdateDataSource](#)、または [BatchPutDocument](#) API を呼び出す場合、Custom Document Enrichment 構成を指定します。BatchPutDocument を呼び出すと、各リクエストで Custom Document Enrichment を設定する必要があります。コンソールを使用する場合は、インデックスを選択し、[Document enrichments] (ドキュメントのエンリッチメント) をクリックして、Custom Document Enrichment を構成します。

コンソールで[ドキュメントのエンリッチメント]を使用する場合、API を使用する場合と同様に、基本操作のみ、Lambda 関数のみ、あるいはその両方を設定できます。コンソールステップで [次へ] を選択して、基本操作を設定せず、Lambda 関数のみを設定するよう選択できます。これには、元の (抽出前) データに適用するか構造化データ (抽出後) に適用するかなどが含まれます。設定を保存するには、コンソールのすべてのステップを完了する必要があります。すべての手順を完了しないと、ドキュメントの設定は保存されません。

メタデータを変更する基本操作

基本ロジックを使用して、ドキュメントのフィールド、およびコンテンツを操作できます。これには、フィールド内の値の削除、条件を使用したフィールドの値の変更、またはフィールドの作成が含まれます。基本ロジックを使用して操作できる範囲を超える高度な操作については、Lambda 関数を呼び出します。詳細については、「[the section called “Lambda 関数:メタデータまたはコンテンツの抽出と変更”](#)」を参照してください。

基本ロジックを適用するには、[DocumentAttributeTarget](#) オブジェクトを使用して操作するターゲットフィールドを指定します。属性キーを指定します。例えば、「Department」キーは、ドキュメントに関連付けられているすべての部門名を保持するフィールドまたは属性です。特定の条件が満たされた場合に、ターゲットフィールドで使用する値を指定することもできます。条件の設定は、[DocumentAttributeCondition](#) オブジェクトを使用します。例えば、「Source_URI」フィールドに URI 値に「financial」が含まれている場合に、ターゲットフィールド「Department」にドキュメ

ントのターゲット値「Finance」を事前に入力するという条件を設定します。ターゲットドキュメント属性の値を削除することもできます。

コンソールを使用して基本ロジックを適用するには、インデックスを選択し、ナビゲーションメニューの [Document enrichments] (ドキュメントのエンリッチメント) を選択します。[基本的な演算の設定] をクリックして、ドキュメントのフィールドとコンテンツに基本的な演算を適用します。

次に、基本ロジックを使用して「Customer_ID」というドキュメントフィールドのすべての顧客識別番号を削除する例を示します。

例 1: ドキュメントに関連付けられている顧客識別番号の削除

基本操作が適用される前のデータ。

Document_ID	Body_Text	Customer_ID
1	Lorem Ipsum。	CID1234
2	Lorem Ipsum。	CID1235
3	Lorem Ipsum。	CID1236

基本操作が適用された後のデータ。

Document_ID	Body_Text	Customer_ID
1	Lorem Ipsum。	
2	Lorem Ipsum。	
3	Lorem Ipsum。	

次に、基本ロジックを使用して「Department」というフィールドを作成し、「source_URI」フィールドの情報に基づいてこのフィールドに部門名を事前に入力する例を示します。これは、「Source_URI」フィールドに URI 値に「financial」が含まれている場合に、ターゲットフィールド「Department」にドキュメントのターゲット値「Finance」を事前に入力するという条件を使用します。

例 2: 「Department」フィールドを作成し、条件を使用してドキュメントに関連付けられた部門名を事前に入力します。

基本操作が適用される前のデータ。

Document_ID	Body_Text	Source_URI
1	Lorem Ipsum。	financial/1
2	Lorem Ipsum。	financial/2
3	Lorem Ipsum。	financial/3

基本操作が適用された後のデータ。

Document_ID	Body_Text	Source_URI	Department
1	Lorem Ipsum。	financial/1	財務
2	Lorem Ipsum。	financial/2	財務
3	Lorem Ipsum。	financial/3	財務

 Note

Amazon Kendra インデックスフィールドとしてまだ作成されていない場合、はターゲットドキュメントフィールドを作成できません。インデックスフィールドを作成したら、を使用してドキュメントフィールドを作成できますDocumentAttributeTarget。Amazon Kendra は、新しく作成したドキュメントメタデータフィールドをインデックスフィールドにマッピングします。

次のコードは、ドキュメントに関連付けられている顧客識別番号を削除するための基本的なデータ操作を設定する例です。

Console

顧客識別番号を削除するための基本的なデータ操作を構成するには

1. 左側のナビゲーションペインの [Indexes] (インデックス) で、[Document enrichments] (ドキュメントのエンリッチメント) を選択して、[Add document enrichment] (ドキュメントのエンリッチメントを追加) を選択します。
2. [基本的な操作の設定] ページで、ドキュメントのフィールドとコンテンツを変更するデータソースをドロップダウンから選択します。次に、ドロップダウンからドキュメントフィールド名「Customer_ID」を選択し、ドロップダウンからインデックスフィールド名「Customer_ID」を選択し、ドロップダウンからターゲットアクション [Delete] (削除) を選択します。次に、[Add basic operation] (基本的な演算の追加) を選択します。

CLI

顧客識別番号を削除するための基本的なデータ操作を構成するには

```
aws kendra create-data-source \
  --name data-source-name \
  --index-id index-id \
  --role-arn arn:aws:iam::account-id:role/role-name \
  --type S3 \
  --configuration '{"S3Configuration":{"BucketName":"S3-bucket-name"}}' \
  --custom-document-enrichment-configuration '{"InlineConfigurations":[{"Target":
{"TargetDocumentAttributeKey":"Customer_ID", "TargetDocumentAttributeValueDeletion":
true}}]}'
```

Python

顧客識別番号を削除するための基本的なデータ操作を構成するには

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Create a data source with customizations")

# Provide the name of the data source
```

```
name = "data-source-name"
# Provide the index ID for the data source
index_id = "index-id"
# Provide the IAM role ARN required for data sources
role_arn = "arn:aws:iam::${account-id}:role/${role-name}"
# Provide the data source connection information
data_source_type = "S3"
S3_bucket_name = "S3-bucket-name"
# Configure the data source with Custom Document Enrichment
configuration = {"S3Configuration":
    {
        "BucketName": S3_bucket_name
    }
}
custom_document_enrichment_configuration = {"InlineConfigurations":[
    {
        "Target":{"TargetDocumentAttributeKey":"Customer_ID",
            "TargetDocumentAttributeValueDeletion": True}
    }
]}

try:
    data_source_response = kendra.create_data_source(
        Name = name,
        IndexId = index_id,
        RoleArn = role_arn,
        Type = data_source_type
        Configuration = configuration
        CustomDocumentEnrichmentConfiguration =
custom_document_enrichment_configuration
    )

    pprint.pprint(data_source_response)

    data_source_id = data_source_response["Id"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the data source with your
customizations.")

    while True:
        # Get the details of the data source, such as the status
        data_source_description = kendra.describe_data_source(
            Id = data_source_id,
            IndexId = index_id
```



```
)
status = data_source_description["Status"]
print(" Creating data source. Status: "+status)
time.sleep(60)
if status != "CREATING":
    break

print("Synchronize the data source.")

sync_response = kendra.start_data_source_sync_job(
    Id = data_source_id,
    IndexId = index_id
)

pprint.pprint(sync_response)

print("Wait for the data source to sync with the index.")

while True:

    jobs = kendra.list_data_source_sync_jobs(
        Id= data_source_id,
        IndexId= index_id
    )

    # For this example, there should be one job
    status = jobs["History"][0]["Status"]

    print(" Syncing data source. Status: "+status)
    time.sleep(60)
    if status != "SYNCING":
        break

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

顧客識別番号を削除するための基本的なデータ操作を構成するには

```
package com.amazonaws.kendra;
```

```
import java.util.concurrent.TimeUnit;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceConfiguration;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceSyncJob;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceSyncJobStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceType;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.IndexStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3DataSourceConfiguration;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobResponse;

public class CreateDataSourceWithCustomizationsExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {
        System.out.println("Create a data source with customizations");

        String dataSourceName = "data-source-name";
        String indexId = "index-id";
        String dataSourceRoleArn = "arn:aws:iam::account-id:role/role-name";
        String s3BucketName = "S3-bucket-name"

        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        CreateDataSourceRequest createDataSourceRequest = CreateDataSourceRequest
            .builder()
            .name(dataSourceName)
            .description(experienceDescription)
            .roleArn(experienceRoleArn)
            .type(DataSourceType.S3)
            .configuration(
                DataSourceConfiguration
                    .builder()
                    .s3Configuration(
```

```

        S3DataSourceConfiguration
            .builder()
            .bucketName(s3BucketName)
            .build()
    ).build()
)
.customDocumentEnrichmentConfiguration(
    CustomDocumentEnrichmentConfiguration
        .builder()
        .inlineConfigurations(Arrays.asList(
            InlineCustomDocumentEnrichmentConfiguration
                .builder()
                .target(
                    DocumentAttributeTarget
                        .builder()
                        .targetDocumentAttributeKey("Customer_ID")
                        .targetDocumentAttributeValueDeletion(true)
                        .build()
                )
                .build()
        ))
    ).build();

CreateDataSourceResponse createDataSourceResponse =
kendra.createDataSource(createDataSourceRequest);
    System.out.println(String.format("Response of creating data source: %s",
createDataSourceResponse));

String dataSourceId = createDataSourceResponse.id();
    System.out.println(String.format("Waiting for Kendra to create the data
source %s", dataSourceId));
    DescribeDataSourceRequest describeDataSourceRequest =
DescribeDataSourceRequest
    .builder()
    .indexId(indexId)
    .id(dataSourceId)
    .build();

    while (true) {
        DescribeDataSourceResponse describeDataSourceResponse =
kendra.describeDataSource(describeDataSourceRequest);

        DataSourceStatus status = describeDataSourceResponse.status();
        System.out.println(String.format("Creating data source. Status: %s",
status));
        TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
    }

```

```
        if (status != DataSourceStatus.CREATING) {
            break;
        }
    }

    System.out.println(String.format("Synchronize the data source %s",
dataSourceId));
    StartDataSourceSyncJobRequest startDataSourceSyncJobRequest =
StartDataSourceSyncJobRequest
        .builder()
        .indexId(indexId)
        .id(dataSourceId)
        .build();
    StartDataSourceSyncJobResponse startDataSourceSyncJobResponse =
kendra.startDataSourceSyncJob(startDataSourceSyncJobRequest);
    System.out.println(String.format("Waiting for the data
source to sync with the index %s for execution ID %s", indexId,
startDataSourceSyncJobResponse.executionId()));

    // For this example, there should be one job
    ListDataSourceSyncJobsRequest listDataSourceSyncJobsRequest =
ListDataSourceSyncJobsRequest
        .builder()
        .indexId(indexId)
        .id(dataSourceId)
        .build();

    while (true) {
        ListDataSourceSyncJobsResponse listDataSourceSyncJobsResponse =
kendra.listDataSourceSyncJobs(listDataSourceSyncJobsRequest);
        DataSourceSyncJob job = listDataSourceSyncJobsResponse.history().get(0);
        System.out.println(String.format("Syncing data source. Status: %s",
job.status()));

        TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
        if (job.status() != DataSourceSyncJobStatus.SYNCING) {
            break;
        }
    }

    System.out.println("Data source creation with customizations is complete");
}
```

```
}
```

Lambda 関数:メタデータまたはコンテンツの抽出と変更

Lambda 関数を使用して、ドキュメントのフィールド、およびコンテンツを操作できます。これは、基本ロジックを超えて高度なデータ操作を適用する場合に便利です。例えば、画像上のテキストを解釈し、各画像をテキストドキュメントとして扱う、光学文字認識 (OCR) を使用します。または、特定のタイムゾーンで現在の日付/時間を取得し、日付フィールドに空の値がある日付/時刻を挿入します。

まず基本ロジックを適用し、Lambda 関数を使用してデータをさらに操作でき、その逆も可能です。Lambda 関数のみを適用することもできます。

Amazon Kendra は Lambda 関数を呼び出して、[CustomDocumentEnrichmentConfiguration](#) の一部として取り込みプロセス中に高度なデータ操作を適用できます。Lambda 関数を実行し、Amazon S3 バケットにアクセスしてデータ操作の出力を保存するアクセス許可を含むロールを指定します。[IAM「アクセスロール」](#)を参照してください。

Amazon Kendra は、元の未加工のドキュメントまたは構造化された解析済みドキュメントに Lambda 関数を適用できます。[PreExtractionHookConfiguration](#) を使用して、元のデータまたは raw データを受け取り、データ操作を適用する Lambda 関数を構成できます。また、構造化ドキュメントを取得し、[PostExtractionHookConfiguration](#) を使用してデータ操作を適用する Lambda 関数を設定することもできます。は、ドキュメントのメタデータとテキストを Amazon Kendra 抽出してドキュメントを構造化します。Lambda 関数は、必須のリクエストとレスポンスの構造に従う必要があります。詳細については、「[the section called “Lambda 関数のデータ制約”](#)」を参照してください。

コンソールで Lambda 関数を設定するには、インデックスを選択し、ナビゲーションメニューの [Document enrichments] (ドキュメントのエンリッチメント) を選択します。[Configure Lambda functions] (Lambda 関数の設定) をクリックして、Lambda 関数を設定します。

PreExtractionHookConfiguration に設定できる Lambda 関数は 1 つのみ、PostExtractionHookConfiguration に設定できる Lambda 関数も 1 つのみです。ただし、Lambda 関数は必要とする他の関数を呼び出すことができます。PreExtractionHookConfiguration および PostExtractionHookConfiguration の両方またはいずれか 1 つを設定できます。PreExtractionHookConfiguration の Lambda 関数の実行時間が 5 分を超えないよう、また、PostExtractionHookConfiguration の Lambda 関数の実行時間が 1 分を超えないようにしてください。カスタムドキュメントエンリッチメントの設定

は、これを設定しない場合 Amazon Kendra よりも、へのドキュメントの取り込みに時間がかかります。

条件が満たされた場合にのみ Lambda 関数を呼び出す Amazon Kendra ように を設定できます。例えば、空の日時値がある場合、 が現在の日時を挿入する関数を Amazon Kendra 呼び出すようにする条件を指定できます。

次に、Lambda 関数を使用して OCR を実行して画像からテキストを解釈し、このテキストを「Document_Image_Text」というフィールドに保存する例を示します。

例 1: 画像からテキストを抽出してテキストドキュメントを作成する

高度な操作が適用される前のデータ。

Document_ID	Document_Image
1	image_1.png
2	image_2.png
3	image_3.png

高度な操作が適用された後のデータ。

Document_ID	Document_Image	Document_Image_Text
1	image_1.png	メールでのアンケートの回答
2	image_2.png	メールでのアンケートの回答
3	image_3.png	メールでのアンケートの回答

次に、Lambda 関数を使用して、空の日付値に対する現在の日付/時間を挿入する例を示します。これは、日付フィールドの値が「null」の場合、これを現在の日付/時刻に置き換えるという条件を使用します。

例 2: Last_Updated フィールドの空の値を、現在の日付/時間で置き換える。

高度な操作が適用される前のデータ。

Document_ID	Body_Text	Last_Updated
1	Lorem Ipsum。	2020 年 1 月 1 日
2	Lorem Ipsum。	
3	Lorem Ipsum。	2020 年 7 月 1 日

高度な操作が適用された後のデータ。

Document_ID	Body_Text	Last_Updated
1	Lorem Ipsum。	2020 年 1 月 1 日
2	Lorem Ipsum。	2021 年 12 月 1 日
3	Lorem Ipsum。	2020 年 7 月 1 日

次のコードは、raw の元のデータに対して高度なデータ操作のための Lambda 関数を設定する例です。

Console

raw の元のデータに対して高度なデータ操作のための Lambda 関数を設定するには

1. 左側のナビゲーションペインの [Indexes] (インデックス) で、[Document enrichments] (ドキュメントのエンリッチメント) を選択して、[Add document enrichment] (ドキュメントのエンリッチメントを追加) を選択します。
2. 「Lambda 関数の設定」ページの「抽出前の Lambda」セクションで、Lambda 関数 ARN と Amazon S3 バケットをドロップダウンから選択します。ドロップダウンから新しいロールを作成するオプションを選択して、IAM アクセスロールを追加します。これにより、ドキュメントエンリッチメントを作成するために必要な Amazon Kendra アクセス許可が作成されます。

CLI

raw の元のデータに対して高度なデータ操作のための Lambda 関数を設定するには

```
aws kendra create-data-source \  
  --name data-source-name \  
  --index-id index-id \  
  --role-arn arn:aws:iam::account-id:role/role-name \  
  --type S3 \  
  --configuration '{"S3Configuration":{"BucketName":"S3-bucket-name"}}' \  
  --custom-document-enrichment-configuration '{"PreExtractionHookConfiguration":  
{"LambdaArn":"arn:aws:iam::account-id:function/function-name", "S3Bucket":"S3-  
bucket-name"}, "RoleArn": "arn:aws:iam:account-id:role/cde-role-name"}'
```

Python

raw の元のデータに対して高度なデータ操作のための Lambda 関数を設定するには

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
import pprint  
import time  
  
kendra = boto3.client("kendra")  
  
print("Create a data source with customizations.")  
  
# Provide the name of the data source  
name = "data-source-name"  
# Provide the index ID for the data source  
index_id = "index-id"  
# Provide the IAM role ARN required for data sources  
role_arn = "arn:aws:iam::${account-id}:role/${role-name}"  
# Provide the data source connection information  
data_source_type = "S3"  
S3_bucket_name = "S3-bucket-name"  
# Configure the data source with Custom Document Enrichment  
configuration = {"S3Configuration":  
    {  
        "BucketName": S3_bucket_name  
    }  
}  
custom_document_enrichment_configuration = {"PreExtractionHookConfiguration":  
    {  
        "LambdaArn": "arn:aws:iam::account-id:function/function-name",  
        "S3Bucket": "S3-bucket-name"  
    }  
}
```



```
    "RoleArn": "arn:aws:iam::account-id:role/cde-role-name"
}

try:
    data_source_response = kendra.create_data_source(
        Name = name,
        IndexId = index_id,
        RoleArn = role_arn,
        Type = data_source_type
        Configuration = configuration
        CustomDocumentEnrichmentConfiguration =
custom_document_enrichment_configuration
    )

    pprint.pprint(data_source_response)

    data_source_id = data_source_response["Id"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the data source with your
customizations.")

    while True:
        # Get the details of the data source, such as the status
        data_source_description = kendra.describe_data_source(
            Id = data_source_id,
            IndexId = index_id
        )
        status = data_source_description["Status"]
        print(" Creating data source. Status: "+status)
        time.sleep(60)
        if status != "CREATING":
            break

    print("Synchronize the data source.")

    sync_response = kendra.start_data_source_sync_job(
        Id = data_source_id,
        IndexId = index_id
    )

    pprint.pprint(sync_response)

    print("Wait for the data source to sync with the index.")
```

```
while True:

    jobs = kendra.list_data_source_sync_jobs(
        Id = data_source_id,
        IndexId = index_id
    )

    # For this example, there should be one job
    status = jobs["History"][0]["Status"]

    print(" Syncing data source. Status: "+status)
    time.sleep(60)
    if status != "SYNCING":
        break

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

raw の元のデータに対して高度なデータ操作のための Lambda 関数を設定するには

```
package com.amazonaws.kendra;

import java.util.concurrent.TimeUnit;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceConfiguration;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceSyncJob;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceSyncJobStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DataSourceType;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeDataSourceRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeDataSourceResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeIndexResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.IndexStatus;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ListDataSourceSyncJobsResponse;
```

```

import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3DataSourceConfiguration;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.StartDataSourceSyncJobResponse;

public class CreateDataSourceWithCustomizationsExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {
        System.out.println("Create a data source with customizations");

        String dataSourceName = "data-source-name";
        String indexId = "index-id";
        String dataSourceRoleArn = "arn:aws:iam::account-id:role/role-name";
        String s3BucketName = "S3-bucket-name"

        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        CreateDataSourceRequest createDataSourceRequest = CreateDataSourceRequest
            .builder()
            .name(dataSourceName)
            .description(experienceDescription)
            .roleArn(experienceRoleArn)
            .type(DataSourceType.S3)
            .configuration(
                DataSourceConfiguration
                    .builder()
                    .s3Configuration(
                        S3DataSourceConfiguration
                            .builder()
                            .bucketName(s3BucketName)
                            .build()
                    ).build()
            )
            .customDocumentEnrichmentConfiguration(
                CustomDocumentEnrichmentConfiguration
                    .builder()
                    .preExtractionHookConfiguration(
                        HookConfiguration
                            .builder()
                            .lambdaArn("arn:aws:iam::account-id:function/function-
name")

                            .s3Bucket("S3-bucket-name")
                            .build()
                    )
                    .roleArn("arn:aws:iam::account-id:role/cde-role-name")
            )
    }
}

```

```
        .build());

        CreateDataSourceResponse createDataSourceResponse =
kendra.createDataSource(createDataSourceRequest);
        System.out.println(String.format("Response of creating data source: %s",
createDataSourceResponse));

        String dataSourceId = createDataSourceResponse.id();
        System.out.println(String.format("Waiting for Kendra to create the data
source %s", dataSourceId));
        DescribeDataSourceRequest describeDataSourceRequest =
DescribeDataSourceRequest
            .builder()
            .indexId(indexId)
            .id(dataSourceId)
            .build();

        while (true) {
            DescribeDataSourceResponse describeDataSourceResponse =
kendra.describeDataSource(describeDataSourceRequest);

            DataSourceStatus status = describeDataSourceResponse.status();
            System.out.println(String.format("Creating data source. Status: %s",
status));
            TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
            if (status != DataSourceStatus.CREATING) {
                break;
            }
        }

        System.out.println(String.format("Synchronize the data source %s",
dataSourceId));
        StartDataSourceSyncJobRequest startDataSourceSyncJobRequest =
StartDataSourceSyncJobRequest
            .builder()
            .indexId(indexId)
            .id(dataSourceId)
            .build();
        StartDataSourceSyncJobResponse startDataSourceSyncJobResponse =
kendra.startDataSourceSyncJob(startDataSourceSyncJobRequest);
        System.out.println(String.format("Waiting for the data
source to sync with the index %s for execution ID %s", indexId,
startDataSourceSyncJobResponse.executionId()));
```

```

        // For this example, there should be one job
        ListDataSourceSyncJobsRequest listDataSourceSyncJobsRequest =
ListDataSourceSyncJobsRequest
        .builder()
        .indexId(indexId)
        .id(dataSourceId)
        .build();

        while (true) {
            ListDataSourceSyncJobsResponse listDataSourceSyncJobsResponse =
kendra.listDataSourceSyncJobs(listDataSourceSyncJobsRequest);
            DataSourceSyncJob job = listDataSourceSyncJobsResponse.history().get(0);
            System.out.println(String.format("Syncing data source. Status: %s",
job.status()));

            TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
            if (job.status() != DataSourceSyncJobStatus.SYNCING) {
                break;
            }
        }

        System.out.println("Data source creation with customizations is complete");
    }
}

```

Lambda 関数のデータ制約

高度なデータ操作のための Lambda 関数は、Amazon Kendra データコントラクトと連携します。制約は、Lambda 関数の必須のリクエストとレスポンスの構造です。Lambda 関数がこれらの構造に従わない場合、はエラーを Amazon Kendra スローします。

PreExtractionHookConfiguration の Lambda 関数は、次のリクエスト構造を期待します。

```

{
  "version": <str>,
  "dataBlobStringEncodedInBase64": <str>, //In the case of a data blob
  "s3Bucket": <str>, //In the case of an S3 bucket
  "s3ObjectKey": <str>, //In the case of an S3 bucket
  "metadata": <Metadata>
}

```

metadata 構造。これには、つぎの CustomDocumentAttribute 構造を含みます。

```
{
  "attributes": [<CustomDocumentAttribute>]
}

CustomDocumentAttribute
{
  "name": <str>,
  "value": <CustomDocumentAttributeValue>
}

CustomDocumentAttributeValue
{
  "stringValue": <str>,
  "integerValue": <int>,
  "longValue": <long>,
  "stringListValue": list<str>,
  "dateValue": <str>
}
```

PreExtractionHookConfiguration の Lambda 関数は、以下のレスポンス構造に従う必要があります。

```
{
  "version": <str>,
  "dataBlobStringEncodedInBase64": <str>, //In the case of a data blob
  "s3objectKey": <str>, //In the case of an S3 bucket
  "metadataUpdates": [<CustomDocumentAttribute>]
}
```

PostExtractionHookConfiguration の Lambda 関数は、次のリクエスト構造を期待します。

```
{
  "version": <str>,
  "s3Bucket": <str>,
  "s3objectKey": <str>,
  "metadata": <Metadata>
}
```

PostExtractionHookConfiguration の Lambda 関数は、以下のレスポンス構造に従う必要があります。

```
PostExtractionHookConfiguration Lambda Response
{
  "version": <str>,
  "s3ObjectKey": <str>,
  "metadataUpdates": [<CustomDocumentAttribute>]
}
```

変更されたドキュメントが Amazon S3 バケットにアップロードされます。変更されたドキュメントは、[the section called “構造化ドキュメントの形式”](#) に示す形式に従う必要があります。

構造化ドキュメントの形式

Amazon Kendra は、構造化ドキュメントを特定の Amazon S3 バケットにアップロードします。構造化ドキュメントは、次の形式に従います。

```
Kendra document

{
  "textContent": <TextContent>
}

TextContent
{
  "documentBodyText": <str>
}
```

データ制約に準拠する Lambda 関数の例

次の Python コードは、メタデータフィールド `_authors`、`_document_title` および `raw` の元のドキュメントの本文の高度な操作を適用する Lambda 関数の例です。

Amazon S3 バケットにある本文コンテンツの場合

```
import json
import boto3

s3 = boto3.client("s3")

# Lambda function for advanced data manipulation
def lambda_handler(event, context):
    # Get the value of "S3Bucket" key name or item from the given event input
```

```

s3_bucket = event.get("s3Bucket")
# Get the value of "S3ObjectKey" key name or item from the given event input
s3_object_key = event.get("s3ObjectKey")

content_object_before_CDE = s3.get_object(Bucket = s3_bucket, Key = s3_object_key)
content_before_CDE = content_object_before_CDE["Body"].read().decode("utf-8");
content_after_CDE = "CDEInvolved " + content_before_CDE

# Get the value of "metadata" key name or item from the given event input
metadata = event.get("metadata")
# Get the document "attributes" from the metadata
document_attributes = metadata.get("attributes")

s3.put_object(Bucket = s3_bucket, Key = "dummy_updated_kendra_document",
Body=json.dumps(content_after_CDE))
return {
    "version": "v0",
    "s3ObjectKey": "dummy_updated_kendra_document",
    "metadataUpdates": [
        {"name": "_document_title", "value":
{"stringValue": "title_from_pre_extraction_lambda"}},
        {"name": "_authors", "value": {"stringListValue": ["author1", "author2"]}}
    ]
}

```

本文がデータ BLOB に存在する場合

```

import json
import boto3
import base64

# Lambda function for advanced data manipulation
def lambda_handler(event, context):

    # Get the value of "dataBlobStringEncodedInBase64" key name or item from the given
    event input
    data_blob_string_encoded_in_base64 = event.get("dataBlobStringEncodedInBase64")
    # Decode the data blob string in UTF-8
    data_blob_string =
base64.b64decode(data_blob_string_encoded_in_base64).decode("utf-8")
    # Get the value of "metadata" key name or item from the given event input
    metadata = event.get("metadata")
    # Get the document "attributes" from the metadata

```



```

document_attributes = metadata.get("attributes")

new_data_blob = "This should be the modified data in the document by pre processing
lambda ".encode("utf-8")
return {
    "version": "v0",
    "dataBlobStringEncodedInBase64":
base64.b64encode(new_data_blob).decode("utf-8"),
    "metadataUpdates": [
        {"name": "_document_title", "value":
{"stringValue": "title_from_pre_extraction_lambda"}},
        {"name": "_authors", "value": {"stringListValue": ["author1", "author2"]}}
    ]
}

```

次の Python コードは、メタデータフィールド `_authors`、`_document_title` および構造化されたドキュメントまたは解析済みのドキュメントの本文の高度な操作を適用する Lambda 関数の例です。

```

import json
import boto3
import time

s3 = boto3.client("s3")

# Lambda function for advanced data manipulation
def lambda_handler(event, context):

    # Get the value of "S3Bucket" key name or item from the given event input
    s3_bucket = event.get("s3Bucket")
    # Get the value of "S3ObjectKey" key name or item from the given event input
    s3_key = event.get("s3ObjectKey")
    # Get the value of "metadata" key name or item from the given event input
    metadata = event.get("metadata")
    # Get the document "attributes" from the metadata
    document_attributes = metadata.get("attributes")

    kendra_document_object = s3.get_object(Bucket = s3_bucket, Key = s3_key)
    kendra_document_string = kendra_document_object['Body'].read().decode('utf-8')
    kendra_document = json.loads(kendra_document_string)
    kendra_document["textContent"]["documentBodyText"] = "Changing document body to a
short sentence."

```

```
s3.put_object(Bucket = s3_bucket, Key = "dummy_updated_kendra_document",
Body=json.dumps(kendra_document))

return {
    "version" : "v0",
    "s3objectKey": "dummy_updated_kendra_document",
    "metadataUpdates": [
        {"name": "_document_title", "value":{"stringValue":
"title_from_post_extraction_lambda"}},
        {"name": "_authors", "value":{"stringListValue":["author1", "author2"]}}
    ]
}
```

インデックスの検索

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra インデックスを検索するには、[クエリ](#) API を使用します。Query API は、アプリケーションで使用するインデックスが作成されたドキュメントに関する情報を返します。このセクションでは、クエリの作成、フィルタリングの実行、および Query API からのレスポンスの解釈方法について説明します。

インデックスを作成したドキュメントを検索するには Amazon Kendra Amazon Lex、[AMAZON.KendraSearchIntent](#) を使用します。でを設定する Amazon Kendra 例については Amazon Lex、[「Amazon Kendra インデックスの FAQ ボットの作成」](#)を参照してください。

トピック

- [インデックスのクエリ](#)
- [パッセージを取得する](#)
- [インデックスの閲覧](#)
- [検索結果を目立たせる](#)
- [HTML の表形式検索](#)
- [クエリの提案](#)
- [クエリスペルチェッカー](#)
- [フィルタリングとファセット検索](#)
- [ユーザーコンテキストでのフィルタリング](#)
- [クエリレスポンスとレスポンスタイプ](#)
- [レスポンスのチューニングとソート](#)
- [クエリ結果の折りたたみ/展開](#)

インデックスのクエリ

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

インデックスを検索すると、はドキュメントに関して指定したすべての情報 Amazon Kendra を使用して、入力した検索用語に最も関連性の高いドキュメントを決定します。が Amazon Kendra 考慮する項目には、次のようなものがあります。

- ドキュメントのテキスト (本文)。
- ドキュメントのタイトル。
- 検索可能としてマークしたカスタムテキストフィールド。
- 指定した日付フィールドは、ドキュメントの「鮮度」を決定するために使用する必要があります。
- 関連情報を提供可能なその他のフィールド。

Amazon Kendra は、検索用に設定したフィールド/属性フィルターに基づいてレスポンスをフィルタリングすることもできます。例えば、「department」というカスタムフィールドがある場合、「legal」という部門からのドキュメントのみを返すようにレスポンスをフィルタリングできます。詳細については、「[Custom fields or attributes](#)」を参照してください。

返される検索結果は、がドキュメントごとに Amazon Kendra 決定する関連性でソートされます。結果はページ割りされ、ユーザーにページを一度に表示できます。

インデックスを作成したドキュメントを検索するには Amazon Kendra Amazon Lex、[AMAZON.KendraSearchIntent](#) を使用します。でを設定する Amazon Kendra 例については Amazon Lex、「[Amazon Kendra インデックスの FAQ ボットの作成](#)」を参照してください。

次の例は、index. Amazon Kendra を検索する方法を示しています。は、クエリに最適な検索結果のタイプ (応答、ドキュメント、質問応答) を決定します。特定のタイプの検索レスポンス (応答、ドキュメント、質問応答) をクエリに返 Amazon Kendra すようにを設定することはできません。

クエリのレスポンスの詳細については、[クエリレスポンスとレスポンスタイプ](#)を参照してください。

トピック

- [前提条件](#)
- [インデックスの検索 \(コンソール\)](#)
- [インデックスの検索 \(SDK\)](#)
- [インデックスの検索 \(Postman\)](#)
- [高度なクエリ構文による検索](#)
- [各言語での検索](#)

前提条件

[クエリ](#) API を使用してインデックスをクエリする前に、次の操作を行います。

- インデックスに必要なアクセス許可を設定して、データソースに接続するか、ドキュメントを一括でアップロードします。詳細については、「[IAM roles](#)」を参照してください。インデックスとデータソースコネクタを作成するために API を呼び出す場合、ドキュメントを一括でアップロードする場合は、ロールの Amazon リソースネームを使用します。
- AWS Command Line Interface、SDK をセットアップするか、Amazon Kendra コンソールに移動します。詳細については[Amazon Kendra 「のセットアップ」](#)を参照してください。
- インデックスを作成してドキュメントのデータソースに接続するか、ドキュメントを一括でアップロードします。詳細については、「[Creating an index](#)」および「[Creating a data source connector](#)」を参照してください。

インデックスの検索 (コンソール)

Amazon Kendra コンソールを使用して、インデックスを検索およびテストできます。クエリを作成して結果を確認できます。

コンソールでインデックスを検索するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<http://console.aws.amazon.com/kendra/> でコンソール Amazon Kendra を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Indexes] (インデックス) をクリックします。
3. インデックスを選択します。
4. ナビゲーションメニューで、インデックスを検索するオプションを選択します。
5. テキストボックスにクエリを入力し、Enter キーを押します。

6. Amazon Kendra は検索の結果を返します。

また、サイドパネルの電球アイコンを選択すると、検索のクエリ ID を取得できます。

インデックスの検索 (SDK)

Python または Java でインデックスを検索するには

- 次の例では、インデックスを検索します。query の値を検索クエリに、index_id または indexId を検索するインデックスのインデックス識別子に変更します。

[クエリ](#) API を呼び出すと、レスポンス要素の一部として検索のクエリ ID を取得することもできます。

Python

```
import boto3
import pprint

kendra = boto3.client("kendra")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"
# Provide the query text
query = "query text"

response = kendra.query(
    QueryText = query,
    IndexId = index_id)

print("\nSearch results for query: " + query + "\n")

for query_result in response["ResultItems"]:

    print("-----")
    print("Type: " + str(query_result["Type"]))

    if query_result["Type"]=="ANSWER" or
    query_result["Type"]=="QUESTION_ANSWER":
        answer_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
        print(answer_text)
```

```
if query_result["Type"]=="DOCUMENT":
    if "DocumentTitle" in query_result:
        document_title = query_result["DocumentTitle"]["Text"]
        print("Title: " + document_title)
    document_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
    print(document_text)

print("-----\n\n")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResultItem;

public class SearchIndexExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String query = "query text";
        String indexId = "index-id";

        QueryRequest queryRequest = QueryRequest
            .builder()
            .queryText(query)
            .indexId(indexId)
            .build();

        QueryResponse queryResponse = kendra.query(queryRequest);

        System.out.println(String.format("\nSearch results for query: %s",
            query));
        for(QueryResultItem item: queryResponse.resultItems()) {
            System.out.println("-----");
            System.out.println(String.format("Type: %s", item.type()));

            switch(item.type()) {
                case QUESTION_ANSWER:
                case ANSWER:
```

```
        String answerText = item.documentExcerpt().text();
        System.out.println(answerText);
        break;
    case DOCUMENT:
        String documentTitle = item.documentTitle().text();
        System.out.println(String.format("Title: %s",
documentTitle));
        String documentExcerpt = item.documentExcerpt().text();
        System.out.println(String.format("Excerpt: %s",
documentExcerpt));
        break;
    default:
        System.out.println(String.format("Unknown query result type:
%s", item.type()));
    }

    System.out.println("-----\n");
}
}
```

インデックスの検索 (Postman)

[Postman](#) を使用して、Amazon Kendra インデックスをクエリおよびテストできます。

Postman を使用してインデックスを検索するには

1. Postman で新しいコレクションを作成し、リクエストタイプを [POST] に設定します。
2. エンドポイントの URL を入力します。例えば、`https://kendra.<region>.amazonaws.com` などです。
3. 認可タブを選択し、次の情報を入力します。
 - [タイプ] - [AWS 署名] を選択します。
 - AccessKey — IAM ユーザーの作成時に生成されたアクセスキーを入力します。
 - SecretKey — IAM ユーザーの作成時に生成されたシークレットキーを入力します。
 - AWS Region — インデックスを作成するリージョンを入力します。例えば、`us-west-2` などです。

- [サービス名] - [kendra] と入力します。大文字と小文字を区別するため、小文字にする必要があります。

 Warning

サービス名を正しく入力しなかった場合や、小文字を使用しなかった場合は、[送信] を選択してリクエストを送信すると、「認証情報の範囲は、正しいサービス「kendra」に限定する必要があります」というエラーが表示されます。
また、正しいアクセスキーとシークレットキーが入力されたことを確認する必要があります。

4. [ヘッダー] タブを選択し、次のキーと値の情報を入力します。

- キー: X-Amz-Target

値: com.amazonaws.kendra.AWSKendraFrontendService.Query

- キー: Content-Encoding

値: amz-1.0

5. [本文] タブを選択し、次の操作を行います。

- リクエストの本文の 未加工の JSON タイプを選択します。
- インデックス ID とクエリテキストを含む JSON を入力します。

```
{
  "IndexId": "index-id",
  "QueryText": "enter a query here"
}
```

 Warning

JSON で正しいインデントが使用されていない場合、「SerializationException」というエラーがスローされます。JSON のインデントを確認してください。

6. [送信] (右上付近にあります) を選択します。

高度なクエリ構文による検索

高度なクエリ構文や演算子を使用すると、単純なキーワードクエリや自然言語クエリよりも具体的なクエリを作成できます。これには、範囲、ブール値、ワイルドカードなどが含まれます。演算子を使用すると、クエリにコンテキストを追加して、検索結果をさらに絞り込むことができます。

Amazon Kendra では、次の演算子がサポートされています。

- **ブール値:** 検索を限定または拡大するロジック。例えば、`amazon AND sports` は、両方の語句を含むドキュメントのみを検索するように検索を限定します。
- **かっこ:** ネストされたクエリ語句を優先順に読み取ります。例えば、`(amazon AND sports) NOT rainforest` は、`NOT rainforest` の前に `(amazon AND sports)` を読み取ります。
- **範囲:** 日付または数値の範囲値。範囲は、包含、除外、制限なしのいずれでも構いません。例えば、最終更新日が 2020 年 1 月 1 日から 2020 年 12 月 31 日まで (両端の日付を含む) のドキュメントを検索できます。
- **フィールド:** 特定のフィールドを使用して、検索対象を絞り込みます。例えば、「場所」のフィールドに「米国」が含まれるドキュメントを検索できます。
- **ワイルドカード:** テキストの文字列との部分一致。例えば、`Cloud*` は `CloudFormation` と一致する可能性があります。Amazon Kendra では現在、末尾のワイルドカードのみがサポートされています。
- **完全一致引用符:** テキストの文字列との完全一致。例: `"Amazon Kendra" "pricing"` を含むドキュメント。

上のいずれかの演算子を組み合わせて使用できます。

演算子や非常に複雑なクエリを過度に使用すると、クエリのレイテンシーに影響を与える可能性がありますので注意してください。ワイルドカードは、レイテンシーの点で非常にコストのかかる演算子の 1 つです。一般的に、使用する語句や演算子が多いほど、レイテンシーへの影響が大きくなります。レイテンシーに影響するその他の要因には、インデックス化されたドキュメントの平均サイズ、インデックスのサイズ、検索結果のフィルタリング、Amazon Kendra インデックスの全体的な負荷などがあります。

ブール値

ブール値演算子の AND、OR、NOT を使用して、単語を組み合わせたり、除外したりすることができます。

ブール演算子を使用した例を次に示します。

amazon AND sports

Amazon Prime Video のスポーツまたはその他の類似コンテンツなど、テキストに「amazon」と「sports」の両方の語句を含む検索結果を返します。

sports OR recreation

テキストに「sports」や「recreation」、または両方の語句を含む検索結果を返します。

amazon NOT rainforest

テキストに「amazon」の語句を含むが、「rainforest」の語句は含まない検索結果を返します。これは、アマゾンの熱帯雨林に関するドキュメントではなく、Amazon という会社に関するドキュメントを検索するためのものです。

括弧

かっこを使うと、ネストされた単語を優先順に検索できます。括弧は、クエリの読み取り Amazon Kendra 方法を示します。

かっこ演算子を使用した例を次に示します。

(amazon AND sports) NOT rainforest

テキストに「amazon」と「sports」の両方の語句を含むが、「rainforest」の語句は含まないドキュメントを返します。これは Amazon Prime Video スポーツまたはその他の類似コンテンツを検索するためのもので、アマゾンの熱帯雨林でのアドベンチャースポーツを検索するためのものではありません。かっこは、NOT rainforest の前に amazon AND sports を読み取る必要があることを示すのに役立ちます。このクエリは amazon AND (sports NOT rainforest) と読み取るものではありません。

(amazon AND (sports OR recreation)) NOT rainforest

「sports」や「recreation」、または両方の語句を含む検索結果を返します。ただし、「rainforest」の語句は含まれません。これは Amazon Prime Video スポーツまたはレクリエーションを検索するためのもので、アマゾンの熱帯雨林でのアドベンチャースポーツを検索するためのものではありません。かっこは、sports OR recreation は「amazon」と組み合わせる前に読み取る必要があり、NOT rainforest の前に読み取る必要があることを示すのに役立ちます。このクエリは amazon AND (sports OR (recreation NOT rainforest)) と読み取るものではありません。

範囲

値の範囲を使用して、検索結果を絞り込むことができます。属性と範囲の値を指定します。日付タイプでも数値タイプでも構いません。

日付範囲は、次の形式になります。

- Epoch
- YYYY
- YYYY-mm
- YYYY-mm-dd
- YYYY-mm-dd'T'HH

また、範囲の下限值と上限値を含めるかどうかを指定できます。

範囲演算子を使用した例を次に示します。

`_processed_date:>2019-12-31 AND _processed_date:<2021-01-01`

2020 年 (2019 年 12 月 31 日より後で、かつ 2021 年 1 月 1 日より前) に処理されたドキュメントを返します。

`_processed_date:>=2020-01-01 AND _processed_date:<=2020-12-31`

2020 年 (2020 年 1 月 1 日から 2020 年 12 月 31 日まで (両端の日付を含む)) に処理されたドキュメントを返します。

`_document_likes:<1`

「いいね」がゼロまたはユーザーからのフィードバックがない、つまり「いいね」が 1 件未満のドキュメントを返します。

ある範囲を、指定した範囲の値を含むものとして扱うのか、含まないものとして扱うのかを指定できます。

包含

`_last_updated_at:[2020-01-01 TO 2020-12-31]`

最終更新日が 2020 年のドキュメントを返します。これには 2020 年 12 月 1 日と 2020 年 12 月 31 日が含まれます。

除外

`_last_updated_at:{2019-12-31 TO 2021-01-01}`

最終更新日が 2020 年のドキュメントを返します。これには 2019 年 12 月 31 日と 2021 年 1 月 1 日は含まれません。

包含または除外ではなく、制限なしの範囲の場合は、`< and >` 演算子を使用します。例:

`_last_updated_at:>2019-12-31 AND _last_updated_at:<2021-01-01`

フィールド

特定のフィールドの値と一致するドキュメントのみを返すように検索を限定できます。フィールドは、任意のタイプに指定できます。

フィールドレベルのコンテキスト演算子の使用例を次に示します。

`status:"Incomplete" AND financial_year:2021`

会計年度が 2021 年のドキュメントで、ステータスが未完了のものを返します。

`(sports OR recreation) AND country:"United States" AND level:"professional"`

米国内のプロスポーツまたはレクリエーションに関するドキュメントを返します。

ワイルドカード

ワイルドカード演算子を使用すると、単語やフレーズのバリエーションを考慮して検索範囲を広げることができます。これは、名前バリエーションを検索する場合に便利です。Amazon Kendra は現在、末尾のワイルドカードのみをサポートしています。末尾のワイルドカードのプレフィックス文字の数は 2 文字以上である必要があります。

ワイルドカード演算子を使用した例を次に示します。

Cloud*

CloudFormation や CloudWatch などのバリエーションを含むドキュメントを返します。

kendra*aws

kendra.amazonaws などのバリエーションを含むドキュメントを返します。

kendra*aws*

kendra.amazonaws.com などのバリエーションを含むドキュメントを返します。

完全一致引用符

引用符を使用すると、テキストの一部と完全に一致するものを検索できます。

引用符の使用例を次に示します。

"Amazon Kendra" "pricing"

「Amazon Kendra」と「pricing」の両方の語句を含むドキュメントを返します。結果を返すには、ドキュメント「Amazon Kendra」と「pricing」の両方が含まれている必要があります。

"Amazon Kendra" "pricing" cost

「Amazon Kendra」と「pricing」の両方の語句を含み、オプションで「cost」の語句を含むドキュメントを返します。結果を返すには、ドキュメント「Amazon Kendra」と「pricing」の両方が含まれている必要がありますが、「cost」は含まれていない場合もあります。

無効なクエリ構文

Amazon Kendra クエリ構文に問題があるか、クエリが現在 でサポートされていない場合、 は警告を発行します Amazon Kendra。詳細については、[「API documentation for query warnings」](#)を参照してください。

次のクエリは、無効なクエリ構文の例です。

_last_updated_at:<2021-12-32

無効な日付です。32 日は、Amazon Kendraが使用しているグレゴリオ暦には存在しません。

_view_count:ten

無効な数値です。数値を表すには、数字を使用する必要があります。

nonExistentField:123

無効なフィールド検索です。フィールド検索を使用するには、そのフィールドが存在している必要があります。

Product:[A TO D]

無効な範囲です。範囲には、数値または日付を使用する必要があります。

OR Hello

無効なブール値です。演算子は語句と一緒に使用し、語句の間に記述する必要があります。

各言語での検索

サポートされている言語でドキュメントを検索できます。[\[AttributeFilter\]](#) の言語コードを渡して、選択した言語でフィルタリングされたドキュメントを返すことができます。クエリは、サポートされている言語で入力できます。

言語を指定しない場合、はデフォルトでドキュメントを英語で Amazon Kendra クエリします。コードを含む、サポートされている言語の詳細については、[英語以外の言語でドキュメントを追加する](#)を参照してください。

サポートされている言語のドキュメントをコンソールで検索するには、インデックスを選択し、ナビゲーションメニューから、インデックスを検索するオプションを選択します。[\[検索設定\]](#) を選択して、ドキュメントを返す言語を選択します。次にドロップダウンの [\[言語\]](#) から言語を選択します。

次の例では、スペイン語でドキュメントを検索する方法を示しています。

コンソールでスペイン語のインデックスを検索するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<http://console.aws.amazon.com/kendra/> でコンソール Amazon Kendra を開きます。
2. ナビゲーションメニューで、[\[インデックス\]](#) を選択し、目的のインデックスを選択します。
3. ナビゲーションメニューで、インデックスを検索するオプションを選択します。
4. [\[検索設定\]](#) で、[\[言語\]](#) ドロップダウンを選択し、スペイン語を選択します。
5. テキストボックスにクエリを入力し、Enter キーを押します。
6. Amazon Kendra は、検索結果をスペイン語で返します。

CLI、Python または Java を使用してインデックスをスペイン語で検索するには

- 次の例では、インデックスをスペイン語で検索します。searchString の値を検索クエリに、indexID の値を検索するインデックスのインデックス識別子に変更します。スペイン語の言語コードは es です。これを独自の言語コードに置き換えることができます。

CLI

```
{
  "EqualsTo": {
    "Key": "_language_code",
    "Value": {
      "StringValue": "es"
    }
  }
}
```

```
    }  
  }  
}
```

Python

```
import boto3  
import pprint  
  
kendra = boto3.client("kendra")  
  
# Provide the index ID  
index_id = "index-id"  
# Provide the query text  
query = "search-string"  
  
# Includes the index ID, query text, and language attribute filter  
response = kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index_id,  
    AttributeFilter = {  
        "EqualsTo": {  
            "Key": "_language_code",  
            "Value": {  
                "StringValue": "es"  
            }  
        }  
    })  
  
print ("\nSearch results|Resultados de la búsqueda: " + query + "\n")  
  
for query_result in response["ResultItems"]:  
  
    print("-----")  
    print("Type: " + str(query_result["Type"]))  
  
    if query_result["Type"]=="ANSWER" or  
    query_result["Type"]=="QUESTION_ANSWER":  
        answer_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]  
        print(answer_text)  
  
    if query_result["Type"]=="DOCUMENT":  
        if "DocumentTitle" in query_result:
```



```
        document_title = query_result["DocumentTitle"]["Text"]
        print("Title: " + document_title)
        document_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
        print(document_text)

    print("-----\n\n")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResultItem;

public class SearchIndexExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String query = "searchString";
        String indexId = "indexID";

        QueryRequest queryRequest = QueryRequest.builder()
            .queryText(query)
            .indexId(indexId)
            .attributeFilter(
                AttributeFilter.builder()
                    .withEqualsTo(
                        DocumentAttribute.builder()
                            .withKey("_language_code")
                            .withValue("es")
                            .build()
                    )
                .build()
            )
            .build();

        QueryResponse queryResponse = kendra.query(queryRequest);

        System.out.println(String.format("\nSearch results|
                                         Resultados de la búsqueda: %s",
                                         query));
    }
}
```

```
for(QueryResultItem item: queryResponse.resultItems()) {
    System.out.println("-----");
    System.out.println(String.format("Type: %s", item.type()));

    switch(item.type()) {
        case QUESTION_ANSWER:
        case ANSWER:
            String answerText = item.documentExcerpt().text();
            System.out.println(answerText);
            break;
        case DOCUMENT:
            String documentTitle = item.documentTitle().text();
            System.out.println(String.format("Title: %s",
documentTitle));
            String documentExcerpt = item.documentExcerpt().text();
            System.out.println(String.format("Excerpt: %s",
documentExcerpt));
            break;
        default:
            System.out.println(String.format("Unknown query result type:
%s", item.type()));
    }

    System.out.println("-----\n");
}
}
```

パッセージを取得する

[Retrieve](#) API を、検索拡張生成 (RAG) システムのレトリバーとして使用できます。

RAG システムは、生成系人工知能を使用して質問応答アプリケーションを構築します。RAG システムは、レトリバーと大規模言語モデル (LLM) で構成されています。クエリが指定されると、レトリバーはドキュメントのコーパスから最も関連性が強いテキストのコーパスを特定し、それを LLM に送り、最も有用な答えを提供します。次に、LLM は関連するテキストチャンクまたはパッセージを分析し、クエリに対する包括的なレスポンスを生成します。

Retrieve API は、パッセージと呼ばれるテキストのチャンクまたは抜粋を検索し、最も関連性の強い最上位のパッセージをクエリに返します。

[Query](#) API と同様に、RetrieveAPI は関連情報も検索します。API 情報の取得 は、クエリのコンテキストと、インデックスが作成されたドキュメントから利用可能なすべての情報を考慮します。ただし、デフォルトでは Query API は最大 100 個のトークンワードの抜粋のみを返します。Retrieve API を使用すると、最大 200 個のトークンワードの長いパッセージと、最大 100 個のセマンティックに関連するパッセージを取得できます。これには、インデックスからの質問応答や FAQ タイプの回答は含まれません。チャンクとも呼ばれるパッセージは、複数のドキュメントと同じドキュメントの複数の部分から意味的に抽出できるテキストの抜粋です。Kendra の GenAI Enterprise Edition インデックスは、深層学習モデルによるランク付けとともに、ベクトルインデックスとキーワードインデックスに対するハイブリッド検索を使用して、取得の高精度結果を提供します。

Retrieve API を使用すると、次のことを実行できます。

- インデックスレベルでのオーバーライドブースト
- ドキュメントフィールドまたは属性に基づくフィルタリング
- ユーザーまたはグループのドキュメントへのアクセスに基づいたフィルタリング
- 取得したドキュメントの結果の信頼度スコアバケットを表示します。信頼度バケットは、Amazon Kendra がそのレスポンスがクエリに関連している信頼度を示す相対的なランク付けを提供します。

 Note

信頼スコアバケットは現在、英語でのみ利用可能です。

有用な追加情報が得られる可能性のある特定のフィールドをレスポンスに含めることもできます。

Retrieve API は現在、[高度なクエリ構文](#)を使用したクエリ、クエリの[スペル修正の提案](#)、[ファセット](#)、検索クエリを自動入力するための[クエリ提案](#)、[増分学習](#)などの機能をサポートしていません。取得 API クエリは分析ダッシュボードに表示されません。

Retrieve API は、インデックスに設定した[クエリ容量ユニット](#)の数を共有します。1 つのキャパシティーユニットに含まれる内容と、インデックスのデフォルトの基本容量の詳細については、「[Adjusting capacity](#)」を参照してください。

 Note

Developer Amazon Kendra Edition を使用している場合は容量を追加できません。容量を追加できるのは Amazon Kendra Enterprise Edition を使用している場合のみです。Developer

Edition と Enterprise Edition に含まれる内容の詳細については、「[Amazon Kendra Editions](#)」を参照してください。

次の例では、Retrieve API を使用してクエリ "how does amazon kendra work?" のインデックス内のドキュメントから最も関連性の高い上位 100 件のドキュメントを取得しています。

Python

```
import boto3
import pprint

kendra = boto3.client("kendra")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"
# Provide the query text
query = "how does amazon kendra work?"
# You can retrieve up to 100 relevant passages
# You can paginate 100 passages across 10 pages, for example
page_size = 10
page_number = 10

result = kendra.retrieve(
    IndexId = index_id,
    QueryText = query,
    PageSize = page_size,
    PageNumber = page_number)

print("\nRetrieved passage results for query: " + query + "\n")

for retrieve_result in result["ResultItems"]:

    print("-----")
    print("Title: " + str(retrieve_result["DocumentTitle"]))
    print("URI: " + str(retrieve_result["DocumentURI"]))
    print("Passage content: " + str(retrieve_result["Content"]))
    print("-----\n\n")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;
```

```
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.RetrieveRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.RetrieveResult;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.RetrieveResultItem;

public class RetrievePassageExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String indxId = "index-id";
        String query = "how does amazon kendra work?";
        Integer pgSize = 10;
        Integer pgNumber = 10;

        RetrieveRequest retrieveRequest = RetrieveRequest
            .builder()
            .indexId(indxId)
            .queryText(query)
            .pageSize(pgSize)
            .pageNumber(pgNumber)
            .build();

        RetrieveResult retrieveResult = kendra.retrieve(retrieveRequest);

        System.out.println(String.format("\nRetrieved passage results for query:
%s", query));
        for(RetrieveResultItem item: retrieveResult.resultItems()) {
            System.out.println("-----");
            System.out.println(String.format("Title: %s", documentTitle));
            System.out.println(String.format("URI: %s", documentURI));
            System.out.println(String.format("Passage content: %s", content));
            System.out.println("-----\n");
        }
    }
}
```

インデックスの閲覧

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

検索クエリを入力することなく、属性またはファセットでドキュメントを参照できます。Amazon Kendra Index Browse を使用すると、ユーザーは特定のクエリに関係なく、自由にインデックスを閲覧してドキュメントを検索できます。これは、ユーザーが検索の出発点として、インデックスを幅広く閲覧するのに役立ちます。

Index Browse は、ソートタイプを持つドキュメント属性またはファセットによる検索にのみ使用できます。Index Browse を使用して、インデックス全体を検索することはできません。クエリテキストがない場合、Amazon Kendra はドキュメント属性フィルターまたはファセット、およびソートタイプを要求します。

[クエリ](#) API を使用してインデックスを閲覧できるようにするには、[AttributeFilter](#) または [ファセット](#) と [SortingConfiguration](#) を含める必要があります。コンソールでインデックスを閲覧できるようにするには、ナビゲーションメニューの [インデックス] でインデックスを選択し、インデックスを検索するオプションを選択します。検索ボックスで、Enter キーを 2 回押します。ドロップダウンから [検索結果のフィルタリング] を選択して [フィルター] を選択し、さらにドロップダウンから [ソート] を選択してソートの種類を選択します。

次の例では、スペイン語のドキュメントのインデックスをドキュメント作成日の降順で閲覧しています。

CLI

```
aws kendra query \  
--index-id "index-id" \  
--attribute-filter '{  
  "EqualsTo":{  
    "Key": "_language_code",  
    "Value": {  
      "StringValue": "es"  
    }  
  }  
}
```

```
}' \
--sorting-configuration '{
    "DocumentAttributeKey": "_created_at",
    "SortOrder": "DESC"
}'
```

Python

```
import boto3

kendra = boto3.client("kendra")

# Must include the index ID, the attribute filter, and sorting configuration
response = kendra.query(
    IndexId = "index-id",
    AttributeFilter = {
        "EqualsTo": {
            "Key": "_language_code",
            "Value": {
                "StringValue": "es"
            }
        }
    },
    SortingConfiguration = {
        "DocumentAttributeKey": "_created_at",
        "SortOrder": "DESC"})

print("\nSearch results|Resultados de la búsqueda: \n")

for query_result in response["ResultItems"]:

    print("-----")
    print("Type: " + str(query_result["Type"]))

    if query_result["Type"]=="ANSWER" or query_result["Type"]=="QUESTION_ANSWER":
        answer_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
        print(answer_text)

    if query_result["Type"]=="DOCUMENT":
        if "DocumentTitle" in query_result:
            document_title = query_result["DocumentTitle"]["Text"]
            print("Title: " + document_title)
            document_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
```

```
print(document_text)

print("-----\n\n")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResult;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResultItem;

public class SearchIndexExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();
        QueryRequest queryRequest = QueryRequest.builder()
            .withIndexId("index-id")
            .withAttributeFilter(AttributeFilter.builder()
                .withEqualsTo(DocumentAttribute.builder()
                    .withKey("_language_code")
                    .withValue(DocumentAttributeValue.builder()
                        .withStringValue("es")
                        .build())
                    .build())
                .build())
            .withSortingConfiguration(SortingConfiguration.builder()
                .withDocumentAttributeKey("_created_at")
                .withSortOrder("DESC")
                .build())
            .build();

        QueryResult queryResult = kendra.query(queryRequest);
        for (QueryResultItem item : queryResult.getResultItems()) {
            System.out.println("-----");
            System.out.println(String.format("Type: %s", item.getType()));

            switch (item.getType()) {
                case QueryResultType.QUESTION_ANSWER:
                case QueryResultType.ANSWER:
                    String answerText = item.getDocumentExcerpt().getText();
                    System.out.println(answerText);
                    break;
            }
        }
    }
}
```



```
        case QueryResultType.DOCUMENT:
            String documentTitle = item.getDocumentTitle().getText();
            System.out.println(String.format("Title: %s", documentTitle));
            String documentExcerpt = item.getDocumentExcerpt().getText();
            System.out.println(String.format("Excerpt: %s",
documentExcerpt));
            break;
        default:
            System.out.println(String.format("Unknown query result type:
%s", item.getType()));
        }
        System.out.println("-----\n");
    }
}
```

検索結果を目立たせる

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

ユーザーが特定のクエリを発行した際に、検索結果に特定のドキュメントを目立たせることができます。これにより、ユーザーにとって検索結果がより見やすく、目立つようになります。注目の検索結果は、通常の検索結果リストとは別に、検索ページの上部に表示されます。クエリごとに別々のドキュメントを目立たせることや、特定のドキュメントにふさわしい視認性を確保できます。

特定のクエリを特定のドキュメントにマッピングして、その結果に反映できます。クエリに完全に一致するものが含まれている場合、1 つ以上の特定のドキュメントが検索結果に表示されます。

例えば、ユーザーが「new products 2023」というクエリを発行した場合に、「What's new」と「Coming soon」というタイトルのドキュメントを選択して検索結果ページの上部に目立たせるように指定できます。これにより、新製品に関するこれらのドキュメントが、目的に合った視認性を得られるようになります。

Amazon Kendra 検索結果ページの上部に を含めるために結果が既に選択されている場合、 は検索結果を複製しません。注目の検索結果が他の検索結果よりも既に上位に表示されている場合、それが再び最初の結果としてランク付けされることはありません。

特定の検索結果を目立たせるためには、クエリに含まれるキーワードやフレーズを使用したクエリの部分一致ではなく、テキスト全文のクエリの完全一致を指定する必要があります。例えば、注目の結果セットに「Kendra」というクエリのみを指定すると、「How does Kendra semantically rank results?」などのクエリになります。注目の結果はレンダリングされません。特徴のある結果は、範囲が広すぎるクエリではなく、特定のクエリ用に設計されています。Amazon Kendra は、キーワードタイプのクエリを自然に処理して検索結果で最も有用なドキュメントをランク付けするため、単純なキーワードに基づいて結果の過剰な特徴付けを回避します。

ユーザーが頻繁に使用する特定のクエリがある場合は、それらのクエリを指定して注目の結果に指定できます。例えば、[Amazon Kendra Analytics](#) を使用して上位のクエリを調べて、「How does kendra semantically rank results?」など、特定のクエリが見つかったとします。および「kendra セマンティック検索」が頻繁に使用されるため、これらのクエリはAmazon Kendra 「search 101」というタイトルのドキュメントを特集するために を指定すると便利です。

Amazon Kendra は、注目の結果のクエリを大文字と小文字を区別しないものとして扱います。はクエリを小文字 Amazon Kendra に変換し、末尾の空白文字を 1 つのスペースに置き換えます。は、注目の結果のクエリを指定するときに、他のすべての文字をそのまま Amazon Kendra 一致させます。

[CreateFeaturedResultsSet](#) API を使用して、特定のクエリにマッピングする主な結果セットを作成します。コンソールを使用する場合は、インデックスを選択し、ナビゲーションメニューで [注目の結果] を選択して注目の結果セットを作成します。1 つのインデックスにつき最大 50 セットの注目の結果、1 セットにつき 4 つの主要ドキュメント、および注目の結果セットごとに最大 49 のクエリテキストを作成できます。これらの制限は、[サポート](#) にリクエストして引き上げることができます。

複数の注目の結果セットから同じドキュメントを選択できます。ただし、複数のセットで同じ完全一致クエリテキストを使用しないでください。注目の結果に対して指定するクエリは、インデックスの注目の結果セットごとに一意である必要があります。

注目のドキュメントの選択が 4 つまでの場合は、ドキュメントの順序を調整できます。API を使用する場合、注目のドキュメントを一覧表示する順序は、注目の結果に表示される順序と同じになります。コンソールを使用すると、結果に表示するドキュメントを選択するときに、ドキュメントの順序をドラッグアンドドロップするだけで済みます。

特定のユーザーやグループが特定のドキュメントにアクセスでき、他のユーザーやグループはアクセスできないアクセスコントロールも、注目の結果を設定する際にも引き続き適用されます。これは、

ユーザーコンテキストのフィルタリングにも当てはまります。例えば、ユーザー A は「Interns」企業グループに属しているため、企業秘密に関するドキュメントにはアクセスできないはずです。ユーザー A が企業秘密文書を含むクエリを入力しても、ユーザー A の結果にはこのドキュメントは表示されません。検索結果ページの他の結果も同様です。タグを使用して、アクセスをコントロールできる Amazon Kendra リソースである注目の結果セットへのアクセスをコントロールすることもできます。

次の例では、「new products 2023」、「new products available」というクエリを「What's new」(doc-id-1)と「Coming soon」(doc-id-2)というタイトルのドキュメントにマッピングして、注目の結果セットを作成しています。

CLI

```
aws kendra create-featured-results-set \
  --featured-results-set-name 'New product docs to feature' \
  --description "Featuring What's new and Coming soon docs" \
  --index-id index-id \
  --query-texts 'new products 2023' 'new products available' \
  --featured-documents '{"Id":"doc-id-1", "Id":"doc-id-2"}'
```

Python

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Create a featured results set.")

# Provide a name for the featured results set
featured_results_name = "New product docs to feature"
# Provide an optional decription for the featured results set
description = "Featuring What's new and Coming soon docs"
# Provide the index ID for the featured results set
index = "index-id"
# Provide a list of query texts for the featured results set
queries = ['new products 2023', 'new products available']
# Provide a list of document IDs for the featured results set
featured_doc_ids = [{"Id":"doc-id-1"}, {"Id":"doc-id-2"}]
```

```
try:
    featured_results_set_response = kendra.create_featured_results_set(
        FeaturedResultsSetName = featured_results_name,
        Description = description,
        Index = index,
        QueryTexts = queries,
        FeaturedDocuments = featured_doc_ids
    )

    pprint.pprint(featured_results_set_response)

    featured_results_set_id = featured_results_set_response["FeaturedResultsSetId"]

    while True:
        # Get the details of the featured results set, such as the status
        featured_results_set_description = kendra.describe_featured_results_set(
            Id = featured_results_set_id
        )
        status = featured_results_set_description["Status"]
        print(" Featured results set status: "+status)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

HTML の表形式検索

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendraの表形式検索機能では、HTML ドキュメントに埋め込まれた表から回答を検索して抽出できます。インデックスを検索すると、クエリに関連する場合、はテーブルからの抜粋 Amazon Kendra を含め、有用な情報を提供します。

Amazon Kendra は、テーブル内の有用な情報など、ドキュメントの本文テキスト内のすべての情報を確認します。例えば、インデックスには、運用コスト、収入、その他の財務情報に関する表を含むビジネスレポートが含まれています。クエリの場合、「2020-2022 からの年間運用コストはいくらですか？」は、関連するテーブル列「運用 (百万 USD)」と「会計年度」、および 2020 年、2021 年、2022 年の収益値を含むテーブル行を含むテーブルからの抜粋を返す Amazon Kendra ことができます。結果には、表の抜粋とドキュメントのタイトル、ドキュメント全文へのリンク、選択したドキュメントフィールドが含まれます。

表の抜粋は、情報が表の 1 つのセルにあるか、複数のセルにあるかにかかわらず、検索結果に表示できます。たとえば、は、これらの各種類のクエリに合わせたテーブルの抜粋 Amazon Kendra を表示できます。

- 「highest interest rate credit card in 2020」
- 「highest interest rate credit card from 2020-2022」
- 「top 3 highest interest rate credit cards in 2020-2022」
- 「credit cards with interest rates less than 10%」
- 「all available low interest credit cards」

Amazon Kendra は、クエリに最も関連性の高いテーブルセルを強調表示します。最も関連性の高いセルと、それに対応する行、列、列名が検索結果に表示されます。表の抜粋には、クエリに関連する表セルの数と元の表で利用可能な列の数に応じて、最大 5 つの列と 3 つの行が表示されます。表の抜粋では、最も関連性の高いセルが、その次に関連性の高いセルとともに表示されます。

レスポンスには、表の回答がクエリにどの程度関連しているかを示す信頼バケット (MEDIUM、HIGH、VERY_HIGH) が含まれます。表のセルの値の信頼度が VERY_HIGH の場合、その値が「最上位の回答」になり、強調表示されます。表のセルの値の信頼度が HIGH の場合、その値が強調表示されます。表のセルの値の信頼度が MEDIUM の場合、その値は強調表示されません。表の回答に対する全体的な信頼度は、レスポンスで返されます。例えば、表に信頼度 HIGH の表のセルのほとんどが含まれている場合、表の回答で返される全体的な信頼度は HIGH の信頼度です。

デフォルトでは、表にドキュメントの他の構成要素よりも重要度や重みが付けられることはありません。ドキュメント内で、テーブルがクエリにわずかにしか関連しないが、関連性の高い段落がある場合、は段落の抜粋 Amazon Kendra を返します。検索結果には、同じドキュメントまたは他のドキュメント内の、最良に近いの回答と最も有用な情報を提供するコンテンツが表示されます。表の信頼度が MEDIUM の信頼度を下回ると、そのテーブルの抜粋はレスポンスに返されません。

既存のインデックスで表形式検索を使用するには、コンテンツのインデックスを再作成する必要があります。

Amazon Kendra 表形式検索は[シノニム](#) (カスタムシノニムを含む) をサポートします。は、テーブルタグ内の HTML テーブルを含む英語のドキュメント Amazon Kendra のみをサポートします。

次の例は、クエリ結果に含まれる表の抜粋を示しています。表の抜粋を含む、クエリレスポンスを含むサンプル JSON を表示するには、「[Query responses and types](#)」を参照してください。

Python

```
import boto3
import pprint

kendra = boto3.client("kendra")

# Provide the index ID
index_id = <index-id>
# Provide the query text
query = "search string"

response = kendra.query(
    QueryText = query,
    IndexId = index_id)

print("\nSearch results for query: " + query + "\n")

for query_result in response["ResultItems"]:

    print("-----")
    print("Type: " + str(query_result["Type"]))
    print("Type: " + str(query_result["Format"]))

    if query_result["Type"]=="ANSWER" and query_result["Format"]=="TABLE":
        answer_table = query_result["TableExcerpt"]
        print(answer_table)

    if query_result["Type"]=="ANSWER" and query_result["Format"]=="TEXT":
        answer_text = query_result["DocumentExcerpt"]
        print(answer_text)

    if query_result["Type"]=="QUESTION_ANSWER":
        question_answer_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
```

```

        print(question_answer_text)

    if query_result["Type"]=="DOCUMENT":
        if "DocumentTitle" in query_result:
            document_title = query_result["DocumentTitle"]["Text"]
            print("Title: " + document_title)
        document_text = query_result["DocumentExcerpt"]["Text"]
        print(document_text)

    print("-----\n\n")

```

Java

```

package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.QueryResultItem;

public class SearchIndexExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String query = "search string";
        String indexId = "index-id";

        QueryRequest queryRequest = QueryRequest
            .builder()
            .queryText(query)
            .indexId(indexId)
            .build();

        QueryResponse queryResponse = kendra.query(queryRequest);

        System.out.println(String.format("\nSearch results for query: %s", query));
        for(QueryResultItem item: queryResponse.resultItems()) {
            System.out.println("-----");
            System.out.println(String.format("Type: %s", item.type()));
            System.out.println(String.format("Format: %s", item.format()));

            switch(item.format()) {
                case TABLE:

```

```
        String answerTable = item.TableExcerpt();
        System.out.println(answerTable);
        break;
    }

    switch(item.format()) {
        case TEXT:
            String answerText = item.DocumentExcerpt();
            System.out.println(answerText);
            break;
    }

    switch(item.type()) {
        case QUESTION_ANSWER:
            String questionAnswerText = item.documentExcerpt().text();
            System.out.println(questionAnswerText);
            break;
        case DOCUMENT:
            String documentTitle = item.documentTitle().text();
            System.out.println(String.format("Title: %s", documentTitle));
            String documentExcerpt = item.documentExcerpt().text();
            System.out.println(String.format("Excerpt: %s",
documentExcerpt));
            break;
        default:
            System.out.println(String.format("Unknown query result type:
%s", item.type()));
    }

    System.out.println("-----\n");
}
}
```


クエリの提案

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra の [クエリの提案] は、ユーザーが検索クエリをより速く入力し、検索をガイドするのに役立ちます。

Amazon Kendra は、次のいずれかに基づいて、ユーザーに関連するクエリを提案します。

- クエリ履歴またはクエリログでよく使われるクエリ
- ドキュメントフィールド/属性の内容

SuggestionTypes を QUERY または DOCUMENT_ATTRIBUTES のいずれかを設定し、[GetQuerySuggestions](#) を呼び出すことにより、クエリ履歴またはドキュメントフィールドを使用する際の優先順位を設定できます。デフォルトでは、クエリ履歴 Amazon Kendra を使用して提案に基づいています。を呼び出したときにクエリ履歴とドキュメントフィールドの両方がアクティブ化[UpdateQuerySuggestionsConfig](#)されていて、ドキュメントフィールドを使用する SuggestionTypes ように設定していない場合、クエリ履歴 Amazon Kendra を使用します。

コンソールを使用すると、クエリの提案をクエリ履歴またはドキュメントフィールドのいずれかに基づくことができます。最初にインデックスを選択し、ナビゲーションメニューの [エンリッチメント] で [クエリの提案] を選択します。次に、[クエリの提案の設定] を選択します。クエリの提案を設定すると、検索コンソールが表示され、右側のパネルで [クエリ履歴] または [ドキュメントフィールド] のいずれかを選択すると、検索バーに検索クエリを入力できます。

デフォルトでは、クエリ履歴とドキュメントフィールドを使用したクエリの提案、はどちらも追加料金なしで有効化されています。これらのタイプのクエリの提案は、UpdateQuerySuggestionsConfig API を使用していつでも無効化できます。クエリ履歴に基づくクエリの提案を無効にするには、UpdateQuerySuggestionsConfig を呼び出す際に Mode を DISABLED に設定します。ドキュメントフィールドに基づくクエリの提案を無効にするには、ドキュメントフィールド設定で AttributeSuggestionsMode を INACTIVE に設定し、次に UpdateQuerySuggestionsConfig> を呼び出します。コンソールを使用している場合は、[クエリの提案の設定] でクエリの提案を無効にできます。

クエリ提案では大文字と小文字が区別されません。は、クエリプレフィックスと提案されたクエリを小文字 Amazon Kendra に変換し、すべての一重引用符と二重引用符を無視して、複数の空白文字を 1 つのスペースに置き換えます。Amazon Kendra は、他のすべての特殊文字をそのまま一致させます。ユーザーが 2 文字未満または 60 文字を超えると、提案は表示 Amazon Kendra されません。

トピック

- [クエリ履歴を使用したクエリの提案](#)
- [ドキュメントフィールドを使用したクエリの提案](#)
- [特定のクエリやドキュメントフィールドの内容を提案からブロックする](#)

クエリ履歴を使用したクエリの提案

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

トピック

- [提案用のクエリを選択するための設定](#)
- [クエリ履歴を保持したままで提案を消去する](#)
- [提案がありません。](#)

クエリ履歴またはクエリログの一般的なクエリに基づいて、ユーザーに関連するクエリを提案することを選択できます。は、ユーザーが検索し、これらのクエリから学習するすべてのクエリ Amazon Kendra を使用して、ユーザーに提案を行います。は、クエリの入力を開始するときに、ユーザーに一般的なクエリ Amazon Kendra を提案します。は、クエリのプレフィックスまたは最初の数文字が、ユーザーがクエリとして入力し始めたものと一致する場合に、クエリ Amazon Kendra を提案します。

例えば、ユーザーが「upcoming events」というクエリの入力を開始したとします。Amazon Kendra はクエリ履歴から、多くのユーザーが「upcoming events 2050」を何度も検索していることを学習します。検索バーの真下に「upcoming events 2050」が表示され、検索クエリが自動入力されます。ユーザーがこのクエリの提案を選択すると、検索結果に「New events: What's happening in 2050」というドキュメントが表示されます。

がユーザーに提案する適格なクエリ Amazon Kendra を選択する方法を指定できます。たとえば、クエリ提案が少なくとも 10 人の一意のユーザー (デフォルトは 3) によって検索され、過去 30 日以内に検索され、[ブロックリストから](#)の単語やフレーズが含まれていないことを指定できます。Amazon Kendra は、クエリに少なくとも 1 つの検索結果があり、4 文字を超える単語が少なくとも 1 つ含まれている必要があります。

提案用のクエリを選択するための設定

[UpdateQuerySuggestionsConfig](#) API を使用することにより、次の設定を構成して、提案用のクエリを選択できます。

- モード - クエリ履歴を使用するクエリの低名は、ENABLED または LEARN_ONLY のいずれかです。Amazon Kendra は、デフォルトでクエリの提案を有効にします。LEARN_ONLY は、クエリの提案を無効にします。オフにすると、は Amazon Kendra 引き続き提案を学習しますが、ユーザーにクエリ提案を行いません。
- クエリログの期間 - クエリログの期間内で表示された最新のクエリ。タイムウィンドウは、現在の日から過去の日までの日数の整数値です。
- ユーザー情報のないクエリ - TRUE に設定し、すべてのクエリを含めるか、FALSE に設定してユーザー情報を含むクエリのみを含めます。この設定は、ユーザーがクエリを発行したときに、検索アプリケーションにユーザー ID などのユーザー情報が含まれている場合に使用できます。この設定は、デフォルトではクエリに関連する特定のユーザー情報がない場合、クエリをフィルタリングしません。ただし、この設定を使用して、ユーザー情報を含むクエリに基づく提案のみを行うことができます。
- 一意のユーザー - ユーザーに的確な提案をするために、クエリを検索する必要がある一意のユーザーの最小数。この数値は整数値です。
- クエリ数 - ユーザーに的確な提案をするために、クエリを検索する必要がある最小検索回数。この数値は整数値です。

これらの設定は、ユーザーに提案する一般的なクエリとしてクエリを選択する方法に影響します。設定の調整方法は、特定のニーズによって異なります。以下に例を挙げます。

- 通常、ユーザーが平均月 1 回検索する場合、クエリログ期間の日数を 30 に設定できます。この設定を使用すると、期間の中で陳腐化する前に、ユーザーの最近のクエリのほとんどをキャプチャできます。
- ユーザー情報を含むクエリ数が少なく、少ないサンプル数に基づいてクエリを提案しない場合は、すべてのユーザーを含むようにクエリを設定できます。

- [popular queries] (人気のあるクエリ) を 10 人以上のユニークユーザーに 100 回以上検索されたものと定義する場合は、ユニークユーザーを 10、クエリ数を 100 に設定します。

Warning

設定の変更はすぐには反映されない場合があります。[DescribeQuerySuggestionsConfig](#) API を使用して、設定の変更を追跡できます。更新した設定が有効になるまでの時間は、更新した内容やインデックス内の検索クエリの数によって異なります。Amazon Kendra は、設定を変更した後、または[ブロックリスト](#)を適用した後、24 時間ごとに自動的に提案を更新します。

CLI

クエリの提案を取得するには

```
aws kendra get-query-suggestions \  
  --index-id index-id \  
  --query-text "query-text" \  
  --suggestion-types '["QUERY"]' \  
  --max-suggestions-count 1 // If you want to limit the number of suggestions
```

クエリの提案を更新するには

例えば、クエリログタイムウィンドウと、クエリを検索する必要がある最小回数を変更するには、以下の操作を行います。

```
aws kendra update-query-suggestions-config \  
  --index-id index-id \  
  --query-log-look-back-window-in-days 30 \  
  --minimum-query-count 100
```

Python

クエリの提案を取得するには

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
  
kendra = boto3.client("kendra")
```

```
print("Get query suggestions.")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"

# Provide the query text
query_text = "query"

# Provide the query suggestions type
query_suggestions_type = "QUERY"

# If you want to limit the number of suggestions
num_suggestions = 1

try:
    query_suggestions_response = kendra.get_query_suggestions(
        IndexId = index_id,
        QueryText = query_text,
        SuggestionTypes = query_suggestions_type,
        MaxSuggestionsCount = num_suggestions
    )

    # Print out the suggestions you received
    if ("Suggestions" in query_suggestions_response.keys()) {
        for (suggestion: query_suggestions_response["Suggestions"]) {
            print(suggestion["Value"]["Text"]["Text"]);
        }
    }

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

クエリの提案を更新するには

例えば、クエリログタイムウィンドウと、クエリを検索する必要がある最小回数を変更するには、以下の操作を行います。

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
```

```
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Updating query suggestions settings/configuration for an index.")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"

# Configure the settings you want to update
minimum_query_count = 100
query_log_look_back_window_in_days = 30

try:
    kendra.update_query_suggestions_config(
        IndexId = index_id,
        MinimumQueryCount = minimum_query_count,
        QueryLogLookBackWindowInDays = query_log_look_back_window_in_days
    )

    print("Wait for Amazon Kendra to update the query suggestions.")

    while True:
        # Get query suggestions description of settings/configuration
        query_sugg_config_response = kendra.describe_query_suggestions_config(
            IndexId = index_id
        )

        # If status is not UPDATING, then quit
        status = query_sugg_config_response["Status"]
        print(" Updating query suggestions config. Status: " + status)
        if status != "UPDATING":
            break
        time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

クエリ履歴を保持したままで提案を消去する

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

[ClearQuerySuggestions](#) API を使用して、クエリの提案を消去できます。提案をクリアすると、既存のクエリ提案のみが削除されます。クエリ履歴内のクエリは削除されません。提案をクリアすると、は提案をクリアした時点からクエリログに追加された新しいクエリに基づいて、新しい提案を Amazon Kendra 学習します。

CLI

クエリの提案を消去するには

```
aws kendra clear-query-suggestions \  
--index-id index-id
```

Python

クエリの提案を消去するには

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
  
kendra = boto3.client("kendra")  
  
print("Clearing out query suggestions for an index.")  
  
# Provide the index ID  
index_id = "index-id"  
  
try:  
    kendra.clear_query_suggestions(  
        IndexId = index_id  
    )  
  
    # Confirm last cleared date-time and that there are no suggestions
```

```
query_sugg_config_response = kendra.describe_query_suggestions_config(
    IndexId = index_id
)
print("Query Suggestions last cleared at: " +
      str(query_sugg_config_response["LastClearTime"]));
print("Number of suggestions available from the time of clearing: " +
      str(query_sugg_config_response["TotalSuggestionsCount"]));

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

提案がありません。

クエリの提案が表示されない場合は、次のいずれかの理由が考えられます。

- が学習 Amazon Kendra するための十分なクエリがインデックスにありません。
- クエリの提案の設定が厳しすぎるため、ほとんどのクエリが提案から除外されています。
- 最近提案をクリアしました Amazon Kendra が、新しい提案を学習するには、新しいクエリが累積する時間が必要です。

[DescribeQuerySuggestionsConfig](#) API を使用して、現在の設定を確認できます。

ドキュメントフィールドを使用したクエリの提案

トピック

- [提案用のフィールドを選択するための設定](#)
- [ドキュメントフィールドのユーザーコントロール](#)

ドキュメントフィールドの内容に基づいて、ユーザーに関連するクエリの提案を選択できます。クエリ履歴を使用して他の一般的な関連クエリを提案する代わりに、クエリの自動補完に役立つドキュメントフィールドに含まれる情報を使用できます。は、に設定Suggestableされ、ユーザーのクエリと密接に一致するフィールド内の関連コンテンツ Amazon Kendra を検索します。次に、は、ユーザーがクエリの入力を開始したときに、このコンテンツをユーザーに Amazon Kendra 提案します。

たとえば、提案のベースとなるタイトルフィールドを指定し、ユーザーがクエリ「How amazon ken...」の入力を開始した場合、検索を自動入力するために最も関連性の高いタイトル「How

Amazon Kendra works」を提案できます。検索バーの真下に Amazon Kendra 「仕組み」が表示され、検索クエリが自動入力されます。ユーザーがこのクエリ提案を選択すると、ドキュメント Amazon Kendra 「仕組み」が検索結果に返されます。

クエリの提案のためのフィールド設定の一部として、フィールドを Suggestable に設定することにより、String および StringList のタイプのドキュメントフィールドの内容を使用してクエリを提案できます。[ブロックリスト](#)を使用して、特定の語句が含まれるドキュメントフィールドの提案をユーザーに表示しないようにすることもできます。ブロックリストは 1 つしか使用できません。ブロックリストは、クエリの提案にクエリ履歴、またはドキュメント文書フィールドのどちらを使用するように設定したかにかかわらず適用されます。

提案用のフィールドを選択するための設定

次の設定を構成することにより、[AttributeSuggestionsConfig](#) を使用して提案用のドキュメントフィールドを選択し、[UpdateQuerySuggestionsConfig](#) API を呼び出してインデックスレベルで設定を更新できます。

- フィールド/属性提案モード - ドキュメントフィールドを使用するクエリの提案は、ACTIVE または INACTIVE のいずれかです。Amazon Kendra では、デフォルトでクエリの提案を有効にします。
- 提案が可能なフィールド/属性 - 提案の基になるフィールド名またはフィールドキー。これらのフィールドは、フィールド設定の一部として Suggestable の場合は TRUE に設定する必要があります。インデックスレベルでは設定を維持したまま、クエリレベルではフィールドの設定をオーバーライドできます。[GetQuerySuggestions](#) API を使用して、クエリレベルで AttributeSuggestionConfig を変更してください。このクエリレベルの設定は、インデックスレベルで設定を更新しなくても、異なるドキュメントフィールドをすばやく試用するのに便利です。
- 追加フィールド/属性 - クエリの提案のレスポンスに含める追加フィールド。これらのフィールドは、レスポンスに追加情報を提供するために使用されますが、提案のベースには使用されません。

Warning

設定の変更はすぐには反映されない場合があります。[DescribeQuerySuggestionsConfig](#) API を使用して、設定の変更を追跡できます。更新された設定が有効になるまでの時間は、ユーザーが行う更新によって異なります。は、設定を変更した後、または[ブロックリスト](#)を適用した後、24 時間ごとに Amazon Kendra 自動的に提案を更新します。

CLI

インデックスレベルで設定を変更する代わりに、クエリレベルでクエリの提案を取得してドキュメントフィールドの設定をオーバーライドできます。

```
aws kendra get-query-suggestions \  
  --index-id index-id \  
  --query-text "query-text" \  
  --suggestion-types '["DOCUMENT_ATTRIBUTES"]' \  
  --attribute-suggestions-config '{"SuggestionAttributes":["field/attribute key 1", "field/attribute key 2"]', "AdditionalResponseAttributes":["response field/attribute key 1", "response field/attribute key 2"]}' \  
  --max-suggestions-count 1 // If you want to limit the number of suggestions
```

クエリの提案を更新するには

例えば、ドキュメントフィールドの設定をインデックスレベルで変更するには:

```
aws kendra update-query-suggestions-config \  
  --index-id index-id \  
  --attribute-suggestions-config '{"SuggestableConfigList": '[{"SuggestableConfig":  
    "_document_title", "Suggestable": true}]]', "AttributeSuggestionsMode": "ACTIVE"}
```

Python

インデックスレベルで設定を変更する代わりに、クエリレベルでクエリの提案を取得してドキュメントフィールドの設定をオーバーライドできます。

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
  
kendra = boto3.client("kendra")  
  
print("Get query suggestions.")  
  
# Provide the index ID  
index_id = "index-id"  
  
# Provide the query text  
query_text = "query"  
  
# Provide the query suggestions type
```

```
query_suggestions_type = "DOCUMENT_ATTRIBUTES"

# Override fields/attributes configuration at query level
configuration = {"SuggestionAttributes":
    '["field/attribute key 1", "field/attribute key 2"]',
    "AdditionalResponseAttributes":
    '["response field/attribute key 1", "response field/attribute key 2"]'
}

# If you want to limit the number of suggestions
num_suggestions = 1

try:
    query_suggestions_response = kendra.get_query_suggestions(
        IndexId = index_id,
        QueryText = query_text,
        SuggestionTypes = [query_suggestions_type],
        AttributeSuggestionsConfig = configuration,
        MaxSuggestionsCount = num_suggestions
    )

    # Print out the suggestions you received
    if ("Suggestions" in query_suggestions_response.keys()) {
        for (suggestion: query_suggestions_response["Suggestions"]) {
            print(suggestion["Value"]["Text"]["Text"]);
        }
    }

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

クエリの提案を更新するには

例えば、ドキュメントフィールドの設定をインデックスレベルで変更するには:

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")
```

```
print("Updating query suggestions settings/configuration for an index.")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"

# Configure the settings you want to update at the index level
configuration = {"SuggestableConfigList":
    '[{"SuggestableConfig": "_document_title", "Suggestable": true}]',
    "AttributeSuggestionsMode": "ACTIVE"
}

try:
    kendra.update_query_suggestions_config(
        IndexId = index_id,
        AttributeSuggestionsConfig = configuration
    )

    print("Wait for Amazon Kendra to update the query suggestions.")

    while True:
        # Get query suggestions description of settings/configuration
        query_sugg_config_response = kendra.describe_query_suggestions_config(
            IndexId = index_id
        )

        # If status is not UPDATING, then quit
        status = query_sugg_config_response["Status"]
        print(" Updating query suggestions config. Status: " + status)
        if status != "UPDATING":
            break
        time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

ドキュメントフィールドのユーザーコントロール

クエリの提案のベースにするドキュメントフィールドに、ユーザーコンテキストフィルタリングを適用できます。これにより、ユーザーまたはグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、ドキュメントフィールド情報をフィルタリングします。例えば、インターンが会社のポータルを検索した

が、会社の極秘文書にはアクセスできなかったとします。そのため、極秘文書のタイトルや、その他の提案可能なフィールドに基づいて提案されたクエリは、インターンには表示されません。

アクセスコントロールリスト (ACL) を使用してドキュメントにインデックスを付け、ドキュメントへのアクセスを指定するユーザーやグループを定義できます。その後、クエリの提案のドキュメントフィールドにユーザーコンテキストフィルタリングを適用できます。現在、インデックスに設定されているユーザーコンテキストフィルタリングは、クエリの提案のドキュメントフィールド設定に適用されているユーザーコンテキストフィルタリングと同じです。ユーザーコンテキストフィルタリングは、ドキュメントフィールド設定の一部です。[AttributeSuggestionsGetConfig](#) を使用して、[GetQuerySuggestions](#) を呼び出します。

特定のクエリやドキュメントフィールドの内容を提案からブロックする

ブロックリスト Amazon Kendra は、ユーザーへの特定のクエリの提案を停止します。ブロックリストは、クエリ提案から除外する単語またはフレーズのリストです。は、ブロックリスト内の単語またはフレーズの完全一致を含むクエリ Amazon Kendra を除外します。

ブロックリストを使用すると、クエリ履歴またはドキュメントフィールドに一般的に表示される、Amazon Kendra が提案として選択する可能性がある不快な単語や語句から保護できます。ブロックリストは、公開または発表する準備ができていない情報を含むクエリを が Amazon Kendra 提案できないようにすることもできます。例えば、新製品がリリースされる可能性があり、ユーザーが頻繁に問い合わせしているとします。ただし、まだリリースする準備ができていないために製品を提案しない場合は、製品名やその製品情報を含むクエリを提案からブロックできます。

[CreateQuerySuggestionsBlockList](#) API を使用して、クエリのブロックリストを作成できます。各単語または語句はテキストファイルで個別の行に配置します。次に、Amazon S3 バケットにテキストファイルをアップロードし、 のファイルへのパスまたは場所を指定します Amazon S3。Amazon Kendra は現在、1 つのブロックリストの作成のみをサポートしています。

Amazon S3 バケット内のブロックされた単語やフレーズのテキストファイルを置き換えることができます。でブロックリストを更新するには Amazon Kendra、[UpdateQuerySuggestionsBlockList](#) API を使用します。

[DescribeQuerySuggestionsBlockList](#) API を使用してブロックリストのステータスを取得します。また、DescribeQuerySuggestionsBlockList は、次のようなその他の有用な情報を提供できます。

- ブロックリストの最終更新日時
- 現在のブロックリストにある語句の数

- ブロックリストを作成する際に役立つエラーメッセージ

また、[ListQuerySuggestionsBlockLists](#) API を使用して、インデックスに対するブロックリストの概要のリストを取得できます。

ブロックリストを削除するには、[DeleteQuerySuggestionsBlockList](#) API を使用します。

ブロックリストへの更新はすぐには反映されない場合があります。DescribeQuerySuggestionsBlockList API を使用すると、更新を追跡できます。

CLI

ブロックリストを作成するには

```
aws kendra create-query-suggestions-block-list \
  --index-id index-id \
  --name "block-list-name" \
  --description "block-list-description" \
  --source-s3-path "Bucket=bucket-name,Key=query-suggestions/block_list.txt" \
  --role-arn role-arn
```

ブロックリストを更新するには

```
aws kendra update-query-suggestions-block-list \
  --index-id index-id \
  --name "new-block-list-name" \
  --description "new-block-list-description" \
  --source-s3-path "Bucket=bucket-name,Key=query-suggestions/new_block_list.txt" \
  --role-arn role-arn
```

ブロックリストを削除するには

```
aws kendra delete-query-suggestions-block-list \
  --index-id index-id \
  --id block-list-id
```

Python

ブロックリストを作成するには

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
```

```
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Create a query suggestions block list.")

# Provide a name for the block list
block_list_name = "block-list-name"
# Provide an optional description for the block list
block_list_description = "block-list-description"
# Provide the IAM role ARN required for query suggestions block lists
block_list_role_arn = "role-arn"

# Provide the index ID
index_id = "index-id"

s3_bucket_name = "bucket-name"
s3_key = "query-suggestions/block_list.txt"
source_s3_path = {
    'Bucket': s3_bucket_name,
    'Key': s3_key
}

try:
    block_list_response = kendra.create_query_suggestions_block_list(
        Description = block_list_description,
        Name = block_list_name,
        RoleArn = block_list_role_arn,
        IndexId = index_id,
        SourceS3Path = source_s3_path
    )

    print(block_list_response)

    block_list_id = block_list_response["Id"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the block list.")

    while True:
        # Get block list description
        block_list_description = kendra.describe_query_suggestions_block_list(
            Id = block_list_id,
            IndexId = index_id
```

```
)
# If status is not CREATING, then quit
status = block_list_description["Status"]
print("Creating block list. Status: " + status)
if status != "CREATING":
    break
time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

ブロックリストを更新するには

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Update a block list for query suggestions.")

# Provide the block list name you want to update
block_list_name = "new-block-list-name"
# Provide the block list description you want to update
block_list_description = "new-block-list-description"
# Provide the IAM role ARN required for query suggestions block lists
block_list_role_arn = "role-arn"

# Provide the block list ID
block_list_id = "block-list-id"
# Provide the index ID
index_id = "index-id"

s3_bucket_name = "bucket-name"
s3_key = "query-suggestions/new_block_list.txt"
source_s3_path = {
    'Bucket': s3_bucket_name,
    'Key': s3_key
}
```



```
try:
    kendra.update_query_suggestions_block_list(
        Id = block_list_id,
        IndexId = index_id,
        Description = block_list_description,
        Name = block_list_name,
        RoleArn = block_list_role_arn,
        SourceS3Path = source_s3_path
    )

    print("Wait for Amazon Kendra to update the block list.")

    while True:
        # Get block list description
        block_list_description = kendra.describe_query_suggestions_block_list(
            Id = block_list_id,
            IndexId = index_id
        )
        # If status is not UPDATING, then the update has finished
        status = block_list_description["Status"]
        print("Updating block list. Status: " + status)
        if status != "UPDATING":
            break
        time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

ブロックリストを削除するには

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError

kendra = boto3.client("kendra")

print("Delete a block list for query suggestions.")

# provide the block list ID
query_suggestions_block_list_id = "query-suggestions-block-list-id"
# Provide the index ID
index_id = "index-id"
```

```
try:
    kendra.delete_query_suggestions_block_list(
        Id = query_suggestions_block_list_id,
        IndexId = index_id
    )

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

クエリスペルチェッカー

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra スペルチェッカーにより、クエリのスペル修正を提案します。これにより、ゼロ検索結果になるのを最小限に抑え、関連する結果を返すことができます。クエリのスペルミスによる[ゼロ検索結果](#)によって、一致する結果が返されなかったり、ドキュメントが返されなかったりする場合があります。また、ユーザーがスペルミスによって[無関係の検索結果](#)が返される場合があります。

スペルチェッカーは、インデックスが作成されたドキュメントに出現する単語と、修正された単語がスペルミスの単語とどの程度一致するかに基づき、スペルミスの単語の修正を提案するように設計されています。例えば、インデックスが作成されたドキュメントに「statements」という単語が含まれている場合、「year-end financial statments」というクエリの中のスペルミスの単語の「statments」とほぼ一致する可能性があります。

スペルチェッカーは、元のクエリテキスト内のスペルミスのある単語の代わりに、意図した単語または修正された単語を返します。例えば、「depoying kendre search」は「deploying Kendra search」が返される可能性があります。また、API で提供されているオフセット位置を使用して、フロントエンドアプリケーションのクエリで返された修正済みの単語を強調表示またはイタリックにできます。コンソールでは、修正済みの単語はデフォルトで強調表示またはイタリックで表示されます。例えば、「deploying Kendra search」などです。

インデックスに登録されたドキュメントにビジネス固有の用語や特殊な用語が含まれている場合、スペルチェッカーは、これらの語句をクエリのスペルミスとして誤って判断することはありません。例えば、「amazon macie」は「amazon mace」に修正されません。

「year-end」のようにハイフンでつながれた単語については、スペルチェッカーはそれらを個別の単語として扱い、修正を提案します。例えば、「yaer-end」の修正案は「year-end」の可能性がありません。

DOCUMENT および QUESTION_ANSWER クエリのレスポンスタイプでは、スペルチェッカーはドキュメント本文の単語に基づいて、スペルミスのある単語の修正を提案します。スペルミスのある単語にほぼ一致する修正を提案する場合、タイトルよりもドキュメント本文の方が信頼できます。ANSWER クエリレスポンスタイプの場合、スペルチェッカーはインデックス内のデフォルトの質問と回答のドキュメントに含まれる単語に基づいて修正を提案します。

スペルチェッカーは、[SpellCorrectionConfiguration](#) オブジェクトを使用して有効化できます。IncludeQuerySpellCheckSuggestions を TRUE に設定します。スペルチェッカーは、コンソールではデフォルトで有効になっています。デフォルトでは、コンソールに組み込まれています。

また、スペルチェッカーは、英語だけでなく複数の言語でのクエリのスペル修正を提案できます。スペルチェッカーでサポートされている言語のリストについては、「[Amazon Kendra supported languages](#)」を参照してください。

クエリスペルチェッカーをデフォルトの制限付きで使用する

スペルチェッカーは、特定のデフォルト値または制限を設定して設計されています。次のリストは、スペル修正の提案を有効にした際に適用される現在の制限です。

- 3 文字未満または 30 文字を超える単語については、スペル修正の提案を返すことはできません。30 文字を超える、または 3 文字未満を有効にするには、[サポート](#)にお問い合わせください。
- スペル修正の提案では、ユーザーアクセスコントロールや[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)用のアクセスコントロールリストに基づいて候補を制限することはできません。スペル修正は、特定のユーザーに限定されているかどうかに関係なく、インデックスに登録されたドキュメント内のすべての単語に基づいて行われます。クエリのスペル修正の提案に特定の単語が表示されないようにする場合は、[SpellCorrectionConfiguration](#) を有効にしないでください。
- 数字を含む単語については、スペル修正の提案を返すことはできません。例えば、「how 2 not br8k ubun2」などです。
- スペル修正の提案には、インデックスが作成されたドキュメントにない単語は使用できません。

- スペル修正の提案には、インデックスが作成されたドキュメント内で頻度が 0.01% 未満の単語は使用できません。0.01% のしきい値を変更するには、[サポート](#)にお問い合わせください。

フィルタリングとファセット検索

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、「[インデックスタイプ](#)」を参照してください。

フィルターを使用すると、[クエリ](#) API からの検索結果またはレスポンスを改善できます。フィルターにより、レスポンス内のドキュメントはクエリに直接適用するドキュメントに制限されます。ファセット検索候補を作成するには、ブール論理を使用して、特定の条件に一致しないレスポンスまたはドキュメントから、特定のドキュメント属性をフィルタリングします。Query API Facets のパラメータを使用して、ファセットを指定できます。

インデックスを作成したドキュメントを検索するには Amazon Kendra Amazon Lex、[AMAZON.KendraSearchIntent](#) を使用します。で を設定する Amazon Kendra 例については Amazon Lex、「[Amazon Kendra インデックスの FAQ ボットの作成](#)」を参照してください。[AttributeFilter](#) を使用して、レスポンスにフィルターを設定することもできます。これは、AMAZON.KendraSearchIntent の設定時の JSON のクエリフィルターです。コンソールで検索インテントを設定する際に属性フィルターを指定するには、インテントエディタに移動し、[Amazon Kendra query] を選択して JSON でクエリフィルターを指定します。AMAZON.KendraSearchIntent の詳細については、「[Amazon Lex ドキュメントガイド](#)」を参照してください。

ファセット

ファセットは、一連の検索結果の対象範囲内のビューです。例えば、世界中の都市の検索結果を提供できます。この場合、ドキュメントは関連する特定の都市でフィルタリングされます。または、ファセットを作成して、特定の作成者の結果を表示できます。

ドキュメントに関連付けられているドキュメント属性またはメタデータフィールドをファセットとして使用すると、ユーザーはそのファセット内のカテゴリまたは値で検索できます。また、検索結果にネストされたファセットを表示すると、ユーザーはカテゴリやフィールドだけでなく、サブカテゴリやサブフィールドでも検索できます。

次の例は、「City」というカスタム属性のファセット情報を取得する方法を示しています。

```
response=kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    Facets = [  
        {  
            "DocumentAttributeKey" : "City"  
        }  
    ]  
)
```

ネストされたファセットを使用すると、検索をさらに絞り込むことができます。例えば、ドキュメント属性またはファセット「City」には、「Seattle」という値が含まれています。さらに、「Seattle」に割り当てられたドキュメントのドキュメント属性またはファセット「CityRegion」には、「North」と「South」の値が含まれます。検索結果にはネストされたファセットとその数を表示できるため、都市だけでなく都市内の地域でもドキュメントを検索できます。

ネストされたファセットは、クエリのレイテンシーに影響する可能性があることに注意してください。一般的に、ネストされたファセットの使用が多いほど、レイテンシーへの影響が大きくなります。レイテンシーに影響を与えるその他の要因には、インデックスが作成されたドキュメントの平均サイズ、インデックスのサイズ、非常に複雑なクエリ、Amazon Kendra インデックスの全体的な負荷などがあります。

次の例は、「City」内のネストされたファセットとして、「CityRegion」というカスタム属性のファセット情報を取得する方法を示しています。

```
response=kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    Facets = [  
        {  
            "DocumentAttributeKey" : "City",  
            "Facets": [  
                {  
                    "DocumentAttributeKey" : "CityRegion"  
                }  
            ]  
        }  
    ]  
)
```

ドキュメント数などのファセット情報は、FacetResults レスポンスの配列で返されます。コンテンツを使用して、アプリケーションでファセット検索提案を表示します。例えば、ドキュメント属性「City」に検索を適用できる都市が含まれている場合、その情報を使用して都市検索のリストを表示します。ユーザーは、都市を選択して検索結果をフィルタリングできます。ファセット検索を行うには、[クエリ API](#) を呼び出し、選択したドキュメント属性を使用して結果をフィルタリングします。

1 つのクエリでは、ファセットごとに最大 10 個のファセット値を表示でき、ファセット内には 1 つのネストされたファセットのみを表示できます。これらの制限を引き上げる場合は、[サポート](#)にお問い合わせください。ファセットあたりのファセット値の数を 10 未満に制限する場合は、これを Facet オブジェクト内で指定できます。

次の JSON レスポンスのサンプルは、対象範囲が「City」というドキュメント属性であるファセットを示しています。レスポンスには、ファセット値のドキュメント数が含まれます。

```
{
  'FacetResults': [
    {
      'DocumentAttributeKey': 'City',
      'DocumentAttributeValueCountPairs': [
        {
          'Count': 3,
          'DocumentAttributeValue': {
            'StringValue': 'Dubai'
          }
        },
        {
          'Count': 3,
          'DocumentAttributeValue': {
            'StringValue': 'Seattle'
          }
        },
        {
          'Count': 1,
          'DocumentAttributeValue': {
            'StringValue': 'Paris'
          }
        }
      ]
    }
  ]
}
```

また、都市内の地域などのネストされたファセットのファセット情報を表示して、検索結果をさらに絞り込むことができます。

次の JSON レスポンスのサンプルは、「City」内のネストされたファセットとして、対象範囲が「CityRegion」というドキュメント属性であるファセットを示しています。レスポンスには、ネストされたファセット値のドキュメント数が含まれます。

```
{
  'FacetResults': [
    {
      'DocumentAttributeKey': 'City',
      'DocumentAttributeValueCountPairs': [
        {
          'Count': 3,
          'DocumentAttributeValue': {
            'StringValue': 'Dubai'
          },
          'FacetResults': [
            {
              'DocumentAttributeKey': 'CityRegion',
              'DocumentAttributeValueCountPairs': [
                {
                  'Count': 2,
                  'DocumentAttributeValue': {
                    'StringValue': 'Bur Dubai'
                  }
                },
                {
                  'Count': 1,
                  'DocumentAttributeValue': {
                    'StringValue': 'Deira'
                  }
                }
              ]
            }
          ]
        }
      ]
    },
    {
      'Count': 3,
      'DocumentAttributeValue': {
        'StringValue': 'Seattle'
      },
      'FacetResults': [
```

```

        {
            'DocumentAttributeKey': 'CityRegion',
            'DocumentAttributeValueCountPairs': [
                {
                    'Count': 1,
                    'DocumentAttributeValue': {
                        'StringValue': 'North'
                    }
                },
                {
                    'Count': 2,
                    'DocumentAttributeValue': {
                        'StringValue': 'South'
                    }
                }
            ]
        }
    ],
    {
        'Count': 1,
        'DocumentAttributeValue': {
            'StringValue': 'Paris'
        },
        'FacetResults': [
            {
                'DocumentAttributeKey': 'CityRegion',
                'DocumentAttributeValueCountPairs': [
                    {
                        'Count': 1,
                        'DocumentAttributeValue': {
                            'StringValue': 'City center'
                        }
                    }
                ]
            }
        ]
    }
]
}

```


文字列リストフィールドを使用してファセットを作成する場合、返されるファセット結果は文字列リストの内容に基づきます。例えば、「dachshund」、「sausage dog」というリストと、「husky」という値を持つ2つの項目を含む文字列リストフィールドがある場合、3つのファセットを持つ `FacetResults` を取得します。

詳細については、「[クエリレスポンスとレスポンスタイプ](#)」を参照してください。

ドキュメント属性を使用した検索結果のフィルタリング

デフォルトでは、Query はすべての検索結果を返します。レスポンスをフィルタリングするには、ドキュメント属性に対して論理演算を実行できます。例えば、特定の都市のドキュメントのみが必要な場合は、「City」および「State」のカスタムドキュメント属性でフィルタリングできます。[AttributeFilter](#) を使用して、指定したフィルターに対してブール演算を作成します。

ほとんどの属性は、すべての [\[response types\]](#) (レスポンスタイプ) のレスポンスをフィルタリングできます。ただし、レスポンスをフィルタリングする場合、`_excerpt_page_number` 属性は ANSWER レスポンスタイプにのみ適用されます。

次の例では、特定の州、ワシントン の特定の都市、シアトル でフィルタリングして論理 AND 演算を実行する方法を示します。

```
response=kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    AttributeFilter = {'AndAllFilters':  
        [  
            {"EqualsTo": {"Key": "City","Value": {"StringValue": "Seattle"}}},  
            {"EqualsTo": {"Key": "State","Value": {"StringValue": "Washington"}}}  
        ]  
    }  
)
```

次の例では、Fileformat、Author、または SourceURI キーが指定された値と一致する場合に論理 OR 演算を実行する方法を示します。

```
response=kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    AttributeFilter = {'OrAllFilters':  
        [  

```

```

        {"EqualsTo": {"Key": "Fileformat", "Value": {"StringValue":
"AUTO_DETECT"}}},
        {"EqualsTo": {"Key": "Author", "Value": {"StringValue": "Ana
Carolina"}}},
        {"EqualsTo": {"Key": "SourceURI", "Value": {"StringValue": "https://
aws.amazonaws.com/234234242342"}}}
    ]
}
)

```

StringList フィールドの場合、ContainsAny または ContainsAll 属性フィルターを使用して、指定した文字列を含むドキュメントを返します。次の例は、Locations カスタム属性に「Seattle」または「Portland」という値を持つすべてのドキュメントを返す方法を示しています。

```

response=kendra.query(
    QueryText = query,
    IndexId = index,
    AttributeFilter = {
        "ContainsAny": { "Key": "Locations", "Value": { "StringListValue":
[ "Seattle", "Portland"] }}
    }
)

```

検索結果内の各ドキュメント属性のフィルタリング

Amazon Kendra は、検索結果の各ドキュメントのドキュメント属性を返します。検索結果の一部として、レスポンスに含める特定のドキュメント属性をフィルタリングできます。デフォルトでは、ドキュメントに割り当てられたすべてのドキュメント属性がレスポンスに返されます。

次の例では、_source_uri および _author ドキュメント属性は、ドキュメントのレスポンスに含まれます。

```

response=kendra.query(
    QueryText = query,
    IndexId = index,
    RequestedDocumentAttributes = ["_source_uri", "_author"]
)

```

ユーザーコンテキストでのフィルタリング

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、ユーザーの検索結果をフィルタリングできます。ユーザートークン、ユーザー ID、またはユーザー属性を使用してドキュメントをフィルタリングできます。

ユーザーコンテキストフィルタリングは、ドキュメントへのアクセスをコントロールできるという利点を持つ、パーソナライズされた検索の一種です。例えば、企業ポータルで情報を検索するすべてのチームが会社の極秘文書にアクセスする必要があるわけではなく、これらの文書がすべてのユーザーに関連しているわけでもありません。極秘文書へのアクセス許可を与えられた特定のユーザーまたはチームグループのみが、検索結果でこれらの文書を参照できます。

ドキュメントがインデックス作成されると Amazon Kendra、対応するアクセスコントロールリスト (ACL) がほとんどのドキュメントに取り込まれます。ACL は、ドキュメントへのアクセスを許可または拒否するユーザー名とグループ名を指定します。ACL のないドキュメントはパブリックドキュメントです。

Amazon Kendra は、ほとんどのデータソースの各ドキュメントに関連付けられたユーザーまたはグループ情報を抽出できます。例えば、Quip のドキュメントには、そのドキュメントへのアクセス許可を持つ特定のユーザーの「共有」リストを含めることができます。S3 バケットをデータソースとして使用する場合は、ACL 用の [JSON ファイル](#)を提供し、このファイルへの S3 パスをデータソース設定の一部として含めます。ドキュメントをインデックスに直接追加する場合は、[プリンシパル](#)オブジェクトの ACL を [BatchPutDocument](#) API のドキュメントオブジェクトの一部として指定します。

Amazon Kendra Enterprise または Developer Edition インデックスを使用している場合は、[CreateAccessControlConfiguration](#) API を使用して、すべてのドキュメントのインデックスを再度作成することなく、既存のドキュメントレベルのアクセスコントロールを再設定できます。例えば、インデックスには、特定の従業員またはユーザーだけがアクセスできる会社の極秘文書が含まれています。これらのユーザーのうちの 1 人が会社を退職したり、極秘文書へのアクセスをブロックすべきチームに異動したりします。文書が前にインデックスが作成されたときにアクセス許可を持っ

ていたため、ユーザーは引き続き極秘文書にアクセスできます。アクセスを拒否するユーザーに対して、特定のアクセスコントロール設定を作成できます。ユーザーが会社に戻って「極秘」チームに再び加わった場合にアクセスを許可するように、後でアクセスコントロール設定を更新できます。状況の変化に応じて、ドキュメントのアクセスコントロールを再設定できます。

アクセスコントロール設定を特定のドキュメントに適用するには、[ドキュメント](#)オブジェクトに含まれる `AccessControlConfigurationId` を使用して [BatchPutDocument](#) API を呼び出します。データソースとして S3 バケットを使用する場合は、を `.metadata.json` に更新 `AccessControlConfigurationId` し、データソースを同期します。Amazon Kendra は現在、[BatchPutDocument](#) API を使用してインデックス化された S3 データソースとドキュメントのアクセスコントロール設定のみをサポートしています。

ユーザートークンによるフィルタリング

Important

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、トークンベースのユーザーアクセスコントロールをサポートしていません。

インデックスをクエリする際、ユーザートークンを使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングできます。クエリを発行すると、トークンを Amazon Kendra 抽出して検証し、ユーザーとグループの情報をプルしてチェックし、クエリを実行します。パブリックドキュメントを含め、ユーザーがアクセスできるすべてのドキュメントが返されます。詳細については、「[Token-based user access control](#)」を参照してください。

ユーザートークンは [UserContext](#) オブジェクトで提供され、これを [クエリ](#) API で渡します。

次に、ユーザートークンを含める方法を示します。

```
response = kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    UserToken = {  
        Token = "token"  
    })
```

ユーザーをグループにマッピングできます。ユーザーコンテキストフィルタリングを使用する場合、クエリを発行するときに、ユーザーが属しているグループをすべて含める

必要はありません。[PutPrincipalMapping](#) を使用すると、ユーザーをグループにマップングできます。PutPrincipalMapping API を使用しない場合は、クエリを発行するときに、ユーザー名とユーザーが属するすべてのグループを指定する必要があります。また、[UserGroupResolutionConfiguration](#) オブジェクトを使用して、IAM Identity Center アイデンティティソースのグループおよびユーザーのアクセスレベルを取得できます。

ユーザー ID とグループによるフィルタリング

インデックスをクエリする際、ユーザー ID およびグループを使用して、ユーザーまたはそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングできます。クエリを発行すると、はユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を確認し、クエリを実行します。パブリックドキュメントを含め、ユーザーがアクセスできるクエリに関連するすべてのドキュメントが返されます。

また、ユーザーおよびグループがアクセスできるデータソースで検索結果をフィルタリングできます。データソースの指定は、グループが複数のデータソースに関連付けられていても、特定のデータソースのドキュメントにのみアクセスできるようにする場合に便利です。例えば、「リサーチ」、「エンジニアリング」、および「セールスおよびマーケティング」のグループはすべて、Confluence および Salesforce のデータソースに保存されている企業のドキュメントに関連付けられています。ただし、「セールスおよびマーケティング」チームでは、Salesforce に保存されている顧客関連ドキュメントへのアクセスのみが必要です。そのため、営業やマーケティングに携わるユーザーが顧客関連のドキュメントを検索すると、その結果に Salesforce のドキュメントが表示されます。営業およびマーケティングで作業していないユーザーには、検索結果に Salesforce ドキュメントは表示されません。

ユーザー、グループおよびデータソース情報を [UserContext](#) オブジェクトで提供し、これを [クエリ](#) API で渡します。ユーザー ID、およびグループおよびデータソースのリストは、[プリンシパル](#) オブジェクトで指定した名前と一致する必要があります。ユーザー、グループ、およびデータソースを識別します。Principal オブジェクトを使用すると、ドキュメントにアクセスするための許可リストまたは拒否リストに、ユーザー、グループ、またはデータソースを追加できます。

次のいずれかを提供する必要があります。

- ユーザーとグループの情報、および (オプション) データソース情報。
- [PutPrincipalMapping](#) API を使用して、ユーザーをグループおよびデータソースにマップングする場合は、ユーザー情報のみになります。また、[UserGroupResolutionConfiguration](#) オブジェクトを使用して、IAM Identity Center アイデンティティソースのグループおよびユーザーのアクセスレベルを取得できます。

この情報がクエリに含まれていない場合、はすべてのドキュメント Amazon Kendra を返します。この情報を指定すると、ユーザー ID、グループ、およびデータソースが一致するドキュメントのみが返されます。

次に、ユーザー ID、グループ、およびデータソースを含める方法を示します。

```
response = kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    UserContext={'Token': 'string', 'UserId': 'string', 'Groups': [ 'string', ],  
    'DataSourceGroups': [ { 'GroupId': 'string', 'DataSourceId': 'string' }, ] },)
```

ユーザー属性でフィルタリングする

インデックスをクエリする際、組み込み属性の `_user_id` および `_group_id` を使用して、ユーザーおよびそのグループのドキュメントへのアクセスに基づいて、検索結果をフィルタリングできます。最大 100 個のグループ識別子を設定できます。クエリを発行すると、はユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を確認し、クエリを実行します。パブリックドキュメントを含め、ユーザーがアクセスできるクエリに関連するすべてのドキュメントが返されます。

ユーザー属性とグループ属性は、[AttributeFilter](#) オブジェクトで、これを [クエリ](#) API で渡します。

次の例は、ユーザー ID とユーザーが属するグループ「HR」および「IT」に基づいてクエリレスポンスをフィルタリングするリクエストを示しています。このクエリは、許可リストにユーザー、または「HR」または「IT」のグループを含むすべてのドキュメントを返します。ユーザーまたはいずれかのグループがドキュメントの拒否リストに含まれている場合、ドキュメントは返されません。

```
response = kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    AttributeFilter = {  
        "OrAllFilters": [  
            {  
                "EqualsTo": {  
                    "Key": "_user_id",  
                    "Value": {  
                        "StringValue": "user1"  
                    }  
                }  
            },  
            {  
                "EqualsTo": {
```

```
        "Key": "_group_ids",
        "Value": {
            "StringListValue": ["HR", "IT"]
        }
    }
}
]
```

グループにアクセスできるデータソースは、Principal オブジェクトにアクセスできます。

Note

ユーザーコンテキストフィルタリングは、コンテンツの認証または認可コントロールではありません。Query API に送信されたユーザーおよびグループに対するユーザー認証は行いません。Query API に送信されたユーザーおよびグループの情報が認証および認可されるか否かは、アプリケーションによって異なります。

各データソースのユーザーコンテキストフィルタリングの実装があります。以下のセクションでは、各実装について説明します。

トピック

- [インデックスに直接追加されたドキュメントのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [よくある質問に対するユーザーコンテキストのフィルタリング](#)
- [データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)

インデックスに直接追加されたドキュメントのユーザーコンテキストフィルタリング

[BatchPutDocument](#) API を使用してドキュメントをインデックスに直接追加すると、ドキュメントの `AccessControlList` フィールドからユーザーおよびグループの情報 Amazon Kendra を取得します。ドキュメントのアクセスコントロールリスト (ACL) を指定し、その ACL をドキュメントに取り込みます。

ACL は、BatchPutDocument API の [ドキュメント](#) オブジェクトの一部として、[プリンシパル](#) オブジェクトに指定します。次の情報を指定します。

- ユーザーまたはグループが持つ必要があるアクセス許可。ALLOW または DENY の返答が可能です。
- エンティティのタイプ。USER または GROUP の返答が可能です。
- ユーザーまたはグループの名前。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

よくある質問に対するユーザーコンテキストのフィルタリング

[インデックスによくある質問を追加する](#)と、はよくある質問 JSON ファイル

のAccessControlListオブジェクト/フィールドからユーザーおよびグループの情報 Amazon Kendra を取得します。アクセスコントロール用のカスタムフィールドまたは属性を含む FAQ CSV ファイルを使用することもできます。

次の情報を指定します。

- ユーザーまたはグループが持つ必要があるアクセス許可。ALLOW または DENY の返答が可能です。
- エンティティのタイプ。USER または GROUP の返答が可能です。
- ユーザーまたはグループの名前。

詳細については、「[FAQ files](#)」を参照してください。

データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon Kendra また、サポートされているデータソースコネクタからユーザーおよびグループのアクセスコントロールリスト (ACL) 情報をクロールします。これは、ドキュメントへのユーザーまたはグループのアクセス許可に基づいて検索結果をフィルタリングする場合の、ユーザーコンテキストフィルタリングの設定に役立ちます。

Important

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、v2.0 Amazon Kendra データソースコネクタのみをサポートします。

トピック

- [Adobe Experience Manager データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Alfresco データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Aurora \(MySQL\) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Aurora \(PostgreSQL\) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Amazon FSx データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [データベースデータソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Amazon RDS \(MySQL\) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Amazon RDS \(Oracle\) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Amazon RDS \(PostgreSQL\) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Amazon S3 データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Box データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Confluence データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Dropbox データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Drupal データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [GitHub データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Gmail データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Google Drive データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [IBM DB2 データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Jira データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft Exchange データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft OneDrive データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft OneDrive v2.0 データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft SharePoint データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft SQL Server データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft Teams データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Microsoft Yammer データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [MySQL データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Oracle Database データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)

- [PostgreSQL データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Quip データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Salesforce データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [ServiceNow データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Slack データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)
- [Zendesk データソースのユーザーコンテキストフィルタリング](#)

Adobe Experience Manager データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Adobe Experience Manager データソースを使用すると、 は Adobe Experience Manager インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、アクセス許可が設定されている Adobe Experience Manager コンテンツに存在します。これらは、Adobe Experience Manager のグループの名前からマッピングされます。
- `_user_id` - ユーザー ID は、アクセス許可が設定されている Adobe Experience Manager コンテンツに存在します。これらは、Adobe Experience Manager のユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Alfresco データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Alfresco データソースを使用すると、 は Alfresco インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、Alfresco のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。Alfresco のグループ (表示名ではない) のシステム名からマッピングされます。
- `_user_id` - ユーザー ID は、Alfresco のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Alfresco の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Aurora (MySQL) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Aurora (MySQL) データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

A Aurora (MySQL) データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Aurora (PostgreSQL) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Aurora (PostgreSQL) データソースを使用すると、Amazon Kendra はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

A Aurora (PostgreSQL) データベースデータソースには次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Amazon FSx データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon FSx データソースを使用すると、はインスタンスの Amazon FSx ディレクトリサービスからユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。

Amazon FSx グループ ID とユーザー IDs は次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、Amazon FSx のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは、ディレクトリサービスのシステムグループ名からマッピングされます Amazon FSx。

- `_user_id`— ユーザー IDs は、アクセス許可が設定されたファイルの Amazon FSx に存在します。これらは、ディレクトリサービスのシステムユーザー名からマッピングされます Amazon FSx。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

データベースデータソースのユーザーコンテキストフィルタリング

などのデータベースデータソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループの情報 Amazon Aurora PostgreSQL Amazon Kendra を取得します。この列は、[CreateDataSource](#) API の [DatabaseConfiguration](#) オブジェクトの一部として、[AclConfiguration](#) オブジェクトで指定します。

データベースデータソースには以下の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

A Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Amazon RDS (MySQL) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon RDS (MySQL) データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

A Amazon RDS (MySQL) データベースデータソースには次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Amazon RDS (Oracle) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon RDS (Oracle) データソースを使用すると、Amazon Kendra はソーステーブルの列からユーザーおよびグループの情報を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

A Amazon RDS (Oracle) データベースデータソースには以下の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Amazon RDS (PostgreSQL) データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon RDS (PostgreSQL) データソースを使用すると、Amazon Kendra はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

A Amazon RDS (PostgreSQL) データベースデータソースには次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Amazon S3 データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

ドキュメントに関連付けられたメタデータファイルを使用して、Amazon S3 データソース内のドキュメントにユーザーコンテキストフィルタリングを追加します。情報を JSON ドキュメント内の `AccessControlList` フィールドに追加します。Amazon S3 データソースからインデックスが作成されたドキュメントにメタデータを追加する方法の詳細については、「[S3 document metadata](#)」を参照してください。

次の 3 つの情報を提供します。

- エンティティが持つべきアクセス。ALLOW または DENY の返答が可能です。
- エンティティのタイプ。USER または GROUP の返答が可能です。
- エンティティの名前。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Box データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Box データソースを使用すると、は Box インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

Box グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、Box のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Box のグループの名前からマッピングされます。
- `_user_id` - ユーザー ID は、Box のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Box のユーザー ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Confluence データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Confluence データソースを使用すると、は Confluence インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

[スペースアクセス許可] ページを使用して、スペースへのユーザーおよびグループアクセスを構成します。ページとブログの場合は、[制限] ページを使用します。スペースのアクセス許可の詳細については、Confluence Support ウェブサイトの[スペースアクセス許可の概要](#)を参照してください。ページおよびブログの制限の詳細については、Confluence Support ウェブサイトの[ページの制限](#)を参照してください。

Confluence グループ名とユーザー名は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ名は、制限のあるスペース、ページ、ブログに存在します。これらは Confluence のグループの名前からマッピングされます。グループ名は常に小文字です。
- `_user_id` - ユーザー名は、制限のあるスペース、ページ、ブログに存在します。これらは、使用している Confluence インスタンスのタイプに応じてマッピングされます。

Confluence Connector v1.0 向け

- サーバー - `_user_id` はユーザー名です。ユーザーネームは常に小文字です。
- クラウド - `_user_id` はユーザーのアカウント ID です。

Confluence Connector v2.0 向け

- サーバー - `_user_id` はユーザー名です。ユーザーネームは常に小文字です。
- クラウド - `_user_id` はユーザーの E メール ID です。

Important

Confluence コネクタでユーザーコンテキストフィルタリングを正しく機能させるには、Confluence ページへのアクセスを許可されたユーザーの可視性が [全員] に設定されていることを確認する必要があります。詳細については、Atlassian デベロッパードキュメントの「[Set your email visibility](#)」を参照してください。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Dropbox データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Dropbox データソースを使用すると、 は Dropbox インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、Dropbox のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Dropbox のグループの名前からマッピングされます。
- `_user_id` - ユーザー ID は、Dropbox のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Dropbox の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Drupal データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Drupal データソースを使用すると、 は Drupalinstance からユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、Drupal のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Drupal のグループの名前からマッピングされます。
- `_user_id` - ユーザー ID は、Drupal のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Drupal の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

GitHub データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

GitHub データソースを使用すると、 は GitHub インスタンスからユーザー情報 Amazon Kendra を取得します。

GitHub グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_user_id` - ユーザー ID は、GitHub のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは GitHub の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Gmail データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Gmail データソースを使用する場合、は Gmail インスタンスからユーザー情報 Amazon Kendra を取得します。

ユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_user_id` - ユーザー ID は、Gmail のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Gmail の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Google Drive データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Google Workspace Drive データソースは、Google Drive のユーザーおよびグループのユーザー情報とグループ情報を返します。グループおよびドメインメンバーシップは、`_group_ids` インデックスフィールドにマッピングされます。Google Drive のユーザー名は、`_user_id` フィールドにマッピングされます。

Query API で 1 つ以上のユーザーの E メールアドレスを指定する場合、それらの E メールアドレスと共有されているドキュメントのみが返されます。以下の `AttributeFilter` パラメータは、「martha@example.com」と共有されているドキュメントのみを返します。

```
"AttributeFilter": {
  "EqualsTo": {
    "Key": "_user_id",
    "Value": {
      "StringValue": "martha@example.com"
    }
  }
}
```

クエリで 1 つ以上のグループの E メールアドレスを指定すると、グループと共有されているドキュメントのみが返されます。以下の `AttributeFilter` パラメータは、「hr@example.com」グループと共有されているドキュメントのみを返します。

```
"AttributeFilter": {
  "EqualsTo": {
    "Key": "_group_ids",
    "Value": {
      "StringListValue": ["hr@example.com"]
    }
  }
}
```

```
    }
  }
}
```

クエリでドメインを指定すると、ドメインで共有されているすべてのドキュメントが返されます。以下の `AttributeFilter` パラメータは、「example.com」ドメインと共有されているドキュメントのみを返します。

```
"AttributeFilter": {
  "EqualsTo": {
    "Key": "_group_ids",
    "Value": {
      "StringListValue": ["example.com"]
    }
  }
}
```

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

IBM DB2 データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

IBM DB2 データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

IBM DB2 データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Jira データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Jira データソースを使用すると、は Jira インスタンスからユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。

Jira ユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_user_id` - ユーザー ID は、Jira のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Jira のユーザー ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Microsoft Exchange データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Microsoft Exchange データソースを使用すると、は Microsoft Exchange インスタンスからユーザー情報 Amazon Kendra を取得します。

Microsoft Exchange ユーザー IDs は次のようにマッピングされます。

- `_user_id`— ユーザー IDs、ユーザーが特定のコンテンツにアクセスするための Microsoft Exchange アクセス許可に存在します。これらは、ユーザー名から Microsoft Exchange の IDs されます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Microsoft OneDrive データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon Kendra は、サイト上のドキュメントのインデックスを作成するときに、Microsoft OneDrive からユーザーおよびグループ情報を取得します。ユーザーおよびグループの情報は、OneDrive をホストする基盤の Microsoft SharePoint サイトから取得されます。

検索結果のフィルタリングに OneDrive ユーザーまたはグループを使用する場合は、次のように ID を計算します。

1. サイト名を取得します。例えば、`https://host.onmicrosoft.com/sites/siteName..`
2. サイト名の MD5 ハッシュを取ります。例えば、`430a6b90503eef95c89295c8999c7981`。
3. MD5 ハッシュを縦棒 (|) と ID で連結して、ユーザーの E メールまたはグループ ID を作成します。たとえば、グループ名が「localGroupName」の場合、グループ ID は次のようになります。

```
"430a6b90503eef95c89295c8999c7981 | localGroupName"
```

Note

垂直バーの前後にスペースを含めます。垂直バーは、MD5 ハッシュ `localGroupName` で識別するために使用されます。

ユーザー名が「someone@host.onmicrosoft.com」の場合、ユーザー ID は次のようになります。

```
"430a6b90503eef95c89295c8999c7981 | someone@host.onmicrosoft.com"
```

[クエリ](#) API を呼び出すときに、ユーザーまたはグループ ID を `_user_id` または `_group_id` 属性 Amazon Kendra として に送信します。たとえば、グループを使用して検索結果をフィルタリングする AWS CLI コマンドは次のようになります。

```
aws kendra query \  
    --index-id index ID  
    --query-text "query text"  
    --attribute-filter '{  
        "EqualsTo":{  
            "Key": "_group_id",  
            "Value": {"StringValue": "430a6b90503eef95c89295c8999c7981 |  
localGroupName"}  
        }  
    }'
```

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Microsoft OneDrive v2.0 データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Microsoft OneDrive v2.0 データソースは、OneDrive アクセスコントロールリスト (ACL) エンティティからセクションとページ情報を返します。は、OneDrive テナントドメイン Amazon Kendra を使用して OneDrive インスタンスに接続し、セクションとファイル名へのユーザーまたはグループのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングできます。

標準オブジェクトについては、`_user_id` および `_group_id` が次のように使用されます。

- `_user_id` - Microsoft OneDrive ユーザーの E メール ID が `_user_id` フィールドにマッピングされます。
- `_group_id` - Microsoft OneDrive グループの E メールが `_group_id` フィールドにマッピングされます。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Microsoft SharePoint データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon Kendra は、サイトドキュメントのインデックスを作成するときに、Microsoft SharePoint からユーザーおよびグループ情報を取得します。ユーザーまたはグループのアクセスに基づいて検索結果をフィルタリングするには、Query API を呼び出すときにユーザーおよびグループの情報を指定します。

ユーザー名を使用してフィルタリングするには、ユーザーの E メールアドレスを使用します。例えば、johnstiles@example.com。

SharePoint SharePoint グループを使用して検索結果をフィルタリングする場合は、次のようにグループ ID を計算します。

ローカルグループの場合

1. サイト名を取得します。例えば、https://host.onmicrosoft.com/sites/siteName..
2. サイト名の SHA256 ハッシュを取ります。例えば、430a6b90503eef95c89295c8999c7981。
3. SHA256 ハッシュを縦棒 (|) と ID で連結して、グループ ID を作成します。たとえば、グループ名が「localGroupName」の場合、グループ ID は次のようになります。

```
"430a6b90503eef95c89295c8999c7981 | localGroupName"
```

Note

垂直バーの前後にスペースを含めます。垂直バーは、SHA256 ハッシュlocalGroupNameで を識別するために使用されます。

[クエリ API](#) を呼び出すときに、グループ ID を `_group_id` 属性 Amazon Kendra として に送信します。たとえば、AWS CLI コマンドは次のようになります。

```
aws kendra query \  
    --index-id index ID  
    --query-text "query text"  
    --attribute-filter '{  
        "EqualsTo":{  
            "Key": "_group_id",  
            "Value": {"StringValue": "430a6b90503eef95c89295c8999c7981 |  
localGroupName"}  
        }  
    }'
```

AD グループ用

1. AD グループ ID を使用して、検索結果のフィルタリングを設定します。

[クエリ](#) API を呼び出すときに、グループ ID を `_group_id` 属性 Amazon Kendra として に送信します。たとえば、AWS CLI コマンドは次のようになります。

```
aws kendra query \
    --index-id index ID
    --query-text "query text"
    --attribute-filter '{
        "EqualsTo":{
            "Key": "_group_id",
            "Value": {"StringValue": "AD group"}
        }
    }'
```

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Microsoft SQL Server データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Microsoft SQL Server データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

Microsoft SQL Server データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Microsoft Teams データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon Kendra は、ドキュメントのインデックス作成時に Microsoft Teams からユーザー情報を取得します。ユーザー情報は、基盤となる Microsoft Teams インスタンスから取得されます。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Microsoft Yammer データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Amazon Kendra は、ドキュメントのインデックス作成時に Microsoft Yammer からユーザー情報を取得します。ユーザーとグループの情報は、基盤となる Microsoft Yammer インスタンスから取得されます。

Microsoft Yammer ユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_email_id`— `_user_id`フィールドにマッピングされた Microsoft E メール ID。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

MySQL データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

MySQL データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

MySQL データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Oracle Database データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Oracle Database データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

Oracle Database データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。

- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

PostgreSQL データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

PostgreSQL データソースを使用すると、はソーステーブルの列からユーザーおよびグループ情報 Amazon Kendra を取得します。コンソールでこの列を指定するか、[CreateDataSource](#) API の一部として [TemplateConfiguration](#) オブジェクトを使用して指定します。

PostgreSQL データベースデータソースには、次の制限があります。

- データベースデータソースの許可リストのみを指定できます。拒否リストを指定することはできません。
- グループのみを指定できます。許可リストに個別のユーザーを指定することはできません。
- データベース列は、セミコロンで区切られたグループのリストを含む文字列である必要があります。

Quip データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Quip データソースを使用すると、は Quip インスタンスからユーザー情報 Amazon Kendra を取得します。

Quip ユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_user_id` - ユーザー ID は、Quip のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは Quip の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

`AccessControlList` フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Salesforce データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Salesforce データソースは、Salesforce アクセスコントロールリスト (ACL) エンティティからユーザーおよびグループ情報を返します。Salesforce 標準オブジェクトおよび Chatter フィードにユーザーコンテキストフィルタリングを適用できます。ユーザーコンテキストフィルタリングは、Salesforce ナレッジ記事では使用できません。

Salesforce フィールドを Amazon Kendra ドキュメントタイトルとドキュメント本文フィールドにマッピングすると、Amazon Kendra はドキュメントタイトルと本文フィールドのデータを検索レスポンスで使します。

標準オブジェクトについては、`_user_id` および `_group_ids` が次のように使されます。

- `_user_id` - Salesforce ユーザーのユーザー名。
- `_group_ids`—
 - Salesforce Profile の名前
 - Salesforce Group の名前
 - Salesforce UserRole の名前
 - Salesforce PermissionSet の名前

Chatter フィールドの場合、`_user_id` および `_group_ids` は次のように使されます。

- `_user_id` - Salesforce ユーザーのユーザー名。項目がユーザーのフィードに投稿されている場合にのみ使できます。
- `_group_ids` - グループ ID は、次のように使されます。フィードフィードが Chatter またはコラボレーショングループに投稿されている場合にのみ使できます。
 - Chatter グループまたはコラボレーショングループの名前。
 - グループが公開されている場合、PUBLIC:ALL。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

ServiceNow データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

ServiceNow のユーザーコンテキストフィルタリングは、TemplateConfiguration API と ServiceNow Connector v2.0 でのみサポートされています。ServiceNowConfiguration API と ServiceNow Connector v1.0 は、ユーザーコンテキストフィルタリングをサポートしていません。

ServiceNow データソースを使用すると、は ServiceNow インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、ServiceNow のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは、ServiceNow の `sys_ids` のロール名からマッピングされます。

- `_user_id` - ユーザー ID は、ServiceNow のアクセス許可が設定されているファイルに存在します。これらは ServiceNow の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Slack データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Slack データソースを使用すると、 は Slack インスタンスからユーザー情報 Amazon Kendra を取得します。

Slack ユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_user_id` - ユーザー ID は、アクセス許可が設定されている Slack のメッセージとチャンネルに存在します。これらは Slack の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

Zendesk データソースのユーザーコンテキストフィルタリング

Zendesk データソースを使用すると、 は Zendesk インスタンスからユーザーとグループの情報 Amazon Kendra を取得します。

グループ ID とユーザー ID は、次のようにマッピングされます。

- `_group_ids` - グループ ID は、アクセス許可が設定されている Zendesk のチケットおよび記事に存在します。これらは Zendesk のグループの名前からマッピングされます。
- `_user_id` - グループ ID は、アクセス許可が設定されている Zendesk のチケットおよび記事に存在します。これらは Zendesk の ID としてユーザーの E メールからマッピングされます。

AccessControlList フィールドでは最大 200 個のエントリを追加できます。

クエリレスポンスとレスポンスタイプ

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra は、さまざまなクエリレスポンスとレスポンスタイプをサポートしています。

クエリレスポンス

[クエリ API](#) を呼び出すと、検索結果に関する情報を返します。結果は、[QueryResultItem](#) オブジェクト (ResultItems) の配列です。各 QueryResultItem には、結果の概要が含まれます。クエリの結果に関連付けられたドキュメント属性が含まれます。

概要情報

概要情報は、結果のタイプによって異なります。いずれの場合も、検索条件に一致するドキュメントテキストが含まれます。また、アプリケーションの出力で検索テキストを強調表示するために使用できる強調表示情報も含まれます。例えば、検索条件が `what is the height of the Space Needle?` の場合、概要情報には、`height` および `space needle` の単語のテキストロケーションが含まれます。レスポンスタイプに関する情報については、[クエリレスポンスとレスポンスタイプ](#) を参照してください。

ドキュメント属性

各結果には、クエリに一致するドキュメントのドキュメント属性が含まれます。一部の属性は、`DocumentId`、`DocumentTitle`、および `DocumentUri` のような事前定義がされています。その他は、独自に定義するカスタム属性です。ドキュメント属性を使用して、Query API からのレスポンスをフィルタリングできます。例えば、特定の作成者に書かれたドキュメントまたは特定のバージョンのドキュメントのみが必要な場合があります。詳細については、「[フィルタリングとファセット検索](#)」を参照してください。ドキュメント属性は、ドキュメントをインデックスに追加するときに指定します。詳細については、「[Custom fields or attributes](#)」を参照してください。

次に、クエリ結果の JSON コードのサンプルを示します。DocumentAttributes および AdditionalAttributes のドキュメント属性に注意してください。

```
{
  "QueryId": "query-id",
  "ResultItems": [
    {
      "Id": "result-id",
      "Type": "ANSWER",
      "AdditionalAttributes": [
        {
          "Key": "AnswerText",
          "ValueType": "TEXT_WITH_HIGHLIGHTS_VALUE",
          "Value": {
```

```

        "TextWithHighlightsValue": {
            "Text": "text",
            "Highlights": [
                {
                    "BeginOffset": 55,
                    "EndOffset": 90,
                    "TopAnswer": false
                }
            ]
        }
    },
    "DocumentId": "document-id",
    "DocumentTitle": {
        "Text": "title"
    },
    "DocumentExcerpt": {
        "Text": "text",
        "Highlights": [
            {
                "BeginOffset": 0,
                "EndOffset": 300,
                "TopAnswer": false
            }
        ]
    },
    "DocumentURI": "uri",
    "DocumentAttributes": [],
    "ScoreAttributes": "score",
    "FeedbackToken": "token"
},
{
    "Id": "result-id",
    "Type": "ANSWER",
    "Format": "TABLE",
    "DocumentId": "document-id",
    "DocumentTitle": {
        "Text": "title"
    },
    "TableExcerpt": {
        "Rows": [{
            "Cells": [{
                "Header": true,

```

```

        "Highlighted": false,
        "TopAnswer": false,
        "Value": "value"
    }, {
        "Header": true,
        "Highlighted": false,
        "TopAnswer": false,
        "Value": "value"
    }, {
        "Header": true,
        "Highlighted": false,
        "TopAnswer": false,
        "Value": "value"
    }, {
        "Header": true,
        "Highlighted": false,
        "TopAnswer": false,
        "Value": "value"
    }
  ], {
    "Cells": [{
      "Header": false,
      "Highlighted": false,
      "TopAnswer": false,
      "Value": "value"
    }, {
      "Header": false,
      "Highlighted": false,
      "TopAnswer": false,
      "Value": "value"
    }, {
      "Header": false,
      "Highlighted": true,
      "TopAnswer": true,
      "Value": "value"
    }, {
      "Header": false,
      "Highlighted": false,
      "TopAnswer": false,
      "Value": "value"
    }
  ]
}, {
  "TotalNumberOfRows": number
},

```

```

    "DocumentURI": "uri",
    "ScoreAttributes": "score",
    "FeedbackToken": "token"
  },
  {
    "Id": "result-id",
    "Type": "DOCUMENT",
    "AdditionalAttributes": [],
    "DocumentId": "document-id",
    "DocumentTitle": {
      "Text": "title",
      "Highlights": []
    },
    "DocumentExcerpt": {
      "Text": "text",
      "Highlights": [
        {
          "BeginOffset": 74,
          "EndOffset": 77,
          "TopAnswer": false
        }
      ]
    },
    "DocumentURI": "uri",
    "DocumentAttributes": [
      {
        "Key": "_source_uri",
        "Value": {
          "StringValue": "uri"
        }
      }
    ],
    "ScoreAttributes": "score",
    "FeedbackToken": "token",
  }
],
"FacetResults": [],
"TotalNumberOfResults": number
}

```

レスポンスのタイプ

Amazon Kendra は 3 種類のクエリレスポンスを返します。

- 回答 (表の回答を含む)
- ドキュメント
- 質問と回答

レスポンスのタイプは、[QueryResultItem](#) の Type レスポンスフィールドに返されます。

回答

Amazon Kendra はレスポンスで 1 つ以上の質問の回答を検出しました。Factoid とは、誰が、何を、いつ、どこで、の質問に対するレスポンスです。例えば「Where is the nearest service center to me?」では、Amazon Kendra はクエリに最も一致するインデックス内のテキストを返します。テキストは AnswerText フィールドにあり、レスポンステキスト内の検索条件の強調表示情報を含みます。AnswerText は、強調表示されたテキストを含むドキュメント全体の抜粋を含み、DocumentExcerpt は、切り捨てられた (290 文字) のドキュメントの抜粋と強調表示されたテキストを含みます。

Amazon Kendra はドキュメントごとに 1 つの回答のみを返します。これは最も信頼度の高い回答です。ドキュメントから複数の回答を返すには、ドキュメントを複数のドキュメントに分割する必要があります。

```
{
  'AnswerText': {
    'TextWithHighlights': [
      {
        'BeginOffset': 271,
        'EndOffset': 279,
        'TopAnswer': False
      },
      {
        'BeginOffset': 481,
        'EndOffset': 489,
        'TopAnswer': False
      },
      {
        'BeginOffset': 547,
        'EndOffset': 555,
        'TopAnswer': False
      },
      {
        'BeginOffset': 764,
```

```

        'EndOffset': 772,
        'TopAnswer': False
    }
],
    'Text': 'Asynchronousoperationscan\n''alsoprocess
\n''documentsthatareinPDF''format.UsingPDFformatfilesallowsyoutoprocess''multi-
page\n''documents.\n''Forinformationabouthow''AmazonTextextractrepresents
\n''documentsasBlockobjects,
    ''seeDocumentsandBlockObjects.
\n''\n''\n''\n''Forinformationaboutdocument''limits,
    seeLimitsinAmazonTextextract.
\n''\n''\n''\n''TheAmazonTextextractsynchronous''operationscansprocessdocumentsstoredinanAmazon
\n''S3Bucketoryoucanpass''base64encodedimagebytes.\n''Formoreinformation,

    see''CallingAmazonTextextractSynchronousOperations.''Asynchronousoperationsrequireinputdocuments
\n''tobesuppliedinanAmazon''S3Bucket.'
},
    'DocumentExcerpt': {
        'Highlights': [
            {
                'BeginOffset': 0,
                'EndOffset': 300,
                'TopAnswer': False
            }
        ],
        'Text': 'Asynchronousoperationscan\n''alsoprocess
\n''documentsthatareinPDF''format.UsingPDFformatfilesallowsyoutoprocess''multi-page
\n''documents.\n''ForinformationabouthowAmazon''Textextractrepresents\n''
    },
    'Type': 'ANSWER'
}

```

ドキュメント

Amazon Kendra は、検索語に一致するドキュメントのランク付けされたドキュメントを返します。ランキングは、検索結果の精度 Amazon Kendra に対する の信頼度に基づいています。一致するドキュメントに関する情報は、[QueryResultItem](#) で返されます。これにはドキュメントのタイトルが含まれます。この抜粋には、検索テキストの強調表示情報と、ドキュメント内の一致するテキストのセクションが含まれています。一致するドキュメントの URI は、SourceURI ドキュメント属性にあります。次のサンプル JSON は、一致するドキュメントのドキュメント概要を示しています。

```
{
```



```

    'DocumentTitle': {
      'Highlights': [
        {
          'BeginOffset': 7,
          'EndOffset': 15,
          'TopAnswer': False
        },
        {
          'BeginOffset': 97,
          'EndOffset': 105,
          'TopAnswer': False
        }
      ],
      'Text': 'AmazonTexttractAPIPermissions: Actions,
\n''Permissions,
andResourcesReference-' 'AmazonTexttract'
},
'DocumentExcerpt': {
  'Highlights': [
    {
      'BeginOffset': 68,
      'EndOffset': 76,
      'TopAnswer': False
    },
    {
      'BeginOffset': 121,
      'EndOffset': 129,
      'TopAnswer': False
    }
  ],
  'Text': '...LoggingandMonitoring\tMonitoring
\n''\tCloudWatchMetricsforAmazonTexttract
\n''\tLoggingAmazonTexttractAPICallswithAWSCloudTrail\n''\tAPIReference\tActions
\tAnalyzeDocument\n''\tDetectDocumentText\n''\tGetDocumentAnalysis...'
},
'Type': 'DOCUMENT'
}

```

質問と回答

がインデックス内のよくある質問の 1 つ Amazon Kendra と一致すると、質問と回答のレスポンスが返されます。レスポンスには、[\[QueryResultItem\]](#) フィールドに一致する質問と回答が含まれます。また、クエリ文字列で検出されたクエリ条件の強調表示情報も含まれます。次の JSON は、質問と

回答のレスポンスを示しています。レスポンスには質問のテキストが含まれていることに注意してください。

```
{
  'AnswerText': {
    'TextWithHighlights': [

    ],
    'Text': '605feet'
  },
  'DocumentExcerpt': {
    'Highlights': [
      {
        'BeginOffset': 0,
        'EndOffset': 8,
        'TopAnswer': False
      }
    ],
    'Text': '605feet'
  },
  'Type': 'QUESTION_ANSWER',
  'QuestionText': {
    'Highlights': [
      {
        'BeginOffset': 12,
        'EndOffset': 18,
        'TopAnswer': False
      },
      {
        'BeginOffset': 26,
        'EndOffset': 31,
        'TopAnswer': False
      },
      {
        'BeginOffset': 32,
        'EndOffset': 38,
        'TopAnswer': False
      }
    ],
    'Text': 'whatistheheightoftheSpaceNeedle?'
  }
}
```

質問と回答のテキストをインデックスに追加する方法の詳細については、「[Creating FAQ](#)」を参照してください。

レスポンスのチューニングとソート

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、「[インデックスタイプ](#)」を参照してください。

検索の関連性に対するフィールドまたは属性の影響は、[relevance tuning] (関連性チューニング) で変更できます。検索結果を特定の属性やフィールドでソートすることもできます。

トピック

- [レスポンスのチューニング](#)
- [レスポンスのソート](#)

レスポンスのチューニング

検索の関連性に対するフィールドまたは属性の影響は、[relevance tuning] (関連性チューニング) で変更できます。関連性のチューニングをすばやくテストするには、[クエリ](#) API を使用してクエリ内のチューニング設定を渡します。次に、さまざまな構成から取得したさまざまな検索結果が表示されます。クエリレベルでの関連性のチューニングは、コンソールではサポートされていません。また、インデックスレベルに限り、StringList タイプのフィールドや属性をチューニングできます。詳細については、「[Tuning search relevance](#)」を参照してください。

デフォルトでは、クエリレスポンスは、レスポンスの結果ごとに が Amazon Kendra 決定する関連性スコアでソートされます。

次のタイプの組み込み属性またはカスタム属性/フィールドの結果をチューニングできます。

- 日付値
- 長い値
- 文字列値

次のタイプの属性はソートできません。

- 文字列リスト値

ドキュメント結果のランク付けと調整 (AWS SDK)

設定: Searchable パラメータを true に設定すると、ドキュメントのメタデータ構成が強化されます。

クエリ内の属性をチューニングするには、Query API の DocumentRelevanceOverrideConfigurations パラメータを設定し、チューニングする属性の名前を指定します。

次の JSON 例は、インデックス内の「department」という属性のチューニングを上書きする DocumentRelevanceOverrideConfigurations オブジェクトを示しています。

```
"DocumentRelevanceOverrideConfigurations" : [  
  "Name": "department",  
  "Relevance": {  
    "Importance": 1,  
    "ValueImportanceMap": {  
      "IT": 3,  
      "HR": 7  
    }  
  }  
]
```

レスポンスのソート

Amazon Kendra は、クエリによって返されるドキュメントの基準の一部として、ソート属性またはフィールドを使用します。例えば、「_created_at」でソートされたクエリによって返される結果には、「_version」でソートされたクエリと同じ結果が含まれない場合があります。

デフォルトでは、クエリレスポンスは、レスポンスの結果ごとに が Amazon Kendra 決定する関連性スコアでソートされます。ソート順序を変更するには、ドキュメント属性をソート可能にしてから、その属性を使用してレスポンスをソート Amazon Kendra するように を設定します。

次のタイプの組み込み属性/フィールドまたはカスタム属性/フィールドの結果をソートできます。

- 日付値
- 長い値

- 文字列値

次のタイプの属性はソートできません。

- 文字列リスト値

各クエリは、1 つまたは複数のドキュメント属性でソートできます。クエリは 100 の結果を返します。ソート属性が設定されたドキュメントが 100 未満の場合、ソート属性の値を持たないドキュメントが結果の最後に返され、クエリとの関連性でソートされます。

ドキュメント結果をソートするには (AWS SDK)

1. [UpdateIndex](#) API を使用して、属性をソート可能にするには、Sortable パラメータを true に設定します。次の JSON の例は、DocumentMetadataConfigurationUpdates を使用して「Department」という属性をインデックスに追加して、ソートできるようにしています。

```
"DocumentMetadataConfigurationUpdates": [  
  {  
    "Name": "Department",  
    "Type": "STRING_VALUE",  
    "Search": {  
      "Sortable": "true"  
    }  
  }  
]
```

2. クエリで 1 つのソート可能な属性を使用するには、[クエリ](#) API の SortingConfiguration パラメータを設定します。ソートする属性の名前と、レスポンスを昇順または降順のどちらでソートするかを指定します。

次の JSON の例は、「Department」属性で昇順でクエリの結果をソートするために使用する SortingConfiguration パラメータを示しています。

```
"SortingConfiguration": {  
  "DocumentAttributeKey": "Department",  
  "SortOrder": "ASC"  
}
```

3. クエリで複数のソート可能な属性を使用するには、[クエリ](#) API の SortingConfigurations パラメータを設定します。Amazon Kendra によって結果をソートするフィールドを 3 つまで設

定できます。また、結果を昇順と降順のどちらでソートするかを指定できます。ソートフィールドのクォータは、増やすことができます。

ソート設定を指定しない場合、結果は が結果に対して Amazon Kendra 決定する関連性によってソートされます。結果のソートでタイの場合、結果は関連性でソートされます。

次の JSON の例では、クエリの結果を「Name」と「Price」で昇順にソートするために使用する `SortingConfigurations` パラメータを示しています。

```
"CollapseConfiguration" : {
  "DocumentAttributeKey": "Name",
  "SortingConfigurations": [
    {
      "DocumentAttributeKey": "Price",
      "SortOrder": "ASC"
    }
  ],
  "MissingAttributeKeyStrategy": "IGNORE"
}
```

ドキュメントの結果をソートするには (コンソール)

 Note

現在、AWS Management Consoleによる複数属性のソートはサポートしていません。

1. コンソールで属性をソート可能にするには、属性定義で [Sortable] (ソート可能) を選択します。属性の作成時に属性をソート可能にすることも、後で変更することもできます。
2. コンソールでクエリのレスポンスをソートするには、属性を選択して、[Sort] (ソート) メニューからレスポンスをソートします。データソース設定中にソート可能とマークされた属性のみがリストに表示されます。

クエリ結果の折りたたみ/展開

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

データ Amazon Kendra に接続すると、_document_title、_、などの[ドキュメントメタデータ属性](#)がクローल_document_idされ_created_at、これらの属性またはフィールドを使用してクエリ時間中に高度な検索機能が提供されます。

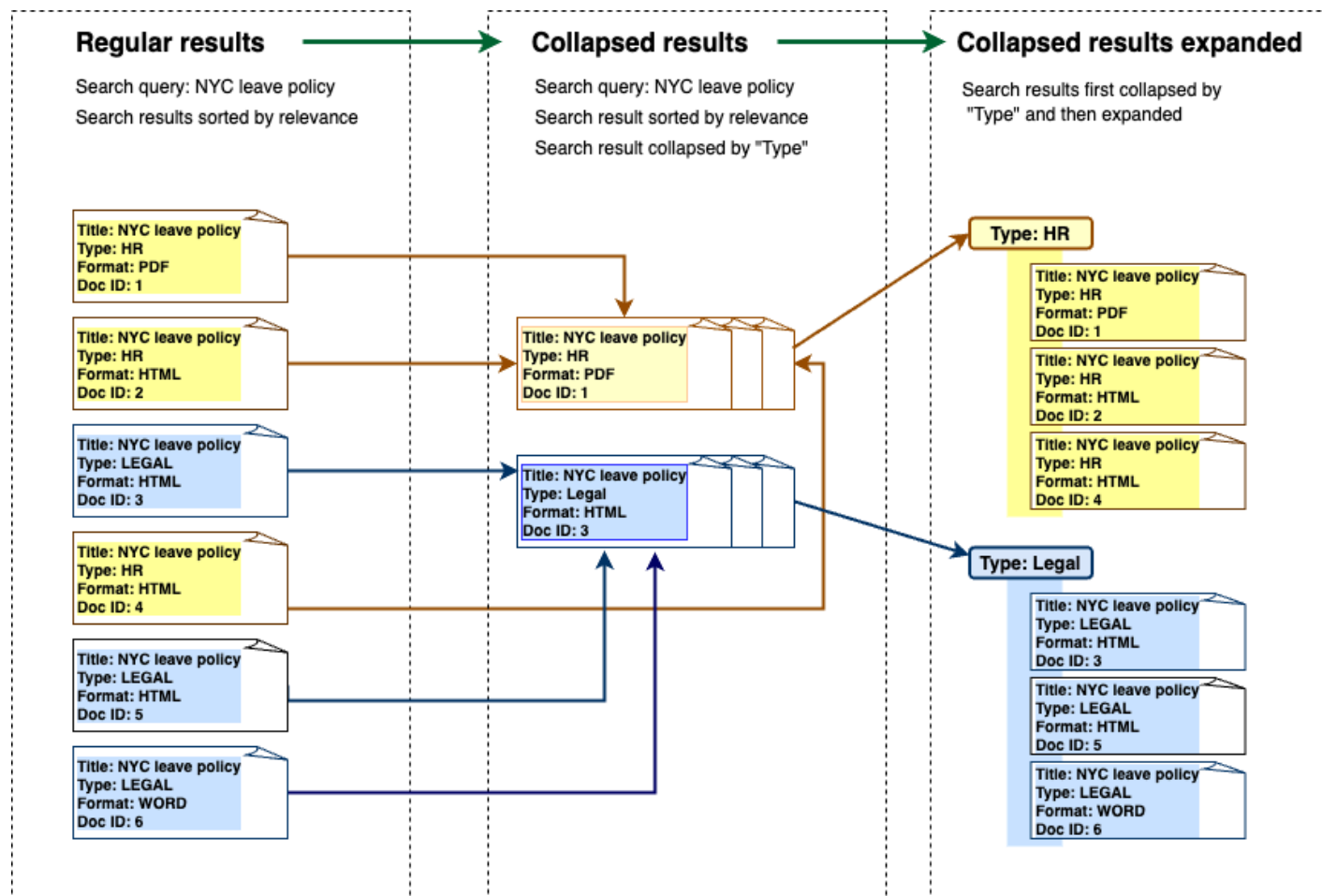
Amazon Kendraのクエリ結果の折りたたみと展開機能を使用すると、共通のドキュメント属性を使用して検索結果をグループ化して、指定したプライマリドキュメントの下に (折りたたみまたは部分的に展開) 表示できます。

Note

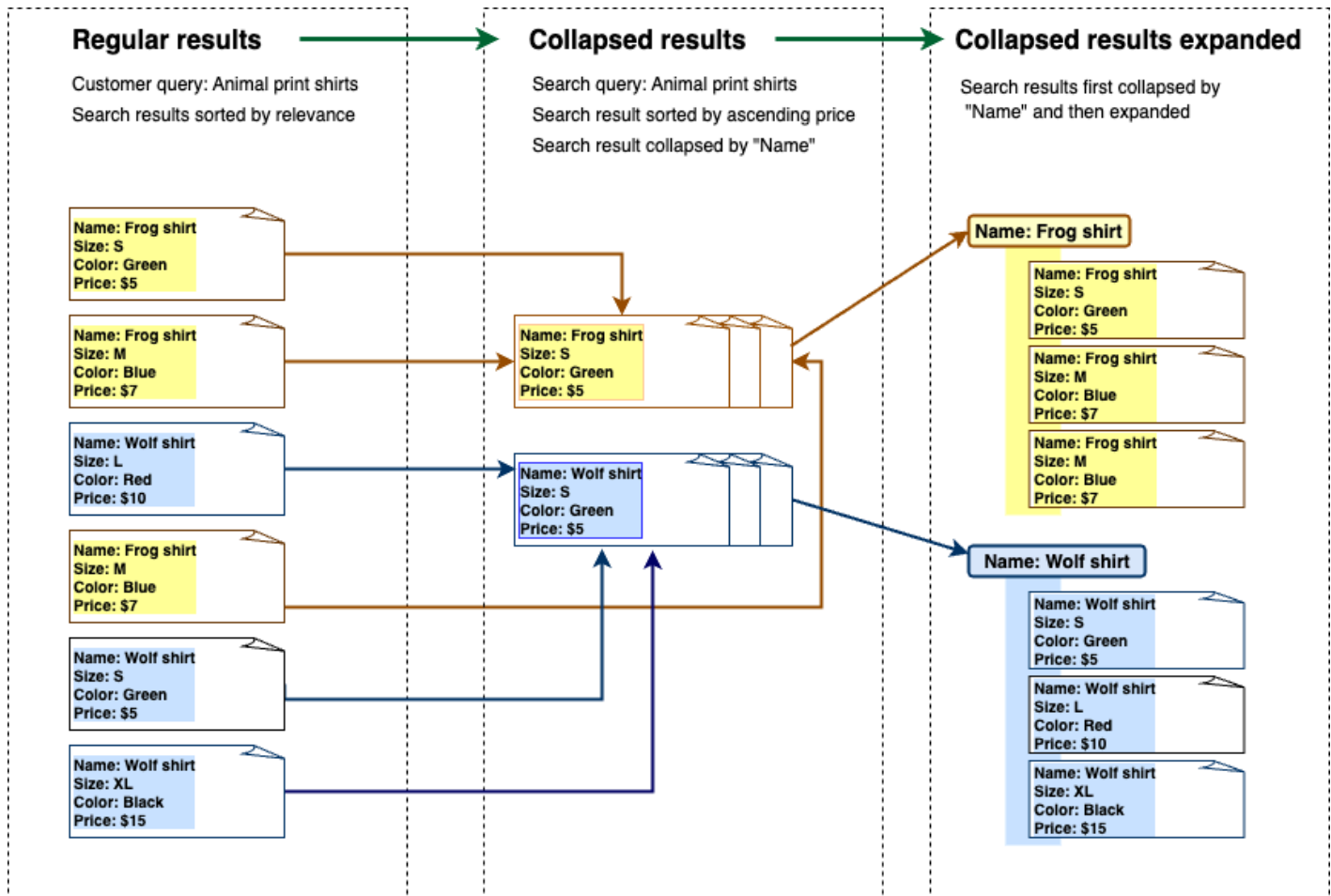
クエリ結果の折りたたみと展開機能は、現在 [Amazon Kendra API](#) 経由でのみ利用できません。

これは、次のような検索状況で役に立ちます。

- インデックス内のドキュメントに複数のバージョンのコンテンツが存在する。エンドユーザーがインデックスをクエリする際に、重複を非表示または折りたたむことにより、最も関連性の高いバージョンのドキュメントを表示する場合。たとえば、インデックスに「NYC leave policy」という名前のドキュメントの複数のバージョンが含まれている場合、「Type」属性/フィールドを使用して、特定のグループの「HR」と「Legal」のドキュメントを折りたたむことができます。



- インデックスには、商品在庫など、1種類の項目またはオブジェクトに関する固有の情報を含む複数のドキュメントが含まれています。アイテム情報の取得やソートしやすくするために、エンドユーザーがアイテムやオブジェクトにリンクされたすべてのドキュメントに1つの検索結果としてアクセス可能にする。以下の例では、「アニマルプリントシャツ」を顧客が検索すると、名前グループ化され、昇順でソートされた結果が返されます。



結果の折りたたみ

類似ドキュメントまたは関連ドキュメントをグループ化するには、折りたたむ属性を指定する必要があります (たとえば、ドキュメントを折りたたむ/グループ化できます `_category`)。これを行うには、[クエリ API](#) を呼び出し、[CollapseConfiguration](#) オブジェクトを使用して折りたたむ `DocumentAttributeKey` を指定します。 `DocumentAttributeKey` は、どのフィールドで検索結果を折りたたむかをコントロールします。サポートされている属性キーフィールドには、String と Number が含まれます。String list と Date タイプはサポートされていません。

ソート順を使用してプライマリドキュメントを選択する

折りたたまれたグループにプライマリドキュメントが表示されるように設定するには、[CollapseConfiguration](#) の `SortingConfigurations` パラメータを使用します。たとえば、ドキュメントの最新バージョンを取得するには、折りたたまれた各グループを `_version` でソートします。 `SortingConfigurations` を使用して、ソートする属性/フィールドを 3 つまで指

定し、各属性/フィールドのソート順を指定できます。ソート属性数のクォータの引き上げをリクエストできます。

デフォルトでは、はクエリレスポンスを、レスポンスの結果ごとに決定した関連性スコアで Amazon Kendra ソートします。デフォルトのソート順序を変更するには、ドキュメント属性をソート可能にしてから、これらの属性を使用してレスポンスをソート Amazon Kendra するようにを設定します。詳細については、「[Sorting responses](#)」を参照してください。

ドキュメントのキーストラテジーの欠損

ドキュメントに折りたたみ属性値がない場合、Amazon Kendra には次の 3 つのカスタマイズオプションがあります。

- COLLAPSE を選択して、null 値または欠損値を含むすべてのドキュメントを 1 つのグループに折りたたみます。これはデフォルトの設定です。
- IGNORE を選択して、null 値または欠損値を含むドキュメントを無視します。無視したドキュメントは、クエリ結果に表示されません。
- EXPAND を選択して、null または欠落しているドキュメントをそれぞれ独自のグループに展開します。

結果の拡張

[CollapseConfiguration](#) オブジェクトの Expand パラメータを使用して、折りたたまれた検索結果のグループを展開するかどうかを選択できます。展開された結果では、グループのプライマリドキュメントを選択したときと同じソート順序が維持されます。

折りたたまれた検索結果グループの数を展開するように構成するには、[ExpandConfiguration](#) オブジェクトの MaxResultItemstoExpand パラメータを使用します。例えば、この値を 10 に設定すると、100 個の結果グループのうち最初の 10 個だけが展開機能を持ちます。

折りたたまれたプライマリドキュメントごとに表示する展開結果の数を設定するには、MaxExpandResultsPerItem パラメータを使用します。例えば、この値を 3 に設定すると、折りたたまれたグループごとに最大 3 つの結果が表示されます。

他の Amazon Kendra 機能とのやり取り

- 結果を折りたたんだり展開したりしても、ファセットの数は変化せず、表示される結果の総数にも影響しません。

- Amazon Kendra [注目の検索結果](#)は、設定した折りたたみフィールドと同じフィールド値であっても折りたたみられません。
- 結果の折りたたみと展開は、タイプ の結果にのみ適用されますDOCUMENT。

検索の関連性のチューニング

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra クエリは、関連性によってランク付けされた検索結果を生成します。インデックス内の検索可能なフィールドまたは属性はすべて、このランキングに貢献します。

検索の関連性に対するフィールドまたは属性の影響は、[relevance tuning] (関連性チューニング) で変更できます。検索関連性のチューニングは、インデックスのチューニング構成を設定するインデックスレベルで手動で行うことも、インデックスレベルで設定された構成を上書きしてクエリレベルで行うこともできます。

関連性チューニングを使用すると、フィールドまたは属性に一致する用語がクエリ内にあると、レスポンスでの結果がブーストされます。また、一致する場合にドキュメントが受け取るブーストの量も指定します。関連性の調整では、[ガクエリレスポンスにドキュメントを含めることはありません Amazon Kendra](#)。これは、[ガドキュメントの関連性を判断するために Amazon Kendra](#) 使用する要因の 1 つにすぎません。

インデックス内の特定のフィールドまたは属性をブーストして、特定のレスポンスをより重要度に割り当てることができます。例えば、誰かが「When is re:Invent?」と検索したとします。_last_update_at フィールドでドキュメントの鮮度の関連性を高めることができます。または、調査レポートのインデックスで、「ソース」フィールドで特定のデータソースをブーストすることもできます。

フォーラムやその他のサポートナレッジベースで一般的な投票や閲覧数に基づいてドキュメントを増やすこともできます。例えば、ブーストを組み合わせ、最近表示したドキュメントをブーストすることもできます。

ドキュメントが受け取るブーストの量は、Importance パラメータを使用して設定できます。Importance が高いほど、フィールドまたは属性によってドキュメントの関連性が高まります。インデックスをチューニングしたり、クエリレベルでチューニングしたりする場合は、必要なエフェクトが得られるまで、Importance パラメータを少しずつ指定します。検索結果を改善しているかどうかを判断するには、検索を実行し、結果を以前のクエリと比較します。

日付、数値、または文字列属性を指定して、インデックスをチューニングしたり、クエリレベルでチューニングしたりできます。インデックスレベルに限り、StringList タイプのフィールドや属性をチューニングできます。各フィールドまたは属性には、結果をブーストするタイミングに関する特定の基準があります。

- 日付フィールドまたは属性 - 日付フィールドには、Duration、Freshness および RankOrder の 3 つの特定の基準があります。
 - Duration は、ブーストが適用される期間を設定します。例えば、期間を 86400 秒 (つまり 1 日) に設定すると、ブーストは 1 日後に減り始めます。重要度が高いほど、ブーストの低下が速くなります。
 - Freshness ドキュメントがフィールドまたは属性に適用されるとき、ドキュメントがどの程度最近のものを決定します。Freshness を [作成日] または [最終更新日] のいずれかのフィールドに適用する場合、より最近作成または最終更新されたドキュメントが、古いドキュメントよりも「新鮮」と見なされます。例えば、ドキュメント 1 の作成日が 11 月 14 日で、ドキュメント 2 の作成日が 11 月 5 日である場合、ドキュメント 1 はドキュメント 2 よりも「新鮮」です。また、ドキュメント 1 の最終更新日が 11 月 14 日で、ドキュメント 2 の最終更新日が 11 月 20 日である場合、ドキュメント 2 はドキュメント 1 よりも「新鮮」です。ドキュメントが新鮮であればあるほど、このブーストはより多く適用されます。インデックス内の Freshness フィールドは 1 つのみ設けることができます。
 - RankOrder は昇順または降順でブーストを適用します。ASCENDING を指定した場合、新しい日付が優先されます。DESCENDING を指定した場合、古い日付が優先されます。
- 数値フィールドまたは属性 - 数値フィールドまたは属性の場合、フィールドまたは属性の関連性を判断するときに Amazon Kendra が使用するランク順を指定できます。ASCENDING を指定した場合、大きい数値が優先されます。DESCENDING を指定した場合、小さい数字が優先されます。
- 文字列フィールドまたは属性 - 文字列フィールドまたは属性の場合、フィールドのカテゴリを作成して、各カテゴリに異なるブーストを与えることができます。例えば、「Departmen」というフィールドまたは属性をブーストすると、「Legal」のドキュメントとは異なるブーストを「HR」からドキュメントに与えることができます。タイプ String のフィールドまたは属性をブーストできます。StringList フィールドは、インデックスレベルでのみブーストできます。

インデックスレベルでの関連性のチューニング

インデックスレベルでフィールドまたは属性の関連性をチューニングするには、[コンソール](#)を使用してインデックスの詳細でチューニングを設定するか、[UpdateIndex](#) API を使用します。

次の例では、`_last_updated_at`フィールドをドキュメントの `Freshness`フィールドとして設定します。

```
"DocumentMetadataConfigurationUpdates" : [  
  {  
    "Name": "_last_updated_at",  
    "Type": "DATE_VALUE",  
    "Relevance": {  
      "Freshness": TRUE,  
      "Importance": 2  
    }  
  }  
]
```

次の例では、「department」フィールドのカテゴリごとに異なる重要度を適用します。

```
"DocumentMetadataConfigurationUpdates" : [  
  {  
    "Name": "department",  
    "Type": "STRING_VALUE",  
    "Relevance": {  
      "Importance": 2,  
      "ValueImportanceMap": {  
        "HR": 3,  
        "Legal": 1  
      }  
    }  
  }  
]
```

クエリレベルでの関連性のチューニング

クエリレベルでフィールドまたは属性の関連性をチューニングするには、[クエリ API](#) を使用します。

クエリレベルでの関連性のチューニングは、コンソールではサポートされていません。

クエリレベルでチューニングすると、各テストのインデックス内のチューニング設定を手動で更新する必要がないため、関連性チューニングのテストプロセスが高速化されます。クエリでチューニング設定を渡すことで、ドキュメントの関連性をチューニングできます。次に、さまざまな設定から取得

したさまざまな結果が表示されます。クエリで渡される設定は、インデックスレベルで設定された構成を上書きします。

次の例では、上記の例に示すように、「department」フィールドおよびインデックスレベルで設定された各部門カテゴリに適用される重要度を上書きします。ユーザーが検索クエリを入力すると、「department」フィールドの重要度は公正で、リーガル部門は HR 部門よりも重要度が高くなります。

```
"DocumentRelevanceOverrideConfigurations" : [  
  {  
    "Name": "department",  
    "Type": "STRING_VALUE",  
    "Relevance": {  
      "Importance": 2,  
      "ValueImportanceMap": {  
        "HR": 2,  
        "Legal": 8  
      }  
    }  
  }  
]
```

検索分析で同作を得る

Note

機能のサポートは、使用するインデックスタイプと検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra 検索分析を使用して、検索アプリケーションがユーザーの情報検索にどのように成功したか、または失敗しているかに関するインサイトを得ることができます。

Amazon Kendra 分析は、ユーザーが検索アプリケーションとやり取りする方法と、検索アプリケーションの設定がどの程度効果的であるかを示すスナップショットを提供します。[GetSnapshots](#) API を使用して、または、コンソールのナビゲーションパネルで [分析] を選択してメトリクスデータを表示できます。

独自のカスタムビルドダッシュボードの GetSnapshots で、生成したデータをレンダリングできます。または、コンソールに提供される、ビジュアルグラフを含むメトリクスダッシュボードを使用することもできます。ビジュアルダッシュボードを使用すると、時間の経過に伴うユーザー行動の傾向やパターンを探したり、検索アプリケーション構成で問題を明らかにしたりできます。例えば、1 日あたりのクエリ数が一貫して増加し、一定の増加を示す折れ線グラフは、採用と使用量の増加を示している可能性があります。一方、急激な低下は、調査が必要な問題があることを示している可能性があります。

このメトリクスを使用して、さまざまなデータポイントの繋がりを確立し、ユーザーが情報を検索したり、ビジネスチャンスを発見したりする方法に関する問題を解決できます。例えば、「How does AI work?」というドキュメントは、検索結果内で最もクリックされたドキュメントで、検索された上位のクエリは「How does machine learning work?」です。これにより、ユーザーが使用する優先用語と言語が通知されます。これらの用語をドキュメントに統合したり、これらの用語にカスタムシノニムを使用して、ドキュメントをユーザーに対して検索しやすくすることができます。

検索のメトリクス

検索アプリケーションのパフォーマンスや、ユーザーが検索している情報を分析するための 10 のメトリクスがあります。メトリクスデータを取得するには、GetSnapshots を呼び出すときに取得するメトリクスデータの文字列名を指定します。

また、メトリクスデータを表示するには、時間間隔またはタイムウィンドウを指定する必要があります。時間間隔は、インデックスのタイムゾーンを使用します。データは次のタイムウィンドウで表示できます。

- `THIS_WEEK`: 今週。日曜日から始まり、今日の前日に終わる。
- `ONE_WEEK_AGO`: 先週。日曜日から始まり、次の土曜日に終わる。
- `TWO_WEEKS_AGO`: 先々週。日曜日から始まり、次の土曜日に終わる。
- `THIS_MONTH`: 今月。月の第一日から始まり、今日の前日に終わる。
- `ONE_MONTH_AGO`: 先月。月の第一日から始まり、月の末日に終了する。
- `TWO_MONTHS_AGO`: 先々月。月の第一日から始まり、月の末日に終了する。

コンソールでは、サポートされているタイムウィンドウは、`[This week]` (今週)、`[Previous week]` (先週)、`[This month]` (今月)、`[Previous month]` (先月) です。

クリックスルー率

検索結果内のドキュメントへのクリックスルーにつながるクエリの割合。これにより、検索アプリケーション構成がユーザーのクエリに関連する情報を見つけるのに役立つかどうかを把握できます。インスタント回答を返すクエリの場合、ユーザーはドキュメントをクリックして詳細を確認する必要がない場合があります。詳細については、「[the section called “即時回答率”](#)」を参照してください。[\[SubmitFeedback\]](#) を呼び出して、クリックスルーフィードバックが確実に収集されるようにする必要があります。

`GetSnapshots` API を使用してクリックスルー率のデータを取得するには、`AGG_QUERY_DOC_METRICS` に `metricType` を指定します。ナビゲーションパネルの `[Analytics]` (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。

ゼロクリック率

検索結果内のドキュメントへのゼロクリックにつながるクエリの割合。これは、無関係な検索結果を提供するコンテンツのギャップを把握するのに役立ちます。インスタント回答を返すクエリの場合、ユーザーはドキュメントをクリックして詳細を確認する必要がない場合があります。詳細については、「[the section called “即時回答率”](#)」を参照してください。また、チューニング構成などの検索設定は、検索結果でドキュメントが返される方法に影響を与える可能性があります。

GetSnapshots API を使用してゼロクリックのデータを取得するには、AGG_QUERY_DOC_METRICS に metricType を指定します。ナビゲーションパネルの [Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。

ゼロ検索結果率

ゼロ検索結果につながるクエリの割合。これは、無関係な検索結果を提供するコンテンツのギャップを把握するのに役立ちます。

GetSnapshots API を使用してゼロ検索結果率のデータを取得するには、AGG_QUERY_DOC_METRICS に metricType を指定します。ナビゲーションパネルの [Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。

即時回答率

即時回答またはよくある質問が返されたクエリの割合。これは、情報提供における即時回答の役割を把握するのに役立ちます。

GetSnapshots API を使用して即時回答率のデータを取得するには、AGG_QUERY_DOC_METRICS に metricType を指定します。ナビゲーションパネルの [Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。

上位のクエリ

ユーザーが検索した上位 100 件のクエリ。これは、どのクエリが人気があり、ユーザーが最も関心を持っている情報の種類はどれかを把握するのに役立ちます。

メトリクスには、クエリが検索された回数、ドキュメントに対するクリックスルーの割合、ドキュメントに対するクリックスルーなしの割合、クエリの検索結果の平均クリック深度、クエリの即時回答の割合、および最初の 10 件のクエリの検索結果の平均信頼度が含まれます。

GetSnapshots API を使用して上位クエリのデータを取得するには、QUERIES_BY_COUNT に metricType を指定します。コンソールのナビゲーションパネルで、[Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。[Query lists] (クエリリスト) の [Top queries] (上位クエリ) を選択します。

ゼロクリックの上位クエリ

検索結果内のゼロクリックにつながる上位 100 クエリ。これにより、一部のクエリに関連するドキュメントが不足している場合や、検索アプリケーションの構成で無関係な検索結果が返されている

場合に、コンテンツのギャップを把握できます。インスタント回答を返すクエリの場合、ユーザーはドキュメントをクリックして詳細を確認する必要がない場合があります。詳細については、「[the section called “即時回答率”](#)」を参照してください。

メトリクスには、クエリがゼロクリックにつながった回数、クエリに対するゼロクリックの割合、クエリの即時回答の割合、およびクエリの最初の 10 件の検索結果の平均信頼度が含まれます。

GetSnapshots API を使用してゼロクリックを伴う上位クエリのデータを取得するには、QUERIES_BY_ZERO_CLICK_RATE に metricType を指定します。コンソールのナビゲーションパネルで、[Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。[Query lists] (クエリリスト) の [Top zero click queries] (上位ゼロクリッククエリ) を選択します。

ゼロ検索結果の上位クエリ

ゼロ検索結果につながる上位 100 クエリ。これにより、クエリに関連するドキュメントがないコンテンツのギャップを把握するのに役立ちます。または、検索結果 0 件につながる可能性がある特殊な用語でユーザーがクエリを実行し、[カスタムシノニム](#) を作成してこれに対処するよう促す場合があります。

メトリクスには、クエリのゼロ検索結果につながる回数、クエリの検索結果ゼロの割合、およびすべてのクエリに対するクエリが検索された回数の割合が含まれます。

GetSnapshots API を使用してゼロ検索結果の上位クエリのデータを取得するには、QUERIES_BY_ZERO_RESULT_RATE に metricType を指定します。コンソールのナビゲーションパネルで、[Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。[Query lists] (クエリリスト) の [Top zero result queries] (上位ゼロ結果クエリ) を選択します。

クリックされた上位ドキュメント

検索結果内で最もクリックされたドキュメントの上位 100 件。これにより、ユーザーが情報をクエリするとき、どのドキュメントまたは検索結果が最も関連しているかを把握できます。

メトリクスには、ドキュメントがクリックされた回数、ドキュメントがユーザーから受け取るいいね! の数 (高評価)、ドキュメントがユーザーから受け取る嫌いの数 (低評価) が含まれます。

GetSnapshots API を使用してクリックされた上位ドキュメントのデータを取得するには、DOCS_BY_CLICK_COUNT に metricType を指定します。コンソールのナビゲーションパネルで、[Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。[Query lists] (クエリリスト) の [Top clicked documents] (クリックされた上位ドキュメント) を選択します。

合計クエリ数

ユーザーが検索したクエリの合計数。これにより、ユーザーが検索アプリケーションにどの程度関わっているかを理解できます。

GetSnapshots API を使用してクエリの合計数のデータを取得するには、AGG_QUERY_DOC_METRICS に `metricType` を指定します。ナビゲーションパネルの [Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。

合計ドキュメント

インデックス内のドキュメントの合計数。これにより、インデックスのサイズとクエリの総数を比較して、クエリの量に対して適切な数のドキュメントがあるかどうかをチェックできます。

GetSnapshots API を使用してドキュメントの合計数のデータを取得するには、AGG_QUERY_DOC_METRICS に `metricType` を指定します。ナビゲーションパネルの [Analytics] (分析) を選択して、このメトリクスをコンソールで表示することもできます。

メトリクスデータの取得例

次のコードは、先月の上位のクエリのデータを取得する例です。

Console

先月の上位クエリを取得するには

1. 左側のナビゲーションペインで、[Indexes] (インデックス) で、インデックスを選択し、[Analytics] (分析) を選択します。
2. [分析] ページで、[今週] ボタンをクリックし、データを取得するための期間を [先月] に変更します。
3. [Analytics] (分析) ページの [Query lists] (クエリリスト) で、[Top queries] (上位クエリ) を選択します。

CLI

先月の上位クエリを取得するには

```
aws kendra get-snapshots \
--index-id index-id \
--interval "ONE_MONTH_AGO" \
```

```
--metric-type "QUERIES_BY_COUNT"
```

Python

先月の上位クエリを取得するには

```
import boto3

kendra = boto3.client("kendra")

index_id = "index-id"
interval = "ONE_MONTH_AGO"
metric_type = "QUERIES_BY_COUNT"

snapshots_response = kendra.get_snapshots(
    IndexId = index_id,
    Interval = interval,
    MetricType = metric_type
)

print("Top queries data: " + snapshots_response["snapshotsData"])
```

Java

先月の上位クエリを取得するには

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.GetSnapshotsRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.GetSnapshotsResponse;

public class TopQueriesExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String indexId = "indexID";
        String interval = "ONE_MONTH_AGO";
        String metricType = "QUERIES_BY_COUNT";

        GetSnapshotsRequest getSnapshotsRequest = GetSnapshotsRequest
            .builder()
            .indexId(indexId)
```

```
.interval(interval)
.metricType(metricType)
.build();

GetSnapshotsResponse getSnapshotsResponse =
kendra.getSnapshots(GetSnapshotsRequest);

System.out.println(String.format("Top queries data: ",
getSnapshotsResponse.snapshotsData()))
```

メトリクスから実用的なインサイトまで

実用的なインサイトは、生データから抽出された有意義な情報であり、行動や意思決定の指針として使用されます。メトリクスから意味を抽出し、それらを使用して実用的なインサイトを導き出すには、メトリクスを個別に調べるだけでなく、メトリクス間のつながりも確立することが重要です。

例えば、クリック数がゼロの上位クエリは、「Which regions are currently available?」のようになります。ただし、インスタント回答率も 100% です。これは、利用可能なリージョンに関する情報を提供する検索結果やドキュメントをクリックしなくても、ユーザーがこの質問に対する回答を受け取ることを示唆しています。ゼロクリックだけを見た場合、完全なストーリーは得られず、このクエリを処理する際の検索アプリケーション構成の成功について間違った結論を出す可能性があります。

実用的なインサイトの別の例は、ビジネスチャンスの発見です。企業は多くの場合、検索メトリクスを分析してお客様を成長させる機会を求めています。最もクリックされたドキュメントは「利用可能なリージョン」です。これに加えて、検索された上位クエリのほとんどは、海洋リージョンでの製品の可用性に関する質問に関連しています。回答の一部として、利用可能なリージョンに関するより多くの情報への即時回答率が 100%、クリックスルー率は高くなります。これは、このリージョンに製品やサービスに対する関心と需要があることを示唆しています。

検索分析の視覚化とレポート

トレンドデータを含む 5 つのメトリクスがあり、時間の経過とともにトレンドやパターンを視覚化して検索できます。コンソールを使用する場合、トレンドデータのグラフが表示されます。API を使用する場合、トレンドデータを取得して、独自のグラフまたは視覚化された情報を作成できます。コンソールのほとんどのグラフは、選択したタイムウィンドウにおける日次データポイントをプロットします。

コンソールには、表示したいグラフとトップリストを選択できるメトリクスのダッシュボードが表示されます。ダッシュボードに表示されるメトリクスを CSV 形式でエクスポートするに

は、[Analytics] (分析) ホームページの [Export] (エクスポート) を選択します。これらのレポートは、ビジネスドキュメントまたはプレゼンテーションに含めることができます。

以下のメトリクスを視覚化することができます。

合計クエリグラフ

1日に発行されたクエリ数の折れ線グラフ。このグラフは、毎日のユーザーエンゲージメントのパターンを視覚化するのに役立ちます。例としては、ユーザーエンゲージメントの着実な増減や、検索アプリケーションのクラッシュやウェブサイトの問題により、クエリが0件まで大幅に低下することがあります。

APIを使用する場合は、TREND_QUERY_DOC_METRICSを指定して、これらのデータを取得できます。データを使用して独自のグラフを作成することも、コンソールで提供されているグラフを使用することもできます。

クリックスルー率グラフ

1日あたりのクリックスルーの割合の折れ線グラフ。このグラフは、毎日のクリックスルー率のパターンを視覚化するのに役立ちます。例としては、クリックスルー率の着実な増減、即時回答の減少がクリックスルーの増加に影響を与える可能性があります。

APIを使用する場合は、TREND_QUERY_DOC_METRICSを指定して、これらのデータを取得できます。データを使用して独自のグラフを作成することも、コンソールで提供されているグラフを使用することもできます。

ゼロクリック率グラフ

1日あたりのゼロクリックの割合の折れ線グラフ。このグラフは、毎日のゼロクリック率のパターンを視覚化するのに役立ちます。例としては、ゼロクリック率の着実な増減、即時回答の増加がゼロクリックの増加に影響を与える可能性があります。

APIを使用する場合は、TREND_QUERY_DOC_METRICSを指定して、これらのデータを取得できます。データを使用して独自のグラフを作成することも、コンソールで提供されているグラフを使用することもできます。

ゼロ検索結果率グラフ

1日あたりのゼロ検索結果の割合の折れ線グラフ。このグラフは、毎日のゼロ検索結果率のパターンを視覚化するのに役立ちます。例としては、ゼロ検索結果率の着実な増減、インデックス内のドキュメント数の急激な減少がゼロ検索結果の増加に影響を与える可能性があります。

API を使用する場合は、TREND_QUERY_DOC_METRICS を指定して、これらのデータを取得できます。データを使用して独自のグラフを作成することも、コンソールで提供されているグラフを使用することもできます。

即時回答率グラフ

即時回答またはよくある質問が返されたクエリの割合の折れ線グラフ。このグラフは、毎日の即時回答率のパターンを視覚化するのに役立ちます。例としては、質問応答タイプのクエリの着実な増減、またはクリックスルーの減少が即時回答の増加に影響を与える可能性があります。

API を使用する場合は、TREND_QUERY_DOC_METRICS を指定して、これらのデータを取得できます。データを使用して独自のグラフを作成することも、コンソールで提供されているグラフを使用することもできます。

増分学習のためのフィードバックの送信

Note

機能のサポートは、インデックスタイプと使用されている検索 API によって異なります。使用しているインデックスタイプと検索 API でこの機能がサポートされているかどうかを確認するには、[「インデックスタイプ」](#)を参照してください。

Amazon Kendra では、増分学習を使用して検索結果を改善します。クエリからのフィードバックを使用して、増分学習によってランク付けアルゴリズムが改善され、検索結果が最適化され、精度が向上します。

例えば、ユーザーが「health care benefits」という語句を検索するとします。複数のユーザーがリストから 2 番目の結果を一貫して選択すると、Amazon Kendra はその結果を第 1 位の結果に格上げします。ブーストは時間の経過とともに減少するため、ユーザーが結果の選択を停止すると、は Amazon Kendra 結果を削除し、代わりに別のより人気のある結果を表示します。これにより、関連性、年齢、コンテンツに基づいて結果に Amazon Kendra 優先順位を付けることができます。

増分学習は、すべてのインデックスとすべての[サポートされているドキュメントタイプ](#)で有効になっています。

Amazon Kendra はフィードバックを提供するとすぐに学習を開始しますが、フィードバックの結果が表示されるまでに 24 時間以上かかる場合があります。Amazon Kendra は、フィードバックを送信する 3 つの方法として、AWS コンソール、検索結果ページに含めることができる JavaScript ライブラリ、および使用できる API を提供します。

Amazon Kendra は、次の 2 種類のユーザーフィードバックを受け入れます。

- クリック - ユーザーが選択したクエリの結果に関する情報。フィードバックには、結果 ID と、検索結果が選択された日時の Unix タイムスタンプが含まれます。

クリックフィードバックを送信するには、アプリケーションがユーザーのアクティビティからクリック情報を収集し、その情報を Amazon Kendra に送信する必要があります。コンソール、JavaScript ライブラリ、および Amazon Kendra API を使用して、クリック情報を収集できます。

- 関連性 - ユーザーが通常提供する検索結果の関連性に関する情報。フィードバックには、結果 ID と関連性インジケータ (RELEVANT または NOT_RELEVANT) が含まれます。ユーザーが関連性情報を決定します。

関連性のフィードバックを送信するには、ユーザーがクエリ結果の適切な関連性を選択し、その情報を Amazon Kendra に送信できるフィードバックメカニズムをアプリケーションに提供する必要があります。関連性情報は、コンソールと Amazon Kendra API でのみ収集できます。

フィードバックは、インデックスがアクティブである間に使用されます。フィードバックは、送信先のインデックスにのみ影響し、インデックス間や異なるアカウントで使用することはできません。

Amazon Kendra インデックスをクエリするときは、追加のユーザーコンテキストを指定する必要があります。ユーザーコンテキストを指定すると、Amazon Kendra はフィードバックが 1 人のユーザーから提供されたか、複数のユーザーから提供されたかを判断し、それに応じて検索結果を調整できます。

ユーザーコンテキストを指定すると、クエリのフィードバックは、コンテキストで指定した特定のユーザーに関連付けられます。ユーザーコンテキストを指定しない場合は、クエリをグループ化および集計するために使用する訪問者 ID を指定できます。

ユーザーコンテキストまたは訪問者 ID を提供しない場合、フィードバックは匿名で、他の匿名のフィードバックと共に集計されます。

次のコードは、ユーザーコンテキストをトークンまたは訪問者 ID として含める方法を示しています。

```
response = kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    UserToken = {  
        Token = "token"  
    })  
  
OR  
  
response = kendra.query(  
    QueryText = query,  
    IndexId = index,  
    VisitorId = "visitor-id")
```

ウェブアプリケーションでは、cookie、ロケーション、またはブラウザユーザーを使用して、各ユーザーの訪問者 ID を生成できます。

ヘッドクエリはクエリ量が最大で、クリックスルーフィードバックを提供することにより全体的な精度を向上させるのに十分な情報が提供されます。テールクエリはまれですが、主題のエキスパートは、これらのクエリの精度を向上させるために、関連性がないフィードバックを送信する必要があります。

コンソールだけでなく、JavaScript ライブラリまたは [SubmitFeedback](#) API の 2 つの方法のうち 1 つを使用できます。フィードバックの収集は 1 つの方法のみをご使用ください。最良の結果を得るには、クエリを実行してから 24 時間以内にフィードバックを送信する必要があります。

トピック

- [Amazon Kendra JavaScript ライブラリを使用したフィードバックの送信](#)
- [Amazon Kendra API を使用してフィードバックを送信する](#)

Amazon Kendra JavaScript ライブラリを使用したフィードバックの送信

Amazon Kendra には、検索結果ページにクリックフィードバックを追加するために使用できる JavaScript ライブラリが用意されています。ライブラリを使用するには、検索結果を表示するスクリプトタグをクライアントコードに挿入し、結果リストの各ドキュメントリンクに情報を追加します。ユーザーがドキュメントを表示するリンクを選択すると、クリック情報が Amazon Kendra に送信されます。

ライブラリは、JavaScript バージョン ES6/ES2015 をサポートするブラウザで動作します。

ステップ 1: Amazon Kendra 検索アプリケーションにスクリプトタグを挿入する

Amazon Kendra 検索結果をレンダリングするクライアントコードで、<script> タグを挿入し、JavaScript ライブラリへの参照を追加します。

```
<script>
(function(w, d, s, c, g, n) {
  if(!w[n]) {
    w[n] = w[n] || function () {
```

```

        (w[n].q = w[n].q || []).push(arguments);
    }
    w[n].st = new Date().getTime();
    w[n].ep = g;
    var e = document.createElement(s),
        j = document.getElementsByTagName(s)[0];
    e.async = 1;
    e.src = c;
    e.type = 'module';
    j.parentNode.insertBefore(e, j);
}
})(window, document, 'script',
'library download URL',
'feedback endpoint',
'kendraFeedback');
</script>

```

このスクリプトは、Amazon Kendra ホストされた CDN から JavaScript ライブラリを非同期的にダウンロードし、オプションのパラメータを設定kendraFeedbackできる というグローバル変数を初期化します。

URL と #####を、Amazon Kendra インデックスをホストするリージョンに基づいて、次の表の識別子に置き換えます。

リージョン	URL のダウンロード	フィードバックエンドポイント
us-east-1	https://d2zm0lpns956f8.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://ujxwp5s92h.execute-api.us-east-1.amazonaws.com/prod/submit
us-east-2	https://d2crv7fufeg244.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://i6h76zwzf3.execute-api.us-east-2.amazonaws.com/prod/submit
us-west-2	https://d2iezfpnpoujy.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://wg6nim909c.execute-api.us-west-2.amazonaws.com/prod/submit

リージョン	URL のダウンロード	フィードバックエンドポイント
ca-central-1	https://d1zbfomowykaq.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://budi8txevj.execute-api.ca-central-1.amazonaws.com/prod/submit
eu-west-1	https://d3gptlxtulu4us.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://po2b11740b.execute-api.eu-west-1.amazonaws.com/prod/submit
ap-southeast-1	https://d1vvuam7g4taoe.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://9je5uw7t5l.execute-api.ap-southeast-1.amazonaws.com/prod/submit
ap-southeast-2	https://dopqntoe6z0ce.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://oovf4nvjj7.execute-api.ap-southeast-2.amazonaws.com/prod/submit
ap-south-1	https://d1ts9ouelsmk3g.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://k1abnmd43b.execute-api.ap-south-1.amazonaws.com/prod/submit
ap-northeast-1	https://d3w0ybsa293kb4.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://wg7rz0uzjh.execute-api.ap-northeast-1.amazonaws.com/prod/submit
eu-west-2	https://d1tsrujswld1d1.cloudfront.net/ksf-v1.js	https://qi7mct3x7f.execute-api.eu-west-2.amazonaws.com/prod/submit

例えば、インデックスが米国東部 (バージニア北部) の場合は、**[library download URL]** (ライブラリダウンロード URL) は <https://d2zm0lpns956f8.cloudfront.net/ksf-v1.js>、**[feedback endpoint]** (フィードバックエンドポイント) は <https://ujxwp5s92h.execute-api.us-east-1.amazonaws.com/prod/submit> になります。

Amazon Kendra JavaScript ライブラリには、次の 2 つのオプション設定を行うことができます。

- `disableCookies` – デフォルトでは、 はユーザーを一意に識別する Cookie Amazon Kendra を設定します。これを `true` に設定して、cookie を無効にします。

```
kendraFeedback('disableCookie', 'true | false');
```

`searchDivClassName` - デフォルトでは、 Amazon Kendra は検索結果ページのすべてのリンクでクリックをモニタリングします。これを `<div>` のクラス名に設定し、指定されたクラスのリンクのみをモニタリングします。

```
kendraFeedback('searchDivClassName', 'class name');
```

ステップ 2: フィードバックトークンを検索結果に追加する

結果ページで、`data-kendra-token` という HTML 属性を追加し、クエリレスポンスからのドキュメントへのリンクを含むアンカータグまたは直接の親 `div` タグに移動します。例:

```
<a href="document location" data-kendra-token="feedback token value"></a>  
OR  
<div data-url="document location" data-kendra-token="feedback token value"></div>
```

クエリレスポンスには、`feedbackToken` フィールドのトークンが含まれます。トークンは、ユーザーが選択した場合にレスポンスを一意に識別します。トークンの値を `data-kendra-token` 属性に割り当てます。JavaScript Amazon Kendra ライブラリは、ユーザーが結果を選択し、フィードバックとして Amazon Kendra エンドポイントに送信するときに、このトークンを検索します。

Amazon Kendra JavaScript ライブラリは、フィードバックトークンと、結果が選択された時刻や一意の訪問者 ID などの他のメタデータのみを送信します。

ステップ 3: フィードバックスクリプトをテストする

JavaScript ライブラリが正しく設定され、適切なエンドポイントにフィードバックを送信していることを確認するには、次の操作を行います。この例では Chrome ブラウザを使用します。

1. ブラウザでウェブデベロッパーツールを開きます。Chrome で、ブラウザの右上隅の [Chrome menu] (Chrome メニュー) を開き、[More tools] (その他のツール) を選択して [Developer tools] (デベロッパーツール) を選択します。
2. コンソールタブに Amazon Kendra JavaScript ライブラリに関連するエラーがないことを確認します。

3. 検索を行い、任意の結果を選択します。デベロッパーツールの [Network] (ネットワーク) タブを選択します。フィードバックエンドポイントに送信されたリクエスト、結果のトークン、200 OK ステータスが表示されます。

Amazon Kendra API を使用してフィードバックを送信する

Amazon Kendra API を使用してクエリフィードバックを送信するには、[SubmitFeedback](#) API を使
用します。クエリを識別するには、クエリが適用されるインデックスのインデックス ID と、クエリ
API からのレスポンスで返される[クエリ](#) ID を指定します。

以下の例は、Amazon Kendra API を使用してクリックおよび関連性のフィードバックを送信する方
法を示しています。ClickFeedbackItems および RelevanceFeedbackItems 配列を介して、複
数のフィードバックセットを送信できます。この例では、1 回のクリックと 1 つの関連性フィード
バック項目を送信します。フィードバックの送信では現在時刻が使用されます。

検索のフィードバックを送信するには (AWS SDK)

1. 次のサンプルコードは、必要な値で使えます。
 - a. index id— クエリが適用されるインデックスの ID。
 - b. query id— フィードバックを提供するクエリ。
 - c. result id— フィードバックを提供するクエリ結果の ID。クエリレスポンスには、結果 ID が含まれます。
 - d. relevance value— RELEVANT (クエリ結果が関連あり) または NOT_RELEVANT (クエリ結果が関連なし)。

Python

```
import boto3
import time

kendra = boto3.client("kendra")

# Provide the index ID
index_id = "index-id"
# Provide the query ID
query_id = "query-id"
# Provide the search result ID
```

```
result_id = "result-id"

# Configure the feedback item
feedback_item = {"ClickTime": int(time.time()),
                 "ResultId": result_id}

# Configure the relevance value
relevance_value = "RELEVANT"
relevance_item = {"RelevanceValue": relevance_value,
                  "ResultId": result_id
                  }

response = kendra.submit_feedback(
    QueryId = query_id,
    IndexId = index_id,
    ClickFeedbackItems = [feedback_item],
    RelevanceFeedbackItems = [relevance_item]
)

print("Submitted feedback for query: " + query_id)
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import java.time.Instant;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ClickFeedback;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.RelevanceFeedback;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.RelevanceType;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.SubmitFeedbackRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.SubmitFeedbackResponse;

public class SubmitFeedbackExample {
    public static void main(String[] args) {
        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();
```



```
SubmitFeedbackRequest submitFeedbackRequest = SubmitFeedbackRequest
    .builder()
    .indexId("IndexId")
    .queryId("QueryId")
    .clickFeedbackItems(
        ClickFeedback
            .builder()
            .clickTime(Instant.now())
            .resultId("ResultId")
            .build()
    )
    .relevanceFeedbackItems(
        RelevanceFeedback
            .builder()
            .relevanceValue(RelevanceType.RELEVANT)
            .resultId("ResultId")
            .build()
    )
    .build();

SubmitFeedbackResponse response =
kendra.submitFeedback(submitFeedbackRequest);

System.out.println("Feedback is submitted");
}
```

2. コードを実行します。フィードバックが送信されると、コードがメッセージを表示します。

インデックスへのカスタムシノニムの追加

カスタムシノニムをインデックスに追加するには、シソーラスファイルでシノニムを指定します。シノニム Amazon Kendra を使用して、ビジネス固有の用語や特殊な用語を に含めることができます。などの一般的な英語シノニムは leader, headに組み込まれ Amazon Kendra ており、ハイフンを使用する一般的なシノニムを含むシソーラスファイルに含めることはできません。Amazon Kendra は、レスポンスタイプや QUESTION_ANSWERまたは DOCUMENTレスポンスタイプを含むすべてのANSWERレスポンスタイプのシノニムをサポートしています。Amazon Kendra 現在、 はストップワードとしてフラグが付けられたシノニムの追加をサポートしていません。これは、将来のリリースに組み込まれます。

Amazon Kendra はシノニム間の相関を行います。例えば、シノニムペア を使用するとDynamo, Amazon DynamoDB、 は Dynamo を と Amazon Kendra 関連付けます Amazon DynamoDB。「What is dynamo?」というクエリは、 は、「What is Amazon DynamoDB?」などのドキュメントを返します。シノニムを使用すると、 は相関関係をより簡単に取得 Amazon Kendra できます。

シソーラスファイルは、 Amazon S3 バケットに保存されているテキストファイルです。「[シソーラスをインデックスに追加する](#)」を参照してください。

シソーラスファイルは [Solr シノニム形式](#)を使用します。Amazon Kendra には、インデックスあたりのシソーラスの数に制限があります。[クォータ](#)を参照してください。

シノニムは、次のシナリオで役立ちます。

- 例えば、NLP, Natural Language Processing など、従来の英語のシノニムではない専門用語。
- 複雑な意味的関連を持つ固有名詞。例えば、機械学習では、cost, loss, model performance など、これらは一般の人が理解しにくい名詞です。
- 例えば、Elastic Compute Cloud, EC2 などの異なる形式の製品名。
- 製品名など、ドメイン固有またはビジネス固有の用語。例えば、Route53, DNS と指定します。

次のシナリオではシノニムを使用しないでください。

- leader, head など、一般的な英語のシノニム。これらのシノニムはドメイン固有ではなく、これらのシナリオでシノニムを使用すると、意図しない効果が生じる可能性があります。
- teh => the などの誤字。

- 名詞の複数形や所有格、形容詞の比較形および最上級形、動詞の過去形、過去分詞形、進行形のよ
うな形態学的変種。比較形容詞と最上級形容詞の一例は、good, better, best です。
- WHO などのユニグラム (1 単語) ストップワード。ユニグラムストップワードはシソーラスでは
許可されず、検索から除外されます。例えば、WHO => World Health Organization は拒
否されます。W.H.O. をシノニム用語として使用できますが、ストップワードをマルチワードシ
ノニムの一部として使うことができます。例えば、of は許可されますが、United States of
America は許可されません。

カスタムシノニムを使用すると、ビジネス固有のシノニムをカバーするようにクエリを拡張すること
で、ビジネス固有の用語の Amazon Kendra 理解を簡単に改善できます。シノニムは検索の精度を向
上させることができますが、シノニムがレイテンシーにどのように影響するかを理解して最適化する
ことが重要です。

シノニムの一般的なルールは、クエリ内のシノニムと一致して拡張される用語が多いほど、レイテ
ンシーへの影響が大きくなります。レイテンシーに影響するその他の要因には、インデックス作成
されたドキュメントの平均サイズ、インデックスのサイズ、検索結果のフィルタリング、Amazon
Kendra インデックスの全体的な負荷などがあります。シノニムと一致しないクエリは影響を受けま
せん。

シノニムがレイテンシーにどのように影響するかに関する一般的なガイドライン:

ユースケース	レイテンシーの増加*
一般的な自然言語またはキーワードクエリ (そ れぞれ 3~5 語)	15% 未満
1 つのクエリ用語が 3 つのシノニムに展開され ます	
約 50 万件のドキュメント (ドキュメントごと に抽出されたテキストの平均は 10.48 KB) また は 30,000 のよくある質問/質問ペアのインデッ クス	

*パフォーマンスは、インデックスでのシノニムと構成の特定の使用方法によって異なります。検索
のパフォーマンスをテストして、特定のユースケースに対してより正確なベンチマークを取得するこ
とをお勧めします。

シソーラスが大きく、用語の拡張率が高く、レイテンシーの増加が許容範囲内でない場合は、次のいずれかまたは両方を試してください。

- シソーラスをトリミングして、拡張率 (用語ごとのシノニム数) を減らします。
- 用語の全体的な範囲 (シソーラスの行数) をトリミングします。

または、プロビジョニングキャパシティ (仮想ストレージユニット) を増やして、レイテンシーの増加を相殺することもできます。

トピック

- [シソーラスファイルの作成](#)
- [シソーラスをインデックスに追加する](#)
- [シソーラスを更新する](#)
- [シソーラスを削除する](#)
- [検索結果の強調表示](#)

シソーラスファイルの作成

Amazon Kendra シソーラスファイルは、Solr シノニムリスト形式のシノニムのリストを含む UTF-8-encodedされたファイルです。シソーラスファイルは 5 MB 未満である必要があります。

シノニムのマッピングを指定するには、2 つの方法があります。

- 双方向シノニムは、用語をカンマで区切ったリストとして指定します。ユーザーがいずれかの用語を検索する場合、リスト内のすべての用語がドキュメント検索に使用されます。これには、クエリされた元の用語も含まれます。
- 単方向シノニムは、用語をシノニムにマッピングするために、「=>」で区切られた用語として指定されます。記号「=>」の左側にある用語をユーザーが検索すると、その用語は右側の用語にマップされ、シノニムを使用しているドキュメントを検索します。その逆はマッピングされないため、単方向になります。

シノニム自体では大文字と小文字が区別されますが、マップ先の用語では大文字と小文字は区別されません。例えば ML => Machine Learning の場合、ユーザーが「ML」や「ml」を検索したり、大文字小文字のその他の組み合わせを使用したりすると、「Machine Learning」にマッピングされま

す。逆に、Machine Learning => ML をマッピングすると、「Machine Learning」や「machine learning」、およびその他に組み合わせが、「ML」にマッピングされます。

シノニムは特殊文字の完全一致を検索しません。たとえば、dead-letter-queue」を検索すると、は「dead letter queue」に一致するドキュメントを返す Amazon Kendra ことができます (ハイフンなし)。ドキュメントにdead-letter-queue」などのハイフンが含まれている場合、は検索中にドキュメント Amazon Kendra を処理してハイフンを削除します。に組み込まれており、シソーラスファイルに含める Amazon Kendra べきではない一般的な英語シノニム用語の場合、は用語のハイフンバージョンと非ハイフンバージョンの両方を検索 Amazon Kendra できます。例えば、「サードパーティー」と「サードパーティー」を検索すると、はそれらの用語のいずれかのバージョンに一致するドキュメント Amazon Kendra を返します。

ストップワードまたは一般的に使用される単語を含むシノニムの場合、はストップワードを含む語句に一致するドキュメント Amazon Kendra を返します。たとえば、シノニムルールを作成して、「オンボーディング」と「オンボーディング」をマッピングできます。シノニムにストップワードを単独で使用することはできません。例えば、「on」を検索すると、Amazon Kendra 「on」を含むすべてのドキュメントを返すことはできません。

一部のシノニムルールは無視されます。例えば、a => bはルールですが、a => aは無視され、ルールとしてカウントされません。

用語数は、シソーラスファイル内の一意の用語の数です。以下のサンプルファイルには、AWS CodeStar、、ML、ASG、Machine Learning autoscaling groupなどの用語が含まれています。

シソーラスあたりのシノニムルールの最大数と用語あたりのシノニムの最大数があります。詳細については、「[のクォータ Amazon Kendra](#)」を参照してください。

次の例は、シノニムルールを含むシソーラスファイルを示しています。各行には 1 つのシノニムルールが含まれています。空白行とコメントは無視されます。

```
# Lines starting with pound are comments and blank lines are ignored.

# Synonym relationships can be defined as unidirectional or bidirectional
relationships.

# Unidirection relationships are represented by any term sequence
# on the left hand side (LHS) of "=>" followed by synonyms on the right hand side (RHS)
CodeStar => AWS CodeStar
# This will map CodeStar to AWS CodeStar, but not vice-versa
```

```
# To map terms vice versa
ML => Machine Learning
Machine Learning => ML

# Multiple synonym relationships may be defined in one line as well by comma
seperation.
autoscaling group, ASG => Auto Scaling group, autoscaling
# The above is equivalent to:
# autoscaling group => Auto Scaling group, autoscaling
# ASG => Auto Scaling group, autoscaling

# Bi-directional synonyms are comma separated terms with no ">="
DNS, Route53, Route 53
# DNS, Route53, and Route 53 map to one another and are interchangeable at match time
# The above is equivalent to:
# DNS => Route53, Route 53
# Route53 => DNS, Route 53
# Route 53 => DNS, Route53

# Overlapping LHS terms will be merged
Beta => Alpha
Beta => Gamma
Beta, Delta
# is equivalent to:
# Beta => Alpha, Gamma, Delta
# Delta => Beta

# Each line contains a single synonym rule.
# Synonym rule count is the total number of lines defining synonym relationships
# Term count is the total number of unique terms for all rules.
# Comments and blanks lines do not count.
```

シソーラスをインデックスに追加する

以下の手順は、シノニムを含むシソーラスファイルをインデックスに追加する方法を示しています。更新されたシソーラスファイルの効果を確認するのに最大 30 分かかる場合があります。シソーラスファイルの詳細については、[シソーラスファイルの作成](#) を参照してください。

Console

シソーラスを追加するには

1. 左側のナビゲーションペインで、シノニムのリスト、シソーラスを追加するインデックスで、[Synonyms] (シノニム) を選択します。
2. [Synonym] (シノニム) ページで、[Add Thesaurus] (シソーラスを追加) を選択します。
3. [Define thesaurus] (シソーラスを定義) で、シソーラスに名前とオプションの説明を付けます。
4. シソーラス設定で、シソーラスファイルへの Amazon S3 パスを指定します。ファイルは 5 MB より小さくなければなりません。
5. IAM ロールでは、ロールを選択するか、新しいロールの作成 を選択し、ロール名を指定して新しいロールを作成します。は、このロール Amazon Kendra を使用してユーザーに代わって Amazon S3 リソースにアクセスします。IAM ロールには、プレフィックス「AmazonKendra-」があります。
6. [Save] (保存) をクリックして設定を保存し、シソーラスを追加します。シソーラスが取り込まれると、そのシソーラスがアクティブになり、結果でシノニムが強調表示されます。シソーラスファイルの効果を確認するのに最大 30 分かかる場合があります。

CLI

を使用してインデックスにシサラスを追加するには AWS CLI、 を呼び出します `create-thesaurus`。

```
aws kendra create-thesaurus \
--index-id index-id \
--name "thesaurus-name" \
--description "thesaurus-description" \
--source-s3-path "Bucket=bucket-name,Key=thesaurus/synonyms.txt" \
--role-arn role-arn
```

`list-thesauri` を呼び出してシソーラスのリストを表示します。

```
aws kendra list-thesauri \
--index-id index-id
```

シソーラスの詳細を表示するには、`describe-thesaurus` を呼び出します。

```
aws kendra describe-thesaurus \  
--index-id index-id \  
--index-id thesaurus-id
```

シソーラスファイルの効果を確認するのに最大 30 分かかる場合があります。

Python

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
import pprint  
import time  
  
kendra = boto3.client("kendra")  
  
print("Create a thesaurus")  
  
thesaurus_name = "thesaurus-name"  
thesaurus_description = "thesaurus-description"  
thesaurus_role_arn = "role-arn"  
  
index_id = "index-id"  
  
s3_bucket_name = "bucket-name"  
s3_key = "thesaurus-file"  
source_s3_path= {  
    'Bucket': s3_bucket_name,  
    'Key': s3_key  
}  
  
try:  
    thesaurus_response = kendra.create_thesaurus(  
        Description = thesaurus_description,  
        Name = thesaurus_name,  
        RoleArn = thesaurus_role_arn,  
        IndexId = index_id,  
        SourceS3Path = source_s3_path  
    )  
  
    pprint.pprint(thesaurus_response)  
  
    thesaurus_id = thesaurus_response["Id"]
```



```
print("Wait for Kendra to create the thesaurus.")

while True:
    # Get thesaurus description
    thesaurus_description = kendra.describe_thesaurus(
        Id = thesaurus_id,
        IndexId = index_id
    )
    # If status is not CREATING quit
    status = thesaurus_description["Status"]
    print("Creating thesaurus. Status: " + status)
    if status != "CREATING":
        break
    time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateThesaurusRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.CreateThesaurusResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeThesaurusRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeThesaurusResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3Path;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ThesaurusStatus;

public class CreateThesaurusExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {

        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String thesaurusName = "thesaurus-name";
        String thesaurusDescription = "thesaurus-description";
        String thesaurusRoleArn = "role-arn";

        String s3BucketName = "bucket-name";
```

```
String s3Key = "thesaurus-file";
String indexId = "index-id";

System.out.println(String.format("Creating a thesaurus named %s",
thesaurusName));
CreateThesaurusRequest createThesaurusRequest = CreateThesaurusRequest
    .builder()
    .name(thesaurusName)
    .indexId(indexId)
    .description(thesaurusDescription)
    .roleArn(thesaurusRoleArn)
    .sourceS3Path(S3Path.builder()
        .bucket(s3BucketName)
        .key(s3Key)
        .build())
    .build();
CreateThesaurusResponse createThesaurusResponse =
kendra.createThesaurus(createThesaurusRequest);
System.out.println(String.format("Thesaurus response %s",
createThesaurusResponse));

String thesaurusId = createThesaurusResponse.id();

System.out.println(String.format("Waiting until the thesaurus with ID %s is
created.", thesaurusId));

while (true) {
    DescribeThesaurusRequest describeThesaurusRequest =
DescribeThesaurusRequest.builder()
    .id(thesaurusId)
    .indexId(indexId)
    .build();
    DescribeThesaurusResponse describeThesaurusResponse =
kendra.describeThesaurus(describeThesaurusRequest);
    ThesaurusStatus status = describeThesaurusResponse.status();
    if (status != ThesaurusStatus.CREATING) {
        break;
    }

    TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
}

System.out.println("Thesaurus creation is complete.");
}
```

```
}
```

シソーラスを更新する

シソーラスの作成後に設定を変更することができます。シソーラス名や IAM 情報などの詳細を変更できます。シソーラスファイル Amazon S3 パスの場所を変更することもできます。シソーラスファイルへのパスを変更すると、Amazon Kendra は既存のシソーラスを、更新されたパスで指定されたシソーラスに置き換えます。

更新されたシソーラスファイルの効果を確認するのに最大 30 分かかる場合があります。

Note

シソーラスファイルに検証エラーまたは構文エラーがある場合、以前にアップロードされたシソーラスファイルは保持されます。

以下の手順は、シソーラスの詳細を変更する方法を示しています。

Console

シソーラスの詳細を変更するには

1. 左側のナビゲーションペインの変更するインデックスで、[Synonyms] (シノニム) を選択します。
2. [Synonym] (シノニム) ページで、変更するシソーラスを選択し、[Edit] (編集) を選択します。
3. [Update thesaurus] (シソーラスを更新) ページで、シソーラスの詳細を更新します。
4. (オプション) シソーラスファイルパスを変更を選択し、新しいシソーラスファイルへの Amazon S3 パスを指定します。既存のシソーラスファイルは、指定したファイルに置き換えられます。パスを変更しない場合、は既存のパスからシソーラス Amazon Kendra を再ロードします。

現在のシソーラスファイルを保持を選択した場合、Amazon Kendra はシソーラスファイルを再ロードしません。

5. [Save] (保存) を選択して設定を保存します。

既存のシソーラスパスからシソーラスをリロードすることもできます。

既存のパスからシソーラスをリロードするには

1. 左側のナビゲーションペインの変更するインデックスで、[Synonyms] (シノニム) を選択します。
2. [シノニム] ページで、リロードするシソーラスを選択し、[更新] を選択します。
3. [シソーラスファイルのリロード] ページで、シソーラスファイルを更新することを確認します。

CLI

シソーラスを更新するには、`update-thesaurus` を呼び出します。

```
aws kendra update-thesaurus \
--index-id index-id \
--name "thesaurus-name" \
--description "thesaurus-description" \
--source-s3-path "Bucket=bucket-name,Key=thesaurus/synonyms.txt" \
--role-arn role-arn
```

Python

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra = boto3.client("kendra")

print("Update a thesaurus")

thesaurus_name = "thesaurus-name"
thesaurus_description = "thesaurus-description"
thesaurus_role_arn = "role-arn"

thesaurus_id = "thesaurus-id"
index_id = "index-id"

s3_bucket_name = "bucket-name"
s3_key = "thesaurus-file"
source_s3_path= {
    'Bucket': s3_bucket_name,
```

```
'Key': s3_key
}

try:
    kendra.update_thesaurus(
        Id = thesaurus_id,
        IndexId = index_id,
        Description = thesaurus_description,
        Name = thesaurus_name,
        RoleArn = thesaurus_role_arn,
        SourceS3Path = source_s3_path
    )

    print("Wait for Kendra to update the thesaurus.")

    while True:
        # Get thesaurus description
        thesaurus_description = kendra.describe_thesaurus(
            Id = thesaurus_id,
            IndexId = index_id
        )
        # If status is not UPDATING quit
        status = thesaurus_description["Status"]
        print("Updating thesaurus. Status: " + status)
        if status != "UPDATING":
            break
        time.sleep(60)

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.UpdateThesaurusRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeThesaurusRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DescribeThesaurusResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.S3Path;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.ThesaurusStatus;
```

```
public class UpdateThesaurusExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {

        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String thesaurusName = "thesaurus-name";
        String thesaurusDescription = "thesaurus-description";
        String thesaurusRoleArn = "role-arn";

        String s3BucketName = "bucket-name";
        String s3Key = "thesaurus-file";

        String thesaurusId = "thesaurus-id";
        String indexId = "index-id";

        UpdateThesaurusRequest updateThesaurusRequest = UpdateThesaurusRequest
            .builder()
            .id(thesaurusId)
            .indexId(indexId)
            .name(thesaurusName)
            .description(thesaurusDescription)
            .roleArn(thesaurusRoleArn)
            .sourceS3Path(S3Path.builder()
                .bucket(s3BucketName)
                .key(s3Key)
                .build())
            .build();
        kendra.updateThesaurus(updateThesaurusRequest);

        System.out.println(String.format("Waiting until the thesaurus with ID %s is
        updated.", thesaurusId));

        // a new source s3 path requires re-consumption by Kendra
        // and so can take as long as a Create Thesaurus operation
        while (true) {
            DescribeThesaurusRequest describeThesaurusRequest =
            DescribeThesaurusRequest.builder()
                .id(thesaurusId)
                .indexId(indexId)
                .build();
            DescribeThesaurusResponse describeThesaurusResponse =
            kendra.describeThesaurus(describeThesaurusRequest);
```

```
ThesaurusStatus status = describeThesaurusResponse.status();
if (status != ThesaurusStatus.UPDATING) {
    break;
}

TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
}

System.out.println("Thesaurus update is complete.");
}
}
```

シソーラスを削除する

以下の手順は、シソーラスを削除する方法を示しています。

Console

1. 左側のナビゲーションペインの変更するインデックスで、[Synonyms] (シノニム) を選択します。
2. [Synonym] (シノニム) ページで、削除するシソーラスを選択します。
3. [Thesaurus detail] (シソーラスの詳細) ページで、[Delete] (削除) を選択し、削除を確認します。

CLI

を使用してインデックスのサラスを削除するには AWS CLI、 を呼び出します `delete-thesaurus`。

```
aws kendra delete-thesaurus \
--index-id index-id \
--id thesaurus-id
```

Python

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError

kendra = boto3.client("kendra")
```

```
print("Delete a thesaurus")

thesaurus_id = "thesaurus-id"
index_id = "index-id"

try:
    kendra.delete_thesaurus(
        Id = thesaurus_id,
        IndexId = index_id
    )

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

```
package com.amazonaws.kendra;

import software.amazon.awssdk.services.kendra.KendraClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendra.model.DeleteThesaurusRequest;

public class DeleteThesaurusExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {

        KendraClient kendra = KendraClient.builder().build();

        String thesaurusId = "thesaurus-id";
        String indexId = "index-id";

        DeleteThesaurusRequest updateThesaurusRequest = DeleteThesaurusRequest
            .builder()
            .id(thesaurusId)
            .indexId(indexId)
            .build();
        kendra.deleteThesaurus(updateThesaurusRequest);
    }
}
```


検索結果の強調表示

シノニムの強調表示はデフォルトでオンになっています。ハイライト情報は Amazon Kendra SDK および CLI クエリ結果に含まれています。SDK または CLI Amazon Kendra を使用して を操作する場合は、結果の表示方法を決定します。

シノニム強調表示には強調表示タイプ `THESAURUS_SYNONYM` があります。ハイライトの詳細については、「[Highlight](#)」オブジェクトを参照してください。

チュートリアル: Amazon Kendra を使用したメタデータに富んだインテリジェントな検索ソリューションの構築

このチュートリアルでは、[Amazon Kendra](#)、[Amazon Comprehend](#)、[Amazon Simple Storage Service\(S3\)](#)、[AWS CloudShell](#) を使用して、エンタープライズデータ向けのメタデータに富んだ自然言語ベースのインテリジェント検索ソリューションを構築する方法を説明します。

Amazon Kendra は、非構造化自然言語データリポジトリの検索インデックスを構築できるインテリジェントな検索サービスです。お客様が関連する回答を簡単に検索してフィルタリングできるようにするには、Amazon Comprehend を使用してデータからメタデータを抽出し、Amazon Kendra 検索インデックスに取り込みます。

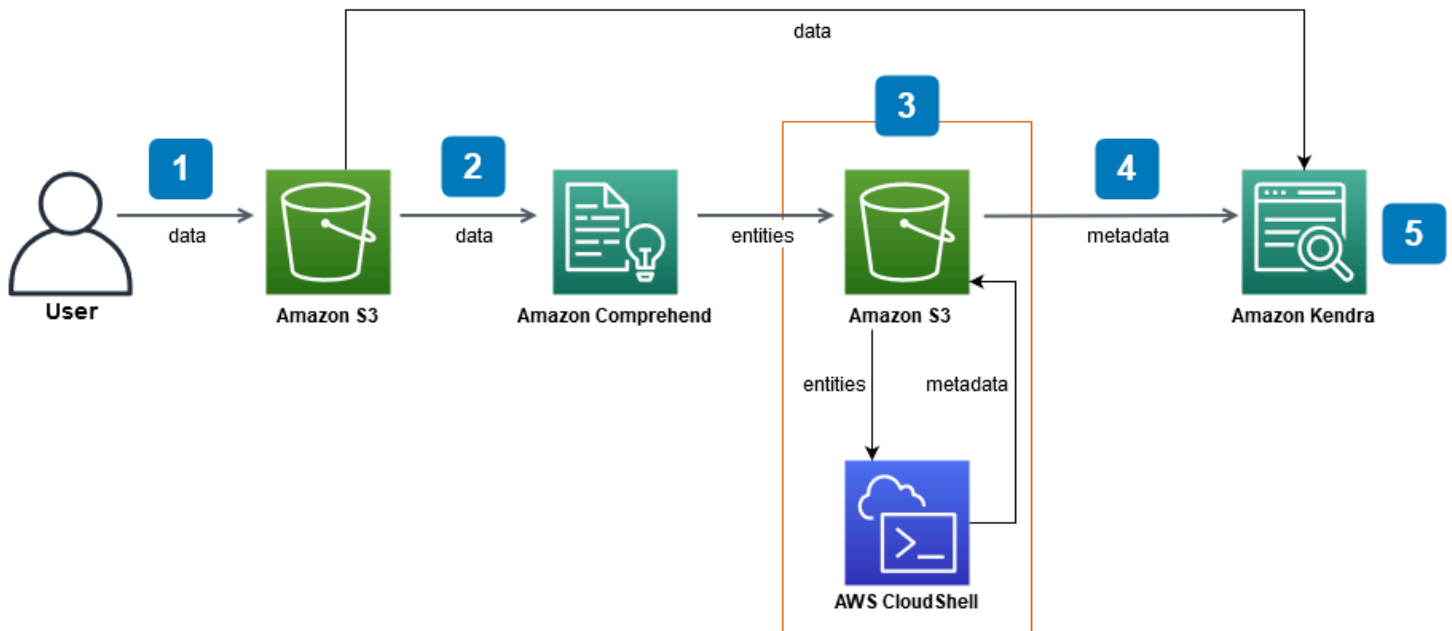
Amazon Comprehend は、エンティティを識別できる自然言語処理 (NLP) サービスです。エンティティは、データ内の人、場所、位置、組織、およびオブジェクトのリファレンスです。

このチュートリアルでは、ニュース記事のサンプルデータセットを使用して、エンティティを抽出し、メタデータに変換し、Amazon Kendra インデックスに取り込んで検索を実行します。追加されたメタデータを使用すると、これらのエンティティのサブセットを使用して検索結果をフィルタリングでき、検索の精度が向上します。このチュートリアルに従うことで、専門的な機械学習知識がなくても、エンタープライズデータの検索ソリューションを作成する方法を学習します。

このチュートリアルでは、以下のステップで検索ソリューションを構築する方法を示します。

1. Amazon S3 にニュース記事のサンプルデータセットを保存する。
2. Amazon Comprehend を使用してデータからエンティティを抽出します。
3. Python 3 スクリプトを実行してエンティティを Amazon Kendra インデックスメタデータ形式に変換し、このメタデータを S3 に保存します。
4. Amazon Kendra 検索インデックスを作成し、データとメタデータを取り込みます。
5. 検索インデックスのクエリ。

以下の図に、このワークフローを示しています。



このチュートリアルを完了する予定時間: 1 時間

推定コスト：このチュートリアルの一部のアクションでは、AWS アカウントに料金が発生します。各サービスのコストの詳細については、[Amazon S3](#)、[Amazon Comprehend](#)、[AWS CloudShell](#)、および [Amazon Kendra](#) の料金ページを参照してください。

トピック

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: Amazon S3 にドキュメントを追加する](#)
- [ステップ 2: Amazon Comprehend でエンティティ分析ジョブを実行する](#)
- [ステップ 3: エンティティ分析出力を Amazon Kendra メタデータとして書式設定する](#)
- [ステップ 4: Amazon Kendra インデックスを作成し、メタデータを取り込む](#)
- [ステップ 5: Amazon Kendra インデックスをクエリする](#)
- [ステップ 6: クリーンアップする](#)

前提条件

このチュートリアルを完了するには、以下のリソースが必要です。

- AWS アカウント。AWS アカウントがない場合は、[「Amazon Kendra のセットアップ」](#) の手順に従って AWS アカウントを設定します。

- AWS コマネジメントコンソールにアクセスするための、Windows、macOS、および Linux を実行している開発用コンピュータ。詳細については、「[AWS マネジメントコンソールの設定](#)」を参照してください。
- [AWS Identity and Access Management](#) (IAM) ユーザー。アカウントの IAM ユーザーとグループをセットアップする方法については、IAM ユーザーガイドの[開始方法](#)セクションを参照してください。

を使用している場合は AWS Command Line Interface、次のポリシーを IAM ユーザーにアタッチして、このチュートリアルを完了するために必要な基本的なアクセス許可を付与する必要があります。

詳細については、[IAM ポリシーの作成](#)および[IAM アイデンティティアクセス許可の追加と削除](#)を参照してください。

- [AWS リージョンサービスリスト](#)。レイテンシーを減らすには、Amazon Comprehend と Amazon Kendra の両方でサポートされている地理的な場所に最も近い AWS リージョンを選択する必要があります。
- (オプション) [AWS Key Management Service](#)。このチュートリアルでは暗号化を使用しませんが、特定のユースケースで暗号化のベストプラクティスを使用することをお勧めします。
- (オプション) [Amazon Virtual Private Cloud](#)。このチュートリアルでは VPC を使用しませんが、VPC のベストプラクティスを使用して特定のユースケースでデータセキュリティを確保することをお勧めします。

ステップ 1: Amazon S3 にドキュメントを追加する

データセットで Amazon Comprehend エンティティ分析ジョブを実行する前に、データ、メタデータ、および Amazon Comprehend エンティティ分析出力をホストする Amazon S3 バケットを作成します。

トピック

- [サンプルデータセットをダウンロードする](#)
- [Amazon S3 バケットの作成](#)
- [S3 バケットにデータフォルダとメタデータフォルダを作成する](#)
- [入力データをアップロードする](#)

サンプルデータセットをダウンロードする

Amazon Comprehend がデータに対してエンティティ分析ジョブを実行できるようにするには、データセットをダウンロードして抽出し、S3 バケットにアップロードする必要があります。

データセットをダウンロードして抽出するには (コンソール)

1. デバイス上の [tutorial-dataset.zip](#) フォルダをダウンロードします。
2. tutorial-dataset フォルダを抽出して data フォルダにアクセスします。

データセットをダウンロードして抽出するには (チュートリアル)

1. tutorial-dataset をダウンロードするには、ターミナルウィンドウを開き、以下のコマンドを実行します。

Linux

```
curl -o path/tutorial-dataset.zip https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/samples/tutorial-dataset.zip
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path*/ は、zip フォルダを保存する場所のローカルファイルパスです。

macOS

```
curl -o path/tutorial-dataset.zip https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/samples/tutorial-dataset.zip
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path*/ は、zip フォルダを保存する場所のローカルファイルパスです。

Windows

```
curl -o path/tutorial-dataset.zip https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/samples/tutorial-dataset.zip
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、zip フォルダを保存する場所のローカルファイルパスです。

2. zip フォルダからデータを抽出するには、ターミナルウィンドウで次のコマンドを実行します。

Linux

```
unzip path/tutorial-dataset.zip -d path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した zip フォルダへのローカルファイルパスです。

macOS

```
unzip path/tutorial-dataset.zip -d path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した zip フォルダへのローカルファイルパスです。

Windows

```
tar -xf path/tutorial-dataset.zip -C path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した zip フォルダへのローカルファイルパスです。

このステップを完了すると、抽出されたファイルが `tutorial-dataset` という解凍したフォルダにあるはずです。このフォルダには、Apache 2.0 オープンソースのアトリビューションのある README ファイルと、このチュートリアルデータセットが含まれている `data` というフォルダがあります。データセットは `.story` 拡張子のある 100 個のファイルで構成されます。

Amazon S3 バケットの作成

サンプルデータフォルダをダウンロードして抽出したら、Amazon S3 バケットに保存します。

 Important

Amazon S3 バケットの名前はすべての AWS 全体で一意的である必要があります。

S3 バケットを作成するには (コンソール)

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/s3/> で Amazon S3 コンソールを開きます。
2. [Buckets] (バケット) で、[Create bucket] (バケットの作成) を選択します。
3. [Bucket name] (バケット名) に、一意の名前を入力します。
4. リージョン で、バケットを作成する AWS リージョンを選択します。

 Note

Amazon Comprehend と Amazon Kendra の両方をサポートするリージョンを選択する必要があります。作成後にバケットのリージョンを変更することはできません。

5. [Block Public Access settings for this bucket] (このバケットのパブリックアクセス設定をブロックする)、[Bucket Versioning] (バケットバージョニング)、および [Tags] (タグ) はデフォルト設定のままにしておきます。
6. [Default encryption] (デフォルトの暗号化) には、[Disable] (無効) を選択します。
7. [Advanced settings] (詳細設定) はデフォルト設定のままにしておきます。
8. バケットの設定を確認して、[Create bucket] (バケットの作成) を選択します。

S3 バケットを作成するには (AWS CLI)

1. S3 バケットを作成するには、AWS CLI で [\[create-bucket\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3api create-bucket \
    --bucket amzn-s3-demo-bucket \
    --region aws-region \
    --create-bucket-configuration LocationConstraint=aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `amzn-s3-demo-bucket` はバケット名です。
- `aws-region` は、バケットを作成するリージョンです。

macOS

```
aws s3api create-bucket \  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket \  
    --region aws-region \  
    --create-bucket-configuration LocationConstraint=aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `amzn-s3-demo-bucket` はバケット名です。
- `aws-region` は、バケットを作成するリージョンです。

Windows

```
aws s3api create-bucket ^  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket ^  
    --region aws-region ^  
    --create-bucket-configuration LocationConstraint=aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `amzn-s3-demo-bucket` はバケット名です。
- `aws-region` は、バケットを作成するリージョンです。

Note

Amazon Comprehend と Amazon Kendra の両方をサポートするリージョンを選択する必要があります。作成後にバケットのリージョンを変更することはできません。

2. バケットが正常に作成されたことを確認するには、[\[list\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3 ls
```

macOS

```
aws s3 ls
```

Windows

```
aws s3 ls
```

S3 バケットにデータフォルダとメタデータフォルダを作成する

S3 バケットを作成した後、その中のフォルダにデータフォルダとメタデータフォルダを作成します。

S3 バケットにフォルダーを作成するには (コンソール)

1. Amazon S3 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/s3/>) を開きます。
2. [Buckets] (バケット) で、バケットのリストからバケットの名前をクリックします。
3. [Objects] (オブジェクト) タブから、[Create folder] (フォルダの作成) を選択します。
4. 新しいフォルダ名に、**data** を入力します。
5. 暗号化設定については、[Disable] (無効) を選択します。
6. [Create folder] (フォルダの作成) を選択します。
7. ステップ 3 から 6 を繰り返して Amazon Kendra メタデータを保存する別のフォルダーを作成し、ステップ 4 **metadata** で作成したフォルダに名前を付けます。

S3 バケットにフォルダを作成するには (AWS CLI)

1. S3 バケットで data フォルダを作成するには、AWS CLIで [\[put-object\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3api put-object \
```

```
--bucket amzn-s3-demo-bucket \  
--key data/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

macOS

```
aws s3api put-object \  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket \  
    --key data/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

Windows

```
aws s3api put-object ^  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket ^  
    --key data/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

2. S3 バケットで metadata フォルダを作成するには、AWS CLIで [\[put-object\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3api put-object \  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket \  
    --key metadata/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

macOS

```
aws s3api put-object \  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket \  
    --key metadata/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

Windows

```
aws s3api put-object ^  
    --bucket amzn-s3-demo-bucket ^  
    --key metadata/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

3. フォルダが正常に作成されたことを確認するには、[ls](#) コマンドを使用してバケットの内容をチェックします。

Linux

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

macOS

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

Windows

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket はバケット名です。

入力データをアップロードする

データフォルダとメタデータフォルダを作成したら、サンプルデータセットを data フォルダにアップロードします。

サンプルデータセットをデータフォルダにアップロードするには (コンソール)

1. Amazon S3 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/s3/>) を開きます。
2. [Buckets] (バケット) で、バケットのリストからバケットの名前、data の順にクリックします。
3. [Upload] (アップロード)、[Add files] (ファイルの追加) の順に選択します。
4. ダイアログボックスで、ローカルデバイスの tutorial-dataset フォルダ内の data フォルダで、すべてのファイルを選択し、[Open] (開く) をクリックします。
5. [Destination] (送信先)、[Permissions] (アクセス許可)、および [Properties] (プロパティ) はデフォルト設定のままにしておきます。
6. [Upload] (アップロード) を選択します。

サンプルデータセットをデータフォルダにアップロードするには (AWS CLI)

1. サンプルデータを data フォルダにアップロードするには、AWS CLIで [\[copy\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3 cp path/tutorial-dataset/data s3://amzn-s3-demo-bucket/data/ --recursive
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、デバイス上の `tutorial-dataset` フォルダへのファイルパス、
- `amzn-s3-demo-bucket` はバケット名です。

macOS

```
aws s3 cp path/tutorial-dataset/data s3://amzn-s3-demo-bucket/data/ --recursive
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、デバイス上の `tutorial-dataset` フォルダへのファイルパス、
- `amzn-s3-demo-bucket` はバケット名です。

Windows

```
aws s3 cp path/tutorial-dataset/data s3://amzn-s3-demo-bucket/data/ --recursive
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、デバイス上の `tutorial-dataset` フォルダへのファイルパス、
- `amzn-s3-demo-bucket` はバケット名です。

2. データセットファイルが `data` フォルダに正常にアップロードされたことを確認する場合は、AWS CLIで [\[list\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/data/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `amzn-s3-demo-bucket` は S3 バケットの名前です。

macOS

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/data/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

Windows

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/data/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

このステップを完了すると、data フォルダに S3 バケットのデータセットが保存され、metadata フォルダが空になります。このフォルダは Amazon Kendra メタデータを保存します。

ステップ 2: Amazon Comprehend でエンティティ分析ジョブを実行する

S3 バケットにサンプルデータセットを保存した後、Amazon Comprehend エンティティ分析ジョブを実行して、ドキュメントからエンティティを抽出します。これらのエンティティは Amazon Kendra カスタム属性を形成し、インデックスの検索結果をフィルタリングするのに役立ちます。詳細については、[エンティティの検出](#)を参照してください。

トピック

- [Amazon Comprehend でエンティティ分析ジョブを実行する](#)

Amazon Comprehend でエンティティ分析ジョブを実行する

データセットからエンティティを抽出するには、Amazon Comprehend エンティティ分析ジョブを実行します。

このステップで AWS CLI を使用している場合は、まず Amazon Comprehend の AWS IAM ロールとポリシーを作成してアタッチし、エンティティ分析ジョブを実行します。サンプルデータでエンティティ分析ジョブを実行するには、Amazon Comprehend は次のものがが必要です。

- 信頼されたエンティティとして認識する AWS Identity and Access Management (IAM) ロール
- S3 AWS バケットへのアクセス許可を付与する IAM ロールにアタッチされた IAM ポリシー

詳細については、「[How Amazon Comprehend works with IAM](#)」および「[Identity-based policy examples for Amazon Comprehend](#)」を参照してください。

Amazon Comprehend エンティティ分析ジョブを実行するには (コンソール)

1. Amazon Comprehend コンソール (<https://console.aws.amazon.com/comprehend/>) を開きます。

 Important

Amazon S3 バケットを作成したリージョンと同じリージョンに存在することを確認します。別のリージョンにいる場合は、上部のナビゲーションバーの AWS リージョンセレクトから S3 バケットを作成したリージョンを選択します。

2. [Launch Amazon Comprehend] (Amazon Comprehend の起動) を選択します。
3. 左側のナビゲーションペインで、[Analysis jobs] (分析ジョブ) を選択します。
4. [Create job] (ジョブの作成) を選択します。
5. [Job settings] (ジョブの設定) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [Name] (名前) に **data-entities-analysis** と入力します。
 - b. [Analysis type] (分析タイプ) で、[Entities] (エンティティ) を選択します。
 - c. [Language] (言語) で、[English] (英語) を選択します。
 - d. [Job encryption] (ジョブの暗号化) は無効のままにしておきます。
6. [Input data] (入力データ) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [Data source] (データソース) で、[My documents] (マイドキュメント) を選択します。
 - b. [S3 location] (S3 の場所) で、[Browse S3] (S3 を閲覧する) を選択します。
 - c. [Choose resources] (リソースの選択) については、バケットのリストからバケットの名前をクリックします。
 - d. [Objects] (オブジェクト) で、data のオプションボタンを選択し、[Choose] (選択) をクリックします。
 - e. [Input format] (入力形式) で、[One document per file] (ファイルあたり 1 つのドキュメント) を選択します。

7. [Output data] (出力データ) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [S3 location] (S3 の場所) で、[Browse S3] (S3 を閲覧する)、バケットのリストからバケットのオプションボックスの順に選択し、[Choose] (選択) をクリックします。
 - b. [Encryption] (暗号化) は無効のままにしておきます。
8. [Access permissions] (アクセス許可) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [IAM role] (IAM ロール) で、[Create an IAM role] (IAM ロールの選択) を選択します。
 - b. [Permissions to access] (アクセスの許可) で、[Input and Output S3 buckets] (S3 バケットの入力と出力) を選択します。
 - c. [Name suffix] (サフィックスに名前を付ける) で、**comprehend-role** と入力します。このロールは、Amazon S3 バケットへのアクセスを提供します。
9. [VPC settings] (VPC 設定) は、デフォルト設定のままにしておきます。
10. [ジョブの作成] を選択します。

Amazon Comprehend エンティティ分析ジョブを実行するには (AWS CLI)

1. 信頼されたエンティティとして認識する Amazon Comprehend の IAM ロールを作成してアタッチするには、以下の操作を行います。
 - a. 次の信頼ポリシーを、ローカルデバイスのテキストエディタで `comprehend-trust-policy.json` という JSON ファイルとして保存します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "comprehend.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```


- b. comprehend-role という IAM ロールを作成するには、保存した comprehend-trust-policy.json ファイルをアタッチしてくださいそれをファイルして、[\[create-role\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam create-role \  
    --role-name comprehend-role \  
    --assume-role-policy-document file://path/comprehend-trust-  
policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の comprehend-trust-policy.json フォルダへのファイルパスです。

macOS

```
aws iam create-role \  
    --role-name comprehend-role \  
    --assume-role-policy-document file://path/comprehend-trust-  
policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の comprehend-trust-policy.json フォルダへのファイルパスです。

Windows

```
aws iam create-role ^  
    --role-name comprehend-role ^  
    --assume-role-policy-document file://path/comprehend-trust-  
policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- **path/** は、ローカルデバイス上の comprehend-trust-policy.json フォルダへのファイルパスです。
- c. Amazon リソースネーム (ARN) をテキストエディタにコピーし、comprehend-role-arn としローカルに保存します。

 Note

ARN は、**arn:aws:iam::123456789012:role/comprehend-role** というような形式になります。Amazon Comprehend 分析ジョブを実行するには、comprehend-role-arn として保存した ARN が必要になります。

2. S3 バケットへのアクセス許可を付与する IAM ポリシーを IAM ロールに作成し、アタッチするには、次の操作を行います。
- a. 次の信頼ポリシーを、ローカルデバイスのテキストエディタで comprehend-S3-access-policy.json という JSON ファイルとして保存します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Action": [
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket"
      ],
      "Effect": "Allow"
    }
  ]
}
```

```
{
  "Action": [
    "s3:PutObject"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket/*"
  ],
  "Effect": "Allow"
}
```

- b. S3 バケットにアクセスする comprehend-S3-access-policy という IAM ポリシーを作成するには、[create-policy](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam create-policy \
  --policy-name comprehend-S3-access-policy \
  --policy-document file:///path/comprehend-S3-access-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の comprehend-S3-access-policy.json フォルダへのファイルパスです。

macOS

```
aws iam create-policy \
  --policy-name comprehend-S3-access-policy \
  --policy-document file:///path/comprehend-S3-access-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の comprehend-S3-access-policy.json フォルダへのファイルパスです。

Windows

```
aws iam create-policy ^
```

```
--policy-name comprehend-S3-access-policy ^  
--policy-document file://path/comprehend-S3-access-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の comprehend-S3-access-policy.json フォルダへのファイルパスです。
- c. Amazon リソースネーム (ARN) をテキストエディタにコピーし、comprehend-S3-access-arn としローカルに保存します。

 Note

ARN は、*arn:aws:iam::123456789012:role/comprehend-S3-access-policy* というような形式になります。comprehend-S3-access-policy を IAM ロールにアタッチするには、comprehend-S3-access-arn として保存した ARN が必要になります。

- d. comprehend-S3-access-policy を IAM ロールにアタッチするには、[\[attach-role-policy\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam attach-role-policy \  
    --policy-arn policy-arn \  
    --role-name comprehend-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、comprehend-S3-access-arn として保存した ARN です。

macOS

```
aws iam attach-role-policy \  
    --policy-arn policy-arn \  
    --role-name comprehend-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、comprehend-S3-access-arn として保存した ARN です。

Windows

```
aws iam attach-role-policy ^
    --policy-arn policy-arn ^
    --role-name comprehend-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、comprehend-S3-access-arn として保存した ARN です。

3. Amazon Comprehend エンティティ分析ジョブを実行するには、[\[start-entities-detection-job\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws comprehend start-entities-detection-job \
    --input-data-config S3Uri=s3://amzn-s3-demo-bucket/
data/,InputFormat=ONE_DOC_PER_FILE \
    --output-data-config S3Uri=s3://amzn-s3-demo-bucket/ \
    --data-access-role-arn role-arn \
    --job-name data-entities-analysis \
    --language-code en \
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。
- *role-arn* は、comprehend-role-arn として保存した ARN です。
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws comprehend start-entities-detection-job \
    --input-data-config S3Uri=s3://amzn-s3-demo-bucket/
data/,InputFormat=ONE_DOC_PER_FILE \
    --output-data-config S3Uri=s3://amzn-s3-demo-bucket/ \
    --data-access-role-arn role-arn \
    --job-name data-entities-analysis \
    --language-code en \
```

```
--region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `amzn-s3-demo-bucket` は S3 バケットの名前です。
- *`role-arn`* は、`comprehend-role-arn` として保存した ARN です。
- *`aws-region`* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws comprehend start-entities-detection-job ^  
    --input-data-config S3Uri=s3://amzn-s3-demo-bucket/  
data/,InputFormat=ONE_DOC_PER_FILE ^  
    --output-data-config S3Uri=s3://amzn-s3-demo-bucket/ ^  
    --data-access-role-arn role-arn ^  
    --job-name data-entities-analysis ^  
    --language-code en ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `amzn-s3-demo-bucket` は S3 バケットの名前です。
 - *`role-arn`* は、`comprehend-role-arn` として保存した ARN です。
 - *`aws-region`* はお客様の AWS リージョンです。
4. エンティティ分析 JobId をコピーし、テキストエディタで `comprehend-job-id` という名前を付けて保存します。JobId は、エンティティ分析ジョブのステータスを追跡するのに役立ちます。
 5. エンティティ分析ジョブの進行状況を追跡するには、[\[describe-entities-detection-job\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws comprehend describe-entities-detection-job \  
    --job-id entities-job-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *entities-job-id* は、保存した comprehend-job-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws comprehend describe-entities-detection-job \  
    --job-id entities-job-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *entities-job-id* は、保存した comprehend-job-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws comprehend describe-entities-detection-job ^  
    --job-id entities-job-id ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *entities-job-id* は、保存した comprehend-job-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

JobStatus が COMPLETED に変わるまで数分かかることがあります。

このステップを完了すると、Amazon Comprehend はエンティティ分析結果を、S3 バケット内の自動生成されたフォルダ内の output フォルダに、output.tar.gz 圧縮ファイルとして保存します。分析ジョブのステータスが完了していることを確認し、次のステップに進みます。

ステップ 3: エンティティ分析出力を Amazon Kendra メタデータとして書式設定する

Amazon Comprehend によって抽出されたエンティティを Amazon Kendra インデックスに必要なメタデータ形式に変換するには、Python 3 スクリプトを実行します。変換の結果は、Amazon S3 バケット内の metadata フォルダに保存されます。

Amazon Kendra メタデータの形式と構造の詳細については、[S3 ドキュメントメタデータ](#)を参照してください。

トピック

- [Amazon Comprehend の出力をダウンロードして抽出する](#)
- [S3 バケットに出力をアップロードする](#)
- [Amazon Kendra メタデータ形式への出力変換](#)
- [Amazon S3 バケットをクリーンアップする](#)

Amazon Comprehend の出力をダウンロードして抽出する

Amazon Comprehend エンティティ分析出力を書式設定するには、まず Amazon Comprehend エンティティ分析 output.tar.gz アーカイブをダウンロードして、エンティティ分析ファイルを抽出する必要があります。

出力ファイルをダウンロードして抽出するには (コンソール)

1. Amazon Comprehend コンソールのナビゲーションペインで、[Analysis jobs] (分析ジョブ) に移動します。
2. エンティティ分析ジョブ data-entities-analysis を選択します。
3. [Output] (出力) で、[Output data location] (出力データの場所) の隣に表示されるリンクをクリックします。これにより、S3 バケットの output.tar.gz アーカイブにリダイレクトします。
4. [Overview] (概要) タブで、[Download] (ダウンロード) を選択します。

Tip

すべての Amazon Comprehend 分析ジョブの出力は同じ名前になります。アーカイブの名前を変更すると、アーカイブの追跡が容易になります。

5. ダウンロードした Amazon Comprehend ファイルを解凍してデバイスに抽出します。

出力ファイルをダウンロードして抽出するには (AWS CLI)

1. エンティティ分析ジョブの結果を含む S3 バケット内の Amazon Comprehend 自動生成フォルダの名前にアクセスするには、[\[describe-entities-detection-job\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws comprehend describe-entities-detection-job \  
    --job-id entities-job-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *entities-job-id* は、[the section called “ステップ 2: エンティティを検出する”](#) から保存した comprehend-job-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws comprehend describe-entities-detection-job \  
    --job-id entities-job-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *entities-job-id* は、[the section called “ステップ 2: エンティティを検出する”](#) から保存した comprehend-job-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws comprehend describe-entities-detection-job ^  
    --job-id entities-job-id ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `entities-job-id` は、[the section called “ステップ 2: エンティティを検出する”](#) から保存した comprehend-job-id、
 - `aws-region` はお客様の AWS リージョンです。
2. エンティティのジョブの説明の `OutputDataConfig` オブジェクトから、テキストエディタで `comprehend-S3Uri` としての `S3Uri` 値をコピーおよび保存します。

 Note

`S3Uri` 値には、`s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz` のような形式があります。

3. エンティティ出力アーカイブをダウンロードするには、[\[copy\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3 cp s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz path/output.tar.gz
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz` は `comprehend-S3Uri`、として保存した `S3Uri` 値です。
- `path/` は、出力を保存するローカルディレクトリです。

macOS

```
aws s3 cp s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz path/output.tar.gz
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz` は `comprehend-S3Uri`、として保存した `S3Uri` 値です。
- `path/` は、出力を保存するローカルディレクトリです。

Windows

```
aws s3 cp s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz path/output.tar.gz
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `s3://amzn-s3-demo-bucket/.../output/output.tar.gz` は `comprehend-S3uri`、として保存した `S3Uri` 値です。
- `path/` は、出力を保存するローカルディレクトリです。

4. エンティティ出力を抽出するには、ターミナルウィンドウを開き、以下のコマンドを実行します。

Linux

```
tar -xf path/output.tar.gz -C path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、ローカルデバイス上にダウンロードした `output.tar.gz` アーカイブへのファイルパスです。

macOS

```
tar -xf path/output.tar.gz -C path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、ローカルデバイス上にダウンロードした `output.tar.gz` アーカイブへのファイルパスです。

Windows

```
tar -xf path/output.tar.gz -C path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、ローカルデバイス上にダウンロードした `output.tar.gz` アーカイブへのファイルパスです。

このステップを完了すると、`output` というファイルと Amazon Comprehend 識別エンティティのリストがデバイス上に作成されます。

S3 バケットに出力をアップロードする

Amazon Comprehend エンティティ分析ファイルをダウンロードして抽出した後、抽出した `output` ファイルを Amazon S3 バケットにファイルへアップロードします。

抽出された Amazon Comprehend 出力ファイルをアップロードするには (コンソール)

1. Amazon S3 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/s3/>) を開きます。
2. [Buckets] (バケット) で、バケットの名前をクリックし、その後 [Upload] (アップロード) をクリックします。
3. [Files and folders] (ファイルとフォルダ) で、[Add files] (ファイルを追加) を選択します。
4. ダイアログボックスで、デバイスの抽出した `output` ファイルに移動して選択し、[Open] (開く) をクリックします。
5. [Destination] (送信先)、[Permissions] (アクセス許可)、および [Properties] (プロパティ) はデフォルト設定のままにしておきます。
6. [Upload] (アップロード) を選択します。

抽出された Amazon Comprehend 出力ファイルをアップロードするには (AWS CLI)

1. 抽出した `output` ファイルをバケットにアップロードするには、`[copy]` コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3 cp path/output s3://amzn-s3-demo-bucket/output
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、抽出した `output` ファイルへのローカルファイルパス、
- `amzn-s3-demo-bucket` は S3 バケットの名前です。

macOS

```
aws s3 cp path/output s3://amzn-s3-demo-bucket/output
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、抽出した output ファイルへのローカルファイルパス、
- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

Windows

```
aws s3 cp path/output s3://amzn-s3-demo-bucket/output
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、抽出した output ファイルへのローカルファイルパス、
- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

2. output ファイルが S3 バケットに正常にアップロードされたことを確認するには、[\[list\]](#) コマンドを使用してその内容をチェックします。

Linux

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

macOS

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

Windows

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

Amazon Kendra メタデータ形式への出力変換

Amazon Comprehend 出力を Amazon Kendra メタデータに変換するには、Python 3 スクリプトを実行します。コンソールを使用している場合は、このステップ AWS CloudShell で 使用します。

Python 3 スクリプトを実行するには (コンソール)

1. デバイス上の [converter.py.zip](#) 圧縮ファイルをダウンロードします。
2. Python 3 ファイル converter.py を抽出します。
3. [AWS マネジメントコンソール](#) にサインインし、AWS リージョンが S3 バケットおよび Amazon Comprehend 分析ジョブと同じリージョンに設定されていることを確認します。
4. [AWS CloudShell icon] (アイコン) を選択するか、上部のナビゲーションバーの [Search] (検索) ボックスに AWS CloudShell と入力して環境を起動します。

Note

が新しいブラウザウィンドウで初めて AWS CloudShell 起動すると、ウェルカムパネルが表示され、主要な機能が一覧表示されます。このパネルを閉じて、コマンドプロンプトが表示されると、シェルが対話できる状態になります。

5. ターミナルの準備が完了したら、ナビゲーションペインで [Actions] (アクション) を選択し、メニューから [Upload file] (ファイルをアップロードする) を選択します。
6. 開いたダイアログボックスで、[Select file] (ファイルを選択) をクリックし、お使いのデバイスからダウンロードした Python 3 ファイル converter.py を選択します。[アップロード] を選択します。
7. AWS CloudShell 環境で、次のコマンドを入力します。

```
python3 converter.py
```

8. シェルインターフェイスが [S3 バケットの名前を入力する] プロンプトを表示したら、S3 バケットの名前を入力し、[Enter] キーを押します。
9. シェルインターフェイスが [Enter the full filepath to your Comprehend output file] (Comprehend 出力ファイルへの完全なファイルパスを入力する) プロンプトを表示したら、**output** と入力し、[Enter] キーを押します。
10. シェルインターフェイスが [Enter the full filepath to your metadata folder] (メタデータフォルダへの完全なファイルパスを入力する) プロンプトを表示したら、**metadata/** と入力し、[Enter] キーを押します。

Important

メタデータを正しく書式設定するには、ステップ 8~10 の入力値が正確である必要があります。

Python 3 スクリプトを実行するには (AWS CLI)

1. Python 3 ファイル converter.py をダウンロードするには、ターミナルウィンドウを開き、以下のコマンドを実行します。

Linux

```
curl -o path/converter.py.zip https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/samples/converter.py.zip
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、圧縮フォルダを保存する場所へのファイルパスです。

macOS

```
curl -o path/converter.py.zip https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/samples/converter.py.zip
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、圧縮フォルダを保存する場所へのファイルパスです。

Windows

```
curl -o path/converter.py.zip https://docs.aws.amazon.com/kendra/latest/dg/samples/converter.py.zip
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、圧縮フォルダを保存する場所へのファイルパスです。

2. Python 3 ファイル を抽出するには、ターミナルウィンドウを開き、以下のコマンドを実行します。

Linux

```
unzip path/converter.py.zip -d path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した `converter.py.zip` へのファイルパスです。

macOS

```
unzip path/converter.py.zip -d path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した `converter.py.zip` へのファイルパスです。

Windows

```
tar -xf path/converter.py.zip -C path/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した `converter.py.zip` へのファイルパスです。

3. 次のコマンドを実行して、Boto3 がお使いのデバイスにインストールされていることを確認します。

Linux

```
pip3 show boto3
```

macOS

```
pip3 show boto3
```

Windows

```
pip3 show boto3
```

Note

Boto3 がインストールされていない場合は、`pip3 install boto3` を実行してインストールしてください。

4. Python 3 スクリプトを実行して output ファイルを変換し、次のコマンドを実行します。

Linux

```
python path/converter.py
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した `converter.py.zip` へのファイルパスです。

macOS

```
python path/converter.py
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した `converter.py.zip` へのファイルパスです。

Windows

```
python path/converter.py
```

コードの説明は以下のとおりです。

- `path/` は、保存した `converter.py.zip` へのファイルパスです。
5. プロンプト AWS CLI が表示されたら Enter the name of your S3 bucket、S3 バケットの名前を入力し、Enter キーを押します。
 6. プロンプト AWS CLI が表示されたら Enter the full filepath to your Comprehend output file、と入力 **output** し、Enter キーを押します。
 7. プロンプト AWS CLI が表示されたら Enter the full filepath to your metadata folder、「`」` と入力 **metadata** し、Enter キーを押します。

Important

メタデータを正しく書式設定するには、ステップ 5~7 の入力値が正確である必要があります。

このステップが完了すると、書式設定されたメタデータは S3 バケット内の `metadata` フォルダ内に置かれます。

Amazon S3 バケットをクリーンアップする

Amazon Kendra インデックスはバケットに保存されているすべてのファイルを同期するため、検索結果の重複を防ぐため、Amazon S3 バケットをクリーンアップすることをお勧めします。

Amazon S3 バケットをクリーンアップするには (コンソール)

1. Amazon S3 コンソール (<https://console.aws.amazon.com/s3/>) を開きます。
2. [Buckets] (バケット) で、バケットを選択し、Amazon Comprehend エンティティ分析出力フォルダ、Amazon Comprehend エンティティ分析 .temp ファイル、および抽出された Amazon Comprehend output ファイルを選択します。

3. [Overview] (概要) タブから [Delete] (削除) を選択します。
4. [Delete objects] (オブジェクトの削除) で、[Permanently delete objects?] (オブジェクトを完全に削除しますか) を選択し、テキスト入力フィールドに **permanently delete** を入力します。
5. [Delete objects] (オブジェクトの削除) を選択します。

Amazon S3 バケットをクリーンアップするには (AWS CLI)

1. S3 バケット内の data ファイルと metadata フォルダをすべて削除するには、AWS CLIで [\[remove\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws s3 rm s3://amzn-s3-demo-bucket/ --recursive --exclude "data/*" --exclude "metadata/*"
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

macOS

```
aws s3 rm s3://amzn-s3-demo-bucket/ --recursive --exclude "data/*" --exclude "metadata/*"
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

Windows

```
aws s3 rm s3://amzn-s3-demo-bucket/ --recursive --exclude "data/*" --exclude "metadata/*"
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

- オブジェクトが S3 バケットから正常に削除されたことを確認するには、[ls](#) コマンドを使用してその内容をチェックします。

Linux

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

macOS

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

Windows

```
aws s3 ls s3://amzn-s3-demo-bucket/
```

コードの説明は以下のとおりです。

- amzn-s3-demo-bucket は S3 バケットの名前です。

このステップが完了すると、Amazon Comprehend エンティティ分析出力が Amazon Kendra メタデータに変換されます。これで、Amazon Kendra インデックスを作成する準備ができました。

ステップ 4: Amazon Kendra インデックスを作成し、メタデータを取り込む

インテリジェント検索ソリューションを実装するには、Amazon Kendra インデックスを作成し、S3 データとメタデータをそこに取り込みます。

Amazon Kendra インデックスにメタデータを追加する前に、カスタムドキュメント属性に対応するカスタムインデックスフィールドを作成します。これは、Amazon Comprehend エンティティタイプに対応します。Amazon Kendra では、作成したインデックスフィールドとカスタムドキュメント属性を使用して、ドキュメントを検索およびフィルタリングします。

詳細については、[インデックス](#)および[カスタムドキュメント属性の作成](#)を参照してください。

トピック

- [Amazon Kendra インデックスの作成](#)
- [Amazon S3 アクセスのための IAM ロールの更新](#)
- [Amazon Kendra カスタム検索インデックスフィールドを作成する](#)
- [Amazon S3 バケットをインデックスのデータソースとして追加する](#)
- [Amazon Kendra インデックスの同期](#)

Amazon Kendra インデックスの作成

ソースドキュメントをクエリするには、Amazon Kendra インデックスを作成します。

このステップ AWS CLI で を使用している場合は、インデックスを作成する前に Amazon Kendra AWS が CloudWatch ログにアクセスできるようにする IAM ロールとポリシーを作成してアタッチします。詳細については、[前提条件](#)を参照してください。

Amazon Kendra インデックスを作成するには (コンソール)

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。

Important

Amazon Comprehend エンティティジョブと Amazon S3 バケットを作成したリージョンと同じリージョンに存在することを確認します。別のリージョンにいる場合は、上部のナビゲーションバーの AWS リージョンセレクターから Amazon S3 バケットを作成したリージョンを選択します。

2. [Create an index] (インデックスの作成) を選択します。
3. [Index details] (インデックスの詳細の指定) ページの [Specify index details] (インデックスの詳細) で、次の操作を行います。
 - a. [Index name] (インデックス名) に **kendra-index** と入力します。

- b. [Description] (説明) フィールドは空白のままにしておきます。
 - c. [IAM role] (IAM ロール) は、[Create a new role] (新しいロールの作成) を選択します。このロールは、Amazon S3 バケットへのアクセスを提供します。
 - d. [Role name] (ロール名) に **kendra-role** と入力します。IAM ロールにはプレフィックス AmazonKendra- が付いています。
 - e. [Encryption] (暗号化) と [Tags] (タグ) のデフォルト設定はそのままにして、[Next] (次へ) をクリックします。
4. [Access control setting] (アクセスコントロールの設定) ページの [Configure user access control] (アクセスコントロールの設定) で、[No] (いいえ) を選択してから、[Next] (次へ) をクリックします。
 5. [Provisioning editions] (プロビジョニングの詳細) ページの [Provisioning details] (プロビジョニングエディション) で、[Developer edition] (デベロッパーエディション) を選択し、[Create] (作成) をクリックします。

Amazon Kendra インデックスを作成するには (AWS CLI)

1. 信頼されたエンティティとして認識する Amazon Kendra の IAM ロールを作成してアタッチするには、以下の操作を行います。
 - a. 次の信頼ポリシーを、ローカルデバイスのテキストエディタで `kendra-trust-policy.json` という JSON ファイルとして保存します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": {
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "Service": "kendra.amazonaws.com"
    },
    "Action": "sts:AssumeRole"
  }
}
```

- b. `kendra-role` という IAM ロールを作成するには、保存した `kendra-trust-policy.json` ファイルをアタッチしてくださいそれをファイルして、[\[create-role\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam create-role \  
    --role-name kendra-role \  
    --assume-role-policy-document file://path/kendra-trust-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の `kendra-trust-policy.json` フォルダへのファイルパスです。

macOS

```
aws iam create-role \  
    --role-name kendra-role \  
    --assume-role-policy-document file://path/kendra-trust-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の `kendra-trust-policy.json` フォルダへのファイルパスです。

Windows

```
aws iam create-role ^  
    --role-name kendra-role ^  
    --assume-role-policy-document file://path/kendra-trust-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の `kendra-trust-policy.json` フォルダへのファイルパスです。
- c. Amazon リソースネーム (ARN) をテキストエディタにコピーし、`kendra-role-arn` としローカルに保存します。

 Note

ARN は、`arn:aws:iam::123456789012:role/kendra-role` というような形式になります。Amazon Kendra ジョブを実行するには、`kendra-role-arn` として保存した ARN が必要になります。

2. インデックスを作成する前に、`kendra-role` に CloudWatch Logs への書き込み許可を提供する必要があります。そのためには、以下のステップを完了します。
 - a. 次の信頼ポリシーを、ローカルデバイスのテキストエディタで `kendra-cloudwatch-policy.json` という JSON ファイルとして保存します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "cloudwatch:PutMetricData",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "cloudwatch:namespace": "Kendra"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "logs:DescribeLogGroups",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "logs:CreateLogGroup",
      "Resource": "arn:aws:logs:aws-region:aws-account-id:log-group:/aws/kendra/*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
```



```
    "Action": [
      "logs:DescribeLogStreams",
      "logs:CreateLogStream",
      "logs:PutLogEvents"
    ],
    "Resource": "arn:aws:logs:aws-region:aws-account-id:log-group:/
aws/kendra/*:log-stream:*"
  }
]
```

aws-region を自分の AWS リージョンに、*aws-account-id* を自分の 12 桁の AWS アカウント ID に置き換えます。

- b. CloudWatch Logs にアクセスするための IAM ポリシーを作成するには、[\[create-policy\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam create-policy \
  --policy-name kendra-cloudwatch-policy \
  --policy-document file:///path/kendra-cloudwatch-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の kendra-cloudwatch-policy.json フォルダへのファイルパスです。

macOS

```
aws iam create-policy \
  --policy-name kendra-cloudwatch-policy \
  --policy-document file:///path/kendra-cloudwatch-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の kendra-cloudwatch-policy.json フォルダへのファイルパスです。

Windows

```
aws iam create-policy ^  
    --policy-name kendra-cloudwatch-policy ^  
    --policy-document file://path/kendra-cloudwatch-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の kendra-cloudwatch-policy.json フォルダへのファイルパスです。
- c. Amazon リソースネーム (ARN) をテキストエディタにコピーし、kendra-cloudwatch-arn としローカルに保存します。

Note

ARN は、*arn:aws:iam::123456789012:role/kendra-cloudwatch-policy* というような形式になります。kendra-cloudwatch-arn を IAM ロールにアタッチするには、kendra-cloudwatch-policy として保存した ARN が必要になります。

- d. kendra-cloudwatch-policy を IAM ロールにアタッチするには、[\[attach-role-policy\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam attach-role-policy \  
    --policy-arn policy-arn \  
    --role-name kendra-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、保存した kendra-cloudwatch-arn です。

macOS

```
aws iam attach-role-policy \  
    --policy-arn policy-arn \  
    --role-name kendra-role
```

```
--role-name kendra-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、保存した *kendra-cloudwatch-arn* です。

Windows

```
aws iam attach-role-policy ^  
    --policy-arn policy-arn ^  
    --role-name kendra-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、保存した *kendra-cloudwatch-arn* です。

3. インデックスを作成するには、[\[create-index\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra create-index \  
    --name kendra-index \  
    --edition DEVELOPER_EDITION \  
    --role-arn role-arn \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *role-arn* は、保存した *kendra-role-arn*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra create-index \  
    --name kendra-index \  
    --edition DEVELOPER_EDITION \  
    --role-arn role-arn \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *role-arn* は、保存した `kendra-role-arn`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra create-index ^  
    --name kendra-index ^  
    --edition DEVELOPER_EDITION ^  
    --role-arn role-arn ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *role-arn* は、保存した `kendra-role-arn`、
 - *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。
4. テキストエディタでインデックス Id をコピーし、`kendra-index-id` という名前を付けて保存します。Id は、インデックス作成のステータスを追跡するのに役立ちます。
 5. インデックス作成ジョブの進行状況を追跡するには、[\[describe-index\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra describe-index \  
    --id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra describe-index \  
    --id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

```
--region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra describe-index ^  
    --id kendra-index-id ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

インデックスの作成プロセスには平均で 15 分かかりますが、さらに時間がかかる場合があります。インデックスのステータスがアクティブになると、インデックスが使用可能になります。インデックスの作成中に、次のステップを開始できます。

このステップ AWS CLI で を使用している場合は、S3 バケットへのアクセス許可をインデックスに付与する IAM ポリシーを作成して Amazon Kendra IAM ロールにアタッチします。

Amazon S3 アクセスのための IAM ロールの更新

インデックスの作成中に、Amazon Kendra IAM ロールを更新して、作成したインデックスが Amazon S3 バケットからデータを読み取ることを許可します。詳細については、[Amazon Kendra の IAM アクセスロール](#)を参照してください。

IAM ロールを更新するには (コンソール)

1. IAM コンソール (<https://console.aws.amazon.com/iam/>) を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[Roles] (ロール) を選択し、[Role name] (ロール名) の上の [Search] (検索) ボックスに **kendra-role** と入力します。
3. 提案されるオプションで、`kendra-role` をクリックします。
4. [Summary] (概要) で、[Attach policies] (ポリシーの添付) を選択します。

5. [Attach permissions] (許可の添付) の [Search] (検索) ボックスで、**S3** と入力し、提案されたオプションで、[AmazonS3ReadOnlyAccess] ポリシーの隣にあるチェックボックスをオンにします。
6. [Attach policy] (ポリシーの添付) を選択します。[Summary] (概要) ページで、IAM ロールに添付された 2 つのポリシーが表示されます。
7. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) に戻り、インデックスのステータスが [Creating] (作成中) から [Active] (アクティブ) に変わるのを待って次のステップに進みます。

IAM ロールを更新するには (AWS CLI)

1. 次のテキストを、ローカルデバイスのテキストエディタで `kendra-S3-access-policy.json` という JSON ファイルに保存します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket/*"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Action": [
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket"
      ],
      "Effect": "Allow"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```
        "kendra:BatchPutDocument",
        "kendra:BatchDeleteDocument",
        "kendra:ListDataSourceSyncJobs"
    ],
    "Resource": [
        "arn:aws:kendra:aws-region:aws-account-id:index/kendra-index-id"
    ]
}
]
```

amzn-s3-demo-bucket を S3 バケット名に、*aws-region* を AWS リージョンに、*aws-account-id* を 12 桁の AWS アカウント ID に、*kendra-index-id* を保存した に置き換えま
すkendra-index-id。

2. S3 バケットにアクセスする IAM ポリシーを作成するには、[\[create-policy\]](#) コマンドを使用しま
す。

Linux

```
aws iam create-policy \  
    --policy-name kendra-S3-access-policy \  
    --policy-document file://path/kendra-S3-access-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の kendra-S3-access-policy.json フォルダへの
ファイルパスです。

macOS

```
aws iam create-policy \  
    --policy-name kendra-S3-access-policy \  
    --policy-document file://path/kendra-S3-access-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の kendra-S3-access-policy.json フォルダへの
ファイルパスです。

Windows

```
aws iam create-policy ^  
    --policy-name kendra-S3-access-policy ^  
    --policy-document file://path/kendra-S3-access-policy.json
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の `kendra-S3-access-policy.json` フォルダへのファイルパスです。

3. Amazon リソースネーム (ARN) をテキストエディタにコピーし、`kendra-S3-access-arn` としローカルに保存します。

Note

ARN は、`arn:aws:iam::123456789012:role/kendra-S3-access-policy` というような形式になります。kendra-S3-access-policy を IAM ロールにアタッチするには、kendra-S3-access-arn として保存した ARN が必要になります。

4. `kendra-S3-access-policy` を Amazon Kendra IAM ロールにアタッチするには、[\[attach-role-policy\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws iam attach-role-policy \  
    --policy-arn policy-arn \  
    --role-name kendra-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、保存した `kendra-S3-access-arn` です。

macOS

```
aws iam attach-role-policy \  
    --policy-arn policy-arn \  
    --role-name kendra-role
```


コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、保存した kendra-S3-access-arn です。

Windows

```
aws iam attach-role-policy ^  
    --policy-arn policy-arn ^  
    --role-name kendra-role
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *policy-arn* は、保存した kendra-S3-access-arn です。

Amazon Kendra カスタム検索インデックスフィールドを作成する

メタデータをカスタムドキュメント属性として認識するように Amazon Kendra を準備するには、Amazon Comprehend エンティティタイプに対応するカスタムフィールドを作成します。次の 9 つの Amazon Comprehend エンティティタイプをカスタムフィールドとして入力します。

- COMMERCIAL_ITEM
- DATE
- EVENT
- LOCATION
- ORGANIZATION
- OTHER
- PERSON
- QUANTITY
- TITLE

Important

スペルミスのあるエンティティタイプは、インデックスによって認識されません。

Amazon Kendra インデックスのカスタムフィールドを作成するには (コンソール)

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. [Indexes] (インデックス) リストから、kendra-index をクリックします。
3. 左側のナビゲーションパネルの [Data management] (データ管理) で、[Facet definition] (ファセット定義) を選択します。
4. [Index fields] (インデックスフィールド) メニューで、[Add field] (フィールドを追加) を選択します。
5. [Add index field] (インデックスフィールドの追加) ダイアログボックスで、以下の操作を行います。
 - a. [Field name] (フィールド名) に **COMMERCIAL_ITEM** と入力します。
 - b. [Data type] (データタイプ) で、[String list] (文字列リスト) を選択します。
 - c. [Usage type] (使用タイプ) で、[Facetable] (ファセット可能)、[Searchable] (検索可能)、および [Displayable] (表示可能)、を選択して [Add] (追加) を選択します。
 - d. Amazon Comprehend の各エンティティタイプ (COMMERCIAL_ITEM、DATE、EVENT、LOCATION、ORGANIZATION、OTHER、PERSON、G... について、ステップ a から c を繰り返します。

コンソールに成功したフィールド追加メッセージが表示されます。次のステップに進む前に、それらを閉じることができます。

Amazon Kendra インデックスのカスタムフィールドを作成するには (AWS CLI)

1. 次のテキストを、ローカルデバイスのテキストエディタで custom-attributes.json という JSON ファイルとして保存します。

```
[
  {
    "Name": "COMMERCIAL_ITEM",
    "Type": "STRING_LIST_VALUE",
    "Search": {
      "Facetable": true,
      "Searchable": true,
      "Displayable": true
    }
  },
  {
```

```
    "Name": "DATE",
    "Type": "STRING_LIST_VALUE",
    "Search": {
      "Facetable": true,
      "Searchable": true,
      "Displayable": true
    }
  },
  {
    "Name": "EVENT",
    "Type": "STRING_LIST_VALUE",
    "Search": {
      "Facetable": true,
      "Searchable": true,
      "Displayable": true
    }
  },
  {
    "Name": "LOCATION",
    "Type": "STRING_LIST_VALUE",
    "Search": {
      "Facetable": true,
      "Searchable": true,
      "Displayable": true
    }
  },
  {
    "Name": "ORGANIZATION",
    "Type": "STRING_LIST_VALUE",
    "Search": {
      "Facetable": true,
      "Searchable": true,
      "Displayable": true
    }
  },
  {
    "Name": "OTHER",
    "Type": "STRING_LIST_VALUE",
    "Search": {
      "Facetable": true,
      "Searchable": true,
      "Displayable": true
    }
  }
],
```

```
{
  "Name": "PERSON",
  "Type": "STRING_LIST_VALUE",
  "Search": {
    "Facetable": true,
    "Searchable": true,
    "Displayable": true
  }
},
{
  "Name": "QUANTITY",
  "Type": "STRING_LIST_VALUE",
  "Search": {
    "Facetable": true,
    "Searchable": true,
    "Displayable": true
  }
},
{
  "Name": "TITLE",
  "Type": "STRING_LIST_VALUE",
  "Search": {
    "Facetable": true,
    "Searchable": true,
    "Displayable": true
  }
}
]
```

2. インデックスにカスタムフィールドを作成するには、[\[update-index\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra update-index \
  --id kendra-index-id \
  --document-metadata-configuration-updates file://path/custom-
attributes.json \
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、

- *path/* は、ローカルデバイス上の `custom-attributes.json` フォルダへのファイルパス、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra update-index \  
    --id kendra-index-id \  
    --document-metadata-configuration-updates file://path/custom-  
attributes.json \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *path/* は、ローカルデバイス上の `custom-attributes.json` フォルダへのファイルパス、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra update-index ^  
    --id kendra-index-id ^  
    --document-metadata-configuration-updates file://path/custom-  
attributes.json ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *path/* は、ローカルデバイス上の `custom-attributes.json` フォルダへのファイルパス、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

3. カスタム属性がインデックスに追加されていることを確認するには、[\[describe-index\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra describe-index \  
    --id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra describe-index \  
    --id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra describe-index ^  
    --id kendra-index-id ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Amazon S3 バケットをインデックスのデータソースとして追加する

インデックスを同期する前に、S3 データソースをそのインデックスに接続する必要があります。

S3 バケットを Amazon Kendra インデックスに接続するには (コンソール)

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. [Indexes] (インデックス) リストから、kendra-index をクリックします。
3. 左側のナビゲーションメニューから、[Data management] (データ管理) で、[Data sources] (データソース) を選択します。
4. [Select data source connector type] (データソースコネクタのタイプを選択する) セクションで [Amazon S3] に移動し、[Add connector] (コネクタの追加) を選択します。
5. [Specify data source details] (データソースの詳細の指定) ページで、以下の操作を行います。
 - a. [Name and description] (名前と説明) の [Data source name] (データソース名) に、**S3-data-source** と入力します。
 - b. [Description] (説明) セクションは空白のままにしておきます。
 - c. [Tags] (タグ) は、デフォルト設定のままにしておきます。
 - d. [Next] (次へ) を選択します。
6. [Configure sync settings] (設定の定義) ページの [Sync scope] (同期の適用範囲) セクションで、以下の操作を行います。
 - a. [Enter the data source location] (データソースの場所を入力する) で、[Browse S3] (S3 を閲覧する) を選択します。
 - b. [Choose resources] (リソースの選択) で、S3 バケット、[Choose] (選択) の順に選択します。
 - c. [Metadata files prefix folder location] (メタデータファイルのプレフィックスフォルダの場所) で、[Browse S3] (S3 を閲覧する) を選択します。
 - d. [Choose resources] (リソースの選択) で、バケットのリストからバケットの名前をクリックします。
 - e. [Objects] (オブジェクト) で、metadata のオプションボックスを選択し、[Choose] (選択) をクリックします。ロケーションフィールドには、metadata/ と表示されます。
 - f. [Access control list configuration file location] (アクセスコントロールリスト設定ファイルの場所)、[Select decryption key] (復号キーを選択)、および [Additional configuration] (追加設定) は、デフォルト設定のままにしておきます。
7. [Configure sync settings] (同期設定を構成する) ページの [IAM role] (IAM ロール) で、[kendra-role] を選択します。

8. [Configure sync settings] (同期設定を構成する) ページの [Sync run schedule] (同期実行スケジュール) で、[Frequency] (頻度) に [Run on demand] (オンデマンドで実行する) を選択して [Next] (次へ) をクリックします。
9. [Review and create] (確認と作成) ページで、データソースの詳細について選択内容を確認し、[Add data source] (データソースの追加) を選択します。

S3 バケットを Amazon Kendra インデックスに接続するには (AWS CLI)

1. 次のテキストを、ローカルデバイスのテキストエディタで `S3-data-connector.json` という JSON ファイルとして保存します。

```
{
  "S3Configuration": {
    "BucketName": "amzn-s3-demo-bucket",
    "DocumentsMetadataConfiguration": {
      "S3Prefix": "metadata"
    }
  }
}
```

`amzn-s3-demo-bucket` を S3 バケットの名前に置き換えます。

2. S3 バケットをインデックスに接続するには、[\[create-data-source\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra create-data-source \
  --index-id kendra-index-id \
  --name S3-data-source \
  --type S3 \
  --configuration file://path/S3-data-connector.json \
  --role-arn role-arn \
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した `kendra-index-id`、
- *path/* は、ローカルデバイス上の `S3-data-connector.json` フォルダへのファイルパス、
- *role-arn* は、保存した `kendra-role-arn`、

- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra create-data-source \  
    --index-id kendra-index-id \  
    --name S3-data-source \  
    --type S3 \  
    --configuration file://path/S3-data-connector.json \  
    --role-arn role-arn \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *path/* は、ローカルデバイス上の *S3-data-connector.json* フォルダへのファイルパス、
- *role-arn* は、保存した *kendra-role-arn*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra create-data-source ^  
    --index-id kendra-index-id ^  
    --name S3-data-source ^  
    --type S3 ^  
    --configuration file://path/S3-data-connector.json ^  
    --role-arn role-arn ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *path/* は、ローカルデバイス上の *S3-data-connector.json* フォルダへのファイルパス、
- *role-arn* は、保存した *kendra-role-arn*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

3. テキストエディタでコネクタ Id をコピーし、S3-connector-id という名前を付けて保存します。Id は、データ接続プロセスのステータスを追跡するのに役立ちます。
4. S3 データソースが正常に接続されていることを確認するには、[\[describe-data-source\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra describe-data-source \  
  --id S3-connector-id \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra describe-data-source \  
  --id S3-connector-id \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra describe-data-source ^  
  --id S3-connector-id ^  
  --index-id kendra-index-id ^  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

このステップを終了すると、Amazon S3 データソースがインデックスに接続されます。

Amazon Kendra インデックスの同期

Amazon S3 データソースを追加すると、Amazon Kendra インデックスが同期されます。

Amazon Kendra インデックスを同期するには (コンソール)

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. [Indexes] (インデックス) リストから、kendra-index をクリックします。
3. 左側のナビゲーションメニューから [Data sources] (データソース) を選択します。
4. [Data sources] (データソース) から、S3-data-source を選択します。
5. 上部のナビゲーションバーから、[Sync now] (今すぐ同期) を選択します。

Amazon Kendra インデックスを同期するには (AWS CLI)

1. インデックスを同期するには、[\[start-data-source-sync-job\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra start-data-source-sync-job \  
    --id S3-connector-id \  
    --index-id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra start-data-source-sync-job \  
    --id S3-connector-id \  
    --index-id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra start-data-source-sync-job ^  
    --id S3-connector-id ^  
    --index-id kendra-index-id ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

2. インデックス同期のステータスを確認するには、[\[list-data-source-sync-jobs\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra list-data-source-sync-jobs \  
    --id S3-connector-id \  
    --index-id kendra-index-id \  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra list-data-source-sync-jobs \  
  --id S3-connector-id \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra list-data-source-sync-jobs ^  
  --id S3-connector-id ^  
  --index-id kendra-index-id ^  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *S3-connector-id* は、保存した S3-connector-id、
- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

このステップを完了すると、データセットに検索可能でフィルター可能な Amazon Kendra インデックスが作成されます。

ステップ 5: Amazon Kendra インデックスをクエリする

Amazon Kendra インデックスは自然言語クエリの準備が整いました。インデックスを検索すると、Amazon Kendra は指定したすべてのデータとメタデータを使用して、検索クエリに対する最も正確な回答を返します。

Amazon Kendra が回答できるクエリには、次の 3 種類があります。

- Factoid 型クエリ (「誰が」、「何を」、「いつ」、または「どこで」の質問)
- 説明的なクエリ (「どのように」の質問)
- キーワード検索 (意図と対象範囲が明確でない質問)

トピック

- [Amazon Kendra インデックスをクエリする](#)
- [検索結果のフィルタリング](#)

Amazon Kendra インデックスをクエリする

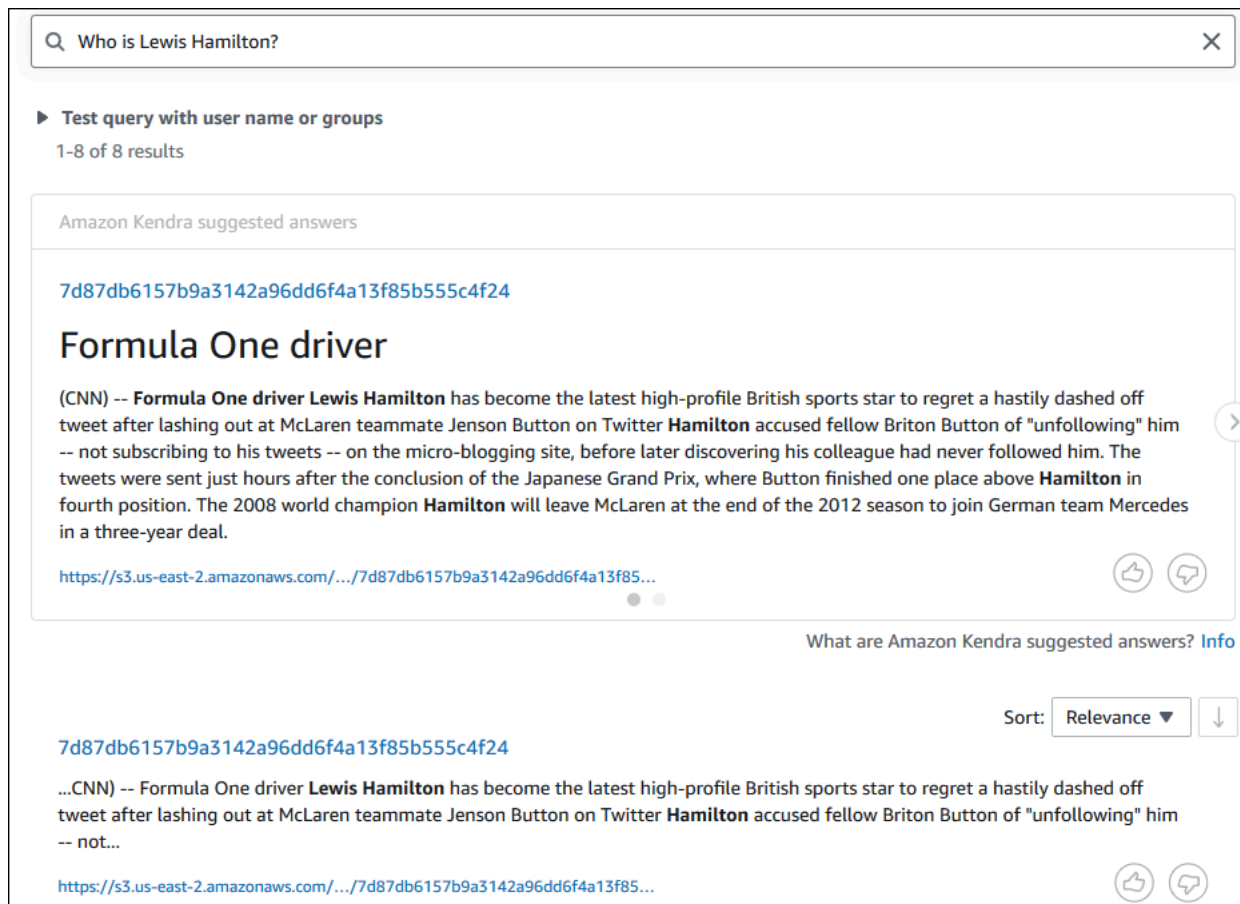
Amazon Kendra がサポートする 3 種類のクエリに対応する質問を使用して、Amazon Kendra インデックスをクエリできます。詳細については、[クエリ](#)を参照してください。

このセクションの質問例は、サンプルデータセットに基づいて選択されています。

Amazon Kendra インデックスをクエリするには (コンソール)

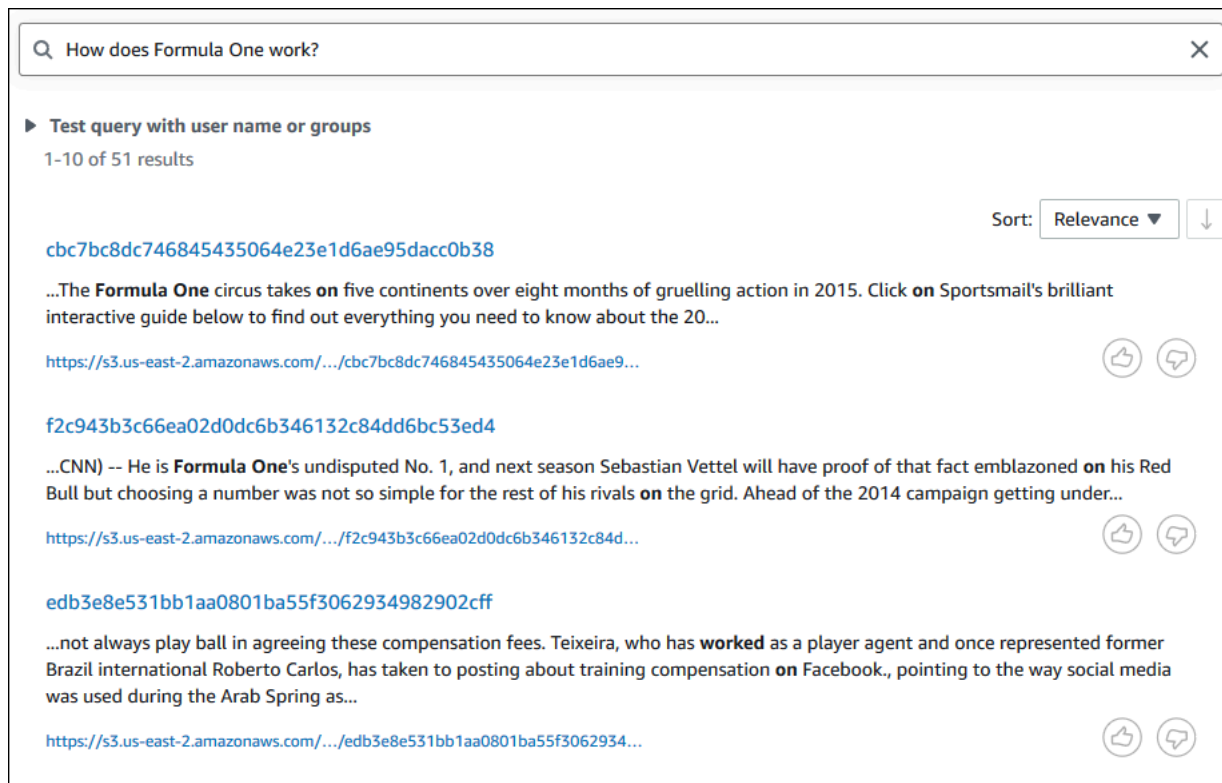
1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. [Indexes] (インデックス) リストから、kendra-index をクリックします。
3. 左側のナビゲーションメニューから、インデックスを検索するオプションを選択します。
4. Factoid 型クエリを実行するには、検索ボックスに **Who is Lewis Hamilton?** と入力し、[Enter] キーを押します。

最初に返された結果は、Amazon Kendra が提案した回答と、その回答を含むデータファイルです。残りの結果は、一連の推奨ドキュメントを形成します。



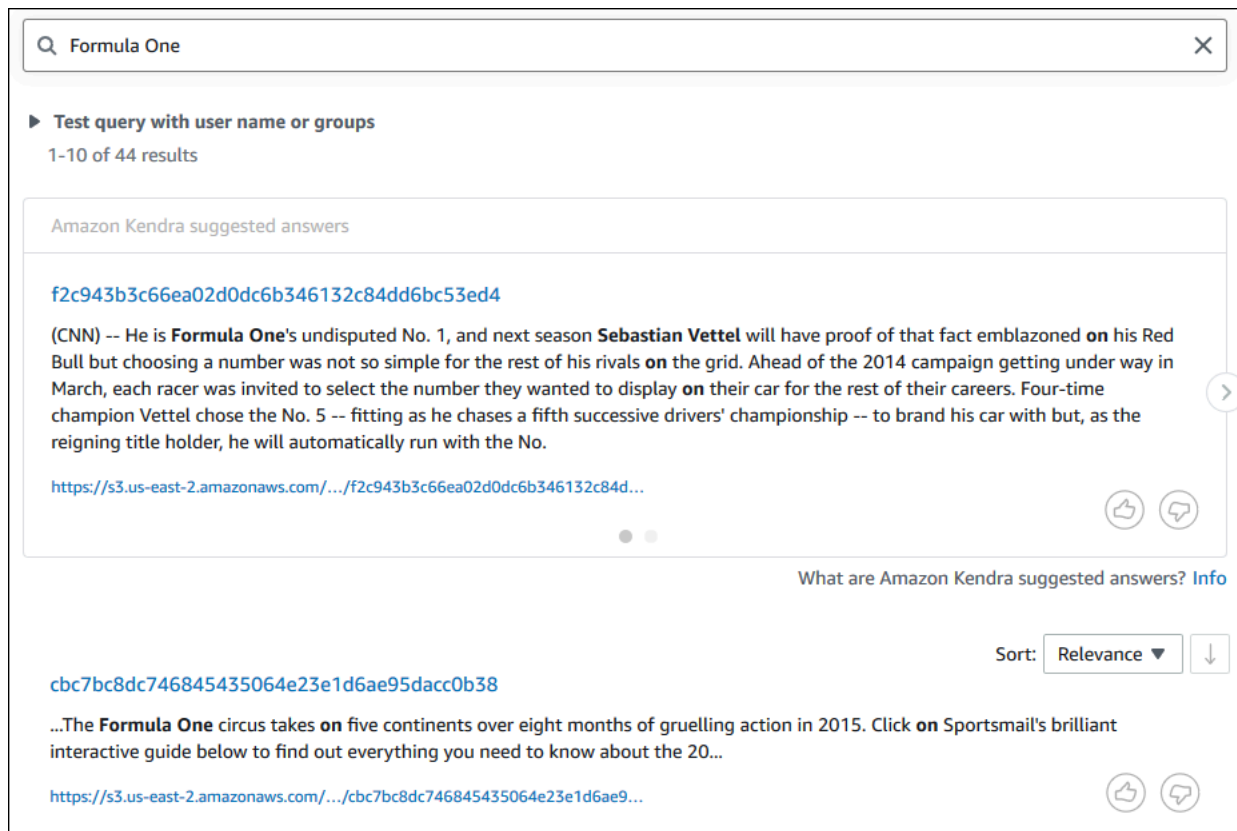
5. 説明的なクエリを実行するには、検索ボックスに **How does Formula One work?** と入力し、[Enter] キーを押します。

Amazon Kendra コンソールから返された別の結果が表示されます。今回は、関連する語句が強調表示されます。



6. キーワード検索を実行するには、検索ボックスに **Formula One** と入力し、[Enter] キーを押します。

Amazon Kendra コンソールから返される別の結果と、データセット内の語句に関する他のすべてのメンションの結果が表示されます。



Amazon Kendra インデックスをクエリするには (AWS CLI)

1. サンプルの Factoid 型クエリを実行するには、[\[query\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Who is Lewis Hamilton?" \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Who is Lewis Hamilton?" \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra query ^  
  --index-id kendra-index-id ^  
  --query-text "Who is Lewis Hamilton?" ^  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

はクエリの結果 AWS CLI を表示します。

2. サンプルの説明的なクエリを実行するには、[\[query\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "How does Formula One work?" \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、

- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "How does Formula One work?" \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra query ^  
  --index-id kendra-index-id ^  
  --query-text "How does Formula One work?" ^  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

はクエリに結果 AWS CLI を表示します。

3. サンプルキーワード検索を実行するには、[\[query\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Formula One" \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Formula One" \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra query ^  
  --index-id kendra-index-id ^  
  --query-text "Formula One" ^  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

は、クエリに対して返された回答 AWS CLI を表示します。

検索結果のフィルタリング

Amazon Kendra コンソールのカスタムドキュメント属性を使用して、検索結果をフィルタリングしてソートすることができます。Amazon Kendra がクエリを処理する方法の詳細については、[クエリのフィルタリング](#)を参照してください。

検索結果をフィルタリングするには (コンソール)

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. [Indexes] (インデックス) リストから、kendra-index をクリックします。
3. 左側のナビゲーションメニューから、インデックスを検索するオプションを選択します。
4. 検索ボックスに、クエリとして **Soccer matches** と入力し、[Enter] キーを押します。
5. 左側のナビゲーションメニューから、[Filter search results] (検索結果をフィルタリング) を選択し、検索結果をフィルタリングするために使用できるファセットのリストを表示します。
6. [EVENT] の小見出しの「Champions League」のチェックボックスをオンにし、「Champions League」を含む結果のみにフィルタリングされた検索結果を表示します。

The screenshot shows the Amazon Kendra console interface. At the top, a search bar contains the query "Soccer matches". Below the search bar, a section titled "Filter search results" is expanded, showing various filters. Under the "EVENT" filter, the "Champions League" checkbox is checked, and it indicates 3 results. The main content area displays "Amazon Kendra suggested answers" for the query. The first suggestion is titled "7e5db27742008942b2f9cfd6ac41826f86148d1f" and provides a detailed paragraph about Wembley Stadium's history and its significance to soccer. Below this, there are two more suggestions, each with a title and a brief description. The interface also includes a sidebar with various filters like LOCATION, OTHER, ORGANIZATION, DATE, PERSON, QUANTITY, and TITLE, each with a list of options and counts. At the bottom right, there is a "Sort" dropdown menu set to "Relevance".

検索結果をフィルタリングするには (AWS CLI)

1. 検索可能な特定のタイプのエンティティ (EVENT など) を表示するには、[\[query\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Soccer matches" \  
  --facets '["DocumentAttributeKey":"EVENT"]' \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Soccer matches" \  
  --facets '["DocumentAttributeKey":"EVENT"]' \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra query ^  
  --index-id kendra-index-id ^  
  --query-text "Soccer matches" ^  
  --facets '["DocumentAttributeKey":"EVENT"]' ^  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

に検索結果 AWS CLI が表示されます。タイプのファセットのリストを取得するにはEVENT、AWS CLI 出力の「FacetResults」セクションに移動して、フィルタリング可能なファセットのリストとその数を確認します。例えば、ファセットの1つは「Champions League」です。

Note

EVENT の代わりに、DocumentAttributeKey 値に対して [the section called “Amazon Kendra インデックスの作成”](#) で作成したインデックスフィールドを選択できます。

2. 同じ検索を実行し、「Champions League」を含む結果のみでフィルタリングするには、[\[query\]](#) コマンドを使用します。

Linux

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Soccer matches" \  
  --attribute-filter '{"ContainsAny":{"Key":"EVENT","Value":  
{"StringListValue":["Champions League"]}}}' \  
  --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した *kendra-index-id*、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

macOS

```
aws kendra query \  
  --index-id kendra-index-id \  
  --query-text "Soccer matches" \  
  --attribute-filter '{"ContainsAny":{"Key":"EVENT","Value":  
{"StringListValue":["Champions League"]}}}' \  
  --region aws-region
```

```
--region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

Windows

```
aws kendra query ^  
    --index-id kendra-index-id ^  
    --query-text "Soccer matches" ^  
    --attribute-filter '{"ContainsAny":{"Key":"EVENT","Value":  
{"StringListValue":["Champions League"]}}}' ^  
    --region aws-region
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *kendra-index-id* は、保存した kendra-index-id、
- *aws-region* はお客様の AWS リージョンです。

はフィルタリングされた検索結果 AWS CLI を表示します。

ステップ 6: クリーンアップする

ファイルをクリーンアップする

このチュートリアルを完了した後に AWS アカウントで料金が発生しないようにするには、次の手順を実行します。

1. Amazon S3 バケットを削除する

バケットを削除する方法の詳細については、[バケットの削除](#)を参照してください。

2. Amazon Kendra インデックスを削除する

Amazon Kendra インデックスを削除する方法の詳細については、[インデックスの削除](#)を参照してください。

3. converter.py を削除する

- コンソールの場合： に移動し [AWS CloudShell](#)、リージョンが自分の AWS リージョンに設定されていることを確認します。bash シェルがロードされたら、以下のコマンドを環境に入力し、[Enter] キーを押します。

```
rm converter.py
```

- 対象 AWS CLI： ターミナルウィンドウで次のコマンドを実行します。

Linux

```
rm file/converter.py
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の converter.py へのファイルパスです。

macOS

```
rm file/converter.py
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の converter.py へのファイルパスです。

Windows

```
rm file/converter.py
```

コードの説明は以下のとおりです。

- *path/* は、ローカルデバイス上の converter.py へのファイルパスです。

詳細はこちら

Amazon Kendra をワークフローに統合する方法の詳細については、以下のブログ記事をご覧ください。

- [詳細検索のためのコンテンツメタデータのタグ付け](#)
- [自動化コンテンツに富んだインテリジェントな検索ソリューションを構築する](#)

Amazon Comprehend の詳細については、[Amazon Comprehend デベロッパーガイド](#)を参照してください。

Amazon Kendra のモニタリングとログ記録

トピック

- [インデックスのモニタリング \(コンソール\)](#)
- [ログを使用した Amazon Kendra API コールの AWS CloudTrail ログ記録](#)
- [ログを使用した Amazon Kendra Intelligent Ranking API コールの AWS CloudTrail ログ記録](#)
- [Amazon CloudWatch による Amazon Kendra のモニタリング](#)
- [Amazon CloudWatch Logs による Amazon Kendra のモニタリング](#)

インデックスのモニタリング (コンソール)

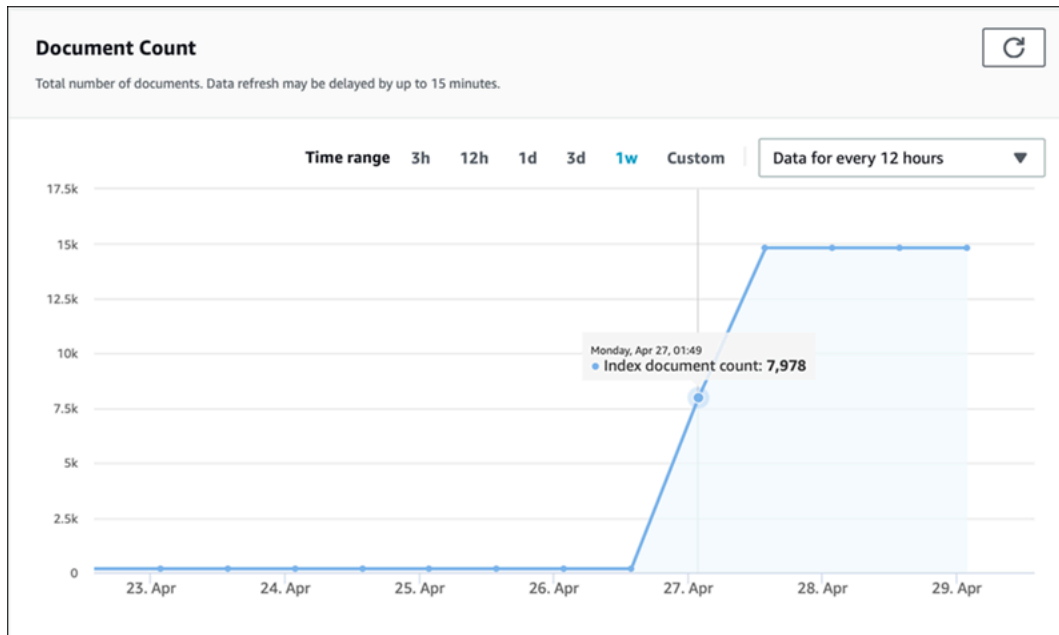
Amazon Kendra コンソールを使用して、インデックスとデータソースの状態をモニタリングします。この情報を使用して、インデックスのサイズとストレージ要件を追跡し、インデックスとデータソース間の同期の進行状況と成功をモニタリングできます。

インデックスメトリクスを表示するには (コンソール)

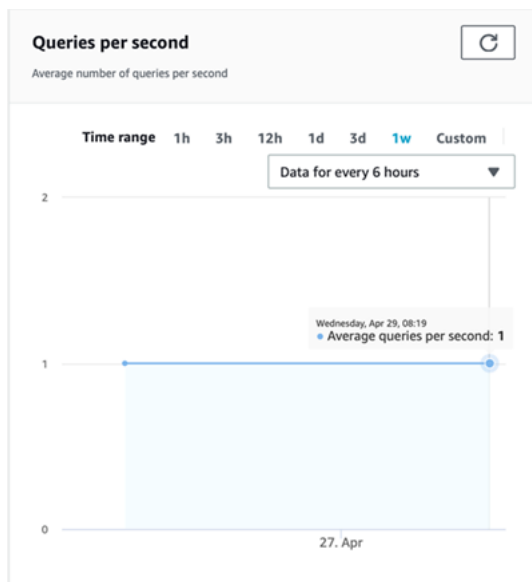
1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/home> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. インデックスのリストから、表示するインデックスを選択します。
3. 画面をスクロールして、インデックスメトリクスを表示します。

インデックスに関する以下のメトリクスを確認できます。

- ドキュメント数 - インデックスが作成されたドキュメントの合計数。これには、すべてのデータソースのすべてのドキュメントが含まれます。このメトリクスを使用して、より多くのまたは少ないインデックスのストレージユニットを購入する必要があるかどうかを決定します。



- 1秒あたりのクエリ数 - 1秒間に要求されるインデックスクエリの数。このメトリクスを使用して、より多くのまたは少ないインデックスのクエリユニットを購入する必要があるかどうかを決定します。



インデックスとデータソース間の同期の進行状況と成功をモニタリングするには、Amazon Kendra コンソールを使用します。この情報を使用して、データソースの正常性を判断します。

同期メトリクスを表示するには (コンソール)

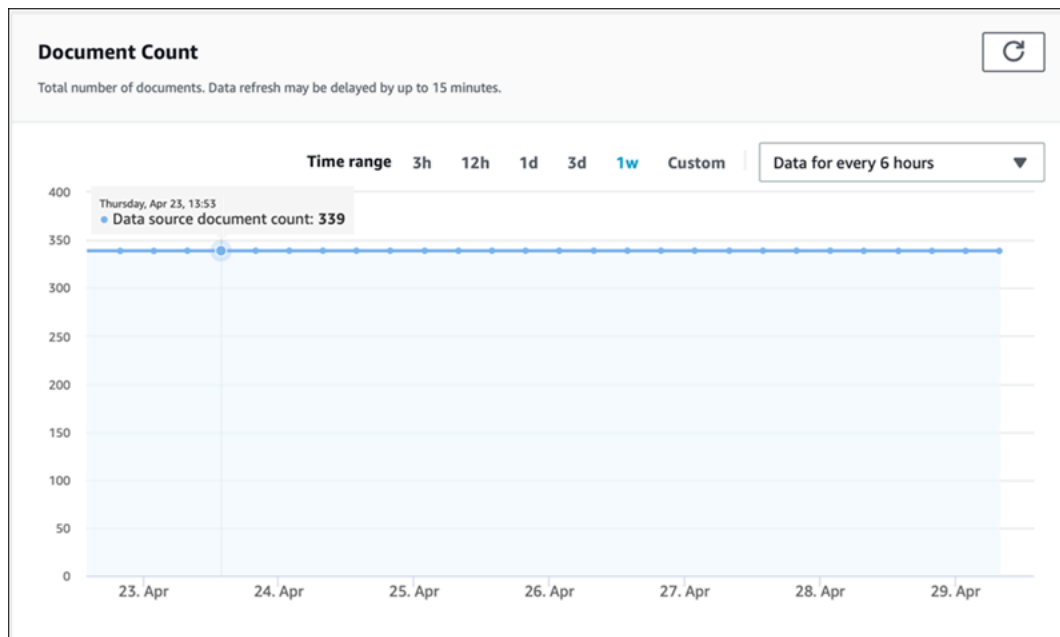
1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/kendra/home> で Amazon Kendra コンソールを開きます。
2. インデックスのリストから、同期メトリクスを表示するインデックスを選択します。
3. 左側のメニューから [Data sources] (データソース) を選択します。
4. データソースのリストから、表示するデータソースを選択します。
5. 画面をスクロールして、同期実行メトリクスを表示します。

表示できる情報は次のとおりです。

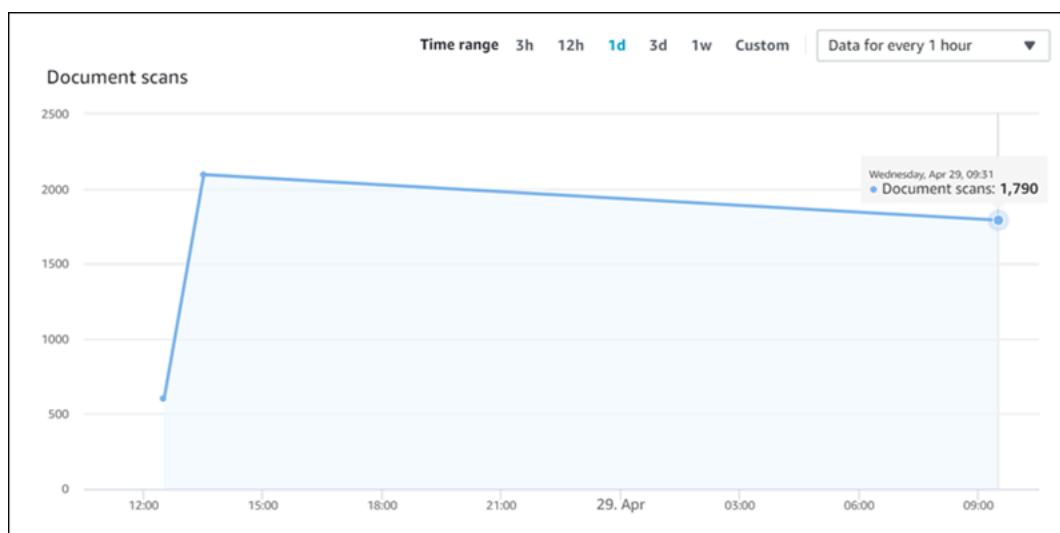
- 同期実行履歴 - 開始時刻と終了時刻、追加、削除、失敗したドキュメントの数など、同期実行に関する統計。同期の実行に失敗すると、CloudWatch Logs へのリンクが詳細に表示されます。左上の設定アイコンを選択して、履歴に表示される列を変更します。この情報を使用して、データソースの全般的な正常性を判断します。

Sync run history (5)						
Status / Summary	Start time	End time	Added / Modified	Deleted	Failed	Details
◀ Syncing - indexing	Apr 29, 2020, 9:53 AM PDT	Apr 29, 2020, 9:54 AM PDT	◀	◀	◀	View in CloudWatch
✔ Succeeded	Apr 28, 2020, 1:35 PM PDT	Apr 28, 2020, 1:37 PM PDT	1484	0	2	Service is operating normally 🔗
✔ Succeeded	Apr 28, 2020, 1:32 PM PDT	Apr 28, 2020, 1:32 PM PDT	0	0	0	Service is operating normally 🔗
✔ Succeeded	Apr 28, 2020, 1:05 PM PDT	Apr 28, 2020, 1:06 PM PDT	5	0	0	Service is operating normally 🔗
✔ Succeeded	Apr 28, 2020, 1:05 PM PDT	Apr 28, 2020, 1:05 PM PDT	298	0	1	Service is operating normally 🔗

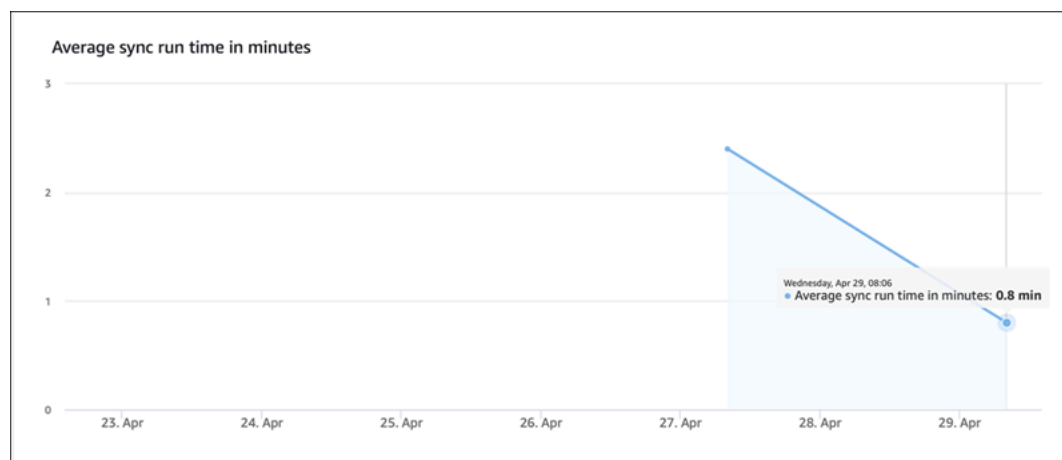
- ドキュメント数 - このデータソースからインデックスが作成されたドキュメントの合計数。これは、データソースに追加されたすべてのドキュメントの合計からデータソースから削除されたすべてのドキュメントの合計を引いた値です。この情報を使用して、このデータソースからインデックスに含まれるドキュメントの数を特定します。



- ドキュメントスキャン - 同期実行中にスキャンされたドキュメントの合計数。これには、追加、更新、削除されたドキュメント、または変更されていないドキュメントなど、データソース内のすべてのドキュメントが含まれます。この情報を使用して、Amazon Kendra がデータソース内のすべてのドキュメントをスキャンしているかどうかを判断します。スキャンされたドキュメントの数は、サービスの請求額に影響します。



- 平均同期実行時間 (分) - 同期実行が完了するまでにかかった平均時間。データソースの同期にかかる時間は、サービスの請求額に影響します。



ログを使用した Amazon Kendra API コールの AWS CloudTrail ログ記録

Amazon Kendra は AWS CloudTrail、Amazon Kendra のユーザー、ロール、または サービスによって実行されたアクションを記録する AWS サービスであると統合されています。CloudTrail は、Amazon Kendra コンソールからの呼び出しと Amazon Kendra API へのコード呼び出しからの呼び出しを含む、Amazon Kendra からのすべての API コールをイベントとしてキャプチャします。追跡を作成する場合は、Amazon Kendra のイベントなど、Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にできます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail で収集された情報を使用して、Amazon Kendra に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

設定や有効化の方法など、CloudTrail の詳細については、「[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)」を参照してください。

CloudTrail 内の Amazon Kendra 情報

CloudTrail は、AWS アカウントの作成時にアカウントでアクティブ化されます。Amazon Kendra でアクティビティが発生すると、そのアクティビティは CloudTrail [Event history] (イベント履歴) の他の AWS サービスイベントと共に CloudTrail イベントに記録されます。AWS アカウントで最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、「[CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示](#)」を参照してください。

Amazon Kendra のイベントなど、AWS アカウントのイベントの継続的な記録については、証跡を作成します。[証跡] は、指定された S3 バケットに CloudTrail がイベントをログファイルとして配信

できるようにする設定です。デフォルトでは、コンソールで証跡を作成すると、すべての AWS リージョンに証跡が適用されます。証跡は、AWS パーティション内のすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集されたイベントデータをより詳細に分析し、それに基づいて行動するように、他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下を参照してください。

- [証跡を作成するための概要](#)
- [CloudTrail がサポートするサービスと統合](#)
- [CloudTrail 用 Amazon SNS 通知の構成](#)
- 「[複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取る](#)」および「[複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る](#)」

CloudTrail では、[API リファレンス](#)で文書化されているすべての Amazon Kendra アクションがログに記録されます。たとえば CreateIndex、CreateDataSource、および Query の各オペレーションへのコールは、CloudTrail ログファイル内にエントリを生成します。

各イベントまたはログエントリには、リクエストの生成者に関する情報が含まれます。詳細については、[CloudTrail userIdentity 要素](#)を参照してください。

例: Amazon Kendra ログファイルのエントリ

[証跡] は、指定された S3 バケットにイベントをログファイルとして配信できるようにする設定です。CloudTrail のログファイルは、単一か複数のログエントリを含みます。イベント は、任意の出典からの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストパラメータなどに関する情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API 呼び出しの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

Query 演算を呼び出すと、以下のエントリが作成されます。

```
{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole | FederatedUser | IAMUser | Root | SAMLUser | WebIdentityUser",
    "principalId": "principal ID",
    "arn": "ARN",
    "accountId": "account ID",
    "accessKeyId": "access key ID",
```



```

    "sessionContext": {
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "principal Id",
        "arn": "ARN",
        "accountId": "account ID",
        "userName": "user name"
      },
      "webIdFederationData": {

      },
      "attributes": {
        "mfaAuthenticated": false,
        "creationDate": "timestamp"
      }
    },
    "eventTime": "timestamp",
    "eventSource": "kendra.amazonaws.com",
    "eventName": "Query",
    "awsRegion": "region",
    "sourceIPAddress": "source IP address",
    "userAgent": "user agent",
    "requestParameters": {
      "indexId": "index ID"
    },
    "responseElements": null,
    "requestID": "request ID",
    "eventID": "event ID",
    "eventType": "AwsApiCall",
    "recipientAccountId": "account ID"
  },

```

ログを使用した Amazon Kendra Intelligent Ranking API コールの AWS CloudTrail ログ記録

Amazon Kendra Intelligent Ranking は AWS CloudTrail、Amazon Kendra Intelligent Ranking のユーザー、ロール、または サービスによって実行されたアクションを記録する AWS サービスであると統合されています。CloudTrail は、Amazon Kendra インテリジェントランキング API へのコード呼び出しを含む、Amazon Kendra インテリジェントランキングからのすべての API コールをイベントとしてキャプチャします。追跡を作成する場合は、Amazon Kendra インテリジェントランキングの

イベントなど、Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail で収集された情報を使用して、Amazon Kendra インテリジェントランキングに対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

設定や有効化の方法など、CloudTrail の詳細については、「[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)」を参照してください。

CloudTrail 内の Amazon Kendra インテリジェントランキングの情報

CloudTrail は、AWS アカウントの作成時にアカウントでアクティブ化されます。Amazon Kendra Intelligent Ranking でアクティビティが発生すると、そのアクティビティは CloudTrail イベント履歴の他の AWS サービスイベントとともに CloudTrail イベントに記録されます。最近のイベントは、AWS アカウントで表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、「[CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示](#)」を参照してください。

Amazon Kendra Intelligent Ranking のイベントなど、AWS アカウントのイベントの継続的な記録については、証跡を作成します。[証跡] は、指定された S3 バケットに CloudTrail がイベントをログファイルとして配信できるようにする設定です。デフォルトでは、コンソールで証跡を作成すると、証跡はすべての AWS リージョンに適用されます。証跡は、AWS パーティション内のすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集されたイベントデータをより詳細に分析し、それに基づいて行動するように、他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下を参照してください。

- [証跡を作成するための概要](#)
- [CloudTrail がサポートするサービスと統合](#)
- [CloudTrail 用 Amazon SNS 通知の構成](#)
- 「[複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取る](#)」および「[複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る](#)」

CloudTrail では、[API リファレンス](#)で文書化されているすべての Amazon Kendra インテリジェントランキングのアクションがログに記録されます。例えば、CreateRescoreExecutionPlan への呼び出しによって、CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、リクエストの生成者に関する情報が含まれます。詳細については、[CloudTrail userIdentity 要素](#)を参照してください。

例: Amazon Kendra インテリジェントランキングのログファイルのエントリ

[証跡] は、指定された S3 バケットにイベントをログファイルとして配信できるようにする設定です。CloudTrail のログファイルは、単一か複数のログエントリを含みます。イベント は、任意の出典からの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストパラメータなどに関する情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API 呼び出しの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

CreateRescoreExecutionPlan 演算を呼び出すと、以下のエントリが作成されます。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
    "principalId": "principal ID",
    "arn": "ARN",
    "accountId": "account ID",
    "accessKeyId": "access key ID",
    "sessionContext": {
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "principal ID",
        "arn": "ARN",
        "accountId": "account ID",
        "userName": "user name"
      },
      "webIdFederationData": {},
      "attributes": {
        "creationDate": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
        "mfaAuthenticated": "false"
      }
    }
  },
  "eventTime": "yyyy-mm-ddThh:mm:ssZ",
  "eventSource": "kendra-ranking.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateRescoreExecutionPlan",
  "awsRegion": "region",
  "sourceIPAddress": "source IP address",
  "userAgent": "user agent",
  "requestParameters": {
    "name": "name",
```

```

        "description": "description",
        "clientToken": "client token"
    },
    "responseElements": {
        "id": "rescore execution plan ID",
        "arn": "rescore execution plan ARN"
    },
    "requestID": "request ID",
    "eventID": "event ID",
    "readOnly": false,
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "account ID",
    "eventCategory": "Management",
    "tlsDetails": {
        "tlsVersion": "TLS version",
        "cipherSuite": "cipher suite",
        "clientProvidedHostHeader": "kendra-ranking.[region].api.aws"
    }
}

```

Amazon CloudWatch による Amazon Kendra のモニタリング

インデックスの正常性を追跡するには、Amazon CloudWatch を使用します。CloudWatch では、インデックスのドキュメント同期のメトリクスを取得できます。定義したしきい値を 1 つ以上のメトリクスが超えたときに通知するよう CloudWatch アラームを設定することもできます。例えば、インデックス作成するために送信されたドキュメントの数やインデックス作成に失敗したドキュメントの数をモニタリングできます。

CloudWatch で Amazon Kendra をモニタリングするには、適切な CloudWatch アクセス許可が必要です。詳細については、Amazon CloudWatch ユーザーガイドの [Amazon CloudWatch に対する認証とアクセスコントロール](#) を参照してください。

Amazon Kendra メトリクスの表示

Amazon CloudWatch コンソールを使用して Amazon Kendra メトリクスを表示します。

メトリクスを表示する方法 (CloudWatch コンソール)

1. にサインイン AWS Management Console し、 <https://console.aws.amazon.com/cloudwatch/> で CloudWatch コンソールを開きます。

2. [Metrics] (メトリクス)、[All Metrics] (すべてのメトリクス)、[Kendra] の順に選択します。
3. デイメンションを選択してメトリクスの名前を選んだら、[Add to graph] (グラフへ追加) を選択します。
4. 日付範囲の値を選択します。選択した日付範囲のメトリクスカウントがグラフに表示されます。

アラームを作成する

CloudWatch アラームは指定期間中に単一のメトリクスを監視し、1 つ以上のアクションを実行して Amazon Simple Notification Service (Amazon SNS) トピックまたは Auto Scaling ポリシーに通知を送信します。アクションは、複数の指定期間にわたって特定のしきい値を基準としたメトリクスの値に応じて実行されます。アラームの状態が変わったときにも、CloudWatch は Amazon SNS メッセージを送信できます。

CloudWatch アラームがアクションを呼び出すのは、状態が変わってから指定期間が経過するまで、その新しい状態が続いた場合に限りです。

アラームを設定するには

1. にサインイン AWS Management Console し、<https://console.aws.amazon.com/cloudwatch/> で CloudWatch コンソールを開きます。
2. [アラーム] を選択し、次に [アラームの作成] を選択します。
3. メトリクスを選択します。インデックスとデータソースの [Kendra] メトリクスを選択します。また、時間を時間、日、週、またはカスタムから設定します。
4. 統計情報を選択します。例えば、[平均] などです。また、アラームのトリガー時間を分単位、時間単位、1 日単位、またはカスタムから選択します。
5. アラームをトリガーするために使用するしきい値 (固定値、幅) と、しきい値に該当する条件を選択します。
6. トリガーのアラーム状態 (メトリクスが設定したしきい値を外れる必要があるか、または別の状態か) を選択します。アラームの通知先/E メールを選択します。
7. アラームに問題がなければ、[アラームの作成] を選択します。

Note

CloudWatch アラームの名前を入力する必要があります。

インデックス同期ジョブの CloudWatch メトリクス

次の表は、データソース同期ジョブの Amazon Kendra メトリクスの説明です。

API または CLI を使用する場合は、[GetMetricStatistics API](#) を使用するときを選択した MetricName に加えて、Namespace を「AWS/Kendra」として指定する必要があります。

メトリクス	説明
DocumentsCrawled	同期ジョブの実行中にスキャンまたは検出されたドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsSubmittedForIndexing	同期ジョブがインデックスに送信したドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsSubmittedForIndexingFailed	インデックス作成に失敗したドキュメントの数。詳細については、同期ジョブの CloudWatch ログの内容を確認してください。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId

メトリクス	説明
	単位: 数
DocumentsSubmittedForDeletion	同期ジョブがインデックスから削除するよう指示したドキュメントの数。 ディメンション: - IndexId - DataSourceId 単位: 数
DocumentsSubmittedForDeletionFailed	削除に失敗したドキュメントの数。詳細については、同期ジョブの CloudWatch ログの内容を確認してください。 ディメンション: - IndexId - DataSourceId 単位: 数

Amazon Kendra データソースのメトリクス

次の表は、データソース同期ジョブの Amazon Kendra メトリクスの説明です。アスタリスク (*) が付いたメトリクスは、Amazon S3 データソースにのみ使用されます。

API または CLI を使用する場合は、[GetMetricStatistics API](#) を使用するときを選択した MetricName に加えて、Namespace を「AWS/Kendra」として指定する必要があります。

メトリクス	説明
DocumentsSkippedNoChange *	調査され、インデックス作成のために送信されなかったために変更されていないことが判明したドキュメント数。

メトリクス	説明
	ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsSkippedInvalidMetadata*	関連するメタデータファイルに問題があったため、スキップされたドキュメントの数。詳細については、同期実行の CloudWatch ログの内容を確認してください。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsCrawled	検査されたドキュメントファイルの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数

メトリクス	説明
DocumentsSubmittedForDeletion	データソースから削除され、削除のために送信された調査済みドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsSubmittedForDeletionFailed	データソースからの削除に失敗したドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsSubmittedForIndexing	インデックス作成のために調査および送信されたドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数

メトリクス	説明
DocumentsSubmittedForIndexingFailed	インデックス作成のために送信され、インデックス作成できなかったドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数

インデックス作成されたドキュメントのメトリクス

次の表は、インデックス作成されたドキュメントの Amazon Kendra メトリクスの説明です。[BatchPutDocument](#) オペレーションを使用してインデックス作成されたドキュメントの場合、IndexId ディメンションのみがサポートされています。

API または CLI を使用する場合は、[GetMetricStatistics API](#) を使用するときを選択した MetricName に加えて、Namespace を「AWS/Kendra」として指定する必要があります。

メトリクス	説明
DocumentsIndexed	インデックスが作成されたドキュメントの数。 ディメンション: • IndexId • DataSourceId 単位: 数
DocumentsFailedToIndex	インデックスが作成できなかったドキュメントの数。詳細については、CloudWatch ログの内容を確認してください。 ディメンション:

メトリクス	説明
	• IndexId • DataSourceId 単位: 数
IndexQueryCount	1 分あたりのインデックスクエリの数。 ディメンション: • IndexId 単位: 数

Amazon CloudWatch Logs による Amazon Kendra のモニタリング

Amazon Kendra は Amazon CloudWatch Logs を使用して、データソースの操作に関するインサイトを提供します。Amazon Kendra のログは、インデックスが作成されたドキュメントの詳細をログに記録します。ドキュメントのインデックス作成中に発生したデータソースからのエラーをログに記録します。CloudWatch Logs を使用して、ログファイルをモニタリング、保存、およびアクセスできます。

CloudWatch Logs は、ロググループの一部であるログストリームにログイベントを保存します。Amazon Kendra はこれらの機能を次のように使用します。

- ロググループ - Amazon Kendra は、すべてのログストリームをインデックスごとに 1 つのロググループに保存します。Amazon Kendra は、インデックスの作成時にロググループを作成します。ロググループ識別子は常に「aws/kendra/」で始まります。
- ログストリーム - Amazon Kendra は、実行するインデックス同期ジョブごとに、ロググループに新しいデータソースログストリームを作成します。また、ストリームが約 500 エントリに達すると、新しいドキュメントログストリームが作成されます。
- ログエントリ - Amazon Kendra は、ドキュメントのインデックス作成時にログストリームにログエントリを作成します。各エントリは、ドキュメントの処理または発生したエラーに関する情報を提供します。

CloudWatch Logs の使用方法の詳細については、Amazon CloudWatch Logs ユーザーガイドの [Amazon CloudWatch Logs とは](#) を参照してください。

Amazon Kendra は 2 つのタイプのログストリームを作成します。

- [データソースログストリーム](#)
- [ドキュメントログストリーム](#)

データソースログストリーム

データソースログストリームは、インデックス同期ジョブに関するエントリを公開します。各同期ジョブは、エントリの公開に使用する新しいログストリームを作成します。ログストリーム名は次のとおりです。

```
data source id/YYYY-MM-DD-HH/data source sync job ID
```

同期ジョブの実行ごとに、新しいログストリームが作成されます。

データソースログストリームに発行されるログメッセージには 3 つのタイプがあります。

- インデックス作成の送信に失敗したドキュメントのログメッセージ。S3 データソース内のドキュメントに対するこのメッセージの例を以下に示します。

```
{
  "DocumentId": "document ID",
  "S3Path": "s3://bucket/prefix/object",
  "Message": "Failed to ingest document via BatchPutDocument.",
  "ErrorCode": "InvalidRequest",
  "ErrorMessage": "No document metadata configuration found for document attribute
key  city."
}
```

- 削除の送信に失敗したドキュメントのログメッセージ。以下は、このメッセージの例です。

```
{
  "DocumentId": "document ID",
  "Message": "Failed to delete document via BatchDeleteDocument.",
  "ErrorCode": "InvalidRequest",
  "ErrorMessage": "Document can't be deleted because it doesn't exist."
}
```

- Amazon S3 バケット内のドキュメントの無効なメタデータファイルが見つかった場合のログメッセージ。以下は、このメッセージの例です。

```
{
  "Message": "Found invalid metadata
file bucket/prefix/filename.extension.metadata.json."
}
```

- SharePoint およびデータベースコネクタの場合、Amazon Kendra はドキュメントにインデックスを作成できない場合にのみメッセージをログストリームに書き込みます。Amazon Kendra がログに記録するエラーメッセージの例を以下に示します。

```
{
  "DocumentID": "document ID",
  "IndexID": "index ID",
  "SourceURI": "",
  "CrawlStatus": "FAILED",
  "ErrorCode": "403",
  "ErrorMessage": "Access Denied",
  "DataSourceErrorCode": "403"
}
```

ドキュメントログストリーム

Amazon Kendra は、インデックス作成中にドキュメントの処理に関する情報をログに記録します。Amazon S3 データソースに保存されたドキュメントの一連のメッセージをログに記録します。Microsoft SharePoint またはデータベースデータソースに保存されているドキュメントについてのみエラーを記録します。

ドキュメントが [BatchPutDocument](#) 演算を使用してインデックスに追加された場合、ログストリームには次のように名前が付けられます。

```
YYYY-MM-DD-HH/UUID
```

ドキュメントがデータソースを使用してインデックスに追加された場合では、ログストリームは次のように名前が付けられます。

```
dataSourceId/YYYY-MM-DD-HH/UUID
```

各ログストリームには最大 500 個のメッセージが含まれます。

ドキュメントのインデックス作成に失敗すると、次のメッセージがログストリームに出力されます。

```
{
  "DocumentId": "document ID",
  "IndexName": "index name",
  "IndexId": "index ID"
  "SourceURI": "source URI"
  "IndexingStatus": "DocumentFailedToIndex",
  "ErrorCode": "400 | 500",
  "ErrorMessage": "message"
}
```

同期ジョブの Amazon Kendra メトリクスを表示する

レポートの表示を選択すると、データソース同期ジョブのドキュメントレベルの同期実行履歴レポートを CloudWatch で表示できます。同期実行履歴レポートには、同期ジョブの各ドキュメントの進行状況とステータスに関する詳細が含まれます。クロール、同期、インデックスの作成の各段階でドキュメントが成功、失敗、スキップのどれになったかがわかります。失敗したドキュメントまたはスキップされたドキュメントに関連するエラーメッセージも表示されます。レポートに進行中の同期ジョブの結果が表示されない場合、ログはまだ使用できる状態になっていない可能性があります。同期プロセス中にイベントが発生するとデータがレポートに出力されるため、後で改めて確認してください。

同期実行履歴レポートにアクセスするには、次のステップを実行します。

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. 左側のナビゲーションメニューから、データ管理でデータソースを選択し、データソースを選択します。
3. データソースの概要ページから、下にスクロールして同期履歴タブを選択します。
4. 同期実行履歴から、アクションを選択します。
5. アクション から、レポートの表示 を選択します。レポートにアクセスできる CloudWatch コンソールにリダイレクトされます。

 Note

同期実行履歴は、アタッチされた ACLs やメタデータなど、Amazon Kendra がサポートするすべてのコネクタの取り込み中にドキュメントのインデックスが正常に作成されたかどうかを記録します。

Amazon S3 コネクタを使用している場合：

CloudWatch でドキュメントレベルの同期実行履歴レポートを作成することに加えて、Amazon S3 データソース内の各ドキュメントの同期履歴レポートを生成し、Amazon S3 バケットにコピーできます。このプロセス中、データは AWS KMS キーを使用して暗号化され、ユーザーのみが表示できます。報告されたドキュメントのステータスは、[失敗]、[完了]、または [成功 (エラーあり)] のいずれかになります。Amazon S3 の同期ステータスレポートを生成する前に、以下を実行する必要があります。

- Amazon S3 アクセスポリシーに次の Amazon Kendra サービスプリンシパルを追加する

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "KendraS3Access",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "s3:PutObject",
      "Resource": "arn:aws:s3:::your-manifest-bucket-name/*"
    }
  ]
}
```

- へのアクセス許可を持つ Amazon S3 バケットを作成する Amazon Kendra

コンソールを使用して Amazon S3 の同期履歴レポートを生成する場合は、同期履歴レポートからレポートを生成するオプション - データソースの詳細ページのオプションセクションを選択します。次に、Amazon S3 バケットの場所を入力し、使用可能な設定オプションから選択します。レポート生成を有効にすると、次の同期からレポートが生成されます。

Amazon S3 バケットを削除すると、ログデータが失われ、新しい同期レポートを保存する新しいバケットを設定する必要があります。

 Note

同期履歴レポートには、Amazon S3 コネクタがデータを正常にクロールして取り込んだかどうかに関する情報のみが表示されます。

Amazon Kendra でのセキュリティ

のクラウドセキュリティが最優先事項 AWS です。お客様は AWS、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築されたデータセンターとネットワークアーキテクチャを活用できます。

セキュリティは、AWS お客様とお客様の間の責任共有です。[責任共有モデル](#)では、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティと説明しています。

- クラウドのセキュリティAWS — クラウドで AWS AWS サービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任があります。AWS また、では、安全に使用できるサービスも提供しています。サードパーティーの監査者は、[AWS コンプライアンスプログラム](#)コンプライアンスプログラムの一環として、当社のセキュリティの有効性を定期的にテストおよび検証。Amazon Kendra に適用されるコンプライアンスプログラムの詳細については、「コンプライアンスプログラム[AWS による対象範囲内のサービスコンプライアンスプログラム](#)」を参照してください。
- クラウド内のセキュリティ — お客様の責任は、使用する AWS サービスによって決まります。また、ユーザーは、データの機密性、会社の要件、適用される法律や規制など、その他の要因についても責任を負います。

このドキュメントは、Amazon Kendra 使用時における責任共有モデルの適用法を理解するのに役立ちます。以下のトピックでは、セキュリティとコンプライアンスの目的を満たすように Amazon Kendra を設定する方法について説明します。また、Amazon Kendra リソースのモニタリングや保護に役立つ他の AWS サービスの使用方法についても説明します。

トピック

- [Amazon Kendra のデータ保護](#)
- [Amazon Kendra Amazon Kendra Intelligent Ranking とインターフェイス VPC エンドポイント \(AWS PrivateLink \)](#)
- [Amazon Kendra 用の Identity and Access Management](#)
- [セキュリティに関するベストプラクティス](#)
- [Amazon Kendra でのログ記録とモニタリング](#)
- [Amazon Kendra のコンプライアンス検証](#)
- [Amazon Kendra の耐障害性](#)
- [Amazon Kendra でのインフラストラクチャセキュリティ](#)
- [での設定と脆弱性の分析 AWS Identity and Access Management](#)

Amazon Kendra のデータ保護

AWS [責任共有モデル](#)、Amazon Kendra でのデータ保護に適用されます。このモデルで説明されているように、AWS はすべての を実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任があります AWS クラウド。ユーザーは、このインフラストラクチャでホストされるコンテンツに対する管理を維持する責任があります。また、使用する「AWS のサービス」のセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、[データプライバシーに関するよくある質問](#)を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、AWS セキュリティブログに投稿された [AWS 責任共有モデルおよび GDPR](#) のブログ記事を参照してください。

データ保護の目的で、認証情報を保護し AWS アカウント、AWS IAM Identity Center または AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して個々のユーザーを設定することをお勧めします。この方法により、それぞれのジョブを遂行するために必要な権限のみが各ユーザーに付与されます。また、次の方法でデータを保護することもお勧めします:

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2 が必須で、TLS 1.3 をお勧めします。
- で API とユーザーアクティビティのログ記録を設定します AWS CloudTrail。CloudTrail 証跡を使用して AWS アクティビティをキャプチャする方法については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」の[CloudTrail 証跡の使用](#)を参照してください。
- AWS 暗号化ソリューションと、内のすべてのデフォルトのセキュリティコントロールを使用します AWS のサービス。
- Amazon Macie などの高度な管理されたセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API AWS を介して にアクセスするときに FIPS 140-3 検証済み暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、「[連邦情報処理規格 \(FIPS\) 140-3](#)」を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの極秘または機密情報を、タグ、または [名前] フィールドなどの自由形式のテキストフィールドに含めないことを強くお勧めします。これは、コンソール、API、または SDK を使用して Amazon Kendra AWS CLI または他の AWS のサービス を使用する場合も同様です。AWS SDKs タグ、または名前に使用される自由記述のテキストフィールドに入力したデータは、請求または診断ログに使用される場合があります。外部サーバーに URL を提供する場合、そのサーバーへのリクエストを検証できるように、認証情報を URL に含めないことを強くお勧めします。

保管中の暗号化

Amazon Kendra は、選択した暗号化キーを使用して、保管中のデータを暗号化します。次のいずれかを選択できます。

- 所有 AWS の KMS AWS キー。暗号化キーを指定しない場合、デフォルトでは、データはこのキーを使用して暗号化されます。
- アカウントの AWS マネージド KMS キー。このキーは、Amazon Kendra によってお客様に代わって作成、管理、使用されます。キー名は、aws/kendra です。
- カスタマー マネージド キー。アカウントで作成した暗号化キーの ARN を指定できます。カスタマー マネージド KMS キーを使用する場合、キーに Amazon Kendra がキーを使用できるようにするキーポリシーを付与する必要があります。対称暗号化カスタマー マネージド KMS キーを選択してください。Amazon Kendra は非対称 KMS キーはサポートしていません。詳細については、「[キー管理](#)」を参照してください。

転送中の暗号化

Amazon Kendra は HTTPS プロトコルを使用して、クライアントアプリケーションと通信します。HTTPS と AWS 署名を使用して、アプリケーションに代わって他の サービスと通信します。VPC を使用する場合は、AWS PrivateLink を使用して VPC と Amazon Kendra 間のプライベート接続を確立できます。

キー管理

Amazon Kendra は、3 種類のキーのいずれかを使用してインデックスの内容を暗号化します。次のいずれかを選択できます。

- AWS 所有 AWS の KMS。これがデフォルトです。
- AWS マネージド KMS キー。このキーは、Amazon Kendra によってお客様に代わってお客様のアカウントで作成され、管理および使用されます。
- カスタマー マネージド KMS キー。Amazon Kendra インデックスまたはデータソースを作成するときにキーを作成するか、AWS KMS コンソールを使用してキーを作成できます。対称暗号化カスタマー マネージド KMS キーを選択します。Amazon Kendra は非対称 KMS キーをサポートしていません。詳細については、AWS Key Management Service Developer Guide の[対称キーと非対称キーの使用](#)を参照してください。

Amazon Kendra Amazon Kendra Intelligent Ranking とインターフェイス VPC エンドポイント (AWS PrivateLink)

VPC と Amazon Kendra とのプライベート接続を確立するには、インターフェイス VPC エンドポイントを作成します。インターフェイスエンドポイントは、インターネットゲートウェイ[AWS PrivateLink](#)、NAT デバイス、VPN 接続、または AWS Direct Connect 接続なしで Amazon Kendra APIs にプライベートにアクセスできるテクノロジーである [VPC エンドポイント](#) を利用しています。VPC のインスタンスは、パブリック IP アドレスがなくても Amazon Kendra API と通信できます。VPC と Amazon Kendra 間のトラフィックは Amazon ネットワークを離れません。

各インターフェイスエンドポイントは、サブネット内の 1 つ以上の [Elastic Network Interface](#) によって表されます。

Amazon Kendra および Amazon Kendra Intelligent Ranking VPC エンドポイントに関する考慮事項

Amazon Kendra または Amazon Kendra Intelligent Ranking のインターフェイス VPC エンドポイントを設定する前に、Amazon VPC ユーザーガイドの[前提条件](#)を確認してください。

Amazon Kendra と Amazon Kendra Intelligent Ranking は、VPC からのすべての API アクションの呼び出しをサポートしています。

Amazon Kendra および Amazon Kendra Intelligent Ranking 用のインターフェイス VPC エンドポイントの作成

Amazon VPC コンソールまたは AWS Command Line Interface () を使用して、Amazon Kendra または Amazon Kendra Intelligent Ranking サービスの VPC エンドポイントを作成できますAWS CLI。

Amazon Kendra 用の VPC エンドポイントを作成するには、次のサービス名を使用します。

- com.amazonaws.*region*.kendra

次のサービス名を使用して、Amazon Kendra Intelligent Ranking の VPC エンドポイントを作成します。

- aws.api.region.kendra-ranking

VPC エンドポイントを作成したら、`endpoint-url`パラメータを使用して Amazon Kendra API へのインターフェイスエンドポイントを指定する次の AWS CLI コマンド例を使用できます。

```
aws kendra list-indices --endpoint-url https://VPC endpoint
```

[VPC #####] は、インターフェイスエンドポイントの作成時に生成される DNS 名です。この名前には、VPC エンドポイント ID と、リージョンを含む Amazon Kendra サービス名が含まれます。例えば、`vpce-1234-abcdef.kendra.us-west-2.vpce.amazonaws.com`。

エンドポイントのプライベート DNS をアクティブ化する場合、リージョンのデフォルトの DNS 名を使用して Amazon Kendra に API リクエストを行うことができます。例えば、`{kendra.us-east-1.amazonaws.com}`。

詳細については、Amazon VPC ユーザーガイドの [インターフェイスエンドポイントの作成](#) を参照してください。

Amazon Kendra および Amazon Kendra Intelligent Ranking 用の VPC エンドポイントポリシーの作成

Amazon Kendra または Amazon Kendra Intelligent Ranking へのアクセスを制御するエンドポイントポリシーを VPC エンドポイントにアタッチできます。

Amazon Kendra または Amazon Kendra Intelligent Ranking のポリシーでは、次の情報を指定します。

- アクションを実行できるプリンシパル/承認済みユーザー。
- 実行可能なアクション。
- アクションを実行できるリソース。

例: Amazon Kendra アクションの VPC エンドポイントポリシー

Amazon Kendraのエンドポイントポリシーの例を次に示します。エンドポイントにアタッチすると、このポリシーは、すべてのリソースのすべてのプリンシパル/承認されたユーザーに対して、使用可能なすべての Amazon Kendra アクションへのアクセスを許可します。

```
{  
  "Statement": [  
    {
```

```
    "Principal": "*",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kendra:*"
    ],
    "Resource": "*"
  }
]
```

例: Amazon Kendra Intelligent Ranking アクションの VPC エンドポイントポリシー

以下は、Amazon Kendra Intelligent Ranking のエンドポイントポリシーの例です。エンドポイントにアタッチすると、このポリシーは、すべてのリソースのすべてのプリンシパル/承認されたユーザーに対して、使用可能なすべての Amazon Kendra Intelligent Ranking アクションへのアクセスを許可します。

```
{
  "Statement": [
    {
      "Principal": "*",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra-ranking:*"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

詳細については、「[Amazon VPC ユーザーガイド](#)」の「[エンドポイントポリシーを使用した VPC エンドポイントへのアクセスの制御](#)」を参照してください。

Amazon Kendra 用の Identity and Access Management

AWS Identity and Access Management (IAM) は、管理者が AWS リソースへのアクセスを安全に制御 AWS のサービス するのに役立つです。IAM 管理者は、誰を認証 (サインイン) し、誰に Amazon Kendra リソースの使用を承認する (アクセス許可を付与する) かを制御します。IAM は、追加料金なしで使用できる AWS のサービス です。

トピック

- [対象者](#)
- [アイデンティティを使用した認証](#)
- [ポリシーを使用したアクセスの管理](#)
- [Amazon Kendra で IAM が機能する仕組み](#)
- [Amazon Kendra のアイデンティティベースポリシーの例](#)
- [AWS Amazon Kendra の マネージドポリシー](#)
- [Amazon Kendra アイデンティティとアクセスのトラブルシューティング](#)

対象者

AWS Identity and Access Management (IAM) の使用方法は、Amazon Kendra で行う作業によって異なります。

サービスユーザー - ジョブを実行するために Amazon Kendra サービスを使用する場合は、管理者から必要なアクセス許可と認証情報が与えられます。さらに多くの Amazon Kendra 機能を使用して作業を行う場合は、追加のアクセス許可が必要になることがあります。アクセスの管理方法を理解すると、管理者に適切なアクセス許可をリクエストするのに役に立ちます。Amazon Kendra の機能にアクセスできない場合は、[Amazon Kendra アイデンティティとアクセスのトラブルシューティング](#) を参照してください。

サービス管理者 - 社内の Amazon Kendra リソースを担当している場合は、Amazon MQ に対する完全なアクセス権があると思われます。サービスのユーザーがどの Amazon Kendra 機能やリソースにアクセスするかを決めるのは管理者の仕事です。その後、IAM 管理者にリクエストを送信して、サービスユーザーの権限を変更する必要があります。このページの情報を点検して、IAM の基本概念を理解してください。会社で Amazon Kendra と IAM を併用する方法の詳細については、[Amazon Kendra で IAM が機能する仕組み](#) を参照してください。

IAM 管理者 - 管理者は、Amazon Kendra へのアクセスを管理するポリシーの作成方法の詳細について確認する場合があります。IAM で使用できる Amazon Kendra アイデンティティベースのポリシーの例を表示するには、[Amazon Kendra のアイデンティティベースポリシーの例](#) を参照してください。

アイデンティティを使用した認証

認証とは、ID 認証情報 AWS を使用してサインインする方法です。として、IAM ユーザーとして AWS アカウントのルートユーザー、または IAM ロールを引き受けることによって、認証 (にサインイン AWS) される必要があります。

ID ソースを介して提供された認証情報を使用して、フェデレーティッド ID AWS としてサインインできます。AWS IAM Identity Center (IAM Identity Center) ユーザー、会社のシングルサインオン認証、Google または Facebook 認証情報は、フェデレーション ID の例です。フェデレーティッド ID としてサインインする場合、IAM ロールを使用して、前もって管理者により ID フェデレーションが設定されています。フェデレーションを使用してアクセスすると、間接的に AWS にロールを引き受けることになります。

ユーザーの種類に応じて、AWS Management Console または AWS アクセスポータルにサインインできます。へのサインインの詳細については AWS、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「[へのサインイン AWS アカウント](#)方法」を参照してください。

AWS プログラムでアクセスする場合、はソフトウェア開発キット (SDK) とコマンドラインインターフェイス (CLI) AWS を提供し、認証情報を使用してリクエストを暗号化して署名します。AWS ツールを使用しない場合は、自分でリクエストに署名する必要があります。リクエストに自分で署名する推奨方法の使用については、「IAM ユーザーガイド」の「[API リクエストに対する AWS Signature Version 4](#)」を参照してください。

使用する認証方法を問わず、追加セキュリティ情報の提供をリクエストされる場合もあります。たとえば、では、アカウントのセキュリティを高めるために多要素認証 (MFA) を使用する AWS ことをお勧めします。詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[多要素認証](#)」および「IAM ユーザーガイド」の「[IAM の AWS 多要素認証](#)」を参照してください。

AWS アカウント ルートユーザー

を作成するときは AWS アカウント、アカウント内のすべての およびリソースへの AWS のサービス完全なアクセス権を持つ 1 つのサインインアイデンティティから始めます。この ID は AWS アカウント ルートユーザーと呼ばれ、アカウントの作成に使用した E メールアドレスとパスワードでサインインすることでアクセスできます。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザーの認証情報は保護し、ルートユーザーでしか実行できないタスクを実行するときに使用します。ルートユーザーとしてサインインする必要があるタスクの完全なリストについては、「IAM ユーザーガイド」の「[ルートユーザー認証情報が必要なタスク](#)」を参照してください。

IAM ユーザーとグループ

[IAM ユーザー](#)は、単一のユーザーまたはアプリケーションに対して特定のアクセス許可 AWS アカウントを持つ 内の ID です。可能であれば、パスワードやアクセスキーなどの長期的な認証情報を保有する IAM ユーザーを作成する代わりに、一時的な認証情報を使用することをお勧めします。ただし、IAM ユーザーでの長期的な認証情報が必要な特定のユースケースがある場合は、アクセスキー

をローテーションすることをお勧めします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[長期的な認証情報を必要とするユースケースのためにアクセスキーを定期的にローテーションする](#)」を参照してください。

[IAM グループ](#)は、IAM ユーザーの集団を指定するアイデンティティです。グループとしてサインインすることはできません。グループを使用して、複数のユーザーに対して一度に権限を指定できます。多数のユーザーグループがある場合、グループを使用することで権限の管理が容易になります。例えば、IAMAdmins という名前のグループを設定して、そのグループに IAM リソースを管理する許可を与えることができます。

ユーザーは、ロールとは異なります。ユーザーは 1 人の人または 1 つのアプリケーションに一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。ユーザーには永続的な長期の認証情報がありますが、ロールでは一時認証情報が提供されます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザーに関するユースケース](#)」を参照してください。

IAM ロール

[IAM ロール](#)は、特定のアクセス許可 AWS アカウント を持つ 内の ID です。これは IAM ユーザーに似ていますが、特定のユーザーには関連付けられていません。で IAM ロールを一時的に引き受けるには AWS Management Console、[ユーザーから IAM ロール \(コンソール\) に切り替える](#)ことができます。ロールを引き受けるには、または AWS API オペレーションを AWS CLI 呼び出すか、カスタム URL を使用します。ロールを使用する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ロールを引き受けるための各種方法](#)」を参照してください。

IAM ロールと一時的な認証情報は、次の状況で役立ちます:

- フェデレーションユーザーアクセス - フェデレーティッド ID に許可を割り当てるには、ロールを作成してそのロールの許可を定義します。フェデレーティッド ID が認証されると、その ID はロールに関連付けられ、ロールで定義されている許可が付与されます。フェデレーションのロールについては、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールを作成する](#)」を参照してください。IAM Identity Center を使用する場合は、許可セットを設定します。アイデンティティが認証後にアクセスできるものを制御するため、IAM Identity Center は、権限セットを IAM のロールに関連付けます。アクセス許可セットの詳細については、「AWS IAM Identity Center User Guide」の「[Permission sets](#)」を参照してください。
- 一時的な IAM ユーザー権限 - IAM ユーザーまたはロールは、特定のタスクに対して複数の異なる権限を一時的に IAM ロールで引き受けることができます。
- クロスアカウントアクセス - IAM ロールを使用して、自分のアカウントのリソースにアクセスすることを、別のアカウントの人物 (信頼済みプリンシパル) に許可できます。クロスアカウントアクセス権を付与する主な方法は、ロールを使用することです。ただし、一部の では AWS のサー

ビス、(プロキシとしてロールを使用する代わりに) リソースに直接ポリシーをアタッチできます。クロスアカウントアクセスにおけるロールとリソースベースのポリシーの違いについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのクロスアカウントのリソースへのアクセス](#)」を参照してください。

- クロスサービスアクセス – 一部の は他の の機能 AWS のサービス を使用します AWS のサービス。例えば、あるサービスで呼び出しを行うと、通常そのサービスによって Amazon EC2 でアプリケーションが実行されたり、Amazon S3 にオブジェクトが保存されたりします。サービスでは、呼び出し元プリンシパルの許可、サービスロール、またはサービスリンクロールを使用してこれを行う場合があります。
- 転送アクセスセッション (FAS) – IAM ユーザーまたはロールを使用してアクションを実行すると AWS、プリンシパルと見なされます。一部のサービスを使用する際に、アクションを実行することで、別のサービスの別のアクションがトリガーされることがあります。FAS は、 を呼び出すプリンシパルのアクセス許可を AWS のサービス、ダウストリームサービス AWS のサービスへのリクエストをリクエストする と組み合わせて使用します。FAS リクエストは、サービスが他の AWS のサービス またはリソースとのやり取りを完了する必要があるリクエストを受け取った場合にのみ行われます。この場合、両方のアクションを実行するためのアクセス許可が必要です。FAS リクエストを行う際のポリシーの詳細については、「[転送アクセスセッション](#)」を参照してください。
- サービスロール - サービスがユーザーに代わってアクションを実行するために引き受ける [IAM ロール](#)です。IAM 管理者は、IAM 内からサービスロールを作成、変更、削除することができます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS のサービスに許可を委任するロールを作成する](#)」を参照してください。
- サービスにリンクされたロール – サービスにリンクされたロールは、 にリンクされたサービスロールの一種です AWS のサービス。サービスは、ユーザーに代わってアクションを実行するロールを引き受けることができます。サービスにリンクされたロールは に表示され AWS アカウント、サービスによって所有されます。IAM 管理者は、サービスリンクロールのアクセス許可を表示できますが、編集することはできません。
- Amazon EC2 で実行されているアプリケーション – IAM ロールを使用して、EC2 インスタンスで実行され、AWS CLI または AWS API リクエストを行うアプリケーションの一時的な認証情報を管理できます。これは、EC2 インスタンス内でのアクセスキーの保存に推奨されます。EC2 インスタンスに AWS ロールを割り当て、そのすべてのアプリケーションで使えるようにするには、インスタンスにアタッチされたインスタンスプロファイルを作成します。インスタンスプロファイルにはロールが含まれ、EC2 インスタンスで実行されるプログラムは一時的な認証情報を取得できます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[Amazon EC2 インスタンスで実行されるアプリケーションに IAM ロールを使用して許可を付与する](#)」を参照してください。

ポリシーを使用したアクセスの管理

でアクセスを制御する AWS には、ポリシーを作成し、ID AWS またはリソースにアタッチします。ポリシーは AWS、アイデンティティまたはリソースに関連付けられているときにアクセス許可を定義する のオブジェクトです。は、プリンシパル (ユーザー、ルートユーザー、またはロールセッション) がリクエストを行うときに、これらのポリシー AWS を評価します。ポリシーでの権限により、リクエストが許可されるか拒否されるかが決まります。ほとんどのポリシーは JSON ドキュメント AWS として に保存されます。JSON ポリシードキュメントの構造と内容の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[JSON ポリシー概要](#)」を参照してください。

管理者は JSON AWS ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

デフォルトでは、ユーザーやロールに権限はありません。IAM 管理者は、リソースに必要なアクションを実行するための権限をユーザーに付与する IAM ポリシーを作成できます。その後、管理者はロールに IAM ポリシーを追加し、ユーザーはロールを引き受けることができます。

IAM ポリシーは、オペレーションの実行方法を問わず、アクションの許可を定義します。例えば、iam:GetRole アクションを許可するポリシーがあるとします。そのポリシーを持つユーザーは、AWS Management Console、AWS CLI または AWS API からロール情報を取得できます。

アイデンティティベースのポリシー

アイデンティティベースポリシーは、IAM ユーザーグループ、ユーザーのグループ、ロールなど、アイデンティティにアタッチできる JSON 許可ポリシードキュメントです。これらのポリシーは、ユーザーとロールが実行できるアクション、リソース、および条件をコントロールします。アイデンティティベースポリシーの作成方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[カスタマー管理ポリシーでカスタム IAM アクセス許可を定義する](#)」を参照してください。

アイデンティティベースのポリシーは、さらにインラインポリシーまたはマネージドポリシーに分類できます。インラインポリシーは、単一のユーザー、グループ、またはロールに直接埋め込まれています。管理ポリシーは、内の複数のユーザー、グループ、ロールにアタッチできるスタンドアロンポリシーです AWS アカウント。管理ポリシーには、AWS 管理ポリシーとカスタマー管理ポリシーが含まれます。マネージドポリシーまたはインラインポリシーのいずれかを選択する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[管理ポリシーとインラインポリシーのいずれかを選択する](#)」を参照してください。

リソースベースのポリシー

リソースベースのポリシーは、リソースに添付する JSON ポリシードキュメントです。リソースベースのポリシーには例として、IAM ロールの信頼ポリシーや Amazon S3 バケットポリシーがあげられます。リソースベースのポリシーをサポートするサービスでは、サービス管理者はポリシーを使用して特定のリソースへのアクセスを制御できます。ポリシーがアタッチされているリソースの場合、指定されたプリンシパルがそのリソースに対して実行できるアクションと条件は、ポリシーによって定義されます。リソースベースのポリシーでは、[プリンシパルを指定する](#)必要があります。プリンシパルには、アカウント、ユーザー、ロール、フェデレーティッドユーザー、またはを含めることができます AWS のサービス。

リソースベースのポリシーは、そのサービス内にあるインラインポリシーです。リソースベースのポリシーでは、IAM の AWS マネージドポリシーを使用できません。

アクセスコントロールリスト (ACL)

アクセスコントロールリスト (ACL) は、どのプリンシパル (アカウントメンバー、ユーザー、またはロール) がリソースにアクセスするための許可を持つかを制御します。ACL はリソースベースのポリシーに似ていますが、JSON ポリシードキュメント形式は使用しません。

Amazon S3、および Amazon VPC は AWS WAF、ACLs。ACL の詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[アクセスコントロールリスト \(ACL\) の概要](#)」を参照してください。

その他のポリシータイプ

AWS は、一般的でない追加のポリシータイプをサポートします。これらのポリシータイプでは、より一般的なポリシータイプで付与された最大の権限を設定できます。

- **アクセス許可の境界** - アクセス許可の境界は、アイデンティティベースポリシーによって IAM エンティティ (IAM ユーザーまたはロール) に付与できる権限の上限を設定する高度な機能です。エンティティにアクセス許可の境界を設定できます。結果として得られる権限は、エンティティのアイデンティティベースポリシーとそのアクセス許可の境界の共通部分になります。Principal フィールドでユーザーまたはロールを指定するリソースベースのポリシーでは、アクセス許可の境界は制限されません。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、権限は無効になります。アクセス許可の境界の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM エンティティのアクセス許可の境界](#)」を参照してください。
- **サービスコントロールポリシー (SCPs)** - SCPs は、 の組織または組織単位 (OU) の最大アクセス許可を指定する JSON ポリシーです AWS Organizations。AWS Organizations は、ビジネスが所

有する複数の をグループ化して一元管理するためのサービス AWS アカウント です。組織内のすべての機能を有効にすると、サービスコントロールポリシー (SCP) を一部またはすべてのアカウントに適用できます。SCP は、各 を含むメンバーアカウントのエンティティのアクセス許可を制限します AWS アカウントのルートユーザー。Organizations と SCP の詳細については、「AWS Organizations ユーザーガイド」の「[サービスコントロールポリシー \(SCP\)](#)」を参照してください。

- リソースコントロールポリシー (RCP) – RCP は、所有する各リソースにアタッチされた IAM ポリシーを更新することなく、アカウント内のリソースに利用可能な最大数のアクセス許可を設定するために使用できる JSON ポリシーです。RCP は、メンバーアカウントのリソースのアクセス許可を制限し、組織に属しているかどうかにかかわらず AWS アカウントのルートユーザー、を含む ID の有効なアクセス許可に影響を与える可能性があります。RCP をサポートする のリストを含む Organizations と RCP の詳細については、AWS Organizations RCPs「[リソースコントロールポリシー \(RCPs\)](#)」を参照してください。AWS のサービス
- セッションポリシー - セッションポリシーは、ロールまたはフェデレーションユーザーの一時的なセッションをプログラムで作成する際にパラメータとして渡す高度なポリシーです。結果としてセッションの権限は、ユーザーまたはロールのアイデンティティベースポリシーとセッションポリシーの共通部分になります。また、リソースベースのポリシーから権限が派生する場合もあります。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、権限は無効になります。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[セッションポリシー](#)」を参照してください。

複数のポリシータイプ

1 つのリクエストに複数のタイプのポリシーが適用されると、結果として作成される権限を理解するのがさらに難しくなります。が複数のポリシータイプが関与する場合にリクエストを許可するかどうか AWS を決定する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[ポリシー評価ロジック](#)」を参照してください。

Amazon Kendra で IAM が機能する仕組み

IAM を使用して Amazon Kendra へのアクセスを管理する前に、Amazon Kendra で使用できる IAM 機能について理解しておく必要があります。Amazon Kendra およびその他の AWS のサービスが IAM と連携する方法の概要については、IAM ユーザーガイドの[AWS「IAM と連携する のサービス」](#)を参照してください。

トピック

- [Amazon Kendra アイデンティティベースのポリシー](#)
- [Amazon Kendra リソースベースのポリシー](#)

- [アクセスコントロールリスト \(ACL\)](#)
- [Amazon Kendra タグに基づいた認可](#)
- [Amazon Kendra IAM ロール](#)

Amazon Kendra アイデンティティベースのポリシー

IAM アイデンティティベースのポリシーでは許可または拒否するアクションとリソース、またアクションを許可または拒否する条件を指定できます。Amazon Kendra は、特定のアクション、リソース、および条件キーをサポートしています。JSON ポリシーで使用するすべての要素については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM JSON ポリシー要素のリファレンス](#)」を参照してください。

アクション

管理者は JSON AWS ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

JSON ポリシーの Action 要素にはポリシー内のアクセスを許可または拒否するために使用できるアクションが記述されます。ポリシーアクションの名前は通常、関連付けられた AWS API オペレーションと同じです。一致する API オペレーションのない許可のみのアクションなど、いくつかの例外があります。また、ポリシーに複数のアクションが必要なオペレーションもあります。これらの追加アクションは依存アクションと呼ばれます。

このアクションは関連付けられたオペレーションを実行するためのアクセス許可を付与するポリシーで使用されます。

Amazon Kendra のポリシーアクションは、アクションの前にプレフィックス `kendra:` を使用します。例えば、[ListIndices](#) API 演算を使用して Amazon Kendra インデックスを一覧表示する権限を付与するには、ポリシーに `kendra:ListIndices` アクションを含めます。ポリシーステートメントには Action または NotAction 要素を含める必要があります。Amazon Kendra は、このサービスで実行できるタスクを記述する独自のアクションのセットを定義します。

単一のステートメントに複数のアクションを指定するには次のようにコンマで区切ります。

```
"Action": [  
    "kendra:action1",  
    "kendra:action2"
```

ワイルドカード (*) を使用して複数アクションを指定できます。例えば、Describe という単語で始まるすべてのアクションを指定するには次のアクションを含めます。

```
"Action": "kendra:Describe*"
```

Amazon Kendra アクションのリストを確認するには、IAM ユーザーガイドの [Amazon MQ で定義されるアクション](#) を参照してください。

リソース

管理者は JSON AWS ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

Resource JSON ポリシー要素はアクションが適用されるオブジェクトを指定します。ステートメントには Resource または NotResource 要素を含める必要があります。ベストプラクティスとして、[Amazon リソースネーム \(ARN\)](#) を使用してリソースを指定します。これは、リソースレベルの許可と呼ばれる特定のリソースタイプをサポートするアクションに対して実行できます。

オペレーションのリスト化など、リソースレベルの権限をサポートしないアクションの場合は、ステートメントがすべてのリソースに適用されることを示すために、ワイルドカード (*) を使用します。

```
"Resource": "*"
```

Amazon Kendra インデックスリソースには次のネーム ARN があること。

```
arn:${Partition}:kendra:${Region}:${Account}:index/${IndexId}
```

ARN の形式の詳細については、[「Amazon リソースネーム \(ARNs\)」](#) と AWS [「サービス名前空間」](#) を参照してください。

例えば、ステートメントでインデックスを指定するには、次の ARN のインデックスの GUID を使用します。

```
"Resource": "arn:aws:kendra:${Region}:${Account}:index/${GUID}"
```

特定のアカウントに属するすべてのインデックスを指定するには、ワイルドカード (*) を使用します。

```
"Resource": "arn:aws:${Region}:${Account}:index/*"
```

リソースを作成するためのアクションなど、Amazon Kendra アクションには特定のリソースで実行できないものがあります。このような場合はワイルドカード *を使用する必要があります。

```
"Resource": "*"
```

Amazon Kendra のリソースタイプとそれらの ARN のリストを確認するには、IAM ユーザーガイドの [Amazon Kendra で定義されるリソースタイプ](#) を参照してください。どのアクションで各リソースの ARN を指定できるかについては、[Amazon Kendra で定義されるアクション](#) を参照してください。

条件キー

管理者は JSON AWS ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

Condition 要素 (または Condition ブロック) を使用すると、ステートメントが有効な条件を指定できます。Condition 要素はオプションです。イコールや未満などの [条件演算子](#) を使用して条件式を作成して、ポリシーの条件とリクエスト内の値を一致させることができます。

1 つのステートメントに複数の Condition 要素を指定する場合、または 1 つの Condition 要素に複数のキーを指定する場合、AWS では AND 論理演算子を使用してそれらを評価します。1 つの条件キーに複数の値を指定すると、は論理ORオペレーションを使用して条件 AWS を評価します。ステートメントの権限が付与される前にすべての条件が満たされる必要があります。

条件を指定する際にプレースホルダー変数も使用できます。例えば IAM ユーザーに、IAM ユーザー名がタグ付けされている場合のみリソースにアクセスできる権限を付与することができます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの要素: 変数およびタグ](#)」を参照してください。

AWS は、グローバル条件キーとサービス固有の条件キーをサポートしています。すべての AWS グローバル条件キーを確認するには、IAM ユーザーガイドの[AWS 「グローバル条件コンテキストキー」](#) を参照してください。

Amazon Kendra にはサービス固有条件キーがありませんが、いくつかのグローバル条件キーの使用をサポートしています。すべての AWS グローバル条件キーを確認するには、IAM ユーザーガイドの[AWS 「グローバル条件コンテキストキー」](#) を参照してください。

例

Amazon Kendra のアイデンティティベースポリシーの例を確認するには、[Amazon Kendra のアイデンティティベースポリシーの例](#) を参照してください。

Amazon Kendra リソースベースのポリシー

Amazon Kendra では、リソースベースのポリシーはサポートされていません。

アクセスコントロールリスト (ACL)

Amazon Kendra では、AWS のサービスとリソースへのアクセスのためのアクセスコントロールリスト (ACL) をサポートしていません。

Amazon Kendra タグに基づいた認可

特定のタイプの Amazon Kendra リソースにタグを関連付けると、これらのリソースへのアクセスを認可できます。タグに基づいてアクセスをコントロールするには、`aws:RequestTag/key-name`、または `aws:TagKeys` 条件キーを使用して、ポリシーの条件要素でタグ情報を提供します。

次の表に、タグベースのアクセスコントロールのアクション、対応するリソースタイプおよび条件キーを示します。各アクションは、対応するリソースタイプに関連付けられたタグに基づいて許可されます。

アクション	リソースタイプ	条件キー
CreateDataSource		<code>aws:RequestTag</code> , <code>aws:TagKeys</code>
CreateFaq		<code>aws:RequestTag</code> , <code>aws:TagKeys</code>
CreateIndex		<code>aws:RequestTag</code> , <code>aws:TagKeys</code>
API_ListTagsForResource	データソース、よくある質問、インデックス	
TagResource	データソース、よくある質問、インデックス	<code>aws:RequestTag</code> , <code>aws:TagKeys</code>

アクション	リソースタイプ	条件キー
UntagResource	データソース、よくある質問、インデックス	aws:TagKeys

Amazon Kendra リソースのタグ付けの詳細については、[\[タグ\]](#) を参照してください。リソースタグに基づいてリソースへのアクセスを制限するアイデンティティベースのポリシーの例については、[タグベースのポリシーの例](#) を参照してください。リソースへのアクセスを制限するためのタグの使用の詳細については、IAM ユーザーガイドの[タグを使用したアクセス制御](#)を参照してください。

Amazon Kendra IAM ロール

[IAM ロール](#) は、特定のアクセス許可を持つ AWS アカウント内のエンティティです。

Amazon Kendra での一時的な認証情報の使用

一時的な認証情報を使用して、フェデレーションでサインインする、IAM 役割を引き受ける、またはクロスアカウント役割を引き受けることができます。一時的なセキュリティ認証情報を取得するには、[AssumeRole](#) や [GetFederationToken](#) などの AWS STS API オペレーションを呼び出します。

Amazon Kendra は、一時的な認証情報の使用をサポートします。

サービス役割

この機能により、ユーザーに代わってサービスが[サービス役割](#)を引き受けることが許可されます。この役割により、サービスがお客様に代わって他のサービスのリソースにアクセスし、アクションを完了することが許可されます。サービス役割は IAM アカウントに表示され、アカウントによって所有されます。つまり、IAM 管理者はこの役割の権限を変更できます。ただし、それにより、サービスの機能が損なわれる場合があります。

Amazon Kendra ではサービスロールがサポートされています。

Amazon Kendra での IAM ロールの選択

インデックスの作成、BatchPutDocument 演算の呼び出し、データソースの作成、またはよくある質問の作成を行う場合は、Amazon Kendra がユーザーに代わって必要なリソースにアクセスするために使用するアクセスロールの Amazon リソースネーム (ARN) を指定する必要があります。以前に作成したロールがある場合、Amazon Kendra コンソールにより、選択できるロールのリストが提示されます。必要なリソースへのアクセスを許可するロールを選択することが重要です。詳細については、「[IAM のアクセスロール Amazon Kendra](#)」を参照してください。

Amazon Kendra のアイデンティティベースポリシーの例

デフォルトで、ユーザーとロールには Amazon Kendra リソースを作成または変更する許可がありません。また、AWS Management Console、AWS CLI、または AWS API を使用してタスクを実行することはできません。IAM 管理者は、ユーザーとロールに必要な、指定されたリソースで特定の API オペレーションを実行する権限をユーザーとロールに付与する IAM ポリシーを作成する必要があります。続いて、管理者はそれらのアクセス許可が必要なユーザーまたはグループにそのポリシーをアタッチします。

JSON ポリシードキュメントのこれらの例を使用して、IAM アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[JSON タブでのポリシーの作成](#)」を参照してください。

トピック

- [ポリシーに関するベストプラクティス](#)
- [Amazon Kendra のAWS 管理 \(事前定義\) ポリシー](#)
- [自分の権限の表示をユーザーに許可する](#)
- [1 つの Amazon Kendra インデックスへのアクセス](#)
- [タグベースのポリシーの例](#)

ポリシーに関するベストプラクティス

ID ベースのポリシーは、ユーザーのアカウント内で誰かが Amazon Kendra リソースを作成、アクセス、または削除できるかどうかを決定します。これらのアクションを実行すると、AWS アカウントに料金が発生する可能性があります。アイデンティティベースポリシーを作成したり編集したりする際には、以下のガイドラインと推奨事項に従ってください:

- AWS 管理ポリシーを開始し、最小特権のアクセス許可に移行する – ユーザーとワークロードにアクセス許可の付与を開始するには、多くの一般的なユースケースにアクセス許可を付与する AWS 管理ポリシーを使用します。これらはで使えます AWS アカウント。ユースケースに固有の AWS カスタマー管理ポリシーを定義することで、アクセス許可をさらに減らすことをお勧めします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS マネージドポリシー](#)」または「[ジョブ機能のAWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。
- 最小特権を適用する – IAM ポリシーで許可を設定する場合は、タスクの実行に必要な許可のみを付与します。これを行うには、特定の条件下で特定のリソースに対して実行できるアクションを定義します。これは、最小特権アクセス許可とも呼ばれています。IAM を使用して許可を適用する

方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのポリシーとアクセス許可](#)」を参照してください。

- IAM ポリシーで条件を使用してアクセスをさらに制限する - ポリシーに条件を追加して、アクションやリソースへのアクセスを制限できます。例えば、ポリシー条件を記述して、すべてのリクエストを SSL を使用して送信するように指定できます。条件を使用して、サービスアクションがなどの特定の を通じて使用されている場合に AWS のサービス、サービスアクションへのアクセスを許可することもできます AWS CloudFormation。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM JSON ポリシー要素:条件](#)」を参照してください。
- IAM Access Analyzer を使用して IAM ポリシーを検証し、安全で機能的な権限を確保する - IAM Access Analyzer は、新規および既存のポリシーを検証して、ポリシーが IAM ポリシー言語 (JSON) および IAM のベストプラクティスに準拠するようにします。IAM アクセスアナライザーは 100 を超えるポリシーチェックと実用的な推奨事項を提供し、安全で機能的なポリシーの作成をサポートします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM Access Analyzer でポリシーを検証する](#)」を参照してください。
- 多要素認証 (MFA) を要求する - で IAM ユーザーまたはルートユーザーを必要とするシナリオがある場合は AWS アカウント、MFA をオンにしてセキュリティを強化します。API オペレーションが呼び出されるときに MFA を必須にするには、ポリシーに MFA 条件を追加します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[MFA を使用した安全な API アクセス](#)」を参照してください。

IAM でのベストプラクティスの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

Amazon Kendra のAWS 管理 (事前定義) ポリシー

AWS は、によって作成および管理されるスタンドアロン IAM ポリシーを提供することで、多くの一般的なユースケースに対処します AWS。これらのポリシーは AWS 管理ポリシーと呼ばれます。AWS 管理ポリシーを使用すると、ポリシーを自分で記述する必要があったよりも、ユーザー、グループ、ロールにアクセス許可を簡単に割り当てることができます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザーへのアクセス許可の追加](#)」を参照してください。

アカウントのグループとロールにアタッチできる以下の AWS 管理ポリシーは、Amazon Kendra に固有です。

- AmazonKendraReadOnly - Amazon Kendra リソースへの読み取り専用アクセスを許可します。
- AmazonKendraFullAccess - すべての Amazon Kendra リソースの作成、読み取り、更新、削除、タグ付け、および実行を行うためのフルアクセスを付与します。

コンソールでは、ロールにも

iam:CreateRole、iam:CreatePolicy、iam:AttachRolePolicy、および s3:ListBucket アクセス許可が必要です。

 Note

これらのアクセス許可については、IAM; コンソールにサインインして特定のポリシーを検索することで確認できます。

独自のカスタム ポリシーを作成して、Amazon Kendra API アクションにアクセス権限を付与することもできます。これらのカスタムポリシーは、それらのアクセス許可が必要な IAM ロールまたはグループにアタッチできます。Amazon Kendra の IAM ポリシーの例については、[Amazon Kendra のアイデンティティベースポリシーの例](#) を参照してください。

自分の権限の表示をユーザーに許可する

この例では、ユーザーアイデンティティにアタッチされたインラインおよびマネージドポリシーの表示を IAM ユーザーに許可するポリシーの作成方法を示します。このポリシーには、コンソールで、または AWS CLI または AWS API を使用してプログラムでこのアクションを実行するアクセス許可が含まれています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "ViewOwnUserInfo",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:GetUserPolicy",
        "iam:ListGroupsForUser",
        "iam:ListAttachedUserPolicies",
        "iam:ListUserPolicies",
        "iam:GetUser"
      ],
      "Resource": ["arn:aws:iam::*:user/${aws:username}"]
    },
    {
      "Sid": "NavigateInConsole",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```
        "iam:GetGroupPolicy",
        "iam:GetPolicyVersion",
        "iam:GetPolicy",
        "iam:ListAttachedGroupPolicies",
        "iam:ListGroupPolicies",
        "iam:ListPolicyVersions",
        "iam:ListPolicies",
        "iam:ListUsers"
    ],
    "Resource": "*"
}
]
```

1 つの Amazon Kendra インデックスへのアクセス

この例では、AWS アカウントの ユーザーにインデックスをクエリするためのアクセス権を付与します。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "QueryIndex",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        ":Query"
      ],
      "Resource": "arn:aws::${Region}:${Account}:index/${Index ID}"
    }
  ]
}
```

タグベースのポリシーの例

タグベースのポリシーとは、タグ付きリソースに対してプリンシパルとしての実行できるアクションを指定する JSON ポリシードキュメントです。

例: タグを使用したリソースへのアクセス

このポリシー例では、キー **department** と値 でタグ付けされたリソースで Query オペレーションを使用するアクセス許可を AWS アカウントのユーザーまたはロールに付与します **finance**。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kendra:Query"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/department": "finance"
        }
      }
    }
  ]
}
```

例: タグを使用して Amazon Kendra 演算を有効にする

このポリシー例では、AWS アカウントのユーザーまたはロールに、キー **department** と値 でタグ付けされたリソースを持つオペレーションを除き、Amazon Kendra TagResource オペレーションを使用するアクセス許可を付与します **finance**。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "kendra:*",
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

```

    },
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": [
        "kendra:TagResource"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/department": "finance"
        }
      }
    }
  ]
}

```

例: タグを使用して演算へのアクセスを制限する

このポリシー例では、ユーザーが **department** タグを指定し、許可された値 **finance** と がない限り、AWS アカウント内のユーザーまたはロールが CreateIndex オペレーションを使用するためのアクセスを制限しますIT。

JSON

```

{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "kendra:CreateIndex",
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": "kendra:CreateIndex",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "Null": {
          "aws:RequestTag/department": "true"
        }
      }
    }
  ]
}

```



```

    },
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": "kendra:CreateIndex",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "ForAnyValue:StringNotEquals": {
          "aws:RequestTag/department": [
            "finance",
            "IT"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}

```

AWS Amazon Kendra の マネージドポリシー

ユーザー、グループ、ロールにアクセス許可を追加するには、自分でポリシーを記述するよりも AWS 管理ポリシーを使用する方が簡単です。チームに必要な権限のみを提供する [IAM カスタマー マネージドポリシーを作成する](#) には時間と専門知識が必要です。すぐに開始するには、AWS マネージドポリシーを使用できます。これらのポリシーは一般的なユースケースを対象としており、AWS アカウントで利用できます。AWS 管理ポリシーの詳細については、IAM ユーザーガイドの「[AWS 管理ポリシー](#)」を参照してください。

AWS サービスは、AWS 管理ポリシーを維持および更新します。AWS 管理ポリシーのアクセス許可は変更できません。サービスでは新しい機能を利用できるようにするために、AWS マネージドポリシーに権限が追加されることがあります。この種類の更新はポリシーがアタッチされている、すべてのアイデンティティ (ユーザー、グループおよびロール) に影響を与えます。新しい機能が立ち上げられた場合や、新しいオペレーションが使用可能になった場合に、各サービスが AWS マネージドポリシーを更新する可能性が最も高くなります。サービスは AWS 管理ポリシーからアクセス許可を削除しないため、ポリシーの更新によって既存のアクセス許可が損なわれることはありません。

さらに、は、複数のサービスにまたがるジョブ関数の マネージドポリシー AWS をサポートしています。例えば、ReadOnlyAccess AWS 管理ポリシーは、すべての AWS サービスとリソースへの読み取り専用アクセスを提供します。サービスが新機能を起動すると、は新しいオペレーションとリソースの読み取り専用アクセス許可 AWS を追加します。ジョブ機能のポリシーの一覧および詳細に

については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS のジョブ機能のマネージドポリシー](#)」を参照してください。

AWS マネージドポリシー: AmazonKendraReadOnly

Amazon Kendra リソースに読み取り専用アクセスを付与します。このポリシーには、以下のアクセス許可が含まれています。

- kendra - ユーザーは、アイテムのリストまたはアイテムに関する詳細を返すアクションを実行することができます。これには、Describe、List、Query、BatchGetDocumentStatus、GetQuerySuggestions、または GetSnapshots で始まる API 演算が含まれます。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "kendra:Describe*",
        "kendra:List*",
        "kendra:Query",
        "kendra:BatchGetDocumentStatus",
        "kendra:GetQuerySuggestions",
        "kendra:GetSnapshots"
      ],
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

AWS マネージドポリシー: AmazonKendraFullAccess

すべての Amazon Kendra リソースの作成、読み取り、更新、削除、タグ付け、および実行を行うためのフルアクセスを付与します。このポリシーには、以下のアクセス許可が含まれています。

- `kendra` - プリンシパルに Amazon Kendra 内のすべてのアクションへの読み取りおよび書き込みアクセスを許可します。
- `s3` - プリンシパルに Amazon S3 バケットの場所を取得してバケットを一覧表示できるようにします。
- `iam` - プリンシパルがロールを渡して一覧表示できるようにします。
- `kms` - プリンシパルが AWS KMS キーとエイリアスを記述および一覧表示できるようにします。
- `secretsmanager` - プリンシパルが、シークレットの作成、記述、一覧表示ができるようにします。
- `ec2` - プリンシパルがセキュリティグループ、VPC (仮想プライベートクラウド)、およびサブネットを記述できるようにします。
- `cloudwatch` - プリンシパルが Cloud Watch メトリクスを表示できるようにします。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "iam:PassRole",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "iam:PassedToService": "kendra.amazonaws.com"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:ListRoles"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:DescribeSecurityGroups",
```

```

        "ec2:DescribeVpcs",
        "ec2:DescribeSubnets"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:ListKeys",
        "kms:ListAliases",
        "kms:DescribeKey"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "s3:ListAllMyBuckets",
        "s3:GetBucketLocation"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "secretsmanager:ListSecrets"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "cloudwatch:GetMetricData"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "secretsmanager:CreateSecret",
        "secretsmanager:DescribeSecret"
    ],
    "Resource": "arn:aws:secretsmanager:*:*:secret:AmazonKendra-*"
},

```

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": "kendra:*",
  "Resource": "*"
}
```

AWS マネージドポリシーに対する Amazon Kendra の更新

このサービスがこれらの変更の追跡を開始してからの Amazon Kendra の AWS マネージドポリシーの更新に関する詳細を表示します。このページの変更に関する自動通知を入手するには、Amazon Kendra ドキュメントの履歴ページから、RSS フィードにサブスクライブしてください。

変更	説明	日付
AmazonKendraReadOnly - GetSnapshots、BatchGetDocumentStatus API をサポートする権限を追加する	Amazon Kendra には新しい API GetSnapshots および BatchGetDocumentStatus が追加されました。GetSnapshots はユーザーの検索アプリケーションとのやり取りを示すデータを提供します。BatchGetDocumentStatus はドキュメントのインデックス作成の進行状況を監視します。	2022 年 1 月 3 日
AmazonKendraReadOnly - GetQuerySuggests 演算をサポートする許可を追加する	Amazon Kendra に、一般的な検索クエリのクエリ提案を取得でき、ユーザーの検索をガイドできる新しい GetQuerySuggestions を追加しました。ユーザーが検索クエリを入力すると、提案されるクエリ	2021 年 5 月 27 日

変更	説明	日付
	リが検索のオートコンプリートを手助けします。	
Amazon Kendra が変更の追跡を開始しました。	Amazon Kendra は、AWS 管理ポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 5 月 27 日

Amazon Kendra アイデンティティとアクセスのトラブルシューティング

次の情報は、Amazon Kendra と IAM の使用に伴って発生する可能性がある一般的な問題の診断や修復に役立ちます。

トピック

- [Amazon Kendra でアクションを実行する認可がありません](#)
- [iam:PassRole を実行する権限がない](#)
- [管理者として Amazon Kendra へのアクセスを他のユーザーに許可したいです](#)
- [AWS アカウント以外のユーザーに Amazon Kendra リソースへのアクセスを許可したい](#)

Amazon Kendra でアクションを実行する認可がありません

にアクションを実行する権限がないと AWS Management Console 通知された場合は、管理者に連絡してサポートを依頼する必要があります。管理者とは、サインイン認証情報を提供した担当者です。

次のエラー例は、mateojackson ユーザーがコンソールを使用してインデックスの詳細を表示しようとする際に、kendra:*DescribeIndex* アクセス許可を持っていない場合に発生します。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/mateojackson is not authorized to perform:
kendra:DescribeIndex on resource: index ARN
```

この場合、Mateo は、kendra:*DescribeIndex* アクションを使用して index リソースにアクセスできるように、管理者にポリシーの更新を依頼します。

iam:PassRole を実行する権限がない

iam:PassRole アクションを実行する権限がないというエラーが表示された場合は、Amazon Kendra にロールを渡すことを許可するようにポリシーを更新する必要があります。

一部の AWS のサービス では、新しいサービスロールまたはサービスにリンクされたロールを作成する代わりに、そのサービスに既存のロールを渡すことができます。そのためには、サービスにロールを渡す権限が必要です。

以下の例のエラーは、marymajor という IAM ユーザーがコンソールを使用して Amazon Kendra でアクションを実行しようする場合に発生します。ただし、このアクションをサービスが実行するには、サービスロールから付与された権限が必要です。メアリーには、ロールをサービスに渡す許可がありません。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/marymajor is not authorized to perform:
iam:PassRole
```

この場合、Mary のポリシーを更新してメアリーに iam:PassRole アクションの実行を許可する必要があります。

サポートが必要な場合は、AWS 管理者にお問い合わせください。サインイン資格情報を提供した担当者が管理者です。

管理者として Amazon Kendra へのアクセスを他のユーザーに許可したいです

Amazon Kendra へのアクセスを他のユーザーに許可するには、アクセスを必要とするユーザーまたはアプリケーションにアクセス許可を付与する必要があります。AWS IAM Identity Center を使用してユーザーとアプリケーションを管理する場合は、アクセスレベルを定義するアクセス許可セットをユーザーまたはグループに割り当てます。アクセス許可セットは、ユーザーまたはアプリケーションに関連付けられている IAM ロールに自動的に IAM ポリシーを作成して割り当てます。詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[アクセス許可セット](#)」を参照してください。

IAM アイデンティティセンターを使用していない場合は、アクセスを必要としているユーザーまたはアプリケーションの IAM エンティティ (ユーザーまたはロール) を作成する必要があります。次に、Amazon Kendra の適切な許可を付与するエンティティにポリシーをアタッチする必要があります。アクセス許可が付与されたら、ユーザーまたはアプリケーション開発者に認証情報を提供します。これらの認証情報を使用して AWS にアクセスします。IAM ユーザー、グループ、ポリシー、アクセス許可の作成の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM アイデンティティ](#)」と「[IAM のポリシーとアクセス許可](#)」を参照してください。

AWS アカウント以外のユーザーに Amazon Kendra リソースへのアクセスを許可したい

他のアカウントのユーザーや組織外の人が、リソースにアクセスするために使用できるロールを作成できます。ロールの引き受けを委託するユーザーを指定できます。リソースベースのポリシーまた

はアクセスコントロールリスト (ACL) をサポートするサービスの場合、それらのポリシーを使用して、リソースへのアクセスを付与できます。

詳細については、以下にご相談ください。

- Amazon Kendra がこれらの機能をサポートしているかどうかを確認するには、[Amazon Kendra で IAM が機能する仕組み](#) を参照してください。
- 所有 AWS アカウント している のリソースへのアクセスを提供する方法については、IAM ユーザーガイドの「[所有 AWS アカウント している別の の IAM ユーザーへのアクセスを提供する](#)」を参照してください。
- リソースへのアクセスをサードパーティーに提供する方法については AWS アカウント、IAM ユーザーガイドの「[サードパーティー AWS アカウント が所有する へのアクセスを提供する](#)」を参照してください。
- ID フェデレーションを介してアクセスを提供する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[外部で認証されたユーザー \(ID フェデレーション\) へのアクセスの許可](#)」を参照してください。
- クロスアカウントアクセスにおけるロールとリソースベースのポリシーの使用法の違いについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのクロスアカウントのリソースへのアクセス](#)」を参照してください。

セキュリティに関するベストプラクティス

Amazon Kendra には、独自のセキュリティポリシーを策定および実装する際に考慮すべきさまざまなセキュリティ機能が用意されています。以下のベストプラクティスは一般的なガイドラインであり、完全なセキュリティソリューションを提供するものではありません。これらのベストプラクティスは顧客の環境に必ずしも適切または十分でない可能性があるため、処方箋ではなく、あくまで有用な検討事項とお考えください。

最小特権の原則を適用する

Amazon Kendra は、IAM ロールを使用するアプリケーションにきめ細かなアクセスポリシーを提供します。ロールには、アプリケーションのカバーやログ送信先へのアクセスなど、ジョブに必要な最小限の特権セットのみを付与することをお勧めします。定期的に、またアプリケーションに変更があったときに、ジョブの権限を監査することもお勧めします。

ロールベースのアクセスコントロール (RBAC) の許可

管理者は、Amazon Kendra アプリケーションに対するロールベースのアクセスコントロール (RBAC) の許可を厳密に制御する必要があります。

Amazon Kendra でのログ記録とモニタリング

モニタリングは、Amazon Kendra アプリケーションの信頼性、可用性、パフォーマンスを維持する上で重要な部分です。Amazon Kendra API コールをモニタリングするには、[使用できます AWS CloudTrail](#)。ジョブのステータスをモニタリングするには、[Amazon CloudWatch Logs](#) を使用します。

- Amazon CloudWatch Alarms - CloudWatch アラームを使用して、指定した期間にわたって 1 つのメトリクスを監視します。メトリクスがポリシーを超える場合。メトリクスが特定の状態にある場合、CloudWatch アラームはアクションを呼び出しません。状態が変わり、それが指定した期間だけ維持される必要があります。詳細については、「[Amazon CloudWatch による Amazon Kendra のモニタリング](#)」を参照してください。
- AWS CloudTrail ログ — CloudTrail は、Amazon Kendra または Amazon Kendra Intelligent Ranking のユーザー、ロール、または AWS のサービスによって実行されたアクションの記録を提供します。CloudTrail で収集された情報を使用して、Amazon Kendra に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。詳細については、「[ログを使用した Amazon Kendra API コールの AWS CloudTrail ログ記録](#)」および「[ログを使用した Amazon Kendra Intelligent Ranking API コールの AWS CloudTrail ログ記録](#)」を参照してください。

Amazon Kendra のコンプライアンス検証

Amazon Kendra のセキュリティとコンプライアンスは、Amazon Kendra のさまざまなコンプライアンスプログラムの一環として、サードパーティー監査機関によって評価されます。Amazon Kendra は以下のものに準拠しています。

- Health Insurance Portability and Accountability Act (HIPAA)
- System and Organization Controls (SOC) 2
- Information Security Registered Assessors Program (IRAP)
- 米国東部/西部地域における Federal Risk and Authorization Management Program (FedRAMP) Moderate

- AWS GovCloud (米国西部) 地域における Federal Risk and Authorization Management Program (FedRAMP) High

特定のコンプライアンスプログラムの対象となる AWS サービスのリストについては、「[コンプライアンスAWS プログラムによる対象範囲内のサービスコンプライアンス](#)」を参照してください。一般的な情報については、[AWS 「 Compliance ProgramsAssurance」](#)を参照してください。

を使用して、サードパーティーの監査レポートをダウンロードできます AWS Artifact。詳細については、「[Artifact での AWS レポートのダウンロード](#)」を参照してください。

Amazon Kendra を使用する際のユーザーのコンプライアンス責任は、ユーザーのデータの機密性や貴社のコンプライアンス目的、適用される法律および規制によって決まります。AWS では、コンプライアンスに役立つ以下のリソースを提供しています。

- [セキュリティとコンプライアンスのクイックスタートガイド](#) — これらのデプロイガイドでは、アーキテクチャ上の考慮事項について説明し、セキュリティとコンプライアンスに重点を置いたベースライン環境をデプロイする手順について説明します AWS。
- [HIPAA セキュリティとコンプライアンスのためのアーキテクチャホワイトペーパー](#) — このホワイトペーパーでは、企業が AWS を使用して HIPAA 準拠のアプリケーションを作成する方法について説明します。
- [AWS コンプライアンスリソース](#) — このワークブックとガイドのコレクションは、お客様の業界や地域に適用される場合があります。
- 「[デベロッパーガイド](#)」の「[ルールによるリソースの評価](#)」 — この AWS Config サービスは、リソース設定が内部プラクティス、業界ガイドライン、および規制にどの程度準拠しているかを評価します。AWS Config
- [AWS Security Hub](#) — この AWS サービスは、内のセキュリティ状態を包括的に把握 AWS し、セキュリティ業界標準とベストプラクティスへの準拠を確認するのに役立ちます。

Amazon Kendra の耐障害性

AWS グローバルインフラストラクチャは、AWS リージョンとアベイラビリティーゾーンを中心に構築されています。AWS リージョンは、低レイテンシー、高スループット、および高度に冗長なネットワークで接続された、物理的に分離された複数のアベイラビリティーゾーンを提供します。アベイラビリティーゾーンでは、ゾーン間で中断することなく自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティーゾーンは、従

来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性が高く、フォールトトレラントで、スケーラブルです。

AWS リージョンとアベイラビリティゾーンの詳細については、[AWS 「グローバルインフラストラクチャ」](#)を参照してください。

AWS グローバルインフラストラクチャでは、Amazon Kendra Enterprise Edition は耐障害性、スケーラビリティ、高可用性を備えています。インデックスの以前のバージョンへのロールバックは現在サポートされていませんが、既存のデータソースを[削除する](#)、およびインデックスに[追加する](#)ことにより、インデックスの一部を更新または再作成することができます。

Amazon Kendra でのインフラストラクチャセキュリティ

マネージドサービスである Amazon Kendra は、AWS グローバルネットワークセキュリティで保護されています。AWS セキュリティサービスと [インフラストラクチャ AWS](#) を保護する方法については、[AWS 「クラウドセキュリティ」](#)を参照してください。インフラストラクチャセキュリティのベストプラクティスを使用して AWS 環境を設計するには、「Security Pillar AWS Well-Architected Framework」の[「Infrastructure Protection」](#)を参照してください。

AWS 公開された API コールを使用して、ネットワーク経由で Amazon Kendra にアクセスします。クライアントは以下をサポートする必要があります。

- Transport Layer Security (TLS)。TLS 1.2 が必須で、TLS 1.3 をお勧めします。
- DHE (楕円ディフィー・ヘルマン鍵共有) や ECDHE (楕円曲線ディフィー・ヘルマン鍵共有) などの完全前方秘匿性 (PFS) による暗号スイート。これらのモードは Java 7 以降など、ほとんどの最新システムでサポートされています。

また、リクエストにはアクセスキー ID と、IAM プリンシパルに関連付けられているシークレットアクセスキーを使用して署名する必要があります。または[AWS Security Token Service](#) (AWS STS) を使用して、一時的なセキュリティ認証情報を生成し、リクエストに署名することもできます。

での設定と脆弱性の分析 AWS Identity and Access Management

AWS は、ゲストオペレーティングシステム (OS) やデータベースのパッチ適用、ファイアウォール設定、ディザスタリカバリなどの基本的なセキュリティタスクを処理します。これらの手順は適切な第三者によって確認され、証明されています。詳細については、以下のリソースを参照してください。

- [責任共有モデル](#)
- AWS: [セキュリティプロセスの概要](#) (ホワイトペーパー)

次のリソースは、AWS Identity and Access Management () の設定と脆弱性の分析にも対処します IAM。

- [のコンプライアンス検証 AWS Identity and Access Management](#)
- [のセキュリティのベストプラクティスとユースケース AWS Identity and Access Management](#)。

のクォータ Amazon Kendra

サポートされるリージョン

Amazon Kendra が利用可能な AWS リージョンのリストについては、「Amazon Web Services 全般のリファレンス」の[Amazon Kendra 「リージョンとエンドポイント」](#)を参照してください。

Important

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスは、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、欧州 (アイルランド)、アジアパシフィック (シドニー)、リージョンでのみ使用できます。

クォータ

制限とも呼ばれるサービスクォータは、AWS アカウントのサービスリソースの最大数です。詳細については、「AWS 全般のリファレンス」の「[Amazon Kendra Service Quotas](#)」を参照してください。

Note

Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスのクォータは、現在 Service Quotas コンソールでは使用できません。

インデックスクォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
アカウントあたりのインデックスの最大数	10	GenAI Enterprise、Developer、Enterprise	はい
1つのユニット (開発者) 内のインデックスに対して抽出された	3 GB	開発者	いいえ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
テキストの量。Developer Edition では、テキスト抽出用のユニットは追加できません。			
1 つの単位 (エンタープライズ) のインデックスに対して抽出されたテキストの量。Enterprise Edition では、テキストの抽出用に最大 100 ユニットまで追加できます。それ以外の場合は サポート にお問い合わせください。	30 GB	GenAI Enterprise	はい
GenAI Enterprise Edition インデックスあたりのストレージ容量ユニットの最大数	50	Enterprise	はい

データソースコネクタのクォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
インデックスあたりのデータソースコネクタの最大数 (開発者)	5	開発者	いいえ
インデックスあたりのデータソースコネ	50	Enterprise	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
クタの最大数 (エンタープライズ)			
インデックスあたりのデータソースコネクタの最大数 (GenAI Enterprise)	50	GenAI Enterprise	はい
GenAI Enterprise Index あたりの 1 か月あたりのコネクタ同期の最大使用量	500	GenAI Enterprise	はい
データソースコネクタの使用時に取り込むことができる 1 つのドキュメントまたは raw ファイルの最大サイズ	50 MB	GenAI Enterprise、Developer、Enterprise	はい
Amazon S3 データソースコネクタに含まれるアクセスコントロールリスト設定ファイル内の S3 プレフィックスの最大数	100	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ
Amazon S3 データソースコネクタに含まれるアクセスコントロールリスト設定ファイルの最大サイズ	50 MB	デベロッパー、エンタープライズ	はい

よくある質問のクォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
インデックスあたりのよくある質問の最大数	30	デベロッパー、エンタープライズ	はい
1つのよくある質問の最大サイズ	5 MB	デベロッパー、エンタープライズ	はい
よくある質問に対して返される結果の最大数。	4	デベロッパー、エンタープライズ	はい
よくある質問の質問に使用できる最大文字数	300	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ
よくある質問の回答の最大文字数	2000	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ

シソーラスクォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
インデックスあたりのシソーラスの最大数	1	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ
シソーラスファイルの最大サイズ	5 MB	デベロッパー、エンタープライズ	はい
シソーラスあたりのシノニムルールの最大数	10,000	デベロッパー、エンタープライズ	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
インデックス内のすべてのシソーラスの用語あたりのシノニムの最大数	10	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ

Amazon Kendra エクスperiエンスクォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
インデックスあたりの Amazon Kendra エクスperiエンスの最大数	50	デベロッパー、エンタープライズ	はい

クエリと検索結果のクォータ

Note

1 秒あたりのクエリは、取得 API とクエリ API 間で共有されます。

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
単一単位 (デベロッパー) のインデックスの 1 秒あたりのクエリ数。Developer Edition では、クエリ用のユニットは追加できません。	0.05	開発者	いいえ
単一単位 (エンタープライズ) のインデッ	0.1	Enterprise	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
クスの 1 秒あたりのクエリ数。Enterprise Edition では、クエリ用に最大 100 ユニットまで追加できます。それ以外の場合は サポート にお問い合わせください。			
GenAI Enterprise Edition インデックスあたりのクエリキャパシティユニットの最大数	100	GenAI Enterprise	はい
クエリテキストあたりの最大文字数	1,000	GenAI Enterprise、Developer、Enterprise	はい
クエリあたりの検索結果の最大数。デフォルトは 100 です。100 件を超える結果を指定する場合は、 サポート にお問い合わせください。	100	デベロッパー、エンタープライズ	はい
ページあたりの検索結果の最大数	100	デベロッパー、エンタープライズ	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
切り捨て前の、クエリテキストあたりのトークンの最大単語数。デフォルトは 30 です。30 語を超える結果を指定する場合は、 サポート にお問い合わせください。	30	デベロッパー、エンタープライズ	はい
クエリ属性あたりのユーザーグループリストの最大サイズ	1,000	GenAI Enterprise、Developer、Enterprise	はい
クエリ属性ごとの文字列リストの最大サイズ	10	GenAI Enterprise、Developer、Enterprise	はい

クエリ提案クォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
GetQuerySuggestions の呼び出しで返されるクエリの提案の最大数。	10	デベロッパー、エンタープライズ	はい
GetQuerySuggestions の呼び出しあたりのクエリの提案のフィールド/属性の最大数	10	デベロッパー、エンタープライズ	はい
GetQuerySuggestions の呼び出しあたりのクエリの提案の追加	5	デベロッパー、エンタープライズ	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
のフィールド/属性の最大数			
インデックスあたりのブロックリストの最大数	1	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ
ブロックリストテキストファイルの最大サイズ	2 MB	デベロッパー、エンタープライズ	はい
ブロックリスト内の項目 (単語または語句) の最大数	20,000	デベロッパー、エンタープライズ	はい
Query API コールで返されるスペル修正のクエリの提案の最大数。	1	デベロッパー、エンタープライズ	はい

ドキュメントクォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
1 つのユニット (開発者) 内のインデックスに対して抽出されたテキストの量。Developer Edition では、テキスト抽出用のユニットは追加できません。	3 GB	開発者	いいえ
1 つの単位 (エンタープライズ) のインデッ	30 GB	Enterprise	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
クスに対して抽出されたテキストの量。Enterprise Edition では、テキストの抽出用に最大 100 ユニットまで追加できます。それ以外の場合は サポート にお問い合わせください。			
データソースコネクタを使用する場合の 1 つのドキュメントまたは raw ファイルの最大サイズ	50 MB	デベロッパー、エンタープライズ	はい
BatchPutDocument API を使用する場合の 1 つのドキュメントまたは raw ファイルの最大サイズ	5 MB	GenAI Enterprise、Developer、Enterprise	はい
1 つのドキュメントから抽出されるテキストの最大量	5 MB	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ
インデックスあたりのカスタムフィールド/属性の最大数	500	デベロッパー、エンタープライズ	いいえ

注目の検索結果クォータ

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
主要な結果セットあたりの主要なドキュメントの最大数	4	Enterprise	はい
主要な結果セットあたりのクエリテキストの最大数	49	Enterprise	いいえ
主要な結果セットのクエリテキストあたりの最大文字数	1,000	Enterprise	はい
インデックスあたりの主要な結果セットの最大数	50	Enterprise	はい

検索結果クォータのリスコア/リランク

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
再スコアリング実行計画または 1 ユニットの容量に対する 1 秒あたりの最大の Rescore リクエスト数。最大 1,000 ユニットの容量が追加できます。	0.01	Enterprise	いいえ
アカウントあたりの再スコアリング実行プランの最大数。	50	Enterprise	はい

説明	デフォルト値	エディション	調整可能
1 つの Rescore リクエストのドキュメントに対する Title の最大トークン数。	100	Enterprise	いいえ
1 つの Rescore リクエストのドキュメントに対する Body の最大トークン数。	200	Enterprise	いいえ
1 つの Rescore リクエスト内のドキュメントの最大数。	25	Enterprise	いいえ
1 つの Rescore リクエスト内のグループあたりのドキュメントの最大数。	3	Enterprise	いいえ

Amazon Kendra サービスクォータの詳細とクォータの引き上げをリクエストするには、[Service Quotas](#)」を参照してください。

トラブルシューティング

このセクションでは、作業中に発生する可能性がある一般的な問題を解決するのに役立ちます Amazon Kendra。

トピック

- [データソースのトラブルシューティング](#)
- [ドキュメントの検索結果のトラブルシューティング](#)
- [一般的な問題のトラブルシューティング](#)

データソースのトラブルシューティング

このセクションでは、Amazon Kendra データソースコネクタを設定および使用する際の一般的な問題を解決するのに役立ちます。

マイドキュメントにインデックスが作成されませんでした

Amazon Kendra インデックスをデータソースと同期すると、ドキュメントのインデックス作成を妨げる問題が発生する可能性があります。インデックス作成は 2 ステップのプロセスです。まず、データソースは、インデックスを作成する新しいドキュメントと更新されたドキュメントを確認し、インデックスから削除する文書を検出します。次に、ドキュメントレベルで各ドキュメントにアクセスし、インデックスが付けられます。

次のいずれかのステップでエラーが発生する可能性があります。データソースレベルのエラーは、データソースの詳細ページの [Sync run history] (実行履歴を同期) セクションのコンソールに報告されます。同期ジョブのステータスは、[Succeeded] (成功)、[Incomplete] (不完全)、または [Failed] (失敗) になります。ジョブ中にインデックス作成され、削除されたドキュメントの数も確認できます。ステータスが [Failed] (失敗) の場合、メッセージが [Details] (詳細) 列で表示されます。

ドキュメントレベルのエラーは で報告されます Amazon CloudWatch Logs。CloudWatch コンソールを使用してエラーを確認できます。

ドキュメント同期ステータスレポートを生成するには、「[ドキュメントの同期ステータスレポートを生成したい](#)」を参照してください。

同期ジョブが失敗しました

同期ジョブは通常、インデックスまたはデータソースの構成エラーがある場合に失敗します。コンソールで、データソースの詳細ページの [詳細] 列の [実行履歴を同期] セクションにエラーメッセージが表示されます。ドキュメントレベルのエラーは、Amazon CloudWatch Logsで報告されます。エラーメッセージには、問題点に関する情報が表示されます。問題は通常、インデックスまたはデータソースに適切な IAM アクセス許可がないことです。エラーメッセージには、欠落しているアクセス許可が示されます。受け取る可能性のあるエラーメッセージをいくつか以下に示します。

Failed to create log group for job. Please make sure that the IAM role provided has sufficient permissions.

インデックスロールに を使用するアクセス許可がない場合 CloudWatch、データソースは CloudWatch ログを作成できません。このエラーが発生した場合は、インデックスロールにアクセス CloudWatch 許可を追加する必要があります。

Failed to access Amazon S3 file prefix (*bucket name*) while trying to crawl your metadata files. Please make sure the IAM role (*ARN*) provided has sufficient permissions.

Amazon S3 データソースを使用する場合、には、ドキュメントを含む バケットへのアクセス許可 Amazon Kendra が必要です。データソース IAM ロール Amazon Kendra にバケットを読み取るためのアクセス許可を に追加する必要があります。

The provided IAM role (*ARN*) could not be assumed. Please make sure Amazon Kendra is a trusted entity that is allowed to assume the role.

Amazon Kendra には、インデックスロールとデータソース IAM ロールを引き受けるアクセス許可が必要です。sts:AssumeRole アクションの許可を持つロールに信頼ポリシーを追加する必要があります。

がデータソースのインデックスを作成する Amazon Kendra 必要がある IAM ポリシーについては、「[IAM ロール](#)」を参照してください。

ドキュメント同期ステータスレポートを生成するには、「[ドキュメントの同期ステータスレポートを生成したい](#)」を参照してください。

同期ジョブが不完全です

通常、ジョブは、データソースレベルのプロセスを完了したが、ドキュメントレベルのプロセス中に何らかのエラーが発生した場合、不完全になります。ジョブが不完全な場合、ドキュメントの一部で

正常にインデックスが作成されていない可能性があります。Amazon S3 データソースの場合、不完全なジョブは通常、次の原因によって引き起こされます。

- 1 つまたは複数のドキュメントのメタデータが無効だった。
- インデックス作成のためにドキュメントが送信されたが、少なくとも 1 つのドキュメントが送信されなかった場合。
- インデックスから削除するドキュメントが送信されたが、少なくとも 1 つのドキュメントが送信されなかった場合。

不完全な同期ジョブのトラブルシューティングを行うには、まず CloudWatch ログを確認します。

1. 詳細列から、詳細の表示 CloudWatch を選択します。
2. エラーメッセージを確認して、ドキュメントが失敗した原因を確認します。

ドキュメント同期ステータスレポートを生成するには、「[ドキュメントの同期ステータスレポートを生成したい](#)」を参照してください。

同期ジョブは成功しましたが、インデックス付きドキュメントがありません

場合によっては、インデックス同期ジョブが [成功] とマークされていても、想定したときに新しいドキュメントや更新されたドキュメントでインデックスが作成されていないことがあります。考えられる理由は以下のとおりです。

- DocumentsSubmittedForIndexingFailed メトリクスをチェック CloudWatch して、同期に失敗したドキュメントがないかどうかを確認します。詳細については、CloudWatch ログを確認してください。
- Amazon S3 データソースの場合、バケット名またはプレフィックス Amazon Kendra が間違っている可能性があります。Amazon Kendra 使用しているバケットが、インデックスを作成するドキュメントを含むバケットであることを確認します。
- 以前のジョブでインデックス作成に失敗したドキュメントのインデックスを再作成する場合、Amazon Kendra はドキュメントまたは関連するメタデータファイルを変更しない限り、そのドキュメントのインデックスを作成しません。

ドキュメント同期ステータスレポートを生成するには、「[ドキュメントの同期ステータスレポートを生成したい](#)」を参照してください。

データソースの同期中にファイル形式の問題が発生しました。

データソースへのファイルの追加、またはデータソースの同期中にファイル形式の問題が発生した場合は、使用しているドキュメントタイプで Amazon Kendra がサポートされていることを確認してください。でサポートされているドキュメントタイプのリストについては、[「ドキュメントタイプまたは形式 Amazon Kendra」](#)を参照してください。

プレーンテキストファイルで BatchPutDocument API を使用する場合は、PLAIN_TEXT をコンテンツタイプとして指定してください。

ドキュメントの同期履歴レポートを生成したい

レポートの表示を選択すると、データソース同期ジョブのドキュメントレベルの同期実行履歴レポートを CloudWatch で表示できます。同期実行履歴レポートには、同期ジョブの各ドキュメントの進行状況とステータスに関する詳細が含まれます。クロール、同期、インデックスの作成の各段階でドキュメントが成功、失敗、スキップのどれになったかがわかります。失敗したドキュメントまたはスキップされたドキュメントに関連するエラーメッセージも表示されます。レポートに進行中の同期ジョブの結果が表示されない場合、ログはまだ使用できる状態になっていない可能性があります。同期プロセス中にイベントが発生するとデータがレポートに出力されるため、後で改めて確認してください。

同期実行履歴レポートにアクセスするには、次の手順を実行します。

1. Amazon Kendra コンソール (<https://console.aws.amazon.com/kendra/>) を開きます。
2. 左側のナビゲーションメニューから、データ管理でデータソースを選択し、データソースを選択します。
3. データソースの概要ページから、下にスクロールして同期履歴タブを選択します。
4. 同期実行履歴から、アクションを選択します。
5. アクション から、レポートの表示 を選択します。レポートにアクセスできる CloudWatch コンソールにリダイレクトされます。

Note

同期実行履歴は、アタッチされた ACLs やメタデータなど、Amazon Kendra がサポートするすべてのコネクタの取り込み中にドキュメントのインデックスが正常に作成されたかどうかを記録します。

Amazon S3 コネクタを使用している場合：

CloudWatch でドキュメントレベルの同期実行履歴レポートを作成することに加えて、Amazon S3 データソース内の各ドキュメントの同期履歴レポートを生成し、Amazon S3 バケットにコピーできます。このプロセス中、データは AWS KMS キーを使用して暗号化され、ユーザーのみが表示できます。報告されたドキュメントのステータスは、[失敗]、[完了]、または [成功 (エラーあり)] のいずれかになります。Amazon S3 の同期ステータスレポートを生成する前に、以下を実行する必要があります。

- Amazon S3 アクセスポリシーに次の Amazon Kendra サービスプリンシパルを追加する

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "KendraS3Access",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "kendra.amazonaws.com"
      },
      "Action": "s3:PutObject",
      "Resource": "arn:aws:s3:::your-manifest-bucket-name/*"
    }
  ]
}
```

- へのアクセス許可を持つ Amazon S3 バケットを作成する Amazon Kendra

コンソールを使用して Amazon S3 の同期履歴レポートを生成する場合は、同期履歴レポートからレポートを生成するオプション - データソースの詳細ページのオプションセクションを選択します。次に、Amazon S3 バケットの場所を入力し、使用可能な設定オプションから選択します。レポート生成を有効にすると、次の同期からレポートが生成されます。

Amazon S3 バケットを削除すると、ログデータが失われ、新しい同期レポートを保存する新しいバケットを設定する必要があります。

Note

同期履歴レポートには、Amazon S3 コネクタがデータを正常にクロールして取り込んだかどうかに関する情報のみが表示されます。

データソースの同期にはどのくらいの時間がかかりますか？

ドキュメントの更新がない場合、Amazon Kendra インデックスの同期時間はドキュメント数に比例して増加します。例えば、更新されていない 1,000 件のドキュメントの同期には約 5 分かかり、更新されていない 2,000 件のドキュメントの同期には約 10 分かかります。ドキュメントが更新されると、更新されたドキュメントの数に応じて同期時間が長くなります。

データソースの同期にかかる料金はいくらですか？

インデックスを同期すると、ウォームアップとアクティブ化によって必要な接続が確立され Amazon EC2 までに 2 分かかります。この処理中は課金されません。使用量の計測は、同期ジョブが開始してから開始されます。Amazon Kendra 料金の詳細については、「[Amazon Kendra の料金](#)」を参照してください。

Amazon EC2 認可エラーが出ます。

Virtual Private Cloud (VPC) データソースの同期中に Amazon EC2 不正なオペレーションエラーが発生した場合、VPC IAM ロールに必要なアクセス許可がない可能性があります。データソースに使用する IAM ロールに、アタッチされたアクセス許可があることを確認してください。詳細については、「[仮想プライベートクラウド IAM ロール](#)」を参照してください。

検索インデックスリンクを使用して Amazon S3 オブジェクトを開くことができない

Amazon Kendra インデックスは、Amazon S3 データソースがアクセス許可を付与するファイルにのみアクセスできます。例えば、オブジェクトがパブリックであるか暗号化されているかを判断する Amazon S3 アクセス許可を変更 Amazon Kendra することはできません。には、Amazon S3 オブジェクトの署名付きリンクを作成または返すためのデフォルトのアクセス許可 Amazon Kendra もありません。Amazon Kendra インデックス内の Amazon S3 オブジェクトの署名付きリンクを有効にする場合は、次の 2 つのオプションがあります。

- 検索ページに結果を返す前に、ソース URI オブジェクトでインデックスクエリの結果に署名できます。このプロセスの詳細な手順については、「[署名付き URL 使用したオブジェクトの共有](#)」を参照してください。
- Amazon S3 オブジェクトメタデータソース URI を上書きし、Amazon S3 バケットに接続された CloudFront コンテンツ配信ネットワーク (CDN) を介してサービスを使用可能にすることができます。または、署名付き URL を返してリダイレクトする API Gateway プロキシエンドポイントを使用することもできます。

「SSL 証明書ファイル使用時にアクセスが拒否されました」というエラーメッセージが表示されます

データソースで SSL 証明書を使用するときにアクセス拒否エラーが発生した場合は、指定した場所にある SSL 証明書ファイルにアクセスするアクセス許可が IAM ロールに付与されていることを確認してください。証明書が AWS KMS キーで暗号化されている場合、IAM ロールには AWS KMS キーを使用して復号するアクセス許可も必要です。詳細については、「[AWS KMSの認証とアクセスコントロール](#)」を参照してください。

SharePoint データソースを使用すると認可エラーが発生します

SharePoint データソースとインデックスの同期中に認可エラーが発生する場合は、SharePoint で自分にサイト管理者ロールが割り当てられていることを確認してください。

インデックスが Confluence データソースからのドキュメントにクローलされません

Amazon Kendra インデックスが同期プロセス中に Confluence データソースからドキュメントをクローलしていない場合は、自分が Confluence の管理者グループの一部であることを確認します。

ドキュメントの検索結果のトラブルシューティング

このセクションでは、Amazon Kendra 検索結果の問題を修正するのに役立ちます。

検索結果が検索クエリと無関係です

検索結果が関係ないと思われる場合は、次の理由が考えられます。

- 結果に信頼度 LOW の結果が含まれています。[QueryResultItem](#) の `ScoreAttributes` フィールドを使用して、 の値を持つ結果を除外することでHIGH、LOW結果を信頼度で除外できますLOW。は、各結果に VERY_HIGH、 、 MEDIUM のいずれかの信頼バケット値を Amazon Kendra 割り当てますLOW。これらの値は、結果がクエリに関連しているかどうかの信頼度のレベルを示しています。また、信頼度バケットに関係なく、 は (推奨される回答の抜粋) 、 ANSWER (QUESTION_ANSWERよくある質問) 、 DOCUMENT (ドキュメントの抜粋) の 3 種類の結果を次の順序で Amazon Kendra 返します。そのため、LOW の信頼度の QUESTION_ANSWER 結果が VERY_HIGH の信頼度の DOCUMENT の結果よりも上位に位置する可能性があります。ただし、必ずしも LOW の信頼度の QUESTION_ANSWER が VERY_HIGH の信頼度の DOCUMENT よりも、よい結果になるとは限りません。

- 特定のメタデータフィールドまたは属性は非常に高い値にブーストされ、結果のランキングに影響します。は、ドキュメントタイトル、テキスト、日付、カスタムテキストフィールドまたは属性などの複数のパラメータを使用してインデックス Amazon Kendra を検索します。すべてのクエリで最良の結果が得られるように、さまざまなブースト値を試すことができます。クエリレベルで動的な[関連性のチューニング](#)を使用して、クエリごとに異なるブースト値を使用することもできます。
- ユーザーは情報を検索する際に専門用語を使用していますが、これらの専門用語を処理するためのカスタムシノニムがインデックスに設定されていません。シノニムの使用方法と使用タイミングの詳細については、「[Adding custom synonyms to an index](#)」を参照してください。

なぜ 100 件しか表示されないのですか。

Amazon Kendra は、関連ドキュメントの合計数を返します。デフォルトでは、クエリごとに上位 100 件が返されます。結果はページ分割されます。PageNumber を使用して、別のページにアクセスできます。

クエリごとに最大 1,000 件のドキュメントまたは検索結果を返 Amazon Kendra するようにを設定し、ページごとに最大 100 件の結果を返すことができます。100 件を超える結果を返す場合は、[クォータサポート](#)に連絡してリクエストできます。検索結果の数を増やすと、レイテンシーに影響を与える可能性があります。

見ようとしているドキュメントがないのはなぜですか？

Amazon Kendra は、ユーザーとグループに基づいてアクセスコントロールリスト (ACLs) をサポートします。は、コネクタを介して ACL ポリシーを取り Amazon Kendra 込みます。インデックスで ACL が設定されていない場合、ユーザーとグループの属性フィルターに一致するドキュメントのみが表示されます。ユーザーまたはグループ属性フィルターが指定されている場合、ACL のないドキュメントは表示されません。

トークンベースのアクセス制御を使用している場合、ACL ポリシーのないドキュメントと、ユーザーおよびグループに一致するドキュメントが表示されます。

ACL ポリシーが設定されているドキュメントが表示されるのはなぜですか。

インデックスがアクセスコントロールポリシーを設定しない場合、フィルターによってユーザーとグループを指定できます。ユーザーとグループのフィルターが適用されていない場合は、すべての関連ドキュメントが返されます。ACL ポリシーは無視されます。

一般的な問題のトラブルシューティング

Amazon Kendra は CloudWatch メトリクスとログを使用して、データソースの同期に関するインサイトを提供します。メトリクスとログを使用して、同期の実行で何が問題になったかを判断し、どのように修正すればよいかを判断できます。

一般的なトラブルシューティングを行うには、CloudWatch メトリクスから始めます。

- DocumentsCrawled メトリクスをクリックしてデータソースがチェックしたドキュメントの数を確認します。Amazon S3 バケットの場合、数値が予想よりも小さい場合は、データソースが適切なバケットを指していることを確認します。
- DocumentsSkippedNoChange メトリクスをチェックして、前回の同期以降に変更されていないためにスキップされたドキュメントの数を確認します。数字が想定したものと一致しない場合は、リポジトリが正しく更新されていることを確認してください。
- DocumentsSkippedInvalidMetadata メトリクスをチェックして無効なメタデータを含むドキュメントの数を確認します。CloudWatch ログをチェックして、発生した特定のエラーを確認します。
- DocumentsSubmittedForIndexingFailed メトリクスを確認して、データソースからインデックスに送信されたが、インデックス作成に失敗したドキュメントの数を確認します。例えば、カスタムインデックスフィールドとして定義されていない Amazon S3 データソースでメタデータ属性を使用すると、ドキュメントはインデックスを作成しません。CloudWatch ログをチェックして、発生した特定のエラーを確認します。
- DocumentsSubmittedForDeletionFailed メトリクスをチェックして、インデックスから削除できなかったドキュメントをデータソースがインデックスから削除しようとしたドキュメントの数を確認します。CloudWatch ログをチェックして、発生した特定のエラーを確認します。

特定の同期実行の CloudWatch ログを参照して、実行中に発生したエラーの詳細を取得できます。を使用した CloudWatch ログの詳細については Amazon Kendra、「」を参照してください [CloudWatch Logs](#)。

Amazon Kendra インテリジェントランキング

Amazon Kendra Intelligent Ranking Amazon Kendra はセマンティック検索機能を使用して、検索サービスの結果をインテリジェントに再ランク付けします。

トピック

- [Amazon Kendra セルフマネージド OpenSearch のインテリジェントランキング](#)
- [検索サービスの結果をセマンティックにランク付けする](#)

Amazon Kendra セルフマネージド OpenSearch のインテリジェントランキング

Amazon Kendraのセマンティック検索機能を活用して、Apache 2.0 ライセンスに基づくセルフマネージドオープンソース検索サービスである [OpenSearch](#) の検索結果を改善できます。Amazon Kendra インテリジェントランキングプラグインは、Amazon Kendraを使用して OpenSearch の結果をセマンティックに再度ランク付けします。これは、デフォルトの OpenSearch 検索結果に含まれる特定のフィールド (ドキュメント本文やタイトルなど) を使用する検索クエリの意味とコンテキストを理解することで行われます。

例えば、「メインキーノートアドレス」というクエリを考えてみましょう。「アドレス」にはいくつかの意味があるため、はクエリの背後にある意味を推測して、意図した意味に沿った関連情報を返す Amazon Kendra ことができます。このコンテキストでは、これは会議の基調講演です。単純な検索サービスでは、その意図が考慮されず、例えばメインストリートの住所の結果が返される可能性があります。

OpenSearch のインテリジェントランキングプラグインは OpenSearch (セルフマネージド) バージョン 2.4.0 以降で使用できます。クイックスタート Bash スクリプトを使用してプラグインをインストールし、インテリジェントランキングプラグインを含む OpenSearch の新しい Docker イメージを構築できます。「[インテリジェント検索プラグインの設定](#)」を参照してください - これはすぐに使い始めるためのセットアップの例です。

インテリジェント検索プラグインの仕組み

OpenSearch 用インテリジェントランキングプラグイン (セルフマネージド) の全体的なプロセスは以下のとおりです。

1. OpenSearch ユーザーがクエリを発行すると、OpenSearch はクエリレスポンスまたはクエリに関連するドキュメントのリストを提供します。
2. インテリジェントランキングプラグインはクエリレスポンスを受け取り、ドキュメントから情報を抽出します。
3. Intelligent Ranking プラグインは、Amazon Kendra Intelligent Ranking の [Rescore](#) API を呼び出します。
4. Rescore API はドキュメントから抽出された情報を取得し、検索結果をセマンティックに再度ランク付けします。
5. Rescore API は再ランク付けされた検索結果をプラグインに送り返します。プラグインは OpenSearch 検索レスポンス内の検索結果を、新しいセマンティックランキングを反映するように再配置します。

インテリジェントランキングプラグインは、「本文」と「タイトル」フィールドを使用して結果を再度ランク付けします。これらのプラグインフィールドは、ドキュメントの本文とタイトルの定義に最も合う OpenSearch インデックスのフィールドにマッピングできます。例えば、索引に「chapter_heading」や「chapter_contents」のようなフィールドを含む本の章が含まれている場合、前者を「タイトル」に、後者を「本文」にマッピングすると、最良の結果が得られます。

インテリジェント検索プラグインの設定

インテリジェントランキングプラグインを使って OpenSearch (セルフマネージド) をすばやくセットアップする方法を以下に概説します。

インテリジェントランキングプラグイン (Quick Setup) を使って OpenSearch (セルフマネージド) をセットアップする

既に Docker イメージを使用している場合は `opensearch:2.4.0`、この [Dockerfile](#) を使用して、インテリジェントランキングプラグインで OpenSearch 2.4.0 の新しいイメージを構築できます。新しいイメージ用のコンテナを [docker-compose.yml](#) ファイルまたは `opensearch.yml` ファイルに含めます。また、リスコア実行プランの作成時に生成されたリスコア実行プラン ID を、リージョンとエンドポイントの情報とともに含めます。リスコア実行プランの作成については、ステップ 2 を参照してください。

2.4.0 より古いバージョンの `opensearch` Docker イメージを以前にダウンロードしていた場合は、Docker `opensearch:2.4.0` イメージ以降を使用し、インテリジェントランキングプラグインが含まれた新しいイメージを構築する必要があります。

1. オペレーティングシステム用の [Docker デスクトップ](#) をダウンロードしてインストールします。Docker デスクトップには Docker Compose と Docker Engine が含まれています。お使いのコンピュータが Docker インストールの詳細に記載されているシステム要件を満たしているかどうかを確認することをお勧めします。

Docker デスクトップの設定でメモリ使用量の要件を増やすこともできます。Docker サービスの無料使用制限以外の Docker の使用要件については、お客様の責任となります。「[Docker サブスクリプション](#)」を参照してください。

Docker デスクトップのステータスが「実行中」であることを確認します。

2. Intelligent Ranking Amazon Kendra と [容量](#)要件をプロビジョニングします。Amazon Kendra インテリジェントランキングをプロビジョニングすると、設定したキャパシティーユニットに基づいて時間単位で課金されます。[無料利用枠と料金表情報](#)をご覧ください。

[CreateRescoreExecutionPlan](#) API を使用して、Rescore API をプロビジョニングします。単一ユニットのデフォルトよりも多くのキャパシティーユニットが必要ない場合は、ユニットを追加せず、再スコア実行プランの名前だけを指定してください。[UpdateRescoreExecutionPlan API](#) を使用してキャパシティー要件を更新することもできます。詳細については、「[検索サービスの結果をセマンティックにランク付けする](#)」を参照してください。

オプションで、ステップ 3 に進んで、クイックスタート Bash スクリプトを実行するときのデフォルトの再スコア実行プランを作成できます。

ステップ 4 では、レスポンスに含まれる再スコア実行プラン ID をメモしておきます。

CLI

```
aws kendra-ranking create-rescore-execution-plan \
  --name MyRescoreExecutionPlan \
  --capacity-units '{"RescoreCapacityUnits':<integer number of additional
  capacity units>}'

Response:

{
  "Id": "<rescore execution plan ID>",
  "Arn": "arn:aws:kendra-ranking:<region>:<account-id>:rescore-execution-plan/
  <rescore-execution-plan-id>"
}
```

Python

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra_ranking = boto3.client("kendra-ranking")

print("Create a rescore execution plan.")

# Provide a name for the rescore execution plan
name = "MyRescoreExecutionPlan"
# Set your required additional capacity units
# Don't set capacity units if you don't require more than 1 unit given by
  default
capacity_units = 1

try:
    rescore_execution_plan_response =
kendra_ranking.create_rescore_execution_plan(
    Name = name,
    CapacityUnits = {"RescoreCapacityUnits":capacity_units}
)

    pprint.pprint(rescore_execution_plan_response)

    rescore_execution_plan_id = rescore_execution_plan_response["Id"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the rescore execution plan.")

    while True:
        # Get the details of the rescore execution plan, such as the status
        rescore_execution_plan_description =
kendra_ranking.describe_rescore_execution_plan(
        Id = rescore_execution_plan_id
    )
        # When status is not CREATING quit.
        status = rescore_execution_plan_description["Status"]
        print(" Creating rescore execution plan. Status: "+status)
        time.sleep(60)
        if status != "CREATING":
            break
```

```
except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

3. メインブランチのドロップダウンからバージョンブランチを選択して、お使いの OpenSearch バージョン用の [クイックスタート Bash スクリプト](#) を GitHub からダウンロードします。

このスクリプトは、GitHub リポジトリでスクリプト用に選択したバージョンを使用して OpenSearch ダッシュボードと OpenSearch ダッシュボードに Docker イメージを使用します。このスクリプトは Intelligent Ranking プラグインの zip ファイルをダウンロードし、そのプラグインを含む OpenSearch の新しい Docker イメージを構築するための Dockerfile を生成します。また、インテリジェントランキングプラグインと OpenSearch ダッシュボードを使った OpenSearch 用のコンテナを含む [docker-compose.yml](#) ファイルも作成します。このスクリプトは、スコア実行プラン ID、リージョン情報、およびエンドポイント (リージョンを使用) を docker-compose.yml ファイルに追加します。その後、スクリプトは docker-compose up を実行して、インテリジェントランキングを含む OpenSearch と OpenSearch ダッシュボードのコンテナを開始します。コンテナを削除せずに停止するには、docker-compose stop を実行します。コンテナを削除するには、docker-compose down を実行します。

4. ターミナルを開き、Bash スクリプトのディレクトリで、次のコマンドを実行します。

```
bash search_processing_kendra_quickstart.sh -p <execution-plan-id> -r <region>
```

このコマンドを実行するときは、ステップ 2 で Amazon Kendra Intelligent Ranking をプロビジョニングしたときにメモした再スコア実行プラン ID とリージョン情報を指定します。オプションで、代わりに --create-execution-plan オプションを使用して Amazon Kendra インテリジェントランキングをプロビジョニングすることもできます。これにより、デフォルトの名前とデフォルトのキャパシティーで再スコア実行プランが作成されます。

デフォルトのエフェメラルコンテナが削除されてもインデックスが失われないようにするには、--volume-name オプションを使用してデータボリューム名を指定して、実行後もインデックスを保持できます。以前にインデックスを作成している場合は、docker-compose.yml ファイルまたは opensearch.yml ファイルでボリュームを指定できます。ボリュームをそのまま残すには、docker-compose down -v を実行しないでください。

クイックスタート Bash スクリプトは、OpenSearch キーストアの AWS 認証情報を設定して Amazon Kendra Intelligent Ranking に接続します。スクリプトに AWS 認証情報を提供するに

は、`--profile` オプションを使用して AWS プロファイルを指定します。`--profile` オプションが指定されていない場合、クイックスタート Bash スクリプトは環境変数から AWS 認証情報 (アクセス/シークレットキー、オプションのセッショントークン) の読み取りを試行し、デフォルトプロファイルから読み取りを試みます AWS。`--profile` オプションが指定されておらず、認証情報が見つからない場合、スクリプトは OpenSearch キーストアに認証情報を渡しません。OpenSearch キーストアに認証情報が指定されていない場合でも、プラグインは Amazon EC2、メタデータサービスを介して配信される Amazon ECS コンテナ認証情報やインスタンスプロファイル認証情報など、[デフォルトの認証情報プロバイダーチェーン](#)内の認証情報をチェックします。

Amazon Kendra Intelligent Ranking を呼び出すために必要なアクセス許可を持つ IAM ロールが作成されていることを確認します。以下は、特定の再スコア実行プランに Rescore API を使用するアクセス許可を付与する IAM ポリシーの例です。

JSON

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "kendra-ranking:Rescore",
      "Resource": "arn:aws:kendra-ranking:${Region}:${Account}:rescore-execution-plan/${RescoreExecutionPlanId}"
    }
  ]
}
```

docker-compose.yml の例

OpenSearch 2.4.0 以降をインテリジェントランキングプラグインと OpenSearch ダッシュボード 2.4.0 以降で使った docker-compose.yml ファイルの例。

```
version: '3'
networks:
  opensearch-net:
volumes:
  <volume-name>:
services:
```

```

opensearch-node:
  image: <Docker image tag name of OpenSearch with Intelligent Ranking plugin>
  container_name: opensearch-node
  environment:
    - cluster.name=opensearch-cluster
    - node.name=opensearch-node
    - discovery.type=single-node
    - kendra_intelligent_ranking.service.endpoint=https://kendra-
ranking.<region>.api.aws
    - kendra_intelligent_ranking.service.region=<region>
    - kendra_intelligent_ranking.service.execution_plan_id=<rescore-execution-plan-
id>
  ulimits:
    memlock:
      soft: -1
      hard: -1
    nofile:
      soft: 65536
      hard: 65536
  ports:
    - 9200:9200
    - 9600:9600
  networks:
    - opensearch-net
  volumes:
    <docker-volume-name>:/usr/share/opensearch/data
opensearch-dashboard:
  image: opensearchproject/opensearch-dashboards:<your-version>
  container_name: opensearch-dashboards
  ports:
    - 5601:5601
  environment:
    OPENSEARCH_HOSTS: '["https://opensearch-node:9200"]'
  networks:
    - opensearch-net

```

Dockerfile とイメージの構築の例

OpenSearch 2.4.0 以降をインテリジェントランキングプラグインと組み合わせて使用する場合の Dockerfile の例。

```
FROM opensearchproject/opensearch:<your-version>
```

```
RUN /usr/share/opensearch/bin/opensearch-plugin install --batch https://github.com/opensearch-project/search-processor/releases/download/<your-version>/search-processor.zip
```

インテリジェントランキングプラグインを使用して OpenSearch の Docker イメージを構築します。

```
docker build --tag=<Docker image tag name of OpenSearch with Intelligent Ranking plugin>
```

インテリジェント検索プラグインとのやり取り

インテリジェントランキングプラグインで OpenSearch (セルフマネージド) を設定すると、curl コマンドまたは OpenSearch クライアントライブラリを使用してプラグインを操作できるようになります。インテリジェントランキングプラグインで OpenSearch にアクセスするためのデフォルトの認証情報は、ユーザー名は「admin」、パスワードは「admin」です。

インテリジェントランキングプラグインの設定を OpenSearch インデックスに適用するには:

Curl

```
curl -XPUT "https://localhost:9200/<your-docs-index>/_settings" -u 'admin:admin' --insecure -H 'Content-Type: application/json' -d'
{
  "index": {
    "plugin" : {
      "searchrelevance" : {
        "result_transformer" : {
          "kendra_intelligent_ranking": {
            "order": 1,
            "properties": {
              "title_field": "title_field_name_here",
              "body_field": "body_field_name_here"
            }
          }
        }
      }
    }
  }
}
```


Python

```
pip install opensearch-py

from opensearchpy import OpenSearch
host = 'localhost'
port = 9200
auth = ('admin', 'admin')

client = OpenSearch(
    hosts = [{'host': host, 'port': port}],
    http_compress = True, # enables gzip compression for request bodies
    http_auth = auth,
    # client_cert = client_cert_path,
    # client_key = client_key_path,
    use_ssl = True,
    verify_certs = False,
    ssl_assert_hostname = False,
    ssl_show_warn = False,
    ca_certs = ca_certs_path
)

setting_body = {
    "index": {
        "plugin" : {
            "searchrelevance" : {
                "result_transformer" : {
                    "kendra_intelligent_ranking": {
                        "order": 1,
                        "properties": {
                            "title_field": "title_field_name_here",
                            "body_field": "body_field_name_here"
                        }
                    }
                }
            }
        }
    }
}

response = client.indices.put_settings(index_name, body=setting_body)
```

ドキュメント本文やドキュメントコンテンツフィールドなど、再ランク付けに使用するメインテキストフィールドの名前を含める必要があります。ドキュメントのタイトルや概要など、他のテキストフィールドも含めることができます。

これで、任意のクエリを発行できるようになり、その結果はインテリジェントランキングプラグインを使ってランク付けされます。

Curl

```
curl -XGET "https://localhost:9200/<your-docs-index>/_search?pretty" -u
'admin:admin' --insecure -H 'Content-Type: application/json' -d'
{
  "query" : {
    "match" : {
      "body_field_name_here": "intelligent systems"
    }
  }
}
```

Python

```
from opensearchpy import OpenSearch
host = 'localhost'
port = 9200
auth = ('admin', 'admin')

client = OpenSearch(
    hosts = [{'host': host, 'port': port}],
    http_compress = True, # enables gzip compression for request bodies
    http_auth = auth,
    # client_cert = client_cert_path,
    # client_key = client_key_path,
    use_ssl = True,
    verify_certs = False,
    ssl_assert_hostname = False,
    ssl_show_warn = False,
    ca_certs = ca_certs_path
)

query = {
    'size': 10,
    "query" : {
```

```
        "match" : {
            "body_field_name_here": "intelligent systems"
        }
    }
}

response = client.search(
    body = query,
    index = index_name
)

print('\nSearch results:')
print(response)
```

OpenSearch インデックスのインテリジェントランキングプラグイン設定を削除するには:

Curl

```
curl -XPUT "http://localhost:9200/<your-docs-index>/_settings" -H 'Content-Type: application/json' -d'
{
  "index": {
    "plugin": {
      "searchrelevance": {
        "result_transformer": {
          "kendra_intelligent_ranking.*": null
        }
      }
    }
  }
}
```

Python

```
from opensearchpy import OpenSearch
host = 'localhost'
port = 9200
auth = ('admin', 'admin')

client = OpenSearch(
    hosts = [{'host': host, 'port': port}],
```

```

    http_compress = True, # enables gzip compression for request bodies
    http_auth = auth,
    # client_cert = client_cert_path,
    # client_key = client_key_path,
    use_ssl = True,
    verify_certs = False,
    ssl_assert_hostname = False,
    ssl_show_warn = False,
    ca_certs = ca_certs_path
)

setting_body = {
    "index": {
        "plugin": {
            "searchrelevance": {
                "result_transformer": {
                    "kendra_intelligent_ranking.*": null
                }
            }
        }
    }
}

response = client.indices.put_settings(index_name, body=setting_body)

```

インテリジェントランキングプラグインを特定のクエリでテストしたり、特定の本文やタイトルフィールドでテストするには:

Curl

```

curl -XGET "https://localhost:9200/<your-docs-index>/_search?pretty" -u
'admin:admin' --insecure -H 'Content-Type: application/json' -d'
{
  "query": {
    "multi-match": {
      "query": "intelligent systems",
      "fields": ["body_field_name_here", "title_field_name_here"]
    }
  },
  "size": 25,
  "ext": {
    "search_configuration": {

```

```

    "result_transformer": {
      "kendra_intelligent_ranking": {
        "order": 1,
        "properties": {
          "title_field": "title_field_name_here",
          "body_field": "body_field_name_here"
        }
      }
    }
  }
}

```

Python

```

from opensearchpy import OpenSearch
host = 'localhost'
port = 9200
auth = ('admin', 'admin')

client = OpenSearch(
    hosts = [{'host': host, 'port': port}],
    http_compress = True, # enables gzip compression for request bodies
    http_auth = auth,
    # client_cert = client_cert_path,
    # client_key = client_key_path,
    use_ssl = True,
    verify_certs = False,
    ssl_assert_hostname = False,
    ssl_show_warn = False,
    ca_certs = ca_certs_path
)

# Index settings null for kendra_intelligent_ranking

query = {
  "query": {
    "multi_match": {
      "query": "intelligent systems",
      "fields": ["body_field_name_here", "title_field_name_here"]
    }
  }
},

```

```
"size": 25,
"ext": {
  "search_configuration": {
    "result_transformer": {
      "kendra_intelligent_ranking": {
        "order": 1,
        "properties": {
          "title_field": "title_field_name_here",
          "body_field": "body_field_name_here"
        }
      }
    }
  }
}

response = client.search(
    body = query,
    index = index_name
)

print('\nSearch results:')
print(response)
```

OpenSearch の結果と Amazon Kendra 結果の比較

OpenSearch (セルフマネージド) のランク付けされた結果を、Amazon Kendra 再ランク付けされた結果と side-by-side 比較できます。OpenSearch Dashboards バージョン 2.4.0 以降では、結果を並べて表示できるため、OpenSearch がドキュメントをランク付けする方法と、Amazon Kendra またはプラグインが検索クエリでドキュメントをランク付けする方法を比較できます。

OpenSearch のランク付けされた結果と Amazon Kendra 再ランク付けされた結果を比較する前に、OpenSearch Dashboards が Intelligent Ranking プラグインを備えた OpenSearch サーバーによってバックアップされていることを確認してください。これは Docker とクイックスタート Bash スクリプトを使用して設定できます。「[インテリジェント検索プラグインの設定](#)」を参照してください。

以下に、OpenSearch ダッシュボードで OpenSearch と Amazon Kendra 検索結果を比較する方法の概要を示します。詳細については、[OpenSearch ドキュメント](#) を参照してください。

OpenSearch Dashboards での検索結果の比較

1. <http://localhost:5601> を開いて OpenSearch ダッシュボードにサインインします。デフォルトの認証情報は、ユーザー名は「admin」、パスワードは「admin」です。
2. ナビゲーションメニューの OpenSearch プラグインから [検索関連性] を選択します。
3. 検索バーに検索テキストを入力します。
4. [クエリ 1] のインデックスを選択し、OpenSearch クエリ DSL にクエリを入力します。この %SearchText% 変数を使用して、検索バーに入力した検索テキストを参照できます。このクエリの例については、[OpenSearch ドキュメンテーション](#)を参照してください。このクエリで返される結果は、インテリジェントランキングプラグインを使用しない OpenSearch の結果です。
5. [クエリ 2] のインデックスを選択し、OpenSearch クエリ DSL に同じクエリを入力します。また、`kendra_intelligent_ranking` を持つ拡張子を含め、ランク付けに必須の `body_field` を指定します。タイトルフィールドも指定できますが、本文フィールドは必須です。このクエリの例については、[OpenSearch ドキュメンテーション](#)を参照してください。このクエリで返される結果は、Intelligent Ranking プラグインを使用して Amazon Kendra 再ランク付けされた結果です。このプラグインは最大 25 件の結果をランク付けします。
6. [検索] を選択すると、結果を返して比較できます。

検索サービスの結果をセマンティックにランク付けする

Amazon Kendra Intelligent Ranking は Amazon Kendra、 のセマンティック検索機能を使用して、検索サービスの結果を再ランク付けします。これは、検索クエリのコンテキストと、検索サービスドキュメントから利用可能なすべての情報を考慮に入れて行われます。Amazon Kendra インテリジェントランキングは、単純なキーワードマッチングを改善できます。

[CreateRescoreExecutionPlan](#) API は、[Rescore](#) API のプロビジョニングに使用される Amazon Kendra Intelligent Ranking リソースを作成します。この Rescore API は [OpenSearch \(セルフマネージド\)](#) などの検索サービスからの検索結果を再ランク付けします。

`CreateRescoreExecutionPlan` の呼び出し時に、検索サービスの結果を再ランク付けするのに必要なキャパシティーユニットを設定します。単一ユニットのデフォルトを超えるキャパシティーユニットが必要ない場合は、デフォルトを変更しないでください。再スコア実行プランの名前だけを指定してください。追加ユニットは 1000 件まで設定できます。単一のキャパシティーユニットに含まれる内容については、「[キャパシティーの調整](#)」を参照してください。Intelligent Ranking Amazon Kendra をプロビジョニングすると、設定したキャパシティーユニットに基づいて時間単位で課金されます。[無料利用枠と料金表情報](#)をご覧ください。

CreateRescoreExecutionPlan を呼び出すと、再スコア実行プラン ID が生成され、レスポンスとして返されます。Rescore API は再スコア実行プラン ID を使用して、設定したキャパシティーを使用して検索サービスの結果を再ランク付けします。再スコア実行プラン ID は検索サービスの設定ファイルに含めます。例えば、OpenSearch (セルフマネージド) を使用する場合は、docker-compose.yml ファイルまたは opensearch.yml ファイルに再スコア実行プラン ID を含めます。

「[OpenSearch \(セルフサービス\) の結果をインテリジェントにランク付けする](#)」を参照してください。

Amazon リソースネーム (ARN) は、CreateRescoreExecutionPlan 呼び出し時のレスポンスでも生成されます。この ARN を使用して AWS Identity and Access Management (IAM) でアクセス許可ポリシーを作成し、特定の再スコア実行プランの特定の ARN へのユーザーアクセスを制限できます。特定の再スコア実行プランに Rescore API を使用するアクセス許可を付与する IAM ポリシーの例については、[Amazon Kendra 「セルフマネージド OpenSearch のインテリジェントランキング」](#)を参照してください。

以下は、キャパシティーユニットを 1 に設定して再スコア実行プランを作成する例です。

CLI

```
aws kendra-ranking create-rescore-execution-plan \
  --name MyRescoreExecutionPlan \
  --capacity-units '{"RescoreCapacityUnits":1}'
```

Response:

```
{
  "Id": "<rescore execution plan ID>",
  "Arn": "arn:aws:kendra-ranking:<region>:<account-id>:rescore-execution-plan/
<rescore-execution-plan-id>"
}
```

Python

```
import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra_ranking = boto3.client("kendra-ranking")

print("Create a rescore execution plan.")
```



```
# Provide a name for the rescore execution plan
name = "MyRescoreExecutionPlan"
# Set your required additional capacity units
# Don't set capacity units if you don't require more than 1 unit given by default
capacity_units = 1

try:
    rescore_execution_plan_response = kendra_ranking.create_rescore_execution_plan(
        Name = name,
        CapacityUnits = {"RescoreCapacityUnits":capacity_units}
    )

    pprint.pprint(rescore_execution_plan_response)

    rescore_execution_plan_id = rescore_execution_plan_response["Id"]

    print("Wait for Amazon Kendra to create the rescore execution plan.")

    while True:
        # Get the details of the rescore execution plan, such as the status
        rescore_execution_plan_description =
kendra_ranking.describe_rescore_execution_plan(
            Id = rescore_execution_plan_id
        )
        # When status is not CREATING quit.
        status = rescore_execution_plan_description["Status"]
        print(" Creating rescore execution plan. Status: "+status)
        time.sleep(60)
        if status != "CREATING":
            break

except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

```
import java.util.concurrent.TimeUnit;

import software.amazon.awssdk.services.kendraranking.KendraRankingClient;
```

```
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.CapacityUnitsConfiguration;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.CreateRescoreExecutionPlanRequest;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.CreateRescoreExecutionPlanResponse;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.DescribeRescoreExecutionPlanRequest;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.DescribeRescoreExecutionPlanResponse;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.RescoreExecutionPlanStatus;

public class CreateRescoreExecutionPlanExample {

    public static void main(String[] args) throws InterruptedException {

        String rescoreExecutionPlanName = "MyRescoreExecutionPlan";
        int capacityUnits = 1;

        KendraRankingClient kendraRankingClient = KendraRankingClient.builder().build();

        System.out.println(String.format("Creating a rescore execution plan named %s",
            rescoreExecutionPlanName));

        CreateRescoreExecutionPlanResponse createResponse =
            kendraRankingClient.createRescoreExecutionPlan(
                CreateRescoreExecutionPlanRequest.builder()
                    .name(rescoreExecutionPlanName)
                    .capacityUnits(
                        CapacityUnitsConfiguration.builder()
                            .rescoreCapacityUnits(capacityUnits)
                            .build()
                    )
                    .build()
            );

        String rescoreExecutionPlanId = createResponse.id();
        System.out.println(String.format("Waiting for rescore execution plan with id %s
            to finish creating.", rescoreExecutionPlanId));
        while (true) {
            DescribeRescoreExecutionPlanResponse describeResponse =
                kendraRankingClient.describeRescoreExecutionPlan(
                    DescribeRescoreExecutionPlanRequest.builder()
```

```

        .id(rescoreExecutionPlanId)
        .build()
    );
    RescoreExecutionPlanStatus rescoreExecutionPlanStatus =
describeResponse.status();
    if (rescoreExecutionPlanStatus != RescoreExecutionPlanStatus.CREATING) {
        break;
    }
    TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
}

System.out.println("Rescore execution plan creation is complete.");
}
}

```

以下は、キャパシティユニットを 2 に設定するように再スコア実行プランを更新する例です。

CLI

```

aws kendra-ranking update-rescore-execution-plan \
  --id <rescore execution plan ID> \
  --capacity-units '{"RescoreCapacityUnits":2}'

```

Python

```

import boto3
from botocore.exceptions import ClientError
import pprint
import time

kendra_ranking = boto3.client("kendra-ranking")

print("Update a rescore execution plan.")

# Provide the ID of the rescore execution plan
id = <rescore execution plan ID>
# Re-set your required additional capacity units
capacity_units = 2

try:
    kendra_ranking.update_rescore_execution_plan(
        Id = id,

```

```
        CapacityUnits = {"RescoreCapacityUnits":capacity_units}
    )

    print("Wait for Amazon Kendra to update the rescore execution plan.")

    while True:
        # Get the details of the rescore execution plan, such as the status
        rescore_execution_plan_description =
kendra_ranking.describe_rescore_execution_plan(
            Id = id
        )
        # When status is not UPDATING quit.
        status = rescore_execution_plan_description["Status"]
        print(" Updating rescore execution plan. Status: "+status)
        time.sleep(60)
        if status != "UPDATING":
            break

    except ClientError as e:
        print("%s" % e)

    print("Program ends.")
```

Java

```
import java.util.concurrent.TimeUnit;

import software.amazon.awssdk.services.kendraranking.KendraRankingClient;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.CapacityUnitsConfiguration;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.DescribeRescoreExecutionPlanRequest;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.DescribeRescoreExecutionPlanResponse;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.RescoreExecutionPlanStatus;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.UpdateRescoreExecutionPlanRequest;
import
    software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.UpdateRescoreExecutionPlanResponse;

public class UpdateRescoreExecutionPlanExample {
```

```
public static void main(String[] args) throws InterruptedException {

    String rescoreExecutionPlanId = <rescore execution plan ID>;
    int newCapacityUnits = 2;

    KendraRankingClient kendraRankingClient = KendraRankingClient.builder().build();

    System.out.println(String.format("Updating a rescore execution plan named %s",
rescoreExecutionPlanId));

    UpdateRescoreExecutionPlanResponse updateResponse =
kendraRankingClient.updateRescoreExecutionPlan(
        UpdateRescoreExecutionPlanRequest.builder()
            .id(rescoreExecutionPlanId)
            .capacityUnits(
                CapacityUnitsConfiguration.builder()
                    .rescoreCapacityUnits(newCapacityUnits)
                    .build()
            )
            .build()
    );

    System.out.println(String.format("Waiting for rescore execution plan with id %s
to finish updating.", rescoreExecutionPlanId));
    while (true) {
        DescribeRescoreExecutionPlanResponse describeResponse =
kendraRankingClient.describeRescoreExecutionPlan(
            DescribeRescoreExecutionPlanRequest.builder()
                .id(rescoreExecutionPlanId)
                .build()
        );
        RescoreExecutionPlanStatus rescoreExecutionPlanStatus =
describeResponse.status();
        if (rescoreExecutionPlanStatus != RescoreExecutionPlanStatus.UPDATING) {
            break;
        }
        TimeUnit.SECONDS.sleep(60);
    }

    System.out.println("Rescore execution plan update is complete.");
}
}
```

以下は Rescore API を使用したスクリプトの例です。

CLI

```
aws kendra-ranking rescore \  
  --rescore-execution-plan-id <rescore execution plan ID> \  
  --search-query "intelligent systems" \  
  --documents "[{\"Id\": \"DocId1\", \"Title\": \"Smart systems\", \"Body\":  
  \"intelligent systems in everyday life\", \"OriginalScore\": 2.0}, {\"Id\":  
  \"DocId2\", \"Title\": \"Smarter systems\", \"Body\": \"living with intelligent  
  systems\", \"OriginalScore\": 1.0}]"
```

Python

```
import boto3  
from botocore.exceptions import ClientError  
import pprint  
  
kendra_ranking = boto3.client("kendra-ranking")  
  
print("Use the Rescore API.")  
  
# Provide the ID of the rescore execution plan  
id = <rescore execution plan ID>  
# The search query from the search service  
query = "intelligent systems"  
# The list of documents for Intelligent Ranking to rescore  
document_list = [  
    {"Id": "DocId1", "Title": "Smart systems", "Body": "intelligent systems in  
    everyday life", "OriginalScore": 2.0},  
    {"Id": "DocId2", "Title": "Smarter systems", "Body": "living with intelligent  
    systems", "OriginalScore": 1.0}  
]  
  
try:  
    rescore_response = kendra_ranking.rescore(  
        rescore_execution_plan_id = id,  
        search_query = query,  
        documents = document_list  
    )  
  
    print(rescore_response["RescoreId"])  
    print(rescore_resposne["ResultItems"])
```

```
except ClientError as e:
    print("%s" % e)

print("Program ends.")
```

Java

```
import java.util.ArrayList;
import java.util.List;

import software.amazon.awssdk.services.kendraranking.KendraRankingClient;
import software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.RescoreRequest;
import software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.RescoreResponse;
import software.amazon.awssdk.services.kendraranking.model.Document;

public class RescoreExample {

    public static void main(String[] args) {

        String rescoreExecutionPlanId = <rescore execution plan ID>;
        String query = "intelligent systems";

        List<Document> documentList = new ArrayList<>();
        documentList.add(
            Document.builder()
                .id("DocId1")
                .originalScore(2.0F)
                .body("intelligent systems in everyday life")
                .title("Smart systems")
                .build()
        );
        documentList.add(
            Document.builder()
                .id("DocId2")
                .originalScore(1.0F)
                .body("living with intelligent systems")
                .title("Smarter systems")
                .build()
        );

        KendraRankingClient kendraRankingClient = KendraRankingClient.builder().build();
```

```
RescoreResponse rescoreResponse = kendraRankingClient.rescore(  
    RescoreRequest.builder()  
        .rescoreExecutionPlanId(rescoreExecutionPlanId)  
        .searchQuery(query)  
        .documents(documentList)  
        .build()  
);  
  
System.out.println(rescoreResponse.rescoreId());  
System.out.println(rescoreResponse.resultItems());  
}  
}
```


API リファレンス

「[API リファレンスドキュメント](#)」は別のガイドになりました。

のドキュメント履歴 Amazon Kendra

- ドキュメントの最終更新日：2024 年 12 月 4 日

次の表に、の各リリースにおける重要な変更点を示します Amazon Kendra。このドキュメントの更新に関する通知については、[RSS フィード](#)にサブスクライブできます。

変更	説明	日付
新機能	Amazon Kendra で、Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition インデックスという新しいインデックスタイプがサポートされるようになりました。詳細については、「 Amazon Kendra GenAI Enterprise Edition index 」を参照してください。	2024 年 12 月 4 日
新機能	Amazon Kendra は、GitHub データソースコネクタの更新バージョンをサポートするようになりました。詳細については、「 GitHub 」を参照してください。	2024 年 2 月 27 日
新機能	Amazon Kendra は、データソースコネクタの更新 Amazon FSx バージョンをサポートするようになりました。詳細については、 Amazon FSx 「(Windows)」 および Amazon FSx 「(NetApp ONTAP)」 を参照してください。	2024 年 2 月 8 日

新機能

Amazon Kendra は、Slack データソースコネクタの更新バージョンをサポートするようになりました。詳細については、「[Slack](#)」を参照してください。

2024 年 1 月 11 日

新機能

Amazon Kendra では、検索結果の折りたたみと展開がサポートされるようになりました。詳細については、「[クエリ結果の折りたたみ/展開](#)」を参照してください。

2023 年 10 月 19 日

新機能

Amazon Kendra が Aurora (MySQL) データソースコネクタをサポートするようになりました。詳細については、「[Aurora \(MySQL\)](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra が Aurora (PostgreSQL) データソースコネクタをサポートするようになりました。詳細については、「[Aurora \(PostgreSQL\)](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra が Amazon RDS (MySQL) データソースコネクタをサポートするようになりました。詳細については、「[Amazon RDS \(MySQL\)](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で Amazon RDS (Microsoft SQL Server) データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[Amazon RDS \(Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra が Amazon RDS (Oracle) データソースコネクタをサポートするようになりました。詳細については、「[Amazon RDS \(Oracle\)](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で Amazon RDS (PostgreSQL) データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[Amazon RDS \(PostgreSQL\)](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で IBM DB2 データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[IBM DB2](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で Microsoft SQL Server データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[Microsoft SQL Server](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で MySQL データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[MySQL](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で Oracle Database データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[Oracle Database](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra で PostgreSQL データソースコネクタがサポートされるようになりました。詳細については、「[PostgreSQL](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 28 日

新機能

Amazon Kendra が Drupal のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Drupal](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 6 日

新機能

検索拡張生成 (RAG) システム用の Amazon Kendra [Retrieve](#) API を使用して、意味的に関連するパッセージを取得します。

2023 年 6 月 22 日

新機能

Amazon Kendra は、Web Crawler データソースコネクタの更新 Amazon Kendra バージョンをサポートするようになりました。詳細については、「[Amazon Kendra Web Crawler v2.0](#)」を参照してください。

2023 年 6 月 21 日

リージョンの拡張

Amazon Kendra が欧州 (ロンドン) (eu-west-2) で利用可能になりました。

2023 年 6 月 5 日

新機能

Amazon Kendra で Alfresco データソースコネクタの更新バージョンがサポートされるようになりました。詳細については、「[Alfresco](#)」を参照してください。

2023 年 5 月 16 日

新機能

Amazon Kendra は、Adobe Experience Manager のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Adobe Experience Manager](#)」を参照してください。

2023 年 5 月 11 日

新機能

Amazon Kendra では、[GetQuerySuggestions](#) を呼び出すときにドキュメントのフィールド/属性の設定がサポートされるようになりました。ドキュメントフィールドの内容をクエリの提案の基準にできるようになりました。詳細については、「[Query suggestions](#)」を参照してください。

2023 年 5 月 2 日

新機能

Amazon Kendra が Gmail のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Gmail](#)」を参照してください。

2023 年 4 月 13 日

新機能

Amazon Kendra は、Microsoft OneDrive データソースコネクタの更新バージョンをサポートするようになりました。詳細については、「[Microsoft OneDrive v2.0](#)」を参照してください。

2023 年 4 月 3 日

新機能

ユーザーが[注目結果](#)を使用して特定のクエリを入力したとき、新しいドキュメントの視認性を向上させたり、特定のドキュメントを昇格したりします。

2023 年 3 月 30 日

新機能

Amazon Kendra は、Microsoft SharePoint 用の更新されたデータソースコネクタをサポートするようになりました。詳細については、「[Microsoft SharePoint](#)」を参照してください。

2023 年 3 月 2 日

新機能

Amazon Kendra は、Confluence データソースコネクタの更新バージョンをサポートするようになりました。詳細については、「[Confluence](#)」を参照してください。

2023 年 3 月 1 日

リージョンの拡張

Amazon Kendra がアジアパシフィック (東京) (ap-northeast-1) で利用可能になりました。

2023 年 2 月 7 日

新機能

Amazon Kendra は、Microsoft Exchange 用のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Microsoft Exchange](#)」を参照してください。

2023 年 1 月 12 日

新機能

Amazon Kendra が Microsoft Yammer 用のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Microsoft Yammer](#)」を参照してください。

2023 年 1 月 12 日

新機能

Amazon Kendra で
は、RTF、XML、XSLT、MS
_EXCEL、CSV、JSON、MD
ドキュメントタイプのイン
デックス作成がサポートさ
れるようになりました。詳
細については、「[Types of documents](#)」を参照してくだ
さい。

2023 年 1 月 11 日

新機能

Amazon Kendra は、デー
タソースコネクタの更新
Amazon S3 バージョンを
サポートするようになりま
した。詳細については、
「[Amazon S3](#)」を参照してく
ださい。

2023 年 1 月 10 日

新機能

[OpenSearch](#) (セルフマネージ
ド) の検索結果は、[Amazon
Kendra インテリジェントラ
ンキング](#)を使用してセマンテ
ィックにランク付けできま
す。

2023 年 1 月 9 日

新機能

Amazon Kendra が Microsoft
Teams のデータソースコネ
クタを提供するようになり
ました。詳細については、
「[Microsoft Teams](#)」を参照し
てください。

2023 年 1 月 5 日

新機能

Amazon Kendra には、Google
Drive 用の更新されたデータ
ソースコネクタがあります。
詳細については、「[Google
Drive](#)」を参照してください。

2023 年 1 月 5 日

新機能	Amazon Kendra には、ServiceNow 用の更新されたデータソースコネクタがあります。詳細については、「 ServiceNow 」を参照してください。	2022 年 12 月 21 日
新機能	Amazon Kendra には、Salesforce 用の更新されたデータソースコネクタがあります。詳細については、「 Salesforce 」を参照してください。	2022 年 12 月 21 日
リージョンの拡張	Amazon Kendra がアジアパシフィック (ムンバイ) (ap-south-1) で利用可能になりました。	2022 年 12 月 14 日
新機能	Amazon Kendra の 表形式検索機能 では、HTML ドキュメントに埋め込まれた表から回答を検索して抽出できます。	2022 年 11 月 27 日
新機能	Amazon Kendra では、 選択した言語セットのセマンティック検索 がサポートされています。	2022 年 11 月 27 日
新機能	Amazon Kendra で Dropbox のデータソースコネクタが提供されるようになりました。詳細については、「 Dropbox 」を参照してください。	2022 年 9 月 27 日
新機能	Amazon Kendra が Zendesk のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「 Zendesk 」を参照してください。	2022 年 8 月 17 日

新機能

ドキュメントレベルのアクセス制御は、ドキュメントにインデックスを付けた後に再設定できるようになりました。詳細については、「[アクセスコントロール設定](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 14 日

新機能

Amazon Kendra が Alfresco のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Alfresco](#)」を参照してください。

2022 年 6 月 30 日

新機能

Amazon Kendra で GitHub 用のデータソースコネクタが提供されるようになりました。詳細については、「[GitHub](#)」を参照してください。

2022 年 6 月 2 日

新機能

Amazon Kendra が Jira のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Jira](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 12 日

新機能

ファセット内のネストされたファセットを検索結果に表示できます。詳細については、「[Facets](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 5 日

新機能

Amazon Kendra が Quip 用のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Quip](#)」を参照してください。

2022 年 4 月 19 日

新機能

Amazon Kendra が Box のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Box](#)」を参照してください。

新機能

Amazon Kendra が Slack のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、「[Slack](#)」を参照してください。

新機能

Amazon Kendra がデータソースコネクタを提供するようになりました Amazon FSx。詳細については、「[Amazon FSx](#)」を参照してください。

AWS マネージドポリシーの更新 - 新しいポリシー

Amazon Kendra に新しい AWS マネージドポリシーが追加されました。詳細については、「[AWS Managed policies for Amazon Kendra](#)」を参照してください。

新機能

Amazon Kendra 検索アプリケーションは、フロントエンドコードなしで数回クリックするだけでデプロイできます。詳細については、[コードなしで検索アプリケーションをデプロイする](#)を参照してください。

新機能

ドキュメントの取り込みプロセス中に、ドキュメントのメタデータおよび内容を改善できます。詳細については、[取り込みプロセス中のドキュメントのメタデータのカスタマイズ](#)を参照してください。

2021 年 12 月 1 日

新機能

Amazon Kendra は、検索アプリケーションに関する有用なインサイトを得るために検索分析を提供します。詳細については、[検索分析でインサイトを取得する](#)を参照してください。

2021 年 12 月 1 日

リージョンの拡張

Amazon Kendra が AWS GovCloud (米国西部) (us-gov-west-1) で利用可能になりました。

2021 年 10 月 13 日

新機能

Amazon Kendra では、ドキュメントのインデックスを複数の言語で作成し、検索結果を言語別にフィルタリングできるようになりました。[英語以外の言語でドキュメントを追加する](#)および[各言語での検索](#)を参照してください。

2021 年 10 月 7 日

新機能

Amazon Kendra は Identity Center デイレクトリと統合され、[ユーザーコンテキストフィルタリング](#)のためにグループとユーザーのアクセスレベルを取得できるようになりました。「[User-group configuration for IAM Identity Center](#)」を参照してください。

2021 年 10 月 6 日

チュートリアルの新規追加

Amazon Kendra では、メタデータが豊富な検索ソリューションを構築する方法を説明するチュートリアルが提供されるようになりました。[インテリジェント検索ソリューションの構築](#)を参照してください。

2021 年 8 月 13 日

新機能

Amazon Kendra がデータソースコネクタを提供するようになりました WorkDocs。詳細については、「[WorkDocs](#)」を参照してください。

2021 年 7 月 20 日

新機能

Amazon Kendra では、ウェブページをクロールしてインデックスを作成するためのウェブクローラーが提供されるようになりました。詳細については、「[Web crawler](#)」を参照してください。

2021 年 6 月 17 日

リージョンの拡張

Amazon Kendra がカナダ (中部) (ca-central-1) で利用可能になりました。

2021年6月16日

リージョンの拡張

Amazon Kendra が米国東部 (オハイオ) (us-east-2) で利用可能になりました。

2021 年 6 月 7 日

新機能

Amazon Kendra でクエリ提案がサポートされるようになりました。ここでは、検索に関連する一般的なクエリがユーザーに提案されます。詳細については、[人気のある検索クエリの提案](#)を参照してください。

2021 年 5 月 27 日

AWS マネージドポリシーの更新 - 新しいポリシー

Amazon Kendra に新しい AWS マネージドポリシーが追加されました。詳細については、「[AWS Managed policies for Amazon Kendra](#)」を参照してください。

2021 年 5 月 27 日

リージョンの拡張

Amazon Kendra がアジアパシフィック (シンガポール) (ap-southeast-1) で利用可能になりました。

2021 年 5 月 5 日

新機能

Amazon Kendra は、インデックスレベルで設定された調整設定を上書きすることで、クエリ内の検索関連性の調整をサポートするようになりました。詳細については、[検索の関連性のチューニング](#)および[レスポンスのチューニング](#)を参照してください。

2021 年 4 月 20 日

新機能

Amazon Kendra で OAuth 2.0 認証がサポートされ、ServiceNow クエリを使用してインデックス作成用のドキュメントを選択できるようになりました。詳細については、「[ServiceNow](#)」を参照してください。

2021 年 4 月 1 日

新機能

Amazon Kendra で、よくある質問ドキュメントの増分学習がサポートされるようになりました。詳細については、[増分学習のフィードバックの送信](#)を参照してください。

2021 年 2 月 17 日

新機能

Amazon Kendra でインデックスシノニムがサポートされるようになりました。詳細については、[インデックスへのシノニムの追加](#)を参照してください。

2020 年 12 月 10 日

新機能

Amazon Kendra で Google Workspace Drive 用のデータベースコネクタが提供されるようになりました。詳細については、[Google Workspace Drive のデータソースを使用する](#)を参照してください。

2020 年 12 月 8 日

新機能

Amazon Kendra は、クエリフィードバックの提供を容易にする JavaScript ライブラリを提供するようになりました。Amazon Kendra。詳細については、[フィードバックの送信](#)を参照してください。

2020 年 12 月 8 日

新機能

Amazon Kendra は、トークンベースのユーザーアクセスコントロールをサポートするようになりました。詳細については、[インデックス内のドキュメントへのアクセス制御](#)を参照してください。

2020 年 11 月 5 日

新機能

Amazon Kendra Confluence データソースコネクタが Confluence クラウドで動作するようになりました。詳細については、[Confluence データソースの使用](#)を参照してください。

2020 年 11 月 5 日

リージョンの拡張

Amazon Kendra がアジアパシフィック (シドニー) (ap-south-east-2) で利用可能になりました。

2020 年 11 月 2 日

新機能

Amazon Kendra が Confluence サーバー用のデータソースコネクタを提供するようになりました。詳細については、[Confluence データソースの使用](#)を参照してください。

2020 年 10 月 26 日

新機能

Amazon Kendra は、カスタムコネクタの統計を生成するために使用できるデータソースを提供するようになりました。詳細については、[データソースの使用](#)を参照してください。

2020 年 10 月 21 日

新機能

Amazon Kendra は、よくある質問のカスタム属性をサポートするようになりました。詳細については、[質問と回答を追加する](#)を参照してください。

2020 年 9 月 17 日

新機能

Amazon Kendra は、クエリ結果の信頼スコアを返すようになりました。詳細については、[QueryResultItem](#) を参照してください。

2020 年 9 月 15 日

新機能

AWS CloudFormation がサポートするようになりました Amazon Kendra。詳細については、「[Amazon Kendra リソースタイプのリファレンス - AWS CloudFormation](#)」を参照してください。

2020 年 9 月 10 日

新機能

Amazon Kendra で のサポートが追加されました AWS PrivateLink。詳細については、「[Amazon Kendra とインターフェイス VPC エンドポイント \(AWS PrivateLink\)](#)」を参照してください。

2020 年 7 月 7 日

[新しいガイド](#)

これは Amazon Kendra デベ
ロッパーガイドの初回リリー
スです。

2020 年 5 月 11 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。